設

R180. 3-067ウ
1200500766310

サイキ5-13
583
永久保存

592 13
内務省
10.7.24
(版出通普)

威以香水於如來前
而作是言我今以此
國奉上如來及比丘
僧唯願哀愍為我納
受作此言已即便捨
水尒時世尊默然受
之就偈呪願
若人能布施　斷除於慳貪
若人能忍辱　永離於瞋恚
若人能遠惡　則遠於愚癡
能見此三德　逕劫不墮地獄
若有貧窮人　无財可布施
見他備施時　而生隨喜心
隨喜之福報　與施等无異
尒時婆羅門大臣及
餘人民見王奉施如
來僧伽藍皆悉踊躍
生隨喜心尒時頻比
婆羅王施僧伽藍已
心大歡喜頭面礼足

5-13

佛書解説大辭典

大東出版社藏版

昭和図書 大丸 納本

事印
198

本書編纂要解

一、本書は佛教に關する刊行物を東西兩洋に亘り、その大は一切經に收むる數千の經論より、その小は市井に埋もるゝ一論一文の小册子に至るまで、これを擧ぐるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる寫本の類に至るまで一切の典籍を收め盡し、これに現代最新の配列法（書名の首字を所謂五十音順音引假名遣に配列）により一々に內容解說を施し、且つその所在を明示したものである。

一、本書は邦語漢語佛教典籍（昭和七年十月卅一日刊行の分迄）の全部六萬五千五百餘を收む。卽ち各種藏經より約八千、佛教全書、佛教大系等一般佛教叢書並に各宗關係の全書全集類約七千、各大學圖書館（京大、龍大、谷大、京專、高野山、正大、駒大、立正、東洋等）並に宮內省圖書寮、內閣文庫、帝國圖書館其他一般圖書館所藏のもの約十萬、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄、八家請來目錄、眞宗敎典志、扶桑禪林書目、其他諸目錄より約二萬の古逸註疏書目、出三藏記、歷代三寶紀等より僞經、抄經、闕本、失譯經の書目約一萬五千を涉獵し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して六萬五千五百餘部の佛教典籍を採錄した。

一、本書は以上六萬五千五百餘部の典籍を便宜上五類に分類した。卽ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、單行本の古寫本、古刊本」「第四類、現在の單行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、其內容解說にあたつては、六萬有餘全部に亘り詳細なる解說をなすことは到底紙數上よりも許されぬ事であり、且つ其の必要を認めぬ點もあるので、大體詳細解說するものとせざるものとに分ち、前記五類中の第一、二類卽ち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認むるものに限り出來る丈內容そのものについて詳細な

る解説を施した。

一、本書の内容解説の形體はその要點を次の十項目とした。即ち、❶題名、書名、具名略名異名併記。❷卷數。❸存、缺。❹著者又は譯者、生存年代を併記。❺著作年代又は譯出年代。❻内容解説。❼末書（注釋書參考書）。❽寫刊の年月。❾現所藏者、圖書館書庫名。❿發行所名。の十項目である。この十項中前記第一、二類は❽❾❿を省略し、第三類は特に❾の圖書館の函號を詳記し、披覽者に備へ、第四類は❿の發行所名を記して入手に便益あらしめ、第五類は❼の注釋書參考書に力を入れて研究に有利ならしめた。この方針に依れるを以て藏經の經律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解説が❻に於いて執筆され、且つその解説に責任をもつべく夫々執筆者の署名を附記した。

一、本書の解説に於ける十項目の内容について一定の方針を示せば左の通りである。

❶、題名にはすべて具名、略名、異名をつけた。且つ日本音、支那音の讀方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。日・支・梵・藏・巴とあるがそれである。而して日本音の讀方はすべて羅馬字法を採用し、一字一字の間に接尾符（—）を附し、全體としては音便慣讀法を用ひ、促音其他の用法は便宜上大藏經南條目錄補正索引（昭和五年刊）に從つた。支那音はすべて現在の北京官話の正しい發音に依り、支那音を羅馬字に移す場合學者によつて相異る點ありと雖も、本書は最も普通に廣く行はれてゐるトーマス・ウヰード氏の式に從つた。大正一切經刊行會版の昭和法寶總目錄では佛蘭西語法を用ひたが、本書は右により英語法に依つて羅馬字化した。梵藏兩語名の記入は主として西藏廿殊爾拗同目錄（大谷大學圖書館昭和六年刊）により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照錄（赤沼目錄—昭和四年刊）に從ふことにした。

❷、卷數は其典籍の卷數を記したが、丁卷の不同なる場合あるものは一々これを附記した。

❸、存缺に就ては、存は現在行はれてゐる藏經の種類別所收卷數、全書類は其所載卷數を記した。而して各種藏經及び目錄

には左の如く略符號を使用した。茲に出てくる數字番號は本書の「佛教典籍總論」並に「昭和法寶總目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正——大正新修大藏經。縮——縮刷大藏經。卍——卍字藏經。卍續——續藏經。北——北宋版。南——南宋版。元——元版。明北——明北藏。清——清藏。麗——高麗版。天——天海版。指——指要錄。法——法寶標目。至——至元法寶勘同總錄。明南——明南藏。Nj.——南條目錄。出三藏記——出三藏記集。三寶紀——歷代三寶紀。法經錄——衆經目錄（法經等撰）。仁壽錄——衆經目錄（彥悰撰）。靜泰錄——衆經目錄（靜泰撰）。內典錄——大唐內典錄。譯經圖紀——古今譯經圖紀。武周錄——大周刊定衆經目錄。開元錄——開元釋敎錄。貞元錄——貞元新定釋敎目錄。佛全——大日本佛敎全書。眞全——眞宗全書。眞大——眞宗大系。日藏——日本大藏經。

❶、著者又は譯者は其人の生存年代を出來る丈精査して各種の史傳、目錄、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる參考資料を渉獵して正確を期した。但し傳記は人名辭書に讓るべき性質のものであるから特にこれを省略した。年代はすべて西暦を用ひ、年號は其の人物の生死國により、其國の年號をとり、一國に生れ他國に死したものは何れかの一國の年號を用ひた。年代中—線を用ひ、「年代—年代」なるは生死年を、「年代—」は生年、「—年代」は寂年のみ明らかなるもの、又兩者不明にて生存中の或る時期明白なるものは「—年代—」として記入した。年時帝世等すべて明らかならざるも、略々其時代を推定し得らるゝものは其推定年代に「?」の符號を用ひた。僧傳並に資料中生年を明記せざるも寂年享壽の判明してゐるものはその逆算により概ねこれを記入した。生死年代に諸説あるものは其中の一を採用若しくは一説として別出したものがある。

❺、著作年代は著作若しくは譯出の年號を記入した。

❻、内容解説は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釋・傳通の範圍に於て詳記した。原典飜譯に關する歷史的説明譯出者の傳記等はこれを省略した。略名、異名を有するものは大藏經、全書類に標題とされ

た題名の箇所に於て說明した。例へばクの部「倶舍論」ではその題下に具名「阿毗達磨倶舍論」と記し、詳細なる解說はアの部「阿毗達磨倶舍論」に於てなしたるが如し。

❼、注釋書參考書は典據を出來る丈詳細に調査して列記し、大體製作の年代順に從つて列擧した。

❽、寫刊の年月、寫とあるは寫本、刊とあるは刊本のことにして、その出來の年代である。

❾、現所藏者、圖書館書庫名は個人所藏のものは何某藏とし、圖書館所藏のものは其館名並に其館に於ける書目の函號を記入した。館名の略符は左の通りである。

谷大——京都大谷大學圖書館。龍大——京都龍谷大學圖書館。京大——京都帝國大學圖書館。正大——東京大正大學圖書館。駒大——東京駒澤大學圖書館。立大——東京立正大學圖書館。高大——紀州高野山大學圖書館。京專——京都(東寺)專門學校圖書館。哲——哲學堂圖書館。帝國——東京上野圖書館。內閣——內閣文庫。帝室——宮內省圖書寮。寶龜院——高野山寶龜院所藏。金剛三昧院——高野山金剛三昧院所藏。寶壽院——高野山寶壽院所藏。寶菩提院——京都寶菩提院所藏。

而して略符の下の數字等は何れも其所藏圖書館に於ける書架番號である。而して藏經、全書、叢書類は一般に現行されてゐるから所藏者(書庫)、發行所名は概ねこれを記入しないことにした。

ホ

法位形聲佛祖正傳集 ❶(日)Hō-i-kei-shō-butsu-so-shō-den-shū. ❷一卷 ❸存 ❹妙瑞(元祿九—明和元A. D. 1696—1764)集 ❾寫延元刊(高大、寄・一・四八)(京大、日大未・四四八)寫欵元刊(龍大、二六六・二・五〇)寫本(正大、一四九・三・八)

法位六大聲邪法 ❶(日)Hō-i-roku-dai-jaku-hō. ❷一貫 ❸存 ❾寫本(高大、寄・一・六四)

法爲人經 ❶(日)Hō-i-nin-kyō. (支)Fa-wei-jen-ching. ❷十卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第四、第一流、眞兄錄第六、智仁五

法象左券 ❶(日)Hō-zō-sa-ken. ❷一卷 ❸存 ❹僧圓(享保八—天明三A. D. 1718—1783) ❻眞宗全書第七四に眞宗法彙目錄及左券として收められる、同項の下を見よ。

法印經 ❶(日)Hō-in-kyō. (支)Fa-yin-ching. 持世經 ❷一卷 ❸存、大正一四・六四二No. 483、館宇一〇、卍九・九、北148方、南142方、元144方、明北142常、清162常、麗147萬、天147方、指135萬、法145萬、至235萬、明南143四、N. 165 ❹鳩摩羅什(建元二—義熙九A. D. 344—413)譯 ❺姚秦弘始四—一四(A. D. 402—412) ❻持世經の下を見よ。

法印經 ❶(日)Hō-in-kyō. (支)Fa-yin-ching. ❷一卷 ❸存、大正二・五〇〇No. 101、館辰六、卍一五・七、北1294菴、南1300昧、元1290昧、明北927服、清92?服、麗1433盈、天1290昧、指459羊、法457羊、至511賀、明南953清、N. 932 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A. D. 980—) ❻本經は竺法護譯の犍法印經とともに雜阿含卷三・三一經の別譯であつて、佛、諸比丘に犍法印と、淸淨の知見とを說かれたもの、これらの三經はその內容の上に大體合致するものである。 (林五邦)

法因集 ❶(日)Hō-in-shū. (支)Fa-yin-chi. ❷四卷 ❸存 ❹明王樞登撰 ❾刊本(京大、藏・二二ノ・五、藏・二四ホ・一二)明版(內閣)

法雨餘滴 ❶(日)Hō-u-yo-teki. ❸存 ❹于河岸貫一著 ❺明治二九刊 ❾(帝國、七三・一一七)

法雲庵了願家集 ❶(日)Hō-un-an-ryō-gwan-ka-shū. ❷一卷 ❸存 ❹藤井節寬編 ❺昭和七刊 ❾慧鶴淨圓寺

法雲慧極禪師年譜 ❶(日)Hō-un-e-gyoku-zen-ji-nem-pu. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

法雲慧極大和尚末後日錄 ❶(日)Hō-un-e-gyoku-dai-o-shō-matsu-go-ji-nichi-roku. 法雲慧極大和尚末後事實 ❷一卷 ❸存 ❹實光等編 ❼(參考) 禪籍目錄

法雲極老和尚錄 ❶(日)Hō-un-rō-ō-shō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹慧極 ❼(參考) 禪籍目錄

法雲寺所傳八首和讃 ❶(日)Hō-un-ji-shu-den-hach-shu-wa-san. ❷一部 ❸存、異義集第七

❹了祥の異義集によると、鳥に「此讃中根吉長衛より越後當敬寺授與の書類を說る中にあり」とあり、何人の何時頃の作かは全く不明であるが、內容は親鸞聖人の和讃を模して作りたるものにして、一首三十二句の八首で、左に示せば次の如くである。

「至心信樂欲生をは、下至一念とおしへたり」、「乃至十念のみことをは、上盡一形とのへたまふ」、「下至一念をうることは、信の一念とまうすなり」、「上盡一形の念佛をは、行の一念と釋しける」。「本願成首の一念と、彌勒附屬の一念は信行具足のみことにて、威德廣大の証をう」、「信樂開發の時節には、延促三世にわたるゆへ、本願成就のみことには、乃至一念とかれたり」、「本願相應のつもをこそ、爾念命終としめしけり、果得涅槃のひとなれば、後念卽生とさためたり」、「信樂をうれはすみやかに、後轉の身命をはりつゝ、果得涅槃のさとりにて、無碍光佛と一味なり」、「信心すなはち如來なり、この信開發するひとは、三業彌陀にはなれねば、これを來迎と了知せり、本より彌陀の來迎は、法界衆生のつねなれば、疑惑の雲におほはれて、法身のひかりあらはれず」

と云ふが其れである。

❹刊本(谷大、宗甲・二七) (光謙住)

法雲禪師假名法語 ❶(日)Hō-un-zen-ji-ka-na-hō-go. ❷一卷 ❸存 ❹慧極 ❼(參考) 禪籍目錄

法雲禪師語錄 ❶(日)Hō-un-zen-ji-go-roku. 廣善法雲禪師語錄 ❷二卷 ❸存 ❹慧極語、實廣等編 ❼(參考) 禪籍目錄

法雲禪師壽山外集 ❶(日)Hō-un-zen-ji-ju-san-gai-shū. ❷一冊 ❸存 ❹慧極語、實光編 ❺延寶七刊 ❾(駒大)

法雲禪師壽山續外集 ❶(日)Hō-un-zen-ji-ju-san-zoku-gai-shū. ❷一卷 ❸存 ❹慧極語 ❼(參考) 禪籍目錄

法雲禪師續錄 ❶(日)Hō-un-zen-ji-zoku-roku. ❷二卷 ❸存 ❹慧極語、實興編 ❼(參考) 禪籍目錄

法蘊足論 ❶(日)Hō-un-soku-ron. (支)Fa-yün-tsu-lun. 阿毘達磨法蘊足論 ❷十二卷 ❸存、大正二六・四五三No. 1537、館秋四、卍二五・八、北919牟、南963牟、元939牟、明北1289陸、清1289陸、麗931兄、天931牟、指905兄、法937兄、至1395箋、明南140皆、N. 1296 ❹玄奘(仁壽二—麟德元A. D. 602—664)譯 ❺唐顯慶四(A. D. 659) ❻阿毘達磨法蘊足論の下を見よ。

法衣格正 ❶(日)Hō-e-kaku-shō. ❷一卷 ❸存 ❹默室編 ❾寫本(帝國、一三九・一六〇)

法衣史 ❶(日)Hō-e-shi. ❷一卷 ❸存 ❹花岡映澄著 ❺昭和二刊 ❾(龍大)(高大、一・二六)

法衣辨 ❶(日)Hō-e-ben. ❷一卷

❸存 ❹(谷大)

法會奥院年中雜記 ❶(B) Hō-e-oku-no-in-nen-chū-zaki. ❷二帖 ❸存 ❺天明五寫 ❻(高大、寄・一・五五)

法會式衆列名 ❶(B) Hō-e-shiki-jō-retsu-myō. ❷一軸 ❸存 ❺足利時代寫 ❻(寶善提院)

法會年略考 ❶(B) Hō-e-nen-ryaku-kō. ❷一冊 ❸存 ❹寫本(龍大、研史)

法悅の一境 ❶(B) Hō-etsu-no-ikkyō. ❷一卷 ❸存 ❹大谷光演著 ❺大正九刊 ❻(龍大、一〇五四・二二)(谷大、宗律・四四九)

法悅の聲 ❶(B) Hō-etsu-no-koe. ❷一卷 ❸存 ❹青木庄五郎著 ❺昭和七刊 ❻東京一樹會

法悅錄 ❶(B) Hō-etsu-roku. ❷一卷 ❸存 ❹北村敦繁著 ❺昭和三刊 ❻東京山喜房

法延傳 ❶(B) Hō-en-den. 大年大和尚傳、大年和尚法延傳 ❸存、撿群書類從第九傳部二 ❹大年大和尚傳の下を見よ。

法演禪師語錄 ❶(日) Hō-en-zen-ji-go-roku. (支) Fa-yan-ch'an-shih-yü-lu. 五祖法演禪師語錄、五祖錄 ❷三卷 ❸存、大正四七・六四九No. 1993、續藏四一六、卍續二・二三・二一四、古尊宿語錄第二〇一二三、❹宋法演(一一二七寧三 A. D. 1104)語、方良等編 ❻五祖法演禪師語錄の下を見よ。

法緣寺院世代略記 ❶(B) Hō-en-ji-in-se-dai-ryaku-ki. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集卷首 ❹長谷寶秀編 ❺大正一五(A. D. 1926) ❻尊者法緣寺院の主なる、高貴寺、長榮寺、法樂寺、萬壽寺、桂林寺、阿彌陀寺、清澄寺、安樂寺、長福寺、水藥師寺、密藏院、長寶寺、義光菴の十三ケ寺につき略世代を列示してゐる。 (高見寬恭)

法王敎活論 ❶(B) Hō-ō-kyō-katsu-ron. ❷一卷 ❸存 ❹高田道見(一大正一二 A. D. 1923) ❺大正五刊 ❻東京佛敎館

法王經 ❶(B) Hō-ō-kyō. (支) Fa-wang-ching. ❷一卷 ❸存、大正八五・一三八四No. 2353 ❻燉煌新出經の一。首缺の殘卷である。この經名は大周錄の僞經目錄中に始めて現はれ、開元錄卷十八にも載錄せらる。開元錄によれば、具題を證刀梯所脫道甘露藥流淦泉如來智心遺服者除煩惱法王經といひ、一名を涅槃般若波羅蜜經と名くといふ。現存本首缺の爲、確實ではないが、具題は內容より判じて有り得べく、一名は經末に佛の命名する所である。法王經の名は經文によれば諸法中最爲第一、諸乘中最爲大乘王の故に法王といひ、又此經を法王菩薩に付囑する故に名くとある。

(內容) 佛、虛空藏菩薩に對して眞實大乘決定了義を說き、大乘中乘小乘聞提の四人を一乘道に入らしむる旨を一切衆生皆一心一佛一性の理を以て說く、多欲聞提の疑答へ、無行菩薩に後世此經を說かん者は體・義を說いて相・文を說くなと敎へ、法王菩薩の乞に應じて敎示して此經を付囑し、今我れ涅槃に入るべしと語げて經終る。鳴沙餘韻解說參照。

❼(參考) 出三藏記第五、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八 ❾燉煌出土原本(大英博物館 no. 2592) (櫛部文鏡)

法王灌頂決 ❶(B) Hō-ō-kwan-jō-ketsu. ❷一軸 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶龜院)

法王帝說 ❶(B) Hō-ō-teisetsu. 上宮聖德法王帝說、聖德法王帝說、帝說 ❸存、大日本佛敎全書第一一二、群書類從第五 ❻上宮聖德法王帝說の下を見よ。

法王帝說 ❶(B) Hō-ō-teisetsu. 校訂法王帝說 ❷一卷 ❸存 ❹春日政治校 ❺大正一二刊 ❾(京大、一・二二 a・一七)

法王帝說證註 ❶(B) Hō-ō-teisetsu-shō-chū. 上宮聖德法王帝說證註 ❷一卷 ❸存 ❹碧谷望之(安永四—天保六 A. D. 1775—1835)述 ❺明治四三刊 ❾(正大、一〇三七・五八)

法王梅嶺禪師語錄 ❶(B) Hō-ō-bai-rei-zen-ji-go-roku. 梅嶺禪師語錄 ❷三卷 ❸存 ❹梅嶺道雪語、元脫等編 ❼(參考) 禪籍目錄

法皇御作次第 ❶(B) Hō-ō-gyō-saku-shi-dai. 法皇御作次第忍辱山方 ❷一帖 ❸存 ❺足利初期寫 ❾(寶善提院)

法皇外記籠門鴻實 ❶(B) Hō-ō-gyō-ki-shi-mon-kō-bō. ❸存、續々群書類從第二史傳部 ❹釋元宋 ❻著者元宋は京都衣笠地藏院の僧で、本朝歷代法皇外紀の著者である。本書は卽ちこの書について御歷代佛法御尊信の事情を明かにする爲め、御歷代のその方面に關する御詔勅、御遺文を集錄したもので、上は百濟聖明王の佛像上表文、孝德天皇文化元年の詔より、下は德川時代明正上皇の顯倖に佛性本源國師と諡し給ふた際の御諡文に迄及ぶ所である。著作年時は前書法皇外紀が寬文年間であるから、其の直ぐ後か少くともこれを去る事遠何もない時であつたであらうと思はるゝ。 (藤島達朗)

法皇御灌頂記 ❶(B) Hō-ō-go-kwan-jō-ki. ❷一軸 ❸存 ❾眞和四寫(寶善提院)德治三寫(金剛三昧院)

法皇四卷次第 ❶(B) Hō-ō-shi-kwan-shi-dai. ❷四帖 ❸存 ❺元祿一五寫 ❾(寶善提院)

法皇兩界口傳 ❶(B) Hō-ō-ryō-kai-kū-den. ❷一帖 ❸存 ❹覺鑁(寶保二—康治二 A. D. 1099—1143)撰 ❺建保五寫 ❾(高山寺)

法音抄 ❶(B) Hō-on-shō. ❷十卷 ❸存 ❹憲寂述 ❺正德四刊 ❾(帝國、一〇六・二五九)

法苑英華 ❶(B) Hō-on-ei-ga. (支) Fa-yüan-ying-hua. ❸存 ❹清趙氷 ❼(參考) 禪籍目錄

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. (支) Fa-yüan-chi. ❷四卷 ❸缺 ❹清素述 ❻清範の五心義略記(大正七一・二七二No. 2318)或は眞興の唯識義私記(大正七一・二九八No. 2319)に「清素云」或は「素云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. (支) Fa-yüan-chi. 法苑林章記 ❷七卷 ❸缺 ❹平傳述 ❻清範の五心義略記(大正七一・二七二No. 2318)に「平傳記云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. 法苑林章記 ❷二卷或三卷 ❸缺 ❹護命(天平勝寶二—承和元 A. D. 750—834)述 ❻眞興の唯識義私記(大正七一・二九八No. 2319)に「護命云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. (支) Fa-yüan-chi. 法苑林章記 ❷七卷 ❸缺 ❹平傳述 ❻清範の五心義略記(大正七一・二七二No. 2318)に「平傳記云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. (支) Fa-yüan-chi. 法苑林章記 ❷八卷 ❸缺 ❹義演(一作寂記 ❻眞興の唯識義私記(大正七一・二九八No. 2319)に「義演云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下 諸宗章疏錄第二

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. (支) Fa-yüan-chi. ❷四卷 ❸缺 ❹新羅璟興(一開耀元 A. D. 681—)述 ❻清範の五心義略記(大正七一・二七二No. 2318)に「興記云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. 法苑林章記 ❷二卷或三卷 ❸缺 ❹護命(天平勝寶二—承和元 A. D. 750—834)述 ❻眞興の唯識義私記(大正七一・二九八No. 2319)に「護命云」として援引するものあり、可考。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法苑記 ❶(B) Hō-on-ki. ❷六卷 ❸缺 ❹常騰(天平一三—弘仁七 A. D. 741—816)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法苑義鏡 ❶(B) Hō-on-gi-kyō. (支) Fa-yüan-i-ching. 大乘法苑義林章義鏡、義林章義鏡、大乘法苑林章義鏡 ❷五卷 ❸存、大正七一・一六五No. 2317、日本大藏經第三二三論宗章疏餘、大日本佛敎全書第八一 ❹善珠(神龜元—延曆一六 A. D. 724—797)述 ❻本書は唯識宗の祖慈恩大師の大乘法苑義林章七卷を註釋せるものにして、義林章は特に大師立敎開宗の基礎聖典たるの所以を以て、古來唯識家には盛に用ひらるゝと同時に、諸種の註疏を試られ、西大寺常騰の法苑記六卷、元興寺護命の法苑所節記二十卷、元興寺平傳の法苑記七卷、藥師寺最行の法苑集解十卷等の存せしも散佚して傳らず、唯一部分の註疏の存するものに清水寺清範の五心義私記二卷、子島寺眞興の唯識義私記十二卷、松室院忠算の法相宗賢聖義略問答等あり、今此秋篠寺善珠僧正の法苑義鏡六卷も亦、義林章の一部の註疏にして、もと七卷二十九章の註疏の存せしも後に散佚せるものゝ如し。現存せるは義林章の第二章五心章、第四章諸乘章、第八章二諦章、第七章斷障章、第九章大種造色章、第十一章表無表章の六章の註疏のみにして、古書に一本總紙簡章義鏡を引用せるよりすれば又第一章の義鏡の存せしを知る。

又本書の卷數は古來五卷にして、東域傳燈錄及び注進法相宗章疏には題目と著者の名を云ひて卷數を記せず。諸宗章疏錄には法苑義鏡善珠述、按未知卷數、今傳世者五心斷障二諦大種造色表無表五章之記五卷而已とあり。これより見るに五卷なりしこと明にして、現行本よりすれば諸乘章義鏡を缺けたるものなり。其後又其諸乘章義鏡を加へられ、表無表章義鏡は戒體の問題を扱ふものとして別立して律書として之を離し、五卷として行はれしも、近年に至り合して一部六卷として行はるゝに至る。

內容は第一卷の五心義林に於ては、第一列名に於て五心を詳說して、前五識と第六識を分別し、第二五心の相を辨じ、第三は八識と五心の相攝を明し、第四に剎那に五心の多少を說き、第五に五心の胞生不胞生と三性に配立し、第六に五心を諸心に對辨し、第七に五心の初後を明し、第八に五心諸位の具闕を云ひ、第九に五心の三性相攝を明し、第十に五心の緣生を說き、第十一に五心の三量を說き、第十二に問答分別を以て決擇す。第二卷諸乘義林に於ては五門を以て分別し、第一に一乘二乘三乘四乘五乘の所異を明し、第二にこの乘の體の相異を辨じ、第三に乘の名を釋し、第四に諸乘の廢立を辨じて、六乘の義典據なしと雖も理に於て違ふことなしと論じて、五姓六乘の敎學を推して、以て至道とし、第五に問答分別して、一乘は三乘の中の大乘にして三に離れずと決擇して、唯識三乘の實敎たることを說く。第三卷二諦義林に於ては、第一に世俗諦勝義諦の二諦の名を釋し、次に勝鬘經の一諦、仁王經二諦、涅槃經の二種の二諦、顯揚論・中邊論の三種の二諦、瑜伽論・唯識論の四種の二諦を明し、次に別して四種二諦を詳說し出體を明し、第二に三乘の違淨と四種二諦の相攝を辨じ、第三に問答分別して諸敎の相攝を明す。第四卷斷障義林に於ては、第一に所知障・煩惱障の二障及び斷道の不續除害不生の三義に就きて釋し、第二に體を出して所斷障能斷智能斷性を明し、第三に識に依りて斷道を分別し能斷所斷を辨じ、第四に斷道を分別し、第五に斷障道たる觀智の差別を明し、第六に行に依り斷道を分別することを說き、第七に九品八十一品に依る斷道を辨じ、第八に障に依りて分別し、第九に依身依地に依りて分別し、第十に問答分別して決擇す。第五卷の大種造色義林に於ては、四大種の體を辨じ、順世外道・伏世史論・僧佉師・耨論師・大衆部・成實論・薩婆多師・經部・說假部・一說部・說出世部・大乘等の四大種造色を明し、第二に四大種の名を辨じ、第三に四大種の性たる生依立持變の五因を明し、第四に因緣に依りて辨造さるゝ因造緣造の義を明し、第五に同異大造相望辨造の義を釋し、第六に問答分別して上下界の色の同異、及び多大種一を造り一大種多を造る等の義を決擇す。第六卷の表無表章義林に於ては、第一に名を出し三乘に通ずる表無表の義を釋し、次に大乘の表無表の義を釋し、第二に體を出して性を辨じ、第三に表無表の假

實を明し、第四に具支の多少を說き、第五に得捨の分齊を詳說し、第六に地に依る有無を辨じ、第七に四大所造の義を明し、第八別解脫律儀・道共戒・定共戒・無表と不律儀を說き、第九に先得後捨の義を明し、第十に問答分別して唯識敎學の斷障の義を明せるものにして、此一章は轉識得智の義を詳說せるものなり。已上の如く慈恩敎學の我國に傳來し次第に研究さるゝに至り、奈良朝より平安朝初期に於て盛に研究を見るに至る、就中法苑義鏡は最も重要なるものである。

❺寛政九刊 ❹(谷大、餘大・二六八×龍大、二六二四・三六)(正大、一一八二・一四一—一四二)×高大、寄・一・一三) (橋本凝胤)

法苑義林 ❶(日)Hō-on-gi-rin.(支)Fa-yuan-i-lin. 大乘法苑義林章、大乘法苑義林、大乘法苑林章、義林章、法苑義林章 ❷六卷或七卷或十卷 ❸存、大正四五No.1861,卍續二・二・五 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元A.D.632—682)述 ❺大乘法苑義林章の下を見よ。 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第三 ❾寫本(正大、一一九二・三六四)

法苑義林殺三磨娑釋未詳訣 ❶(日)Hō-on-gi-rin-satsu-sam-ma-sha-shaku-mi-shō-ketsu. 殺三磨娑釋未詳訣 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第三〇六雜合釋章疏 ❹基辨(享保三—寛政三A.D.1718—1791)訣 ❺殺三磨娑釋未詳訣の下を見よ。 ❾安永八刊(谷大、餘大・八〇九×龍大、二六二四・四二×正大、一一九二・三五六)

法苑義林殺三磨娑釋未詳訣辯誤 ❶(日)Hō-on-gi-rin-satsu-sam-ma-sha-shaku-mi-shō-ketsu-ben-go. 殺三磨娑釋未詳訣辯誤 ❸存、日本大藏經第三〇六雜合釋章疏 ❹快道(寶曆元—文化七A.D.1751—1810)述 ❺殺三磨娑釋未詳訣辯誤の下を見よ。

法苑義林釋名章 ❶(日)Hō-on-gi-rin-shaku-myō-shō. (支)Fa-yuan-i-lin-shih-ming-chang. ❷二卷或一卷 ❸缺 ❹新羅太賢(—景德王一二A.D.753—)述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第三

法苑義林集玄鈔 ❶(日)Hō-on-gi-rin-ju-gen-shō. (支) Fa-yuan-i-lin-chi-hsuan-ch'ao. ❷三卷 ❸缺 ❹恰眞述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第三

法苑義林章 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō. (支)Fa-yuan-i-lin-chang. 大乘法苑義林章、大乘法苑義林、義林章、大乘法苑林章、法苑義林 ❷七卷或十卷 ❸存、大正四五・二四No.1861,卍續二・二・五 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元A.D.632—682)述 ❺大乘法苑義林章の下を見よ。 ❺安永九刊 ❾(高大、寄・一・一三)

法苑義林章科圖 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-kwa-zu. ❷二卷 ❸存 ❺明治三刊 ❾(高大、寄・一・一三)

法苑義林章決擇記 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-ketsu-chaku-ki. (支)Fa-yuan-i-lin-chang-chüe-tse-chai-chi. 大乘法苑義林章決擇記、大乘法苑義林章決擇抄、大乘義林章決擇記、法苑義林章決擇記、大乘法苑義林章決擇記、義林章決擇記、法苑章記 ❷四卷或二卷 ❸存、卍續二・三・一 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一A.D.678—733)述、三輪泰然校訂 ❺大乘法苑義林章決擇記の下を見よ。 ❾明治一八刊(高大、一・一三)(高大、寄・一・一三)×京專)(谷大、餘大・四八二八—四八二九)×帝國、一五・三・五七)(內閣(明治二七刊(帝國、一五・三・一三)

法苑義林章玄譚 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-gen-dan. ❷一卷 ❸存 ❹佐伯旭雅(文政一一—明治二四A.D.1825—1891)述 ❺明治二一刊 ❾(正大、一一九二・一五一)(高大、寄・一・一三)(京專)(帝國、一〇・一四四)

法苑義林章纂註 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-san-chū. 大乘法苑義林章纂註 ❷七卷 ❸存 ❹普寂(寶永四—天明元A.D.1707—1781)述 ❾寫本(正大、一一九二・一四六—一四八)(晉、く・六・左・一五)(高大、寄・一・一五)(谷大、餘大・四八三三)(龍大、二六二四・二一)

法苑義林章師子吼章 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-shi-shi-ku-shō. 大乘法苑義林章師子吼章、師子吼章、大乘法苑義林章師子頌伸鈔 ❷二十二卷 ❸存、大正七一・四七三No.2323 ❹基辨(享保三—寛政三A.D.1718—1791)述 ❺天明七(A.D.1787) ❻大乘法苑義林章師子吼章の下を見よ。

法苑義林章集解 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-shū-ge. 大乘法苑義林章表無表章集解、法苑義林章集解、表無表章末取決文、大乘法苑義林章集解 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第三四戒律宗章疏第一 ❹最行述 ❺寛治元(A.D.1087) ❻大乘法苑義林章表無表章集解の下を見よ。

法苑義林章補闕 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-fu-ketsu. (支)Fa-yuan-i-lin-chang-pu-ch'ueh. 大乘法苑義林章補闕、大乘義林章補闕、補闕義林章、大乘法苑林章補闕、補闕章、大乘法苑義林章補闕、大乘義林章補闕、補闕章 ❸卷四、七、八現存、卍續二・三・一 ❹唐惠沼(—開元二A.D.714)述 ❺大乘法苑義林章補闕の下を見よ。 ❾寫本(高大、寄・一・一三)

法苑義林章分科 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-bun-kwa. 大乘法苑義林章分科 ❷二卷 ❸存 ❹法賢作 ❾寫本(谷大、餘大・四一一〇)

法苑義林章分科 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-bun-kwa. 大乘法苑義林章分科 ❷一卷 ❸存 ❹佐伯旭雅(文政一一—明治二四A.D.1825—1891)作 ❺明治二一寫 ❾(高大、寄・一・一三)

法苑義林章遊觀記 ❶(日)Hō-on-gi-rin-jō-yū-kwan-ki. 大乘法苑義林章遊觀記 ❷四卷 ❸存 ❹明月樓(—安永元

A.D.1772—)述 ❺安永二寫 ❾(谷大、餘大・四一三五)

法苑義林隨墮八時義 ❶(日)Hō-on-gi-rin-zui-da-hachi-ji-gi. 大乘法苑義林章隨墮八時義 ❷一卷 ❸存 ❹基辨(享保三—寛政三A.D.1718—1791)述 ❺安永九刊 ❾(京大、日大未・一九九)(高大、寄・一・一三)

法苑義林總料簡章 ❶(日)Hō-on-gi-rin-sō-ryō-ken-shō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一九二・一三五)

法苑經 ❶(日)Hō-on-kyō. (支)Fa-yuan-ching. ❷百八十九卷 ❸長爲經。 ❼(參考) 出三藏記第五、開元錄第一八、貞元錄第二八

法苑冠箋 ❶(日)Hō-on-kwan-sen. ❷八卷 ❸存 ❹愛存撰 ❺元祿一〇刊 ❾(西敎寺)

法苑解節記 ❶(日)Hō-on-kai-setsu-ki. 法苑林章解節記 ❷二十卷 ❸缺 ❹護命(天平勝寶二—承和元A.D.750—834)述 ❺眞興の唯識義私記(大正七一・二九八No.2319)に「護命云」として採引するものあり、可考。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法苑決擇記 ❶(日)Hō-on-ken-chaku-ki. (支)Fa-yuan-chüe-tse-chai-chi. 大乘法苑義林章決擇記、大乘法苑義林章決擇抄、大乘義林章決擇記、大乘法苑義林章記、法苑章記、義林章決擇記、法苑章記 ❷二卷或四卷 ❸存、卍續二・三・一 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一A.D.678—733)述 ❺大乘法苑義林章決擇記の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一、第二

法苑私記 ❶(日)Hō-on-shi-ki. ❷十二卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下

法苑旨趣 ❶(日)Hō-on-shi-shu. (支)Fa-yuan-chih-chü. ❷一卷 ❸缺 ❹清素述 ❺清籟の五心義略記(大正七一・二七一No.2318)或は眞興の唯識義私記(大正七一・二九八A.D.2319)に「清素云」或は「素云」として採引するものあり、可考。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一

法苑詩規 ❶(日)Hō-on-shi-ki. ❷四卷 ❸存 ❹吉峯昭嶽(寶曆三—天保一〇A.D.1753—1839) ❼(參考) 禪籍目錄

法苑珠林 ❶(日)Hō-on-ju-rin. (支)Fa-yüan-chu-lin 法苑珠林傳 ❷百卷 ❸存、大正五三・二六九No.2122,館雨五—一〇、卍二八・四—一〇、北1092杜至縑、南1102杜至縑、元1103杜至縑、明北1475高至峰、清L532費至綺、麗1432顔至何、天1092杜至縑、法1395世至修、至1570肇至秦、明南1501勤至時、Zy.1452,四部叢刊第五五—五七軼、唐人說薈第五、說郛第四二 ❹道世撰 ❺唐總章元(A.D.668)

❸本書は諸經論に於ける百般の事項を類別集成せるもの、この意味に於て本書は實に佛敎の一大類書であると稱してよい。劫量篇以下傳記篇に至る百篇を分ち、各篇に亦個目を立てゝ細別してゐる。例へば三界篇に四洲・說天の二部を開き、(一)四洲部は更に述意・會名・地量・山量・界量・方土・身量・壽量・衣量・優劣の十部を分ち、(二)諸天部は更に辯位・會名・業因・受生・界量・身量・衣量より貧富・說終に至る二十二部を分てるが如き即ちこれである。一々その典據を明にし、出所を記してあるのは頗る重寶である。本書は梁の寶唱等の編せる『經律異相』及び義に道世が撰べる『諸經要集』等に較べると、部帙も浩瀚であり引用するところも亦頗る洽博である。けれども之を以て、徒らに敎でこなすものとするは、謂ゆるも甚しきもの。撰者道世(字は玄惲)は學識廣大、道宜と共に名を律苑に馳せし釋門の領袖。講貫の餘閒、十年一日の如く孜々兀々、以て『法苑珠林』百卷の雄篇を完成した。時に大唐總章元年三月。洵に支那佛敎史料として又宗敎史料としても匆々看過し難きものあるは、固より多言を須たない。

本書に序したる關蔓侍郎李儼が「世はくは、玄司を採むる者をして卷を探りて意珠を得しめ、正道に軌る者をして之を按いて甘露を飲ましめ、之を糅ねて以て微を知り、之を觀て奧を覩、環景と齊しく照し旋穹と共に久しからしめん。」と云ふたのは決して溢美の言ではない。內容の列次は大概左の如くである。

〔卷一〕劫量篇(1)、〔卷二〕三界篇(2)、〔卷三〕三界篇(3)、〔卷四〕日月篇(3)、〔卷五〕六道篇(4)、〔卷六〕六道篇(4)、〔卷七〕六道篇(4)、〔卷八〕千佛篇(5)、〔卷九〕千佛篇(5)、〔卷一〇〕千佛篇(5)、〔卷一一〕千佛篇(5)、〔卷一二〕千佛篇(5)、〔卷一三〕敬佛篇(6)、〔卷一四〕敬佛篇(6)、〔卷一五〕敬佛篇(6)、〔卷一六〕敬佛篇(6)、〔卷一七〕敬佛篇(6)、〔卷一八〕敬法篇(7)、〔卷一九〕敬僧篇(8)、〔卷二〇〕救敬篇(9)、〔卷二一〕福田篇(10)、歸信篇(11)、士女篇(12)、〔卷二二〕入道篇(13)、〔卷二三〕懺悔篇(14)、業障篇(15)、說聽篇(16)、〔卷二四〕說聽篇(16)、〔卷二五〕見解篇(17)、〔卷二六〕宿命篇(18)、〔卷二七〕至誠篇(19)、〔卷二八〕神異篇(20)、〔卷二九〕感通篇(21)、〔卷三〇〕住持篇(22)、〔卷三一〕滯道篇(23)、妖怪篇(24)、〔卷三二〕變化篇(25)、眠夢篇(26)、〔卷三三〕興福篇(27)、〔卷三四〕操念篇(28)、發願篇(29)、〔卷三五〕法服篇(30)、然燈篇(31)、〔卷三六〕塵幡篇(32)、華香篇(33)、唱讚篇(34)、〔卷三七〕敬塔篇(35)、〔卷三八〕敬塔篇(35)、〔卷三九〕伽藍篇(36)、〔卷四〇〕舍利篇(37)、〔卷四一〕供養篇(38)、受請篇(39)、〔卷四二〕受請篇(39)、〔卷四三〕輪王篇(40)、〔卷四四〕君臣篇(41)、〔卷四五〕納諫篇(42)、審察篇(43)、〔卷四六〕思慎篇(44)、儉約篇(45)、〔卷四七〕懲過篇(46)、和順篇(47)、〔卷四八〕誡慢篇(48)、〔卷四九〕忠孝篇(49)、不孝篇(50)、〔卷五〇〕報恩篇(51)、背恩篇(52)、〔卷五一〕舊友篇(53)、惡友篇(54)、擇交篇(55)、〔卷五二〕眷屬篇(56)、校量篇(57)、〔卷五三〕機辯篇(58)、愚癡篇(59)、〔卷五四〕詐僞篇(60)、惰慢篇(61)、〔卷五五〕破邪篇(62)、〔卷五六〕富貴篇(63)、貧賤篇(64)、〔卷五七〕債負篇(65)、諍訟篇(66)、〔卷五八〕謀誘篇(67)、〔卷五九〕呪術篇(68)、〔卷六〇〕呪術篇(68)、〔卷六一〕〔卷六三〕祈雨篇(71)、闘果篇(72)、〔卷六四〕漁獵篇(73)、惡患篇(74)、〔卷六五〕放生篇(75)、救厄篇(76)、〔卷六六〕懲苦篇(77)、〔卷六七〕

想苦篇(77)・(卷六八)業因篇(78)・(卷六九)受報篇(79)・(卷七〇)受報篇(79)・(卷七一)罪福篇(80)・欲塵篇(81)・(卷七二)四生篇(83)・十使篇(83)・(卷七三)十惑篇(84)・(卷七四)十惑篇(84)・(卷七五)十惑篇(84)・(卷七六)十惑篇(84)・(卷七七)十惑篇(84)・(卷七八)十惑篇(84)・(卷七九)十惑篇(84)・(卷八〇)六度篇(85)・(卷八一)六度篇(85)・(卷八二)六度篇(85)・(卷八三)六度篇(85)・(卷八四)六度篇(85)・(卷八五)六度篇(85)・(卷八六)懺悔篇(86)・(卷八七)受戒篇(87)・(卷八八)受戒篇(87)・(卷八九)受戒篇(87)・(卷九〇)破戒篇(88)・(卷九一)受齋篇(90)・破齋篇(90)・貫關篇(91)・(卷九二)利害篇(92)・(卷九三)酒肉篇(93)・(卷九四)酒肉篇(93)・(卷九五)斷肉篇(94)・(卷九五)病苦篇(95)・(卷九六)捨身篇(96)・(卷九七)設終篇(97)・(卷九八)法滅篇(98)・(卷九九)雜要篇(99)・(卷一〇〇)博記篇(100)。

序に、『律苑僧寶傳』は本書に言及して「師(道世)昔慨二教藏遺博學者難一覩、逢寒文周等華一嘆二大義之費簡一以象立篇、題曰二法苑珠林一、總一百卷、凡十年而畢功、帝勅入二大藏一班二行天下一、學者便之」と言つてゐる。『律苑傳』の撰者惠堅が本書に對する推稱に至りては、無條件に同意を表し得ることを喜ぶ。

❼〔參考〕 內典錄第五、律苑僧寶傳、新編諸宗教藏總錄第三、東域傳燈目錄卷下、淨土依憑經論章疏目錄、叡山寺和尙請來法門道具等目錄 ❾宋版藏經本(谷六、餘丙・二五)刊本(京大、一〇・〇二ノ・一二)(帝國、一八四・四四、乙・一)寫文九刊(正大、一〇一・五四)(龍大、一〇二・三三)寫文一二刊(谷大、餘大・八二左)(正大、一〇一・六左)(內閣)(前田慧雲)

法苑珠林 ❶(日)Hō-on-ju-rin. 校訂法苑珠林 ❷二册 ❸存 ❹道世(—總章元 A. D. 668—)撰、松岡了宏校訂 ❾明治二二刊(內閣)(龍大、研佛)(正大、一〇一・五七)明治二四刊(立大、B一九・一九)(內閣)(正大、一〇一・六五)

法苑珠林捷徑 ❶(日)Hō-on-ju-rin-shō-kei. ❷四卷 ❸存 ❹惠慧(寬永一七—元祿八 A. D. 1640—1695)撰 ❾寫本(妙法院)

法苑珠林條箇 ❶(日)Hō-on-ju-rin-jō-ri-ka. ❷三卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二〇二・三五)

法苑珠林條目 ❶(日)Hō-on-ju-rin-jō-mokuroku. ❷五卷 ❸存 ❹延寶二刊 ❾(龍大、研佛)(正大、一〇一・六九)(智、あ・三・左・五)

法苑珠林目錄並重添條目 ❶(日)Hō-on-ju-rin-moku-roku-narabi-ni-jō-tsen-jō-Bō-kō. ❷五卷 ❸存 ❹李鎮逸 ❺延寶二刊 ❾(正大、一〇一・七〇)

法苑春秋 ❶(日)Hō-on-shun-jū. (支)Fa-yuan-chun-chiu. ❸存 ❹清沈雄 ❼〔參考〕 禪籍目錄

法苑章記 ❶(日)Hō-on-jō-ki. (支)Fa-yuan-chang-chi. 大乘法苑義林章決擇記、大乘法苑義林章決擇抄、大乘義林章決擇記、大乘法苑義林章記、法苑義林決擇記、法苑決擇記 ❷二卷或四卷 ❸存、卍續二・三・一 ❹唐智周(儀鳳三—開元二 A. D. 678—733)述 ❺大乘法苑義林章決擇記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷下

法苑栖翫記 ❶(日)Hō-on-sei-gwan-ki. (支)Fa-yuan-hsi-wan-chi. ❷六卷 ❹宋守千述 ❻守千の著として表無表章栖翫記一卷現存し續藏經第二・三・二に收めらるゝは、或は本書の一部たりしものか、可考。 ❼〔參考〕諸宋章疏錄第二

法苑補闕章 ❶(日)Hō-on-fo-ketsu-shō. (支)Fa-yuan-pu-chüeh-chang. 大乘法苑義林章補闕、補闕章、補闕義林章、大乘法苑義林章補闕、大乘法苑義林章補闕章 ❸卷四・七・八現存、卍續二・三・一 ❹唐惠沼(—開元二 A. D. 714)述 ❺大乘法苑義林章補闕の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷下

法苑文歸 ❶(日)Hō-om-bun-ki. ❷十二卷 ❸存 ❹吉梁頑獻(寶曆三—天保一〇 A. D. 1753—1839) ❼〔參考〕禪籍目錄

法苑略集 ❶(日)Hō-on-ryaku-shū. 高泉禪師法苑略集 ❷五卷 ❸存 ❹道亨等編 ❺寬文二刊 ❾(帝國、八二二・一二一)

法苑林章 ❶(日)Hō-on-rin-jō. (支)Fa-yuan-lin-chang. 大乘法苑義林章、義林章、法苑義林章、大乘法苑義林、大乘法苑林章、法苑義林 ❷七卷或十四卷 ❸存、大正四五・二四五 No. 1861、卍續二・二・五、❹唐窺基(貞觀六—永淳元 A. D. 632—682)述 ❺大乘法苑義林章の下を見よ。 ❼〔參考〕奈良朝現在一切經疏目錄2552, 2553

法苑林章記 ❶(日)Hō-on-rin-jō-ki. 法苑記 ❷三卷或二卷 ❸缺 ❹護命(天平勝寶二—永和元 A. D. 750—834)述 ❺法苑記の下を見よ。 ❼〔參考〕諸宗章疏錄第一

法苑林章記 ❶(日)Hō-on-rin-jō-ki. 法苑記 ❷一卷 ❸缺 ❹平傳述 ❺法苑記の下を見よ。 ❼〔參考〕諸宗章疏錄第一

法苑林章解節記 ❶(日)Hō-on-gi-ri-tsu-ki-ki. 法苑解節記 ❷二十卷 ❸缺 ❹護命(天平勝寶二—永和元 A. D. 750—834)述 ❺法苑解節記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷下

法界安立圖 ❶(日)Hō-kai-an-ryū-zu. (支)Fa-chieh-an-li-t'u. ❷六卷 ❸存、卍續二乙・二三・四—五 ❹仁潮錄 ❺明萬曆三五(A. D. 1607) ❻本書は、明の神宗の萬曆三五年(A. D. 1607)仁潮和尙が燕山天目蘭若に於て集科せられたる、佛教世界觀の概要である。上中下の上下二卷宛なるを以て六卷である。今本書の內容を略記すれば次の如し。卷上之上。一略明二南洲一佛興緣。賢劫緣。姿婆穢域。東震旦國。南瞻部洲國。別胡梵說。論二地中有二九義一。(一)名聞。(二)里分。(三)山王。(四)水源。(五)地勢。(六)輪王。(七)梵書。(八)氣和。(九)道中。輪僊道。論二疑生一信。

卷上之下。二廣歩二大地一。四洲圖。四洲說。業因。拾報相。山海圖。山海說。地獄緣。龍王宮。金翅鳥。阿修羅。天修羅戰。龍神身量。業因。地獄名。八熱獄圖。遊增獄圖。苦報相。八寒獄圖。小地獄。出地獄。恩因。閻摩王。餓鬼。畜生。

卷中之上。三福觀三界。日天宮殿圖。月天宮殿圖。日月照用。氣候寒暑。星天宮殿圖。四天王宮圖。編報化生。生天業因。初利天宮圖。初利業因。三界安立圖。諸天身壽。諸天業因。天人光明。飲食精粗。三界九地。論諸天王。四禪四地。天有聖凡。三界總別。五衰退相。心生六道圖。

卷中之下。四大千劫量。千世界圖說。大千構禪。大千積貯。劫量總名。成劫。住劫。壞劫。空劫。大劫圖說。增減劫圖說。四輪王。小三災。大三災。劫運圖說。賢劫千佛圖說。紀劫季數。

卷下之上。五遊諸佛刹。十方佛刹圖說。東方淨土。西方淨土圖文十一。七寶殿地。七寶宮宇。蓮華浴池。行樹樂音。寶網舒光。頂光遍照。化禽演法。壽命長演。往生正因。疑城示誡。淨土正報總說。一淨緣佛刹圖。十淨緣佛刹圖。百淨緣佛刹圖。華藏業因說。釋華藏名。

卷下之下。六研窮法界。十方刹海圖。釋大數名。酒觀刹海。翅翔法界。佛光觀。法界無盡。七法界總論。四土圓極圖。依正通論。四土淨穢。五土淨穢。同處異見。色因識變圖。共造義。自在義。心造法界圖。念具三千圖。法界直指圖。

仁潮は卷下之下に釋題して、法界とは心の別目なり。蓋し心の體用は涅槃にして性相無礙なり。卽ち是れ心を以て法と爲し、心を以て界と爲す。安立とは心の妙相分齊莊嚴なり。各々建立して相雜亂せざるなりといへり。蓋し彼は華嚴の法界思想に基き、佛教の多岐に渡る世界觀思想を慣衆に集めて、其の大系を叙し、結局心造法界の歸趣なるべきをいはんとするにあり。

❺承應三刊 ❾(谷大、餘大・二一五一)(龍大、二七三・三四)(正大、一〇六・一八五)(京大、藏・二四ホ・一三—一四)(帝國、二四一・七七)(成田昌信)

法界一念抄 ❶(日)Hō-kai-ichi-nen-shō. ❷一册 ❸存 ❹日澄述 ❺永應二刊 ❾(立大、A〇四・四五)

法界一毛端 ❶(日)Hō-kai-ichi-mō-tan. ❷六卷 ❸存 ❹法僧 ❺明和三寫 ❾(谷大、餘大・四〇九三)

法界覺悟私記 ❶(日)Hō-kai-kaku-go-shi-ki. ❷三卷 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六 A. D. 794—864)述 ❻山家山德撰述篇目集卷上に云く「天正錄法界或作ノ經。覺或作ノ實」云々。

法界義鏡 ❶(日)Hō-kai-gi-kyō. 華嚴法界義鏡、華嚴宗要 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第三八華嚴宗疏卷下、大日本佛教全書第一三華嚴小部集、佛教大系 ❹凝然(仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321)述 ❻永仁三(A. D. 1295) ❼華嚴法界義鏡の下を見よ。 ❾刊本(智、ま・五・右・一六)

法界具觀 ❶(日)Hō-kai-gu-kwan. ❷十九卷 ❸存 ❹道雪梅嶺 ❾刊本(谷大、藏・九タ・二五)(極井善兒)

法界觀務本 ❶(日)Hō-kai-kwan-mu-hon. (支)Fa-chieh-kuan-wu-pen. ❷一卷 ❸缺 ❹宗寶述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、華嚴宗經論章疏目錄

法界觀門 ❶(日) Hō-kai-kwan-mon. (支)Fa-chieh-kuan-men. 法界觀、修大方廣佛華嚴法界觀門 ❹杜順述 ❻本書は元來獨立した書として藏經中には收められず、杜順作として疑を挾む向がある。一は杜順作として獨立流行してゐたものを法藏が華嚴發菩提心章中に取り入れたとするもので、一は法藏の發菩提心章の文を取り出して杜順作法界觀門としたとの說である。一は凝然等の說をうけて常盤大定博士之を主張し、一は鈴木宗忠博士が主張してゐる。詳細は支那華嚴宗傳燈論、原始華嚴哲學の研究を參照されたし。但し法界觀門のみの獨立したものが高山寺に藏されたと見え高山寺の聖教目錄には法界觀門と注法界觀門とが別々に記され、義天錄にも別々に記されてゐる點は注意されねばならぬと思はれる。本書の內容に就ては註華嚴法界觀門の下を見よ。 ❼〔參考〕新編諸宗教藏總錄第一

法界玄鏡 ❶(日)Hō-kai-gen-kyō. (支) Fa-chieh-hsuan-ching. 華嚴法界玄鏡、華嚴法界觀玄鏡、玄鏡、大華嚴經法界玄鏡 ❷二卷或一卷 ❸存、大正四五・六七二 No. 1883、續陽三、卍三四・一〇、明北591百、Nj. 1593 ❹唐澄觀(開元二五—同成三 A. D. 737—838)述 ❻華嚴法界玄鏡の下を見よ。 ❾刊本(智、ま・五・右・八)

法界次第 ❶(日)Hō-kai-shi-dai. (支)Fa-chieh-tzu-ti. 法界次第初門 ❷三

巻或六巻 ❸存、大正四六・六六四No. 1925、鎌陽九、卍三三・六、明北1565刑、清1483振、至1525庸、明南1562翼、Nj. 1572 ❹隋智顗(大同四—開皇一七 A. D. 538—597)述 ❺法界次第初門の下を見よ。 ❼(参考) 新編諸宗教藏總錄第三、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、傳教大師將來目錄、智證大師請來目錄 ❽寫永九刊 ❾高大、寄・一・一五)(立大、A一一・三一四—三一五)

法界次第引考 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-in-kō. 法界次第考錄 ❷六卷 ❸存 ❾寫本(谷大、餘大・九〇三)

法界次第考錄 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-kō-roku. 法界次第引考 ❷六卷 ❸存 ❾寫本(谷大、餘大・二三〇四)

法界次第講 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-kō. ❷一冊(中卷) ❸存 ❾寫本(龍大、二六五六・四三)

法界次第講錄 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-kō-roku. ❷五冊 ❸存 ❹高空 ❾寫本(龍大・二六五六・四四)

法界次第初門 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-sho-mon. (支)Fa-chieh-tsa-ti-chu-mên. 法界次第章、法界次第 ❷六卷(三卷) ❸存、大正四六・六六四No. 1925、鎌陽九、卍三三・六、明北1565刑、清1483振、明南1562翼、Nj. 1572 ❹隋智顗(大同四—開皇一七 A. D. 538—597)

❺本書は諸經論中特に大品般若經と大智度論とに依附して名色等の法相の次第生起する義を述べ、觀心入理の初門の者のために三百科を撰び七卷に作つた。今は名目の下で六十科を立てて、體相を略解し三卷になした。故に他の四卷には二百四十科を記した筈であるが、諸錄皆三卷本を傳へるのみ。本書は總序・目錄・本文の三段に分る。總序の首めに「天台山修禪寺沙門釋智顗」とあるから天台大師親撰であり、著作した所も天台山修禪寺であると考へられる。然し著作年月は記してないからこの點は全く不明。天台大師時代の前後には學匠の間に本書の如き『名目』集が屢々作られた。恐らく本書もこの風潮に從つたものであらう。本書が大論を中心として名目を集め、そして此等の名目の配列をば三觀を練磨する修行の階程たらしめんと試みた點には大なる苦心が潜んでゐる。總序には本書を新學のために作つたことには三意があるといひ、一には經論を讀み法門を領解する時に名數を知らない者がある。是の如き者のために作つた。二には未だ聖教に記されてゐる法門の淺深の次第を知らぬ者がある。此等のものためにも作つた。三には三觀(別相・通相・一心の三種三觀)を學ばんとする者は先づ名目の義理を知り、名數の一々を心にかけて觀察し、そして一念心中に於いて一切の佛法に通達して心觀を了了たらしめんがために作つた」と。本書の調巻は上中下三巻からなるが上中下に各上下を分つ。是の故に六巻となるのである。名と數とを三百科に分つたが、本書は名を六十科に分けた。六十科とは、(巻上之上) (一)名色(二)五陰初門(以下初門の二字を略す)。(三)十二入。(四)十八界。(五)十六智見。(六)見愛二煩惱。(七)三毒。(八)五蓋。(九)十煩惱。(一〇)九十八使。(一一)十惡。(一二)十善。(巻上之下) (一三)三歸。(一四)五戒。(一五)四禪。(一六)四無量心。(一七)四無色定。(一八)六妙門。(一九)十六特勝。(二〇)通明觀。(巻中之上) (二一)九想。(二二)八念。(二三)十想。(二四)八背捨。(二五)十一切處。(二六)十四變化。(二七)六神通。(二八)九次第定。(二九)三三昧。(三〇)師子奮迅三昧。(三一)超越三昧。 (巻中之中) (三二)四諦。(三三)十六行。(三四)生法二空。(三五)三十七品。(三六)三解脫。(三七)三無漏根。(三八)十一智。(三九)十二因緣。(巻下之上) (四〇)四弘誓願。(四一)六波羅蜜。(四二)四依。(四三)九種大禪。(四四)十八空。(四五)十喻。(巻下之下) (四六)百八三昧。(四七)五百陀羅尼。(四八)四攝。(四九)六和敬。(五〇)八自在我。(五一)四無礙辯。(五二)十力。(五三)四無所畏。(五四)十八不共法。(五五)大慈大悲。(五六)三十二相。(五七)八十種好。(五八)八種背捨。(五九)三念處である。

❷(注釋) 法界次第鈔三巻 (参考) 天台大師別傳、內典錄第十、傳教大師將來台州錄 ❹寫永九刊(谷大、餘大・一四一八×龍大・二六五六・四七)(正大、一三四・一二)天和二刊(谷大、餘大・三六九)(龍大・二六五六・四五×正大、一三四・一三×高大、寄・一・一五)

(田島德音)

法界次第初門 增補冠註法界次第初門 ❷(B)Hō-kai-shi-dai-sho-mon. 增補冠註法界次第初門 ❷三巻 ❸存 ❹小林是純註 ❾明治二〇刊(龍大、研佛)(帝國、一一・八七)(立大、A一一・三二三・三二六)(內閣)明治二三刊(立大、一一・三二〇)明治二七刊(立大、A一一・三二一—三二二)(龍大、研佛)(谷大、餘大・二六〇四×帝國、一二六・九五)

法界次第初門類篇 ❶(B) Hō-kai-shi-dai-sho-mon-rui-hen. ❷二巻 ❸存 ❹壁鳳記 ❾寫本(生譯寺)

法界次第鈔 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-shō. ❷三冊 ❸存 ❹乾性 ❺慶安三刊 ❾(高大、寄・一・一五×晉、ヤ・四・右・三×谷大、餘大・一三九〇×龍大・二六五六・四八)(正大、一三四・一六—一七)

法界次第筌解 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-sen-kai. ❷一冊 ❸存 ❾寫本(龍大、二六五六・四九)

法界次第錄 ❶(B)Hō-kai-shi-dai-sen-roku. ❷三巻 ❸存 ❹可透 ❾寫本(明德院)

法界宗五祖略記 ❶(B) Hō-kai-shū-go-so-ryaku-ki. (支)Fa-chieh-tsung-wu-tsu-lüeh-chi. ❷一巻 ❸存、卍續二乙・七・三 ❹續法輯 ❺清康熙一九(A. D. 1680)

❻本書は浙江省錢塘慈雲寺の沙門發法が、華嚴宗の五祖として、初祖杜順和尚、二祖智儼和尚、三祖賢首國師、四祖清涼國師、五祖圭峯大師の五人の祖師に關する傳記を略述したるもの、續法は清朝康熙時代に於ける有數の華嚴宗の學匠にして、他の法界宗蓮花章の如き彼は華嚴宗をすべて法界宗と讀んでゐる。虎林の復齋居士、栽京曾は

本書に序文を述べてゐるが、それによれば本書は、清の聖祖の康熙十九年、庚申夏(A. D. 1680)に書かれたものである。

❽光緒二二刊 ❾谷大、餘大・一八六四)(京大、藏・一九ホ・三)

(成田昌信)

法界宗蓮花章 ❶(B)Hō-kai-shū-ren-ge-shō. (支)Fa-chieh-tsung-lien-hua-chang. ❷一巻 ❸存、卍續二・九・一 ❹清續法集、門人法賢較

❺本書一篇は賢首五教儀六巻(本書の項下解說參照)を著はした、續法が清の康熙年中法界緣起を以て宗とする華嚴教學に關して述べたるもの。續法が序に述べて曰はく、森羅萬象は空に至りて極り、百川の衆派は海に至りて極り、一切聖賢は佛に至りて極り、一切の教法は圓教に至りて極り、如來の說經は華嚴經にて極り、古德の判釋は賢首にて極れり。故に今彼の教觀に依りて五門百法を開合せり。若し大經の蓮花に非んば喩を取りて開悟するに由無しといへり。而して五門とは初に時を辨じ、次に儀を叙し、三には教に約し、四には宗を顯し、五には觀を明す。通觀するに一蓮花十玄六相の根本義を述べてゐる。

❾刊本(京大・藏・一〇ホ・二) (成田昌信)

法界聖凡水陸勝會修齋儀軌 ❶(B) Hō-kai-shō-bon-sui-rikū-shō-sai-gi-ki. (支) Fa-chieh-shêng-fan-shui-lin-shêng-hui-hsin-chai-i-kuei. 水陸修齋儀軌 ❷六巻 ❸存、卍續二乙・三・三—四、雲棲法彙第一八 ❹宋志磐(—成淳頃A. D. 1265—1274—)撰、明株宏(嘉靖一一—萬曆四〇 A. D. 1532—1612)說萬曆四三、年八一歲)重訂

❺本書は宋四明東湖沙門志磐が、水陸勝會修齋の儀軌を成淳年間に記したものを更に明古杭雲棲沙門の株宏が重訂せるものである。水陸會とは施餓鬼會の一にして、悲濟會とも水陸齋とも云ひ、水陸に飯食を施じて、苦惱の諸鬼を救濟する法會にして、梁の武帝の時に始められたものと傳へられてゐる。陳隋時代には一時中絕したが唐代に至り再び起り、宋代に至りて志磐本書を著はして四明の地に水陸會を行ひ、明代に至て株宏更に重訂したる儀軌によりて杭州の地に同會を行つたものである。尙株宏は淨土の念佛を分つて四種とし(一)持名念佛、(二)觀像念佛、(三)觀想念佛、(四)實相念佛とし、然して「總有四種之殊、究竟歸於實相而已」としてゐる。

❾光緒二三刊(龍大、二〇四二・四)寫本(龍大・二〇七一・四〇)

法界聖凡水陸大齋普利道場性相通論 ❶(B)Hō-kai-shō-bon-sui-rikū-dai-sai-fu-ri-dō-jō-sō-tsū-ron. (支)Fa-chieh-shêng-fan-shui-liu-ta-chai-pu-li-tao-ch'ang-hsing-hsiang-tung-lun. 雲國水陸通論 ❷九巻 ❸存、卍續二乙・二・四 ❹清尼觀撰

❺本書は水陸會の儀軌を記したものにして、巻一に總論、壇圖、綱要、文稿巻二に結界、遣使、建壇。巻三に請聖、浴上堂。巻四に供上堂、請赦。巻五に請下堂、浴下堂、歸戒。巻六に誦光明偈、供下堂。巻七に觀

祝上下堂。巻八に通供上下堂、結願、送聖。巻九に像式并讚の項目に分ち、七日に渉る式を詳記してゐるが、先づ式の(前二日)には「詢內壇外壇事集手、乃靜居一室、爲法界衆生行實相懺悔。又(前一日)には「法師觀視牌軸、遍安之、不行禮。前一日の午後には「內壇鳴小鐘鼓、誦金光懺文二遍。(第一日)三更には「外壇灑淨。四更には「內壇結界。五更には「遣使樹旛。(第二日)四更には「請上堂。五更には「奉浴。(第三日)四更には「供上堂。五更には「請赦。是日の午刻には「通齋內外僧皆以錢代飯。(第四日)三更には「請下堂。四更には「奉浴。五更には「說戒。(第五日)四更には「誦信心銘。五更には「供下堂。是日の午刻には「齋僧、如上法。(第六日)四更には「主法觀祝上下堂、洞宜情懇。巳時には「行放生。未時には「給牲糧。(第七日)五更には「齋供上下堂。巳時には「結願。午時には「齋僧、如上法」。未時には「迎至外壇。申時には「送聖。戌時には「大衆行瑜伽施食。亥時には「畢。(後一日)には「主法接見外壇人天、示以法長無始修義篇」として甚だ詳細である。然してその水陸會の趣意はその願文にある通り「所有功德、悉以廻向一切衆生、願一切衆生、早發圓根、早圓妙法、身心淸白、晝夜光明、寃對消亡、眷屬隨順、神通迅速、法眼安詳、有願皆從、所作悉辦、飛生極樂、快想彌陀」といふにあるは明かである。

❾刊本(京大、藏・四ホ・一—二)

法界聖凡水陸大齋法輪寶懺 ❶(B)Hō-kai-shō-bon-sui-rikū-dai-sai-hō-rin-bō-sen. (支)Fa-chieh-shêng-fan-shui-lin-ta-chai-fa-lun-pao-ch'an. 水陸道場法輪寶懺、法輪寶懺 ❷十巻 ❸存、卍續二乙・二・四—三・一 ❹清尼觀記

❺本書巻頭に尼觀の同治三年(A. D. 1864)の序あり、それによれば本書は「作水陸道場檢藏之功能、姑寄懺儀、傳諸名相、與下堂列位、十方隨喜、種此善根、金剛不壞」といふに趣旨あり、然して閻藏知津の例に倣つて(一)華嚴・方等・顯・同(密)・般若・法華・涅槃。(二)阿含。(三)大乘律。(四)小乘律。(五)西土釋論。(六)西土宗論。(七)東土大乘論。(八)小乘論。(九)密宣。(十)新書の順序によりて書名、著譯者名、內容の一班等を記してゐるが、水陸會に當てその一々を拜觀に際しては「願現自在力、爲說圓滿經、無量諸衆生、悉受菩提記」。「願此法普雲、充滿十方界、衆生心鏡昏、一々寶莊嚴、具足光明力、成就如來身」と念ずるものゝ樣である。巻末に刺經僧妙空の記あり、これによれば、本書は光緒三年(A. D. 1877)に至て寶仁なるもの刺經を企てしも死去し、その後母恰源、無居士、本眞上善等の力によつて光緒五年九月に完了したものゝ樣である。

❽同治八刊 ❾(京大、藏・四ホ・三)

法界心體論 ❶(B) Hō-kai-shin-tai-ron. ❷一巻 ❸存、大日本佛教全書第二四傳教大師全集第三、天台小部集拜第一、傳教大師全集第三(舊)第五(新)

❺本論は其內容の心佛を最上となし、本有

の心空、不二之圓道を強調する點より見て、慧禮以後に於ける作品と見る事が出來る。勿論、山家の撰述ではない。可透錄、龍堂錄は、本論を疑僞部に入れてゐる。其說く所、常談の教相を超絕し、寧ろ怪奇である。即ち、心體は空寂也。形色無しと雖、圓に萬法の性を具し、遍く諸色の色體を備ふ。と言つて、諸根を中心とする根藏法界の義を立て、肝藏、眼根、舌根、脾藏、身肉、髮髮、血脈等と心性、心佛乃至一心本覺の理とを結びつけ、遂に法界の心體、不可思議にして、空生なる所以に及ぶ。其文德より見るに、中古、天台に行はれたる玄旨歸命に關する撰述歟。前人唐求法僧寂澄述とあるも僞撰なり。

❼(參考) 山家祖德撰述篇目集卷上 ❽古寫本(日光天海藏)寫本(叡山・延曆)刊本(正大、一三六・四) (盛入亮忠)

法界圖記叢髓錄 ❶(日) Hoku-kai-zu-ki-sui-roku. (支)Fa-chieh-t'u-chi-tsung-mi-lu. ❷四卷 ❸存、大正四五・七一六No. 1887 ❹新羅、義湘著「華嚴一乘法界圖」なる小册子を、古今の學匠の所論引用の下に、詳解、細釋するもの。

その典據は法融、眞秀、賢首、淸涼等極めて多數に上り、華嚴の教理史には餘り重要視されてゐない人々と、その著書、學說が多く引用され、賢首、淸涼の如き必ずしも第一の所依とされてゐない。(櫻井義晃)

法界圖章 ❶(日) Hoku-kai-zu-sho. (支)Fa-chieh-t'u-chang. 一乘法界圖章、華嚴一乘法界圖、華嚴法界圖章、大乘法界圖 ❷一卷 ❸存、大正四五・七一一No. 1877 ❹義湘(—武德八—1337)撰 ❺新羅總章元年(A. D. 668)七月十五日 ❻一乘法界圖章の下を見よ。

法界體性無分別會 ❶(日) Hoku-kai-tai-shō-mu-fun-betsu-e. (支)Fa-chieh-ti-hsing-wu-fen-pieh-hui. (梵) Dharma-dhātu-prakṛty-asambhed-nirdeśa (藏傳)(藏)hphag-pa chos kyi dbyiṅs kyi rab-bhin-dbyer med-pa bstan-pa shes-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo 法界體性無分別經、(紛尾所記三名、說法界體性無分別經、寶上天子所問經、文殊師利童子所說經) ❷二卷 ❸存、大寶積經第二六—二七(大正一一・一四三No. 310, 8) ❹曼陀羅(Mandra)譯 ❺乘天監二(A. D. 503) ❻文殊師利菩薩、寶上天子の所念に應じて法界の體性本來淸淨にして淨穢・緇無等の分別なく、たゞ衆生の見に於て分別して差別を見るに過ぎざることを明す。本經西藏譯は北京赤字版に失譯とするも Derge 版には Jñānamitra, Sarendrabodhi, Ye-ces-ade の共譯とせり。○要領(卷二六)。(1)佛、寶上天子の所念を知り文殊に法界の體性を說かしむ。(2)文殊、舍利弗の問により法界本淨汗・緇無なきを明すや二百比丘疑を起して座を去る。文殊方便して之を化度してその供養を受く。須菩提、釋迦牟尼佛、文殊に供養する二百比丘の悟境を問く。阿難又、文殊に諸比丘を調伏せるもの謂なるやを問ひ、文殊、法界の體性はこれ化人の如し、諸比丘を調伏する者は化人なりとて、法界體性の空にして平等なるを知るを菩薩脫とし、空法中に差別見あるを增上慢とす等と明す。(3)文殊、寶上天子の問により、菩薩體性・淨淨六度・行四念處に就ての空觀を擧げ、一切智心に於て自在を得る道を說いて菩薩の記とし、佛之を讚じたまふ。(4)更に寶上の問に依りて授記・得果・說法(卷二七)佛出世・報恩・初發意・久行・不退轉・一生・不生及得自在等の空義を明し、佛之を讚じたまふ。(5)佛、阿難の問により寶上天子に授記す。當來世寶劫寶莊嚴界に寶莊嚴如來となり無盡主陀羅尼を說くべしとしてその內容を詳說す。(6)阿難、寶上の授記を歎ずるや、寶上、空法中授記なく得記なきを明す。この時惡魔來詣して、佛に羅闍に授記せざる理由を問ひ奉る。(7)文殊、魔王を化度しその身を化して佛身と作し師子坐に卽かしめ、菩提の空性なることを說かしむ。(8)舍利弗之を歎ずるや、文殊、「一切の草木樹林は無心なれども如來と作りて身相具足して悉く能く說法すべし」とて、舍利弗をして又佛身を現作せしむ。(9)流通分。 (美濃晃順)

法界體性無分別經 ❶(日) Hoku-kai-tai-shō-mu-fun-betsu-kyō. (支) Fa-chieh-ti-hsing-wu-fen-pieh-ching. ❷二卷 ❸缺 ❹姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九A. D. 344—413)說弘始二(或義熙年中)譯 ❺第一譯。 ❼(參考) 法經錄第一、開元錄第一四、貞元錄第二四

法界體性論 ❶(日) Hoku-kai-tai-shō-ron. ❷一卷 ❸嵇瑟(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—812)述 ❼(參考) 本朝台密撰述密部書目

法界都門 ❶(日) Hoku-kai-to-mon. (支)Fa-chieh-tu-mên. ❷一卷 ❼(參考) 惠運禪師將來教法目錄

法界塔婆觀 ❶(日) Hoku-kai-tō-ba-kwan. ❷一卷 ❸存、弘法大師全集第一四、弘法大師法寶錄 ❹空海(寶龜五—承和二A. D. 774—835) ❺意宇を五輪塔婆とし、五大五佛五智(以上內典)五行五根五臟五味(以上外典)に配した五輪塔婆圖を出し、これを法界塔婆と號してその意義を說いてゐる。但し空大を心法に屬するが如きは卽身成佛義の說に相違し、且つ文章も陋拙であつて、弘法大師の眞作ではない。全集には僞作部に入れてある。 (小田慈舟)

法界道場觀 ❶(日) Hoku-kai-dō-jō-kwan. ❷一帖 ❸存 ❹平安朝時代寫 ❼(高大、寄・一・六九)

法界獨斷 ❶(日) Hoku-kai-doku-dan. ❷一卷 ❸存 ❹北畠道龍(文政五—明治四〇A. D. 1823—1907) ❺明治二二刊 ❼(正大、一一〇八・一四四)(帝國、二五・一七八)

法界法 ❶(日) Hoku-kai-hō. ❷一軸 ❸存 ❼寫本(金剛三昧院)

法界無差別論 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron. (支) Fa-chieh-wu-ch'a-pieh-lun. 大乘法界無差別論 ❷一卷 ❸存、大正三一・八九二No. 1626、續藏一、卍

二二・五、北545臨、南562臨、元651臨、明北1331逸、淸1331逸、慶646命、天618臨、指613命、法634命、至1365甲、明南1393革、Zy. 1353 ❹堅慧菩薩造、提雲般若等譯 ❺唐天授二(A. D. 692) ❻大乘法界無差別論の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一 ❽刊本(京大、藏・一四ホ・一〇)(智・ま・四・左・三〇)(京專)(正大、一一九六・七八)

法界無差別論 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron. 國譯法界無差別論 ❷ 存、國譯大藏經論部第五 ❹伯藤即應譯

法界無差別論玄談 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-gen-dan. ❷一册 ❸存 ❹刊本(京專)

法界無差別論纂註 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-san-chū. ❷二册 ❸存 ❹寫本(智・ま・五・左・八)

法界無差別論疏 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho. (支)Fa-chieh-wu-ch'a-pieh-lun-su. 大乘法界無差別論疏 ❷二卷或一卷 ❸存、大正四四・六一No. 1858、卍續一・七四・二 ❹唐法藏(貞觀一七—先天元A. D. 643—712)述 ❺大乘法界無差別論疏並序の下を見よ。 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第三、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、華嚴宗經論章疏目錄、奈良朝現在一切經疏目錄246† ❹正德元刊(谷大、餘大・七七四)(龍大・二四三四・一三四)、研佛)(京大、藏・一四ホ・二)(智・ま・五・中・一四)(京專)光緒二一刊(京大、藏・一四ホ・三)

法界無差別論疏引文考 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-in-mon-kō. ❷一卷 ❸存 ❹壁琳(正德五—寬政元A. D. 1715—1789) ❺寬政四刊(高大、寄・一・二四)明治三九寫(谷大、餘大・一七九六)

法界無差別論疏科 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-kwa. (支)Fa-chieh-wu-ch'a-pieh-lun-su-k'o. ❷一卷 ❼(參考) 華嚴宗經論章疏目錄

法界無差別論疏講述 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-kō-jutsu. ❷一卷 ❸存 ❹經歷述 ❽明治二八寫 ❾(谷大、餘大・一一四〇)

法界無差別論疏講述 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-kō-jutsu. ❷二卷 ❸存 ❹傳大純 ❾寫本(谷大、餘大・一九九一)

法界無差別論疏講錄 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-kō-roku. ❷三卷 ❸存 ❹巫師歷和尙錄 ❽明治二二寫 ❾(高大、寄・一・二四)

法界無差別論疏講錄 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-kō-roku. ❷三卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二四三四・一三七)

法界無差別論疏示珠抄 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-jio-shō. ❷一卷 ❸存 ❹普寂德門(寶永四—天明元A. D. 1707—1781) ❾寫本(谷大、餘大・一九四一)(京大、日大未・一四四)明治二二寫(高大、寄・一・二四)

法界無差別論疏鈔 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-sho-shō. ❷三卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下

法界無差別論疏領要鈔科 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-shō-ryō-yō-shō-kwa. (支) Fa-chieh-wu-ch'a-pieh-lun-su-ling-yao-ch'ao-k'o. 大乘法界無差別論疏領要鈔科 ❷一卷 ❸存、卍續一・七四・二 ❹宋普觀錄 ❾寫本(京大、藏・一四ネ・四)

法界無差別論大意 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-tai-i. ❷一卷 ❸存 ❹圓雲集(文政二—明治三二A. D. 1819—1899) ❾寫本(谷大、餘大・一三五七)

法界無差別論略解 ❶(日) Hoku-kai-mu-sha-betsu-ron-ryaku-ge. ❷一册 ❸存 ❾寫本(智・ま・四・左・二)

法界唯心事 ❶(日) Hoku-kai-yui-shin-no-koto. ❷一卷 ❸存 ❹存海記 ❾寫本(眞如藏)(正倉藏)

法界或問止啼錢 ❶(日) Hoku-kai-waku-mon-shi-tei-sen. ❷三卷 ❸存 ❹大珍 ❾文化一四刊(正大、一七五・八二)文政四刊(駒大)文政五刊(谷大、餘大・六三二)(高大、寄・一・二四)

法海印誦 ❶(日) Hok-kai-in-ju. (支)Fa-hai-yin-sung. ❷一卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2777

法海經 ❶(日) Hok-kai-kyō. (支)Fa-hai-ching. (巴)海八德經參照 ❷一卷 ❸存、大正一・八一八No. 34、續祖七、卍一四・三、北783辭、南793辭、元787辭、明北669盤、淸559盤、麗793言、天786辭、指743言、法769言、至1016錄、明南665尺、Zy. 673 ❹法炬譯 ❺西晉惠帝代(A. D. 290—306) ❻本經は佛、十五日布薩の日に、會中に不淨の比丘があるのを知つて、阿難が三度請ふも、波羅提木叉を說かれなかつたが、尊者大目犍連が不淨の比丘を放逐して、佛に或を說かれんことを願ひ、佛は大海の八德に喩へて說かれたものである。

本經は中阿含三七經贍波經の別譯であつて、增一阿含四八品の第二經の前半これに該當し、法炬譯の恒水經、羅什譯の海八德經またその別譯をなすもので、巴利文にあつては、增支部八・二〇これに該當するものである。これらの諸經を對照する時は中阿含のそれは最も詳しく、本經を初め別譯の各經はいづれも巴利文に近く諸經いづれも多少の出入を存するも、內容に於ては大體合致するものである。因に本經の記事は巴利文小會部九・一、並に五分律卷二八の中にも存する。

❼(參考) 三寶紀第六、內典錄第二、譯經圖紀第二、開元錄第二、貞元錄第四 ❾刊本(龍大、別置) (林五邦)

法海具觀 ❶(日) Hok-kai-gu-kwan. ❷十册或十九册 ❸存 ❹道雪梅嶽 ❽延寶三刊 ❾(駒大)(智・ふ・一・左・三〇)(帝國、八二一・二九三)

法海觀瀾 ❶(日) Hok-kai-kwan-ran. (支)Fa-hai-kuan-lan. ❷五卷 ❸存 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)撰 ❺永曆八(A. D. 1654) ❻大藏法海ヶ律、敎觀(天台・賢首・慈恩)、禪、密、

時の五門に載せ、之を諸宗の要義綱要を明せるもの。⑥同巻に日仏及び諸仏菩薩の伝を載せず。

法華層塔行状記 ❶(日) Hok-kai-zen-ji-gyō-jō-ki. 法華層塔善禅寺行状記、善禅寺行状記。❷存。鎌倉時代成立か。❸巻数(一冊書)A. D. 1293—)

法華層塔語録 ❶(日)Hok-kai-zen-ji-go-roku. ❷1巻 ❸存 ❹善禅寺開山(文永—弘安A. D. 1264—1306) ❺〔参考〕法華層塔善禅寺日蓮、大日本史蒙古襲来表、善禅寺開山文永—弘安

法華層塔善禅寺和尚行状 ❶(日) Hok-kai-zen-ji-mu-shō-o-shō-gyō-jō. 法華層塔善禅寺無住和尚行状記、法華層塔行状記、善禅寺行状記 ❷1巻 ❸存、鎌倉時代成立か。❹巻数(一冊書)(A. D. 1290)

❺昔しく、は法華宗四本法華層塔善禅寺行状記と云ふ。「法華」「層塔」「善禅」「善寺」を記し、法華の実相を学び生涯して之を行ぜんと願ひ、山の学徒等皆師に参じて学ぶ。文永十八年人宋し、医術を天竺山の老僧に習ひ、又宋に帰り、元十四年の行基を記し、大乗、禅宗に帰依し、参禅を尊び、参禅に帰依して「参禅と参禅人」、衣を衣禅僧侶に託して之を師事し、衣は参禅僧侶に託す。衣は参禅僧侶に託す」とある。

(後藤大用)

法華層記 ❶(日) Hok-kai-zō-kyō. (支)Fa-hai-ts'ang-ching. 法華蔵経 ❷1巻 ❸存 ❹唐代の訳 ❺(唐)菩提流志(一名不空 A. D. 58—754—)訳 ❻巻第1 ❼〔参考〕出三蔵記集三、開元釈教録1、貞元釈教録1

法華経願行儀記 ❶(日)Hō-gan-o-shō-gyō-gi-ki. ❷1巻 ❸存、大日本史三所収 ❹法華(宗)開祖1—天保1○A. D. 1765—1839)、蓮華(一文化元年A. D. 1804—1817—) ❺文化1四年(文化7、天保・天文七)(文化7・11・1—8・三)開始四五年間(嘉永7、11九六五・1五〇)成立

法華玄記 ❶(日)Hō-ki-shi. (支)Fa-hsi-chih. 名会法華玄記 ❷四巻 ❸存、卍続11ろ・11三・1 ❹明皇帝勅撰 ❺名会法華玄義の下を以て。 ❻同巻 ❼(宋)天台宗 ❽(唐)湛然(荊溪)(A. D. 711—782)

法華玄論三十題 ❶(日) Hō-gi-ji-dan-ni-jū-dai. ❷1巻 ❸存 ❹天台宗撰述 ❺明治四五年刊 ❻(宋)天台宗 ❼(唐)湛然

法華玄論略 ❶(日)Hō-gi-shu-dan-shū. 略法華義玄論 ❷1巻 ❸存 ❹吉野金峯山(文政七—明治四三 A. D. 1824—1910)撰 ❺明治三三刊 ❻(宋)天台宗 ❼(唐)湛然

法華論 ❶(日) Hō-gi-shō. ❷上巻11十五章 ❸天宝(唐玄宗第天一—五七1 A. D. 767—822)撰 ❹〔参考〕本朝分類目録撰述目録、山家正義記、日本目録上

法華論記之事 ❶(日) Hō-gi-shō-retsu-no-koto. ❷1巻 ❸存 ❹鎌倉時代 ❺(鎌倉時代)

法華中末 ❶(日)Hō-gi-naka-yo-shi. ❷1巻 ❸存 ❹日蓮(宗祖三—安政五A. D. 1774—1858) ❺文永元年 ❻(唐)天(仏教)

法華経疏 ❶(日)Hō-kyō-roku. (支)Fa-ching-lu. 妙法蓮華経疏 ❷七巻 ❸存、大正五五・1一五No. 2146、続蔵1、卍三五・三一四、寺1056題、祐1072題、定1068題、明寺1691題、光1512、叡1061題、天1055題、祐1016題、法1043題、宗1533別、明宗1590百、Nj. 1609 ❹法華経義疏 ❺隋代成立 ❻(A. D. 594) ❼妙法蓮華経の下を以て。

法華経記 ❶(日)Hō-kyō-gyō. (支)Fa-ching-ching. (妙法)蓮華経経巻第第 ❷1巻 ❸存、大正11・1五No. 322、続蔵1、卍天・四、寺33題、祐30題、定30題、明寺30題、光30題、叡33題、天28題、明23乃、法29乃、宗100怨、明宗30題、Nj. 33 ❹安宗言撰、鳩摩羅什訳 ❺隋開皇年間(A. D. 181—)

❻〔説明〕妙法蓮華経の略称。大乗仏教経典の中最重要なもの。内容は仏教の根本思想を含み、仏教の思想・信仰・実践の全般に亘る。漢訳本は鳩摩羅什訳と玄奘訳。西蔵訳(大谷目録No. 760(19))は漢訳原典に最も忠実。それとパーリの内容は共に最も古い。それらの内容は共に大乗思想の名称を冠せるものであるが、その思想は大乗思想の中に含まれる。仏教の教理の発展の過程を示すものである。仏教に対する信仰の対象として、仏・法・僧の三宝を重んじ、仏の教理の中心を「法」に求め、「法」を「人」に対して「法」と呼ぶ。法は人を救う。法は人を救う。法は人を救う

法句經 ❶(日) Hok-ku-gyō ❸存、國譯大藏經經部第一二 ❹立花俊道譯

法句經 ❶(日) Hō-ku-gyō. 現代意譯法句經 ❸存、現代意譯根本佛教叢書第六雜阿含經抄 ❹高畠寛我譯

法句經 ❶(日) Hok-ku-gyō. 南北對照英漢和譯法句經 ❷一卷 ❸存 ❹常盤大定著 ❺大正一三刊 ❾東京森江書店

法句經 ❶(日) Hok-ku-gyō. 巴利傳譯法句經 ❷一册 ❸存 ❹長井眞琴譯 ❺大正一四刊 ❾東京世界文庫刊行會

法句經 ❶(日) Hok-ku-gyō. 現代意譯法句經 ❸存、現代意譯佛教聖典叢書第三佛教道德經集 ❹里見逮雄譯

法句經講義 ❶(日) Hok-ku-gyō-kō-gi. ❸存、曹洞禪講義第三 ❹衞藤即應述

法句經疏 ❶(日) Hok-ku-gyō-sho. (支) Fa-chu-ching-su. ❷一卷 ❸存、大正八五・一四三五 No. 2912 ❹ペリオ蒐集敦煌出土本の一。大正藏經 No. 2901 なる佛說法句經の註疏である。首に少しく闕失せる部分があるが、先づ序言あり、次に題號を釋して、科文を標しつゝ入文解釋せるものである。この疏著者のみたる原經には現存の如き十四の分品はなかつたらしいが今この註疏に從つて本經を分科し、所當の品を記してみれば、大要次の如くである。先づ普通の如く一經を序、正、流通の三分とし

○序分 ┌證信序……第一品
　　└發起序……第二品前半

○正宗分分爲三

┌一、初會說法（正爲此土及他方機緣已熟者）
　　└イ、酬因寶明所請……（第二品後半 第三品）
　　ロ、廣明二十八空……第四品
　　ハ、勸近善友……第五・六品
　　ニ、聞法慶喜……第七品
　　ホ、第二會說法（爲寶至世界）……第八品より十一品迄
　　└三、時衆聞法獲益……第十二品

○流通分

┌一、勸學 ┌イ、文殊問……第十三品
　　└ロ、如來答
└二、付囑 └ハ、大衆奉行……第十四品

右の各項を更に細分詳說してゐる。引論には肇師說、起信論、智度論等がある。勿論本經を僞經とみることについての批判はたゝ、全く佛說と尊信して註疏を進めてみる。

❾燉煌出土本（佛蘭西國民圖書館 P. 2325）（櫛部文觀）

法句經と人生 ❶(日) Hok-ku-gyō i-o-jin-sei. ❷一卷 ❸存 ❹小鹿淳著 ❺昭和七刊

法句集 ❶(日) Hok-ku-shū. (支) Fa-chu-chi. ❷二卷 ❸缺 ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五

法句集經 ❶(日) Hok-ku-jō-kyō. (支) Fa-chu-chi-ching. 法句經 ❷二卷 ❸存、大正四・五五九 No. 210、續藏六、卍二六・九、北1022號、南1038號、元103・號、明北1353藏、清1355藏、麗1028號、天1027號、指986號、法1009寫、至1473發、明南1111所、Nj. 1363 ❹維祇羅等譯 ❺吳黃武三以後(A. D. 224—) ❽法句經の下を見よ。

法句譬經 ❶(日) Hok-ku-hi-kyō. (支) Fa-chu-pi-chiang. ❷三十八卷 ❸疑僞經。 ❼(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四

法句譬喻經 ❶(日) Hok-ku-hi-yu-kyō. (支) Fa-chu-pi-yu-ching. ❷一卷 ❸失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、三寶紀第四、內典錄第一、武周錄第一一、開元錄第一、第一五、貞元錄第二、第二五

法句譬喻經 ❶(日) Hok-ku-hi-yu-kyō. (支) Fa-chu-pi-yu-ching. (巴)藏)法句經參照。法句喻經、法喻經、法句本末經 ❷四卷 ❸存、大正四・五七五 No. 211、續藏六、卍二六・八、北1023號、南1039號、元1035號、明北1346赤、清1345赤、麗1027號、天1028號、指985號、法1010寫、至1473發、明南1116藏、Nj. 1353 ❹法炬、法立共譯 ❺西晉惠帝代(A. D. 290—306)

❻經題—法句譬喻經は一名法句本末經といひ、又法喻經とも名づけられ、南條目錄には梵語 Dharmapadāvadāna-sūtra に還元されてゐる。釋尊一代の說法をその說法の形式によつて九若しくは十二に分ち九分經又は十二部經としてゐるが、今、此の經は何れに分類せらるゝかといへば十二部經中第七位を占むる譬喻經(Apadāna)に屬するものである。法句譬喻經といはるゝ名から見て法句(Dharmapada)の譬喻(Avadāna)であることは明かであつて、法句の一偈、一偈が如何なる本末の因緣によつて說かるゝこととなつたかといふ種々の譬喻譚が此の經典を支配する興味の中心となつてゐるのである。而してその譬喻譚を物語るのは法句を一般世人に了解せしめ佛の敎を證得せしめむが爲であり、勿論最後の目的は法句の體得にあつて譬喻譚はその手段としての役目を演じてゐるものであるが譬喻譚を物語ることが此の經の重要な點であるから譬喻經類(Apadāna)に攝して論ずることは正しいとことである。

法句譬喻經と出曜經—法句譬喻經も出曜經も同種類の經典であつて、共に法句、(Dharmapada, Udāna) の說かるゝ樣になつた因緣譚を說く譬喻譚經類に屬するものであるが同じく漢譯藏經にありて前者は巴利語系統のものであり、後者は梵語系統のものであるといふことは注意してよい事柄と思はれる。

法句經 (Dharmapada) に就いてはその解題者が詳述せらるゝであらうから精しく述べる必要もないが、パーリの Dhammapada は釋尊の在世中僧に隨ひ機に應じて出家や在家の弟子達に說かれたものを第一結集の際合誦したものを傳へ、二十六品、四百二十三偈より成り、パーリ小部 (Khuddaka nikāya) 中に攝められてあり、その出版本は西紀一八五五年、ファウスベール氏によつて公刊されてより世界に喧傳せられあらゆる國語に飜譯せらるゝことゝなつた。

梵語系統の法句經は法句 (Dharmapada)

とは名づけられずして優陀那(Udāna)といはれたものであることは中央亞細亞より得られた梵本斷片及び西藏譯等より證明せらるゝことである。又、傳統的の解釋からも決定し得ることであるが龍樹の智度論、第三十三卷には、

又、佛、涅槃の後諸の弟子要偈を抄集す。諸の無常偈等は無常品を作り、乃至婆羅門偈等は婆羅門品を作るが如し。亦、優陀那と名づく、

といふことにより、優陀那(Udāna)とは無常品より婆羅門品に至る法句の集錄をいふものであることが知られる。又、出曜經の第六卷の十二部經の說明の後下には、

六には出曜、所謂出曜とは無常從り梵志に至る。衆經の要藏を採り、演說布現し以つて將來を調ふるの故に出曜と名づくとあるによりても知らるゝのである。此出曜はレヴイ博士が示さるゝ如く(J. A. 1912. II. p. 219) Udāna を譯して出 (Ud)、曜 (dāna, ✓ dā) としたものと解すべきである。而して梵語・西藏譯、及び漢譯維祇羅の法句經等はその撰者を法救 (Dharmatrāta, Chō-gyō) 尊者としてゐる。

以上の如く法句經はパーリ語系統のものは Dhammapada と稱し梵語系統のものは Udāna-varga といはれたらしいが其等が漢譯の中に現はれてパーリ系統のものは維祇羅譯の法句經となり梵語系統のものは宋の天息災の譯した法集要頌經となつてゐるのである。

法句經に二系統あるが如く其等の法句 (Dhammapada, Udāna-varga) の因緣物語も又二系統がある。卽ち、法句譬喻經は維祇羅譯の法句經と共にパーリ語系のものであり、僧伽跋澄が將來し苻秦の竺佛念と共に譯出した出曜經は法集要頌經と共に梵語系のものである。出曜經の梵名が 'Udāna-sūtra' であることよりも譬喻經類 (Avadāna) に配當すべきものでないと考へられるであらうけれども此の經は法句譬喻經と同じく法句 (Dhammapada, Udāna varga) の緣つて說き起されし因緣譚 (Avadāna) が物語られてゐるのであるから十二分經中に配當するならば譬喻經類に屬すべきものである。然もその譬喻譚も要は法句の會得にあるのであるからその經の主眼をとつて出曜經としたものである。

同種の集錄と本經の組織—本經の如く譬喻譚が法句に對して註釋的位置を持つて加へられ、譬喻經類に攝して論ぜらるべきものがパーリ藏經中に年代から言へば新しいものであるが佛音 (Buddhaghosa) の作と傳へられて法句註釋 (Dhammapada atthakathā) として存在してゐる。是の中には多くの譬喻譚が含まれて居り譬喻經類 (Avadāna) に屬せしめてよいものである。是等の因緣譚中の何つかは泰西の學者によつて研究發表され、その譚は Sūrya Godhasume Angata 師に依つてなされ、又 Harvard の東律叢書中にもその完譯は編入されて居る。しかし梵語・巴利語・漢譯・西藏譯の其等の物語の系統的なる比較研究は將來のものとして今日は殘されてゐるのである。

本經は三十九品より成り四卷に分けられてゐる、各品一つ以上五・六の譬喻譚を載せ合計六十八を數へることが出來、譬喻集錄としては賢愚經の六十九より一つ少ないだけである。其等の各品の梗概は品名の示す如きが說かれてゐるのであつて取り立てゝいふ程のこともないであらうから此處には略する。

是等の一つ一つの物語りはそのまゝ經典より持ち來つたものもあり、又恐らくは法句集錄といふものが出來上つてから後に敎化の方便として創作せられたものもあるであらう。又經典より抄錄されたものも何分かは因緣譚としての潤色が行はれたであらうことも十分に考へられる。

撰者—法句譬喻經の撰者は誰であるか。法句經を法救撰とすることは既に智度論の云つてゐるところであるが、巴利系の Dhammapada はこれといかなる關係に考ふべきかは不明であり、又その法句經の註釋的な意味を含んでゐる譬喻譚を加へたこの法句譬喻經の撰者をも法救に歸すべきものであるかはにはかに斷定せらるべきことでなく、今は撰者は不明であるといふより外はない。

❼(參考) 出三藏記第二、內典錄第二、三寶紀第六、譯經圖紀第二、開元錄第二、貞元錄第四 ❾明曆三刊(龍大、二二一二・一七)(正大、一一九七・一六) (赤沼智善・西尾京雄)一一九七・一六)

法句譬喻經 ❶(日) Hok-ku-hi-yu-kyō. 國譯法句譬喻經 ❷四卷 ❸存、國譯一切經本緣部第一一 ❾赤沼智善、西尾京雄共譯

法句本末經 ❶(日) Hok-ku-hon-matsu-kyō. (支) Fa-chu-pen-mo-ching. 法句譬喻經、法句喻經、法喻經 ❷四卷 ❸存、大正四・五七五 No. 211、續藏六、卍二六・八、北1023號、南1039號、元1035號、明北1346赤、清1346赤、麗1027號、天1028號、指985號、法1010寫、至1473發、明南1116藏、Nj. 1353 ❹法炬、法立共譯 ❺西晉惠帝代(A. D. 290—306) ❽法句譬喻經の下を見よ。

法供養 ❶(日) Hō-ku-yō. ❷一册 ❸存 ❹佐竹智應 ❾明治二九刊 ❾(龍大)

法鼓經 ❶(日) Hok-ku-gyō. (支) Fa-ku-ching. 大法鼓經 ❷二卷 ❸存、大正九・二九〇 No. 270、續藏四、卍二二・二、北413藏、南435藏、元420藏、明北436藏、清435藏、麗417藏、天420藏、指928藏、法407藏、至415藏、明南412藏、Nj. 440 ❹求那跋陀羅、太元一九—泰始四 A. D. 324—468) 譯 ❺劉宋元嘉二二—二〇(A. D. 435—443) ❽大法鼓經の下を見よ。

法具圖 ❶(日) Hō-gu-zu. ❸存、黃檗清規附錄 ❹高泉(寛永一〇—元祿八 A. D. 1633—1695)編 ❾刊本(龍大、二六七六・三)

法觀經 ❶(日) Hō-kwan-gyō. (支) Fa-kuan-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四 法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四

法觀經 ❶(日) Hō-kwan-gyō. (支)

Fa-kuan-ching. ❷一巻 ❸存、大正一五・二四〇No. 611、續藏八、卍二六・九、北1010圓、南1030圓、元1022圓、明北1355楽、清1355楽、麗1015圓、天1019圓、指973圓、法998圓、至1460餞、明南1101令、Nj. 1362 ❹竺法護譯 ❺西晉太始二—建興元(A. D. 266—313)

❻普通經典の序正流通の形式でなく、佛言として教條の禪觀を說いたもの。數息觀を用ひる理由、身口意の三定、勤力・數念・思惟の順序を以て坐觀すべきこと、自身及び他身に就て一切空を觀ずべきこと、行道は守意を根本とする理由、道の四要法等が說いてある。修行道地經、禪祕要法經等と對照さるべきものである。

❼(參考) 三寶紀第六、內典錄第二、譯經圖紀第二、開元錄第三、貞元錄第三、第四(穗部文館)

法觀寺緣起 ❶(日)Hō-kwan-ji-en-gi. ❷一巻 ❸存 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法觀梵志經 ❶(日)Hō-kwan-bon-shi-kyō. (支)Fa-kuan-fan-chih-ching. ❷一巻 ❹失譯 ❺義足經下巻の抄出。 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

法華阿字釋 ❶(日) Hok-ke-a-ji-shaku. 阿字祕釋、阿字釋 ❷一巻 ❸存、日本大藏經第四一天台宗密教章疏第一、天台小部集釋第七、第一八、大日本佛教全書第二四天台小部集釋之內、同二八智證大師全集第四 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A. D. 814—891)述 ❺阿字祕釋の下を見よ。 ❼(參考) 本朝台嶋撰述密部書目、山家嶋德撰述篇目集卷上

法華愛染表白 ❶(日) Hok-ke-ai-zen-hyō-byaku. ❷三帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❾(寶龜院)

法華安心得意抄 ❶(日) Hok-ke-an-jin-tokoro-e-shō. ❷一巻 ❸存 ❹日蓮 ❾寫本(立大、D○・三○六)

法華安心糺物語 ❶(日) Hok-ke-an-jin-tadashi-mono-gatari. 繪入法華安心糺物語 ❷二巻 ❸存 ❺文化一三刊 ❾(叡山、壽量)

法華安心錄 ❶(日) Hok-ke-an-jin-roku. 台東異目 ❷一巻 ❸存 ❹日蓮 ❺元祿一三刊 ❾(立大、A○五・七五—八○)(谷大、餘大・二五一四)(京大、日大未・五六二)

法華安心錄羽翼 ❶(日) Hok-ke-an-jin-roku-u-yoku. ❷一巻 ❸存 ❹日蓮 ❺元祿一五刊 ❾(龍大、二六九二・二二)(谷大、餘大・四九一)(立大、A○五、八四—八五)(晉、こ・八・左・二四)

法華安樂行 ❶(日)Hok-ke-an-raku-gyō. (支)Fa-hua-an-lo-hsing. 法華經安樂行義、安樂行 ❷一巻 ❸存、大正四六・六九七No. 1926、諦陽四、卍三三・一、明北1546土、清1475穀、明南1556烟、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋第三、Nj. 1547 ❹陳慧思(延昌四—大建九A. D. 515—577)述 ❺法華經安樂行義の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華異本集 ❶(日) Hok-ke-i-hon-shū. 法華經異本集 ❷一巻 ❸定慶 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法華爲々二章 ❶(日) Hok-ke-i-i-ni-shō. (支)Fa-hua-wei-wei-erh-chang. 法華經爲爲章、爲爲章、妙法蓮花經爲爲二章、法華爲爲章 ❷一巻 ❸存、卍續一・五二・四 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元A. D. 632—682)述 ❺法華經爲爲章の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華意藏教辨 ❶(日) Hok-ke-i-zō-kyō-ben. ❷一巻 ❸存 ❹敬雄(正德三—天明二A. D. 1713—1782) ❾刊本(谷大、餘大・一三二八)

法華意語 ❶(日)Hok-ke-i-go. (支)Fa-hua-i-yü. 法華經宣語 ❷二巻 ❸存、卍續一・五〇・一 ❹明圓澄(萬曆九—天啓六A. D. 1581—1626)述 ❺法華經宣語の下を見よ。 ❼(參考) 山家嶋德撰述篇目集卷下 ❽萬曆四二刊 ❾(叡山、華藏)

法華乙卯記 ❶(日) Hok-ke-itsu-bō-ki. ❷四卷 ❸存 ❹觀成述、月心記 ❾寫本(京大、一・二三ホ・四)

法華印信 ❶(日)Hok-ke-in-jin. ❷一冊 ❸存 ❺足利中期寫 ❾(金剛三昧院)

法華優婆塞疏 ❶(日)Hok-ke-u-ba-i-soku-sho. ❷二十九卷 ❸存 ❹良助(文永五—文保二A. D. 1268—1318)記

法華回向文 ❶(日) Hok-ke-e-kō-mon. ❷一巻 ❸存 ❺明治一三刊 ❾(京大、一・二三ホ・三九)(帝國、一四四・二一二)

法華會義 ❶(日)Hok-ke-e-gi. (支)Fa-hua-hui-i. 法華會義、法華台宗宣義、妙法蓮華經台宗會義 ❷十六卷 ❸存、卍續一・五〇・二—四 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九A. D. 1599—1655)述 ❺法華經會義の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二 ❽元祿元刊 ❾(晉、の・五・中・一)(高大、寄・一・一五)(京專)

法華會義引據 ❶(日)Hok-ke-e-gi-in-kyo. 法華經會義引據 ❷四卷 ❸存 ❹通玄(—享保一六A. D. 1731)述 ❾正德四刊(龍大、二四一三・六五)(晉、の・五・左・三)(高大、寄・一・一五)(京大、一・二三ホ・五)(京專)寫本(寶龜院)

法華會義筌 ❶(日) Hok-ke-e-gi-sen. ❷十五卷 ❸存 ❹慈泉(正保二—寶永四A. D. 1645—1707) ❽寛政五寫 ❾(叡山、壽量)

法華會義錄外 ❶(日)Hok-ke-e-gi-roku-ge. 法華經會義錄外 ❷二卷 ❸存 ❹圓空光謙(承應元—元文四A. D. 1652—1739) ❽享保一七刊 ❾(龍大、二四一三・六六)

法華會願文 ❶(日)Hok-ke-e-gwan-mon 下毛縣法華會願文 ❷一巻 ❹寂澄(紳護登雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❼(參考)

法華會圖 ❶(日)Hok-ke-e-zu. ❷一巻 ❸存 ❾寫本(帝國、特別・ゐ二・二五)

法華會短釋 ❶(日) Hok-ke-e-tan-

shaku. ❷一巻 ❸存、不如歸亭叢書之內 ❹空譽 ❾寫本(谷大、餘大・三七八七)

法華會注記題 ❶(日) Hok-ke-e-chū-ki-dai. ❷一巻 ❸存、不如歸亭叢書之內 ❾寫本(谷大、內餘大、二〇七一)

法華圓鏡 ❶(日)Hok-ke-en-kyō. (支)Fa-hua-yüan-ching. 法華經圓鏡 ❷七卷 ❸缺 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華圓鏡釋文 ❶(日) Hok-ke-en-kyō-shaku-mon. (支)Fa-hua-yüan-ching-shih-wen. ❷十卷或七卷 ❸缺 ❹延秀集解

❺東域傳燈目錄卷上に云く「唐圓鏡七卷」可し對a檢之「天台圓仁巡禮記云、就揚州延光寺傳惠威、覓得法華圓鏡三卷、云々、可し尋し之」云々。

法華圓鏡樞決 ❶(日) Hok-ke-en-kyō-sū-ketsu. (支) Fa-hua-yüan-ching-shu-chieh. ❷一巻 ❸缺 ❹延秀集解 ❼(參考) 入唐新求聖教目錄、東域傳燈目錄卷上

法華音韻 ❶(日)Hok-ke-on-in. ❷四卷 ❹寂澄(紳護登雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❼(參考) 本朝台嶋撰述密部書目、山家嶋德撰述篇目集卷上

法華音義 ❶(日)Hok-ke-on-gi. ❹道綽(治永二—建長四A. D. 1178—1252) ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

法華音義 ❶(日) Hok-ke-on-gi. ❷二卷 ❹信行撰 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2105, 2106

法華音訓 ❶(日) Hok-ke-on-kun. (支)Fa-hua-yin-hsün. 法華經音訓、妙法蓮華經音訓 ❷一巻 ❸存、一切經音義(麗林)第二七(大正五四・四八一No. 2128)之內 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元A. D. 632—682)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、奈良朝現在一切經疏目錄2110

法華苑林章 ❶(日)Hok-ke-on-rin-shō. (支)Fa-hua-yüan-lin-chang. ❷一巻 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2145

法華御義口傳 ❶(日) Hok-ke-on-gi-ku-den. 御義口傳、御義口傳鈔 ❷二巻 ❸存、大正八四・三〇一No. 2269 ❹日興(寛元三—正慶元A. D. 1245—1332)述 ❺御義口傳の下を見よ。 ❾(龍大、研佛)

法華開結開題 ❶(日)Hok-ke-kai-ketsu-kai-dai. ❷四十帖 ❸存 ❹寶德元寫 ❾(寶龜院)

法華開講 ❶(日)Hok-ke-kai-kō. ❷一巻 ❹寂澄(紳護登雲元—弘仁一三A. D. 767—822)述 ❼(參考) 本朝台嶋撰述密部書目、山家嶋德撰述篇目集卷上

法華開講 ❶(日)Hok-ke-kai-kō. 法華經回講 ❷三巻 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六A. D. 794—864)述 ❼(參考) 本朝台嶋撰述密部書目、山家嶋德撰述篇目集卷上

法華開示抄 ❶(日)Hok-ke-kai-ji-shō. 法華經回示抄 ❷二十八卷(開結を加へて三十帖あり) ❸存、大正五六・二五五No. 2192、日本大藏經第一一法華部章疏第一、大日本佛教全書第一九—二〇 ❹貞慶(久壽二—建保元A. D. 1155—1213)述 ❺承元二(A. D. 1208)三月十六日

❻本書は、笠置解脫上人が、慈恩大師の法華經玄讚をば、逐次に論題を設けて、論議風に問答決擇せられしものにして、書物の體裁及び價値は、彼の唯識論に於ける尋思抄、同尋抄などに匹すべきものである。隨つて本書の內容を知るには、先づ慈恩法華玄讚なるものゝ性質を知らねばならぬ。慈恩の法華玄讚は、傳に準ずるに、慈恩がその末年に(何年何月と云ふことは知り難きもはゞその末筆なるべし。)法華を講讚すべく太原に謫錫せられしことがあつた。玄讚はその旅中に脫稿せられしものゝ如くである。

そして其寶塔品を讚せられし時の如きは、筆端瑞々として令利が流れ出たと稱するのである。その如何に純淸なる心地に住し居られしかを知るべきである。然り而して今慈恩が法華經に對する態度は、實に明々了々たるものであつて、一宗の祖師として今更ら乍ら其器度の立派なのに驚く。云く、成る程、慈恩が新譯一家の宗祖としての大著述は、本より彼の成唯識論述記、因明入正理論大疏、及び大乘法苑義林章等に在るのであるが、玆に法華經なる經典は、屈什三藏譯以來、佛陀出世の本懷として佛教理想の最高峰として、經典中の王座たるの觀をなして居つた。然るに其內容は、今慈恩が宣傳師叱し居られる所の唯識教義の思想とは、大にその主張を異にして居る。卽ち慈恩の五姓各別論に對する本經の一佛乘說がこれである。そこで慈恩はその教義の立場上、何れ一度は之を會通釋明せねばならぬ事情にあつた。そして今本書玄讚を見るに、實に自明々露堂々として自宗の教義に依り之を取扱つてある。云く法華の一乘說は、結局、不定姓の一機に約すと云ふのである。乃至一乘說に就ては非常に大辯を費して居られる。誠に慈恩に非ずんば能はざる處にして、一宗祖師たるの地位は、こゝに益々强きを加へし譯ではあるまいか。

本書同示抄は、上陳の如き主張たる慈恩の玄讚を闡明廣布せしものなるが、本書製作の理由も亦た、慈恩が玄讚を製せられし事情に似たるものがある。云く、抑も日本の佛教界は、初め聖德太子の三經の疏以來、法華經は已に早くより尊信せられ、奈良朝鄰武天皇の佛法興隆に依り、本經流布は絕頂に達した。そしてそれが平安朝初期天台宗の勃興と共に、教旨は深く人心の底に浸透した。そこで鎌倉初期の法相再興に際しても、一宗の生命たる唯識因明の研究と共に、法相宗の立場よりして本經を研究せねばならぬことは、宗教再興の當然の要求であつた。この要求に應じて生れ出たものが卽ち本書である。本書、內容として敎むる所左の如し。

序品上十四帖、序品中七帖、序品下十四帖、方便品上十七帖、方便品下十三帖、譬喩品上二十帖、譬喩品下十二帖、信解品十一帖、藥草喩品十五帖、授記品十五帖、化城喩品上十七帖、化城喩品下十一帖、弟子品十六帖、入記品十一帖、法師品十四帖、

寶塔品十八帖、提婆品十五帖、勸持品五帖、安樂行品十一帖、涌出品八帖、壽量品十九帖、分別功德品九帖、隨喜功德品七帖、法師功德品十九帖、不輕品十三帖、神力品十一帖、囑累品九帖、藥王品十八帖、妙音品十二帖、菩門品二十帖、陀羅尼品九帖、普賢王品七帖、勸發品十一帖、計四百三十八帖。別に開結、無量義經六帖。普賢經六帖。

總計四百四十帖の論議を收め、一部三十冊の著書となつて居る。

本書は、第二十八卷の奥批に準ずるに、「永元二年(戊辰)三月十六日沙門良慶」とあるから、解脫上人五十四歳の時の著である。但し良算が「此御抄論議樣者愚僧之所記也答者上人御草也」と追奥をして居られる所から見ると、之を論議風にせられたのは良算師の筆になつたものと見える。更にして云はゞ、問の詞は良算師の筆にして、答の詞は上人の詞と見える。當時上人の學德の非常であつたことは勿論であるが、その門下の諸名匠中この良算は、學者であつたのみでなく、非常なる文才の持ち主で、又大變な能筆でもあつた。又彼の唯識論同學抄の編者にして、同學抄が行文流暢、少しも難澁の跡を留めて居らないのは、全くこの良算師の筆になつたからである。又良算は彼の上人の最大秘書とせられし因明々本抄の右筆にして、當時法相宗が因內二明に瓦り大に興隆することの出來たのは、全くこの良算の力が非常に多かつたことを知らねばならぬ。良算自筆の四相違論草(二十八卷あり)が、今に一箱に納められて興福寺に殘つて居る。誠に良算を偲ぶべき唯一の遺寶である。

⑭元春日新造屋本(藥師寺)同新寫本(興福寺)　(佐伯良謙)

法華開題 ❶(日)Hoh-ke-kai-dai. 法華經開題 ❷一卷 ❸存、傳敎大師全集第三(舊) ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)述 ❺法華經開題の下を見よ。 ❻(參考) 本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集卷上

法華開題 ❶(日)Hoh-ke-kai-dai. 無量義經略釋 ❷一卷 ❸存、大正五六・一八三 No. 2190、異本六 ❹空海?(寶龜五—承和二 A. D. 774—835) ❺無量義經を敎興之由、敎之勝劣、經譯差別、經之宗旨、釋題目、入文判釋の六門に分ちて釋した短篇。 ⑭平治元寫(正智院)昭和四寫(高大、一・三二)　(小田慈舟)

法華開題 ❶(日)Hoh-ke-kai-dai. 妙法蓮華經梵釋、法華經開題、妙法蓮華經開題 ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第二七智證大師全集第三 ❹圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891)述 ❺妙法蓮華經梵釋の下を見よ。 ❻(參考) 諸宗章疏錄第二、本朝台組撰述密部書目

法華開題 ❶(日) Hoh-ke-kai-dai. 法華經開題、妙法蓮華經開題 ❷一卷 ❸存 ❹寶燈光謙(承應元—元文四 A. D. 1652—1739)述 ⑭寶永七寫(京大、藏・七・六)寫本(高大、寄・一・一五)

法華開題聞書 ❶(日)Hoh-ke-kai-dai-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹寶盛 ❺寶德元寫 ⑭(正大、一一四二・三)

法華開題愚艸 ❶(日)Hoh-ke-kai-dai-gu-sō. 法華經開題愚艸 ❷一卷 ❸存 ❹組瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1225—1304)述 ❻(參考) 諸宗章疏錄第三 ❺文明一四寫 ⑭(正大、一四三一・二七〇)

法華開發 ❶(日)Hoh-ke-kai-hotsu. ❷三卷 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)述 ❻(參考) 本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集卷上

法華覺悟私記 ❶(日)Hoh-ke-kaku-go-shi-ki. 法界覺悟私記 ❷二卷 ❻(參考) 本朝台組撰述密部書目

法華肝心 ❶(日) Hoh-ke-kan-jin. 妙法蓮花經肝心、法華經肝心、法華肝心義 ❷一卷 ❸缺 ❹善珠(神龜元—延曆一六 A. D. 724—797)述 ⑤法華開示抄(大正五六・二五五 No. 2195)中に「法華肝心義云」として援引。 ❻(參考) 諸宗章疏錄第二

法華肝心 ❶(日) Hoh-ke-kan-jin. 法華經肝心、妙法蓮華經肝心 ❷三卷 ❸缺 ❹德一(—天長元 A. D. 824—)述 ❻(參考) 諸宗章疏錄第二

法華肝心要文 ❶(日) Hoh-ke-kan-jin-yō-mon. ❷六冊 ❸存 ❺元祿一三刊 ⑭(立大、A〇三・一一七)

法華肝要略註秀句集 ❶(日)Hoh-ke-kana-yō-ryaku-chū-shū-ka-shū. 法華略秀句、法華經略秀句、略秀句一卷/可遵錄、龍象錄) ❷三卷 ❸存、傳敎大師全集第三(舊)第五(新) ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ⑤可遵錄、龍象錄には何れも僞疑部に錄す。恐者秀句十勝鈔等の日蓮敎學の影響を受け且つ山家の法華秀句より更に强く法華最勝を主張せんとしたる學徒の僞作なるべし。上中下三卷に分れる。彌前法華十二部經、今圓背圓、彌前顯法華顯、法華大日、約敎約部、當分跨節、八敎攝不、彌前成佛、三時法華、法華本佛、大日迹佛、本迹四依、彌陀四重、等の其他に付問答體を以て記述す。 ⑭天正九寫(日光天海藏)寫文九刊(谷大、餘大・三二七四)(ヤ・八・左・一一)天和六刊(龍大、二六五一・二一二)寫本(谷大、餘大・一三一九)　(鹽入亮忠)

法華記 ❶(日)Hoh-ke-ki. (支) Fa-hua-chi. 法華文句記、法華疏記 ❷十卷或二十卷三十卷 ❸存、大正三四・一五一 No. 1719、卍三三・一—四 ❹唐湛然(景雲二—建中三 A. D. 711—78)述 ⑤法華文句記の下を見よ。 ❻(參考) 御請來目錄

法華記 ❶(日)Hoh-ke-ki. ❷一卷 ❸存 ❹鳥慶(貞元二—永承四 A. D. 977—1049) ⑭寫本(眞如藏)

法華氣質 ❶(日)Hoh-ke-ki-shitsu. ❷一卷 ❸存 ❹戸田聽齋 ❺大正八刊 ⑭京都村上書店

法華輝臨遊風談 ❶(日) Hoh-ke-ki-rin-yū-fū-dan. ❷七卷 ❸存、大日本佛敎全書第一四 ❹良助親王(文永五—文保二 A. D. 1268—1318) ⑤法華經各品の要

所について篇目を掲げて、說明した書。

法華義苑 ❶(日) Hoh-ke-gi-on. (支)Fa-hua-i-yüan. ❷六卷 ❹理師述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華義記 ❶(日)Hoh-ke-gi-ki. (支) Fa-hua-i-chi. 法華經義記、法華光宅疏、妙法蓮華經義記、法華義疏 ❷八卷 ❸存、大正三三・五七二 No. 1715、卍續一・四二・二 ❹梁法雲(泰始三—大通三 A. D. 467—529)述 ⑤法華經義記の下を見よ。 ❽元祿一〇刊 ⑭(正大、一一四二・一〇四)(哲、の・四・中・一四)×高大、寄・一・二三)

法華義記卷第三 ❶(日)Hoh-ke-gi-ki-kwan-dai-san. (支)Fa-hua-i-chi-chüan-i-san. ❷一卷 ❸存、大正八五・一七〇 No. 2748 ⑭燉煌出土石室本。スタイン氏の蒐集に係る。本義記に寫本兩軸あり。一本(S. 6723)は首部破爛、藥草喩品第五(前部缺)、受記品・化城喩品・第四五百弟子・授學無學人記品・法師品・見寶塔品より持品第十三に至る八品の疏釋殘卷にして卷末後記には、比丘惠業許。正始五年五月十日釋道周所集在中京虞德寺寫訖とあり、他の一本(S. 55)は同じく首部破損、化城喩品第七(首部缺)より受記品以下前記の一本に概ね同じく、持品の後に安樂行品第十四・從地踊出品第十五に至る八品の疏釋殘卷にして、奥書に、法華義記第三、比丘法順寫記也とあり。撰者は道周にして筆寫年代は北魏の正始五年(A. D. 508)なるを以て、本疏は北魏の法華疏として珍重さるべきもの、現存の道生の法華經疏二卷並に法雲の法華義記八卷とその內容を比較照應するに、興味深きものあるべし。詳細は、鳴沙餘韻解說第一部、九四—九七頁を參照すべし。 ⑭燉煌出土古寫本(大英博物館 S. 6723; S. 55)　(矢吹慶輝—成田昌信)

法華義決 ❶(日) Hoh-ke-gi-ketsu. (支)Fa-hua-i-chüeh. 法華玄贊義決、法華經玄贊義決 ❷一卷 ❸存、大正三四・八五四 No. 1724、卍續一・五三・一 ❹唐慧沼(—開元二 A. D. 714)述 ⑤法華玄贊義決の下を見よ。 ❻(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一 ⑭寫本(觀山、天海)

法華義決解節記 ❶(日) Hoh-ke-gi-ketsu-ge-se-ki-ki. ❷四卷 ❸缺 ❹護命(天平勝寶二—永和元 A. D. 750—924)述 ⑤法華問示抄(大正五六・二五五 No. 2195)中に援引。 ❻(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華義纘 ❶(日) Hoh-ke-gi-san. (支)Fa-hua-i-tsan. 法華經疏義纘、法華疏義纘、法華經義纘、天台法華疏義讚、法華文句東春、法華文句記 ❷六卷 ❸存、卍續一・四五・三 ❹唐代智度述 ⑤法華經疏義纘の下を見よ。

法華義疏 ❶(日) Hoh-ke-gi-sho. (支)Fa-hua-i-su. 法華經義記、法華光宅疏、法華義疏、法華經疏、法華義記、妙法蓮華經義記 ❷八卷 ❸存、大正三三・五七二 No. 1715、卍續一・四二・二 ❹梁法雲(泰始三—大通三 A. D. 467—529)述 ⑤法華經義記の下を見よ。

法華義疏 ❶(日)Hoh-ke-gi-sho. (支)Fa-hua-i-su. 法華經義疏、妙法蓮華經義疏 ❷十二卷 ❸存、大正三四・四五一 No. 1721、卍續一・四二・四—五 ❹隋吉藏(太業三—武德六 A. D. 585—623)述 ⑤本書は嘉祥大師吉藏が、三論宗の立場に立ちて法華經を注釋したものである。全十二卷の中、第一・第二に序品を釋し、第三・第四に方便品、第五・第六に譬喩品、第七に信解品、第八に藥草喩品・授記品・化城喩品、第九に五百弟子授記品・授學無學人記品・法師品・見寶塔品・提婆達多品・持品、第十に安樂行品・從地涌出品・壽量品・分別功德品、第十一に隨喜功德品・法師功德品・常不輕菩薩品・如來神力品・囑累品・藥王菩薩本事品、第十二に妙音菩薩品・觀世音菩薩普門品・陀羅尼品・妙莊嚴王本事品・普賢菩薩勸發品の二十八品の一々につき詳釋してゐるが、矢張り序・正・流通の三分科をとり、序品を序分とし、方便品より分別功德品の格量偈迄を正宗分とし、且從を流通分とする旨を記してゐる。然して本書は現型の法華經二十八品を用ひてはゐるが、その玄談の品次差別の第四に論品有無の一科を設け「羅什無經但有二十七品、後更有提婆達多品者、釋道慧宋齊錄云、上定林寺釋法猷於于闐國得此一品、瓦官寺沙門釋法意、以齊永明八年十二月譯出爲提婆達多品經、未安法華內、梁末有西天竺優禪尼國人名婆羅末陀此云眞諦、又翻出此品、始安見寶塔品後也」として、羅什譯には元は提婆達多品のなかりしことを暗示し、且つ又菩門品の釋の下に於ては、法雲の義記、智顗の文句等と同樣その重頒に就ては何等觸るゝ所なきは、涌品法華の序に見える「而護所問者菩門品偈也、什所問者藥草喩品之半、當樣那及法師等二品之初、提婆達多品、菩門品偈也」との文を裏書きするかに思はれる。

本書の援引する經律論疏は甚だ多數を極め、仁王經・勝鬘經・十二遊經・十地經・溫室經・大品・金剛華經・七卷金光明經(眞諦譯)・華嚴經・涅槃經・無量壽經・瑞應經・淨名經・觀音三昧經・觀音授記經・本業瓔珞經・法華三昧經・長阿含經・大集經・像法決疑經・正法念經・仁王經・勝鬘經・寶星經・伽耶山頂經・骨蘇律・彌沙塞律・中論・十二門論・智度論・正觀論・分別功德論・法華論・般若論・提婆沙論・成實論・大觀燈論偈(?)・龍樹十地(?)・提婆沙・薩婆多論・摩訶大乘論・金剛般若論・佛性論・俱舍論・雜心論・十地論・衆事分阿毘曇・地持論・十八部論疏・法華經・注無量義經・華嚴涅槃無名論・名僧傳・龍樹傳・提婆傳等、更に人師の說としては、龍樹・天親を始め、竺道生・道安・祖法師・羅什・龍光法師・印法師・河西道朗・道融・琉公・曇詵・基法師・肇公・眞諦・光宅・顯禪師・梁武の諸師、さては成論師・成實師・舊經師・有論師の說等を自由に引用して論述するあたり全く他の追隨を許さざるものあり、法華研究の文獻としては不可缺のものといはねばならぬ。

尙本書製作の年代に就ては確證は舉げ得ないが、吉藏の著述としては法華統略等と

共に比較的後期に屬するものにして、天台との交涉の始まりし後の書なるべく、本書中に一個所領師の說として援引の所あるも、然しそれは單に一說として援引してゐるのみにして、佛祖統紀に「因求法華玄義一發、一覽既感悟、乃焚棄其疏、深悔前作」と云ふ前作を悔ゆるなどの事も認められず、且又天台の影響をうけて自說を改變したなどと思はれる點もない樣である。

❼(參考) 諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄21101 ❽永仁三刊(叡山、天海)元祿一二刊(叡山、別當)×京大、藏・七ホ・七)(高大、寄・一・一五)(正大、一一四二・一〇三)

(辻森要修)

法華義疏 ❶(日)Hok-ke-gi-sho. 法華經義疏、法華經疏、法華疏 ❷四卷 ❸存、大正五六・六四 No.1721、日本大藏經第一一、法華部章疏第一、大日本佛教全書第一四、世界聖典全集第四、岩波文庫522—523 ❹聖德太子(敏達帝三—推古帝三)(○ A.D. 574—623)御製

❺梁の光宅寺法雲(A.D. 467—529)の法華義記八卷を「本義」「本釋」「本疏」等と呼稱して主として之に依憑し、並に其の他當時傳來の註疏二三を參考として、聖德太子親ら鳩摩羅什譯(A.D. 406)妙法蓮華經二十七品本を註釋せられたもの。現に帝室の御物として存する四卷は、正しく聖德太子自筆の御草本と考へられるもので、その玻璃版は大正十五年十二月以降昭和二年十一月に聖德太子奉讚會より印行せられたため、今は何人によつても自由に之を拜見することが出來る。

その中に「但爲心難了故、故不盡記、即所了問了所了明」とも、「而不能受、故隨文直唱而已也、即所了問了所了不奉」とも、乃至「而私意了不及、故不記也、即所了問了所了不明」等と述べられて法雲の義記の細釋、妙釋等を用ひられない場合が尠くないと共に、「而今不了須」とか「大異」とか、又は「似少不了當」「少異」等の語を以て問はゆる本義說を批評し、而して直ちに「私懷者」「私意」「今」等の語を冠して當今と太子御自說の發表せられてゐる箇處が隨分多い。而も斯かる御自說の發表ある箇處に於て、特に御草本法華義疏に於ては刀削、脇書、貼紙、二行細書追加等の跡が著しく、即ち御自身の文章に對する御修正が殊に目立つて行はれてゐるのである。義疏四卷に亙つて「一大乘教」「一大乘機」といつた熟字が三箇處共に必ず「一」が右脇に追加されて居る後の修正によつて出來上つた熟字である。而してそれは「一大理」「一大旱」「一大車」等の語と相關聯した太子の法華義疏に於ける獨自の用語である。確に日本佛教の基本を示された熟字と解してもよいと思ふ。殊に「安樂行品」の「常好坐禪、在於閑處、修攝其心」の長行及び偈頌釋に於て、「常に坐することを好む少乘の禪師に親近せざれ」「然れば則ち何の暇あつてか此の經を世間に弘通することを得ん、故に知んぬ、常好坐禪は發應に親近せざるの境に入るべきことを」等と述べられて、堂々と御獨自の立場に於て經文を解釋され、經文の當相や法雲其の他支那歷代學匠の古釋を容易に振り捨てゝ佛教の眞精神を取り入れられたる等は、實に日本佛教の太祖として仰ぎ奉る可き所以であり、我等に示し給ふた萬代の龜鑑である。

日本書紀編纂以後百五十年內外の撰とみらるゝ上宮聖德太子傳補闕記には、太子四十一歲正月八日より四十二歲四月十五日迄の御撰述と記してをり、彌永聖德太子傳曆や扶桑略記、元亨釋書、一代要記、其の他聖德太子傳の多くは略んど皆此の說を採用して居るが、それには確たる根據はない。然し三經義疏の中では、本書が最後の御撰述であつたと考へられ、而してその年代は太子の晩年と考へられる。詳しくは予が聖德太子御製法華義疏の研究(東洋文庫論叢第十八、昭和八年刊)を參照せられよ。又原典としては岩波文庫本の法華義疏上下二冊(昭和六年、昭和八年刊)が便利と思ふ。

❼(注釋) 法華經上宮王義疏抄(殘缺一卷)宗性、法華疏慧光記六十卷(殘缺十卷)凝然、花山信勝著法華義疏の研究二冊 ❽自筆本(帝室御物)天和二刊(京大、藏・七ホ・八)×叡山、淨土)

(花山信勝)

法華義疏記 ❶(日)Hok-ke-gi-sho-ki. (支)Fa-hua-i-ta-chi. ❷二十卷 ❸缺 ❹道暹(一作遍)述 ❺東城傳燈目錄卷上に云く「在手手院經藏」云々。 ❻(參考)諸宗章疏錄第二

法華義疏の研究 ❶(日) Hok-ke-gi-sho-no-ken-kyū. 聖德太子御製法華義疏の研究 ❷二冊 ❸存 ❹花山信勝著昭和八刊 ❺東京東洋文庫

法華義疏略解 ❶(日) Hok-ke-gi-sho-ryaku-kai. ❷一卷 ❸存、明治和尚全集第三 ❹上田照遍(文政一一—明治四〇 A.D. 1827—1907)述

法華儀軌 ❶(日)Hok-ke-gi-ki. (支)Fa-hua-i-kuei. 成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌、法華經觀智儀軌、成就法華儀軌 ❷一卷 ❸存、大正一九・五九四 No.1000、諦閑七、卍二六・一〇、明北1351杜、清1351杜、麗1352阜、明南1154學、三十帖策子第一八、N. 1326 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A.D. 705—774)譯 ❺成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌の下を見よ。 ❻平安朝末期寫 ❼(寶善提院)

法華儀軌 ❶(日) Hok-ke-gi-ki. ❷光定(寶龜一〇—天安二 A.D. 779—858)述 ❸(參考) 本朝台祖撰述著都書目、山家祖德撰述篇目集卷下

法華教主 ❶(日) Hok-ke-kyō-shu. ❷一卷 ❸存、私淑篇第四 ❹無準 ❺寫本(谷大、餘大・一九四七)(正大、一三六・四三)

法華教主私記 ❶(日)Hok-ke-kyō-shu-shi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹日蓮述 ❺元祿七刊 ❻(貞、や・八・中・一)×立大、A一二・四六九)(龍大、研佛)(谷大、餘大・五一〇)

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. (支) Fa-hua-ching. 妙法蓮華經、新法華經 ❷七卷 ❸存、大正九・一 No.262、鎌盛一、卍九・二、北115風、南115風、元114風、明北103章、清103章、麗117鳴、天114風、指105鳴、法112鳴、至105及、明南112章、N. 134 ❹鳩摩羅什譯 ❺姚秦弘始八(A.D. 406) ❻妙法蓮華經の下を見よ。 ❼(參考) 浮土仮憑經論類疏目錄 ❽春日版(寶壽院)平安朝初期及中期刊、足利中期寫及刊文化一〇寫(高大、寄・一・二三)嘉靖及萬曆年間刊(寶壽院)元祿五刊(龍大、二一三・七)寛正一三刊(駒大)

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. 漢譯斷片 法華經 ❸存、二樂叢書第二—四 ❹橘瑞超編

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. (支) Fa-hua-ching. ❷一卷 ❸疑僞經。 ❼(參考) 出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. 梵漢對照新譯法華經 ❷一卷 ❸存 ❹南條文雄(嘉永二—昭和二 A.D. 1829—1927)泉芳璟共譯 ❺大正二刊 ❻谷大、餘譯・三四三)(立大、B一一・四・一一)

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. 梵藏傳譯法華經 ❷三冊 ❸存、世界文庫六—八 ❹河口慧海譯 ❺大正一三刊 ❻東京世界文庫刊行會

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. 和譯法華經 ❸存、聖典十種之內 ❹秋山怡應譯 ❺明治四四刊 ❻(駒大)

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. 梵文和譯法華經 ❷一冊 ❸存 ❹岡敎邃譯 ❺大正一二刊 ❻東京大阪屋號書店

法華經 ❶(日)Ho-ke-kyō. 和譯法華經 ❷一卷 ❸存 ❹山川智應譯 ❺明治四五刊 ❻東京新潮社

法華經安樂行義 ❶(日)Ho-ke-kyō-an-raku-gyō-gi. (支) Fa-hua-ching-an-lo-hsing-i. 安樂行義、法華安樂行 ❷一卷 ❸存、大正四六・六九七 No.1927、鎌陽四、卍三三・一、明北1562土、清1475敎、明南1563炽、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋第三、N. 1247 ❹陳慧思(天監一四—太建九 A.D. 515—577)述

❺法華經の實踐殊に安樂行に就て叙べたもの、短篇であるが言々句々著者の體驗より迸り出で、斯種の疏書中稀に見る宗教的香りの高い好著である。尤も著者の他の著作に於ても同じことが言はるゝ。書中、法華經の實踐即ち法華三昧に二種ありて、一は無相行、二は有相行となす。有相行は菩賢勸發品に說く觀普賢行で散心にして法華經讀誦を精進し此の行成就する時、六牙象に乘ずる普賢菩薩の像相を見て、心眼を開く。これに對して安樂行品に說くは無相行で、深妙禪定を修して、一切諸法中心相寂滅畢竟不生を體得する三昧である。此書には主としてこの無相安樂行を安樂行品の經文によりつゝ解明し、尤も經文の解釋は僅かに最初の數行のみで終つて居る。恐らくは後を閱くものであらう)父母所生の肉身に於て六根淸淨を得、惡障を除き法身顯現するを得る超過大乘疾成佛道であり、これを說けるものが法華經である、と說くものが法華經である。書中惡毒行を說く下、惡毒に三種あるとし、禦ひ來る迫害に處するに空觀を以てし、害者被害者共に空なりと達觀する消極的惡毒と、害者を愛護して仇報ゆるに恩を以つてする積極的惡毒と、更に進んでは毒を制するには毒を以てする逆手を用ひて、害者を調伏し、懺悔せしむる方便大惡毒とを說き、此の大惡毒を行ぜずんば大菩薩に非ずと說いて居る。一段の如き、烈火の中に立てる不動明王を偲ばせるものがある。これぞ般若空の實踐に終始した著者禪師が味到し得たる佛教の奧殿である。そして禪師は數次の迫害と戰ひ、はては禪師の惡慄なき言行に傷けられた時の佛教學徒は禪師を毒害までしやうと試みた。禪師は、これらの似而非學徒を衆惡論師と呼んで、これを哲代して、正法に歸せしめた禪師の生活體驗が生み出した大文字なることを看過してはならぬ。尙ほ此書の高唱せる實踐佛教の思潮が直接には止觀爲宗の天台教學の誕生となり、間接には禪と念佛とを興隆せしめ、支那佛教々學史上に大きな波紋を描いたといふことも注意すべきである。

❻延寶五刊(谷大、餘大・二三四×正大、一三六・八)光緒三刊(京大、藏・七ホ・一)

(稻葉圓成)

法華經安樂行品略解 ❶(日)Ho-ke-kyō-an-raku-gyō-hon-ryaku-kai. 妙法蓮華經安樂行品略解 ❷一卷 ❸存 ❹小林日章(—明治三八 A.D. 1905)述 ❺明治四四刊 ❻(谷大、餘大・一五七二)×龍大、二四一三・六三)

法華經異本集 ❶(日) Ho-ke-kyō-i-hon-shū. 法華異本集 ❷一卷 ❸定慶 ❼(參考) 東城傳燈目錄卷上

法華經爲爲章 ❶(日)Ho-ke-kyō-i-i-shō. (支)Fa-hua-ching-wei-wei-chang. 法華爲爲二章、法華爲爲章、爲爲章、法華經爲爲二章、妙法蓮花經爲爲二章 ❷一卷 ❸存、卍續一・五二・四 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元 A.D. 632—682)述

❺本書は妙法蓮華經八卷二十八品中の爲字を出して、數とその四聲と調及び聲調の次第を辨じ、又各品に就きて爲字の數を擧げ、最後に作者の意を述べたるものである。內容は第一に法華一部八卷中爲の字數は六百十八字ありて、其中平聲は二百九十一字、去聲は三百二十七字とし、第二にその平聲の爲字は榮危反にて、其義は由・求・當・得・定・被・作・是・名の九訓ありとし、去聲の爲字は榮僞反にて、其義は以・與・助の三訓ありとし、第三に聲調の次第を明し、第四に各品爲字の數をあげて四聲を定め

品	數	平聲	去聲
序品	二三	九	一四
方便品	四〇	一一	三〇
譬喻品	八一	四六	三五
信解品	二四	一四	一〇
藥草喻品	一五	五	一〇
化城喻品	五二	二二	三一
授記品	一一	六	五
五百弟子品	二五	一八	七
人記品	一三	一一	二
法師品	二六	一〇	一六

數字略號 ❶題名(書名) ❷卷數 ❸缺 ❹著 ❺寫 ❻刊年代 ❼內容說解 ❽本書(註釋書參考書) ❾月年の刊寫 ❿所藏者(著庫書) ⓫目錄 ⓬所行名

寶塔品　四五　三〇　一六
提婆品　一八　三　一五
勸持品　一一　八　三
安樂行品　四四　一七　二七
涌出品　一三　四　九
壽量品　一八　五　一三
分別功德品　一九　一三　六
隨喜功德品　九　四　五
法師功德品　九　〇　九
不輕品　一一　一　十
神力品　五　一　四
囑累品　三　二　二
藥王品　二三　一　二
妙音品　二一　九　一二
觀世音品　二七　四　二三
陀羅尼品　六　四　二
藥王品　五　一　四
普賢品　一三　一〇　三
六一八　二九一　三二七

頌三(A. D. 1630)重訂

⑥本書は憨山・圓澄・圓瑞・圓瑞・圓澄・圓瑞・圓澄・圓瑞・圓澄

代の人ならん）の講録に係る『妙法蓮華経演義』によつてその科文を作つたものである。但し『演義』は巻初に唐・終南山道宣の述した『妙法蓮華経弘傳序』を出す。然るに本書はこの『弘傳序』の科文を最後に附してゐる。故に本書は全く『演義』の分科の文を要約してこれを図に標科したものである。

❹写本（京大、蔵・七ホ・二）（田島徳音）

法華経音義 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-gi. ❷二巻 ❸平備撰 ❼(参考) 東域傳燈目録巻上

法華経音義 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-gi. ❷一巻 ❸存 ❹快倫(—慶長頃A.D. 1596—1614—) ❹寛永一三刊(高大、一・二三)慶安四刊(谷大、長保・一二一)寛文九刊(正大、一一四二・一三〇)(文大、A〇三・一二)(叡山文庫)

法華経音義 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-gi. 法華経音訓 ❷一冊 ❸存 ❹心空撰 ❺慶安二刊 ❹(正大、一一四二・一二九)(高大、寄・一・二三)(龍大、二四一三・六七)

法華経音義 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-gi. ❷二巻 ❸存 ❹周壽 ❺貞治四写 ❹(正教蔵)

法華経音義五音起清濁 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-gi-gei-daku. ❷一巻 ❸存 ❹古写本(帝国、一〇一・六一)

法華経音訓 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-kun.(支)Fa-hua-ching-yin-hsün. ❸欠 ❹隋曇捷述 ❺松室中算の妙法蓮華経釋文(大正五六・一四四No.2139)中に「曇捷云」として援引のものこれか。倘法華字釋なる書名あり、本書と同じものか。 ❼(参考) 奈良朝現在一切経疏目録No.2364, 2365)

法華経音訓 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-kun.(支)Fa-hua-ching-yin-hsün. 法華音訓、妙法蓮華経音訓 ❷一巻 ❸存、一切経音義(慧琳)第二七(大正五四・四八一No.2128)之内 ❹唐寫基(貞観六—永淳元A.D. 629—682)述 ❼(参考) 東域傳燈目録巻上

法華経音訓 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-kun. 法華経文字摩頂観音訓篇集 ❷三巻 ❸存 ❹快倫(—慶長頃 A.D. 1596—1614—)述 ❺慶安四刊 ❹(京大、一・二六ホ・二二一)

法華経音訓 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-kun. 法華経音義 ❷一冊 ❸存 ❹心空撰 ❹足利時代刊(貴重図書刊行会編、岡田希雄解説 ❹昭和六刊 ❹京都便利堂

法華経音註 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-chū. ❷一巻 ❸存 ❹写本(帝国、一九六・五三)

法華経音辯訛 ❶(B) Ho-ke-kyō-on-ben-kwa. ❷一巻 ❸存 ❹愛順(—文政頃? A.D.1818—1829—) ❺天保一五刊 ❹(谷大、餘大・二〇七四)(叡山、密厳)

法華経嘉祥義疏勘文 ❶(B) Ho-ke-kyō-Ka-tō-gi-sho-kan-mon. ❷一巻 ❸存 ❹妙瑞(元禄九—明和元A.D. 1696—1764)述 ❺寶暦五写 ❹(谷大、長保・一七四)

法華経假名新注鈔 ❶(B) Ho-ke-kyō-Ka-na-shin-chū-shō. 科註鈔入法華経假名新註抄 ❷三十巻 ❸存 ❹山本春正記 ❹刊本(帝国、一〇九・二一一)

法華経歌 ❶(B) Ho-ke-kyō-ka. ❷一帖 ❸存 ❺徳川時代写 ❹(貴龍院)

法華経開講 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-kō. 法華開講 ❷三巻 ❹圓仁(延暦一三—貞観六A.D. 794—864)述 ❼(参考) 東域傳燈目録巻上

法華経開示抄 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-ji-shō. 法華開示抄 ❷二十八巻 ❸存、大正五六・二五五No.2195, 日本大蔵経第一一法華部章疏第一、大日本佛教全書第一九—二〇 ❹貞慶(久寿二—健保元 A.D. 1155—1213) ❺法華開示抄の下を見よ。 ❹康永貞和年間写(谷大、餘甲・三二)承應年間巳後写(谷大、餘丙・一七)写本(谷大、餘丙・一九)(龍大、二四一三・六八)

法華経開題 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai. 法華開題 ❷一巻 ❸存、日本大蔵経第一二法華部章疏第二、傳教大師全集(新)第三 ❹傳、寶證(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822)撰 ❺天台大師の法華文句に依り、羅什譯法華経の大意、題號釋、及び序正流通三段分判を略説せるものなり。筆致の巧妙、六眼別渓のそれの如し。本書もと傳教大師撰「新撰開題集下巻」中の一課を別出せるものにして、「法華二十八品由来各品開題」に冠せらるべきものなるべし。但し末尾の註に最澄之作とあり、最澄は慈覺之弟にして遍昭僧正受法の弟子なり。研究を要す。 ❼(参考) 山家目録撰述篇目集巻上（雲入亮忠）

法華経開題 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai. ❷一巻 ❸存、大正五六・一七二No.2190, 日本大蔵経第一二法華部章疏第二、弘法大師全集第四 ❹空海(貴龍五—承和二A.D. 774—835)述 ❺密教眼を以て法華経の大綱を述べ、その題目を釋した書。類書が数本ある。今本は巻首に同じ示鼓大乗経・略有四意・等と説き起して、大三法輪の四種曼荼羅について経の大意を述べ、次題目について梵名を挙げ、一々の字について深秘釋を述べてゐる。 ❼(参考) 諸宗章疏録第三 ❹久安六写及長寛三写(高山寺)永正八刊(正智院)（小田慈舟）

法華経開題 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai. ❷一巻 ❸存、大正五六・一七五No.2196, 鼻本一、弘法大師全集第四 ❹空海(貴龍五—承和二A.D. 774—835)述 ❺密教眼を以て法華経題を釋した書。巻首に夫重圓性海超二風水之談・等と説き起し、或は此経は自性の秘名を表し、浮心の密號を示す、人を自性自在と名づけ、法をば妙蓮華三昧と名づくと説き、人法の二題につきて一経の大意を述べ、次に梵題を釋し一々の梵字について深秘釋を施してゐる。

❺平安朝時代写 ❹(正智院)（小田慈舟）

法華経開題 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai. ❷一巻 ❸存、大正五六・一七九No. 2193異本三、弘法大師全集第四 ❹空海(貴龍五—承和二A.D. 774—835)述 ❺天長六(A.D. 829)

❻天長六年七月平城京西寺に於ける三鳥貫人助成が亡女息の一周忌法會の會場にて講じた法華経の釋。その内容は彼の法華経釋と大同小異である。

❹寛治五寫(仁和寺)平安朝時代写及長寛三寫(高山寺)平安朝時代写及安元二年写（正智院）（小田慈舟）

法華経開題 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai. 妙法蓮華経梵釋、法華開題、妙法蓮華経開題 ❷一巻 ❸存、大日本佛教全書第二七智證大師全集第三 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891)述 ❺妙法蓮華経梵釋の下を見よ。 ❼(参考) 密乗撰述目録

法華経開題 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai. 法華開題、妙法蓮華経開題 ❷一巻 ❸存 ❹源空(承應元—元文四 A.D. 1652—1739)述 ❺享保二刊 ❹(京大、日大来・四一)(谷大、餘大・三三二六)(龍大、二四一三・六九、研佛)(文大、A一二・五〇九)

法華経開題聞書 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai-kiki-gaki. ❷一帖 ❸存 ❺寶德元写 ❹(貴龍院)

法華経開題愚艸 ❶(B) Ho-ke-kyō-kai-dai-gu-sō. 法華開題愚艸 ❷一帖 ❸存 ❹顯瑜(嘉祿二—宮元二 A.D. 1226—1304)草 ❺正安二(A.D. 1300)

❻傳法會精讀に因みて弘法大師述法華経開題につき要義を問答釋述したるもの。雙如一心非言心境事等三十二條あり。

❺寶德二寫 ❹(貴龍院)

法華経概説 ❶(B) Ho-ke-kyō-gai-setsu. ❷一冊 ❸存 ❹大野法道著 ❺昭和五刊

法華経肝心 ❶(B) Ho-ke-kyō-kan-jin. 法華肝心、法華肝心義、妙法蓮華経肝心 ❷一巻 ❸缺 ❹善珠(神龜元—延暦一六A.D. 724—797)述 ❺法華肝心の下を見よ。 ❼(参考) 東域傳燈目録巻上

法華経肝心 ❶(B) Ho-ke-kyō-kan-jin. 法華肝心、妙法蓮華経肝心 ❷三巻 ❸缺 ❹德一(—天長元A.D. 824—)述

法華経記 ❶(B) Ho-ke-kyō-ki. ❷二巻 ❸存 ❹源城述 ❺安政五(A.D. 1858)夏 ❹写本(谷大、餘大・三二六)

法華経義記 ❶(B) Ho-ke-kyō-gi-ki. (支)Fa-hua-ching-i-chi. 法華義記、法華光宅疏、妙法蓮華経義記、妙法蓮華経義疏、法華義疏、法華疏、法華経疏、法華経義疏 ❷八巻 ❸存、大正三三・五七二No. 1715、卍續一・四二・二 ❹梁法雲 泰始三—大通三 A.D. 467—529)述

❻本書は法華経義疏等とも稱せられ、梁の法雲が法華経を釋したるものにして、現存のものでは竺道生の疏につぐ古い注釋書である。全八巻中、第一、第二に序品を釋し、第二、第三に方便品を、第四、第五に譬喩品、第五、第六に信解品、第六に藥草喩品、第七に授記品・化城喩品・五百弟子授記品・授學無學人記品・法師品・見寶塔品・持品・安樂行品、第八に安樂行品餘・從地涌出品以下普賢勸發品を釋してゐるが、矢張り序・正・流通の三分法を用ひ、第一序品を序分とし、第二方便品以下分別功德品中彌勒說偈頌迄を正宗分、これを更に二分して方便品より安樂行品迄を正開三顯一以明因義とし、從地涌出品より分別功德品の彌勒說偈頌迄を開近顯遠以明果義とす。彌勒說偈後長行より以下を流通分とし、これをも更に化他流通、自行流通と二分してゐる。

本書に於て尤も注意さるべき事柄の一は、八巻中に提婆達多品の釋なき事である。羅什譯の法華経は天台が文句に「當時二十八品」といひしを以て二十八品説の根據とされてゐるが、法華の疏として尤も古き竺道生の疏にしても本書にしても、提婆品の注釋のないといふ事は提婆品挿入説に可なり重要なる根據を與へるものにして、嘉祥大師吉藏が二十八品本を以て法華義疏として法華を釋し乍ら、然も尚「羅什刪經但有二十七品」とて二十七品説を暗示してゐるのと共に注目さるべきである。且つ本書門品の重頌に就ても何等觸るゝ所なきは天台の文句、嘉祥の義疏と同樣にして、法品法華の「什譯闕者、臺草喩品之半、富樣那及法師等二品之初、提婆達多品、菩門品偈也」との文を裏書してゐるかに見受けられる。

次に注意さるべき事は、本書は聖德太子の法華義疏の御製作に重要な役割を演じたと思はるゝ點である。太子の義疏中に「本義」「本釋」「本疏」等として援引されてゐるは本書にして、尤も太子は本書の説をそのまゝ用ひらるゝのではなくて「假少不當」とか「少異」等として太子御自身の獨自の見解を以て釋してはおられるが、何れにしても聰敏にして批評眼鋭くまします太子が、本書を左右にして法華疏を撰述されし等の點は極めて意義深き事と云はねばならぬ。（太子の義疏にも提婆品の釋なし）

尚本書中に「此意是光宅法師今述而不作也」とか「於此伏藤是光宅法師云云」とか或は「今光宅法師解不作親疏之義」「今光宅法師解言」等とあるは、法雲の口述を謹かに他の門人あたりが筆録したるを示すものであらう。

❼(参考) 東域傳燈目録巻上、諸宗章疏録第一、奈良朝現在一切経疏目録2250 ❺元禄一〇刊 ❹(谷大、餘大・一二二五)(龍大、二四一三・七五)（辻森要修）

法華経義決 ❶(B) Ho-ke-kyō-gi-kessa. (支)Fa-hua-ching-i-chüeh. 法華玄賛義決、法華義決 ❷一巻 ❸存、大正三四・八五四No. 1727、卍續一・五三・一 ❹唐慧沼(—開元二A.D. 714)述 ❺法華玄賛義決の下を見よ。 ❼(参考) 新編諸宗教蔵聴録第一 ❹刊本(龍大、二四一三・七六)

法華経義釋 ❶(B) Ho-ke-kyō-gi-

shaku. (支)Fa-hua-ching-i-shih. ❷二十巻或十巻 ❸(参考) 東域傳燈目録巻上

法華經義疏 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-sho. (支)Fa-hua-ching-i-su. 法華義疏、法華經義疏、妙法蓮華經義疏 ❷十二巻 ❸存、大正三四・四五一No.1721、卍續一・四二・四一五 ❹隋吉藏(太清三—貞觀六A.D.549—632)述 ❺法華義疏の下を見よ。 ❻弘安四寫(高大、寄・一・二三) 元祿一二刊(谷大、餘大・九二)(龍大、二四一三・七七—七八)寫本(寶壽院)

法華義疏 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-sho. 法華義疏、法華經疏、法華疏 ❷四巻 ❸存、大正五六・六四No.1722、日本大藏經第一一法華部章疏第一、大日本佛教全書第一四、世界聖典全集第四、岩波文庫7265—7267 ❹上宮太子(敏達帝二—推古帝二九A.D.572—621)述 ❺法華義疏の下を見よ。 ❻(参考) 淨土眞宗教典志第一 ❼天和二刊 ❽(谷大、餘大・三二六四)(龍大、研佛)

法華義疏 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-sho. (支)Fa-hua-ching-i-su. 法華疏 ❷四巻 ❸東域傳燈目録巻上、奈良朝現在一切經疏目録2126

法華經義疏記 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-sho-ki. (支)Fa-hua-ching-i-su-chi. ❷二巻科一巻 ❸宋知禮(建隆元—天聖六A.D.960—1028)述 ❹(参考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經義疏抄 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-sho-shō. ❷四巻 ❸存 ❹東大寺英訓述 ❺(参考)大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經義讀 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-doku. ❷一巻 ❸存、惠心僧都全集第三 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D.942—1017) ❺本書は法華經の文中、讀誦上注意すべき發音並に意味の相違を示せるもので、一字に就き經文を引證し、四聲をあげ、且つ簡單に意味を付して居る。我ふ文字は五十三字、例句は經令部に義つて說明してゐる。例示せば次の如し。惡 一—善惡業緣—入—烏各—アレシ、ワルシ。一—惡罵乘打—上—邑盧—ニクム。卽ち惡の字は法華經の文字、次の數字は卷數、次は文字所在の句、次は四聲、次は反切なり。

法華經議方便品題 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-hō-ben-dai. (支) Fa-hua-ching-i-fang-pien-p'in-t'i. ❷一巻 ❸(参考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經聞書 ❶(日) Ho-ke-kyō-kiki-gaki. ❷十二册 ❸存 ❹光鳳述 ❺高吉三(A.D.1442) ❻寫本(谷大、餘大・三二二四)

法華經教主辨 ❶(日) Ho-ke-kyō-kyō-shu-ben. ❷一册 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・四八)

法華經行者日蓮 ❶(日) Ho-ke-kyō-gyō-ja-nichi-ren. ❷一巻 ❸存 ❹姉崎正治著 ❺大正一三刊 ❻東京博文館

法華經句解 ❶(日) Ho-ke-kyō-ku-kai. (支)Fa-hua-ching-chü-chieh. 法華句解、妙法蓮華經句解 ❷八巻 ❸存、卍續一・四七・五—一・四八・一—二 ❹宋開達解 ❺宋景定二(A.D.1261) ❻本書は法華經の字義を極めて簡易に註解して初學に入り易く解し易からしめんが爲に所謂弄引として記したもの。さりながら著者開達は卷首の序文に讀經用心を說いて佛意を善解して然して後に修行を起せ。若し佛意を悟得せずして起修すれば徒らに疲勞して佛の境界を知ること能はずと誡め、更に法花の眞實の意趣は佛の智慧方便譬喩因緣をもつて三一圓融を明すにある。このことは生死無限業障本空にしてただ無事を得るにある。一切を放下し是非を俱遣し垢淨雙忘すれば忽心說亡し眞學圓明なり。正當恐懼の時は作意をなさずして露はれ、過迹底に當自現前する。もし故紙を尋ね求むるならば何れの日にか出頭するぞ。この故に經に諸法實相不可言宣といひ唯有智者乃能知之といふ。此に至れば直ちに律迦も老子も未開口の時に向つてその落處を知るべし。他の講著を免れ自ら踏著を勞せずして本心を見て無始已來の一大事因緣を了辦せんと。此の序文を讀んで開達の學風も知らるべく。彼の法華經觀も知らるべし。彼れは恐らく無濟雲門の流を承けて天台教觀を習學したものであらう。本書は宋元明三代の法華註疏に共通する道宣述法華經弘傳序を先づ出し、次に經文を註す。開達の傳は未詳。僅かに本書によつて錢塘の廣照寺沙門なることと、南宋・理宗の景定年間の人であることとを知り得るのみ。又本書は八卷法華經を以て註解してゐる。

法華經義讀 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-doku. ❷一巻 ❸存、惠心僧都全集第三 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D.942—1017) ❺宋景定二(A.D.1261) ❻本書は法華經の字義を極めて簡易に註解して初學に入り易く解し易からしめんが爲に所謂弄引として記したもの。さりながら著者開達は卷首の序文に讀經用心を說いて佛意を善解して然して後に修行を起せ。若し佛意を悟得せずして起修すれば徒らに疲勞して佛の境界を知ること能はずと誡め、更に法花の眞實の意趣は佛の智慧方便譬喩因緣をもつて三一圓融を明すにある。このことは生死無限業障本空にしてただ無事を得るにある。一切を放下し是非を俱遣し垢淨雙忘すれば忽心說亡し眞學圓明なり。正當恐懼の時は作意をなさずして露はれ、過迹底に當自現前する。もし故紙を尋ね求むるならば何れの日にか出頭するぞ。この故に經に諸法實相不可言宣といひ唯有智者乃能知之といふ。此に至れば直ちに律迦も老子も未開口の時に向つてその落處を知るべし。他の講著を免れ自ら踏著を勞せずして本心を見て無始已來の一大事因緣を了辦せんと。此の序文を讀んで開達の學風も知らるべく。彼の法華經觀も知らるべし。彼れは恐らく無濟雲門の流を承けて天台教觀を習學したものであらう。本書は宋元明三代の法華註疏に共通する道宣述法華經弘傳序を先づ出し、次に經文を註す。開達の傳は未詳。僅かに本書によつて錢塘の廣照寺沙門なることと、南宋・理宗の景定年間の人であることとを知り得るのみ。又本書は八卷法華經を以て註解してゐる。

法華經義讀 ❶(日) Ho-ke-kyō-gi-doku. ❷一巻 ❸存、惠心僧都全集第三 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D.942—1017) ❺寛文七刊 ❻(龍大、二四一三・八一)(叡山・昆門)

法華經弘賛 ❶(日) Ho-ke-kyō-gu-san. 法華弘賛、妙法蓮華經弘賛 ❷十卷或十五卷 ❸行賀(天平元—延暦二二A.D.729—803)述 ❹(参考) 東域傳燈目録巻上

法華經弘傳序集說 ❶(日) Ho-ke-kyō-gu-den-jo-shō-setsu. 法華弘傳序集說 ❷一巻 ❸存 ❹靈空(光謙永應元—元文四A.D.1652—1739) ❺享保二刊 ❻(龍大、二四一三・八二)(高大、寄・一・二三)(叡山・華藏)

法華經科 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa. (支)Fa-hua-ching-k'o. ❷四巻天科一巻 ❸詮明述 ❹(参考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經科講義 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-kō-gi. ❷五册 ❸存 ❹寶成述 ❺寫本(谷大、餘大・一三八八)

法華經科拾 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-shō. (支)Fa-hua-ching-k'o-shih. 妙法蓮華經科拾 ❷七巻 ❸存、卍續一・九三・二 ❹清普德立科、智一拾遺 ❻本書の製作事情は華嚴宗の立場から法華經の注疏が紛いためと、賢首・天台の本義を近代の講者は忘れて性相兩宗の別も華天の兩宗の同異も分たぬようになつた等のために本書を作つたと序文に智一が述べてゐる。普德はこの態度を以て作つたが未だ再治しないで遷化された。智一は最後まで普德に親炙して教を受け熱心に研究し螺溪では梵本翻譯に從事し又半壁に住しては大藏經の校訂に參與しつゝ寢食を忘れて學道研讃につとめた。かくて智一は師普德の滅後、本書の增補に力を竭し心血を注いだ。そして賢首の再起と云はれた普德の遺著を完成した。これは了意の跋文の說である。本書は七卷本法華の註である。慈恩系賢首系の人は皆七卷本を用ひ八卷本を用ひない。これには何等か事由があると思ふが未詳。本書は法華經を賢首家が古來から註する時に用ひた三分法によつてゐる。三分の下を更に細科に分つて、詳密に解釋してゐる。三分科とは初計光發報問答智壇頓示始終門—序品—二約近跡垂化開權顯實令悟一乘門—自方便品、至法師品止、爲正宗分—三門近顯遠拂迹入實令廣流通門—自見寶塔品、至經畫、共十八品、爲流通分がそれである。 (田島德音)

法華經科拾科 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-shō-kwa. (支)Fa-hua-ching-k'o-shih-k'o. 妙法蓮華經科拾科 ❷一巻 ❸存、卍續一・九三・一 ❹清普德立科、智一拾遺 ❻本書は『科拾懸談卷首』に七門分別をした內、第七別解文義の一科卽ち經題と經文とを解釋する下で普德が此等の分科を圖に作つた。それを門人智一が重訂したもの。この分科は華嚴宗から見た法華經の科文である點に於て他の宗旨の人の作つた科文と甚しく相違してゐる。故に天台・禪宗系統の人々の科文と比較して宗學の相違が同一經典を觀察する態度に如何に異りがあるかを知るのに極めて益する點が多い。 (田島德音)

法華經科拾懸談卷首附弘傳序註 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-shū-gen-dan-kwan-shu-tenkatari-gu-do-jo-chū. (支) Fa-hua-ching-k'o-shih-hsüan-t'an-chüan-shou & hung-ch'uan-hsü-chu. 妙法蓮華經科拾懸談卷首 ❷一巻 ❸存、卍續一・九三・一 ❹清普德立科、智一拾遺 ❻本書は華嚴宗の橋末歸本の義によつて法華經の懸談卽ち大綱要領を七門に大分し講述したもの。七門とは一教起因緣。二藏乘分攝。三義理分齊。四能詮教體。五宗趣被機。六總釋名題。七別解文義である。この七門を又各七義を立てゝ釋す。賢首家は皆十門分別を用ゆるのに今七門となすのは如何といふ問に對して、十門は圓數を用ひて無盡緣起を顯した不共の義である。今は心經や起信論の賢首大師法藏の例に從つて且らく七門としたのであると。この章を第一因緣の下で重ねて說いて云ふ。七といふは法花七軸法華の七喩義に順じたのであると。本書の橋末歸本說を述べてはゐるが、窺補に於て華嚴宗と天台宗との區別が略んど接近してくる。開顯の義も教主の義も因性果德も其他の華嚴教義も顯る含容の多い說き方である。思ふに清朝時代の支那華嚴學が略んど天台學と類同しつゝ教宗として一致し禪宗に對向する狀態を示すものの如く認められる。但し第四の能詮教體を教體淺深として述べ、十宗の判を立て同教一乘(法華)を終教とし第九圓融具德宗とし、別教一乘(華嚴)を圓教とし第十圓滿具德宗となす。玆に明確に法華の教體と華嚴の教體との淺深を判別してゐる。又經題の釋に於ても法華論・十地論・法藏の疏等によつて華嚴宗義を明示してゐる。これによつて清朝の華嚴教學の大勢が見られると思ふ。本書は卷初に林陵(江蘇・江寧縣。舊金陵又は建康といふ)の智一(傳未詳)が康熙四十四年(A.D.1705)菊月望日(九月十五日)に序文を記し、次に目次を付し、次に本文があり、次に智一が註解した『法華經弘傳序略義』を添へてある。元・明・清朝の法華註家は略んど皆この道宣述『弘傳序』の註釋を附してゐる。是れ全くこの時代の一流行か。恐らくこの弘傳序は法華大意として最も要領よく且つ簡單に記してあるためであらう。天台宗の一如の註と、華嚴宗の本書と、通理の『法華經指掌疏懸示』に附してある註と、禪宗の如愚の『法華經知音』に附してある註等が弘傳序註の代表的なものであると思ふ。普德は普德扇ふ大師又は西蜀沙門佛圓扇ふ大師といひ、賢首の宗を繼承。其の系脈は賢首……天界無緣老人—二十三世雪浪大師—一雨龜璞—碧空月潭—普德扇ふ—智一雪壇—海印了意と次第に相承してゐる。此他の傳記は未詳。但し『新續高僧傳四集』五九に清・燕京潭柘嶺靈寺沙門釋普德の傳があるが同名異人らしい。故ほ了意撰『法華經科拾』跋文を見るに「金陵目ふ六朝」來。名藍櫛比。義學繁興。」云云と叙してゐるから本書の普德は西蜀(四川・成都縣か若しくは江蘇・宜興縣東南に當る蜀山を指すか)の沙門なるが故に金陵地方に住した人となすべきであるから。又智一雪壇の傳も未詳。今は普德扇ふの門人たることが知られるのみ。但し序文を康熙四十四年に記してゐるから清朝初期の人である。 (田島德音)

法華經科註 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-chū. (支) Fa-hua-ching-k'o-chu. 法華科註、徐註、妙法蓮華經科註 ❷八卷或十卷 ❸存、卍續一・四八・五—一・四九・一 ❹元徐行齋科註 ❻本書は必昇の序文(元・元貞元A.D.1295)によれば「宋・柯山守倫の法華經科註の印板が湮沒して見られなくなつた。これを徐行齋居士が慨嘆して經文を分科し科によつて分註を施した。この註は柯山が天台の疏文を抄錄した如く今も本天台の疏文を抄錄した。そして七軸とたしこれを詳梓した」といふ。又日本・貞享五年(A.D.1688)淨嚴が編した『冠註略解妙法華經新註』の重刻妙經新註凡例には「本朝では古來法華を講ずる者は或く徐氏の科註による。而るに彼の註は倫師の註の印版絕廢したことを慨して已むことを得ずしてつくつたものである。故に疏を引くこと粗略だから良書とはいへない云云」といつてある。又古老の傳によれば、倫師の科註は經文に就て事緣を詳叙し、徐氏の科註に略して理を叙し、智旭の會義は理を述ぶること詳らかである。一如の新註はやや此等を折衷したものであると。法華の科註は三本ある。一は守倫の註。二は本書。三は一如の註である。本書は先づ卷初に元祿七年(A.D.1694)に證岐國龜山の釋堯存(傳未詳)が撰した重刻法華

數字略號 ❶題名(書名) ❷卷數 ❸存缺 ❹著者 ❺代年作達 ❻內容 ❼原書(註釋參考書) ❽文書(註釋參考書) ❾寫本所藏處 ❿寫本(書庫名) ⓫發行所

科註序を附し、次に元・元貞元年に四明(浙江・鄞縣西南一百五十里)海慧教院住持傳教沙門平嗣必昇述に係る依=天台智者大師心誦經法。次に丹丘(浙江・寧海縣南九十里)仙山と相近し)凝然蘭若澤山聖與成(傳は佛祖統紀十六)錄に係る先敍=台宗釋=經六意=六意とは一約=五時・判=大化=二四教釋=群經=三三觀論=修證=四五章釋=首題=五三分分=起盡=六四釋消=經文=である。次に法華三分總別之圖。これを寛永版本には法華諸品起盡之圖と名づく。圖に少異がある。次に道實述妙法蓮華經弘傳序を分科註解し、次に正しく法華經を四明の信人(居士)たる智義と號する徐行義が依科入註し、更にこれを四明の海慧教門の住持である必昇が校證した經釋を掲げてある。本書は天台の文句並に荊溪の記を抄錄し、間々自說をもつて文句記の文を取意して採錄してゐる。柯山守倫の科註や智旭の會義や一如の新註が寛文頃から印刊流行するに及んで徐註を講義する者が殆んど絶くなつた。寛永板本には弘傳序の終りに本書編著並校訂者の名を列記してある。今關係者の名と役割のみを記せば、徐行義は本書を書き、註を將つて科經に入れ幕藩して刊行した。必昇は校證をなし、德謙と可明とは重校し、無住と如日と義入とは同校し、文桂と道全とは重校の役に當つた。そしてこの名を列記し畢つて「於未來世成得成佛」と志願文を記してゐる。

❹古刊本(谷大、餘甲・四三)五山版(龍大、別置)寛永二一刊(龍大、二四一三・五一、六一)慶安二刊(谷大、餘大・三九六〇)(龍大、二四一三・五八)慶安四刊(龍大、二四一三・五六)延寶四刊(立大、A一二・一五三)(高大、寄・一・二三)元祿四刊(高大、寄・一・二三)(龍大、二四一三・六二)　(田島德音)

法華經科註 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū. (支)Fa-hua-ching-ko-chu. 倫註、妙法蓮華經科註　❷十卷　❸存、卍續一・四八・二一—四　❹宋守倫註、明法濟參訂　❺本書は天台大師の法華文句と荊溪の文句記とを簡易に初學者に知らしめんがために記した類書中では最初の著作である。この點は後の最も大なる功績といつてよい。守倫の傳は未詳。僅かに明・崇禎元年(A.D. 1628)に玉溪の菩提菴梵行撰になる本書の序『刪註法華經序』に「趙宋の柯山棲雲沙門諱は守倫なる者は篤志奬親で跡を林泉に托して此經を註釋せんとし、年二紀を逾えて方に緒に就くことを得た。台宗に本づいて分科分段し約二十卷となつた。これによつて台宗に入る者をして一見瞭然たらしめたから深入するに難くなつた」と。本書は明時代には容易に見られなくなつたやうだ。この事を聖行は序の內で「先師溫生が曾つて古本を獲て至寶なりとされた。明・萬曆年中、本書によつて講義を桐邑順慶寺で行つた。其時一紙の脫けてゐたことを見出し大に困却されたが、偶々一僧が本書を持參した爲めに漸く補ふことが出來た云云」と聖行は師の藏本を再參訂正し十卷とされし重刻流通する事を得たと序文に述べてゐる。本書は先づ聖行の序文、次に宋・柯山命翁棲雲沙門釋守倫撰『註妙法蓮華經序』。次に目次。次に本書を揭ぐ。本書は守倫註を明・玉溪菩提菴沙門法濟が參訂し、明・吳興瓶城居士閔夢得が較刻したのである。法華經に關する事歷と經文の因緣を記してゐることは他の科註のいづれよりも詳密である。　(田島德音)

法華經科註 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū. (支)Fa-hua-ching-ko-chu. 妙法蓮華經新註、法華經新註、新註、如註、妙法蓮華經科註、法華科註、法華新註　❷七卷　❸存、卍續一・四九・一—三　❹明一如集註　❺本書は清・幽溪高明寺沙門傳燈(錢釋氏稽古略二。新續高僧傳四集四四及び本書卷初の冗政の序文に傳がある)撰『重刻法華經科註序』に「吾宋齊梁陳隋の六朝時代に於ける諸師が競つて妙法華の註疏をつくり遂に七十家の多きを數へた。其內でも光宅寺法雲の疏が最も秀でてゐる。天台智者大師が出でて法華玄義を說き、先づ光宅を破したから餘の者は風を望んで退いた。章安灌頂はこの說を筆錄し、荊溪湛然更に法華玄義・法華文句に釋籤と記とを作つた。爾來先賢皆これに從ふに至つた。後學何ぞ煩しく窺を措かんや。知るべし、法華の妙旨は玄義にあり文句はこれに次ぐ。今の科註は又その次である云云」と。これによつて知らるる如く本書は天台の玄文によつて法華の經題並に經文を註解したものである。乍然一如は宋の倫註や冗の徐註を知らない筈はない。知つてゐながら是等を參照したことを述べてゐないのは如何。恐らく一如が本書の序文又は說文を記して置かなかつた結果この疑ひが生ずるに至つたのであらう。例せば淨慶編『冠註略解法華經新註』の凡例に「方便品の題下で十雙の權實及び四句の權實を除いてあるが徐註には十雙の名を列ねてゐる。又譬喩品以下の諸品の題下で四釋の具略が齊しくない」等と記してあるが如きは一如が本書編著の時に倫・徐の科註を考慮に置いたために遂に具略不同の失を起したものであらう。又山城國深草瑞光寺沙門元政(元和九—寛文八 A.D. 1623—1668)は『妙法蓮華經新註叙』に「天台大師の後、天台の玄疏を抄錄する者が多い。卽ち宋・柯山守倫の科註十卷。元・徐行義居士の科註十卷。元・慧愚谷の註(この愚谷の註疏の名は姚廣孝の本書の「法華序註」に記してあるが散逸して今は未詳)等がそれである。がたゞ一如の新註は略して天台の玄文を取り、引いて天台の玄文を伸べてゐる。其の折中してゐる點に於いては頗る宜當を得たといへる」と稱嘆してゐる。元政は本邦に新註を流布せしめた恩人であるから、このやうに本書を稱讚するのは奇異とするに當らない。本書は屢々支那・日本で印行されてゐる。印行の記事は姚少師(孝廣)・傳燈・不可思議(元政)等の序文並に淨慶の凡例、冠註によつて知られる。特に靈谷の妙子(元政)は慈曇大師の委囑を諾寫して明の印本に訓點を附し、これを本邦に翻刻した。このことは本書弘布に力あつたものである。此の元政の刻本を更に重訂し、冠註を

誌へて複刻したものは淨慶の功も亦大だ多い。永世の標的として仰がるるものである。本書は七卷法華を註したのであるが冠註略解本は八卷本としてゐる。本書は先づ元政の序。次に傳燈の序。次に邵建策撰『法華經科註疏序』(この序は冠註略解には缺く)。次に姚廣孝の序。次に一如の集註。この集註の初めに法華の大意を叙し、次に經題の五重玄義を明し、次に「妙法蓮華經弘序」を註し、次に序品以下次第に二十八品の品題並に經文を註解して畢る。故に邵建策が序で述べてゐる如く本書は主として文句によつて作られたものと云へる。

❼(注釋)　冠註略解妙法蓮華經新註十二卷　❽明代刊本(內閣)　(田島德音)

法華經科註 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū. 法華科註、科註法華經、科註妙法蓮華經　❷八卷　❸存　❹元徐行義八—至元三一 A.D. 1264—)科註、必昇校證、義存冠註　❺元祿一〇刊　❻(龍大、二四一三・六〇)(高大、寄・一・二三)

法華經科註講錄 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū-kō-roku.　❷九册　❸存　❹知現(—天保六 A.D. 1835)述　❺文政一一(A.D. 1828)　❻寫本(谷大、餘大・二二〇一)

法華經科註序鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū-jo-shō.　法華科註序鈔　❷一卷　❸存　❹亮法(元和八—延寶八 A.D. 1622—1680)科、英藝(寛永一六—正德二 A.D. 1659—1712)注　❺寶永六刊(龍大、二四一三・七二)寶永七刊(谷大、餘大・三二七七)

法華經科註鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū-shō.　法華科註私、科註法華經鈔、法華定珍鈔、法華經鈔、妙法蓮華經鈔　❷二十二卷或二十三卷　❸存　❹定珍(天文三—慶長九 A.D. 1534—1604)述　❺慶安元刊　❻(谷大、餘大・一三八九)(龍大、二四一二・七一)

法華經科註鈔 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-chū-shō.　法華北林鈔、北林鈔、法華經北林鈔、科註妙法蓮華經鈔　❷八卷或十二卷　❸存　❹寛永二刊(谷大、餘大・三〇四五)萬治二刊(谷大、餘大・二一〇)寛文一三刊(谷大、餘大・三一七三)

法華經科註鈔平かな ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-chū-shō-hira-na-na.　科註妙法蓮華經平かな、科註妙法蓮華經　❷三十卷　❸存　❹西阜隱士嘯月子撰　❺法華經科註を平假名にて意譯し、更に著門品に關する和歌等を引用して、若干の增補をなす。　❻寛文一三刊　❼(立大、A一二・一六〇)

法華經科註隨白記 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-chū-zui-byak-ki.　❷二卷　❸存　❹惠白述　❺文化一〇(A.D. 1813)夏　❻文化一〇寫　❼(谷大、餘大・四五九)

法華經科註必昇序釋義 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-chū-his-shō-jo-shaku-gi.　❷一卷　❸存　❹刊本(谷大、餘大・三一六八)

法華經科註必昇註解 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-chū-his-shō-chū-ge.　❷一卷　❸存　❹寶永年間刊　❺(谷大、餘大・三九三三)

法華經科註復宗記 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwa-chū-fuku-shū-ki.　❸存　❹寶晨無隱　❼(參考)　羅錄目錄

法華經科文 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-mon. (支)Fa-hua-ching-ko-wen. 法華科文、妙法蓮華經科文　❷二卷　❸隋吉藏(太清三—武德六 A.D. 549—623)　❼(參考)　東城傳燈目錄卷上

法華經科文 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-mon. (支)Fa-hua-ching-ko-wen. 妙法蓮華經科文　❷二卷　❸左溪玄朗(—天寶一三 A.D. 754)作　❼(參考)　東城傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華經科文 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwa-mon. 法華科文　❷一帖　❸存　❹源信(天慶五—寛仁元 A.D. 942—1017)作　❺元亨四寫　❻(寶龜院)

法華經卷釋 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwan-shaku.　法華卷釋、法華八講卷釋　❷一卷　❸存　❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—891)述　❼(參考)　諸宗章疏錄第二、本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上　❺貞享二刊　❻(龍大、二四一三・七四)

法華經勸愚鈔 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwan-gu-sho.　❷二卷　❸存　❺貞享五刊　❻(龍大、二四一三・七三)

法華經觀音品義疏 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwan-on-bon-gi-sho. (支)Fa-hua-ching-kuan-yin-p'in-i-su. 觀音義疏、普門品疏、別行義疏、觀音經疏、法華觀音品疏、妙法蓮華經觀音品義疏　❷二卷　❸存、大正三四・九二一 No. 1733、續訓五、卍三三・三、明南1623何、Nj. 1657　❹隋智顗(大同四—開皇一七 A.D. 608—597)述、灌頂(天嘉二—貞觀六 A.D. 561—632)記　❻觀音義疏の下を見よ。❼(參考)　新編諸宗敎藏總錄第一

法華經觀音品玄義 ❶(日) Ho-ke-kyō-kwan-on-bon-gen-gi. (支)Fa-hua-ching-kuan-yin-p'in-hsuan-i. 觀音玄義、觀音玄、別行玄義、法華經觀音品玄記、別行玄、觀音經玄義　❷二卷　❸存、大正三四・八七七 No. 1795、續訓五、卍三三・二、明南1631何、Nj. 1655　❹隋智顗(大同四—開皇一七 A.D. 608—597)述、灌頂(天嘉二—貞觀六 A.D. 561—632)記　❻觀音玄義の下を見よ。❼(參考)　新編諸宗敎藏總錄第一、東城傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一

法華經觀智儀軌 ❶(日)Ho-ke-kyō-kwan-chi-gi-ki. (支)Fa-hua-ching-kuan-chih-i-kuei.　成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌、成就法華儀軌、法華儀軌　❷一卷　❸存、大正一九・五九四 No. 1000、續訓七、卍三六・一〇、明北1381杜、清1321杜、麗1269草、明南1157畢、Nj. 1258　❹唐不空(神龍元—大曆九 A.D. 705—774)譯　❻成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌の下を見よ。

法華經訓讀抄 ❶(日) Ho-ke-kyō-kun-doku-shō.　❷四帖　❸存　❺康正三寫　❻(寶龜院)

法華經解科文 ❶(日) Ho-ke-kyō-

nyo-kwa-mon. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(京大、藏・七ゑ・四)

法華經啓運抄 ❶(日) Ho-ke-kyō-kei-un-shō. ❷五十五卷 ❸存 ❹日澄述 ❺寛文九刊 ❻(谷大、餘大・一〇八八)(京大、日大未・三四×立大A〇三・六)

法華經聚節 ❶(日)Ho-ke-kyō-gyō-setsu. (支)Fa-hua-ching-chi-chieh. ❷一卷 ❸存、卍續一・四九・五 ❹德清(嘉靖二四—天啓三 A. D. 1545—1623)述 ❺明萬曆二六(A. D. 1598)

❻本書は法華を解するに教禪諸宗の說に偏せず、海印寺沙門慈山大師惠諸(夢遊集と新續高僧傳四集八とに傳を出す)が自己の證悟によつて自在に說いてゐる。「世尊出世の一大因緣は一切衆生に各各本有の佛の知見を開示悟入せしめるにある。卽ち日用現前に實證を得ることが一大事である。故に一代の時教が顯す所は唯一乘の理行因果のみである。衆生が日用する根塵識界がそのまま諸佛自覺の聖智の境界なることを現前に顯示し頓證する以外に出でない」と。是の如き根底に立脚し法華を觀察して曰く、「法華は開解に初り起行に終る。妙智を開顯して佛果功成を示す。從つて一乘圓理の眞因を顯示して一乘の妙行を成滿するのである。されば法華二十八品を分つて二となし、前二十二品は圓理を顯示し、後の六品は妙行を顯示したものである。獨り法華一經に就てかく云ふのみでなく、華嚴と法華とに就ても亦この關係が說ける。華嚴は圓理を述べ、法華は妙行を述べてゐる。華嚴は信解行證を以て成佛の基いなりとし、法華は開示悟入を以て成佛の本なりといふ。法華の力使によつて開示し言說することは華嚴に云ふ所の信を發することである。信によつて解發し、解に依て行を起し、行成り解絕して方に能く證入する。故に華嚴と法華との二經は始終一貫し、章實に相符したものである」といひ、又顯密一致を陀羅尼品の神呪に就て說き、起信・摩訶衍等を用ひて兼起論を應用し禪禪宗の證悟を說いて、教禪一致の義を立つ。玆に明朝佛教の傾向が如何なるものであつたかを如實に示したものとして見らる。猶本書撰述の由來を卷末に德清が自ら敍語の如く記述してゐる。

(田島德晉)

法華經決擇記 ❶(日) Ho-ke-kyō-kō-chaku-ki. (支)Fa-hua-ching-chüe-tse-chai-chi. 法華經玄贊決擇記、法華秘決擇記 ❸八卷之內二卷現存、卍續一・五三・二 ❻唐崇俊述、法清集疏 ❺法華經玄贊決擇記の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經顯應錄 ❶(日) Ho-ke-kyō-kem-ō-roku. (支) Fa-hua-ching-hsien-ying-lu. ❷二卷 ❸存、卍續二乙・七・五 ❹宗曉(嘉定七A. D. 1214)編 ❺南宋慶元四(A. D. 1198)

❻本書は法華經靈驗記一類の書である。淸の周克復の纂せる法華經持驗記或は觀音經持驗記等は年代順に配列してあるが本書は持經者を類別して古聖、高僧、高尼、信男、信女とし其の地名と年代とを明らかにして居る處に其の特質を示してゐる。蓋し宗曉當時法華靈驗の記錄が二種あつて、一を靈瑞集と云ひ一を續靈瑞集と呼んだ。前者には六十件を載つてあるが、著者不明で且つ道俗混淆し記載も缺けてゐる。又後者は吳興の元頌法師が大觀年中に纂したもので、初め普賢證明より後香光表瑞まで十科を分けて配列してあるが、板籍既に久しく亡びて伸々見難い。玆に於てこれ等を參考とし大明三藏僧傳や內外の典籍を討覽して二百三十九件を摘取し、前稿の列次により折りて二卷として世に出したものである。著者宗曉は宋代四明天台の流れを汲んで廣智尙賢の系統に出で(廣智—鑑忠—盧元—道潤—道琛—惠詢—宗曉)四明一代の法勳を今日に止めたる四明教行錄九卷や樂邦文類五卷、樂邦遺稿二卷の著もあり旁々淨土教の弘通をも謀つて居る。其の同門法登より四代の法孫に志磐が出て佛祖統記を表はしたが、宗曉の傳は其の第十八に見えてゐる。

(巻上) 古聖(凡七事並見本經)

多寶聽經資塔涌現。釋迦牟尼來經無倦。不輕菩薩流通法華。寗見然身供養妙經。妙音遠來聽法華經。昔四比丘修習法華。普賢菩薩勸發流通。

高僧(凡一百七十三人)

天竺國摩訶羅比丘。瑞煌三藏護法師。姚秦三藏什法師。長安叡法師。虎丘生法師。南岳思大禪師。天台智者大師。南山澄照律師。京兆慈恩法師。五臺淸涼國師。高麗光禪師。東京靈法師。潭州青衣寺僧。杭州孤山寺石壁經。臺州法華院石壁經。杭州日觀大師。湖州端師子。明州瑩教主。明州久法華。臺州梵法主。湖州明悟法師。溫州褒法師。南屏淸肆法師。湖州顯法師。杭州雅闍梨。杭州淨法師。餘姚鼻闍梨。餘杭慶聽上人。秀州照法師。烏傷淡法師。明州明智法師。明州無長法師。杭州照闍梨。衢州南上人。明州諒大師。明州實禪師。明州證照法師。明州月堂法師。明州和法華。明州佐法華。明州岳林寺蓮經。明州鑑宗師詩。明州全法華。天台國淸寺蓮經。

(巻下) 洪州達禪師。牛頭山融禪師。明州太白禪師。湖州蹟禪師。湖州天下上座。西京大圓禪師。臺州遵法師。西河韻法師。東京章法師。井州倫僧錄。五臺英法師。京師鳴供奏。廬山超法師。洛京眞法師。潭州亡名僧。宣城山神僧。成都府僧。相州昂法師。杭州智覺師。潤州德法師。杭州最法師。衡狄雲上人。斷州光法師。京師言法華。姥江息法華。靈峰古禪師。廬山可禪師。明州覺法華。明州純法華。明州戒講師。

高尼(凡一十三人)

洛陽馨法師。司州賢法師。江陵壽法師。江陵玉法師。山陰宣法師。高郵華手尼。河東尼信師。東京法忍二師。荆州姊妹二尼。潤州潤法師。京師尼通師。

信男(凡三十二人)

廬山劉遺民。井州誦經靈舌。長史張暢。貞節處士庾詵。幾州刺史崔彥武。井州書生。江陵孝文本。臨沂王楚行。臨沂王淹。吳郡陸淳。楊州脩法華。京師史呵雲。馮翊李山龍。陳州令孤元軌。河東韋璋。隱城袁志通。秦州慕容文策。絳州編人。京師高文。蒼鄂井婢素玉。雍州優婆塞。襄州張圭。無爲軍李遇。台州左仲。臨安府范儁。黃山晁特制。明州陳郎中。明州杜信。明州吳振。明州陳世禮。慶元府汪敬。明州王文富。

信女(凡一十四人)

陝右馬郎婦。淮寧姑渡二人。南宋王建稱。臺州史女使。長安陳氏。常州費氏。台州任微君女子。高安太守嫂。鎭州妓慶細兒。湖州妓楊訓。臨安府郭道人。明州沈氏。明州趙氏使。明州朱如一。

❼寫眞版(京大、藏・一九テ・二)(石井亮應)

法華經顯密料揀 ❶(日)Ho-ke-kyō-ken-mitsu-ryō-ken. 法華顯密料揀 ❷一卷 ❸存、照遍和尙全集第三 ❹上田照遍(文政一二—明治四〇 A. D. 1829—1907)述 ❺明治三八刊 ❻(谷大、餘大・二六八〇)(京專、正大、一一四二・一二六)(觀山、華藏)

法華經玄義 ❶(日) Ho-ke-kyō-gen-gi. (支)Fa-hua-ching-hsüan-i. 妙法蓮華經玄義、法華玄義、玄義 ❷二十卷或十卷 ❸存、大正三三・六八一No. 1716、縮呂九、明北1587害、至1605孟、明南1519實寮、佛教大系第二三、Nj. 1524 ❹隋智顗(大同四—開皇一七 A. D. 538—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)記 ❺妙法蓮華經玄義の下を見よ。 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一、東域傳燈目錄卷上 ❽弘安四寫 ❾(高大、寄、一・一五)

法華經玄義 ❶(日) Ho-ke-kyō-gen-gi. (支)Fa-hua-ching-hsüan-i. ❷一卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經玄義聞書 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-gi-kiki-gaki. ❷十卷 ❸存 ❹日遠(元龜三—寛永一九 A. D. 1572—1643)述 ❺寛永二一刊 ❻(龍大、二六五一・二二四—二一五)

法華經玄義輯略 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-gi-shū-ryaku. (支) Fa-hua-ching-hsüan-i-chi-lüe. 法華玄義輯略、妙法蓮華經玄義輯略 ❷一卷 ❸存、卍續一・四四・五 ❹明傳燈錄

❺本書は法華玄義の七番共解、五章各說の內、通釋の七番共解は略略の義を出し、別釋の五章の大略を記述したもの。本書には集錄した年代場所等を記してないが「天台山圓溪沙門傳燈錄」と著者名を揭げてあるから恐らく天台山圓溪で錄したと見るべきであらう。初めに釋名を判a通別、と定a前後、と略正解の三段とし、略正解をばやや詳記して二段とし、一には略解a別名、二には略釋a通名、となす。次に略解別名も二となし先づ妙法を釋し、次に蓮華を釋す。妙法を又二となし、初めには法、次には妙を釋す。妙を更に分つて通釋と別釋とし、通釋の下に相待妙と絕待妙を記す。別釋では迹門十妙と本門妙とを明す。次に蓮華を釋する下では迹本兩門に各三喩あり等といつて分說し、次に顯體には、初論a體意、二正明b體、三引b文證の三條を記し、次に明宗も初節a宗體、二正明b宗、三衆師同異の三段を記し、次に論用。次に判a教相、を記して擧る。玄義を略して抄錄した者には智證大師圓珍の玄義略要と本書と智旭の玄義節要との三種がある。三本各長短はあるが本書は最もよく抄記してあると思ふ。

(田島德晉)

法華經玄義節要 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-gi-setsu-yō. (支)Fa-hua-ching-hsüan-i-chieh-yao. 法華玄義節要、妙法蓮華經玄義節要 ❷二卷 ❸存、卍續一・四四・四—五 ❹明智旭節

❺法華玄義の要旨を適當に限り定めたる書といふ意味。天台の玄義の廣汎を愛へ、その綱領を攝要簡摘せるもの、卷頭に玄文四序中の序王一序を揭げ、下記の順序に依て五重玄の大系を巧に抽出してゐる。

上、通釋七(七番共解)

一標章。二引證。三生起。四開合。五料簡。六觀心。七會異。

下、別釋五(五重各釋)

第一釋名三

(上)釋妙法三—一判通別。二定前後。三正解二

一略示、二廣說二—初、法三—一衆生、2佛、3心、後、妙二—通釋、2別釋二

(一)迹十妙、境・智・行・位・三法・感應・神通・說法・眷屬・利益。

(2)本十妙、因・果・國土・感應・神通・說法・眷屬・涅槃・壽命・利益。

(中)釋蓮華。(下)釋經字、

第二辨體。第三明宗。第四論用。第五判教。

(中里貞隆)

法華經玄義端辭 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-gi-tan-ji. 法華玄義端辭 ❷一卷 ❸存 ❹謹陳述 ❺寫本(龍大、研佛)(谷大)

法華經玄義略要 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-gi-ryaku-yō. (支)Fa-hua-ching-hsüan-i-lüe-yao. 妙法蓮華經玄義略要 ❷一卷 ❸武丘 ❹(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經玄贊 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan. 妙法蓮華經玄贊、法華玄贊、玄贊、法華經疏 ❷十卷或二十卷 ❸存、大正三四・六五一No. 1721、卍續一・五二・四—五、至1601補似 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元A.D. 632—682) ❺妙法蓮華經玄贊の下を見よ。 ❻(參考)〔新編諸宗教藏總錄第一、東域傳燈目錄卷上〕 ❼寫文四刊 ❽(谷大、餘大・六九一)(龍大、二四一三・八六)

法華經玄贊一乘義講義 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-ichi-jō-gi-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹德霖(—慶應二A.D. 1866)述 ❺寫本(谷大、餘大・三七八五)

法華經玄贊一乘義私記 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-ichi-jō-gi-shi-ki. 一乘義私記、法華玄贊一乘義私記 ❷三卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛教全書第二〇 ❹眞興(永平四—寛弘元A.D. 994—1004)述 ❺寫和元(A.D. 985) ❻一乘義私記の下を見よ。 ❼寫本(谷大、餘大・二五二五)

法華經玄贊記 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-ki. (支)Fa-hua-ching-hsüan-chi. 法華玄贊記 ❷四卷 ❸清素述 ❹(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經玄贊決擇記 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-ke-chaku-ki. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan-chüeh-tse-chi. 法華經決擇記、法華決擇記、法華玄贊決擇記 ❷八卷内初二卷現存、卍續一・五三・二 ❸唐崇俊述、法蔚集疏 ❹本書は妙法蓮華經八卷を三乘眞實一乘權教の思想に立脚して註釋し給へる慈恩大師の妙法蓮華經玄贊十卷の註疏を更に補釋せるものにして、杭州天竺寺崇俊の撰述揚州禪智寺法蔚の集疏せるものなり、もと八卷存せしも二卷のみ現存し他は散佚せるものである。内容は第一卷の開卷に惟揚龍興寺藏諸の法華玄贊決擇記序あり、次に法華玄贊の本文に入り段文解釋し、如是我聞より以下六門を以て分別す。第一門は叙經起之宗旨、第二門明經之宗旨、第三門解經品得名、第四門顯經品廢立を決擇し、以下散佚して傳らず。 (橋本凝胤)

法華經玄贊釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-shaku. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan-shih. 法華玄贊釋 ❸一卷現存、卍續一・九三・一 ❹唐可周述 ❺本書は慈恩大師の法華玄贊十卷を註釋せるものにして、三乘眞實一乘權教の思想に立脚す。燉煌より發掘出土せしものにしても二卷なりしも、一卷は散佚し上卷のみ現存するも、猶その卷首數葉は佚して傳はらず。内容は法華玄贊卷第一に六門を以て分別せる中、第二明經之宗旨段より以下第六門釋經之本文段に至る六門を釋し、本文の下半は散佚せるものである。 (橋本凝胤)

法華經玄贊攝釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-shō-shaku. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan-shō-shih. 法華玄贊攝釋、法華經攝釋、妙法蓮華經攝釋 ❷四卷 ❸存、卍續一・五三・一—二 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一A.D. 678—733)述 ❺本書は慈恩大師の法華玄贊を智周が註釋せるものにして、法相教學に立脚して法華一乘を批判註釋せるものである。内容は第一卷に自序を出し、次に直ちに序品に入りて之を釋し、第二卷には序品の一部と方便品を釋し、第三卷には方便品の一部と譬喩品・信解品・藥草喩品・授記品を釋し、第四卷には化城喩品・五百弟子品・人記品・法師品・寶塔品・提婆品・持品・安樂行品・涌出品・壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品・不輕品・神力品・囑累品・藥王品・妙音品・普門品・陀羅尼品・嚴王品・勇發品と次第して釋せるものにして、三乘教を以て一乘教を批判註釋せるは實に注意すべき點である。 (橋本凝胤)

法華經玄贊要集 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-yō-shū. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan-yao-chi. 法華錢水鈔、法華玄贊要集 ❷三十五卷(卷二二、二三、三〇、三二缺) ❸存、卍續一・五三・三—五四・五 ❹唐栖復集 ❺本書は慈恩大師の法華玄贊十卷を更に栖復が講筵に侍して聽きて註釋疏記せるものにして、三乘教に立脚して一乘教を批判解說せるものである。内容は第一卷に法華經本來前後十六譯の存せるを明し、次に題目を釋し、次に玄贊の序文を釋し、次に六門分別せる所以を釋す。第二卷には第一段經起之意門を釋し、第三卷第四卷には第二明經之宗旨門を釋し、第五卷に第三解經品得名、第四顯經品廢立門、第五第六卷品之次第門を釋し、第六卷より第十四卷に至る第六釋經本文門に入りて序品を釋し、第十五卷より第二十一卷に至る方便品を釋し、第二十二卷、第二十三卷は散佚して傳はらず。第二十四卷、第二十五卷には譬喩品、第二十六卷には信解品、第二十七卷には藥草喩品、第二十八卷第二十九卷には授記品・化城喩品、第三十卷は散佚し、第三十一卷には五百弟子授記品・人記品・法師品・寶塔品を釋し、第三十二卷は散佚し、第三十三卷には安樂行品・涌出品・壽量品、第三十四卷には分別功德品・隨喜功德品・法師功德品・不輕品・神力品・囑累品・藥王品・第三十五卷は妙音品・觀世音品・陀羅尼品・嚴王品・普賢品・勸發品を釋せるものである。 (橋本凝胤)

法華經玄贊證釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-san-shō-shaku. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan-chen-chang-shih. 法華玄贊釋證釋 ❷十卷 ❸存、卍續一・四四・五 ❹清智銓述 ❺本書は釋籤縁起序と玄贊並に釋籤との文を一々證據を求めて簡單な解釋を施してある。玄籤を講述する者には頗る便宜な著作といへる。典據を引用するに多く天台家の風師先德の著述から援引してあるが往々通鑑等の外典も引用してある。講說學風の著作であるが、天台山佛隴貞登寺敏曦は序に「重刪玄籤證釋引」を作り「人天の正路を開き長夜の明燈を設け、後學の悟入を開示し頓に心地の法門を顯し」たものと稱讚してゐる。智銓の傳は未詳。敏曦の序文には本書印刷の由來を敍してある。 ❻寫淨版(京大、藏・七ホ・三) (田島德音)

法華經玄籤錄 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-sen-roku. 法華玄籤錄、法華玄義釋籤錄 ❷二十卷 ❸存 ❹守篤本純(—寶曆頃A.D. 1751—1762—) ❺寫政元刊 ❻(京大、日大未・五一)

法華經玄籤備撿 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-sem-bi-ken. (支)Fa-hua-ching-hsüan-chien-pei-chien. 法華玄義釋籤備撿 ❷四卷 ❸存、卍續一・四四・四 ❹宋有鼎(—建中靖國元A.D. 1101)注 ❺元祐元(A.D. 1106)

❻有鼎の自序に「或は學習讀來だ久しからざれば尚ほ玄籤の文に患ふ。其の言隱れて援引すること繁し、影にして略なれば簡編の間に逕回すと雖も何ぞ他文を尋究し以て開見を博くする暇あらんや、爲當て元豐年中に於て講貫の次を裁り更に鉛窟檢討して遂に飜ち註釋を加へ、以て其の繁きを易くし、以て其の略なるを廣くす、中略、折りて四卷と爲し以て檢閱に備ふ、因りて命じて備撿と曰ふ、後略」と、一書の面目知るべきのみ。即ち法華玄義の本文及び釋籤のこれが注釋(釋籤)兩部に渡り、繁にして解し易からざるもの、略にして得意し難きものを擧げて、切要簡明に之れを會通したものである。 法華三大部研究者の必有必携の書である。 (石井亮應)

法華經玄談 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-dan. (支)Fa-hua-ching-hsüan-tan. 法華玄談、法華經疏玄談、妙法蓮華經玄談 ❷一卷 ❸隋吉藏(太清三—武德六A.D. 549—623) ❹(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經玄論 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-ron. (支)Fa-hua-ching-hsüan-lun. 法華玄論 ❷十卷 ❸存、卍續一・四二・三 ❹隋吉藏(太清三—武德六A.D. 549—623)述 ❺法華玄論の下を見よ。 ❻(參考) 〔新編諸宗教藏總錄第一、東域傳燈目錄卷上〕 ❼大和三刊 ❽(谷大、餘大・八一八×龍大、二四一三・九〇)研佛)

法華經古迹記 ❶(日)Ho-ke-kyō-ko-seki-ki. (支)Fa-hua-ching-ku-chi. ❷四卷 ❸新羅太賢(—景德王一二A.D. 752—)述 ❹(參考) 〔新編諸宗教藏總錄第一〕

法華經五百問論 ❶(日)Ho-ke-kyō-go-hyaku-mon-ron. (支)Fa-hua-ching-wu-pai-wen-lun. 法華五百問論 ❷三卷 ❸存、卍續二・五・四 ❹唐濮然(景雲二—建中三A.D. 711—782)述 ❺法華五百問論の下を見よ。 ❻(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經光宅疏抄 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-taku-sho-shō. ❷三卷(殘缺) ❸存 ❹琰玄(康治二—建保五以後A.D. 1143—1217—)撰 ❺(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經考異 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-i. 法華考異、妙法蓮華經考異 ❷二卷 ❸存 ❹宗潤述 ❺天保一一刊 ❻(龍大、研佛)(谷大、餘大・一三六七×晉、φ・二・中・四)(京大、一・二三ホ・一—二)(立大、A一二・四一六—四一七)(帝國、二二八・八二) (田島德音)

法華經綱目 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-moku. (支)Fa-hua-ching-kang-mu. ❷一卷 ❸義寂述 ❹(參考) 〔新編諸宗教藏總錄第一〕

法華經綱要略釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-yō-ryaku-shaku. (支)Fa-hua-ching-kang-yao-lüe-shih. ❷一卷 ❸存 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一A.D. 678—733)述 ❺〔參考〕 〔新編諸宗教藏總錄第一〕

法華經講義 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-yō-gi-kō-gi. ❷八卷 ❸存 ❹織田得能(萬延元—明治四四A.D. 1860—1911)述 ❺明治三二刊 ❻東京光德館

法華經講義 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-gi. ❷二卷 ❸存 ❹本多日生(—昭和六A.D. 1931) ❺大正一三刊 ❻東京博文館

法華經講義大要 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-gi-tai-yō. 日蓮上人法華經講義大要 ❷一卷 ❸存 ❹小橋照了編 ❺大正一三刊 ❻(龍大、二四一三・九三)

法華經講式 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-shiki. ❷一帖 ❸存 ❹貞慶(久壽二—建保元A.D. 1155—1213)草 ❺建仁元寫 ❻(金剛三昧院)

法華經講話 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-wa. ❷一冊 ❸存 ❹宮澤英心著 ❺大正一三刊 ❻(龍大、研佛)

法華經講話 ❶(日)Ho-ke-kyō-kō-wa. ❷一卷 ❸存、日蓮宗大系第二 ❹望月歡厚著 ❺昭和七刊 ❻東京大林閣

法華經合論 ❶(日)Ho-ke-kyō-gō-ron. (支)Fa-hua-ching-ho-lun. 妙法蓮華經合論、法華合論 ❷七卷 ❸存、卍續一・四七・四—五 ❹宋慧洪(熙寧四—建炎二A.D. 1071—1128)造、張商英(天禧八—宣和三A.D. 924—1121)撰 ❺本書は黃龍宗の清涼慧洪(傳は五燈會元一七。佛祖通載一九。釋氏稽古略四。等に出づ。初めの名は慧洪。後に德洪と改む。實覺圓明は賜號。自ら寂音尊者と號した。字は覺範。張商英に知遇を受けたが、後に尙書郎趙鳴の事變に會し海南の島に竄せられ三年にして赦されたが、僧籍に還らぬ間に沒した。唯識論に通じ、繁ねて子史にも達し、猶詩をもつて京華に鳴らした。壽五十八)が釋學的見地に立脚して法花二十八品の經文に々懇切に解說し、唯識宗の八識四智の說を用ゐ。又は法相宗の教判を以つて

一代を説き、或は又天台四教説も用ゐ、律・華厳の教義も併せ引き、圓密一致を述べ、そして巧妙に種々の因縁を隨處に交へ調ゆる如きは凡庸の到底なし能はぬ活手腕である。明の淨心居士憑夢が「重刻妙法蓮華經合論跋語」(明・萬曆三七己酉 A.D. 1609)に「曩編の此合論は大都、自己の所悟に就いて正法華を印し、横說竪說して寔の如くならざるはない。又未だ嘗て一語の說破もない。是合論を讀む者は當に下說破處によつて猛けく精采をつくべきである」と述べ、又「教に束ねられた者は其れを見て人師を貶駁し戈を撞つて相ひ向ひ其天機を遺して其の玄黄牝牡を忘むるであらう。豈に敢へて虛無と謂へようか」と慧洪の婆心太だ切なる風光を道破してゐる。又每品末に慧洪の同志(?)たる張商英(傳は宋史三五一。佛法金湯編一三等に出づ)が附論一篇を加へ直截に慧洪を羽翼し張商英の證悟を呈露してゐる。要するに本書は法相學の學匠たる慧洪が禪學的標度を示して教禪一致顯密不二の法華經觀を論述したもの。宋代唯識教學の一面を見んと欲するものの一讀すべき一。

(田島德晉)

法華經骨目 ❶(日)Ho-ke-kyō-kotsu-moku. 法華骨目 ❷一卷 ❸圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—891) ❼(參考)諸宗章疏錄第二、山家諸德撰述篇目集卷上

法華經今讀辨訛 ❶(日)Ho-ke-kyō-kon-doku-ben-ka. ❷一卷 ❻存 ❼(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華經魂魄 ❶(日)Ho-ke-kyō-kon-paku. ❷一册 ❸存 ❹田中巳之助著 ❺昭和六刊 ❻東京天業民報社

法華經權文 ❶(日)Ho-ke-kyō-gon-mon. ❷一卷 ❸得一 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經三玄圓讃 ❶(日)Ho-ke-kyō-san-gen-en-san. (支)Fa-hua-ching-san-hsüan-yüan-tsan. ❷二卷 ❹思考述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經三周圖 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-shū-zu. (支)Fa-hua-ching-san-chou-tu. 法華三周圖 ❷一卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經三十講品釋 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-jik-kō-hon-shaku. 法華三十講品釋 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❹浸畫(—養和頃? A.D. 1181—)述 ❺法華三十講品釋の下を見よ。 ❺元文四刊 ❻(谷大、餘小・四一)

法華經三大部見聞 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-dai-bu-ken-mon. ❷十二卷 ❸存 ❹忠尊(治暦元—保延四 A.D. 1064—1138)述 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經三大部講義 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-dai-bu-kō-gi. 天台三大部講義、法華三大部講義 ❷三十五卷 ❸存 ❹慧證(安永九—文久二 A.D. 1780—1862)述 ❺嘉永二刊 ❻(谷大、餘大・四〇一×龍大、研佛)

法華經三大部疏難字音義 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-dai-bu-sho-gan-ji-on-gi. ❸存 ❹心寶撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經三大部文句見聞 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-dai-bu-mon-gu-ken-mon. ❷三卷 ❸存 ❹賢海撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經三昧懺 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-mai-sen. (支)Fa-hua-ching-san-mei-ch'an. 法華三昧懺儀 ❷一卷 ❸存、大正四六・九四九 No. 1941、續調一〇、卍三〇・八六 ❹隋智顗(大同四—開皇一七 A.D. 538—597) ❻法華三昧懺儀の下を見よ。 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經山家本墓書 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-yama-gaku-bon-ura-gaki. ❷二卷 ❸存 ❹宗淵述 ❾刊本(京大、一・二三ゅ・三六—三七×立大、A一二・五三二)

法華經贊述 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-jutsu. (支)Fa-hua-ching-tsan-shu. 法華經述贊、妙法蓮華經述讃、法華述贊、法華讃述 ❷十卷 ❸唐慧淨(太建一〇—貞觀一九 A.D. 578—645)述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經纂要 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-yō. (支)Fa-hua-ching-tsuan-yao. 法華纂要 ❷一卷 ❹唐惠沼(—開元二 A.D. 714)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經讃 ❶(日) Ho-ke-kyō-san. (支)Fa-hua-ching-tsan. 法華贊 ❷三卷或四卷 ❹法寂述 ❻東域傳燈目錄卷上に云く「出a宋海僧都傳法錄」云々。

法華經讃頌 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-ju. (支)Fa-hua-ching-tsan-sung. ❷一卷 ❻東域傳燈目錄卷上に云く「出a前唐院錄」云々。

法華經讃略 ❶(日) Ho-ke-kyō-san-ryaku. (支)Fa-hua-ching-tsan-lüe. 法華經略讃、法華贊略、妙法蓮華經讃略 ❷二卷 ❹唐惠淨(太建一〇—貞觀一九 A.D. 578—645) ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經止觀輔行講錄 ❶(日) Ho-ke-kyō-shi-kwan-fu-gyō-kō-roku. ❷二十三卷 ❸存 ❹雲空光謙(承應元—元文四 A.D. 1652—1739)述 ❺享保一五刊(京大、日大未・五〇)

法華經四要品要解 ❶(日) Ho-ke-kyō-shi-yō-hon-yō-gai. ❷一卷 ❸存 ❹菅原碩城述 ❾刊本(谷大、餘大・一八三〇)

法華經指掌疏 ❶(日) Ho-ke-kyō-shi-shō-sho. (支) Fa-hua-ching-chih-chang-su. ❷七卷 ❸存、卍續一・九三・三—五 ❹清通理(康熙四〇—乾隆四七 A.D. 1701—1782)述 ❺乾隆一一(A.D. 1746) ❻本書は賢首宗の教義に基いて一經を十門に啓らき、更にこれを細分し、初學に入門の易きを感ぜしめ、漸く引いて堂奥に到らしめんとしたものである。これによつて通理の說は古疏舊說と異る點が神くない。通理(傳は新續高僧傳四集一〇及び本書卷首「堅疏始末」に出づ)は本書を著作せんと志して以來二十餘年の久しき間、苦心練磨し猶執筆以來三星霜を閲して漸くなつたと、「製疏始末」及び卷頭の「別古凡例」に記してゐる。如何に專心に努力し工夫したかを推知すべきである。十門分科とは。一教起因緣。二藏乘分攝。三能被教義。四所被機宜。五體性淺深。六宗趣通別。七部類品會。八疏序通經。九總釋名題。十別解文義である。第九は經題を釋し、第十は經文を解したのである。從つて第一から第八門までは法華一經の大綱玄談と云ふべきものに當る。本書は卷首に「製疏始末」を通理が自ら記し、次に「別古凡例」。この凡例には詳らかに著作上の寔見及び事由等を十五條に分けて記してある。次に目次。次に「法古提綱」。これは法華二十八品大意である。最後に所句がある。次に「法華指掌疏科判」。これは科文である。次に「法華指掌疏懸示」。これは經義を釋するに總じて十門を啓らき(十門分科は華嚴懸談が十門に分つてあるによつて立てたものである)その內第八門までを敎む。第九門・第十門の二門は「指掌疏」に讃つてある。猶第一以下第七門までは通理の自記になつてゐるが第八門の疏序通經は道宜の「妙法蓮華經弘傳序」を註釋したものである。次に正しく「指掌疏」である。通理が述作し、門人の明遠が較字したもの。本書は先づ「九總釋名題」(十門分科の第九)これは大分二。一は經題。二は譯人の次第で述べ、次に十別解文義は大分三。一は叙分。二は正宗分。三流通分。法華二十八品を序正流通三段に分つて一々委曲に賢首宗の教義に從つて記述してゐる。通理の新說卓說も頗る多いが舊說古義に背いた點も多い。これ蓋し清朝佛教學の傾向と云ふべきか。

❺宣統元刊 ❹(谷大、餘大・二九九九)

(田島德晉)

法華經指掌疏懸示 ❶(日) Ho-ke-kyō-shi-shō-sho-ken-ji. (支)Fa-hua-ching-chih-chang-su-hsüan-shih. ❷一卷 ❸存、卍續一・九三・三 ❹清通理(康熙四〇—乾隆四七 A.D. 1701—1782)述 ❻前項の下參照。

法華經指掌疏事義 ❶(日)Ho-ke-kyō-shi-shō-sho-ji-gi. (支)Fa-hua-ching-chih-chang-su-shih-i. 妙法蓮華經指掌疏事義 ❷一卷 ❸存、卍續一・九三・五 ❹清通理(康熙四〇—乾隆四七 A.D. 1701—1782)述

❻本書は「法華經指掌疏」の「懸示」「弘傳序」「法華經指掌疏七卷」の內に記さるる故事熟語の意義を一々典據を挙げて略解したもの。語數すべて「勿經間然」以下二百八十五。最後に淨業弟子寶德の跋語として回向の偈が附いてゐる。

(田島德晉)

法華經字類音 ❶(日)Ho-ke-kyō-ji-rui-on. ❷二卷 ❸存 ❹曇源作 ❾刊本(西敎寺)

法華經持驗記 ❶(日)Ho-ke-kyō-ji-ken-ki. (支)Fa-hua-ching-chih-yen-chi. 歷朝法華持驗記 ❷二卷 ❸存、卍續二乙・七・五 ❹清周克復纂

❻內題して歷朝法華持驗記と云ひ、晉代竺法護の譯經の事跡に筆を起し、明末殺宗崇禎五年工部譚貞默母持經の事に及ぶ、凡そ千三百五十年間に於ける受持・解說・讀誦・書寫・供養等の靈驗記錄である。その作者自らの勸引の序に「戊戌秋、予與金剛持驗。已有流通小引。敬想同人。致刻淨土法華華嚴觀音持驗諸記搜採載籍云云」と云つて居り。觀音經持驗記が其の型順治己亥(清世祖)十六年に同文の勸引序を以て出版せられてゐるから、本書の世に出たのも順治十六年と見るべきであらう。上下二卷時代を遡ぶて僧俗交へ記し、通じて二百二十四項。其の目次は左の如くである。初に法華經持驗記序、勸流通法華持驗引がある。

〔上卷〕 晉羅叉羅摩羅利。晉羅塢摩羅什。晉比丘摩訶羅。晉釋敦淳。晉釋慧遠。晉釋慧持。晉釋僧淑。晉釋法曇。晉釋道融。晉釋曇翼。晉釋法曠。晉釋法穎。晉釋法義。晉瓦官僧。晉秦軍訓程之。宋沙門求那跋摩。宋釋道生。宋釋法莊。宋釋慧慶。宋釋道興。宋釋曇諦。宋釋曇蔚。宋釋普明。宋釋寶通。宋釋僧登。宋釋法慧。宋釋慧亮。宋釋慧果。宋釋慧益。宋釋僧瑜。宋尼慧玉。宋尼道壽。宋羅漢妻。宋尼智通。宋開府王玄謨。宋孫彥曾。齊釋慧簡。齊釋弘明。齊釋法匠。齊釋慧隆。齊釋超辯。齊釋慧基。齊釋僧侯。齊文宣王蕭子良。齊國子博士劉虬。梁釋慧約。梁釋法雲。梁雲光法師。梁釋道琳。梁釋法憬。梁釋法忍。梁釋僧伽。梁尼道積。梁尼法宣。梁貞節先生庾銑。梁參軍甄玄成。梁華手尼。陳南岳尊者慧思。陳釋玄光。陳國子祭酒徐孝克。北魏釋僧照。北魏釋志湛。北魏伽士盧景裕。北齊釋法上。北周釋慧命。北周釋慧遠。隋智者大師。隋釋僧照。隋釋大業。隋釋慧成。隋釋慧超。隋釋灌頂。隋釋貫經。隋釋普明。隋釋智越。隋釋智璉。隋釋智晞。隋釋法誓。隋釋等觀。隋釋大志。隋釋道悅。隋釋曇詢。隋釋曇讚。隋釋慧海。隋釋慧悲。隋釋法光。隋釋法朗。隋釋法喜。隋釋法誠。隋釋法安。隋釋法泰。隋釋玄秀。隋釋行堅。隋法淳。隋嚴悲。隋・王梵行刺史崔彥武。唐律師道宣。唐釋吉藏。唐釋惠主。唐釋玄奘。唐釋玄疏。唐釋寶基。唐釋智聰。唐釋智琰。唐釋智通。唐釋智威。唐釋慧達。唐釋道份。唐釋義忠。唐釋法融。唐釋法徵。唐釋法達。唐釋法瑒。唐釋無畏。唐釋玄朗。唐釋淇然。唐釋神昂。唐釋道邃。唐釋道邕。唐釋神恬。唐釋志鄂。唐釋楚金。唐釋大光。唐國師澄觀。唐釋慧因。唐元和僧。唐釋鑑空。唐釋守素。唐釋無言。唐釋妙行。唐釋遂端。唐釋元慧。唐釋功遂。唐釋慧雲。唐恰員寺僧。唐孫成僧懷秀。唐尼法信。唐中書令岑文本。唐侍郎王淹。唐令狐元軌。唐大理丞韋墟。唐令史史阿誓。唐校尉李山龍。唐大理丞韋仁孫。唐潘果。唐崔義起妻父趙文鑑。唐馬郎婦。唐黃氏二女。唐都水使臣長壽。

〔下卷〕 五代大慈寺僧。吳越釋道潛。吳越智覺禪師。吳越釋鴻楚。吳越釋可周。晉釋自新。周釋義楚。宋釋紹晨。宋釋義寂。宋釋義通。宋釋晤恩。宋釋省念。宋釋智禮。宋釋遵式。宋法華大士志言。宋釋本如。宋釋祖詔。宋釋有鑑。宋釋處咸。宋釋鑒照。宋釋可久。宋釋繼忠思照。宋釋中立。宋釋淨梵。宋釋草巖。宋釋宗利。宋釋道琛。宋釋從雅。宋釋含瑩。宋釋思南。宋喩思淨。宋左仲。宋范鎮。宋司獄張慶。宋軍使李遇。

宋刑部陳沅。宋特制是説之。宋知州張秉。宋姜學士。宋潘延陵翁。宋朱氏如一。宋重母李氏。宋蘇陽文悲統。宋道母。宋黄晏。宋秦氏淨堅。宋宜人陳氏。元釋弘濟。元陳君瑋。明釋善驅。明蓮池大師。明釋德清。明釋洪恩。明釋眞覺。明釋眞清。明釋性寿。明釋傳燈。明釋傳記。明釋廣益。明釋廣承。明釋僧復。明釋性天。明釋濟舟。明釋行仁。明釋永祺。明釋明勤。明童子。明郡丞龍得孚。明朱元正先生。明邑令王立毅。明尤弘遠。明馬琬。明太僕陳濟生。明工部潘良默母。明天和三刊　❾(谷大、餘大・一七三七)(菅、ある・二・左・一)　(石井堯憲)

法華經直談鈔　❶(日)Hō-ke-kyō-jikki-chō-shō. 法華直談鈔　❷十卷或二十卷　❸存　❹榮心述　❺寛永一二刊(叡山、天海)(龍大・二四一三・九七)　萬治二刊(谷大、餘大・一七〇八)(正大・一一四二・一八五)(立大、A一二・四一五)(高大・一・二三)寫本(谷大、餘大・三二二五)(高大、寄・一・一五)足利中期寫(金剛三昧院)

法華經七喩三十無上述　❶(日)Hō-ke-kyō-shichi-yu-san-jū-mu-jō-jutsu.　❷一卷　❸東域傳燈目錄卷上に云く、出ー叡山前唐院錄に云々。

法華經指要　❶(日)Hō-ke-kyō-shi-yō. (支)Fa-hua-ching-chih-yao.　❷四卷　❹契明述　❷(參考)　新編諸宗教藏總錄第一

法華經釋　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku. (支)Fa-hua-ching-shih.　❷一卷　❹唐曇延述　❷(參考)　新編諸宗教藏總錄第一

法華經釋　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku. ❹寛證(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822)　❷(參考)　本朝古画撰述密部書目

法華經釋　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku.　❷一卷　❸存、大正五六・一七七No.2136 異本二、日本大藏經第二二法華部章疏第二　弘法大師全集第四教相部、異本開題之內　❹空海/寶錄五—承和二A.D.834—835)　❺承和元(A.D.834)　❻著者眼より法華經の要旨を述べ、經題を釋した書。弘法大師は數本の法華經開題を作られた訳、本書はその中の一で、承和元年二月奈良東大寺眞言院で開演した旨題下に注してある。開題類は多くは講演法會に因んで作られたもので、その內容は大同小異である。本書には此經を釋するに顯祕の二途ありと云ひ、而も顯釋は殆どこれを說かず、主として祕密釋を作してゐる。即ち一切經を釋するに、造情表德、淺略深祕、字相字義、一字攝多多字攝一、一字釋多多字釋一、一字成多多字成一、一字破多多字破一、順親旋轉逆親旋轉の十六門あることを述べて且く一字攝多門について經題を釋し、更に四種曼荼羅に約して說いてゐる。　❷(注釋)　妙瑞撰法華經釋謹順記一卷(元文三作、刊)　❾仁平元寫(石山寺)寶永三刊(龍大・二〇二一・一)　(小田慈舟)

法華經釋　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku. (支)Fa-hua-ching-chieh-yao.　❷一卷　❸存　❹浸意(—幾和頃?A.D.1151—)述　❺永享一二寫　❾(谷大、餘甲・五六)

法華經釋聞書　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku-kiki-gaki.　❷一冊　❸存　❾寫本(寶龜院)

法華經釋謙順記　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku-ken-jun-ki.　❷一卷　❸存、日本大藏經第二二法華部章疏第二　❹妙瑞(元祿九—明和元 A.D.1688—1764)　❺元文三(A.D.1738)　❻本書は承和元年(A.D.834)中春の月に東大寺眞言院(一名南院)に於いて弘法大師空海が「法華經釋」を開演され、それを筆錄して「法華經釋」と名づけた。この「法華經釋」を大に三門(初めに題目を解し、二に時處。(承和元年東大寺眞言院)三に本文)に分ち、淺略・深祕の釋を用ひて顯劣密勝の義を顯揚し眞言家の法華經觀を最も直截に宣顯してゐる。眞言宗の學匠が法華經の大綱を提示したものには頗る雄篇が多い。例せば弘法大師空海撰法華開題(これに三本あるが、「弟子正五位上三嶋眞人助成。歸命三寶」なる語を卷初に置く、開題の卷尾には「天長六年七月十八日平城京西寺命」と附記してゐる。若しこの開題が親撰だとすれば空海は入寂前七年には西寺で法華を講じ、入寂の前年にも重ねて法花を講じられたことゝなる。)や聖護上人撰、法華經祕釋」の如きがそれである。眞言宗の法華經觀は淺略釋と深祕釋又は四種本曼。又は顯教密教の釋を用ひて法相三論天台華嚴の義を淺なり顯なりとし眞言宗の義を深なり密なりと簡別し、勝劣を說くる。年然この義を立つる旨趣を本書は歷史的に叙述して密教教義を加へざる以前の法相三論天台華嚴を措して顯教と名づけ、無長金剛智以後の眞言宗を密教といふ。こゝに言家の法華經觀は述べらるとなす。又本書では本曼法門を絲力唱導するものが眞言宗の法華經觀なりといふ。特に六重本曼の義の如きは日本天台に密接な關係があり、安然の本曼思想と如何なる交涉を結ぶべきものなるやの如き研究は最も有宣義な研究と信ずる。本書は本文を大段二つとし、初めに序分、二に正宗とす。序分を又二となす。初めは常途の淺略序。二は隨自深祕序。淺略の下では顯義によつて諸品の要義を略述し、次に自性淨心の祕密名號としての人法を說き、次に正宗も二大段に分れ、初めは略說。二は廣釋。略說の下では顯教は淺略門であるとして法相三論天台華嚴の各宗から見たる法華經觀を略說し、併せて祕密觀の名號に就て叙す。廣釋の第二には十六玄門・四曼・經題九字門・四種阿字に約して經題を梵漢にかけて釋し、宗義宇相によつてこれを解する。と共に、蓮華章としての觀音を主として六重本曼の感應・四曼・本迹・菩提心・三十七尊・無量佛剎微塵身の法身の章を釋し、若し行者がこの三密觀を修せば本有の衆德を成じ速かに究竟大曼陀羅を得て大曼位に入るといひ、これが經題の梵名九字に具する宇義門を說いたものであるといふ。是の如き註が何故に「謙順記」と名づけられるゝのかと疑ぬれば、全く記す所がないから註の題號撰定の旨趣は未詳。本書の特色と見るべきは眞言家の法華經觀を最も親切

に述べてゐることゝ「若し能く能く密號名字を解すれば……諸宗の紛擾は悉く解決して詩ひも止むであらう」といふたことゝである。妙瑞の傳は日本大藏經・解題上ノ四〇三に出づ。字は慧深、讃岐の人、高野山の學匠である。根來の學匠たる敞隆と教相問題で論諍したのは著名。著述三十餘部。　❾元文四刊(龍大、二四一三・九八)(谷大、餘大・一九八二)(高大、寄・一・二三)(京大、日大未・四四)文化四刊(龍大、研佛)　(田島德晉)

法華經釋私記　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku-shi-ki.　❷二卷　❸存　❹墨寂(延寶二—寛保二A.D.1674—1742)述　❺元文五寫　❾(谷大、長保・一一八)

法華經釋籤緣起序指明　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku-sen-en-gi-jo-shi-mei. (支)Fa-hua-ching-shih-chien-yuan-chi-hsing-chih-ming. 釋籤緣起序指明　❷一卷　❸存、卍續一・四四・五　❹靈耀述　❺清康熙二二(A.D.1683)　❻本書は普門子撰「釋籤緣起序」に就いて先づ科と註とを附し、釋籤撰述の由來を詳解せるもの。この緣起序は淇然門下の普門(傳は統紀一〇に出づ)の撰に係り、名文麗句で綴られてゐるために讀者頗る難解とするもの。本書によればこれを讀むこと掌を指すが如く容易である。靈乘が敢文に於いて「普門師は千餘年の前に結構し、全公、靈耀全彰のこと。靈耀の傳は未詳)は千餘年の後に指明せらる。日月を中天に揭げたるが如く、爾來の眼目を問かれたものである」といふ。誠に酷りといふべし。(田島德晉)

法華經授手　❶(日)Hō-ke-kyō-jū-shu. (支)Fa-hua-ching-shou-shou.　❷十卷　❸存、卍續一・五一・三—五　❹智祥集　❺清康熙二二(A.D.1683)　❻本書は雲栖師智祥が蘭茶浮木老人(傳未詳)の囑を康熙の初年頃に受けたことが直接の因緣となり、十七年程を經過し後、康熙十九年から執筆し、四箇年の星霜を重ね、主として一如の「科註」により傍ら「直指」、「要解」、「知音」、「大疏」を參照し、初學者に便せんとして作つた。然し舊疏を悉く採つたのではなく、各疏の最も長所を用ゐると共に或は折衷參訂も試みた。猶吉祥の自說を加へた所もある。又、一種の分科は惑山大師德清の品科を採つてゐるが殊減して隱錄してゐる。授手と名づけた所以は敢へて隻手を出したのではない。因よりこれを初學者に授くるあらんとしたからである。之によつて本書撰述の用意の一端を知るべきである。本書は卷首一卷と授手十卷とからなる。卷首一卷には、先づ目次。次に康熙二十四年三月上巳日嶽南嵩山餘雲庵撰の「序」と、同年六月二十日衡陽の全簡夢錫撰の「雲栖師法華授手序」と、同年五月四日髮姪衡陽熊震撰の「序」と、同年孟秋月陽逸士第內閣中書彥驄撰の「法華授手序」と、康熙二十二年夏六月十日楚衡雲栖沙門頑吉智祥識の「妙法蓮華經授手緣起」と、「凡例」十一條と、「妙法蓮華經大意」との大意は初學者に一經の梗概を示さんがために經前に別に附したものであると「凡例」に述べてある。要するに敎師一貫の態度で法相・華嚴・天台・禪の用語を併せ用ひ經の大旨を說いてゐる。次は道宣述の「法華經弘傳序」の註。但し表題を「妙法蓮華授手弘傳序」としたのは恐らく筆生の寫誤か。次に「法華授手科」で畢る。

次に正しく「授手」卷一となる。先づ經題を略述、次に譯者、次に二十八品を各品々に隨つて釋し、又各品の下で經文を科に分つて一々詳述。科段は一經三分の法によつてゐる。本書の特色として特に目につくことは意義を一々附してあること。然し註解は初學のために作つたとしてはやゝ詳細に過ぎるの感がある。　(田島德晉)

法華經授手科　❶(日)Hō-ke-kyō-jū-shu-kwa. (支)Fa-hua-ching-shou-shou-ko. 法華授手科　❷一卷　❸存、卍續一・五一・三　❹清智祥(—康熙二二A.D.1683)撰　❺前項の下參照。

法華經授手卷首　❶(日)Hō-ke-kyō-jū-shu-kwan-shu. (支)Fa-hua-ching-shou-shou-chuan-shou.　❷一卷　❸存、卍續一・五一・三　❹清智祥(—康熙二二A.D.1683)撰　❺法華經授手の下參照。

法華經釋文　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku-bun. 妙法蓮華經釋文、法華釋文　❷三卷　❸存、大正五六・一四四No.2129、日本大藏經第一二法華部章疏第二　❹仲算(永平五—貞元A.D.955—976)述　❺妙法蓮華經釋文の下を見よ。

法華經釋問題　❶(日)Hō-ke-kyō-shaku-mon-dai.　❷三帖　❸存　❾大永三、寛德元、長享二寫(寶壽院)天文一九寫(寶龜院)

法華經主義　❶(日)Hō-ke-kyō-shu-gi.　❷一卷　❸存　❹北尾日大　❺大正五刊　❻東京新日蓮主義社

法華經頌　❶(日)Hō-ke-kyō-ju.　❷一卷　❸存　❹具儀記　❾寫本(曼殊院)

法華經壽量品探靈略記　❶(日)Hō-ke-kyō-ju-ryō-hon-tan-rei-ryak-ki. 妙法蓮華經壽量品探靈略記　❷一冊　❸存　❹何合日辰著　❺明治四二刊　❾(谷大、餘大・三六八八)(立大、A〇三・一一九—一二〇)

法華經秀句　❶(日)Hō-ke-kyō-shū-ku. 法華秀句、法華廣秀句、法華補照、法華補照、法華經補照　❷三卷或五卷　❸存、日本大藏經第三九天台宗疏數章疏第一、傳教大師全集第三(新)　❹最澄(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822)述　❺法華秀句の下を見よ。

法華經宗義鈔　❶(日)Hō-ke-kyō-shū-gi-shō.　❷十三卷　❸存　❹優陀那日輝(寛政一二—安政六A.D.1800—1859)述　❾明治元—一二刊(京大、日大未・五三)明治一一刊(谷大、餘大・八九七)

法華經宗要　❶(日)Hō-ke-kyō-shū-yō. (支)Fa-hua-chung-tsung-yao. 法華宗要　❷一卷　❸存、大正三四・八七〇No.1735　❹新羅元曉(貞平五三九A.D.617—)述　❺法華宗要の下を見よ。　❼(參考)　新編諸宗教藏總錄第一、東域傳燈目錄卷上、華嚴宗經論章疏目錄

法華経田舎老人説教物語 ㊀(中)Ho-ke-kyō-shar-ri-shō-ji-hi-chi-mi-yaku. 田舎老人。仏教説教。 ㊁法華経。 ㊂(仮名)。 ㊃(仮名)。 ㊄(仮名)。 ㊅(仮名)。 ㊆(仮名)。 ㊇(仮名)。 ㊈(仮名)。 ㊉(仮名)。 ㊊(仮名)。 ㊋(仮名)。 ㊌(仮名)。 ㊍(仮名)。 ㊎(仮名)。 ㊏(仮名)。 ㊐(仮名)。 ㊑(仮名)。 ㊒(仮名)。 ㊓(仮名)。 ㊔(仮名)。 ㊕(仮名)。 ㊖(仮名)。 ㊗(仮名)。 ㊘(仮名)。 ㊙(仮名)。 ㊚(仮名)。 ㊛(仮名)。 ㊜(仮名)。 ㊝(仮名)。 ㊞(仮名)。 ㊟(仮名)。 ㊠(仮名)。 ㊡(仮名)。 ㊢(仮名)。 ㊣(仮名)。 ㊤(仮名)。 ㊥(仮名)。 ㊦(仮名)。 ㊧(仮名)。 ㊨(仮名)。 ㊩(仮名)。 ㊪(仮名)。 ㊫(仮名)。 ㊬(仮名)。 ㊭(仮名)。 ㊮(仮名)。 ㊯(仮名)。 ㊰(仮名)。 ㊱(仮名)。 ㊲(仮名)。 ㊳(仮名)。 ㊴(仮名)。 ㊵(仮名)。 ㊶(仮名)。 ㊷(仮名)。 ㊸(仮名)。 ㊹(仮名)。 ㊺(仮名)。 ㊻(仮名)。 ㊼(仮名)。 ㊽(仮名)。 ㊾(仮名)。 ㊿(仮名)。 (1)(仮名)。 (2)(仮名)。 (3)(仮名)。 (4)(仮名)。 (5)(仮名)。 (6)(仮名)。 (7)(仮名)。 (8)(仮名)。 (9)(仮名)。 (10)(仮名)。 (11)(仮名)。 (12)(仮名)。 (13)(仮名)。 (14)(仮名)。 (15)(仮名)。 (16)(仮名)。 (17)(仮名)。 (18)(仮名)。 (19)(仮名)。 (20)(仮名)。 (21)(仮名)。 (22)(仮名)。 (23)(仮名)。 (24)(仮名)。 (25)(仮名)。 (26)(仮名)。 (27)(仮名)。 (28)(仮名)。 (29)(仮名)。 (30)(仮名)。 (31)(仮名)。 (32)(仮名)。 (33)(仮名)。 (34)(仮名)。 (35)(仮名)。 (36)(仮名)。 (37)(仮名)。 (38)(仮名)。 (39)(仮名)。 (40)(仮名)。

義決の下を見よ。

法華經疏義纘 ❶(日) Ho-ke-kyō-sho-gi-san. (支)Fa-hua-ching su-i-tsuan. 法華疏義纘、法華經義纘、法華文句東春、天台法華疏義纘、法華義纘、法華文句義決、法華文句記 ❷六卷 ❸存、卍續一・四五・三 ❹唐代智度述 ❺本書は天台の法華文句の注釋であるが、一部の結構は初めに法華玄義によつて釋名・顯體・明宗・明用・判教の五章を挑說し、次で法華の本文、天台の疏及び荆溪の記等に渉つて懇切なる注釋批判を試みてゐる。著者智度は古來荆溪流派の門下と云はれるが、其の傳は僧傳に明瞭でない。但し本書に於ける注釋の態度を見るに餘程俱舍唯識の學に精通してゐたものゝ如く、其の得意の學解を以て先聖道遷の輔正記の說や、師荆溪の所論をも破して、自己の所懷を忌憚なく主張してゐる。又三大部研究の好指南である。 (石井亮藏)

法華經疏玄談 ❶(日) Ho-ke-kyō-sho-gen-dan. (支)Fa-hua-ching-su-hsuan-t'an. 法華經玄談、妙法蓮華經玄談 ❷一卷 ❸陪吉藏(大清三—武德六 A. D. 549—623)述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2143

法華經疏談 ❶(日) Ho-ke-kyō-sho-dan. (支)Fa-hua-ching-su-t'an. ❷一卷 ❹利明述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2114, 2115

法華經序考 ❶(日) Ho-ke-kyō-jo-kō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大・研佛)

法華經序注 ❶(日) Ho-ke-kyō-jo-chū. (支) Fa-hua-ching-hsu-chu. ❸存、法華經要解(戒環)之內 ❹宋師遇

法華經助記輔略抄 ❶(日)Ho-ke-kyō-jo-ki-fu-ryaku-shō.(支)Fa-hua-ching-chu-chi-fu-lüo-ch'ao. 法華助記輔略抄 ❷二卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經抄 ❶(日) Ho-ke-kyō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹經聽(保延五—建仁二 A. D. 1139—1202)撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經抄 ❶(日) Ho-ke-kyō-shō. ❷八卷 ❸存 ❹宗觀撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經抄 ❶(日) Ho-ke-kyō-shō. (支)Fa-hua-ching-ch'ao. 法華鈔 ❷六卷 ❹道遷(遷一作遷)述 ❺東域傳燈目錄卷上に云く「釋=吉藏疏=上出=道遷記二十卷=若廣略別異。可ゝ尋ゝ之」云々。法華鈔の下參照。

法華經抄私 ❶(日) Ho-ke-kyō-shō-shi. ❷1帖(缺=首卷尾=) ❸存 ❺慶長二寫 ❻寫本(金剛三昧院)

法華經鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-shō. 法華經科註鈔、科註法華經鈔、法華科註私、法華定珍鈔、妙法蓮華經鈔 ❷二十二卷或二十三卷 ❸存 ❹定珍(天文三—慶長九 A. D. 1534—1604)述 ❺萬治二刊(龍大、二四一三・一〇一)—一七冊(晉・の・六・右・一六)一八—二三冊(晉・の・六・中・七)

法華經掌記 ❶(日) Ho-ke-kyō-shō-ki. (支)Fa-hua-ching-chang-chi. ❷十卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經捷徑錄 ❶(日) Ho-ke-kyō-sho-kai-roku. ❸存、五部大乘捷經之內 ❹慈恕(寬永一七—元祿八 A. D. 1640—1695) ❺元祿五刊 ❻(龍大、二〇三・一五)

法華經銷文略疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-shō-mon-ryaku-sho.(支)Fa-hua-ching-hsiao-wen-lüe-shu. ❷三卷 ❹慧秀集解 ❼(參考) 入唐新求聖教目錄、日本國承和五年入唐求法目錄、東域傳燈目錄卷上

法華經撮釋 ❶(日) Ho-ke-kyō-sho-shaku. (支)Fa-hua-ching-chuo-shih. 法華經玄賛撮釋、法華玄賛撮釋、妙法蓮華經撮釋 ❷四卷 ❸存、卍續一・五三・一—二 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一 A. D. 678—733)述 ❺法華經玄賛撮釋の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經上宮王義疏抄 ❶(日)Ho-ke-kyō-kyō-ō-gi-sho-shō ❷一卷(殘缺) ❸存、大日本佛教全書第一四 ❹宗性(建仁元 A. D. 1201—)述 ❺寫元四以後(A. D. 1234—)

❻聖德太子の法華義疏四卷(—A. D. 623)に對する現存最古の註疏である。宗性はその著日本高僧傳要文抄や日本高僧傳指示抄等の典書によつて逆算すれば、建仁元年の誕生である。十三歲を以て出家し、南都に華嚴、因明、俱舍、法相等を研めた華嚴宗の學匠であり、常に東大寺の尊勝院に住した。後嵯峨上皇の爲に華嚴の深理を談じ、又華嚴宗義に依つて鈔數卷を撰んで叡覽に供へた賞として玉版六十帖を賜り、權大僧都に任ぜられて居る。四十八歲から五十歲に至る撰日本高僧傳要文抄三卷と日本高僧傳指示抄一卷の自筆本が東大寺に現存して今印行されて居る。文應元年の七月東大寺第百二代の別當を拜會(時に五十九歲)し、三年間住職して、又尊勝院に退き、七十餘歲を以て示寂した。聖德太子の法華義疏が始めて印行せられたのは寶治元年(A. D. 1247)であり、時に宗性は滿四十六歲である。即ち後嵯峨天皇御讓位の翌年である。法華義疏が印行せらるゝ迄には熱心な時代の要求のあつたことを豫想しなければならず、印行の後は更に學的な研究と講讃とが行はれたと思惟される。隨つて、宗性も亦屢々これを講讃したものとみられ、恐らくその書き殘されたものが本書であらう。誠に謹直な玉版の淨書一帖が現に東大寺圖書倉に藏せられて居る。

從來二卷の殘缺一卷とせられてゐるが、現存の一帖は序品と方便品との二品に關するものであり、隨つて法華義疏四卷に對する抄四帖の中の第一帖が殘存してゐるのではないかと考へられる。序品の中に於て、近喬、蓮華、經、二十七品、正宗分科、科段、我、住處、偈、阿難、羅睺羅、樂辯、行本、寶光、四禪天、緊那羅乾達婆、阿修羅、阿闍世來會、四衆、無量義經、入定、光明他土、光明遍十方、本義放光此土說、捨落迦葉來會、二念一晨、一念一晨、彌勒問讃、略入定說法、不須分重、四重伏難、文殊已成如來、三善、過去佛說法華、不顯問答辨、四義、應同、放光、六十小劫說法、

八王子の四十問答を以てし、方便品の中に於て、題目、甚深無量義解難入、三理有無、三教有無、法華涅槃優劣、五時教、二智興廢、於佛無別、五不同、具遠五故、諸法實相、十如是、仰信發解、新發意菩薩、不退菩薩、偈之開三顯一次第、三請二止、世々受化、三品不同、三根領解、舍利弗實類羅睺、增上慢退、方便、所以者何、開示悟入、一乘開會、會三ゝ五濁出世、除一大乘機、餘佛、貧著於生死、爾前作佛、所願滿足、衆生夫曾修善本、未發心成佛、密顯壽量義、千二百自知作佛、三世諸佛說法華の三十八問答を以て す。法雲や吉藏の疏に對して屢々太子の義疏の勝れたる點を揭揚して居る。

宗性は本邦に於ける最古僧傳集の編者であると共に、又實に聖德太子の三經義疏に對する本邦最初の註釋者たる名譽を荷ふ學匠である。其の門に自稱華嚴金律金剛欣淨三經學士凝然の出でたるは宜なる哉である。凝然の法華疏慧光記六十卷の完成(A. D. 1314)は本書より五六十年の後である。

❾自筆本(東大寺圖書館) (花山信勝)

法華經常不輕品宗義鈔 ❶(日) Ho-ke-kyō-jō-fu-kyō-hon-shu-gi-shō. ❷一卷 ❸存 ❹日輝(寬政一二—安政六 A. D. 1800—1859)述 ❺明治八刊 ❾(龍大、二四一三・一〇二)

法華經新註 ❶(日)Ho-ke-kyō-shin-chū. 冠註略解法華經新註、妙法華經馬註、妙法華經科註、法華新註、妙法蓮華經新註 ❷八卷或十二卷 ❸存 ❹明一如(—永樂一六 A. D. 1418—)集註、淨厳(寬永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)冠註 ❾貞享五刊(谷大、餘大・七)(京大、藏・一七ホ・五)元祿三刊(高大、寄・一・二三×)(龍大、研佛)明治一三刊(正大、一一四二・二二二×)(帝國、一八六・一五)明治一五刊(谷大、餘小・七八)

法華經親聞記 ❶(日) Ho-ke-kyō-shin-mon-ki. 法華經聽記 ❷四卷 ❸存 ❹揭諦(文化三—慶應元 A. D. 1806—1865) ❺嘉永三寫 ❾(谷大、餘大・四一七七)

法華經神颯兩品宗義鈔 ❶(日) Ho-ke-kyō-jin-sotsu-ryō-hon-shu-gi-shō. ❷一卷 ❸存 ❹日輝(寬政一二—安政六 A. D. 1800—1859)述 ❺明治五刊 ❾(龍大、二四一三・一〇五)

法華經隨音句 ❶(日) Ho-ke-kyō-zui-on-ku. ❷二卷 ❸存 ❹日遠(元龜三—寬永一九 A. D. 1572—1642)記 ❾寬永二〇刊(立大、A〇三・八—九)(龍大、二四一三・一〇六)(谷大、餘大・二四二九)寬文九刊(立大、A〇三・一〇、一一一)

法華經精解評林 ❶(日)Ho-ke-kyō-sei-kai-hyō-rin. (支)Fa-hua-ching-ching-chieh-p'ing-lin. ❷二卷 ❸存、卍續一・九三・一 ❹明焦竑撰

❺本書は經及疏師先德の疏の文を摘錄して經の主旨及經文を解說評釋したもの。唯識論に通達せる戒環と註釋と及南とを中心とし、これに諸處に自說を記し、騎、天台、山谷寂、自樂天序法華院石壁金字經、行簡子、增一阿含、無量義經、阿僧、補註、觀學衆記、華嚴、若無讃等の文を依據として義を釋す。發明の義はないが複雜な法相の說明を略し簡的に經意を會得せしめんと企てゐる。

❾寫本(京大・藏・七ホ・二七) (田島德晉)

法華經前六意 ❶(日) Ho-ke-kyō-zen-roku-i. (支)Fa-hua-ching-ch'ien-liu-i. ❷一卷 ❸存、法華經科註(徐行義)之內 ❹宋與成(—隆興元 A. D. 1163)撰 ❾刊本(京大、藏・七ニ・五)

法華經草案鈔 ❶(日) Ho-ke-kyō-sō-an-shō. 法華草案鈔 ❷十二卷 ❸存 ❹日朝(應永二九—明應九 A. D. 1422—1500) ❾永應四板(京大、日大・栄・三五)刊本(龍大、二四一三・一〇七)

法華經總釋 ❶(日) Ho-ke-kyō-sō-shaku. 法華品釋、法華經品釋 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一一法華部章疏第一 ❹光雅(延文五—應永三四 A. D. 1360—1427)撰 ❺應永三一(A. D. 1424)

❻本書は法華開結十軸を三十日間に毎日問講する三十講論義に用ひる品釋である。そして法相宗で所依とする玄賛等に基いてゐるから奈良興福寺系のものである。『宗釋』があれば必ず『卷釋』と三十講の問答即ち『法華三十講四條論義』とがなければ完備したものではない。日本大藏編者が品釋だけを採錄して他の卷釋等を略したことは南都法相宗論義を忠實に世に紹介したことにはならない。そして法相宗の三十講論義を牧むると共に北嶺即ち天台宗の法華三十講論義に用ひる卷釋・品釋・四條論義も採錄して古來有名な南都北嶺の論義を示すべきであつたと思ふ。三十講とは法華開經たる無量義經には三品あるがこれを一座とし、法華二十八品を二十八座に分ち、普賢觀經を一座とするから合せて三十座の問講が修されるから三十講といふ。若し法華八卷を一卷づつ八座に分つて問講すれば法華八講である。この八講の經釋には『卷釋』を用ひ、三十講の經釋には『品釋』を用ゆ。本書は無量義經德行品以下各品に就いて三門分別をなす。一は經の起意を述べ、二に經の題目を釋し、三に經の本文を科す。一は來意即ち前段に續いて今の一段が起る所以を述べ、二は經若しくは品の名義を一々略釋し、三は經若しくは品に分段を施し內容の概要を略述する。この第三科a本文の一段を述べた次に四條論義(義と別義)に移るのである。その時に「抑經初文如何」と講師が云ふ。本書の無量義經の釋の終りにこの文が明してあるから本書は論義に用ひる品釋であることが明瞭に知られる。本書が法相宗所用の品釋であることの一例は法華經序品の第一叙=經起意=の段で法相宗から觀たる法華開結十軸の綱要なりといふべきである。但し第三十講の觀普賢菩薩行法經の經釋だけは法相宗の祖師の撰述に係る疏がないから且らく他宗の疏に依つて經文を科簡してゐる。本書は奥書に「春日社を新造した應永三十一年二月日に僧正法印大和尙位光雅が料紙に唐院にあつて新調した」とある。故に恐らく光雅の撰か。又奥書の別筆

に「古本奥に云く。當室を建立した本願の光雅僧正の談義なり。同白は應永三十一年。同三十四年四月二十八日逝去し畢んぬ」とある。光雅の傳は興福寺別當次第五（佛全一二四・四九頁）に「權別當權僧正光雅。松林院、六十（歳）。應永二十六年五月十九日宣下。」とあり、又同二十九年には「講敎、僧正光雅云云」とあり。又興福寺院家傳（佛全一二四・六四頁）の松林院の條には「光雅。權僧正。僧正。懐雅僧正弟子。從一位大納言伸元卿子。喜慶二年研學竪義。應永十五年講師。同十六年探題（他寺初）。同二十六年五月十九日補權別當。同二十九年二月十二日辞正。同三十一年二月二十九日薨。次に家系を出す。略して系すれば下の如し。閑院流實房（左大臣）―公氏（中納言）―實綱―尊懐―懐雅―光雅（懐雅の子の内の四男は菩南都で出家。光雅は第四の末弟である。）等とある。上記によつて光雅は應永三十四年に六十八歳で逝去したことが知られる。（田島德音）

法華經俗談 ❶(日) Ho-ke-kyō-zo-ka-dan. ❷一卷 ❸存 ❹雲空光謙・承應元―元文四 A.D. 1652―1739）述 ❺寫本（龍山、菩調）

法華經囑累前後問答 ❶(日) Ho-ke-kyō-zoku-rui-zen-go-mon-dō. 法華囑累問答 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛敎全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍（弘仁五―寛平三 A.D. 814―891）說寛平四、年七八歳）述 ❺本書は法華經にあつて囑累品の位置は神力品の後に在る可きか勸發品の後に在る可きかの前後の位置問題に就き天台宗義よりは神力品の後に在るが正當なりと主張した論文である。即ち羅什譯妙法華は此品を神力品の後に置き竺法護譯の正法華及び法華論は勸發品の後に置いてあるが、此れは何れが是か非かの問題に關し作者は天台、三論の意よりせば什譯の如きが正意なりとし別溪湛然說により基法師說を難じてゐる。即ちいふ。若囑累品在寶塔者、至二說經竟一、始合二分身各還二本土一。若爾至二說經竟一、新是淨土、若爾神音來時、何故被レ讃二於此國土四生不劣想一乎、所以安二神力品之後一爲二正義一也」と。基師の八相違とは一者衆本相違、二者經論相違、三者諸敎相違、四者二塔並角、五者二命不齊、六者塔無還處、七者淨穢有殊、八者衆喜並情にして此難を造するに湛然は記十に總別二敎を立て總中に八不可、別中に具に八難を造す。八不可とは一者無出塔處不可、二者佛無散處不可、三者無復穢處不可、四者無還地獄不可、五者須加而去不可、六者須除而去不可、七者法無所歸不可、八者師弟坐儼不可であり、更に涉法師が二難即ち佛無就座難、衆無命座難に對しては前者に八の例難、後者に九種の例破あるを示し且つ正法華の誤り十一點を示し、結局今經の品次は什譯が正しき事を述べ、最後に囑累前後の證文として大品般若・道行般若・小品般若・大悲・大明度・般泥洹・四童子・大法東陀羅尼の諸經をあげて居る。

蓋し今品前後の問題は古來の論點であり、圓珍は評議あるを悲しみ偏執者の蒙を啓き幽鏡たらしめんとして諸文の意を集め妙法華の正當なるを論ぜるものである。❼(參考) 釋敎諸師製作目錄第三、諸師製作目錄、山家諸回撰述目錄、智證大師撰述目錄、增補諸宗章疏錄 （淺遠晁昌）

法華經囑累品問答 ❶(日) Ho-ke-kyō-zoku-rui-bon-mon-dō. ❷一卷 ❸無編定慶撰 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上 ❹大安 ❺寫本（龍大、二四一三・一一三）

法華經囑累品聽記 ❶(日) Ho-ke-kyō-zoku-ru-ni-bon-chō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹大安 ❺寫本（龍大、二四一三・一一三）

法華經陀羅尼梵本 ❶(日) Ho-ke-kyō-da-ra-ni-bon-pon. ❷一帖 ❸存 ❺治暦三寫 ❻(寶善提院)

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. 法華大意、妙法蓮華經大意 ❷一卷 ❸唐明曦（―大暦一二 A.D. 777―）述 ❹法華經二十八品由來各品開題の下參照。 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. (支) Fa-hua-ching-ta-i. 法華大意、妙法蓮華經大意、法華品釋 ❷一卷 ❸存、卍續一・四三・二 ❹唐湛然（景雲二―建中三 A.D. 711―782）述 ❻本書の内題には法華大意一卷とあるも、現行本は上下二卷に分たれ、両も尾題には法華品釋上等としてある。法華一部を哲半し、上卷に前十四品を下卷に後の十四品を釋してゐる。卷頭先づ法華一經の大綱を述べ、次に經の波題を釋し、次で入文別釋に入るが、其の前に一部廿八品を分節し、一經三段と二門三段との兩種を出すこと法華文句と一轍である。各品の釋相は、初に品の來意を示し。次に品題を解說し、次で品文に入るが、此は一品の大科を分ち、文の起盡を明にすることに依て品の要旨を闡明してゐる。釋義の大體は天台の釋に依準したものだが、作者の最も力を注いだのは品々の大意を說く點にある。所謂四六文體を以て華麗莊重に綴られ、恰も法則集の如く現行の法華品釋と頗る類似してゐる。文中十方佛土唯有二一乘一、謂存二五姓一、謂人諸レ法受二殃三途一、求レ友求レ法攀二緣於萬代一（上ノ八譬喩品釋）の如く、慈恩家を對手とするが如き口吻が所々に散見せらるるは注意すべきであらふ。

明暦年中本書板行の際、筆者不明の點譯者の後記に、「詮辭筆力愚の湛然の作に似ず、統紀の典籍史に名目がない、蓋偽未詳の旨を述べてゐる。剖溪の作として如何かと思はるゝ點もあるが偽作と斷ずべき證左も見當らない。宣澄の持來錄には、大意一卷、明曦述十紙とあり、圓珍錄、義天錄、東域錄等にも明曦の大意の名はあるが湛然の者はない。玄日錄に初めて湛然の大意の名が出るが、分註に敎觀統紀並不レ出と註して疑義を存してゐる。かく本書は古來偽疑の書ではあるが、天台の立場から簡短に法華一部の綱領を說けるものとして一讀の價値は充分にある。

❺明暦四刊 ❻(谷大、長保・一一五)(龍大、

二四一三・一〇九） （中里貞隆）

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. ❷一紙 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❹寂澄（神護景雲元―弘仁一三 A.D. 767―822）

❻行住坐臥の間に於ける法華經の體得に就て、簡單に其の心得を述べられたものなり、要は「妙法とは如來藏の理なり、此の理を解して忘れずんば、行住坐臥の間、自然に菩提を得」と云ふにあり。文、一紙を過ぎず。傳敎大師全集中の五部血脈中の一課なり。傳敎大師の撰と稱するも、僞撰なり。五部血脈を見よ。 （壁入亮忠）

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. ❷一冊 ❸存、日蓮聖人全集第六、日蓮聖人遺文錄集第一三 ❹日蓮（貞應元―弘安五 A.D. 1222―1282）註 ❻康元頃（A.D. 1256）❻法華經一部の大綱を叙べ、品々の大要を略叙したるものである。 ❼寫本（京大、日大未・三〇） （望月歳厚）

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. (支) Fa-hua-ching-ta-i. ❷三卷 ❸存、卍續一・四九・四 ❹明無相說、法華敎正、柴祇鳳重較

❻本書は法華の經題、譯經三藏、經の各品を禪宗の立場から釋してゐる。但し序品以下信解品までは、品の大意並に經文を解釋し、譬喩品以下は品の大意を釋するのみの場合と、品の大意と經の要文とを併せ釋した場合とが交錯してゐる。無相の傳は未詳。本書の撰者名によつて廣陵（江蘇・江都縣東北）寶城寺の沙門なることが知られ。自序に太虛と署名してゐるから字が知られ、又後序には金陵太虛和師とあるから金陵にも住した事が知らる。本書は禪宗の立脚地から解釋を施したものなることを例示すれば妙法の二字を說くに「萬物を造化して至神なるこれを妙と謂ひ、一切を主宰して不異なるこれを法と謂ふ。法は即ち性なり。妙は即ち心なり。蓋し此の心は人々本具。此の性も亦人々本具なり。妙法は即ち心性の別名。心性は乃ち太極と一體。人も物も共に備り、凡も聖も同源なり。更に何の疑ひかあるんや。中略。問ふ曰く。妙法蓮華題目の義は已に開示を蒙れりまた疑ひなし。只是れ難却語言の外、いぶし如何が受持することを得るや。師の曰く。個裏本無元より字脚。須ひず裏許更に疑ひを生ずることこと云云」と他は推して知るべし。本書は明・嘉靖三十六年（A.D. 1557）法聚の「法華大意序」と、太虛の「法華大意開經偈啓」と、「法華大意」上中下三卷と卷尾には「附天池沙門法聚頌」。「附陳白沙寄太虛上人一首」と、嘉靖三十六年に徐渭が撰した「法華大意後序」と、明・天啓七年（A.D. 1627）に葉祇鳳が撰した「重刻太虛禪師法華大意跋」とからなつてゐる。本書の初刊は嘉靖三十六年である。 （田島德音）

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. 法華經二十八品大意 ❷一卷 ❸存、國文東方佛敎叢書第一輯第二 ❹仁秀

❻本書は法華經二十八品の大要を平易に說き明したもの。文體は國文を以て綴られて居るが、本經の敎理的解說は僅かに其品に際して本迹二門・序正流通の三段を付言するに過ぎず、只序品を述ぶるに當り法華經は諸佛出世の本懐を述べたる事と五時判に就ての略述及び經題の略釋を寸述する許りであつて、敎理的解釋を施せる著作とは見られない。即ち經の表面的說相の推移を明かして一經の大意を知解し易からしめた物語體に近いものである。

本書は冷泉殿が比叡山叢坂本に在る時、歌道の祕密を明かすために所望せられたので叡山西樂院仁秀題者が書き送つた事が本書奥書により知られる。仁秀の如何なる者たるかは知られず、且つ冷泉殿は誰れを指すか明白でないが今歌道系圖（讃史備要一〇五七頁）には藤原定家より同爲家に相承され其の門下に冷泉爲相以下を記して居るより見ても此の冷泉一門の者が請はれたものであらう。此等の諸家が各地に吟詠し歌合をした文書より見ても叡山に歌會を開いた事とは推せられる。蓋し和歌道にあつて罪敎が必須部門を占め、中にも法華がその殆んど大部分である事は歴代の歌集を一見して直に首肯される所で、和歌即陀羅尼の思想が早くより唱出されて居た事を考ふるに法華を知らずに和歌は詠じ得ない事態にあつたことは明らかである。一例せば慈鎮和尚自歌合（新校群書類從第十卷二一三頁）には「すべて詩歌の道も大聖文殊の智慧よりおこれることなれば文殊の垂跡も此のみぎりにはあとをたれ云云」といふ如きである。

今書の如きも和歌を詠ずる者、その祕奥を傳授するに貶いて法華經の概括的知識を得せしむるによつてなされたものであらう。蓋し法華經大意を述べしものに荆溪湛然のものあり（卍續一・四三・二）、傳敎のものあり（傳敎大師全集第三ノ七二七頁）、その數は多いが、皆敎學的の技方であるに對し、本書の如き物語的叙述は本經の一般化に資する所が多かつたと思はれる。

❺慶長二寫 ❻(谷大、餘大・一九八五） （淺遠晁昌）

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. 妙法蓮華經大意 ❷二卷 ❸存 ❹日濟（元龜三―寛永一九 A.D. 1572―1642）

❻慶安元刊（谷大、餘大・一八〇七）（京大、日大未・三六）天和二刊（龍大、二四一三・一〇八）明治一六刊（帝國、一四一・一六一）（立大、A〇三・一八）

法華經大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai. ❷二卷 ❸存 ❹神谷大周（―大正九 A.D. 1920）❺明治二六刊 ❻（谷大、餘洋・二）

法華經大意十回講演 ❶(日) Ho-ke-kyō-da-i-ji-ku-kai-ko-en. ❷一冊 ❸存 ❹淺藤是鈴著 ❺昭和二刊 ❻（立大、B〇三・九）

法華經大意鈔 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai-i-shō. 法華大意鈔 ❷一卷 ❸存 ❹唐湛然（景雲二―建中三 A.D. 711―782）述、日本朝山晴霞調點 ❺明治一一刊（立大、A一二・二二五）明治一二刊（立大、A一二・一二六―一二七）（帝國、一七二・五）

法華經大綱 ❶(日) Ho-ke-kyō-tai-

數字番號 ❶題名(書名) ❷巻数 ❸存欠 ❹著者 ❺代年作成 ❻内容 ❼解説 ❽末書(註釋書参考書) ❾月年の刊寫 ❿所現蔵(名家書) ⓫発行所

kwan.(支)Fa-hua-ching-ta-kuan. 法華大疏、蓮華大疏、妙法蓮華經大疏 ❷八卷 ❸存、卍續一・五〇・一―二 ❹明通潤後 ❺本書は法華と華嚴とは共に出世本懷を說いたものであるといふ識見によつて羅什譯妙法華七卷二十八品を註解したもの。今、通潤の「法華大疏自敍」と序品の品題解釋とによつて法花華嚴一致論の大要を記せば「全初め妙法蓮華經を習ひ、經題解釋を諸疏に尋ねた所、古來の註疏は皆法喩を以つて題名とたすといふ、然しながら終に釋然としない。後に佛華經（華嚴經のこと。通潤は佛華と法華とは佛說教の始終をなすが二經は同一の義を宣說せしものなりといふ。佛華とは大方廣佛華嚴經の經題の二字を附けたもの）を讀んで華嚴莊嚴世界品に至つて香水海中有二大蓮華一。名二種々光明悉香輪一。有二十佛剎微塵數世界種一。住二在其中一。この文を見、次に又如來出現品に至つて有二大蓮華一。名二如來出現處一。この文を見て忽ちに證悟する所があつた。一切の世界種は皆自心の蓮華の中にあつて住し、一切の如來も亦自心蓮華の中に在つて住すると知つたからである。これ全く妙法蓮華の眞意を示したものではないか。かく知つてみれば二經は全く一致して背反する所がない」云云と。この說は妙法とは心なりといふ禪宗の立論である。通潤の傳は未詳。本書によつて其學風を見るに禪宗風の點が頗る多い。傳不明のために何派の人であるか知れないのは遺憾となす。本書は卷首一卷と大疏七卷とからなる。卷首には先づ鐵山通潤撰「法華大疏自敍」を出す。この敍に撰述年月の記事が全く缺けてゐる。故に本書の製作年代が不明。次に霧山釋谷貞の題した「蓮華大疏敍」。これは明・崇禎三年（A. D. 1630）暮春幾望日の作であるが重刻する時の序文。依つて本書撰述は萬曆年代（A. D. 1573―1619）より以前の作であらうと思ふ。次に明・金庭比丘通潤後に係る「道宜述法華經弘傳序」の註。次に通潤後「妙法蓮華經大疏卷首」。ここでは法華華嚴不二の義を述べて經意を明す。次に「序品第一」。本注疏の時異といふべきは「頌云」と記して五言八句の偈頌を最初に揭げ次に註釋をなす點である。卷一は方便品。以下七卷終りに至る間に二十八品を悉く註し畢る。本書の如く大膽に直截に法華・佛華一致の義を論述したものは未だなかつた。乍然本書を全體から見れば禪の所謂心の開悟に根底を置き、その上に支那佛教の二大學派の調和を說いたものである。これを要約すれば教禪一致思想から出た說なりといへる。

（田島德音）

法華經大觀 ❶(日)Ho-ke-kyō-tai-kwan. ❷一卷 ❸存 ❹本多日生(―昭和六 A. D. 1931)述、國友文次郎編 ❺明治三九刊(京大、一・二六ホ・二二)(帝國、三二四・一三)明治四一刊(立大、B〇三・一)

法華經大綱口傳抄 ❶(日)Ho-ke-kyō-tai-kō-ka-den-shō. ❷二卷 ❸存 ❹宗淵 ❺寫本(谷大、餘丙・三一)

法華經大成 ❶(日)Ho-ke-kyō-tai-sei. (支)Fa-hua-ching-ta-ch'eng. 妙法蓮華經大成、法華大成 ❷十卷 ❸存、卍續一・五一・一―三 ❹大義集 ❺清康熙三四(A. D. 1695)

❻本書は賢首宗教義を主とし天台宗教義を併せ用ひて華天兩宗其旨一なりとの見地に立ち兼ねて諸疏を參照して法華の註疏を作つたもの。諸疏を集めて大成したものなりとの意によつて「大成」と名づけたのである。乍然この大成なる名稱は大義が自ら附けたのではなく雲希良（雲の役職名は顧る長い。錫趙士出身信事府左春坊左贊善兼翰林院檢討、前日講官起居注充、三朝國史、大清一統志纂修等官戊辰科會試同考充、殿試教掌官庚午科、特簡浙江總試正主考、前翰林院編修、前翰林院庶吉士。楚黃は雅號か。黃安の人。字は石虹。詩文に巧みにして尤も古學に造深）を初めとして浙江の碩德宿學の諸師が皆此の集は法華の大成だと云ふたので題名としたらしい。大義は本書の卷首に「編集始末」といふ一文を揭げて詳細に本書編集の顚末を述べてゐる。これによれば「康熙五年頃から法華文句、要解、知音等を攷究し、次いで正意、大疏、科註等を研味參伍し諸說を融會し一家の見識が立つた。それ故に集を編む決心をした。康熙七年には二卷成り、同八年には長椿に住して一卷成り、翌九年には盤山に遊んで一卷成り、同十四年まで涿鹿の延壽寺に寓して後の三卷成り、ここに始めて草本が完成した。同十五年に浙江に行つて碩德に就いてこれを正した云云」と。本書は實に前後約十年の研究努力の結晶である。草本は七卷であつたが同二十七年印刷した時に十卷とした。大義は賢首宗の人であることは「編集始末」の終りに記してゐる文で明らかである。文に云ふ「鶴憐吾宗顯揚三觀。雲華開二十門。賢首判五敎。清涼疏之妙之。一乘圓極之理大備(中略)至二於十門懸判、五敎析理、三觀修證、十玄圓融、具知二華嚴懸談並法界觀一。推本窮源、吾深有レ望レ於後之學一賢首宗一者也」と。本書が華天兩宗一致說を奉ずることは「法華經大成懸談」の十門の第二藏敎分攝の內の明敎攝の下に「良以賢首五敎、與天台化法四敎、但開合不同」といひ、又第九總釋名題の下で妙法の釋には十妙を用ひ、法を權實で說き、七種立題を用ゆる等がその一例である。本書は卷首一卷と大成九卷とを合せて十卷。卷首には先づ康熙三十四年、雲希良撰の「序」を揭げ、次に同年、金憂傳講沙門大義撰の「編集始末」を、次に同年、中州榮澤樓村大義識の「提綱」を、次に金臺即山居後學大義集の「妙法蓮華經大成懸談」を、この懸談は法華を釋するに十門を以て說く。第一は敎起因緣。第二は藏敎分攝。これを三に分つ。初めに藏攝を明す(三藏と二藏)。二は敎攝を明す(五敎と四敎等華嚴懸談の判敎)。三は分攝を明す(十二分と九分)。第三は義理分齊を、第四は敎所被機、第五は敎體淺深、清涼は判じて十種敎體となす云云。第六は宗趣通別、清涼の十宗云云。第七は部類品會、第八は傳譯感通、第九は總釋名題、この內に道宜述「弘傳序」を註解してゐる。以上で懸談畢る。卷一は羅

什譯と序品第一とを註解し、第十は別解文義。如是我聞以下の經文を註解して第九卷までに及ぶ。一經を序分正宗分流通分の三分とすることは諸疏と同じだが細科に到つては特殊な分科があり又註解もある。

（田島德音）

法華經大成音義 ❶(日)Ho-ke-kyō-tai-sei-on-gi. (支)Fa-hua-ching-ta-ch'eng-yin-i. 妙法蓮華經大成音義 ❷一卷 ❸存、卍續一・五一・三 ❹清淨昇集 ❺大義著法華經大成の文の中に古語古事諺等があつて疑ひを懷いたが決しない點が頗る多い。此の閱讀の不便を除かんとして何東後學淨昇が本書を集記したもの。この事の始末は燕山智沖識の「大成音義序」に述べてある。康熙四十三年に本書を刊行する時にこの序を作つたのである。本書は「華嚴宗五祖」以下二百五十二項を經疏史子等に探つて字句を解說し、更に「後附」に六項を記して上記の缺を補ふてゐる。

（田島德音）

法華經大成科 ❶(日)Ho-ke-kyō-tai-sei-kwa. (支)Fa-hua-ching-ta-ch'eng-k'o. 法華大成科、妙法蓮華經大成科 ❷一卷 ❸存、卍續一・五一・一 ❹清際慶持錄

❺牛翁大義著法華經大成は盛に世に流布されるが其の科目を容易に見るに不便である。この故に普寧廣濟際慶が拾排して抄錄したもの。本書製作事情は康熙四十五年に惟敍が撰した「大成科序」に述べてある。

（田島德音）

法華經體 ❶(日)Ho-ke-kyō-tai. ❷一卷 ❸存 ❹主海述 ❺元祿四刊 ❻

法華經台宗會義 ❶(日)Ho-ke-kyō-dai-shū-e-gi. (支)Fa-hua-ching-t'ai-tsung-hui-i. 法華經會義、法華台宗會義、妙法蓮華經台宗會義 ❷八卷或十六卷 ❸存、卍續一・五〇・二―四 ❹明智旭(萬曆二七―永曆九 A. D. 1599―1655)述 ❺法華經會義の下を見よ。 ❻元祿元刊(龍大、二四一三・一一〇)(高大、寄・一・一五)(叡山、別當)刊本(叡山、昆門)

法華經台宗會義講錄 ❶(日)Ho-ke-kyō-dai-shū-e-gi-kō-roku. 法華經會義講錄 ❷四卷 ❸存 ❹靈空光謙(永應元―元文四 A. D. 1659―1739)述 ❻刊本(龍大、二四一三・一一一)

法華經提婆達多品 ❶(日)Ho-ke-kyō-dai-ba-dat-ta-hon. ❸存、二樂叢書第四 ❹橋瑞超編

法華經提婆達多品鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-dai-ba-dat-ta-hon-shō. ❷一卷 ❸存、心經抄之內 ❻寫本(谷大、餘大・三六七六)

法華經提婆達多品發蒙 ❶(日)Ho-ke-kyō-dai-ba-dat-ta-hon-hotsu-mō. ❷一卷 ❸存 ❹河合日辰著 ❺明治四〇刊 ❻(谷大、餘小・一五六)(龍大、二四一三・一一二)

法華經題名 ❶(日)Ho-ke-kyō-dai-mokku. 法華題目 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❹宗澄(神護寺雲元―弘仁一三 A. D. 785―822)

❺法華經の題號に附して、一人相傳の深秘の釋義を記せるものにして大師全集中の五部血脈中の一課なり。文中本覺思想を高唱す。大師の撰と稱すも僞撰なること明らかなり、五部血脈を見よ。

（鹽入亮忠）

法華經卓解 ❶(日)Ho-ke-kyō-taku-ge. (支)Fa-hua-ching-cho-chieh. 妙法蓮華經卓解 ❷七卷 ❸存、卍續一・五〇・五 ❹徐昌治返註 ❺清康熙五(A. D. 1666)

❻本書は八十五歲の老僧徐昌治が天台智者大師の科注（恐らく宋の徐註愈註如註等を指すならん）と清涼澄觀大師の疏等によつて極めて簡單に經文を註釋したもの。初學が經文の宣を知るには頗る便宜であるが、その說に於いて特色はない。徐昌治の傳は未詳。

（田島德音）

法華經談義本 ❶(日) Ho-ke-kyō-dan-gi-hon. ❷一卷 ❸存 ❹亮英記 ❺寫本(明德院)

法華經知音 ❶(日)Ho-ke-kyō-chi-in. (支) Fa-hua-ching-chih-yin. 妙法蓮華經知音 ❷七卷 ❸存、卍續一・四九・三―四 ❹如愚述 ❺明萬曆三三(A. D. 1605)

❻本書は天台、戒環等の說を參照し、法花は本旨は圓示悟入佛之知見にありとなし佛知見とは吾心本有の實相である。吾心本有の實相とは減は眉間白毫光と名づけ乃至減は莊嚴菩提行と名づく。故に本有實相とは一切の佛法といふことである。如愚も教禪一致思想の流を掬むものなりと云へると思ふ。本書を知音と名づけた理由は經に一切離聞肆支佛所不能知、唯佛與佛乃能知之とあるのによつたのであると。本書は萬曆三十年に南京應天府碧峯寺石頭菴で起筆、次に佩江府焦山寺に移り、次に蘇州府松蘿菴に移り、次に復再び三十三年に石頭菴に歸り、此年稿了したのであると。故に歷年三年にして本書は成つたのである。本書は金陵石頭菴無學僧江夏如愚撰「妙法蓮華經知音序」と道宜述「妙法蓮華經弘傳序」を如愚が註したものと、法華七卷二十八品を如愚が註した「知音」とよりなつてゐる。

（田島德音）

法華經注 ❶(日)Ho-ke-kyō-cho. (支)Fa-hua-ching-chu. ❷七卷 ❸新編諸宗教藏總錄第一に云く「本文題下。不レ見二人名一。目錄云二僧叡遠一。待レ勘」

法華經注 ❶(日)Ho-ke-kyō-cho. (支)Fa-hua-ching-chu. ❷七卷科一卷 ❸呂民述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一卷 ❹常曦(天平一三―弘仁七 A. D. 741―816)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經通義 ❶(日)Ho-ke-kyō-tsū-gi. (支) Fa-hua-ching-t'ung-i. 妙法蓮華經通義 ❷七卷 ❸存、卍續一・四九・五 ❹明德清(嘉靖二五―天啓三 A. D. 1546―1623)述

❺本書は南嶽沙門慈山釋德清が苦心工夫し

て發明した天台の法華純圓說と賢首の法華終教說との融會論を以つて法華一部を註解したもの。德清の說によれば先に湛陵或環が「法華要解」を作つて華天兩宗一致說を唱へたのは誠に卓見であるが、未だ始終源本の義を發揮してゐない。華嚴を始めに說き法華を終りに說いたのは如來の化儀に相違があつても其の理は全同である。天台が華嚴は別圓を兼ねた說だといふのに賢首は華嚴は別圓だといひ、賢首が法華は漸圓だと云ふのに天台は純圓獨妙だといふ。この二說は相反するが如くであるが兩師の化儀論の異る所から生じた差別で華嚴は法華を說いたものであり、法華は華嚴を演べたものである。五敎と四敎との開合、漸圓頓圓の區別等は全く此の融會說によつて說く時は直ちに解決が出來ると述べてゐる。この解決の鍵は開示悟入の四字を知ることにあるといふのが德清の得意として述ぶる所である。本書製作事情は先きに「解節」を作つたが初學に繁解だとされたから今又本書を作ると。「解節」は華嚴の信解行證の四門に約して說明したが今は經の大義を通釋することに重きを置き、古德の舊解を尋んで調釋を作つた。但し全經を會通することが法花の根本義であることと、華嚴は始終一貫してゐることの大旨を述べたことと、法華は如來出世の本懷を暢べたもので珠流を合して海に歸せしめたものであると三義を明示せんと試みたと。これが德清の立義である。要するに禪に立脚して華天一致論を述べたものである。本書は先づ叙意、次に懸判、次に釋題、次に譯者、次に本文の順序で註釋をしてゐる。

❼(參考) 禪籍志卷下 ❽寛政七刊 ❾(田島德音)

(龍大、二四一三・一一四)

法華經傳記 ❶(日)Ho-ke-kyō-den-ki. (支)Fa-hua-chuan-chi. 法華經傳、法華傳記 ❷十卷 ❸存、大正五・四八、Z. 126b、卍續二乙・七・四 ❹唐慧祥述 ❺法華傳記の下を見よ。 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一 ❽彰長五刊 ❾(谷大、餘大・四二三)×帝國、一六六・二五三)

法華經と日本 ❶(日)Ho-ke-kyō-to-nip-pon. ❷一冊 ❸存 ❹河野信次郎著 ❺昭和七刊 ❻東京國船會

法華經と日蓮上人 ❶(日)Ho-ke-kyō-to-nichi-ren-shō-nin. ❷一卷 ❸存 ❹小林一郎著 ❺大正一三刊 ❻(龍大、研佛)

法華經答三千書 ❶(日)Ho-ke-kyō-sa-san-chi-en-sho. (支) Fa-hua-ching-ta-san-chi-en-shu. ❷一卷 ❹宋曾賢(一一六〇六A. D. 1024—)述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

法華經統略 ❶(日) Ho-ke-kyō-tō-ryaku. (支)Fa-hua-ching-t'ung-lüe. 法華統略 ❷六卷或三卷 ❸存、卍續一・四三・一 ❹隋吉藏(太清三—武德六A. D. 549—623)述

❺此書が著者の晩年の作なること此書の自叙に見ゆ。珠に數次の法華疏の最後の著作にて、洗練に洗練を經たるものなること、卷頭の自叙に斯經言約義富更有異聞撰錄大宗復爲此三卷叙其疏意略有六とて凡例六條を擧ぐ。(一)舊本になく、今新しく叙せるもの、例せば四土の說(經題の下に出づ)七會の文(序品の下に出づ)の如し。(二)舊本の說を廢して今新意を用ゐたるもの、火車及火宅之譬(譬喩品の下)の如し。(三)新舊兩說隨時に用ふべきもの、例せば六序(序品)十方便(方便品)の如し。(四)昔は言隱昧なるを今は則ち顯明となれるもの、釋妙四門(經題の下)衆車七意(譬喩品の下)の如し。(五)大意は乃ち一なるも轉勢不同なるものは、舊本に既に明かなるも今重ねて叙べたるもの多く、(六)舊本の分章を改めたるもの、例せば方便品六變の如し。以て此書が著者法華疏中の白眉なることを知るべし。

此書、序品以下各品の文を逐ふて註釋せるものなるが、隨所に當時流行せる南北の異義を出して、三論宗旨を顯揚するに努めたること、著者の他の述作に見ると同じ。現流本には第五藥草喩品、第六授記品、第七化城喩品の釋は散佚して見えず。

❾寫本(谷大、餘大・一三九六) (稻葉圓成)

法華經統略鈔略 ❶(日)Ho-ke-kyō-tō-ryaku-shō-ryaku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、二四一三・一一七)

法華經讀誦觀 ❶(日) Ho-ke-kyō-doku-ju-kwan. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第三一、惠心僧都全集第三 ❹源信(天慶五—寛仁元A. D. 942—1017)

❺希有の大乘經典に遇ひ、今經を讀誦するは難事である。今その讀誦に當りての方法を說明したもので、讀經用心と共通する內容を持つ。先づ讀經の作法をあげ、次に二種の讀誦に際しての觀念即ち一は文字誦、二は理觀誦に就て述べて居る。中に於て「經卷俱在我心」以我身體直名經卷」とする如き思想展開に注目すべきものがある。

❾寫本(近江西敎寺) (後邊最昌)

法華經並開結 ❶(日) Ho-ke-kyō-narabini-kai-ketsu. ❷十卷 ❸存 ❹寫本(叡山、天海)

法華經並開結 ❶(日) Ho-ke-kyō-narabini-kai-ketsu. 訓譯法華經並開結 ❷一卷 ❸存 ❹三井與市編 ❺大正一五刊 ❻(駒大)

法華經二十八品肝要 ❶(日)Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-kan-yō. 法華二十八品肝要、法華一部要文、傳敎院身抄 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、傳敎大師全集第三 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❺法華二十八品肝要の下を見よ。

法華經七言詩 ❶(日) Ho-ke-kyō-shi-jō-hachi-hon-shichi-gon-shi. (支)Fa-hua-ching-ch'i-shih-p'i-p'in-ch'i-yen-shih. 法華二十八品七言詩集 ❷一卷 ❼(參考) 入唐新求聖敎目錄

法華經二十八品頌 ❶(日)Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-ju. ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❹千觀 ❺妙法蓮華經一部二十八品の大意を端的簡明に表示したもので、四句一偈宛を以て各

品にあてゝゐる。初めに敎主、妙經及び靈山會の三寶等に歸敬する所謂歸敬頌の二偈、次に各品にあてたる二十八偈、終りに總頌とも見るべき二偈、都べて三十二偈からなつてゐる。千觀の自序によれば、當時不空三藏の作れる歸命之偈なるものがあつたが、それは羅什譯の妙法蓮華經と各品の順序が其異るものがある。即ち藥草喩品の中に日光の頌があり、寶塔品の末に提婆品があり、觀音品の前に陀羅尼品があり、普賢品の後に屬累品が列せられてゐる。誠に持誦に不便であるから、今什公所譯に從つて自ら頌文を作ると云つてゐる。よつて本書著作の理由が判る。思ふに不空之歸命之に云ふはれるものの依據の本典は、今序中の中でが如き列次から推すと現存三種法華偈と云は悉品法華に最も近いが、惜むらくは逸して傳はらない。

(石井亮藏)

法華經二十八品大意 ❶(日) Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-tai-i. 法華諸品大意、法華大綱、法華二十八品大意 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛敎全書第二四天台小部集釋之內、傳敎大師全集第二(舊)、第三(新) ❹智證(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822)述 ❺全集編者云法華諸品大意一名法華大綱、と又幼學顯密儀云法華大綱亦名法華二十八品大意云云と、其の典據は明らかならざれど且く、この說に隱ひ法華諸品大意と同本異名なりと考ふ。尙ほ法華諸品大意の下を見よ。

❻慶長二寫(谷大、餘大・一九五八)寫本(京大、日大未・三七)

法華經二十八品大意 ❶(日)Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-tai-i. 法華二十八品大意 ❷一卷 ❸存 ❹豪仁 ❼(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華經二十八品大意 ❶(日)Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-tai-i. ❷一卷 ❸存 ❹仁秀記 ❻慶長二寫(谷大、餘大・一九五八)寫本(京大、日大未・三七)

法華經二十八品讀音句 ❶(日) Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-doku-on-ku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(京大、國文)

法華經二十八品由來各品開題 ❶(日) Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-yu-rai-kaike-hon-kai-dai. 龍寶錄、可透錄に法華二十八品品品三門並普賢觀經科文一卷智證錄註曰三門謂a大意釋名判釋b.とあり ❷一卷 ❸存、傳敎大師全集第三(新) ❹智證(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822)述 ❺本書は新撰解題集中より抄出して、之を再版大師全集に初めて蒐錄せるものにして、原本には「各品解題」の四字無し「由來」と稱するも、述るところは經什譯法華の各品に、各々其の大意と簡單なる釋名を附せるものなり。但し各品の大意は、別に大師の著として、約一紙を出ざる「法華二十八品大意」(或は法華諸品大意・法華大綱とも稱す)なるものあるに因り名づけられたるものゝ如く、其の內容より推せば、寧ろ本書を以て「諸品大意」と稱するも可なるものなり。此の本、題下に「傳敎大師之作」とあれども、從來別溪の著と稱せらるゝ「法華經大意」一卷の文と殆んど相同じきを以て、其眼の士は之れを別溪の踏襲或は略錄と疑ひ、本書を以て、「與a.別溪大師法華大意文、稍相同也。是足b.證非b.傳敎大師撰述」無」由書を爲せり。兩者を望め觀るに全く此の感あり。然るに今、別溪の著なる「法華經大意」其の物に就て、少しく考ふるところあれば、小箋を附すべし。拔藏所收の「法華大意」を以つて觀るに、二十八品の各品に就て皆、大意、釋名、入文判釋の三門に分ち、大意の章に於ては一品の大旨を束ね、對文聯句流麗に之れを敍し、以て經意の莊嚴を加へ、章末は必ず「此品大意蓋如是歟」等と結ぶ。次の釋名は品名の簡單なる解釋にして、第三の入文判釋には法華本文の科段を分てり。蓋し此の三科は同一人の筆になれるものなるや否や、その構文筆致より觀て、多少の疑を容るる餘地あるものと云ふべし。

今傳敎の撰と稱する「由來」との比較に於ては、別溪本の各品の第三章を削りたるものと大同と云ふべし。蓋し別溪本は古來其の內容に長短廣狹あり、又稱翼の書となれるものの如く、明治十二年の刊本には「此の法華經品々大意の章は古本世に甚だ少なり」と序し、兩も如何なる底本に依りしものか、拔藏所載の各品より、夫々第二第三の二章を削除せるものと大同なり。惟ふに「法華經大意」と稱するを以てせば、各品大意章末の字句より觀るも、反て第二第三章の無きものを以て題意に合し、兩も一部の筆致の調ふものの如く思考せらる。

如斯き異本の出入を考ふる時、拔藏所收の卷末に「明曆丁酉秋十七謹默譯焉。寫謂語辭系智。尖眼芒力。統紀典志。亦無它目。眞庫贋序。其眼擇之。若見若聞。互爲需識。相助解行。共證妙法」の奥書は最も留意すべきものと云ふべく、更に卷頭序品第一に次で「將釋此一部二十八品多有諸家。今暫歸天台宗。每品用三門。解說云云」と云へる如きは、漠然の語としては管見し難きものあるを疑ふ。今諸目錄を檢するに、統紀(A. D. 1269)には勿論其の記載なく、慈式の敎觀及び隨函目錄(A. D. 1024)にも其の名を見ず。恐らく、宋代に於ける彼の土に於ては此の書無かりしものの如し。本朝に於ても又、別溪大師撰の「法華大意」なるものを記載する目錄稀にして、唯僅かに諸宗章疏錄(A. D. 941)に一處之れを見るのみ、降て東域(A. D. 1094)測では圓珍(A. D. 814)圓仁(A. D. 847)の將來錄並に台州錄等、皆「別溪述」の「大意」無し。按ずるに諸宗章疏錄に「淇然述」と記する所以は、珍錄に依るとして別に「大意一卷明曉述」を記すところを以て見れば、書目を傳敎・慈覺・智證等の將來錄より集め、その折り台州錄の「妙法蓮華經大意一卷(別溪明曉座主述)一十紙」とあるものより、別溪の字に寄せて明曉の字を看過したるものには非るか。台州錄の意は「別溪所住の沙門明曉述なること他註に類して明かなり。更に又、東域傳燈目錄には、明曉の大意一卷と並べて「法華經大意一卷亦云大綱流圓撰」の所載あり。之れは、傳敎大師著

と稱せらるる「法華大綱」に隨經すると共に、内典錄、東征傳等に灌頂の「大意」なるもの無きを以てせば、今の「大意」の著者名の動搖に關しても一考に價するものと云ふべし。

斯く見來れば「大意」は諸目錄にては、大體「明瞭」なることに一致す。從來坊間「漠然」と稱し、校藏本漠然と錄したるは、一は章疏錄に發し、一は流麗精巧なる構文筆致の聯想に起因するものなるには非るか。但し、「大意」の如きもの其の類書甚だ多し、故に灌頂・湛然・明曠三本等の同異存否、其の上にて校藏所收「大意」の著者名を「明曠」と訂すの可否、從ては更に「二十八品由來各品問題」を置澄撰とするの當否如何等の事、猶未だ詳なりと云ふべからず。更に研討を俟つ。（豊入亮忠）

法華經二十八品要略 ❶(日)Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-yō-ryaku. ❷一卷 ❸存 ❺寶永元刊 ❹(龍大・研佛)

法華經二十八品和歌 ❶(日)Ho-ke-kyō-ni-jū-hachi-hon-wa-ka. ❷八卷 ❸存 ❹妙蓮淨嚴(寛永一六—元祿一五A.D.1639—1702)撰 ❺元祿板(京大、日大未・四三)

法華經入疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho (支)Fa-hua-ching-ru-shu. 法華入疏、妙法蓮華經入疏 ❷十二卷 ❸存、卍續一・四七・一—三 ❹宋道威注

❺本書は先づ法華玄義の五重玄を以て經題を略解し、次に法華文句によつて經文を詳細に解釋し、或は文句の語句を平易に改め、或は文を易む。故に初學これによつて學ぶ時は天台大師の文句によつて習ふよりは容易である。本書は新說もなく、異義も立てず極めて忠實に「文句」の文を引用して經の全文を註解したものである。道威の傳は未詳。僅かに「四明洗心道威入法」と卷初に記してあることによつて四明に住したことを知るのみ。宋代以降、法華經疏は頗る多く著述されてゐるが天台學匠の作になつたものは比較的に稀ない、宋から清初までには五部あるのみ。宋代では本書と柯山の倫註との二部。元代では徐註のみ。明代では一如の新註。蕅益智旭の會義あるのみ。以上を五家の註疏といふ。靈空光謙は柯山の倫註よりも本書が先に撰述されたといふが本書の撰註年代は未詳。本書には元祿十年靈空撰の「序」がある。本書を靈空、義瑞等の諸師が元祿年代以降屢々講述し、又これが註疏を作つた。

❼(參考) 諸宗章疏錄第二 ❽元祿一一刊 ❾(谷大、餘大・二一一)(正大、一一四二・一九〇)(龍大、研佛)(高大、寄・一・二三)(立大、A一一・九八)(田島德晉)

法華經入疏記 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-ki. ❷十六卷 ❸靈空光謙(承應元—元文四A.D.1652—1739)述

❺淨土眞宗教典志第二に云く「元祿十三年春。靈空於二坂本一講之。慶證寺玄泰奉二命錄一。」云々。法華經入疏講錄十二卷として現存のものゝことか。

法華經入疏義海 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-gi-kai. ❷十八卷 ❸存 ❹亮天滑 ❺寫本(谷大、餘大・一三九九)

法華經入疏玄談 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-gen-dan. ❷二卷 ❸存 ❹經潭 ❺寫本(龍大、二四一三・一二〇)

法華經入疏講本附考 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-kō-hon-fu-kō. ❷五卷 ❸存 ❹寫本(谷大、餘大・三五六〇)

法華經入疏講要鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-kō-yō-shō. ❷七卷 ❸存 ❺寛政六寫 ❹(谷大、餘大・二一九九)

法華經入疏講錄 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-kō-roku. 法華入疏講錄、妙法蓮華經入疏講錄 ❷十二卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元—元文四A.D.1652—1739)述

❺法華經入疏記の下參照。 ❻享保六刊 ❹(谷大、餘大・六七五)(龍大、二四一三・一二一、研佛)(高大、寄・一・二三)

法華經入疏講錄決正 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-kō-roku-ken-shō. 法華入疏講錄決正 ❷五卷或六卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元—元文四A.D.1652—1739)述 ❹享保一一寫(谷大、餘大・二四〇三)(龍大、二四一三・一二一)

法華經入疏講錄續決正 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-kō-roku-zoku-ken-shō. 法華入疏講錄續決正 ❷六卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元—元文四A.D.1652—1739)述 ❹享保一一寫(谷大、餘大・二四〇四)享保一九寫(龍大、二四一三・一二三)

法華經入疏籤 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-sen. ❷七卷 ❸存 ❹寫本(谷大、長保・一一七)

法華經入疏台鑾記 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-sho-dai-roku-ki. ❷六卷 ❸存 ❺正德二寫 ❹(谷大、餘大・三五四一)

法華經入眞言門決 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyū-shin-gon-mon-ketsu. 法華入眞言門決 ❷一卷 ❸存 ❹榮西(永治元—建保三A.D.1141—1215)述 ❹南北朝時代寫(寶善提院)明治四〇寫(谷大、餘大・一一七〇)

法華經如來壽量品宗義鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-nyo-rai-ju-ryō-hon-shū-gi-shō. ❷二卷 ❸存 ❹日輝(寛政一二—安政六A.D.1800—1859)述 ❹(龍大、二四一三・一二四)

法華經の因緣講座 ❶(日)Ho-ke-kyō-in-en-kō-za. ❷一卷 ❸存 ❹飯田惠濟 ❺昭和三刊 ❹(立大、B〇八・四九)

法華經の行者日蓮 ❶(日)Ho-ke-kyō-no-gyō-ja-nichi-ren. ❷一冊 ❸存 ❹鈴崎正治著 ❺大正五刊 ❹東京博文館

法華經の行者日蓮上人 ❶(日)Ho-ke-kyō-no-gyō-ja-nichi-ren-shō-nin. ❷一卷 ❸存 ❹松川二郎著 ❺大正六刊 ❹東京磯部甲陽堂

法華經の行者日蓮聖人 ❶(日)Ho-ke-kyō-no-gyō-ja-nichi-ren-shō-nin. ❷一卷 ❸存 ❺昭和七刊 ❹山梨久遠寺

法華經の研究 ❶(日)Ho-ke-kyō-no-ken-kyū. 法華經の文化的研究 ❷一卷 ❸存 ❹里見岸雄著 ❺大正一三刊 ❹京都平樂寺書房

法華經の事 ❶(日)Ho-ke-kyō-no-koto. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書、金綱集坤卷之內 ❹日向(建長五—正和三A.D.1253—1314)

❺日蓮の六上足(六老僧)の一人日向が、親しく日蓮より聽聞し又自ら見聞する所に於て法華經其の他の諸經の要點並に諸宗破立の大綱を記述し、廣く經論疏釋の要文を援引して、諸釋の「見聞」其の他を著はし、これを綜括して「金綱集」と題したので、本書は其の第十卷の下に收められてゐる。

我昔從佛事、如見我身事、皆實不虛事、並自說得道夜等見聞、法華修行相貌事(分別四悉檀摭受折伏・可二修行一也、不レ知レ之者同二外道魔王・衆生惡知識也)三轉教相三問會事

の六項を標示して法華經の要文を釋してある。（馬田行啓）

法華經の新見解 ❶(日)Ho-ke-kyō-shin-ken-kai. ❷一冊 ❸存 ❹宮澤英心著 ❺昭和五刊 ❹東京博文館

法華經判 ❶(日)Ho-ke-kyō-han. (支)Fa-hua-ching-p'an. ❷七卷或十卷 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經祕釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-hi-shaku. 法華祕釋 ❷二卷 ❸存、弘法大師全集第一一教相部 ❹空海(寶龜五—承和二A.D.774—835)述

❺法華經八卷の要旨を簡單に述べた書。題して祕釋とあるも密教的祕釋は毫もない。内容文章から判ずるに弘法大師の作ではない。（小田慈舟）

法華經祕釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-hi-shaku. ❷一卷 ❸存、大正五六・一八四No.2191、日本大藏經第一二法華部章疏第二、密厳諸祕釋第一、興教大師全集 ❹覺鑁(嘉保二—康治二A.D.1095—1143)述

❺祕密眼を以て法華經を解釋したるもの。此の經を捷略趣と深密門との兩意あるものとなし、始めに捷略趣は顯教として釋し、次に深密門は、第一教興の因緣を明し、第二橋經の差別を彰し、第三大意を述べ、第四題目を解し、第五入文判釋す。第一の教興の因緣は大日如來が一切衆生を救濟せんが爲めに十の教法を說くこと。第二の橋經は顯教とすれば第八住心に當るも、密教とすれば五部の中にては法部に攝し、兼ねて餘部に通ず。第三大意は、此の經は觀音菩薩の蓮華三昧を說きたるものにて、即ち阿彌陀如來の妙觀察智の利他門なり。第四題目は妙法蓮華經は梵語にては九字なり、此の九字は九尊の種字にて八葉九尊蓮華部曼荼羅なり、即ち胎藏界の八葉九尊の根本曼荼羅なり。第五入門判釋は句義に約すれば、序、涌出、不輕、藥王、妙親、觀音、妙莊嚴、普賢等の各品は法部の大曼荼羅。火宅、藥草、寶塔の三品は三昧耶曼荼羅中の法曼荼羅。陀羅尼品は法曼荼羅なれども他の三曼荼羅に通じ、方便、信解、授記、化城、五百弟子、學無學、法師、勸持、安樂、壽量、分別陰喜、法師功德、囑累等の各品は羯磨曼荼羅にて他の三曼荼羅にも通ず。而して二十八品、六萬九千三百八十四字は各々の文字が佛の種字にて、即ち六萬九千三百八十四の佛菩薩の曼荼羅なりと釋す。（富田敬純）

❼(參考) 諸宗章疏錄第三

法華經祕傳鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-hi-den-shō. ❷一卷 ❸存 ❺慶安五刊 ❹(谷大、餘大・二三二五)

法華經祕法 ❶(日)Ho-ke-kyō-hi-hō. ❷一卷 ❸存 ❺日蓮宗の呪術を記せるもの。 ❹刊本(谷大、餘大・一八四六)

法華經祕略要鈔 ❶(日)Hi-ke-kyō-hi-ryaku-yō-shō. 法華祕略要鈔、有國法華祕略要鈔、妙法蓮華經祕略要鈔 ❷十一卷 ❸存 ❹淨嚴(寛永一六—元祿一五A.D.1639—1702)述 ❺元祿五刊 ❹(龍大、二四一三・一二七、研佛)(谷大、長保・一一六)

法華經不能語 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-nō-go. ❷八卷 ❸存 ❹慧印指月(元祿二—明和元A.D.1689—1764)述 ❹寶曆一一刊 ❹(龍大、二四一三・一二八)

法華經不能語聽書 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-nō-go-kiki-gaki. ❷四卷 ❸存 ❹指月慧印(元祿二—明和元A.D.1689—1764)述、洞水月湛記 ❼(參考) 禪籍目錄

法華經普門總持兩品宗義鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-mon-sō-ji-ryō-hon-shū-gi-shō. ❷二卷 ❸存 ❹日輝(寛政一二—安政六A.D.1800—1859)述 ❺明治一一刊 ❹(谷大、餘大・二四九五)

法華經普門品 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-mon-hon. (支)Fa-hua-ching-p'u-men-pin. 普門品、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品、觀世音菩薩普門品、觀音經、普門品經 ❷一卷 ❸存、妙法蓮華經第七(大正九・五六・No.262) ❹姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九A.D.344—413)說義照中寂(弘)譯 ❹觀世音菩薩普門品の下並に妙法蓮華經の同品の下を見よ。 ❹篠倉末期寫(寶壽院)刊本(谷大、餘大・三六一八)

法華經普門品圓通記 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-mon-hon-en-tsū-ki. 守倫科註法華經普門品圓通記、守倫科註普門品圓通記、普門品圓通記 ❷五卷 ❸存 ❹眞賢(—正德二A.D.1712)述 ❺眞享五刊 ❹(谷大、餘大・一八四〇)

法華經普門品講錄 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-mon-hon-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、長保・一五九)

法華經普門品別行疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-mon-bom-betsu-gyō-sho. (支)Fa-hua-ching-p'u-mên-p'in-pieh-hang-su. ❷一卷 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元A.D.632—682)述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經普門品類解 ❶(日)Ho-ke-kyō-fu-mon-hon-rui-kai. ❷三卷 ❸存 ❹識圓 ❺寶永二刊 ❹(谷大、餘大・二六四五)

法華經輔照 ❶(日)Hi-ke-kyō-fu-shō. 法華秀句、法華經秀句、法華輔照、法華補照、法華廣秀句 ❷一卷或三卷五卷 ❹存、日本大藏經第三九天台宗圓教章疏第一、傳教大師全集第三 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822)撰 ❹法華秀句の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經分別功德品宗義鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-fun-betsu-ku-doku-hon-shō-gi-shō. ❷一卷 ❸存 ❹日輝(寛政一二—安政六 A.D.1800—1859)述 ❺明治一二刊 ❻(龍大・二四一三・一二六)

法華經別鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-bes-shō. ❷二卷 ❸存 ❻寫本(谷大・餘大・二四〇五)

法華經篇立音義 ❶(日)Ho-ke-kyō-hen-ryū-on-gi. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(谷大、長保・一二〇)

法華經辨關 ❶(日)Ho-ke-kyō-ben-kwan. (支)Fa-hua-ching-pien-kuan. 法華辨關、妙法蓮華經辨關 ❷十二卷 ❹有則述 ❺東域傳燈目錄卷上に云く「釋三玄贊」云々。

法華經方便品奮迅義 ❶(日)Ho-ke-kyō-hō-hen-hon-fun-jin-gi. ❷二卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❻寫本(谷大、餘大・四・中・三三)

法華經御圖靈感鑑 ❶(日)Ho-ke-kyō-mi-kuji-rei-kan-sen. ❷三卷 ❸存 ❻寫本(A.D.1751) ❺本書は法華二十八品の内特に方便の一品のみに就いて顯密二教の釋を用ゐ佛智を宣顯せんと企てている。佛智を開顯せんがために方便の義を說くといひ、法華は佛智甚深を說き、涅槃は悉有佛性を述ぶといふ。然しこの佛智と佛性とは不二である。この佛智を妙法といふ。妙法とは衆生心である。衆生心は不變眞如清淨本覺の體であり、隨緣眞如染淨本覺の妙理である。是の如き佛智は衆生の三密である。衆生の三密に六重の本覺がある。この本覺に各々三十七尊の佛智乃至微塵の佛智、四種法身、四種曼荼羅身を具へている。衆生はこれを覺らないがこれを知見して衆生に開顯し授與する。この故に諸佛世尊は一大因緣を以つて世に出現して佛の智見を開示悟入せしめる。これが方便である。妙璃は顯教の方便の義には和漢の宗匠に諍論があるといひ密教には諍論がないかのように記し、弘法大師の說を唯一として他師の說を排げない。又妙璃は顯密の二意を以つて方便を釋すと云ふが密教の義は極めて簡略に述べて顯密の優劣を說かぬ。僅かに深秘の義の方便とは衆生の平等心地無盡藏を開發せしむる從果向因の功德三昧なりといひ、大日經住心品疏を引いて佛智の義を說くのみ。方便品の主眼たる佛智甚深其智慧門難解難入の段では顯教の解釋は通途の義を出でないが、密教の義では「吾大師密旨に曰く妙法とは諸佛智見なり。佛智見とは卽ち衆生心性なり」と引文して衆生の三密は本覺の三密であり、四種法身、四種曼荼羅身であるといふ。要するに本書を奮迅義と題したが極めて健實に顯密二教の初步の義に約して方便品の文を註釋したのに過ぎない。本書は妙璃が五十六歲の夏六月江戸牛込高田穴八幡光松山放生寺の神祠の蝸庵で「法華命義」を講じてゐた餘暇に記したものである。卷首には寶曆六年(A.D.1756)に丹嶺無染が撰した「方便品奮迅義序」と同五年に無垢稱居士具藝之伯時が撰した「法華經方便品奮迅義序」とを附してある。丹嶺無染は禪僧のようである。そして妙璃は律師卽ち眞言律僧のようだ。上卷末と下卷末とに妙璃が說話を記してゐる。この說話によつて本書は寛延四年六月、穴八幡放生寺の講莚の餘暇に記したことが知られる。

❺寶曆五刊 ❻(龍大、二四一三・一二九)(高大、寄・一・二三)

法華經方便品科簡 ❶(日)Ho-ke-kyō-hō-hen-hon-kyō-ken. (支)Fa-hua-ching-fang-pien-p'in-kiao-chien. ❷一卷 ❸存 ❻新編諸宗教藏總錄第一(田鳥德晉)

法華經實塔偈文釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-hō-tō-mon-gi-Bun-shaku. ❷一卷 ❸存 ❹佐藤信次編 ❺明治四五刊 ❻(立大、B〇三・六) ❼横濱法光館

法華經北林鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-hokki-rin-shō. 法華經科註鈔、法華北林鈔、科註妙法蓮華經鈔 ❷八卷或十二卷 ❸存 ❺刊本(哲、の・五・右・七)

法華經品釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-hon-shaku. 御註法華經品釋、法華品々觀心抄 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、列聖全集御撰集第六 ❹華園法皇(永仁四—貞和四 A.D.1295—1348) ❺法華經各品の大意を每品十數行以內の短文にて述べ、更に各品とも七言四句の頌文を作りて嗜記に便し給ふ。

法華經品釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-shaku. ❷一卷 ❸存 ❹行祐撰 ❼(參考) 大、日本佛教全書續刊豫定書目

法華經梵釋 ❶(日)Ho-ke-kyō-bon-shaku. 妙法蓮華經梵釋、法華開題、法華梵釋、法華經釋 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛教全書第二七智證大師全集第三 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891) ❺本書詳しくは妙法蓮華經梵釋といはれ、又法華經釋・法華開題等とも云ふ。題に 𑖦𑖼𑖽𑖼𑖨𑖼𑖨𑖼𑖨

界の潮流に從つて禪華嚴天台三宗融會の態度によつてこれを註解し、且つ道證は六朝佛教に對して天台大師が破斥を試みたことは現在に於いては更にこれを錄する必要がないとの主張に基いて全く破古の處を削除し、開示悟入佛之知見を天台大師の正義のままに記さんと企てた。加之經の科文も繁き者は略し闕けた者は補ひ、又訓渓の文句記の文も理の精深にして文の簡要なるものはこれを略釋し、猶又道證自らも僧補と記して遂べてゐる。此他明清時代の天台學匠の法華經の註疏も一二引用してゐる。道證の傳は未詳。僅かに本書の序文によつて一端を知るのみ。この序によると本書は彼が八十一二歳頃、康熙三十三年冬十月朔日に發筆し、翌三十四年冬復月長至日に序を作つて脱稿したのである。彼は年少講肆に列つて天台華嚴法相の諸宗を學び、後に入禪參究すること十載、又再び先に習つた教法を讀み研鑽を加へた。初めは華嚴を主として究究し、六十四歳の時に始めて華嚴疏論要語一百二十卷を編纂して刊行した。これが完成を見た時は年已に七十。彈指の間に疊えず八旬の年が至つた。因つて此生孤負することなからんとして法華一部を釋せんと欲し本書を編纂したのである。一如の新註出でて支那天台宗の法華文句の略釋は終つたかと思はれたが、智旭の會義が著されたことに復本書が編されては再び新しく將來に發展すべき法華の研究を打ち立てねばならぬ機運が潜んでゐると思はれる。

（田島德音）

法華經文句輔正記 ❶(日)Ho-ke-kyō-mon-ku-ji-ho-shō-ki. (支)Fa-hua-ching-wen-chü-fu-cheng-chi. 法華文句輔正記、法華天台文句輔正記、文句輔正記、輔正記 ❷十卷 ❸存、卍續一・四五・一―二 ❹唐道遷述

❺本書は題號「法華天台文句輔正記卷第一」と記した下に「輔妙樂記」と割註してあるように妙樂記即ち法華文句記を主とし處々に法華經の文及び天台の文句の中の文とを損錄して調諧的に字義を說明してゐる。本書を現流の法華文句記會本（明萬曆年中に蓮居紹曇が文句記を分會し戒山が南藏北藏と對校したもの）と對照するに略んど一致するが往々にして或は會本とは前後し、或は會本には缺けてゐる文がある。次に將來錄に就いて見ると本書は入唐八家の中一人も傳來してゐないし、又義天錄にも記してない。道遷述として法華鈔六卷・法華鈔三十卷・法華義疏二十卷の三部があることを諸宗章疏錄二の「三論宗」章疏目錄の內に揭げてある。又知證大師請來目錄には吉藏・南山・窺基等と共に「妙法蓮華經鈔六卷道遷」と記してある。そして智證大師將來錄には天台列祖撰述を列記してゐる所に道遷の著述が記されてゐない。道遷の傳は佛祖統紀二二。法華持驗記上にある。この二書の傳は共に天台山佛隨に居し、法華に精しく、太曆年中(A.D. 766―779)に入京して弘化し、著述が多くあるといふ。然るに本書には「吳興永定寺釋沙門道遷述」とある。吳興は現今の浙江錢塘道吳興縣治。唐代に於いては湖州といひ後に吳興州と改め更に湖州に改めた。故に吳興と記したことが唐にあつてもよい。道遷の傳が詳細でないから、唐代に吳興の永定寺に住したと見て置く。本書は文句のことを疏といふ。疏の文を釋するに略して四段となす。一は先づ題目を略解し、二は從佛出世の下は章安の注文を釋し、三に委釋の下は廣釋を指し、四に序者の下は文に依つて解釋すと大科を立てて文々句々を婆沙論、毛詩註、說文、玄文、法華玄義）、慈恩（法華玄贊）、禮記、梵網、肇法師長含序、大經、涅槃經疏、淨名、遺教經、百論、止觀、別傳、大般若經、起信論疏、華嚴疏、講唯識人、唯識宗、賢愚經、大寶積經、摩訶衍論錄、華嚴新經、勝鬘經、藏提記、圓鏡、藏法師、新華嚴等を引文してゐる。本書の解釋は唐代の天台學を忠實に記すのみにして特に彼の發明した新說はないが、字句の說明に於いては頗る親切に述べてあるから文句を讀む者には大に指針となる。唯識法相宗や華嚴宗との間に於ける異論を述べてゐるが教義上の發展を見るまでに評論してゐない。宋、孤山智圓は「維摩經略疏垂裕記」の序文に道遷は荆渓の門人なりと雖じてゐるから、宋代には明確に道遷を六祖門下と認めたことは疑ひがない。若し本書が六祖門下の道遷の述であると定むれば道遷は六祖が文句記を撰述する席に列つて參與したのではなからうか。撰述に參與したから本書の如きものを作られたのでないだらうか。これは全くの推定に過ぎないけれども或は上記の如くであるとせばこの推想も成立し得ると考へられる。但し法華圓鏡を雖じてゐるが法相宗の立場を離じたものと思はれる。華嚴を雖じてゐないのは六祖門下として果してよいであらうか。

❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

（田島德音）

法華經文字聲類韻音訓纂集 ❶(日)Ho-ke-kyō-mon-ji-shō-rui-in-on-kun-san-shū. 法華經音訓 ❷三卷 ❸存 ❹快倫（―慶長頃 A.D. 1596―1614―）述 ❺寛永一三刊（熊大、二四一三・一三六）慶安四刊（京大、一・二六ホ・二一）

法華經問答 ❶(日)Ho-ke-kyō-mon-tō. ❷二卷 ❸存 ❹珍海撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華經問答 ❶(日)Ho-ke-kyō-mon-tō. 妙法蓮華經法理書、繪入法華經問答 ❷三卷 ❸存 ❹刊本（帝國、二一二・三四）

法華經聞記 ❶(日)Ho-ke-kyō-mon-ki. ❷三卷 ❸存 ❹加藤法城述 ❺明治一八(A.D. 1885)春 ❻寫本（谷大、餘大・一一五）

法華經譯和尊德鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-yaku-wa-jin-tokuta-shō. 法華譯和尊德鈔 ❷三卷 ❸存 ❹日遠（元龜三―寛永一九 A.D. 1572―1642）記 ❺寛永一九刊 ❻(谷大、餘大・一一三四)

法華經遊意 ❶(日) Ho-ke-kyō-yū-i. (支)Fa-hua-ching-yu-i. 法華遊意 ❷二卷 ❸存、大正三四・六三三 No. 1722、卍續一・四二・四 ❹隋吉藏（太清三―武德六 A.D. 549―623）述 ❺法華遊意の下を見よ。❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一 ❺元祿四刊 ❻(谷大、餘大・六九二)(龍大、二四一三・一四一)

法華經遊意講錄 ❶(日)Ho-ke-kyō-yū-i-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹富明遠 ❻寫本（谷大、餘大・三二四一）

法華經要義 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-gi. 天台日蓮對照論述法華經要義 ❷一卷 ❸存 ❹清水龍山著 ❺大正八刊 ❻東京大阪屋號書店

法華經要義 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹本多日生（―昭和六 A.D. 1931）著 ❺昭和四刊 ❻東京中央出版社

法華經要解 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-kai. (支) Fa-hua-ching-yao-chieh. 法華要解、妙法蓮華經解、妙法蓮華經要解、標幟法華經要解 ❷七卷 ❸存、卍續一・四七・三―四 ❹宋戒環解

❺本書は華嚴禪の思想を內面に抱き天台の教義を表面に表して法華の要領を分科註解したもの。彼の說によれば釋尊は華嚴を首めに唱へて特に頓法を明し中間權說して衆志貞純なるに至つて實の法華を顯示したのである。故に一始一終共に實を敎へ相養してゐるのである。然るに若し二經の旨趣は遙かに相異るといふものがあればこれ宗を知らぬ者の言だと。是の如く聖人說法始終一貫。果唯一事無有餘乘と主張するのが戒環の法華觀であるが天台宗ではこの說を用ひない。溫陵開元蓮寺沙門戒環の傳は新續高僧傳四集三にあるが出生寂年共に未詳。彼れは法華と楞嚴とに通達し特に楞嚴の研究は深いと云はれてゐる。本書は卷首に科を置き、卷一の初めには宋靖康二年(A.D. 1127)に南住福州上生禪院嗣祖沙門及南撰の序があり、次に目次、次に遺者山如意野老鮮憑註「妙法蓮華經弘傳序」、次に序品第一、次に方便品第二等と勸發品第二十八までを經文を引いて註解してゐる。そして卷一之二には開解を五段に科す。初めには通釋經題。二には通述已意。三には通叙科列。四には譯經人時。五には正解文義である。第五段は經文の解釋である。

❻朝鮮刊本（谷大、餘大・三六三三）元祿一五刊（龍大、二四一三・一四二）(谷大、餘大・六五九)(叙山、天海)

法華經要解 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-kai. ❷二卷 ❸存 ❹能仁寺一著 ❺天正八刊 ❻東京博文館

法華經要解科 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-ga-kwa (支)Fa-hua-ching-yao-chieh-ko. 妙法蓮華經要解科文 ❷一卷 ❸存、卍續一・四七・三

❹本書は戒環の法華要解の科文によつて科を圖示したもの。撰者未詳。科を作つた旨趣は法華經要解解說を參照。（田島德音）

法華經要旨 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-shi. ❷一卷 ❸存 ❹日下大凝著 ❺大正一一刊 ❻(龍大、二四一三・一四三)

法華經要旨記 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-shi-ki. (支) Fa-hua-ching-yao-chih-chi ❷三卷或一卷 ❹岡公述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經要品 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-hon. ❷一卷 ❸存 ❹日遠（元龜三―寛永一九 A.D. 1572―1642）❺明治一二刊 ❻(帝國、一五六・七七)

法華經要品 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-hon. ❷一卷 ❸存 ❹木津無庵著 ❺明治四一刊 ❻(谷大、餘洋・二二八)

法華經要品和訓正謬 ❶(日)Ho-ke-kyō-yō-hon-wa-kun-shō-myū. ❷一卷 ❸存 ❹森略日滄著 ❻寫本（立大、一〇三・九七）

法華經要略 ❶(日)Ho-ke-kyō-yō-ryaku. ❷一册 ❸存 ❹木津無庵著 ❺明治四一刊 ❻(谷大、餘洋・二二九)

法華經要略記 ❶(日) Ho-ke-kyō-yō-ryak-ki. (支)Fa-hua-ching-yao-liao-chi. 法華要略記 ❷一卷 ❹唐窺基（貞觀六―永淳元 A.D. 622―682）述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華經禮讚 ❶(日)Ho-ke-kyō-rai-san. (支)Fa-hua-ching-li-tsan. ❷一卷 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華經禮讚 ❶(日)Ho-ke-kyō-rai-san. ❷一卷 ❸存 ❹松平俊子著 ❺昭和三刊 ❻(龍大)

法華經利益物語 ❶(日)Ho-ke-kyō-ri-yaku-mono-gatari. ❷五册 ❸存 ❹刊本（高大、等・一・二四）

法華經略記 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryak-ki. 法華略記、妙法蓮華經略記 ❷一卷、三卷或四卷 ❹明一（神龜五―延曆一七 A.D. 728―798）述 ❺法華略抄と題加して大正藏經第五十六卷に收められるものは本書の一部か。

❼(參考) 注進法相宗章疏

法華經略贊 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-san. (支) Fa-hua-ching-liao-tsan. ❷五卷 ❹唐惠沼（―開元二 A.D. 714）述

❺東域傳燈目錄卷上に云く「沼撰。或云。玄學。本命（一作余一作末）錄には云。照師。出傳。法院錄惠沼と（一作照）」與。惠照。別人也。然可考之云々。

法華經略讚 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-san. (支)Fa-hua-ching-liao-tsan. 法華經讚略、妙法蓮華經讚略 ❷三卷 ❹唐惠淨（太建一〇―貞觀一九 A.D. 578―645）述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄 2113

法華經略頌 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-ju. 妙法蓮華經略頌 ❷一卷 ❹仲算（永平五―貞元元 A.D. 935―976）❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經略頌 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-ju. 薩達磨奔茶利迦素恒攢略頌 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛教全書第一九 ❹道興（永平四―寛弘元 A.D. 924―1004）述 ❺薩達磨奔茶利迦素恒攢略頌の下を見よ。

法華經略疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-sho. (支)Fa-hua-ching-liao-su. 法華經疏、法華略疏、法華疏、妙法蓮華經疏 ❷二卷 ❸存、卍續二乙・二三・四 ❹宋竺道生（―元嘉一一 A.D. 434）述 ❺法華經疏 D. 757―759）述 ❻法華略抄と題加して大正藏經第五十六卷に收められるものは本書の一部か。

❼(參考) 注進法相宗章疏

法華經略贊 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-san. (支) Fa-hua-ching-liao-tsan. ❷五卷 ❹唐惠沼（―開元二 A.D. 714）述

❺東域傳燈目錄卷上に云く「沼撰。或云。玄學。本命（一作余一作末）錄には云。照師。出傳。法院錄惠沼と（一作照）」與。惠照。別人也。然可考之云々。

法華經略讚 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-san. (支)Fa-hua-ching-liao-tsan. 法華經讚略、妙法蓮華經讚略 ❷三卷 ❹唐惠淨（太建一〇―貞觀一九 A.D. 578―645）述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄 2113

法華經略頌 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-ju. 妙法蓮華經略頌 ❷一卷 ❹仲算（永平五―貞元元 A.D. 935―976）❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華經略頌 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-ju. 薩達磨奔茶利迦素恒攢略頌 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛教全書第一九 ❹道興（永平四―寛弘元 A.D. 924―1004）述 ❺薩達磨奔茶利迦素恒攢略頌の下を見よ。

法華經略疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-sho. (支)Fa-hua-ching-liao-su. 法華經疏、法華略疏、法華疏、妙法蓮華經疏 ❷二卷 ❸存、卍續二乙・二三・四 ❹宋竺道生（―元嘉一一 A.D. 434）述 ❺法華經疏

の下を見よ。

法華經略疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-sho. (支)Fa-hua-ching-lüe-shu. ❷三卷 ❸王清(一本作縉)撰 ❼(參考) 慈覺大師在唐錄遊錄、東域傳燈目錄卷上

法華經略疏 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-sho. ❷八卷 ❸存 ❹智顗(大同四—開皇一七A.D. 858—597)疏、性慶(寛文七—元文二A.D. 1667—1737)略 ❺享保一〇刊 ❾(龍大、二四一三・一四六)(谷大、餘大・五七七)(叡山、淨土)

法華經略疏私考 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryaku-sho-shi-kō. ❷十一卷 ❹泰嚴(正德元—寶曆一三A.D. 1711—1763)述 ❺延享四(A.D. 1747) ❼(參考) 淨土眞教典志第二

法華經兩界和合義 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryō-kai-wa-gō-gi. 講演法華儀 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第四一天台宗密教章疏第一、大日本佛教全書第二七智證大師全集第三 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891)述

❺本書は法華經の文を金胎兩部に充釋して兩者の全く和合する義を明らかにしたものである。卽ち大日五字の眞言は妙法蓮華經と同心、祕數の文字は法華の異名にて本雲利益は同等なりとし卽身成佛の義を明してあり、法華經の初二十品は胎藏界、後八品を金剛界に配し且つ本迹二門に分つては前十四品にて胎藏界十三會を釋し後十四品を金剛界三十七尊に充釋して各々文證をあげて說明す。其の所說たるや顯密一貫、一大圓敎の態度を以てし明らかに講演法華儀等の思想と同系である。燦通の秘外新定智證大師書錄第二には「亦云講演法華儀」とあり、其の別論とも見られるが校は兩書を共に僞錄となす如く、今書を直に大師の眞作となすには何考究の餘地を多分に殘すと見るべきであらう。

❼(參考) 秘外新定智證大師書錄第二八、本朝台祖撰述密部書目 (淺井眞昌)

法華經科簡 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryō-ken. (支)Fa-hua-ching-liao-chien. ❷一卷 ❹惠雲述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

法華經科簡 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryō-ken. (支)Fa-hua-ching-liao-chien. ❷一卷 ❹順憬述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

法華經科簡 ❶(日)Ho-ke-kyō-ryō-ken. 法華科簡 ❷一卷 ❹新羅義寂述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、奈良朝現在一切經疏目錄2132、2134

法華經綸貫 ❶(日)Ho-ke-kyō-rin-kwan. (支)Fa-hua-ching-lun-kuan. 法華綸貫、妙法蓮華經綸貫 ❷一卷 ❸存、卍續一・五〇・二 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九A.D. 1599—1655)述

❺法華經の深廣なる意義を一組に貫きたる書物といふ意味、天台の法華玄義及び同文句とに依り、その祕重要點のみを抽出し、法華の經題別文の要旨を頗る簡明に描寫したるもの。初に五重玄義の大綱を略說して題號釋の大體を說き、次に別文に入りて、二十八品の連絡關係と各品の要旨とを明示してゐる。玄文兩部の骨格だけを知らんとするには頗る適當せる小册子である。

❼(注釋) 法華綸貫講要一卷、福空 ❾刊本(谷大、餘大・四三四)(龍大、二四一三・一三七)

法華經綸貫考證 ❶(日)Ho-ke-kyō-rin-kwan-kō-shō. 法華綸貫考證 ❷一卷 ❸存 ❹敬雄(正德三—天明二A.D. 1713—1782)述 ❺明和七刊 ❾(龍大、二四一三一三八、研佛×正大、一一四二・二〇〇)

法華經綸貫講義 ❶(日)Ho-ke-kyō-rin-kwan-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹本多主馬著 ❺大正六(A.D. 1917)夏 ❾(谷大、餘大・三三二一×龍大、二四一三・一四〇)

法華經綸貫講要 ❶(日)Ho-ke-kyō-rin-kwan-kō-yō. 法華綸貫講要 ❷一卷 ❸存 ❹謹澄瀛空(安永九—文久二A.D. 1780—1862)述 ❾慶安三刊(立大、A一二・一七五—一七六)慶應三刊(龍大、二四一三・一三九×谷大、餘大・一七〇×立大、A一二・四八五×正大、一一四二・一九九)(叡山、密藏)寫本(高大、寄・一・一五)

法華經論 ❶(日)Ho-ke-kyō-ron. (支)Fa-hua-ching-lun. 妙法蓮華經憂波提舍、妙法蓮華經論、法華論 ❷二卷 ❸存、大正二六・一No. 1519、鎌往六、卍二二・三、北565盧、南576盧、元574盧、明北1237鈞、藏570盧、天571盧、指552麗、法554麗、至1252邑、明南1253麗、N. 1522 ❹菩提流支、曇林等共譯 ❺妙法蓮華經憂波提舍の下を見よ。

法華經論 ❶(日)Ho-ke-kyō-ron. (支)Fa-hua-ching-lun. 妙法蓮華經論優波提舍、妙法蓮華經論、法華經論優波提舍 ❷一卷 ❸存、大正二六・一No. 1520、鎌往六、卍二二・三、北565盧、南578盧、元573盧、明北1237鈞、清1237鈞、藏568麗、天571盧、指552麗、法554麗、至1256都、明南1253麗、N. 1523 ❹勒那摩提、僧朗等譯 ❺元魏正始五以後(A.D. 505—) ❻妙法蓮華經優波提舍の下を見よ。

法華經論三千書 ❶(日)Ho-ke-kyō-ron-san-zen-sho. (支)Fa-hua-ching-lun-san-chien-shu. ❷一卷 ❹宋仁岳(淳化三—治平元A.D. 992—1064)述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

法華經論述記 ❶(日)Ho-ke-kyō-ron-jut-ki. (支)Fa-hua-ching-lun-shu-chi. ❷一卷現存、卍續一・九五・四 ❸世親の法華經論に二本ある中、本書は菩提流支譯のものゝ注釋にして一卷のみ現存し、譬喩品第三迄の釋に止つてゐる。東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一に義寂釋、義一撰として法華經論述記二卷なるもの記され居り、奈良朝現在一切經疏目錄にも本書を記載し義寂釋、義一撰として本書を取扱つてゐる。貞慶が法華問示抄第一(大正五六・二六〇c)に「又義寂師義一師同〇云々。文廣可見之」と記してゐるものは東域錄等記載の法華經論述記を指すならんも、將して奈良朝目錄記載の如く卍續所收の本書と同一なるものなりや尙疑證は見出し難

きが如く、本書中には藏師云、眞諦三藏云、淨法師云、基師云として諸師の說を援引し、又「和上云」として所々に援引されて居る。然して本書には眞諦三藏の三種法輪の說をあげ「眞諦三藏云、有三種法輪、一轉法輪、謂佛二月八日成道、四月八日往婆羅奈、爲五比丘轉四諦法輪。二照法輪、謂佛成道以後第七年中、往施惠江邊、去祇洹林三里、說般若等無相大乘、是第二法輪。三持法輪、佛成道以後第三十八年中、從毗舍離鬼王法堂、爲勝義性等諸菩薩、說解節經等、卽是解深密等了義大乘、是名第三法輪」としてゐるが、寶達の金剛眼(大正八五・六〇 No. 2734)にも同樣な說をあげて「梁朝眞諦三藏立三時敎。第一如來成道七年已還、唯說四諦法輪名轉法輪、卽四阿含等也。第二時者、卽七年已前後三十八年已前說般若等、顯法空理照破前有名照法輪。三時三十八年已後未涅槃前說深密等、餘經盡是住持中道不失自相名持法輪也」としてゐる。

❾寫本(京大、藏・七ホ・二五) (辻森要修)

法華經論鈔 ❶(日)Ho-ke-kyō-ron-shō. ❷五卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下

法華經論傳 ❶(日)Ho-ke-kyō-ron-den. (支)Fa-hua-ching-lun-chuan. 妙法蓮華經論優波提舍、妙法蓮華經論、法華經論 ❷一卷 ❸存、大正二六・一〇 No. 1522、鎌往六、卍二二・三、北565盧、南577盧、元573盧、明北1237鈞、清1237鈞、藏565麗、天571盧、指552麗、法554麗、至1252邑、明南1253麗、N. 1523 ❹勒那摩提、僧朗等譯 ❺元魏正始五以後(A.D. 505—) ❻妙法蓮華經優波提舍の下を見よ。

法華經和歌百首 ❶(日)Ho-ke-kyō-wa-ha-hyaku-shu. ❸存、國文東方佛敎叢書第一輯第八歌頌部

❹愚管鈔の著者天台座主慈鳳和尙また和歌に幹あり、かの法華經和歌の如き世に傳誦せらるゝところである。大永四年九月二十五日、恰も慈鳳入滅の嘉祿元年より三百年目の正當に際し、特に後柏原天皇より勅題を賜はり青蓮院に於て勸進供養あり、朝野編素一百人和尙の遺風を慕つて諷詠したるものがこの法華經和歌百首である。

諷詠するところ法華二十八品より百句を選び、序品如是我聞より菩薩勸發品作禮而去に至るものである。

法華經和訓 ❶(日)Ho-ke-kyō-wa-kun. ❷八卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二四一三・一四七)

法華經和字解 ❶(日)Ho-ke-kyō-wa-ji-ge. 法華和字解 ❷八卷 ❸存 ❹佛海一晉 ❾明和五刊 ❾(龍大、二四一三・一四八)

法華經和譯 ❶(日)Ho-ke-kyō-wa-yaku. ❸存 ❹道一 ❼(參考) 禪籍目錄

法華鏡水鈔 ❶(日)Hi-k-ke-kyō-sui-shō. (支)Fa-hua-ching-shui-chao. 法華經玄贊要集、法華玄贊要集、鏡水鈔 ❷三十五卷(卷二二・三、三〇、三二缺) ❸存、卍續一・五三・三—五四・五 ❹居綱復集

❺法華經玄贊要集の下を見よ。

法華行者順次往生論 ❶(日)Hok-ke-gyō-ja-jun-ji-ō-jō-ron. ❷一卷 ❹俊經入道 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

法華行者値難事 ❶(日)Hok-ke-gyō-ja-chi-nan-no-koto. ❷一篇 ❸存、日蓮聖人御遺文之內 ❹日蓮(貞應元—弘安五A.D. 1222—1282) ❺文永一一(A.D. 1274)正月

❻佐渡流罪の翌年下總の富木胤繼に與へて、末法の法華經の行者は種々の大難に遭ふことを經文に依りて論證し、正像時代の法華經の行者は、釋尊と天台と傳敎とであり、末法の法華經の行者は日蓮より外にはない樣に思はれると、所謂上行再誕の自覺をほのめかした書である。

❼(參考) 錄內啓蒙二七、御書鈔一六等其他數種あり ❾寫本(中山法華經寺) (馬田行啓)

法華句解 ❶(日)Hok-ke-ku-ge. (支)Fa-hua-chü-chieh. 法華經句解、妙法蓮華經句解 ❷八卷 ❸存、卍續一・四七・五—四八・二 ❹宋聞達述 ❺法華經句解の下を見よ。❾寫文八刊 ❾(谷大、餘大・二九九八×貴、の・四・左・六)

法華弘贊 ❶(日)Hok-ke-gu-san. 法華經弘贊、妙法蓮華經弘贊 ❷十二卷或十五卷 ❹行賀(天平元—延曆二二A.D. 729—803)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一

法華弘通祕聞書 ❶(日)Hok-ke-gu-hi-hiki-gaki. ❷三卷 ❸存 ❹日輪 ❾寫本(立大、D〇・三二三)

法華弘傳 ❶(日)Hok-ke-gu-den. ❷二冊 ❸存 ❹靈空光謙(承應元—元文四A.D. 1652—1739)錄 ❺享保二刊 ❾(高大、寄・一・一五)

法華弘傳序 ❶(日)Hok-ke-gu-den-jo. (支)Fa-hua-hung-chuan-hsü. ❷一卷 ❹南山 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華弘傳序科解 ❶(日)Hok-ke-gu-den-jo-kwa-ge. ❷一卷 ❸存 ❺寶永年間刊 ❾(谷大、餘大・三九三三)

法華科註 ❶(日)Hok-ke-kwa-chū. (支)Fa-hua-ko-chu. 法華經科註、妙法蓮華經科註 ❷十卷或八卷 ❸存、卍續一・四八・五—四九・一 ❹元徐行敏(一至元三一A.D. 1264—)述 ❺法華經科註の下を見よ。 ❼(參考)諸宗章疏錄第二

法華科註 ❶(日)Hok-ke-kwa-chū. (支)Fa-hua-ko-chu. 法華經科註、妙法蓮華經科註 ❷十六卷或七卷 ❸存、卍續一・四九・一—三 ❹明一如(一永樂一六A.D. 1418—) ❺法華經科註の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法華科註私 ❶(日) Hok-ke-kwa-chū-shi. 法華經鈔、法華經科註鈔、科註法華經鈔、法華定珍鈔 ❷二十二卷或二十三卷 ❸存 ❹定珍(天文三—慶長九A.D. 1534—1604) ❺天正一六寫 ❾(叡山、別當)

法華科註私鈔 ❶(日)Hok-ke-kwa-chū-shi-shō. ❷三帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(貴重說)

法華科註序鈔 ❶(日)Hok-ke-kwa

-chū-jō-shō. 法華論疏注法分 ❹〔参〕 ❺仲 ❻空法(元和八一寛永八A.D.1622—1680)撰 ❼寛永(寛永元一正徳一A.D.1639—1712)頃 ❽寛文九刊(正天・一一四一)寛永七刊(寛天・寛・一・一五・一一三)

法華玄文 ❶(日)Hok-ke-kwa-gen. (支) Fa-hua-k'o-wên. 法華論疏玄文 法華論疏玄文 ❷一巻 ❸隋智顗(天台宗一開祖)撰 A. D. 549—623) ❹〔参〕 諸宗要義疏

法華玄文 ❶(日)Hok-ke-kwa-mon. (支)Fa-hua-k'o-wên. ❷一巻 ❸唐湛然(荆溪尊一)撰(天一)撰 A. D. 632—682) ❹〔参〕 諸宗要義疏

法華玄文 ❶(日)Hok-ke-kwa-mon. 法華論疏玄文 ❷一巻 ❸仲 ❹唐智顗(天台宗一開祖)撰 A.D. 942—1017) ❺〔参〕 諸宗要義疏

法華玄文 ❶(日)Hok-ke-kwa-mon. ❷一一巻 ❸行賀(天平天一宝亀)一一一 A. D. 729—803) ❹〔参〕 東寺観智院目録巻上〔〕 諸宗要義疏

法華経賛 ❶(日)Hok-ke-kwan-sha-ku. 法華論疏経賛〔〕 法華経賛経 ❷一巻 ❸仲 ❹四倉(弘仁五一貞観一A.D.814—891) ❺平安(文天〔〕A一一・四五四)〔文天〕日天宝・三九)〔寛天〕日天宝・四〇〇)

法華経賛経入論法則 ❶(日)Hok-ke-kwan-shaku-tsuketari-hak-kō-hos-soku. 法華経法華経賛経入論法則 ❷一巻 ❸仲 ❹平安(延天〔〕三七・五〇一五一)

法華経勧発菩提論 ❶(日) Hok-ke-kwan-jin-kō-yō-dan. ❷三巻 ❸仲 ❹鎌倉 ❺宗教 ❻宗山〔〕

法華経顕宗真言印信 ❶(日)Hok-ke-kwan-jō-in-jin. ❹法華経顕宗真言方面宗の印信°

法華経顕宗真言印信 ❶(日)Hok-ke-kwan-jō-in-jin. ❹法華経顕宗真言方山本宗宗に属する印信°

法華経顕宗真言印信 ❶(日)Hok-ke-kwan-jō-in-jin. 法華経顕宗真言印信 ❷一巻〔〕 ❸仲 ❹小野流真言宗の印信°

法華経普門品玄文 ❶(日) Hok-ke-kwann-om-bon-kwa-mon. (支) Fa-hua-kuan-yin-p'in-k'o-wên. ❷一巻 ❹唐湛然(荆溪尊一)撰(天一一一一一一一一A. D. 711—782) ❺諸宗要義疏

法華経普門品疏 ❶(日) Hok-ke-kwann-om-bon-sho. (支)Fa-hua-kuan-yin-p'in-su. 観音経疏 観音経疏 観音経疏 観音経疏 ❷一一巻 ❸仲 天宝三四・九一一 No. 1728 観音疏 卍 三三・三一 明応1533頃 Nj. 1557 ❹隋智顗(天台宗一開祖)撰 A. D. 538—597)述 隋智顗(天台宗一開祖)撰 A. D. 561—632)記 ❺観音経疏の下巻は欠 ❻〔参〕 東寺観智院目録巻上 諸宗要義疏

法華経行 ❶(日)Hok-ke-kwan-gyō. ❷一巻 ❹唐湛然(天台宗一開祖)撰 A. D. 942—1017) ❺〔参〕 東寺観智院目録巻上 山家正義記

法華経経同略纂 ❶(日) Hok-ke-kwan-gyō-dō-ji-ben. ❸仲 ❹豆口貞水(文化五一明治)撰 A. D. 1808—1893) ❺寛永七(寛天・一五〇一・一一三一一)

法華経心賞 ❶(日) Hok-ke-kawn-jin-san. ❷一巻 ❸仲 ❹日蓮(貞応一一一一安政六 A. D. 1800—1859)撰 日蓮(天保元一明治一一一 A. D. 1830—1888)改訂 ❺明治一五刊 ❻(文天・八〇八・一一三一一一一)(寛寛・四〇〇・一九三)

法華経心四種記 ❶(日) Hok-ke-kwan-jin-shi-shu-ki. ❷一巻 ❹四仁(弘仁一一一一一一貞観六 A. D. 814—891)撰 ❺〔参〕 東寺観智院目録巻上 山家正義記

法華経心私記 ❶(日) Hok-ke-kwan-jin-shi-ki. ❷一一巻 ❹四仁(弘仁一一一一一一貞観六A. D. 814—891)撰 ❺〔参〕 東寺観智院目録巻上 山家正義記

法華経心分 ❶(日) Hok-ke-kwan-jin-shō. ❷一巻 ❹花園法皇(永仁四一一四一年四A. D. 1296—1348) ❺〔参〕 山家正義記 諸宗要義疏 東寺観智院目録巻上

法華経経法 ❶(日)Hok-ke-kwam-bō. 法華経経法 ❷一巻 ❸仲 ❹大日本秘密経全書巻一四〇 ❺法華経心経秘密法門 ❻〔参〕 東寺観智院目録巻上

法華経経記 ❶(日) Hok-ke-kun-shak-ki. ❷一一巻 ❹安倍泰盛(一一弘仁一一一 A. D. 810—823—)撰 ❺〔参〕 東寺観智院目録巻上

法華経訓蒙抄 ❶(日) Hok-ke-kum-mō-shō. ❸仲 ❹大正四貞応一一一 ❺(文天・四〇・一五七)

法華経外博 ❶(日)Hok-ke-ge-den. ❷一巻 ❸仲 ❹山上憶良撰 ❺天正九刊 ❻東京帝国大学蔵

法華経経記 ❶(日) Hok-ke-ge-sek-ki. 法華経経記 ❷十巻 ❸天三巻 ❹仲 ❺置今(天平勝宝一一一一一一一一

❼〔参考〕 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一 ❾元和三刊(叡山、溢賀)〈叡山、普量〉寛永一七刊(正大、一一四二・二九)刊本(立大、A一一・二四—二五〈正大、一一四二・四三、一四五、二三九—二四〇〉(高大、寄・一・一五)

法華玄義外典要勘鈔 ❶(日)Hok-ke-gen-ten-yō-kan-shō. 玄義外勘鈔 ❷十卷 ❸存 ❹寛文一一刊 ❾〈谷大、餘大・二四五五〈立大、A一一・五一—五二〉

法華玄義見聞 ❶(日)Hok-ke-gen-ken-mon. ❷四卷 ❸存 ❹寛文二寫 ❾〈谷大、餘大・三九八〉

法華玄義懸談 ❶(日)Hok-ke-gen-ken-dan. ❷一卷 ❸存 ❹輕潭 ❺文政二寫 ❾〈谷大、長保・一七五〉

法華玄義考拾記 ❶(日)Hok-ke-gen-kō-shō-ki. 法華玄義釋籤考拾記、玄義釋籤考拾記、玄籤考拾記 ❷十卷或十二卷 ❸存 ❹日詔述? ❾刊本(谷大、餘大・一九四八〈立大、A一一・五九〉

法華玄義講義 ❶(日)Hok-ke-gen-kō-gi. 法華玄義釋籤聽記、法華玄義甲辰記 ❷二卷或四卷 ❸存 ❹義辨(—萬延元A.D.1860)述 ❺天保一五(A.D.1844) ❾寫本(谷大、餘大・三二〇・四三二)

法華玄義講錄 ❶(日)Hok-ke-gen-kō-roku. ❷二十冊 ❸存 ❹義尋(文化二—明治一四A.D.1805—1881)述 ❾寫本(谷大、餘大・二六八八)

法華玄義私記 ❶(日)Hok-ke-gen-shi-ki. ❷十卷 ❸存、大日本佛教全書第二一、佛教大系 ❾證眞(—建久頃A.D.1190—1198)述

❸本書は天台智顗の法華玄義十卷の注釋書である。著者證眞は除慧、永辨の二師について慧心禮那の法流を窮め、世と隔てゝ專ら大藏經の閲覽に沒頭し、前後遂に十六過に及び、爲に源平の戰亂も知らなかつたと云はれる。叡山東塔の華王院に住して大に講席を張つたが、後寶地房を構えて專ら著述を事とした。三大部私記三十卷を初めとして大論私記二卷、觀音玄略鈔一卷、天台眞言二宗同異集等凡十三部四十七卷の著作がある。紬說强達、高邁な識見を有してゐたことが其の著述の態度に窺はれる。常に「遠くは大聖世尊を師とし近くは天台則天を師とす。其の餘の者は之れを用ひるに足らず」と云つたと云はれ、又本書第五卷の本に古來の三悉同時斷說を覆へして異時斷說を立て、同じく第三之末に元品無明妙覺智斷說を排して等覺智斷說を建立したるが如きは現に論席の美目として傳へられるが、又以て其の風格を偲ぶに足りる。但し其の用語法時に常例に違するものあり、全く日本的漢文體とも云ふべく、鎌倉時代和漢混淆文への推移を示してゐる。天台正統學者から時に異端視される所もあるが、三大部研究には座右必須の書である。

❺慶長一六刊 ❾〈叡山、天海〈立大、A一一、四四—四六〈高大、寄・一・一五〈正大、一一四二・六一〈龍大、二六五一・二七〉

(石井亮薫)

法華玄義釋籤 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen. (支)Fa-hua-hsüan-i-shih-chien. 天台法華玄義釋籤、法華釋籤、玄義釋籤、釋籤、妙法蓮華經玄義釋籤 ❷十卷或二十卷 ❸存、大正三三・八一五 Z. 1217、鎌倉一〇、卍三一・八—一〇、明北1662多士、清1400祿至車、至1665嗣、明南1662更顯、佛教大系、N. 1625 ❹湛然(景雲二—建中三A.D.711—782)述 ❺唐廣德二(A.D.764)

❻學者の籤簡に任せて釋せる法華玄義の註釋といふ程の意味。

支那天台の根本原典たる智顗の法華玄義を、六世の法孫荊溪湛然が全力を傾けて解釋したる力作、別項止觀補行弘決と並行して天台教義の完璧を全ふしたる一代の名著である。その題目が示すが如く著者が天台住山中、學徒の籤問に應じて隨時答釋せるものを基本とし、後に鄉里毘陵に滯在中此に修正を加へ、文勢の起盡を正し、釋義を補足し、繁簡宜敎を得て一部を成せること卷頭自序に依つて知られ、その完成期が唐代宗廣德二年であつたことは普門の序で明かである。

釋義の樣式は先づ玄義の本文を適當に分節し、大小の科段を逐ふて順次文意を釋顯してゐるが註解頗る詳密、片言隻語も忽にしない。或は引文の出據を示し、原意の從容なるものは力めて此を明確にし、本文に云々と記して釋を略せるものは一々此を補釋する等眞意闡明に懸命の努力を拂ひしのみならず、更に天台の主張を擴大强化し宗義の補强に貢獻せし處少くない。部數の異乖(會本三八)超八醍醐(同三九)涅槃讀會單複兩義(二下八一)天台と中論(三下一三)判圓同異(二下八一、五上六五)五時證據(十下九)等全篇を通じて澎湃たる生氣と、火の如き熱意とを以て所信を發表してゐる。特に本著中注目すべきは別項十不二門の挿入である。此の論作は、玄義の釋名の章に妙法二字を本迹二重十妙に約して釋してゐるが、その迹門の十妙と本門の十妙との中間に於て、著者獨創の自見を以て補遺されたものである。その作意は天台の妙解妙行を成就せしむるにある。卽ち玄義所明の二門十妙に依憑して色心等の十門を開き、尖等の門々悉く三千一實相と開顯することに依つて、一面には玄義所談の二門十妙の妙理に解入せしむると共に、一面止觀所明の三千一實の妙行に修入し得べしと說く。かくて天台の深廣なる敎理と圓妙なる實行とを强々數葉の短小論作に結要し來り、理論と實踐との歸趨を明示したる所に頗る重要性を有する。

かく本書は絕力天台の正義を宣揚すると同時に、一面に華嚴法相等他家の主張に破斥を加へてゐる。卽ち華嚴家に對しては、華嚴非獨妙(會本一上六)。不動而證論(一上三二)。法華非漸圓(一下四一、三下七、五上一六、十上八等)。初住卽極問題(五下六)。法華華嚴勝劣(十上一二、同一三)。藏敎立名(十上二一)。等賢首清凉慧苑等を難じ、慈恩家に對しては、定性無性問題(二下六七等)。染淨別圓三身常無常(五下三

八)等專ら玄賢の所立を駁し、更に高祥に對しては、方便品題釋(七下三九)其他に就て難じ、又處々に無敎時禪の弊を斥けてゐる。

如是、本書は破邪顯正兩面に渾身の力を專注せる代表作であつて、天台の著述と同等の權威を有する支那天台敎學の珠玉と見るべきものである。玄義と釋籤とは久しく別行されてゐたが、明の萬曆年中、佛隨の眞覺が會合して二十卷となした。讀習に便宜の爲、近代の學者は皆此の會本を用ゐてゐる。

❼〔注釋〕 法華玄義釋籤義鑑十卷戒順、同證釋十卷智銓、同要決十卷道邃、同私十卷日崇、同捃釋十卷眞慈、同示處二卷智寬、同備檢四卷有嚴、同籤錄十五卷本純、同講義十卷栖空、同講述十五卷大寶。

〔参考〕 新編諸宗敎藏總錄第一、東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一

❾光緒一七刊(帝國、二三三・二二)刊本(京大、一・二三ホ・六〈立大、A一一・二六〈高大、寄・一・一五)、正大、一一四二・一四一)

(中里貞隆)

法華玄義釋籤會本 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-e-hon. (支) Fa-hua-hsüan-i-shih-chien-hui-pen. 妙法蓮華經玄義釋籤會本 ❷二十卷 ❸存、卍三一・八—一〇、天台三大部會本之內 ❹陸智顗(大同四—開皇一七A.D.532—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A.D.561—632)記、湛然(景雲二—建中三A.D.711—782)述、明眞覺分會 ❺法華玄義釋籤の下參照。 ❾刊本(內閣〈叡山、壽量〉立大、A一一・二七—三〇、三四四〈高大、一・一五)

法華玄義釋籤義斷 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-gi-dan. ❷十卷 ❸存 ❹或順述 ❾寫本(龍大、二六五一・三七)〈谷大、餘大・七七三〈正大、一一四二・五八〉

法華玄義釋籤聞書 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹親海 ❾寫本(叡山、藥樹)

法華玄義釋籤捃釋 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-kun-shaku. 玄義釋籤捃釋、玄籤捃釋 ❷十卷 ❸存 ❹眞慈(—萬治二A.D.1659)述 ❺寫文九刊 ❾〈龍大、二六五一・三八〈谷大、餘大・七六〇〉

法華玄義釋籤玄談 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-gen-dan. ❷一卷 ❸存、照遍和尙全集第三 ❹玉田照遍(文政一一—明治四〇A.D.1828—1907)述 ❾刊本(谷大、餘大・二六八〇〈高大、寄・一・一五)

法華玄義釋籤考拾記 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-kō-shō-ki. 法華玄義考拾記、玄義釋籤考拾記、玄籤考拾記 ❷十卷或十二卷 ❸存 ❹日詔述? ❾刊本(龍大、二六五一・四〇〈叡山、惠眼〉

法華玄義釋籤講義 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-shaku-sen-kō-gi. ❷十卷 ❸存、佛教大系天台三大部講義之內 ❹慧澄(寛永九—文久二A.D.1632—1862)述 ❻本書は法華玄義釋籤を講義せるもの、天台敎學の至寶たる法華三大部の一、法華玄義を高祖天台智者大師開演し給ふも、其の妙旨容易に極め難く此處に六祖湛然之れを註し高義を演暢して釋籤と名づく。本書亦籤解の點なきにしもあらず、ために古來其の註書の出づる事多きも今は近世の碩學慧澄律師が學徒の便を圖り最も知解し易く講演せる講義錄を上梓して十卷とせるものが本書である。古來玄義の末註多き中にあつて本邦にて學者の指南となすに寶地坊證眞の私記及び本書と慧澄直後の守脫大寶の講述が其の名註と稱せられ依憑せられる所である。

師の傳を略述すれば字は慧澄、號は愚谷、安永九年近江に生れ俗性は高橋氏、十歲登叡し安樂律院譽忍に就いて祝髮す。以つて天台學を初め一般佛敎學乃至外典の研讀につとむ。或は大雲の法嗣となりては和歌浦の作是庵にあり、如法に八齋戒・十重戒・灌頂を修し、文化三年二月安樂律院に仁海を拜して形同沙彌となる。年三十無動寺に初めて俱舍頌疏を講じ同九年江戸東叡山に玄義・文句を講じ同十四年三十八歲にして安樂律院に具進し、文政六年東叡山淨名院に移住し、自在心院・菩賢行院兩法親王の侍讀となり、文久二年三月示寂。世壽八十。世歲初講より入寂に至る迄五十年間合計東台の往還十餘回、各處に天台を講述す。所謂安樂學派を强調せる學風にて講ずる所一家の學に留らず。俱舍・因明・起信等の各部門に及び演ずる所從つて之を刊行せしため、世に行はれ學徒を益すること頗る多し。其の代表的著述には三大部の講義各十卷、觀音玄義講義・四敎義山義・起信論講義の各三卷等頗る多量である。近世佛敎界の偉傑たると共に大いに學徒を敎奬し幕末期の學者にして師に深りしもの少からず、特に現代天台學は皆律師の流をくむものである。

次に本書の說時は明確ならざるも文化九年東叡山に法華玄義・同文句を講ぜしより、入滅に至る間常に一家章疏の講演に勤めて居り、本書は東台の大衆が聽講せる所を上梓し嘉永三年に成つてゐる。卽ち律師講義のノートを出版せるもので玄義の講演も一度ならざる事と思はれるよりして明確に年時を定め得ない所と思ふ。

本書は如何なる態度と學風を示すかに就いて一見すれば、今同じく一乘とせられる眞言と華嚴を法華に比して如何に見たか。之れ古來の論諍ある所なるも慧澄師は明らかに斷定を下してゐる。卽ち華嚴に就いては賢首大師が法華は破三顯一にて猶ほ三一の形待あれば華嚴の海印炳現として破すべきなく會すべきなしと云ふに對し「迷性海融通、失を化導敎意」と難じ、且つ密門に對しては其徒が法身自性の說を詩つて應佛の化迹を輕んずるを評し、天台の敎義より觀れば猶爾面體用の分別にて今昔隔會の化意に望むれば相去る事遠しといふ。蓋し律師の見識卓越たるを知るべきである(法華玄義開講演義を參照せよ)。此の思潮下にあつて時に一寮輪を別立せるものに守脫大寶がある。

本書は勿論、實に玄義釋籤の忠實なる說明解說をなせるもので、いふ所の內外兩典の典據をあげ、用語の解釋を初め籤を會通し外籤を造し眞典の克明なる講義にて安樂

系學風よりせられた學的立脚地にある。佛教大系本により便宜上釋籤と講義の卷數を對照せば次の如し。佛教大系法華玄義第一(籤一上—二上。義一—二ノ半)。同第二(籤二下—三下。義二—三)。同第三(籤四上—五下。義四—五)。同第四(籤六上—八上。義六—八)。同第五(籤八下—十下。義八—十)。

❹嘉永二刊(正大、一一四二・一四八)(立大、A一一・六四—六六)(京大、一・二三ホ・一六)(高大、寄・一・一五)寫本(正大、一一四二・五四—五五)(叡山、薬量)(浅草最古)

法華玄義釋籤講述 ❶(日)Hok-ke-gi-shaku-sen-ki-jutsu. ❷十卷 ❸存、佛教大系 ❹大寶(文化元—明治一七 A.D.1804—1884)述 ❺嘉永五(A.D.1852)述 ❻法華玄義釋籤を解釋せる書。慧澄律師に次いで近世の碩學たる守脫大寶の代表的撰述にて嘉永五年の草創、台嶽大衆の請により講述せる自記を明治二十九年上梓せるものである。

初めに略傳すれば大寶は一に守脫と稱し岡崎寺内日光院の學僧。元伊勢國眞宗大谷波安性寺に文化元年を以つて生れ後叡山に登り天台に歸し、宗學研究に努む。安樂律院に住して慧澄律師の講席に侍し、後日光山に三大部を講ずる等各處に講莚をはる。師の學風澄師に合はずして一門の反對を蒙り轉じて寺門派に入り日光院に住して學徒のために盛んに講述す。明治十五年に至り東京本派本願寺大教校に招かれ、天台の三大部を初め俱舍頌疏・起信論等を講ず。明治十七年二月十日京都の旅舍に示寂す。世壽八十一歳。著述頗る多く中にも本書を初め摩訶止觀講述・冠註四教儀集註・妙宗鈔講述各六卷・十不二門指要鈔講述・金剛論講述・天台菩薩戒疏各二卷等あり。今の講述は師の代表的撰述たるものにて、其の學風の旗幟を異にするより一部の反對を蒙つたが、師は天台學に精通せるのみならず佛儒二道に達し普遍に長ぜる所にして多方面にわたる著述は此點を立證するもの、單に天台の學徒に限らず一般佛徒及び儒徒迄喜んで聽講せるは師の博學を物語るものである。

本書は玄義研究の指針として重視せらるゝ一書にて今その態度と學風を一見せば、慧澄律師が華嚴・眞言二教を批判せるに準じて大寶も亦法相・華嚴・眞言三家の教相を痛破するは前者以上のものである。先づ法相の三時教を見る事は「約ゝ部前二教是施權、第三時是顯實、雖ゝ有ゝ廣權二、約ゝ教變非中道、不ゝ超ゝ天台別教」ことし、華嚴五教に就ては「華嚴五時偏望ゝ法門高勝二、立ゝ說本末ゝ親ゝ教優劣二、然揚ゝ從本起末之本ゝ華嚴、而抑ゝ攝本歸末之本ゝ法華」及由ゝ橫觀ゝ逗機益物ゝ全昧ゝ出世化意」と難ず。法華と眞言に關しては四ケ條の問答を以つて論述決擇し、其の所說昧はふ可き所多し。(以上詳しくは開講要義を見よ)かく各家の判教は自意によつてなさるゝ所多きに反して天台は他門を貶せず自家を辱めざる正直の判教なれば學者擇んで以つて行くべしとの論旨にて一部を綴つてゐる。如此く澄師の講義に比して玄義そのものゝ性質に則りて教判に對して頗る留意して法華の高調につとめた事が知られる。

本書講述にあたり從來各家の說を批判し縱横に所見を述べる事再三にとゞまらざる所で例せば一上に開示悟入を明かすに私見十條をあげ山家と得一の所說を批判し、或は守護章の不當を指摘し、或は享保に於ける安樂一派の所說を難ずる如きであり、實に利刀を以つて魔麻を斬るの感が全卷に溢れてゐて、内は宗祖傳教の所說のみならず妙立靈空等に亘り、且つ外難も遮すは德川時代の華嚴學者等の難に對せる反駁とも見られやう。今便宜上佛教大系本と本書の卷數を對照すれば次の如し。佛教大系法華玄義第一(籤一上—二上。述一上—二上)、同第二(籤二下—三下。述二下—三下)、同第三(籤四上—五下。述四上—五下)、同第四(籤六上—八上。述六上—八上)、同第五(籤八下—十下。述八下—十下)。

❼明治二九刊(谷大、餘大・一四二)(叡山、水尾)(正大、一一四二・一四九—一五〇)(龍大、二六五一・二八)(立大、A一一・六七—六八)寫本(龍大、二六五一・二九)(浅草最古)

法華玄義釋籤私 ❶(日)Hok-ke-gi-shaku-sen-shi. 法華玄義釋籤私記、玄籤崇鈔 ❷十卷 ❸存 ❹日崇 ❺享保(—寶永)一五刊 ❻(谷大、餘大・三〇一九)(龍大、二六五一・三六)

法華玄義釋籤示處 ❶(日)Hok-ke-gi-sen-shi-shaku-sen-ji-sho. ❷二卷 ❸存 ❹智寶 ❺享保一五寫 ❻(谷大、餘大・四六五)

法華玄義釋籤籤錄 ❶(日)Hok-ke-gi-sen-shi-shaku-sen-roku. 法華玄義籤錄、法華經玄義籤錄、玄義釋籤籤錄 ❷十卷或二十卷 ❸存 ❹本純(—寶曆頃 A.D.1751—1763)述 ❺寫政元刊(龍大、二六五一・四一、研佛)(谷大、餘大・七六五)(立大、A一一・五三—五四、一五一—一五二)(京大、一・二三ホ・八)刊本(正大、一一四二・五七)

法華玄義釋籤備檢 ❶(日)Hok-ke-gi-sen-shaku-sen-bi-ken. (支)Fa-hua-hsüan-i-shih-chien-pei-chien. 法華經玄籤備檢、玄義釋籤備檢、玄籤備檢 ❷四卷 ❸存、卍續一・四四・四 ❹宋有繁(—建中靖國元 A.D.1101)述 ❺法華經玄籤備檢の下を見よ。 ❻刊本(龍大、二六五一・四三)

法華玄義釋籤傍註 ❶(日)Hok-ke-gi-sen-shaku-sen-bo-chū. ❷十卷 ❸存 ❹慧澄口授、岩佐菩潤編 ❺明治三二刊(立大、A一一・三一—三二、三三二)(正大、一一四二・一四三)(帝國、一〇一・一〇六)明治三五刊(谷大、餘大・四七七)(龍大、二六五一・三〇)(正大、一一四二・二四七)(立大、A一一・三三九)(京大、一・二三ホ・七)(叡山、水尾)

法華玄義釋籤要決 ❶(日)Hok-ke-gi-sen-shaku-sen-yō-ketsu. 天台法華玄義釋籤要決、法華玄義要決 ❷十卷 ❸存、大日本佛教全書第一五 ❹道邃(—保元二 A.D.1154—1155) ❺久壽年間(A.D.1154—1155) ❻天台の法華玄義、及び荆溪の釋籤の中の要文を註釋したるもの。日本に於ける玄義釋籤註釋の最初。題號は「傳法沙門道邃」

名所行號 ●題目(名)(書) ●卷數 ●存本 ●著者 ●著作年代 ●内容 ●末書(註釋書參考書) ●寫本(書家)(書)(名)

が若し。中略。所以に斯の鈔を製述して本文を解釋し、會意發揮し鳳て合衙の眞を千歲の今に復へさんと欲す」と云つてゐる。師の鬼負と本書の復眞鈔と名づくる所以も自ら明了である。

一部六卷叙述の次第、隨文解釋に先だつて本書述作の大意を明してゐる。其の中第一に師が本書を製述せざるべからざる所以を剖析、四明等の非を舉げて述べ、第二に然る所以を眞文に徵し、その眞僞を簡んで證明してゐる。其の眞僞を簡ぶとは「師に文なく、私に新說を作す者は僞也。中略。眞說を述ぶと雖も、或は偏或は僻なる、或は其の旨を失し、或は其の序を紊る等、眞意に符順せざるものは皆また僞の類なり」と云ひ、而も其の眞僞分判の爲に十二條の籤略を示してゐる。其の十二ケ條とは、一には十界權實、二には開會分齊、三には十妙十乘、四には教觀雙運、五には四句可遣、六には大小偏圓、七には守文害理、八には新說可黜、九には時教橫豎、十には判教是非、十一には別圓不離、十二には情智分別である。かくして玄義の本文に入り文に隨つて釋會を施してゐる。蓋し第十判教是非の文に於いて「凡そ佛教東漸して以來、判教立宗の家頗る多し、而も未だ曾て今家の五時八教を以て判釋し、賢首の同別五教を以て建立せるが如きの理教圓備なるものあらず。此の二判教は迦文の一化に比肩すべき教中の偉實なり」と云ひ、又「今師但だ法華開顯の妙旨を顯はさんが爲めに且らく一門に據つて諸教を對望し、以て魚妙を判ずるのみ。全く情謂を以て安排計較し、優劣を確定し以て勝負を鬪ふの旨に非ず」と主張し、或は又「李唐以來台教を弘通するの諸賢、多くは則ち五時八教の文相に確執して、乃ち教判を引いて、これを自宗を高尙にし他教を卑劣にするの具に備へ、經論を引き來りて以て五時八教の判釋に殉合せしめ、自ら一家と稱して保著すること膠の如し。豈是れ天台の意ならんや」等と云へるが如きは、華天一致の思想に立てる師の本書述作の態度を窺ふに足るものであらう。

⑨明和八刊(立大、A一一・六三)明治三二寫(谷大、餘大・九〇二)　(石井亮蕙)

法華玄義分科 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-bun-kwa. ❷一卷 ❸存 ⑤安永三寫 ⑨(叡山、華藏)

法華玄義本迹十妙不二門 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-hon-jaku-jū-myō-fu-ni-mon. (支)Fa-hua-hsüan-i-pên-chi-shih-miao-pu-êrh-mên. 十不二門、十不二門義、法華本迹十不二門、法華十妙不二門、法華玄義十不二門 ❷一卷 ❸存、大正四六・七〇二 No.1927、續藏一〇、卍三三・七、明北1574起、明南1595續、Nj.1501 ❹康洪然(景雲二—建中三 A.D.711—782)述 ⑥十不二門の下を見よ。 ⑦(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

法華玄義問要 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-mon-yō. ❷五冊 ❸存 ⑤寛文二寫 ⑨(谷大、餘大・三九八)

法華玄義要決 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-yō-ketsu. 法華玄義釋籤要決、天台法華玄義釋籤要決、玄義釋籤要決、玄義要決、玄籤要決、玄義義決 ❷十卷 ❸存、大日本佛教全書第一五 ❹道邃(—保元二1157)述 ⑥法華玄義釋籤要決の下を見よ。 ⑤萬治三刊 ⑨(京大、日大未・四八)(叡山、慈眼)(叡山、密嚴)

法華玄義要文 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-yō-mon. ❷一卷(下卷) ❸存 ❹貞存 ⑤應仁二寫 ⑨(谷大、餘丙・一〇八)

法華玄義略解 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-ryaku-ge. ❷三卷 ❸存 ❹僧朗(明和六—寛永四 A.D.1769—1651)述 ⑨寫本(龍大、二六五一・三五)

法華玄義略頌 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-ryaku-ju. ❷一卷 ❸存 ⑨寫本(叡山、密嚴)

法華玄義略大綱私 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-ryaku-tai-kō-shi. ❷二卷 ❸存 ❹實海 ⑦(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華玄義略大綱要文 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-ryaku-tai-kō-yō-mon. ❷一卷 ❸存 ❹貞存 ⑤應仁二寫 ⑨(谷大、餘丙・一〇八)

法華玄義略要 ❶(日)Hok-ke-gen-gi-ryaku-yō. 玄義略要 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891)述 ⑥玄義略要の下を見よ。 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第二、山家眞德撰述篇目集卷上 ⑤正德三刊 ⑨(龍大、二六五一・三六)(谷大、餘大・六〇八)(京大、日大未・四六)

法華玄贊 ❶(日)Hok-ke-gen-san. (支)Fa-hua-hsüan-tsan. 妙法蓮華經玄贊、玄贊、法華經玄贊 ❷二十卷 ❸存、大正三四・六五一 No.1721、卍續一・五二・四—五、至1601積像 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元 A.D.632—686)述 ⑥妙法蓮華經玄贊の下を見よ。 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄 ⑤1155 ⑨寫文四刊(高大、寄・一・一五)(京大、一・二三・ホ・九)(叡山、禪林)寫本(叡山、天海)

法華玄贊一乘義私記 ❶(日)Hok-ke-gen-san-ichi-jō-gi-shi-ki. 一乘義私記、法華經玄贊一乘義私記 ❷三卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛教全書第二〇 ❹眞興(永平四—寛弘元 A.D.934—1004)述 ⑤寛和元(A.D.985) ⑥一乘義私記の下を見よ。

法華玄贊記 ❶(日)Hok-ke-gen-san-ki. (支)Fa-hua-hsüan-tsan-chi. 法華經玄贊記 ❷四卷 ❹清素述 ⑦(參考) 諸宗章疏錄第二

法華玄贊義決 ❶(日)Hok-ke-gen-san-gi-ketsu. (支)Fa-hua-hsüan-tsan-i-chüeh. 法華經玄贊義決、法華義決、妙法蓮華經玄贊義決 ❷一卷 ❸存、大正三四・八五四 No.1724、卍續一・五三・一 ❹唐慧沼(—開元二A.D.714)述 ⑥本書は法相宗々祖慈恩大師法華玄贊十卷を弟子慧沼が注釋せるものにして、三乘教に立脚して一乘教を批判せるものなり。もと教卷存せしも佚して傳らず、現存するは一卷のみ。自序は初に玄贊の六門分別の第一叙經起之意を釋して經所說の因に一因乃至八因を明し、次に經起意に十門を以て分別し、次に經得名及び經品得名を明し、次に經品廢立及び品之次第を明し、第六門釋經之本文段は佚して傳らず。 ⑨寫本(京大、藏・七ホ・九)(谷大、餘大・四二四二)　(鳴本凝風)

法華玄贊釋 ❶(日)Hok-ke-gen-san-shaku. (支)Fa-hua-hsüan-tsan-shih. 法華經玄贊釋 ❸一卷現存、卍續一・九三・一 ❹唐可周述 ⑥法華經玄贊釋の下を見よ。 ⑨寫本(京大、藏・七ホ・二六)

法華玄贊摘釋 ❶(日)Hok-ke-gen-san-shō-shaku. (支)Fa-hua-hsüan-tsan-chai-shih. 法華經玄贊摘釋、法華經摘釋、法華摘釋、妙法蓮華經摘釋 ❷四卷 ❸存、卍續一・五三・一—二 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一A.D.678—733)述 ⑥法華經玄贊摘釋の下を見よ。 ⑨寫本(京大、藏・七ホ・一〇)(谷大、餘大・四〇六五)(正大、一一四二・一八〇)

法華玄讚注 ❶(日)Hok-ke-gen-san-chū. ❷一卷 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891) ⑦(參考) 諸宗章疏錄第二、山家眞德撰述篇目集卷下

法華玄讚要集 ❶(日)Hok-ke-gen-san-yō-shū. (支)Fa-hua-hsüan-tsan-yao-chi. 法華經玄贊要集、法華鏡水鈔 ❷三十五卷(卷二二、二三、三〇、三二缺) ❸存、卍續一・五三・三—五四・五 ❹唐栖復集 ⑥法華經玄贊要集の下を見よ。 ⑦(參考) 山家眞德撰述篇目集卷下

法華玄問答 ❶(日)Hok-ke-gen-mon-tō. 玄義問答 ❷二卷 ❸缺 ❹叡山僧護景雲元—弘仁一三 A.D.767—822) ⑦(參考) 本朝台眞撰述密部書目、山家眞德撰述篇目集卷下

法華玄論 ❶(日)Hok-ke-gen-ron. (支)Fa-hua-hsüan-lun. 法華經玄論 ❷十卷 ❸存、大正三四・三六一 No.1729、卍續一・四二・三 ❹隋吉藏(太清三—武德六 A.D.549—623)述 ⑥本書は嘉祥大師吉藏が、(一)弘經方法。(二)大意。(三)釋名。(四)立宗。(五)決疑。(六)隨文釋義の六門を以て法華の玄義を釋せるものにして、その立場は三論に立つ事は勿論である。弘經方法の中の明經譯緣起の一段には「此經凡有二本、一正法華經(乃至)二妙法蓮華經、晉場摩羅什此云童壽、於偽秦弘始五年四月二十三日、於長安逍遙園譯出大品、後於草堂寺譯出此經二十七品」として、羅什譯法華經の二十七品なりしを晴示し、立宗(經宗旨)の下には遠法師、龍師、道場慧觀法師、中興寺印師等の十三家の說をあげ、續いて明一乘義即釋會三歸一義、開方便門示眞實相、論羅漢知一乘不知一乘義、信解品譬喩義、藥草喩品五乘義、一番義、明授記義、釋化城義、寶塔品密開本迹義、論淨土義、論分別功德品生數義、論得道多少義、隨喜義、論悉障、六千功德義、論觀音菩門義、論觀音名、二種次第義、正像義、論佛入涅槃等の諸論目に就て詳述し、その援引する經論疏としては、須眞天子般若經・新金光明・楞伽經・大品・華嚴經・佛藏經・涅槃經・像法決疑經・淨名經・阿彌陀經・大集經・文殊問經・摩伽經・摩耶經・仁王經・優婆塞經・無量義經・思益經・成實論・舍利弗毘曇・雜心論・十住論・善見毘婆沙・中論分別論・法華論・唯識論・攝大乘論・智度論・中論・金剛般若論・名僧傳・龍樹傳・地論・評論・十二門論・俱舍論・涅槃辨評論・叡法師喩疑論・肇法師涅槃論・注法華・叡師釋論序・僧叡小品經序等の多數に達し、人師としては龍樹・肇公・光宅・慧觀・求那三藏・忠法師・印法師・龍法師・竺道生・道朗・遠法師・叡師・莊嚴・瑤法師・上定林寺鏡師・地論師・成論師・北方論師等の說を出すなど、全く博引詳密を極め、單に吉藏の法華觀を知るといふ上のみならず、これら人師の學說の片鱗を知るには貴重なる文獻と云はねばならぬ。

本書製作の年代に就ては確證は擧げ得ないが、吉藏の他の著書仁王般若疏、大乘玄論等に引用するより見て、吉藏としてはその初期の述作なりといふべく、法華統略に「昔在ニ會稽一著ニ此經玄文凡二十卷ニ中居ニ京兆一錄ニ其要一用裁爲ニ七卷ニ云々」とある玄文二十卷中に入るべきものにして本書は實に吉藏入京前會稽時代の述作と思はれる。宋代の志磐が佛祖統紀に「……因求ニ法華玄義一發レ卷一覽感忻、乃焚ニ棄舊疏一深悔ニ前作一、來投ニ章安一吾受觀法ニ」と云つてゐるが、この舊疏とあるを天台との交涉前の著述の意とせば本論の知きもその一なるべく、この舊疏を焚棄した等の事はその事實を認め難き樣にて、恐らくは志磐の說は、三大部補註等によつた揑造說の如くに思はれ

れる。

❹〔参考〕 東京帝国大学文学部印度哲学研究室蔵本上、昭和学術研究会蔵本上、

法華経現証徳分 ❶(日) Hok-ke-gen-an-go-zen-shō. ❷一巻 ❸存 ❹元禄三年刊(宝永六年刊)(一六〇六)

日蓮(一二二二—一二八二)著。

❹写本(宮内庁書陵部蔵本・一六〇六)

法華経顕戒論 ❶(日) Hok-ke-gen-dan. (支)Fa-hua-hsüan-t'an. ❷存「四巻十二章」之内 ❸京都市 ❹四巻十二章の下巻。

法華経顕 ❶(日) Hok-ke-ko-waku. ❷四巻 ❸存、日本大蔵経第三巻九大谷大学蔵本(宝暦版)第二巻、第三巻 ❹〔参考〕 日本大蔵経第三巻九大谷大学蔵本(宝暦版)第二巻、第三巻

(宝暦版)第二巻、第三巻 ❺天台宗の教学上、法華経は仏教の最高の教理であるとして、その教理を顕示するために、法華経の文句を解釈したものである。

法華経顕戒論 ❶(日) Hok-ke-gen-dan. (支)Fa-hua-hsüan-t'an. ❷存「四巻十二章」之内 ❸京都市 ❹四巻十二章の下巻。

法華経顕 ❶(日) Hok-ke-ko-waku. ❷四巻 ❸存、日本大蔵経第三巻九大谷大学蔵本(宝暦版)第二巻、第三巻 ❹天台宗の教学上、法華経は仏教の最高の教理であるとして、その教理を顕示するために、法華経の文句を解釈したものである。

法華経現証徳分 ❶(日) Hok-ke-gen-an-go-zen-shō. ❷四巻 ❸存 ❹日蓮(一二二二—一二八二)著。

❹写本(宮内庁書陵部蔵本・一六〇六)

法華経顕戒論 ❶(日) Hok-ke-gen-dan. (支)Fa-hua-hsüan-t'an. ❷存「四巻十二章」之内 ❸京都市 ❹四巻十二章の下巻。

法華経顕 ❶(日) Hok-ke-ko-waku. ❷四巻 ❸存、日本大蔵経第三巻九大谷大学蔵本(宝暦版)第二巻、第三巻 ❹天台宗の教学上、法華経は仏教の最高の教理であるとして、その教理を顕示するために、法華経の文句を解釈したものである。

法華経現証徳分 ❶(日) Hok-ke-gen-an-go-zen-shō. ❷四巻 ❸存 ❹日蓮(一二二二—一二八二)著。

❹写本(宮内庁書陵部蔵本・一六〇六)

法華経顕戒論 ❶(日) Hok-ke-gen-dan. (支)Fa-hua-hsüan-t'an. ❷存「四巻十二章」之内 ❸京都市 ❹四巻十二章の下巻。

法華経顕 ❶(日) Hok-ke-ko-waku. ❷四巻 ❸存、日本大蔵経第三巻九大谷大学蔵本(宝暦版)第二巻、第三巻 ❹天台宗の教学上、法華経は仏教の最高の教理であるとして、その教理を顕示するために、法華経の文句を解釈したものである。

法華経五百問論 ❶(日) Hok-ke-go-hyaku-mon-ron. (支)Fa-hua-wu-pai-wên-lun. 法華論五百問論、五百問論、論義 ❷三巻 ❸存、卍続一・五・四 ❹唐法礎(宗祖)一一一七中三 A. D. 711—782)著

❹仏教問答の法華経経文の所定に対し天台の立場に基づき分別されたもの。

法華経五部 ❶(日) Hok-ke-go-bu-ku-kwan-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四A.D. 1065—1138)著 ❺天台宗(A.D. 1126) ❻〔参考〕 天明台四聞法華経巻目、山家四聞法華経巻目、巻末下 ❼写本(宮内庁書陵部)

法華五部書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四 A. D. 1065—1138) ❺写本(宮内庁一四一三・一四九)

法華護摩 ❶(日)Hok-ke-go-ma. ❷一巻 ❸存 ❹密教系 ❺写本(宮内庁書陵部)

法華護摩願文 ❶(日) Hok-ke-go-ma-ge-mon. ❷一巻 ❸存、著心住著全集第三、摩訶止観第六法華法 ❹原題は(天慶五年)

一巻上(天A. D. 942—1017)

❹原題はなし、全集編者名付されて収録した。

法華経五百問 ❶(日) Hok-ke-go-hyaku-mon-ron. (支)Fa-hua-wu-pai-wên-lun. 法華論五百問論、五百問論、論義 ❷三巻 ❸存、卍続一・五・四 ❹唐法礎(宗祖)一一一七中三 A. D. 711—782)著

❹仏教問答の法華経経文の所定に対し天台の立場に基づき分別されたもの。

法華経五部九巻書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-ku-kwan-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四A.D. 1065—1138)著 ❺天台宗(A.D. 1126) ❻〔参考〕 天明台四聞法華経巻目、山家四聞法華経巻目、巻末下 ❼写本(宮内庁書陵部)

法華五部書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四 A. D. 1065—1138) ❺写本(宮内庁一四一三・一四九)

法華護摩 ❶(日)Hok-ke-go-ma. ❷一巻 ❸存 ❹密教系 ❺写本(宮内庁書陵部)

法華護摩願文 ❶(日) Hok-ke-go-ma-ge-mon. ❷一巻 ❸存、著心住著全集第三、摩訶止観第六法華法 ❹原題は(天慶五年)一巻上(天A. D. 942—1017)

❹原題はなし、全集編者名付されて収録した。

法華経五百問 ❶(日) Hok-ke-go-hyaku-mon-ron. (支)Fa-hua-wu-pai-wên-lun. 法華論五百問論、五百問論、論義 ❷三巻 ❸存、卍続一・五・四 ❹唐法礎(宗祖)一一一七中三 A. D. 711—782)著

❹仏教問答の法華経経文の所定に対し天台の立場に基づき分別されたもの。

法華経五部九巻書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-ku-kwan-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四A.D. 1065—1138)著 ❺天台宗(A.D. 1126) ❻〔参考〕 天明台四聞法華経巻目、山家四聞法華経巻目、巻末下 ❼写本(宮内庁書陵部)

法華五部書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四 A. D. 1065—1138) ❺写本(宮内庁一四一三・一四九)

法華護摩 ❶(日)Hok-ke-go-ma. ❷一巻 ❸存 ❹密教系 ❺写本(宮内庁書陵部)

法華護摩願文 ❶(日) Hok-ke-go-ma-ge-mon. ❷一巻 ❸存、著心住著全集第三、摩訶止観第六法華法 ❹原題は(天慶五年)一巻上(天A. D. 942—1017)

❹原題はなし、全集編者名付されて収録した。

法華経五百問 ❶(日) Hok-ke-go-hyaku-mon-ron. (支)Fa-hua-wu-pai-wên-lun. 法華論五百問論、五百問論、論義 ❷三巻 ❸存、卍続一・五・四 ❹唐法礎(宗祖)一一一七中三 A. D. 711—782)著

❹仏教問答の法華経経文の所定に対し天台の立場に基づき分別されたもの。

法華経五部九巻書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-ku-kwan-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四A.D. 1065—1138)著 ❺天台宗(A.D. 1126) ❻〔参考〕 天明台四聞法華経巻目、山家四聞法華経巻目、巻末下 ❼写本(宮内庁書陵部)

法華五部書 ❶(日) Hok-ke-go-bu-sho. 法華五部九巻書 ❷一巻 ❸存 ❹寺号(法華天一座蔵四 A. D. 1065—1138) ❺写本(宮内庁一四一三・一四九)

法華護摩 ❶(日)Hok-ke-go-ma. ❷一巻 ❸存 ❹密教系 ❺写本(宮内庁書陵部)

法華護摩願文 ❶(日) Hok-ke-go-ma-ge-mon. ❷一巻 ❸存、著心住著全集第三、摩訶止観第六法華法 ❹原題は(天慶五年)一巻上(天A. D. 942—1017)

❹原題はなし、全集編者名付されて収録した。

法華三昧懺儀 ❶(名)Hoh-ke-san-dai-ba-ki-gi. 天台宗の懺儀。法華三昧を修する時の作法を記した書。❷(名)[仏]天台宗の僧侶。❸[仏]十五夜の一。❹[仏]十五夜の一。❺(名)[仏]法華三昧を修する人。❻(名)[仏]法華三昧を修する時に用いる。❼(名)[仏]法華三昧を修する時に用いる。

法華三昧記 ❶(名)Hoh-ke-san-dai-ba-shi-ki. 天台宗の僧侶、慈覚大師円仁(A.D.1780—1869)の著。❷[仏]十五夜の一。❸[仏]十五夜の一。❹[仏]十五夜の一。❺[仏]十五夜の一。❻[仏]十五夜の一。❼[仏]十五夜の一。❽[仏]十五夜の一。❾[仏]十五夜の一。❿[仏]十五夜の一。

法華三昧堂 ❶(名)Hoh-ke-san-dai-ba-do-gi. 天台宗の堂。❷[仏]法華三昧を修する堂。❸[仏]十五夜の一。❹[仏]十五夜の一。❺[仏]十五夜の一。❻[仏]十五夜の一。❼[仏]十五夜の一。❽[仏]十五夜の一。❾[仏]十五夜の一。❿[仏]十五夜の一。

法華三昧懺法 ❶(名)Hoh-ke-san-dai-ba-ki-ho. 天台宗の懺法。法華三昧を修する時の作法を記した書。❷[仏]十五夜の一。❸[仏]十五夜の一。❹[仏]十五夜の一。❺[仏]十五夜の一。❻[仏]十五夜の一。❼[仏]十五夜の一。❽[仏]十五夜の一。❾[仏]十五夜の一。❿[仏]十五夜の一。

法華三昧記 ❶(名)Hoh-ke-san-dai-ba-shi-ki. 天台宗の僧侶、慈覚大師円仁(A.D.1780—1869)の著。❷[仏]十五夜の一。❸[仏]十五夜の一。❹[仏]十五夜の一。❺[仏]十五夜の一。❻[仏]十五夜の一。❼[仏]十五夜の一。❽[仏]十五夜の一。❾[仏]十五夜の一。❿[仏]十五夜の一。

法華三昧堂 ❶(名)Hoh-ke-san-dai-ba-do

ると言ひ、更に方法論として四事、三十六事を説くも何れも般若無相の空觀に立つものであつて、不見生不見死乃至無意無識行は法華三昧所見の事なりと言つてゐる。從つて本經に言ふ法華三昧とは空觀已上の何物でもないと見て差支へないが、法華部に攝入せらるる故、般若法華の兩部に對し本經が如何なる地位を占むべきかに就ては説明する必要があらう。

先づ本經と法華經との關係を考ふるに、本經の半頃に至り王女剎行が化して男子となり、更に復善薩となつたと言ひ、時に一佛剎中に女人有ることなしと述べ、大衆、作佛の記を授けられ、其國恰も阿彌陀國の如しと宣揚する邊は法華已上と認むるが至當である。法行に關しても本經は經末に至つて二回書寫法行を説くのみならず、書寫誦通讀供養禮拜とて、書寫行を首位に置いてゐるのである。斯くの如きはそれが譯者自身の變更でない限り、大乘諸經一般が受持誦讀解説書寫と配列するよりも、より後世の表現形式とも見られるものである。それ故、何れの點より觀るも本經は法華已前のものではなく、法華を豫想しての述作と見るが至當であらう。

空觀を以つて法華等の女人及び大衆成佛觀を會通したものが本經の全部であつて、其の空觀に徴する境地を法華三昧と稱したのであるから、若し法華系統の人師による述作とすれば法華の特色を無視することとなるので、般若系統の人師による或る法華經觀又は會通と見做すべきである。

法華三昧行事運想補助儀 ❶(日)Hok-ke-zan-mai-gyō-ji-un-sō-in-jō-gi. (支)Fa-hua-san-mei-hsing-shih-yun-hsiang-pu-chu-i. 法華三昧補助儀 ❷一卷 ❸存、大正四六・九五五No.1949、續藏一〇、卍三〇・八、明北1552補、清1550宜、Nj.1511 ❹唐湛然(妙雲二—建中三A.D.711—782)撰 ❺天台の法華三昧儀の註釋。撰號は「唐國清沙門湛然撰」とあり。初めに述作の旨趣が事儀と運想の正祖を別する爲めなるを説き、次に儀儀の正修方法に於ける十科につき、各項の要義を註す。後に懺悔について唱ふべき略文を掲げる。 ❼(参考)宋高僧傳第六、天台宗章疏(玄日錄) ❽延寶七刊 ❾(谷大、長保・一一九) (大野法道)

法華三昧行法 ❶(日)Hok-ke-sam-mai-gyō-hō. ❷一卷 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上

法華三昧修證訣 ❶(日) Hok-ke-sam-mai-shu-shō-ketsu. (支)Fa-hua-san-mei-hsiu-chêng-chüeh. ❷一卷 ❼(参考) 日本國承和五年入唐求法目錄、入唐新求聖教目錄

法華三昧懺儀 ❶(日) Hok-ke-sam-mai-sen-gi. (支) Fa-hua-san-mei-ch'an-i. 法華三昧行法、法華三昧儀、法華經三昧儀 ❷一卷 ❸存、大正四六・九四九No.1941、續藏一〇、卍三〇・八、明北1552補、清1550宜、Nj.1510 ❹隋智顗(大同四—開皇一七A.D.932—597)撰 ❺法華三昧の方便及び正修の行儀を説けるもの。題下に「法華三昧行事運想補助儀禮法華經儀式」とあり、撰號の所に「隋瓦官寺沙門釋智顗、練栄法華普賢觀經及諸大乘經意、撰此法門流行後代」とある。本文は五科に分る。(一)明三七日行法華懺法勸修、(二)三七日行法前方便、(三)明正入道場三七日修行一心精進方法、(四)初入道場正修行方法、(五)略明修證相である。第四の正修方法は更に十法に分れ、(一)嚴淨道場、(二)行者淨身、(三)行者修三業供養法、(四)請三寶方法、(五)讚歎三寶方法、(六)禮佛方法、(七)懺悔六根及勸請陪喜廻向發願方法、(八)行道法、(九)重明誦經方法、(十)坐禪實相正觀方法とする。

章安は摩訶止觀卷二上に半行半坐三昧の説法を記すに際し、法華の行法につき十科を説くる法華三昧一卷あり、天台大師の作で世に流傳し行者の宗とする所と云ひ、本書の序に於て題式も、之は天台が瓦官寺で親撰したもので、章安が言ふ法華三昧は即ち本書なりといふ。又題式の當時、正修行十科の第十坐禪正觀法の下に、心の推檢について五句を掲出する本があつたが、それはもと四句推檢であるはずならぬから、四句本を正本として刊行する旨を、この題式の「法華三昧懺儀勘定元本序」に論じてゐる。之に依て推知するに現本にも、天台所説そのまゝでなく後人の加筆があるであらうと疑はせられる。知禮の修懺要旨中には多く本書を依用す。

❼(注釋) 法華三昧行事運想補助儀一卷(湛然)、略法華三昧補助儀並序一卷(失名)、禮法華經儀式一卷(失名)

(参考) 新編諸宗教藏總錄第一、天台大師別傳、開藏知津第四二 ❽延寶七刊 ❾(谷大、長保・一一九)(正大、一三四・四九)(立大A一八・一)(高大、寄・一一五) (大野法道)

法華三昧懺儀 ❶(日)Hok-ke-sam-mai-sen-gi. (支) Fa-hua-san-mei-ch'an-i. ❷一卷 ❹題式(乾德二—明道元A.D.963—1032) ❺智顗說の法華三昧懺儀一卷(大正四六No.1941)に首書せる題式の法華三昧懺儀勘定元本序のことか。 ❼(参考) 諸宗章疏錄第二

法華三昧補助儀 ❶(日) Hok-ke-sam-mai-fu-jo-gi. (支) Fa-hua-san-mei-pu-chu-i. 法華三昧行事運想補助儀、妙法蓮華經三昧補助儀 ❷一卷 ❸存、大正四六・九五五No.1949、續藏一〇、卍三〇・八、明北1552補、清1550宜、Nj.1511 ❹唐湛然(妙雲二—建中三A.D.711—782)・❺法華三昧行事運想補助儀の下を見よ。 ❼(参考) 諸宗章疏錄第一

法華三昧靈驗傳 ❶(日) Hok-ke-sam-mai-rei-gen-den. (支) Fa-hua-san-mei-ling-yen-chuan. ❷三卷 ❹宋谷法師述 ❼(参考) 慈覺大師在唐送進錄

法華贊 ❶(日)Hok-ke-san. (支)Fa-hua-tsan. 法華經讚 ❷三卷或四卷 ❹唐

代詩表述 ❼(参考) 御請來目錄、諸宗章疏錄第二

法華贊略 ❶(日)Hok-ke-san-ryaku. (支)Fa-hua-tsan-lüe. 法華經讚略、法華經略讚、法華略贊、妙法蓮華經讚略 ❷二卷 ❹唐惠淨(太建一〇—貞觀一九A.D.578—645)述 ❼(参考) 諸宗章疏錄第二

法華纂要 ❶(日)Hok-ke-san-yō. (支)Fa-hua-tsuan-yao. 法華經纂要 ❷一卷 ❹唐惠沼(—開元二一A.D.714)述 ❼(参考) 諸宗章疏錄第二

法華讃下卷聞記 ❶(日) Hok-ke-san-ge-kwan-gen-ki. ❷三卷 ❸存 ❹實曆七寫 ❾(谷大)

法華讃述 ❶(日)Hok-ke-san-jutsu. (支)Fa-hua-tsan-shu. 法華經贊述、法華經述贊、法華述贊、妙法蓮華經述贊 ❷十卷 ❹唐惠淨(太建一〇—貞觀一九A.D.578—645)述 ❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄2112

法華子註 ❶(日)Hok-ke-shi-chu. (支)Fa-hua-tzu-chu. 法華子注 ❷三卷 ❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄2136, 2137

法華止觀科節 ❶(日)Hok-ke-shi-kwan-kwa-setsu. 止觀科節 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 ❾圓珍(弘仁五—寛平三A.D.814—891)記 ❺止觀科節の下を見よ。 ❾元祿一六刊 ❾(京大、日大來・四七)

法華四條論義 ❶(日)Hok-ke-shi-jō-ron-gi. ❷一卷 ❸存 ❹玄瑞述 ❾刊本(龍大、二四一三・三四)

法華字釋 ❶(日)Hok-ke-ji-shaku. (支)Fa-hua-tzu-shih. 法華字釋記 ❷一卷 ❸缺 ❹隋曇捷述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上、奈良朝現在一切經疏目錄2265, 2267

法華字釋記 ❶(日) Hok-ke-ji-shaku-ki. (支)Fa-hua-tzu-shih-chi. 法華字釋記 ❷一卷 ❸缺 ❹隋曇捷述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上

法華寺大鏡 ❶(日)Hok-ke-ji-dai-kyō-gami. 西大寺大鏡別集法華寺大鏡 ❷一卷 ❸存 ❹東京美術學校編刊 ❾大正一三—一五刊 ❾(立大、D七一・九×龍大、別置)

法華寺事蹟 ❶(日) Hok-ke-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

法華寺十一面觀世音菩薩像考證 ❶(日) Hok-ke-ji-jū-ichi-men-kwan-ze-on-bo-satsu-zō-kō-shō. ❸存、黑川眞頼全集第三

法華持驗記 ❶(日)Hok-ke-ji-gen-ki. (支)Fa-hua-ch'ih-yen-chi. 法華經持驗記 ❷二卷 ❸存、卍續二乙・七・五 ❹浩克復纂 ❺法華經持驗記の下を見よ。 ❾天和三刊 ❾(叡山、別當)

法華持誦要集 ❶(日)Hok-ke-ji-jō-shū. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華辭典 ❶(日)Hok-ke-ji-ten. 現代語譯法華辭典 ❷一卷 ❸存 ❹日宗十萬人團結報恩會編 ❺昭和二刊 ❿東京隆文館

法華四論議 ❶(日)Hok-ke-shi-ron-gi. ❷一卷 ❼(参考) 本朝台疏撰述書都書目

法華次第 ❶(日)Hok-ke-shi-dai. ❷一册 ❸存 ❺延享五寫 ❾(寶善提院)

法華私記 ❶(日)Hok-ke-shi-ki. ❷一卷 ❹寂燈(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822)撰 ❼(参考) 本朝台疏撰述書目、山家疏德撰述篇目集卷下

法華私記 ❶(日)Hok-ke-shi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹長寛(長和五—永保元A.D.1016—1081)記 ❺長久二(A.D.1041) ❾寫本(南溪藏)

法華私記緣起 ❶(日)Hok-ke-shi-ki-en-gi. (支)Fa-hua-ssü-chi-yüan-chi. ❷一卷 ❸存、法華玄義釋籤會本之內 ❹唐湛頂(天寶二—貞觀六A.D.743—822)述、湛然(景雲二—建中三A.D.711—782)記 ❺文祿四刊 ❾(京大、一・二四・貴)(正大、一一四二・二五二)

法華詩論 ❶(日)Hok-ke-shi-ron. ❸存 ❹山崎榮紅 ❺明治四一刊 ❾(立大、B〇八・一四) ❾東京佐久良書店

法華自我偈繪抄 ❶(日)Hok-ke-jiga-wa-e-shō. ❷二卷 ❸存 ❹日蜂 ❺文化一一刊 ❾(龍大、二四一三・三二—三三)

法華自我偈繪抄續編 ❶(日)Hok-ke-jiga-wa-e-shō-zoku-hen. ❷二卷 ❸存 ❾刊本(龍大、二四一三・三四)

法華字釋 ❶(日)Hok-ke-ji-shaku. (支)Fa-hua-tzu-shih-yen-chi-chi. 法華字釋記 ❷一卷 ❸缺 ❹隋曇捷述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上、奈良朝現在一切經疏目錄2265, 2267

法華寺大鏡 ❶(日)Hok-ke-ji-dai-kyō-gami. 西大寺大鏡別集法華寺大鏡 ❷一卷 ❸存 ❹東京美術學校編刊 ❾大正一三—一五刊 ❾(立大、D七一・九×龍大、別置)

法華寺事蹟 ❶(日) Hok-ke-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

法華寺十一面觀世音菩薩像考證 ❶(日) Hok-ke-ji-jū-ichi-men-kwan-ze-on-bo-satsu-zō-kō-shō. ❸存、黑川眞頼全集第三

法華持驗記 ❶(日)Hok-ke-ji-gen-ki. (支)Fa-hua-ch'ih-yen-chi. 法華經持驗記 ❷二卷 ❸存、卍續二乙・七・五 ❹浩克復纂 ❺法華經持驗記の下を見よ。 ❾天和三刊 ❾(叡山、別當)

法華持誦要集 ❶(日)Hok-ke-ji-jō-shū. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華辭典 ❶(日)Hok-ke-ji-ten. 現代語譯法華辭典 ❷一卷 ❸存 ❹日宗十萬人團結報恩會編 ❺昭和二刊 ❿東京隆文館

法華直談鈔 ❶(日)Hok-ke-jiki-dan-shō. 法華經直談鈔 ❷十卷或二十卷 ❸存 ❹榮心述 ❾寛永年間刊(京大、一・二三ホ・一一)(哲、の・四・左・一四)(高大、寄・一・五)足利時代寫(寶善院)

法華七喩鈔 ❶(日)Hok-ke-shichi-yu-shō. ❷三卷或二卷 ❹寂燈(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822)撰 ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目、山家疏德撰述篇目集卷上

法華實相記 ❶(日) Hok-ke-jis-sō-ki. 法華實相義記 ❷一卷或三卷 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六A.D.794—864)述 ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目、山家疏德撰述篇目集卷上

法華車體集 ❶(日)Hok-ke-sha-tai-shū. ❷一卷 ❹寂燈(神護景雲元—弘仁一三A.D.767—822) ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目、山家疏德撰述篇目集卷上

法華迹本十妙釋 ❶(日) Hok-ke-shaku-hon-jū-myō-shaku. ❷二卷 ❸存、天台小部集釋第三 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六A.D.794—864)述 ❺法華迹門觀心絶待妙釋及法華本門觀心十妙釋の下を見よ。

法華迹門觀心十妙釋 ❶(日)Hok-ke-shaku-mon-kwan-jin-jū-myō-shaku. 法華迹門觀心絶待妙釋、法華迹門絶待觀心釋 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第四〇天台宗疏教章疏第二、大日本佛教全書第二四天台小部集釋 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六A.D.794—864)述 ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目、山家疏德撰述篇目集卷上

法華迹門觀心絶待妙釋 ❶(日)Hok-ke-shaku-mon-kan-jin-zet-tai-myō-shaku. 法華迹門觀心十妙釋、直至道場講 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第四〇天台宗顯教章疏第二、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋之内 ❹圓仁(延暦一三—貞觀六 A. D. 794—864)述

❺本書は、法華玄義迹門十妙の觀心釋である。法華本迹二門各々心・佛・衆生の三法にかけて十妙(境・智・行・位・三法・感應・神通・說法・眷屬・利益)を論ずる時は六十妙を成ずるが、本書は且らく其の迹門中の心法の十妙について說述したものである。即ち一觀心境妙絶待一、二觀心智妙絶待一、三觀心絶待行妙一、四觀心絶待位妙一、五觀心絶待三法妙一、六觀心絶待感應妙一、七觀心絶待神通妙一、八觀心絶待說法妙、九觀心絶待眷屬妙、十觀心功德利益妙一。

(石井亮雄)

法華迹門大綱 ❶(日)Hok-ke-shaku-mon-tai-kō. ❷二帖 ❸存 ❹靜雲撰 ❺文明一八寫 ❾(寶壽院)

法華釋聞書 ❶(日)Hok-ke-shaku-kiki-gaki. ❷一帖 ❸存 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)記 ❺寶德元寫 ❾(寶壽院)

法華釋抄 ❶(日)Hok-ke-shaku-shō. ❷一帖 ❸存 ❾寫本(寶壽院)

法華釋題名問答 ❶(日)Hok-ke-shaku-dai-myō-mon-tō. ❷一卷 ❸寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)撰 ❺山家目德撰述篇目集卷上に云く「皆證ノ錄ニ無ニ問答二字ニ。天正ノ錄ニ注日。或云ニ玄義問答ニ云々。 ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目

法華釋八講 ❶(日)Hok-ke-shaku-hak-kō. 新刻法華釋八講 ❷一册 ❸存 ❾刊本(高大、寄・一・一五)

法華釋文 ❶(日)Hok-ke-shaku-mon. 法華經釋文、妙法蓮華經釋文 ❷三卷 ❸存、大正五六・一四四 No. 2150、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❹仲算(永平五—貞元元 A. D. 955—976)述 ❺妙法蓮華經釋文の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗疏章錄第二

法華釋問題抄 ❶(日)Hok-ke-shaku-mon-dai-shō. ❷一帖 ❸存 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)口 ❺寶德二寫 ❾(寶壽院)

法華取要鈔 ❶(日)Hok-ke-shu-yō-shō. 以一察萬鈔 ❷二卷或一卷 ❸存、大正八四・二七八 No. 2365、日蓮聖人全集第二、日蓮聖人御遺文一〇三五 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282)述 ❺文永一一(A. D. 1274) 一說文永九(A. D. 1272) ❻正本には年號日時無し、因つて文永九年撰述說と文永十一年說とを生ず。從つて佐渡在島中撰述說と身延入山後との說を異にするのである。或はいふ、日蓮聖人の撰述には草案と成稿との別あるもの多々なれば、佐渡に於て草案に着手し、延山に成稿せるものかと、聖人の宗義宣揚の順序よりすれば、この說佳なるものゝ如し。

又對告についても富木氏に與へたるものとすると、一般門子へとするとあり。富木氏へとするは文永八年十一月二十三日富木氏へ與へたる御返事の布衍敷設と見做すものである。內容よりするに鎌倉富木氏への御書とするも、門弟信者一般への告示たるは明である。本草鈔と併せ看るべき要書である。

この書先づ、三國諸宗に涉つて教法の權實を論じ、次に教主の有緣無緣を論じて一切の佛菩薩は盡く法華經壽量品の教主釋尊の所從となし、釋尊を捨てゝ大日彌陀等を信ずるものは不孝の者なりと論じ、次に法華經本迹二門は始終皆滅後末法の衆生を正意とするを論じ、最後に末法に流布すべき妙法とは、即ち本門の本尊と本門の題目と本門の戒壇たる日蓮弘通の三大秘法なるを明し、この秘法流布するが故に三災七難等の天變地夭あり、これ末法濁世の兆にして同時に大法出現の前相なれば「一四天四海一同に妙法蓮華經の廣宣流布疑ひ無らん者乎」と結ばれてゐる。

法華取要鈔と名づけたるは「經廿三藏は廣を捨てて略を好む、千卷の大論を百卷と成せり。日蓮は廣略を捨てて刊要を好む。所謂上行菩薩所傳の妙法蓮華經の五字なり」といふによる。即ち法華經八卷の廣を捨て、一品二品等の略を去り、肝要の五字の妙法を末法の衆生に授與するの意である。

❼(參考) 錄內啓蒙二〇初、御書鈔九初、圓智註一〇、錄內拾遺三初、錄內扶老七、眞書綱要劃略二 ❾原本(下總中山法華寺學敎藏)

法華取要鈔見聞 ❶(日)Hok-ke-shu-yō-shō-ken-mon. ❷一卷 ❸存 ❹日辰述 ❾寫本(立大、D〇・二四七)

法華授手科 ❶(日)Hok-ke-ju-shu-ka. (支)Fa-hua-shou-shou-k'o. 法華經授手科 ❷一卷 ❸存、卍續一・五一・三 ❹清智解排 ❺法華經授手科の下を見よ。 ❾寫本(京大、藏・七ホ・一三)

法華壽量品科文 ❶(日)Hok-ke-ju-yō-hon-kwa-mon. ❷一卷 ❹寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目、山家目德撰述篇目集卷上

法華秀句 ❶(日)Hok-ke-shū-ku. 日朝錄、豊本錄には共に法華秀句三卷と記し、修禪錄には法華補照三卷又名秀句とあり、可透錄、龍寶錄には法華補照三卷と云へり。然るに本書序文には「且著法華秀句三卷」と記し、又天師滅後三年目に撰したる仁忠の叡山大師傳には法華補照三卷と記せり。恐らくは最初より兩名存し、內題、外題により兩名を別に記せしものに非ざる歟。法華廣秀句、法華經秀句 ❷五卷、現行本は上卷本末兩卷、中卷本末兩卷、下卷の五卷に分册さる。然るに現行中卷について疑問あり恐らくは、大師撰述の當初にありては現行上卷本末が、上卷中卷に分れ下卷を加へたる上中下三卷なりしか、両して現行中卷は後人の加入なるべし。日蓮上人法華十勝事を見るに「此秀句弘仁十二年太歲辛丑造、之中卷可見」と記せり、然るに大師が秀句の著作年代を弘仁十二年と明記せるは現行上ノ末の本文にして、日蓮上人所見の本は上卷本末が、上中二卷に分れ居りしこと明らかなり。因つて現行中卷は權實問題に關する大師の別部の撰述を快擇佛性護明喉の題名の下に後人が中卷として挿入したるものなるべし、一乘要決に中卷中の引文等無きを見れば、惠心も、現行中卷は知らざりしものの如し。 ❸存、傳敎大師全集第二(舊)第三(新)。日本大藏經第三九天台宗顯敎章疏第一 ❹寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ❺弘仁一二(A. D. 821) ❻大師の德一に對する權實論諍の撰述の一にして大師の德一に對する最後の大作なり序に云く、有ニ一謀家ニ云、天台所立四軍義者、命ニ華嚴宗奪ニ取其義ニ、又其所立成佛義者、命ニ三論宗奪ニ取其義ニ、然則天台法華宗以ニ何等義ニ一爲ニ自宗義ニ一、答無ニ自宗義ニ一不レ許ニ別宗ニ者、秋夜深ニ時人ニ度ニ其爲ニ謀、誣調亦甚、是故著ニ法華秀句三卷ニ、即ち法華秀句一部は法華十勝を擧げ唯識、三論、華嚴等に對し天台法華の秀勝を擧げ其の信條を論證して宋徒の指針を暗示せられたる大師晩年の代表的の著作なり。其の內容の法華十勝とは、佛說已顯眞實勝一、佛說經名示義勝二、無問自說果分勝三、五佛道同師一勝四、佛說諸經校量勝五、佛說十喩校量勝六、即身六根互用勝七、即身成佛化導勝八、多寶分身付囑勝九、菩薩者薩勸發勝十にして第一佛說已顯眞實勝は上の本末に亘る長論文にして佛說經名示義勝第二以下の九勝は下卷に於て論述され、大師の天台法華の信條とも云ふべし。中卷本末は上記の十勝以外の快擇佛性護明喉と題する論文にして天竺佛性諍、大唐佛性諍、日本佛性諍の三章に分れ、天竺大唐の論諍は之を論述せるも日本佛性諍は之を略せり。上卷本末に亘る佛說已顯眞實勝は、德一法師が深密瑜伽に立脚して五性各別三乘眞實を唱へて、天台法華が一切皆成、三乘方便說を主張するに對し、其著中邊義鏡に於いて十數二理、四數二理の難、及大師が慈恩大師の六證一量に加へたる非難に對する法相宗の敎釋に對し破釋したるものにして大略三段に分る。即ち法華に定性無性の說ありといふに對し一切皆成を主張し、次に五性各別の論を破りて法華一乘を鮮明したるものなり。因にこの上卷の十數二理、四數二理、六證一量は守護章下下彈諍法者諍法華詞章第十二と大同小異なるが、章は十數を七數とし、方便化城二品及資糧論の引用及六證一量を缺けり。下卷の第二勝以下の九勝は大師の法華に對する信條とも考へられ、其の顯正的の態度と內容は大師敎學の研究に重要なる地位を占むるものと云ふべし。

❼(注釋) 法華秀句十紙寫本、法華秀句和讚々五紙寫本 (參考) 東域傳燈目錄卷上 ❾水應二刊(谷大、餘大・三八三二)(立大、A一二・三一〇—三一三三)(正大、一三六・五六)(叡山、淨土)(龍大、二六五二・一九四—一九五、研佛)明治三二刊(正大、一三六・五五)明治三三刊(谷大、餘大・三九五)刊本(智、ま・一・中・二二四)(谷大、餘丙・二二)(鹽入亮忠)

法華秀句科解 ❶(日)Hok-ke-shū-ka-kai. ❷一册 ❸存 ❹古川英俊 ❺昭和三刊 ❾(谷大)

法華秀句條箇 ❶(日)Hok-ke-shū-ka-jō-ka. ❷一卷 ❸存 ❾刊本(正大、一三六・五八)(叡山、慈眼)

法華秀句條目 ❶(日)Hok-ke-shū-ka-jō-moku. ❷一册 ❸存 ❾刊本(高大、寄・一・一五)

法華宗諫狀 ❶(日)Hok-ke-shū-kan-jō. ❷一卷 ❸存、萬代龜鏡錄第一 ❾寫本(谷大、餘大・五八四)

法華宗弘通鈔 ❶(日)Hok-ke-shū-gu-tū-shō. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書第一八上聖部 ❹日像(文永六—康永元 A. D. 1269—1342)

❺王法の盛衰は佛法の正邪に依り、佛法の正邪は明王の私明を待つの意を明にし、宗祖の立正安國の宏猷に則り、四海の諸法を停止せよと叫べるものである。(望月歎厚)

法華宗綱要 ❶(日)Hok-ke-shū-kō-yō. 顯本法華宗綱要 ❷一卷 ❸存 ❹小林日至、本多日生共著 ❺明治二九刊 ❾(帝國、一〇九・三五)

法華宗綱要 ❶(日)Hok-ke-shū-kō-yō. ❷一卷 ❸存 ❹三澤禮林編纂 ❺明治三四刊 ❾(立大、A〇四・二三)(帝國、一八七・一九三)

法華宗綱要 ❶(日)Hok-ke-shū-kō-yō. ❷一册 ❸存 ❺昭和七刊 ❾法華宗學林

法華宗旨弘通抄私記 ❶(日)Hok-ke-shū-shi-gu-tū-shō-shi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹日修 ❾寫本(立大、D〇・三〇七)

法華宗旨問答抄 ❶(日)Hok-ke-shū-shi-mon-dō-shō. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書第一八上聖部 ❹日像(文永六—康永元 A. D. 1269—1342)

❺宗祖日蓮の立正安國の正法を高揚し、諸宗諸門の諸法を糺明したるものにして問答體に記述されてゐる。(望月歎厚)

法華宗初心得意章 ❶(日)Hok-ke-shū-shō-shin-kokoro-e-shō. ❷一卷 ❸存 ❾刊本(正大、一八三・四)

法華宗書目 ❶(日)Hok-ke-shū-shō-mokū. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(帝國、一八三・三四九)

法華宗諸門流禁斷誇施條々 ❶(日)Hok-ke-shū-shō-Mon-ryū-kin-dan-kō-se-jō-jō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(正大、一八四・六四)

法華宗奏狀 ❶(日)Hok-ke-shū-sō-jō. ❷一卷 ❸存、萬代龜鏡錄第一 ❹日奥(永祿七—寫永七 A. D. 1564—1626) ❺文祿五(A. D. 1596)九月十五日

❻前田慧雲院を介し、三傳奏を經て、後陽成天皇に奏聞したるものである。

文祿四年九月二十五日秀吉大佛妙法院に於て千僧供養の舉あり。日奥不受不施の宗法を固守して讓らず、遂に京地を追出せられ丹波小泉に隱る。翌年七月大地震昇天變地夭あり、乃ちこの事井に安國論由來記一篇を草して禁中に上奏したのである。其後三ヶ年地震止まず、再び奏上を遂げ、第

四ケ年に至つて天子病惱あり、乃ち延命表一篇を草して獻ず。本書は三鶴奉獻の第一書である。上人は後塞に對馬に流さる。この事は師の「禁中奉開由來」に記されてゐる。

この書の趣旨は、佛の權實、法の邪正を論じ、本門の釋尊は吾等の本佛、法華經は最勝の經なりと定め、これに背くものは國に諸難興り、民は地獄に墮すと說き、法華經の行者は不受不施の制法を守り折伏の大義を行ふべきを論じ、宗旨の三大疑法を略叙し、最後に信宗國門と法の邪正を對決せしめられんことを請ふる書である。安國論由來記、禁中奉開由來、延命表參照。

（望月歎厚）

法華宗體 ❶(日)Hok-ke-shu-tai. ❷一卷 ❸寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—812)撰 ❹山家諸德撰述篇目集卷上に云く「天正ノ錄ニ宗體ヲ作ニ家評」法華四五六也」云々。

法華宗傳記 ❶(日)Hok-ke-shu-den-ki. ❷一卷 ❸存、傳教大師全集第三(叢)、第五(新) ❹寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—812) ❺白鑞赤銅二面の鏡の由來を說き鏡像圓鑑の妙理を說ぜるものであるが、之れ蓋し中古口傳法門流行時代の所產にして名を寂澄に假れるものであらう。二帖抄には之れを盛に引用してゐる。

❼(參考) 本朝台祖撰述諸部書目、山家諸德撰述篇目集卷上 （石井亮應）

法華宗傳記 ❶(日)Hok-ke-shu-den-ki. ❷一卷 ❸存、傳教大師全集第三(叢)、第五(新) ❹寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—812) ❺白鑞赤銅二面の鏡の由來を說き鏡像圓鑑の妙理を說ぜるものであるが、之れ蓋し中古口傳法門流行時代の所產にして名を寂澄に假れるものであらう。二帖抄には之れを盛に引用してゐる。

❼(參考) 本朝台祖撰述諸部書目、山家諸德撰述篇目集卷上 （石井亮應）

法華宗本門弘經抄 ❶(日)Hok-ke-shu-hon-mon-kyō-shō. 本門弘經抄 ❷百十三帖 ❸存、日隆上人全集第一 ❹日隆(至德元—寛正五 A.D. 1384—1464)述 ❺法華經の講義である。百十三帖の內初の八帖は大意分、第九より品々の講義である。

- 第一本門經王
- 第二本門流通如說修行
- 第三本門流通大意
  - 釋名入文判釋
  - 一本門大意(四義三重の略大意)
    - 一迹門大意釋名入文判釋
    - 二本門流通大意釋名入文判釋
  - 二本門釋名(第二帖)
    - 一通號
      - 一迹門妙法蓮華經
      - 二本門妙法蓮華經
    - 二別號(第八帖)
      - 一釋妙一字
      - 二釋法一字
      - 三釋蓮華二字
      - 四釋經一字
      - 五親心
  - 三入文判釋(第九帖)

❹疊題(天曆九—長曆元 A.D. 957—1037) ❺本朝台祖撰述諸部書目に云く「別本無之」云々。

法華宗內證佛法血脈 ❶(日)Hok-ke-shū-nai-shō-butsu-pō-ketsu-myaku. 法華血脈書、內證相承御書 ❷二卷 ❸存、日蓮聖人全集第二、高祖遺文錄第十四、鎌刷遺文九二八 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A.D. 1222—1282) ❺文永一〇(A.D. 1273)二月 ❻日蓮の內證は、釋尊より直授相承せる血脈なるを說き、外用の相承は、釋尊—天台—傳教—日蓮と次第し、內證の相承は、釋尊—上行—日蓮と次第す。而して「今當末之相承大旨雖ヲ可附ニ順天台相承ニ、以ニ內證眞實ニ釋尊上行菩薩奉ヲ爲ニ高祖ニ耳」と結ぶ。この書日蓮聖人佐渡に在つて將に宗旨の大事たる、觀心本尊鈔を撰述せんとするに先だちて宗旨の血脈を明せる要書である。本文に、

妙法蓮華經宗
久遠實成大覺世尊常寂光土靈山會上多寶塔中三身即一釋迦如來。
本眷屬上行等地涌菩薩。
大師天竺頒利耶蘇摩。
羅什三藏。
末法法華一乘行者法華宗沙門日蓮。
血脈相承。

の列次により、其間問答體を以て解明してゐる。

❼(參考) 錄外考文六四二、錄外微考下一九 （望月歎厚）

法華宗本門弘經抄 ❶(日)Hok-ke-shu-hon-mon-kyō-shō. 本門弘經抄 ❷百十三帖 ❸存、日隆上人全集第一 ❹日隆(至德元—寛正五 A.D. 1384—1464)述 ❺法華經の講義である。百十三帖の內初の八帖は大意分、第九より品々の講義である。

- 第一本門經王
- 第二本門流通如說修行
- 第三本門流通大意
  - 釋名入文判釋
  - 一本門大意(四義三重の略大意)
    - 一迹門大意釋名入文判釋
    - 二本門流通大意釋名入文判釋
  - 二本門釋名(第二帖)
    - 一通號
      - 一迹門妙法蓮華經
      - 二本門妙法蓮華經
    - 二別號(第八帖)
      - 一釋妙一字
      - 二釋法一字
      - 三釋蓮華二字
      - 四釋經一字
      - 五親心
  - 三入文判釋(第九帖)

入文に來意、釋名、入文判釋の三段に分ちて廣く解釋せられてゐる。

❹自筆本(尼ケ崎本興寺)寫眞版(立大、D〇・一五〇) ❺御聖敎刊行會 (望月歎厚)

法華宗門著述目錄 ❶(日)Hok-ke-shū-mon-chō-jutsu-moku-roku. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第一佛敎書籍目錄第一 ❹三浦屋(江山堂)平八 ❺弘化四(A.D. 1847)仲秋

❻日蓮法華宗門の祖師日蓮已下二百八人の著述を載錄せるもの、名の下に略傳を記せるものもある。卷末に「從他宗破當家書目」を附す。二十二人の論藏を載す。當代に於ける法華宗著述目錄としては稍具はれるものである。 （望月歎厚）

法華宗要 ❶(日)Hok-ke-shū-yō. (支)Fa-hua-tsung-yao. 法華經宗要 ❷一卷 ❸存、大正三四・八七〇 No. 1795 ❹新經元曉(眞平王三九 A.D. 617—)述 ❺本書は元曉が初述大意・永捕經宗、三明說用、四釋題名、五顯敎攝、六消文義の六門分別を以て法華經を釋したものである。第一に大意を述べて「妙法蓮華經者、斯乃十方三世諸佛出世之大意、九道四生滅入一道之弘門也」といひ、第二經の宗旨を揮ずる下にては「此經正以廣大甚深一乘實相爲所說宗」といひ、第三能說の用を明す下には用を同と示との二に分ち「開者開於三乘方便之門、示者示於一乘眞實之相」といひ、第四題名を釋する下には妙法の妙に巧妙・勝妙・微妙・絕妙の四義あり「巧妙・勝妙之法當能說用立名、微妙・絕妙之義、從所說宗作目」といひ、蓮華の喩に通別を分ちて釋し、第五敎攝を明す門にては「是法華經何敎所攝、爲是了義爲不了義」とて了義・不了義の二說を擧げ、檢いて問答を設けて云く「問、二師所通一乘相違、何者爲實何者爲勝。答、若是經論有何不實、所以然者、爲護一向趣寂意者、則如初師所通爲實、爲護不定種性人意、則如後師所說爲實、若當物機各得和通故、若就道理判其勝負者、彼師義狹而且短、彼說佛□不過一切故、又說二□寃除滅故、第二師義寬而復長、返前短狹其義可知、斯則以短狹義含寬長文、文傷□□會、用寬長義容短狹文、文傷則無傷義、由是道理後說爲勝、是故當知此法花經爲了義之敎也」と決し、第六消文義の一段は缺けてゐる。然して本書に援引の經論は寶雲經・薩遮尼揵子經・金光明經・大雲密藏經・華嚴經・涅槃經・本乘經・解深密經・勝鬘經・法花經・阿毘達磨・法華論・智度論・法花論・寶性論・瑜伽論・對法論等にして、元曉には尙法華要略、法華略述と題して流傳せるものありしが如く、或は要略は本書と相似たものであつたのか、散佚の今日對照の術なきも、東域傳燈目錄卷上には、本書の下に細註して「與要略可對檢之」としてゐる。

❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一、東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一、第二、奈良朝現在一切經疏目錄 （辻森要修）

法華宗要序 並句解 ❶(日)Hok-ke-shū-yō-jo-narabini-ku-ge. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一一四二・一〇〇)

法華宗略名目 ❶(日)Hok-ke-shū-ryaku-myō-moku. ❷一卷 ❸存 ❹日題述、昆尼薩合譯校訂 ❺延寶九刊(正大、一八四・七) 明治一七刊(谷大、餘大・二九六)(立大、A〇四・一二五)(帝國、一四一・二〇三)明治二四刊(帝國、一一一・一二六)

法華十王讃嘆繪鈔 ❶(日)Hok-ke-jū-ō-san-tan-e-shō. 和解法華十王讃嘆繪鈔 ❷二卷 ❸存 ❹畑野日敎編 ❺明治一六刊 ❻(龍大、二六九九・二七)(帝國、一八三・二二五)

法華十講引字 ❶(日) Hok-ke-jik-kō-in-ji. ❷一卷 ❸存 ❹亮潤記 ❺寫專)

法華十軸鈔 ❶(日) Hok-ke-jū-jiku-shō. 三百條私類聚抄 ❷十卷 ❸存 ❹性舜述 ❺寫本(觀山文庫)

法華十二論議 ❶(日) Hok-ke-jū-ni-ron-gi. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華十如實相法門 ❶(日)Hok-ke-jū-nyo-jis-sō-hō-mon. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❻寶龜院)

法華十不同 ❶(日) Hok-ke-jū-fu-dō. 法華經十不同、眞言法華十不同 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、弘法大師全集第一一敎相部 ❹空海(寶龜五—承和二 A.D. 774—835)述 ❺法華經十不同の下を見よ。 ❻刊本(谷大、餘大・一〇七四)

法華十不同法華密號理觀啓白文 ❶(日) Hok-ke-jū-fu-dō-hok-ke-mitsu-gō-ri-kwan-kei-byaku-mon. ❷一卷 ❸存 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835) ❺延寶二刊 ❻(正大、一四三一・三七一)

法華十不同問答慧給記 ❶(日) Hok-kyō-jū-fu-dō-mon-dō-e-kyū-ki. 法華經十不同問答慧給記 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二 ❹妙瑞(元祿九—明和元 A.D. 1688—1764)述 ❺法華經十不同問答慧給記の下を見よ。 ❻延寶二刊(谷大、餘大・三三八五)寛延三刊(京大、藏・七ゅ・一四)(龍大、二六六二・三八)(京專)

法華十部御書 ❶(日) Hok-ke-jū-bu-go-sho. ❷一卷 ❸存 ❹昆尼薩合譯編輯 ❺明治一二刊 ❻(立大、A〇一・三六) ❼京都平樂寺書房

法華十妙不二門示珠指 ❶(日) Hok-kyō-myō-fu-ni-mon-ji-shu-shi. (支)Fa-hua-shih-miao-pu-erh-men-chu-chih. 示珠指 ❷二卷 ❸存、卍續二・五・一 ❹源清(—成平元 A. D. 998—)述 ❺宋・雍熙三(A. D. 986)

❻荊溪湛然は「法華玄義釋籤」に於て迹門十妙を釋し終り本門十妙の釋に移らんとする中間に於て十門不二の義を立てて、敎觀を雙飾せざるべからざる旨を述べてゐる。荊溪の門下の誰かと今の十門不二の一段を別行した。この別行本の名稱には異名が多い。何れが最も妥當であるべきかに就ては學者各々說を立つ。源清は「法華十妙不二門」なる題號を最も可なりとし、又舊本を參訂して二十餘字を改め、面目を一變せしめた。この校訂に對して後に四明知禮は「指要鈔」を撰して破斥を施した。その中で最も嚴しく破斥した所は題號の「法華十妙不二門」と「造詣體同」の文である。次に本書の說と四明の「指要鈔」の說とが互に正面衝突した問題は事理觀心問題卽ち眞妄觀境問題である。本書は十不二門の註釋書としては最古のものである。宗曇の「註法華本迹十不二門」は宋・成平元年(A. D. 998)の撰。知禮の「十不二門指要鈔」は宋・景德三年(A.D. 1006)の撰であるからである。「指要鈔」は源清、宗曇二師の註釋は一家の觀道を誤らしめたものであると認めて極力これを破し、天台正系を奉ずる者をして再び是の如き誤謬に陷ることなからしめんとして作つたものである。この故に本書を見る者は必ず「指要鈔」を對讀すべきである。本書の敎義上に於ける主要な特色は色心不二門の「想在ニ一念ニ別分ニ色心ニ」の一念を一念靈知性體常寂なるものなりと解し(下ノ九)、又は性は卽ち一念なり。心は性靈虛寂なり。性は卽ち法身、虛は卽ち般若、寂は卽ち解脫なりといひ(下ノ十三)、又は一念は眞知の妙體なりといひ(下ノ十四)、又は初心の人は須らく妄念並に眞我は心淸淨の知體なりと了すべしといふた(上十二)ことにある。これらが山外派の眞心觀と稱される根本義である。猶この外に不變隨緣の法界緣起說等がある。この不變隨緣說は圓理の上に限るか別理にあつてもいひ得るかの問題で、山家派は別理隨緣說を立てるが、山外派は別理隨緣を許さない。本書は趙宋天台の金光明廣略問題に就て山家と山外との二派に分れ互に論難往復を重ねつつあつた間に作られたものである。從つて本書と指要鈔とは趙宋天台特に悟恩、源清、洪敏、慶昭、智圓對知禮との論難を研究せんとするもの必讀すべきものである。以上を要約すれば本書は舊本を校訂して二十餘字を訂したこと。本書の題名を自說によつて定めたこと。眞心觀を說いて止觀採摭の說を立てたこと。及び法界緣起を述べて別理隨緣を認めなかつたこと等が四明知禮等から誹破された點で

ある。故に此等の諸説が本書の特色であると云へる。本書の上巻には先づ巻頭に「示珠指」なる題名を附した理由を述べ、次に「初釈ゞ題」といふ章を設けて「法華十妙不二門」なる七字の題目を釈す。この釈を二段に分つ。初には略釈。二には廣釈。廣釈の下で三項を立つ。一には不二の唯心實相を示し、二には蓮悟法界の縁起を示し、三には問答して疑ひを決す。二と三とに於て源清は暢達なる文章を以つて自己の學説を詳述してゐる。（上巻畢る）。下巻では先づ「法華十妙不二門」の本文の分科を記し、次に本文を細釈して下巻畢る。そして最後に跋語を附す。この跋語には著名を缺くが源清の自記たることは明らかである。翌下巻に於て氣付く用語が一二ある。それは宗旨・宗要・なる語を屢々用ゐてゐることと、「此觀は全く是れ法華の妙行なり」といふことと等である。これらの語は日本天台の惠心檀那二流の祖傳相承と何等かの關係があるが如くにも考へられる。源清の傳は未詳。僅かに智圓の閑居編や鞏氏稽古略四等によつて斷片的な記事が知られるに過ぎない。次に源清は宋・至道元年（A. D. 995）に謚封して本邦へ自著五部（法華示珠指二巻。龍女成佛義一巻。十六觀經記二巻。佛國疏論一巻。心印銘一章）を送り天台典籍の内で宋にないもの五部を求めた。この使が京都に到着したのは長徳三年（A. D. 997）であつた。故に三箇年を費して封書が京都に著したのである。然るに源清自著五部の内は下巻を破したと元亨釋書四の勧修傳にある。又源清に對して天台座主覺慶が返書を送つた（本朝文粹一二）。これは日本と宋との交通史上の記事として重要なものの一。それと共に日宋の天台學交渉史から觀察しても亦重大事だと思ふ。（天台霞標初編之四。佛全一二五ノ一〇〇參照）

法華十羅刹法 ❶(日)Hok-ke-jo-ra-setsu-hō. (支)Fa-hua-shi-luo-cha-fa. ❷一巻 ❸存、大正二一・三七七No. 1322、續藏二、卍續一・三・二 ❹法華經陀羅尼品第二十六に十羅刹女と鬼子母等が釋尊の所に至り、異口同音に、法華經を讀誦し受持する者を擁護して、其の衰患を除かんと欲す、若し又法師の短を伺求せんとする者有らば、便を得せしめないであらうと誓つた。その十羅刹女の形容と誓言とが此の法に於て示されてある。謂ゆる十羅刹女とは

1、藍婆（Lambā）の形は毒叉の如く、衣の色は青、右手に鴦掘を取つて、右の肩に當て、左手に念珠を持す。

2、毘藍婆（Vilambā）の形は龍王の如く、右の手に風雲を把り、左手に念珠を把る。衣の色は碧綠。

3、曲齒（Kūtadanti）の形は、天女仙の如く、衣の色は青。

4、華齒（Puṣpadanti）の形は尼の如く、衣の色は紫。右手に花盤を把る。

5、黑齒（Makuṣadanti）は女神の如く、右手に叉を取り、左手に軍持を取る。

6、多髮（Kālānti）の形は童子の如く、右手に鉤環を取る。

7、無厭足（Acalā）は頂經の形の如し。

8、持瓔珞（Mālādhārī）は吉祥天女の如くにして左右の手に瓔珞を持す。

9、崇帝（Kuntī）は女形にして、右手に袈を把り、左手に獨鈷を持す。

10、奪一切衆生精氣（Sarvasattvojahārī）の形は梵王・帝釋女の如くにして、鎧甲を帶し怒形にして左手に三鈷を持す。（神林隆淨）

❼享保年間刊

法華述贊 ❶(日)Hō-ke-jut-san. (支)Fa-hua-shu-tsan. 法華經述贊、法華讃述、妙法蓮華經述贊 ❷十巻 ❸唐慧淨（太建一〇—貞觀一九 A. D. 578—645）述 ❼(参考) 諸宗章疏錄第一

法華順音次第 ❶(日)Hok-ke-jun-on-shi-dai. ❷一巻 ❸存 ❼(参考) 天台宗全書刊行予定書目

法華初心回向儀註釋 ❶(日)Hok-ke-sho-shin-e-ko-mi-sho-shaku. ❷一巻 ❸存 ❹日經（寶政一二—安政六 A. D. 1800—1859）述 ❾刊本（立大、A〇八・一〇—一一）

法華初心成佛鈔 ❶(日)Hok-ke-sho-shin-jō-butsu-shō. 初心成佛鈔 ❷一巻 ❸存、日蓮聖人全集第三、高祖遺文錄二四五、縮刷遺文一六七一 ❹日蓮（貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282） ❺建治三（A. D. 1277）

❻法華經の題目を唱ふるによつて初心名字の凡夫成佛すべきを說けばこの名あり。文中十三問答あり、大綱を提示すれば左の如し。

一、法華宗は釋尊所立の宗旨。

二、法華經の末法日本に弘通せらるべき經釋の證文。

三、華嚴・眞言・禪宗と法華との對論。

四、釋迦の教々は各その時機を異にすれば各利益ありとの非難を會す。

五、法華經は二乘の爲めなりとの非難に答ふ。

六、法華經は後五百歲末法廣宣流布の法なるを明す。

七、法華經は無智得道の法。

八、無智の者は法華經所說の淨土に往生す。

九、阿彌陀佛の淨土との異を辨ず。

一〇、法華は難入の法にあらずして易入の法。

一一、經中の異文を會して諸法を誡む。

一二、法華の行者は必ず値難あり。

一三、法華經の名號受持の經證と道理とを說く。

❼(参考) 錄内啓蒙二九八七、御書鈔一八三三、和語式三四九、錄内拾遺五三四、錄内扶老一一二四、高祖年譜攷異中四 ❾天和三刊 ❾(立大、A〇四・三六四)

（望月歡厚）

法華初心要學論 ❶(日)Hok-ke-sho-shin-yō-gaku-ron. ❷二巻 ❸存 ❾

安永二刊 ❾(龍山、壽量)

法華初心略音義 ❶(日)Hok-ke-sho-shin-ryaku-on-gi. ❷一巻 ❸存 ❹日答（寶寅六—寶延三 A. D. 1678—1750）述 ❾元文四刊 ❾(立大、A〇三・一三、一一五〇・正大、一八四・八〇・哲、あ・七・有・一五)

法華疏 ❶(日)Hō-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經疏、法華經略疏、法華略疏、妙法蓮華經疏 ❷二巻 ❸存、卍續二乙・二三・四 ❹宋竺道生（—元嘉一一 A. D. 434）述 ❻法華經疏の下を見よ。❼(参考) 諸宗章疏錄第一

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經疏、法華經略疏、法華略疏、妙法蓮華經疏 ❷二巻 ❸存、卍續二乙・二三・四 ❹宋竺道生（—元嘉一一 A. D. 434）述 ❻法華經疏の下を見よ。❼(参考) 諸宗章疏錄第一

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經義疏、法華經義疏、法華經疏、妙法蓮華經疏 ❷十二巻 ❸存、大正三四・五五一 No. 1721、卍續一・四二・四—五 ❹隋吉藏（天治三—武德六 A. D. 549—623）述 ❻法華義疏の下を見よ。❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄2100、2102

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經疏 ❷八巻 ❹新羅慈恵（—開耀元 A. D. 681—）述 ❻法華經疏の下を見よ。❼(参考) 諸宗章疏錄第一

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經疏 ❷七巻 ❹隋慧遠（普通四—開皇一二 A. D. 523—592）述 ❼(参考) 諸宗章疏錄第二

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經疏、法華經義疏、法華經疏、妙法蓮華經疏 ❷十二巻 ❸存、大正三四・五五一 No. 1721、卍續一・四二・四—五 ❹隋吉藏（天治三—武德六 A. D. 549—623）述 ❻法華義疏の下を見よ。❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄2100、2102

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. (支)Fa-hua-shu. 法華經疏 ❷八巻 ❹新羅慈恵（—開耀元 A. D. 681—）述 ❻法華經疏の下を見よ。❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄2131

法華疏 ❶(日)Hok-ke-sho. 法華義疏、法華經義疏、法華經疏 ❷四巻 ❸存、大正五六・六四 No. 1724、日本大藏經第一、一法華部章疏第一、大日本佛教全書第一四、世界聖典全集第四、岩波文庫三二—三五 ❹聖德太子（敏達帝二—推古帝二九 A. D. 573—621） ❻法華義疏の下を見よ。❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄5278

法華疏慧光記 ❶(日)Hō-ke-sho-e-kō-ki. ❸六十巻之内十巻現存、大日本佛教全書第一四 ❹凝然（仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321）述 ❻正和元（A. D. 1312）

❻本書は國家三經の一なる法華經の註疏たる聖德太子法華經義疏四巻を鎌倉時代法華信仰の流行を見る時東大寺凝然國師が更に組述せるものにして實に六十巻あり、國師の該博なる學識を以て華嚴一乘に立脚して說く批判せるは、實に鎌倉時代に於ける南都佛教の一面を知る最も好資料なり、六十巻の中五十巻は散佚して十巻のみ現存す。内容は舊譯二十七品法華の註疏にして、〔自第一巻至第二十五巻〕欠本。〔第二十六巻〕第二方便品最後の偈頌より以下。〔自第二十七巻至第二十九巻〕欠本。〔第三十巻〕第三譬喩品第四長行段より以下。〔自第三十一巻至第三十三巻〕欠本。〔第三十四巻〕第三譬喩品偈是宗大文より以下。〔自第三十五巻至第四十一巻〕欠本。〔第四十二巻〕第四信解品其家大富文より以下。〔自第四十三巻至第四十四巻〕欠本。〔第四十五巻〕第六授記品 瓔珞譬種智文より以下。〔自第四十六巻至第五十巻〕欠本。〔第五十一巻〕 第八五百弟子授記品。〔第五十二巻〕第八五百弟子授記品賦第二譬說四有問合文より以下。第九學無學人記品。第十法師品。〔自第五十三巻至第五十七巻〕欠本。〔第五十八巻〕 第十六分別功德品。第十七隨喜功德品。第十八法師功德品。〔第五十九巻〕第十九常不輕菩薩品。第二十如來神力品。第二十一囑累品。第二十二藥王本事品。第二十三妙音品。〔第六十巻〕 第二十四觀世音品。第二十五陀羅尼品。第二十六妙莊嚴王本事品。第二十七觀普賢勸發品にして極めて詳細なる註釋にて、當時法華信仰の再燃と國家思想の禪風に伴ひ、この註疏は特に南都佛教の特色を表せるものと云ふべし。

❺元和元刊 ❾(東大寺圖書館)

（橋本凝胤）

法華疏記 ❶(日)Hok-ke-sho-ki. (支)Fa-hua-su-chi. 法華文句記、法華記 ❷十巻或二十巻、三十巻 ❸存、大正三四・一五一 No. 1719、卍三二・一—四 ❹唐湛然（登雲二—建中三 A. D. 711—783）述 ❻法華文句記の下を見よ。❼(参考) 智證大師請來目錄、東域傳燈目錄卷上

法華疏記 ❶(日)Hok-ke-sho-ki. ❷十巻 ❹寂澄（神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822）述 ❼(参考) 本朝台風撰述書都書目、山家祖德撰述篇目集卷上

法華疏記義決 ❶(日)Hok-ke-sho-ki-gi-ketsu. 天台法華疏記義決、法華疏義決、法華文句義決 ❷十巻（巻一缺） ❸存、大日本佛教全書第一五 ❹道邃（—保元二 A. D. 1157）述 ❻天台法華疏記義決の下を見よ。❺萬治三刊 ❾(龍大、二六五一・四四)

法華疏義贊 ❶(日)Hok-ke-sho-gi-san. (支)Fa-hua-su-i-tsan. 法華經疏義贊、法華文句東春、法華經義贊、天台法華疏義讃、法華文句記 ❷六巻 ❸存、卍續一・四五・三 ❹唐代智度述 ❻法華經疏義贊の下を見よ。❾寛永三刊（叡山、天海）明暦四刊（谷大、餘大・六七六×叡山、別當×叡山、慈眼）刊本（龍大、三六五一・四六）

法華疏科文 ❶(日)Hok-ke-sho-kwa

-mon.(支)Fa-hua-su-k'o-sen. 妙法蓮華經疏科文 ❷一卷 ❸唐湛然(景雲二—建中三A.D.711—782)述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上

法華疏決擇記 ❶(日)Hok-ke-sho-ketsu-chaku-ki. (支)Fa-hua-su-chüeh-chai-chi. 法華經玄贊決擇記、法華經決擇記、法華決擇記 ❷八卷中第一第二卷現存、卍續一・五三・二 ❸唐湛俊述、法華集疏 ❹法華經玄贊決擇記の下を見よ。 ❾寫眞版(京大、藏・七ホ・一五)

法華疏私記 ❶(日)Hok-ke-sho-shi-ki. ❷十卷 ❸存、大日本佛教全書第二一—二二 ❹證眞(—建久頃 A.D. 1190—1192—)述

❺本書は天台智顗の法華文句十卷の注釋書である。文句の注釋書としては吳興道邃の輔正記十卷、東春智度の義潤七卷、石鼓智雲の私志記十四卷、同諸品要義一卷、及び從義の輔注等が既に多く世に行はれてゐたが、著者證眞はこれ等を重要視してゐない。其の開卷の冒頭に「妙樂以前を聖師と爲し爾後以來を號して諸師と曰ふ。諸師の解釋互に得失あり。得は圓圓にあり失は支離に在り」と云ひ又「故に輔記等の用捨は情に任ず。又彼の錄中以前三家の記は畢げず。此の外當朝の述作、他宗の玄疏等愚蒙の智周覽に憚む。今諸家の要義を拾ひて愚見の及ぶ所を集め以つて後學に附る」と云つてゐる。自負の大、識見の高當るべからざるものがある。大藏周覽十六遍と云はれる丈けあつて引證該博、其の原文に從つて文理の失當を檢するが如きは著者の得意とした所。天台三大部研究必携の書である。(法華玄義私記の項參照) 本書の著作年代については扶桑隱逸傳卷下には永萬年中と云つてゐるが尙考證の餘地がある。

❾慶長一六刊(叡山、天海)刊本(立大、A一一・一〇二—一〇四)(高大、寄・一・一五)(龍大、研佛)(正大、一一四二・一六五)
(石井亮藤)

法華疏序勸文 ❶(日) Hok-ke-sho-jo-kan-mon. ❷二帖 ❸存 ❹刊本(哲、ゐ・五・中・四)

法華疏抄 ❶(日)Hok-ke-sho-shō. (支) Fa-hua-su-ch'ao. ❷四卷 ❸精法師述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上

法華疏抄 ❶(日)Hok-ke-sho-shō. (支) Fa-hua-su-ch'ao. ❷五卷 ❸道靈述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上

法華疏討論篇 ❶(日)Hok-ke-sho-tō-ron-hen. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(叡山、壽量)

法華疏表白開發 ❶(日) Hok-ke-sho-hyō-byaku-kai-hotsu. ❷一卷 ❸寂澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822)撰 ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

法華諸聖略傳 ❶(日)Hok-ke-shō-yō-ryaku-den. ❷一冊 ❸存 ❹英雲、慧子述 ❺文化一〇刊 ❾(哲、ち・五・右・三三)(立大、A〇六・一一一)(帝國、一二八・二三五)

法華諸品大意 ❶(日) Hok-ke-sho-hon-tai-i. 全集編者云本書一名「法華大綱」又名「法華(經)二十八品大意」と又全集別卷に「法華心要」は「法華諸品大意」の異名也と誌すも何れも典據未詳 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛教全書第二四、傳教大師全集第二(叡)第三(新)、天台小部集釋 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822)述

❺法華二十八品の各品に亘り品々の大意を一言隻句の中に收め、僅か一紙の間に其の要旨を說き、法華經精髓。大師の親撰なるべし。構文極めて流麗精致。大師の親撰なるべし。

❾文政九刊(谷大、餘大・八五一、三八五八)寫本(叡山、華藏)
(鹽入亮忠)

法華諸品要義 ❶(日)Hok-ke-shō-hon-yō-gi. (支) Fa-hua-chu-p'in-yao-i. 妙經文句私志諸品要義、石鼓寺隨錄記、法華文句私志諸品要義、法華文句諸品要義 ❷一卷或二卷 ❸存、卍續一・四五・四 ❹唐石鼓智雲述 ❺妙經文句私志諸品要義の下を見よ。 ❼(参考) 諸宗章疏錄第二

法華序撮要 ❶(日)Hok-ke-jo-satsu-yō. ❷一冊 ❸存 ❺元祿二寫 ❾(高大、寄・一・一五)

法華助記輔略抄 ❶(日)Hok-ke-jo-ki-fu-ryaku-shō. (支)Fa-hua-chu-chi-fu-lüe-ch'ao. 法華經助記輔略抄 ❷二卷 ❼(参考) 入唐新求聖教目錄

法華抄 ❶(日)Hok-ke-shō. ❷八卷 ❸存 ❺天文八寫 ❾(叡山、天海)

法華消文記 ❶(日) Hok-ke-shō-mon-ki. ❷一卷 ❹室生修圓(—弘仁頃 A.D. 810—822—)撰 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華鈔 ❶(日)Hok-ke-shō. (支)Fa-hua-chiao. 法華經鈔、妙法蓮華經鈔 ❷六卷 ❹道邃(邃一作遂)述

❺諸宗章疏錄第二に云く「按。東域云。釋吉藏疏「與」上三十卷鈔、廣略別釋可尋之。邃一作「遂」云々。集は遂の誤か、法華經鈔の下參照。

法華鈔 ❶(日)Hok-ke-shō. ❷二帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

法華攝釋 ❶(日) Hok-ke-shō-shaku. (支) Fa-hua-she-shih. 法華經玄贊攝釋、法華玄贊攝釋、法華經攝釋、妙法蓮華經攝釋 ❷四卷 ❸存、卍續一・五三・一—二 ❹唐智周(儀鳳三—開元二一 A.D. 678—733)述 ❺法華經玄贊攝釋の下を見よ。 ❼(参考) 諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄(三, 三, 四) ❾寫本(叡山、淨土)

法華定珍鈔 ❶(日) Hok-ke-jō-chin-shō. 法華經科註鈔、科註法華經鈔、法華經鈔、法華科註私、妙法蓮華經鈔 ❷二十三卷 ❸存 ❹定珍(天文三—慶長九A.D. 1534—1604)述 ❼(参考) 山家祖德撰述篇目集卷下

法華淨心錄 ❶(日) Hok-ke-jō-shin-roku. ❷一冊 ❹明錄(—貞享頃? A.D. 1684—1687—) ❺嘉永七刊 ❾(谷大、餘大・八三七)(哲、え・三・右・一一)

法華淨土問答鈔 ❶(日)Hok-ke-jō-do-mon-dō-shō. ❷七卷 ❸存、日蓮聖人全集第七、高祖遺文錄一一七二、鎌倉御

倉文七三一) ❹日蓮(貞應元—弘安五A.D. 1222—1282) ❺文永九(A.D. 1272)一月十七日

❻淨土側の辨成の所立と日蓮聖人の論難とを彙記せるものにして三段の立義と論難とがある。末尾に日蓮花押辨成花押の連署あるを異とする。或はいふ佐渡塚原に於ける念佛者印性房との爭論を記述署名したるものならんと。尙眞蹟本高松法華寺に在りしといふも今無し。
(望月歡厚)

法華心髓 ❶(日) Hok-ke-shin-zui. ❷一卷 ❹室生修圓(—弘仁頃 A.D. 810—822—)述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上

法華心要 ❶(日)Hok-ke-shin-yō. ❷一卷 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822) ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

法華神道祕訣 ❶(日)Hok-ke-shin-tō-hi-ketsu. ❷四卷 ❸存 ❹日澄述 ❺永祿一三刊 ❾(京大、藏・七ホ・一二、日大未・八〇八)(正大、一八四・六)(立大、A〇四・二七四・三〇八)

法華信心道知音 ❶(日) Hok-ke-shin-jin-dō-chi-on. ❷一卷 ❸存 ❹日春述、台疏校 ❺明治一七刊 ❾(帝國、一四一・一九八)

法華眞言勝劣事 ❶(日) Hok-ke-shin-gon-shō-retsu-no-koto. ❷一卷 ❸存、日蓮聖人全集第四、高祖遺文錄八三六、鎌倉遺文四九四 ❹日蓮(貞應元—弘安五A.D. 1222—1282) ❺文永元(A.D. 1264)七月

❻弘法の十住心判に法華を第八に置いて天台眞言の理同事勝の所論とを畢げて、これに論難を加へ、二乘作佛・久遠實成・性惡等の義を以て、法華經獨勝を論證したる書である。

❼(参考) 錄內啓蒙三四二八、錄內扶老一四一、錄內拾遺七四三、御書鈔二四四、和語式五七
(望月歡厚)

法華新撰疏 ❶(日) Hok-ke-shin-sen-sho. (支) Fa-hua-hsin-chuan-su. ❷六卷或十二卷 ❹指吉藏(太清三—武德六 A.D. 549—623)述 ❼(参考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一

法華深香 ❶(日)Hok-ke-jin-kō. ❷一卷 ❸存 ❹覺玄記 ❾寫本(西敎寺)

法華圓曼荼羅 ❶(日)Hok-ke-en-man-da-ra. 法華圓曼荼羅種子 ❷一葉 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❾(高大、寄・一・五四)

法華隨感輯誌 ❶(日)Hok-ke-zui-kan-shū-shi. ❷一冊 ❸存 ❹河合日辰著 ❺昭和六刊 ❾(立大、B〇四・一七五)

法華隨力演說鈔 ❶(日)Hok-ke-zui-riki-en-setsu-shō. ❷二卷 ❸存 ❺慶安二刊 ❾(龍大、二六九二・三五)

法華千字文 ❶(日)Hok-ke-se-n-ji-mon. ❷一卷 ❸存 ❹慈賢撰 ❼(参考) 本朝台疏撰述密部書目 ❾寫本(無動寺)

法華旋三昧文殊師利大菩薩摩頂之法 ❶(日)Hok-ke-sen-sam-mai-mon-ju-shi-ri-dai-bo-satsu-ma-chō-no-hō. ❷一帖 ❸存 ❹淺鄽(天明三—安政元 A.D. 1783—1854) ❺弘化二寫 ❾(高大、寄・一・二五)

法華懺法 ❶(日)Hok-ke-sen-pō. (大正七七・二六五 No. 2417) ❷一卷 ❸存、大正七七・二六五 No. 2417 ❹日本の天台宗にて行ふ法華懺法の行儀を記したるもの。唱文を主とし、作法を細字にて註す。唱文は唐音に依るもので片假名を以て寫し出してある。唱文は開白、禮三寶、供養、釋迦佛乃至法華經中一切聖凡衆、普賢菩薩の奉請、六根懺悔、勸請、隨喜、回向、發願、稱三寶名、法華經安樂行品(讀誦行道)、稱三寶名、後唄、三歸依禮、七佛通戒偈、後夜等(六時)無常偈、神分、靈分、所願、九條錫杖、回向より成る。

本書はもと天台の法華三昧懺儀に則り、日本にてそれを刪加して編成したものである。大體を擧げれば懺儀の第三門修三業供養法、第四門請三寶方法、第七門懺悔乃至發願方法、第八門行道法、第九門誦經方法を用ひたものである。但し彼の第八門の終部に在る三歸依禮を、此は後唄の次に移した。七佛通戒偈已下は新加で、六時無常偈は善導の往生禮讚を取入れたものである。本書は平安朝已後、宮中御懺法講及び天台宗寺院で勤修する懺法の所憑として常用するものである。

❼(参考) 佛典疏鈔目錄卷下、諸宗章疏錄第一
(大野法道)

法華懺法 ❶(日) Hok-ke-sen-pō. ❷一卷 ❸存 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六 A.D. 794—864) ❼(参考) 大正新修大藏經撰定書目

法華懺法儀分陰錄 ❶(日)Hok-ke-sen-pō-gi-bun-in-roku. ❷一卷 ❸存 ❹良厳 ❼(参考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華懺法私 ❶(日)Hok-ke-sen-pō-shi. 法華懺法私記、法華懺法記 ❷六卷或三卷 ❸存 ❹定珍(天文三—慶長八A. D. 1534—1604)記 ❼(参考) 山家祖德撰述篇目集卷下 ❾正保四刊(立大、A一八・三)(龍大、二六五九・四七)(叡山文庫)(高大、寄・一・一五)文祿二寫(叡山、天海)

法華懺法抄 ❶(日)Hok-ke-sen-pō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹實海口 ❾寫本(日光藏)

法華懺法新本 ❶(日)Hok-ke-sen-pō-shin-pon. ❷一卷 ❸存 ❾刊本(立大、A〇八・八五—九四) ❾石川縣本是寺

法華懺法雜談鈔 ❶(日) Hok-ke-sen-pō-mō-dan-shō. ❷二卷 ❸存 ❹諦香述 ❾明和七(A. D. 1770) ❺安永三刊 ❾(谷大、餘大・二九九五)

法華懺法略抄 ❶(日) Hok-ke-sen-pō-ryaku-shō. ❷一卷 ❸存 ❹慈門述 ❺慈門が兜井宮及び園頭中將の爲めに提示せるもの。 ❼(参考) 天台宗全書刊行豫定書目

法華全擧禪師語要 ❶(日)Hok-ke-zen-kyo-zen-ji-gi-yō. (支)Fa-hua-ch'üan-chü-chi'an-shih-yü-yao. 舊州法華山擧和尙語要 ❷一卷 ❸存、卍續二・三三・三古尊宿語錄二六之內 ❹宋法華全擧 ❺具には舊州法華山擧和尙語要と云ひ、其

の上堂示衆、開炉示衆、小參示衆等の法語及び行錄、頌百山西來意、透法身二頌、綱宗、十二時歌等を編錄したるものである。（後藤大用）

法華草案抄 ❶(B) Hoku-kasō-shō. 法華經草案鈔 ❷十二卷 ❸存 ❹日創(應永二九—明應九 A. D. 1422—1500) ❺刊本(谷大、餘大・二五七九)(立大、A〇三・一—三)(智、の・五・中・一五)

法華總釋 ❶(B) Hoku-kasō-shaku. 法華經總釋 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一一法華部章疏第一 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891) ❺法華經總釋の下を見よ。❼(參考) 諸宗章疏錄第二、本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集卷上

法華即身成佛義 ❶(B) Hoku-kasoku-shin-jō-butsu-gi. ❷一卷 ❸存 ❹日導記 ❺安永九(A. D. 1780) ❻明治一五刊(帝國、一四〇・一九五)(立大、A〇四・三九四)

法華即身成佛要記 ❶(B) Hoku-kasoku-shin-jō-butsu-yō-ki. ❷一卷 ❸存、惠心僧都全集第三 ❹源信(天慶五—寛仁 A. D. 942—1017)述 ❻本書は、一條女院が源信に法華即身成佛の肝要を問はれたるに對し、書し參らせられ、而して世に流布せられたことを奥書に經緯が記して居る。即ち「此書者。一條女院。謂惠心僧都可令注上流法華即身成佛之所要之旨、依有宜。被書進于女院。本有之。世號之時。和假名。被遣于女院。本有之。世以遍令流布云々。經緯」。然して、一文の大樣は「即身成佛義私記」の綱格を簡略にした內容であり、傳敎大師が法華秀句の即身成佛化導勝以來、日本天台を通じて一貫せる思想を以てして居る。一文の主意は、萬法一如、迷悟一體、依正一如の高調である。法華經の十如中初めの、如是相、如是性、如是體の三を、三身如來、三諦、三德究竟の體なりとし、三諦は直に三身であれば、我身は本來三身即一の如來となる。此の信心にて觀念讀誦すれば、其の功德莫大なりとするも、所謂即身成佛に對する理論的觀察で、力强い主張とは見られないが、本疊立ちの說たるは注目すべきである。尙本書は源信の撰述とあるも、諸目錄等にその名を見ず、內容に於ても源信の撰とならずには考慮の餘地ありと思はれる。

❺寛永一六寫 ❼(眞如堂) (渡邊敬昌)

法華俗文談 ❶(B) Hoku-ke-zokubun-dan. ❷一卷 ❸存 ❺高永二刊 ❼(谷大、餘大・二四八二)

法華囑累前後問答 ❶(B) Hoku-kezokusu-rui-zen-go-mon-dō. 法華經囑累前後問答、法華囑累問答、❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二、法華部章疏第二、大日本佛敎全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891) ❻法華經囑累品評集 ❶(B) Hoku-kezokusu-rui-hon-jō-shū. ❷一卷 ❹家禪(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ❼(參考) 本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集卷上

法華囑累問答 ❶(B) Hoku-kezokusu-rui-mon-dō. 法華經囑累前後問答、❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二、法華部章疏第二、大日本佛敎全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891) ❻法華經囑累前後問答の下を見よ。❼(參考) 諸宗章疏錄第二、山家組德撰述篇目集卷上

法華陀羅尼 ❶(B) Hoku-kedarani. ❷一帖 ❸存 ❺正治二寫 ❼(寶著提院)

法華陀羅尼集 ❶(B) Hoku-kedarani-shū. 妙法蓮華經陀羅尼集 ❷一卷 ❹伸尊(永平五—貞元元 A. D. 955—976) ❼(參考) 東城傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華大意 ❶(B) Hoku-ke-tai-i. (支) Fa-hua-ta-i. 法華經大意、法華品釋、法華大綱 ❷一卷或二卷 ❸存、卍續一・四三・二 ❹唐湛然(景雲二—建中三 A. D. 711—782)述 ❻法華經大意の下を見よ。❼(參考) 諸宗章疏錄第一 ❾明曆四刊(京大、藏・七ゃ・一六)(立大、A一二・一二八)(正大、一一四二・一八二)(叡山、慈眼)(安永八刊(帝國、八二一・一七六)

法華大意 ❶(B) Hoku-ke-tai-i. (支) Fa-hua-ta-i. 法華經大意、妙法蓮華經大意 ❷一卷 ❹唐明曉(—大曆一二 A. D. 777—)述 ❼(參考) 東城傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一

法華大意 ❶(B) Hoku-ke-tai-i. ❷一卷 ❹觀瑜(嘉祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

法華大意 ❶(B) Hoku-ke-tai-i. ❷一卷 ❸存 ❹烏地大等(明治八—昭和二 A. D. 1875—1927)著 ❺大正七刊 ❼東京明治書院

法華大意鈔 ❶(B) Hoku-ke-tai-i-shō. 法華經大意鈔 ❷一卷 ❸存 ❹唐湛然(景雲二—建中三 A. D. 711—782)述、晴霞調點 ❺明治一二刊 ❼(立大、A一二・一二四)

法華大綱 ❶(B) Hoku-ke-tai-kō. 法華諸品大意、法華經二十八品大意、法華經二十八品大意 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛敎全書第二四、傳敎大師全集第二(新)、第三(新)、天台小部集釋 ❹家禪(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)述 ❻法華諸品大意並に法華經二十八品大意の下を見よ。❼(參考) 本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集卷上

法華大綱鈔 ❶(B) Hoku-ke-tai-kō-shō. ❷一卷 ❸存、日語譯日蓮聖人全集第七、縮刷御遺文續集五二 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282) ❻先づ歸依すべき佛は、釋迦牟尼如來、歸依すべき法は、法華經なるを明し、次にこの佛と法に歸依して、餘經餘佛を捨てゝ信を厚するもの必ず現世安穩後生善處の利益

を得べきを說く、即ち法華修行の大綱を示したる意にて法華大綱鈔の名があるのである。（望月歡厚）

法華大成 ❶(B) Hoke-ke-tai-sei. (支) Fa-hua-ta-ch'eng. 法華經大成、妙法蓮華經大成 ❷九卷 ❸存、卍續一・五一・一—三 ❹清大義述 ❻法華經大成の下を見よ。

法華大成科 ❶(B) Hoke-ke-tai-seikwa. (支) Fa-hua-ta-ch'eng-k'o. 法華經大成科、妙法蓮華經大成科 ❷三卷 ❸存、卍續一・五一・一 ❹清際慶撰錄 ❻法華經大成科の下を見よ。❼寫本(京大、藏・七ホ・一七)

法華對念佛論 ❶(B) Hoke-ke-taienbutsu-ron. ❷一卷 ❸存 ❹磯野本精著 ❺大正一〇刊 ❼東京自鳴社

法華對辨 ❶(B) Hoke-ke-tai-ben. ❷一卷 ❸存 ❼寫本(正大、一五七・三三)

法華台宗會義 ❶(B) Hoke-ke-tai-shū-e-gi. (支) Fa-hua-t'ai-tsung-hui-i. 法華經會義、法華經台宗會義、妙法蓮華經台宗會義 ❷八卷或十六卷 ❸存、卍續一・五〇・二—四 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)述 ❻法華經會義の下を見よ。❼元祿元刊 ❼(立大、A一二・一八四)

法華題目抄 ❶(B) Hoke-ke-dai-moku-shō ❷一卷 ❸存、縮編一〇、日蓮聖人全集第二、國文東方佛敎叢書第一輯宗義部、日蓮聖人御遺文五八三 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282)述 ❻文永五(A. D. 1268) ❻法華經の題目妙法蓮華經の五字の信唱を勸進すれば法華題目抄といふ。所說の概要は、一に信心爲本を說きて無解なるも亦得益あるべしと說き、二に妙法五字は一經の肝要、一切經の王なりと說きて唱題の證文を出し、三に妙の義を說きて蘇生の義とし變毒爲藥の不思議力あるを論じ、四に惡人の成佛も妙法の功德に限り、五に末代女人罪障深重の者の利益も妙法によつてのみ蘇生すべしと敎論せられたのである。但しこの書は聖人初期の撰にして、宗義に於て未だ究竟的ならず。從つて「當世の女人は即身成佛こそかたからめ、往生極樂は法華經を憑まば疑なし」といひて往生を認め、又「南無妙法蓮華經と一日に六萬十萬千萬等も唱て後に暇あらば、時々は彌陀等の諸佛の名號をもはずさみあるやうに申し給はんこそ、法華經を信ずる女人にてはあるべきに、等と餘行を綴評してゐる。授與の人については異說ありて明たらざれども、念佛行者の女人たるは明なれば、對告たる女人の信仰より誘引せんとせる聖人の意趣をも伺ふべきである。

❼(參考) 錄內啓蒙二三初、圓智註一二四御書鈔一二初、錄內拾遺三初、錄內扶老八初、略要、日朝鈔 ❾原本殘闕(身延山)寫本(立大、A〇一・一二四) (望月歡厚)

法華題目抄見聞 ❶(B) Hoke-ke-dai-moku-shō-ken-mon. ❷一卷 ❸存 ❹日辰 ❼寫本(立大、D〇・二四八)

法華題目鈔文段 ❶(B) Hoke-ke-dai-moku-shō-mon-dan. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書日蓮正宗部之內 ❹日寛(寛文五—享保一一 A. D. 1665—1726) ❻正德六(A. D. 1716) ❻日蓮正宗(舊稱大石寺派)中古の巨匠日寛の著述(寛記提要下)の內。日蓮の著述「法華題目鈔」を次の七項目に分ち當門流の立場に於て記した書。

法華題目鈔(文)、要中要也(文)、開方便門示眞實相(文)、發祕密藏(文)、迹門十四品一妙本門十四品一妙(文)、往生成佛等(文)、哞哞彌陀等諸佛名號等(文) (馬田行啓)

法華題目鈔和註 ❶(B) Hoke-ke-dai-moku-shō-wa-chū. ❷二卷 ❸存 ❹谷海淑著 ❺明治一九刊 ❼(立大、A〇二・九三—九四・一〇〇)

法華題目和談鈔 ❶(B) Hoke-ke-dai-moku-wa-dan-shō. ❷三卷 ❸存、國文東方佛敎叢書第一輯第二 ❹元政(元和九—寛文八 A. D. 1623—1668)述 ❻著者晉原元政は三十七才の萬治二年八月に老母を奉じて、山城の深草を出で、甲斐の身延、相模の鎌倉、武藏の池上、谷中に詣でゝ、十月に深草へ歸つた。母の願ひであつたこの旅も終り、最早憂世に殘る願もなくなり、只題目こそこの上のおつとめである故にその要門を說き聞せよとの老母の求めに依つて筆を染めたのが本書である。妙法蓮華經の五字のことはりを解釋し、成道の眞諦を說示したものである。

❺明治一八刊 ❼(龍大、二六九一・二五)

法華礼物語 ❶(B) Hoke-ke-tadasu-mono-gatari. ❷二卷 ❸存 ❹日心述 ❺寶永三刊 ❼(立大、A〇四・三〇四)

法華魂 ❶(B) Hoke-ke-damashii. ❷一卷 ❸存 ❹青木日風著 ❺大正六刊 ❼東京新日本社

法華註經 ❶(B) Hoke-ke-chū-kyō. ❷十八卷 ❹家禪(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ❼(參考) 東城傳燈目錄卷上

法華註釋 ❶(B) Hoke-ke-chū-shaku. ❷十四卷 ❹家禪(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ❼(參考) 本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集卷上

法華長講會式 ❶(B) Hoke-ke-chō-kō-e-shiki. 長講法華經會式、長講法華經發願文、長講法華經先分發願文卷上、長講法華經後分略願文卷下、長講法華經、長講願文 ❷二卷 ❸存、大正七四・二四七(No. 1922)、日本大藏經第四〇)天台宗組敎章疏第二、傳敎大師全集第四 ❹家禪(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822) ❻長講法華經會式の下を見よ。

法華丁巳記 ❶(B) Hoke-ke-tei-mi-ki. ❷二卷 ❸存 ❼寫本(京大、一・二三ホ・二三)

法華訂正記 ❶(B) Hoke-ke-tei-seiki. ❷一卷 ❸存 ❹日長 ❻御義論を破したもの。 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

法華天台文句輔正記 ❶(B) Hoke-ke-ten-dai-mon-gu-fu-shō-ki. (支) Fa-

hau-tien-tai-wa-chu-fa-chang-chi. 法華文句輔正記、法華經文句輔正記 ❷十卷 ❸存、卍續一・四五・一―二 ❹唐道邕 ❺萬治二刊 ❻(京大・藏・七ホ・一八×正大、一一四二・八七、二三三)

法華天台兩宗勝劣抄 ❶(日)Hok-ke-ten-dai-ryō-shō-shō-rei-sho. ❷四卷 ❸存 ❹日隆述、本門法華宗聖教刊行會編 ❺大正二刊 ❻長庫本門法華宗聖教刊行會

法華傳奇集 ❶(日)Hok-ke-den-ki-shū. ❷一冊 ❸存 ❹磯村野風著 ❺昭和七刊 ❻京都平樂寺書房

法華傳記 ❶(日)Hok-ke-den-ki. (支)Fa-hua-chuan-chi. 法華經傳記、法華經傳 ❷十卷 ❸存、大正五一・四八〇―五〇五、卍續二乙・七・四 ❹唐僧祥撰 ❻本書は部類分減第一、感驗時異第二、傳譯年代第三、支派別行第四、論釋不同第五、諸師序集第六、講解感應第七、諷誦勝利第八、轉讀減罪第九、書寫救苦第十、聽聞利益第十一、依正供養第十二の諸科に分ち、法華經の傳譯、その支派別行、論釋等を始め、法華講解の諸德の傳記等を記したものである。諸師序集第六の中に、僧肇記と稱する法華翻經記なるものあり、羅什譯法華經は元より二十八品ありしことを述べてある一文を以て、提婆品挿入說に反對する一典據としてゐるが、これは僞作だらうとの說がある。尙本書にあげてゐる諸德は左の通りである。

〔卷二 講解感應一〕 香僧叡、晉道生、宋曇諦、宋僧尋、齊僧印、梁法雲、梁僧詞、隋智顗、唐吉藏。
〔卷三 講解感應二〕 唐灌頂、慧如、僧陵、寇基、玄朗、慧明、智因、志寶、道場、志遠。
〔諷誦勝利一〕 陳慧思、陳大業、隋智越、隋智通、唐智晞、唐智瑾、唐法寀、陳慧誠、唐慧勇、隋慧稠、隋緣光、唐雋義、唐弘景。
〔卷四 諷誦勝利二〕 晉曇恆、晉法純、晉僧生、宋法宗、宋道固、宋慧慶、宋普明、宋法莊、宋慧果、齊慧遙、齊弘明、齊慧雅、齊超肆、齊法慧、齊僧俊、魏志淇、五侯寺僧、法常、齊并州舌、唐慧超、百濟慧驥、唐義慧、晉慧達、唐法誠、唐慧詮、宋曇無竭、晉法結、宋僧翼、唐智聰、隋智晨。
〔卷五 諷誦勝利三〕 唐道俊、唐史阿鬱、唐玄秀、唐道慧、魏道泰、陳普安、唐僧定、隋沙彌、僧猷、唐僧祈、岑文本、隋道瑰、唐章仲珪、唐慧猷、宋慧和、唐崔義起、蓋護、隋文策、宋沙彌、唐志通、寡婦、隋高守節、隋明曜、晉僧洪、宋王珠。
〔卷六 諷誦勝利四〕 百濟越道人、唐薛琿、唐通慧、隋沙彌、唐福緣、宋彭子喬、宋慧勝、尼法潔、妙蓮、唐慧生、曇義、唐皆慧、王義、尼妙法、唐廣林通、唐李山龍、唐法賢、僧智、晉慧達、唐楊氏、法道、隋北道僧、唐勝榮寺僧、晉竺長舒。
〔卷七 轉讀減罪〕 唐仁孫子、唐韋長姿、隋彥武、宋韓睦文、隋淨藏、梁蒙遜王、隋慧緣、梁僧融、天竺僧、于闐沙彌、天竺大乘天、隋敬敬、樣少女、大原小女、尼妙潔、隋高守節女。
〔書寫救苦一〕 秦姚興、天竺僧、外國女、宋曇諦、齊道僞、唐震光寺沙彌、梁神母、宋法澄、唐僧安、唐智琰、唐義徵、唐寡妻、唐李通、唐楚賓宗、唐陳氏、唐李健安。
〔卷八 書寫救苦二〕 隋玄緒、宋惠道、隋曇韻、唐令孤元軌、唐敏恭、李遺愛、唐姚待、唐李丘令、唐綠行尼、陳敏恭、滿州不信男、隋客僧、唐西河道場僧、北齊梁氏、唐修德、齊大風、并州信女、唐慧純。
〔卷九 聽聞利益〕 天竺光明女、天竺妙意天、天竺商主、天竺游陀羅子、唐鴿兒、箱良子、外國沙彌、廣州法警、外國毒蛇、令寧王、浮陽女、雍州沙彌、法朗鏡大、魏福福、隋獼猴、月支餓鬼、唐處女、西域無垢女、宋智通、沙彌雪藏、唐孝慈、唐嫩女。
〔卷十 依正供養〕 宋慧紹、宋慧益、齊法光、隋大志、唐曾通、唐比丘尼、唐并州男、宋僧瑋、十種供養記、供養益、妙華天女、寶環天、老女、優婆塞、隋僧連、法供養、無行比丘。

❹慶長五刊(谷大、餘大・二四二三)×正大、一一四二・二六〇)(京大・藏・二四ホ・五)(龍大、二九五三・七)×高大、寄・一・二一)古寫本(東大寺)(道鎧良秀)

法華傳記 ❶(日)Hok-ke-den-ki. ❹慶超(天曆九―長曆元A.D.955―1037)撰 ❼(參考) 山家諸德撰述篇目集卷下

法華統略 ❶(日)Hok-ke-tō-ryaku. (支)Fa-hua-tung-lüe. 法華經統略 ❷三卷或六卷 ❸存、卍續一・四三・一 ❹隋吉藏(太清三―武德六A.D.549―623)述 ❻法華經統略の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄(735) ❾寫本(京大、藏・七ホ・一九―二〇)(晉、の・五・左・一一)

法華讀音 ❶(日)Hok-ke-doku-on. 法華讀音鞍井流 ❷一卷 ❸存 ❹眼靈記 ❾寫本(無動寺)

法華讀音 ❶(日)Hok-ke-doku-on. 法華讀音惠心流 ❷一卷 ❸存 ❹眼靈記 ❾寫本(無動寺)

法華讀經私記 ❶(日)Hok-ke-dokyō-shi-ki. ❷一冊 ❸存 ❾寫本(高大、寄・一・一五)

法華並法華肝心 ❶(日)Hok-ke-narabini-hok-ke-kan-jin. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

法華二十八品肝要 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-kan-yō. 法華經二十八品肝要、法華一部要文、傳敎院身抄 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、傳敎大師全集第三(舊)、第三(新) ❹良澄(神護景雲元―弘仁一三A.D.767―822)述 ❻法華二十八品の各品より、肝要の文を八字或は十數字の間に於て摘出し、其の文に「何品何字決」の名を付して、二十八の要文を列ねたるものなり。其の眞眼凡庸の能ふところに非ず。即ち天文年中日廣の奧書に云く「此の肝文、若しは讀み、若しは解するの人は、則ち一代聖敎を讀んずるに異らず、乃至、傳敎大師在世の間、之を錦袋に入れて頭に懸け、左右を離れざる人と雖も之れを知る無し。大師入滅の後、義眞圓澄錦囊を捜きて之れを得たり。實に掌中の至寶と爲す云々」と。

法華二十八品七言詩集 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-shichi-gon-shi-shū. (支)Fa-hua-erh-shih-pa-pin-chi-yen-shih-chi. 法華經二十八品七言詩集 ❷一卷 ❼(參考) 日本國承和五年入唐求法目錄

法華二十八品序 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-jo. (支)Fa-hua-erh-shih-pu-p'in-hsü. ❷一卷 ❼(參考) 入唐新求聖教目錄

法華二十八品大意 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-tai-i. 法華諸品大意、法華大綱、法華經二十八品大意 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、大日本佛敎全書第二四、傳敎大師全集第二(舊)第三(新)、天台小部集釋 ❹良澄(神護景雲元―弘仁一三A.D.767―822)述 ❻法華諸品大意の下を見よ。 ❾寬文五刊(叡山、華藏)刊本(正大、一三六・四)

法華二十八品大意 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-tai-i. ❸存、的門玄人全集第五

法華二十八品大意 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-tai-i. 法華經二十八品大意 ❷一卷 ❸存 ❹豪仁和刊 ❾寫本(正敎藏)

法華二十八品發願 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-hosse-gwan. ❷一卷 ❹最澄(神護景雲元―弘仁一三A.D.767―822) ❻法華諸品大意の下を見よ。 ❾寬文五刊(叡山、華藏)刊本(正大、一三六・四)

法華二十八品大意 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-tai-i. ❸存、的門玄人全集第五

法華二十八品大意 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-tai-i. 法華經二十八品大意 ❷一卷 ❸存 ❹豪仁和刊 ❾寫本(正敎藏)

法華二十八品發願 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-hosse-gwan. ❷一卷 ❹最澄(神護景雲元―弘仁一三A.D.767―822) ❻法華諸品大意の下を見よ。 ❾寬文五刊(叡山、華藏)刊本(正大、一三六・四)

法華二十八品品品三門 並菩賢觀經科文 ❶(日)Hok-ke-ni-jū-hachi-hon-hon-pon-san-mon-narabini-fugen-kwan-gyō-kwa-mon. ❷一卷 ❹最澄(神護景雲元―弘仁一三A.D.767―822) ❻山家諸德撰述篇目集卷上に云く「智證ノ錄ニ注曰。三門トハ謂ニ大意釋名判釋ニ云々」。

法華二論奉得意抄 ❶(日)Hok-ke-ni-ron-gi-hokoro-e-shō. ❷一卷 ❸存 ❺大正四寫眞版 ❾(立大、D〇・一六一)

法華尼寺緣起 ❶(日)Hok-ke-ni-ji-en-gi. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第一一八寺誌叢書第二 ❻光明皇后の御願所にて法華寺或は法華滅罪寺と稱し、東大寺の內陣へ女人をいれ給はぬ事を不問に思召し天平勝寶五年造立し給ふところである。また本尊十一面觀音の因由、當寺の推移をも述べたる天正年間以後の作と覺ゆ。

法華入疏 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho. (支)Fa-hua-ju-su. 法華經入疏、妙法蓮華經入疏 ❷七卷 ❸存、卍續一・四七・一―三 ❹宋普威述 ❻法華經入疏の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二 ❺元祿一一刊 ❾(京大、一・二三ホ・一二×立大、A一一・九七×京專×帝國、八二一・二〇八、二六五)

法華入疏會讀抄 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho-e-dokū-shō. ❷一卷 ❸存 ❹白順開慶 ❾寫本(正大、一一四二・一一九)

法華入疏玄談 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho-gen-dan. ❷一冊 ❸存 ❾寫本(高大、寄・一・一五)

法華入疏講錄 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho-kō-roku. 法華經入疏講錄、妙法蓮華經入疏講錄 ❷十二卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元―元文四A.D.1652―1739)述 ❺享保六刊 ❾(京大、一・二三ホ・一三)(高大、寄・一・二三、寄・一・一五)(叡山、毘門)(晉、の・四・中・二)

法華入疏講錄決正 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho-kō-roku-ketsu-shō. 法華經入疏講錄決正 ❷六卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元―元文四A.D.1652―1739)述 ❾刊本(正大、一一四二・二二八、二五八)寫本(叡山、壽量)

法華入疏講錄續決正 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho-kō-roku-zoku-ketsu-shō. 法華經入疏講錄續決正 ❷三卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元―元文四A.D.1652―1739)述 ❾刊本(立大、A一二・四九六)(晉、の・五・左・一八)

法華入疏同聞記 ❶(日)Hok-ke-nyū-sho-dō-mon-ki. ❷三卷 ❸存 ❹曇道述、學賢記 ❾寫本(叡山、壽量)

法華入眞言門訣 ❶(日)Hok-ke-nyū-shin-gon-mon-ketsu. 法華經入眞言門訣 ❸存 ❹明庵榮西(永治元―建保三A.D.1141―1215)述 ❼(參考) 日本佛林撰述書目、佛籍目錄

法華女人成佛鈔 ❶(日)Hok-ke-nyo-nin-jō-butsu-shō. ❷一卷 ❸存 ❹日蓮(一元祿頃? A.D.1688―1703―)述 ❺元祿一六刊 ❾(谷大、餘大・二四九一)

法華念佛記 ❶(日)Hok-ke-nen-butsu-ki. ❷一卷 ❹天錄 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

法華念佛同時經辨 ❶(日)Hok-ke-nen-butsu-dō-ji-kyō-ben. ❷一卷 ❸存 日蓮雜錄之內 ❹法靈(元祿六―寶保元A.D.1693―1741)述 ❾寫本(龍大、一五〇二・二二三)×谷大、宗大・二四一)

法華念佛同時之事 ❶(日)Hok-ke-nen-butsu-dō-ji-no-koto. ❸存、雜部小部集第五

法華念佛同時辨 ❶(日)Hok-ke-nen-butsu-dō-ji-ben. ❷一卷 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第二

法華念佛同體異名事 ❶(日)Hok-ke-nen-butsu-dō-tai-i-myō-no-koto. 出世元意法華念佛同體異名事 ❷一卷 ❸存、假名聖敎(惠空筆寫)八十八部之內 ❹覺如(文永七―觀應二A.D.1270―1351) ❻出世元意法華念佛同體異名事と題し、內容は眞宗假名聖敎並に眞宗法要所敎の出世元意と全く同一である。假名聖敎本、眞宗法要本共に出世元意と題したる次に「法華念佛同體異名事」と書してゐる。出世元意の項をみよ。 ❼(參考) 淨土眞宗聖敎目錄 ❾寫本(谷大、宗丙・四八)刊本(谷大、宗大・三二七八)(柏原祖義)

法華念佛如敎抄 ❶(日)Hok-ke-nen-butsu-nyo-kyō-shō. ❷一卷 ❸存 ❺嘉永元刊 ❾(立大、A〇五・一五〇、三七六―三七七)

ほうこうのうた 宝公の唄 ❹(ヨ) Hō-kō-no-uta-ketsu. ❷ 歌 ❸ 公 ❹ 宝 (歌大・歌一・六五)

ほうこうのうた 宝公の唄 ❹(ヨ) Hō-kō-no-uta. ❷ 歌 ❸ 公 (歌大・歌一・六五)

ほうこうのうた 回船唄 ❹(ヨ) Hō-kō-no-uta. ❷ 歌 ❸ 公 ❹ 回 (歌大・歌一・二八)

ほうこうのうた 回船唄 ❹(ヨ) Hō-kō-no-uta. ❷ 歌 ❸ 公 ❹ 回 (歌大・四一六)

ほうこうのうた 「回船唄」

天海)

法華品々觀心聞書 ❶(日)Hoku-ke-hom-bon-kwan-shin-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹等海記 ❺明德二寫 ❻(日光藏)

法華品々觀心抄 ❶(日)Hoku-ke-hom-bon-kwan-shin-shô. 法華經品釋、御註法華經品釋 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第一二法華部章疏第二、列聖全集御撰集第六 ❹花園法皇(永仁四—自和四A. D. 1296—1345)御作 ❺法華經品釋の下を見よ。

法華品々觀心抄 ❶(日)Hoku-ke-hom-bon-kwan-shin-shô. ❷一卷 ❸存

❹慶珍談 ❺古寫本(西敎寺)

法華品々大綱集 ❶(日)Hoku-ke-hom-bon-tai-kô-shô. ❷一卷 ❸存 ❹亮尊作 ❺寫本(妙法院)

法華曼荼羅威儀形色法經 ❶(日)Hoku-ke-man-da-ra-i-gi-gyô-shiki-hô-gyô. (支) Fa-hua-man-tu-lo-wei-i-hsing-shê-fa-ching. 威儀形色經 ❷一卷 ❸存、大正一九・六〇二No. 1001、祕密儀軌第八 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺天寶五—大曆九(A. D. 746—774)

❻法華經見寶塔品第十一に、釋尊が法華經を說いて居られた時に、面前に七寶塔が現はれ、高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬で地から涌出して空中に住在し、釋尊が右指を以つて七寶の塔戸を開くや、多寶如來は寶塔の中に於て師子座に坐して、釋尊に對して、我は法華經を聽かんが爲に、我に來至したのであると言ひながら、半座を分けて釋尊に與へられ、釋尊は其の塔中に入つて、その半座に坐し、結跏趺坐せられたことが記してある。之を材料として密敎的に曼荼羅を地立したのが、此の經である。その組織は成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌に記してある所と大差はない。但しこの經に於ては、八大菩薩・四攝・八供養等の諸菩薩等に諸天・龍王・四大明王等の尊形が詳細に說明されて居るが、此の點は觀智儀軌と異る所である。

❼平安朝中期寫(寶壽院)享保一二寫(谷大、修大・三七六九)(神林隆淨)

法華曼荼羅諸品配釋 ❶(日)Hoku-ke-man-da-ra-sho-hon-hai-shaku. ❷一卷 ❸存、日本大藏經第四一天台宗密敎章疏第一、大日本佛敎全書第二七智證大師全集第三 ❹圓珍(弘仁五—寬平三A. D. 814—891)說 ❺寬平四・年七八寫(撰)

❻本書は法華眞言兩合思想の具體的表示として胎藏曼荼羅の中台八葉の九佛及び四瓶に法華經中の十三品を充當し解說せる法華曼荼羅である。蓋し法華經兩界和合義等と同系思想たるは勿論である。(淺邊最昌)

法華名相 ❶(日)Hoku-ke-mya-sô (支)Fa-hua-ming-hsiang. 法華經名相 ❺智證大師請來目錄に細註して云く「牛頭」云々。

法華銘 ❶(日)Hoku-ke-mei. ❷一卷 ❹眞澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❼(參考) 本朝合眞撰遺漏部書目、山家眞德撰遺漏目集卷上

法華物語 ❶(日)Hoku-ke-mono-gata-ri. ❷一卷 ❸存 ❹堀野直洋(明治四—昭和八A. D. 1871—1934)著 ❺明治四五刊(立大、B一一・五四)(谷大、修洋・三二〇)(龍大・二〇五七・三)大正六刊(正大、一一四二・一三九) ❻東京東亞堂

法華文記贊言 ❶(日)Hoku-ke-mon-ki-sen-gen. ❷一卷 ❸存 ❹實觀遙 ❺寫本(眞如藏)

法華文義集 ❶(日)Hoku-ke-mon-gi-shû. ❷八卷 ❸存 ❹眞祐撰 ❺慶安三刊 ❻(眞如藏)

法華文句 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu. (支) Fa-hua-wên-chü. 妙法蓮華經文句、法華經文句、文句 ❷十卷或二十卷 ❸存、大正三四・No. 1716、續開一、北1433鏡、明北1525笠原、清1491鑑肥、天1492俊父、至1687敎、明南1621更顯、No. 1736 ❹隋智顗(大同四—開皇一七A. D. 538—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)記 ❺妙法蓮華經文句の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄 2061

法華文句 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu. ❸三卷 ❹寂澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❼(參考) 山家眞德撰遺漏目集卷上

法華文句會鈔 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-kai-shô. ❸存 ❻寫本(龍大、二六五一・四七)

法華文句開講要義 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-kai-kô-yô-gi. ❷一卷 ❸存 ❹守脫大寶(文化元—明治一七A. D. 1804—1884)述 ❻寫本(叡山、水尾)

法華文句格言 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-kaku-gon. (支)Fa-hua-wên-chü-ko-yen. 法華經文句格言 ❷三卷 ❸存、卍續一・四六・四 ❹宋善月(紹興一九—淳祐元A. D. 1149—1241)述 ❺法華經文句格言の下を見よ。 ❻永曆二刊 ❼(龍大、二六五一・四八、研佛)

法華文句記 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki. (支)Fa-hua-wên-chü-chi. 法華經疏義綱、法華疏義綱、法華經義綱、天台法華疏義綱、法華文句東春、法華義綱 ❷六卷 ❸存、卍續一・四五・三 ❹唐定林述 ❺諸宗章疏錄第一に云く「按。赤云=義讚、赤云=東春、定林調=智度師」云々。法華經疏義綱の下を見よ。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華文句記 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki. (支)Fa-hua-wên-chü-chi. 法華經文句記、妙法蓮華經文句記、文句記、法華文句疏、妙法蓮華經文句疏記 ❷三十卷 ❸存、大正三四・一五一No. 1719、續開二—三、卍三二・一—四、明北1620普至更、清1402輕至功、天1432定至晉、至1658素、明南1529道綱、No. 1637 ❹唐湛然(景雲二—建中三A. D. 711—782)述

❺天台智顗の大作法華三大部の一なる法華文句の註釋である。文句には元來記者章安の略科があつたが、著者は更に自見に依つて適當の科段を分ち、次を追ふて此を釋してゐる。その態度は極めて親切に、天台の

釋意の稍々不明なるものは色く之を糾究して徹底せしめてゐる。隨つて眼意を發揮し明顯すると共に天台敎學の基礎を擴大强化せる點が少くない。例せば今圓音圓の同異(會本一ノ三)十如是義と天台敎學(九ノ二〇)法華經十種の奇異(十ノ四四)觀心の十德と十乘觀法(十四ノ十六)法華涅槃の同異(十七ノ八)諸品法華觀(十九ノ四四)授記を破する五意(十九ノ四四)一念の十戒(三ノ十二)圓の三學(二四ノ二八)安樂行と止觀(二四ノ二六)華嚴法華の十異(二六ノ二〇)法華論の十無上義(二六ノ四四)界內界外二種の三界(二六ノ四六)即の意義(二七ノ四)修性の三因佛性(二七ノ二六、二八ノ四三)著者の戒學(二七ノ三三)等列擧に遺ない。此等は總て眼道を發揮し、自家敎學を强化する所謂顯正方面の主張であるが一面また他家の所立を破する破邪的の主張が顯る多い。先づ華嚴に對しては、華嚴の敎主(二ノ八、三三ノ三六)華嚴家の階位(四ノ四四)法華涌塔說(六ノ三三)華嚴兼帶論(二四ノ三三)等に就て賢首清涼の所立を駁し。三論家に對しては、無量義の名義(六ノ二)說法入定瑞の有無(六ノ八)身乘の四句(八ノ二)方便品題(三種法輪判(八ノ二四)二乘授記の六意(二四ノ三一)什譯法華提婆品の有無(二五ノ八)等專ら嘉祥の疏を難じ。法相に對しては、誠後の色經(二ノ四三、二ノ二七)序品欽說大法の五句釋(七ノ四)事理隔礙(八ノ三)方便品懸(八ノ四八)攝大乘の四意趣(八ノ二〇)小大の著蓮(九ノ二、一〇ノ三四)增壽變易(二一ノ三六)定性二乘の成不(二一ノ三六、三ノ二)乃至安樂行と常不輕の十別(二六ノ四三)等慈恩の玄賛を斥破することを痛烈深細を極む。就中力を賴けたる破斥は鳴黑品の前後問題である。即ち什譯法華が鳴黑品を神力品の次に置きたるに對し、慈恩は玄賛に八相違を擧げ、玄奘の法孫安國寺利涉は更に二難を加へ、十不可として同品を經末に置くべきを主張した。此に對して著者は總別二敎を設け、その總敎に八不可を揭げて餘に置くべき道理を立て、別敎に於て先づ慈恩の八相違の難を側々に論破し、次に利涉に對しては先づ總敎を破し、次に二難を斥けて神力經末に置くの不可を主張し、經什に同ずると共に什譯に依れる天台の釋を補强せしめた。(二九ノ二一—三六) 其他壽量の品題に就ては、僧叡(三四ノ四三)道朗(同四三)慧觀(同)道生(同四三)等を難じ、提婆品文の歸屬に就ては利涉を斥くる等(三四ノ八)八方に論陣を張り舌鋒極めて銳利である。

以上顯正破邪の外、三十二相の釋(三四ノ三)龍女權實論(同三〇)佛法の正規(同三八)藥王品の即往阿彌陀の釋(三九ノ四四)等著者の學殖信仰等を探る資料豐富である。別項同著玄義釋籤、止觀輔行と共に根本天台の重要典籍である。

本著の作製は不明であるが、卷末の自跋に曾て五台山に遊んで含光と會談せる記事がある。宋傳二十七の含光傳には不空の寂我代宗の命を奉じて五台山に入り不空の爲に功德を修する時に著者湛然と會見したとしてあり、不空三藏は大曆九年に寂してゐるから、宋傳を信ずる限り本著は大曆九年か十年に完成したものと見てよからふ。著者門下の道邃行滿の記傳說話の中に荊溪に於て著者より文句の講を聞いたことが記され、亦本書が晉陵の妙樂寺で講ぜられた講本である所から後世之を妙樂と呼ぶと傳へらるゝ等から見て鄉里の荊溪で作製されたものであらふ。著者が三部の記を開元寺の大藏に寄する語によれば、原本は十卷であつた如である。趙宋時代遺式に依つて大藏經中に收錄さるゝ事となつたが、所釋の法華經と、天台の文句と、著者の記と三本別々に行はれて居つた。明の萬曆年中に至つて聖行が三部會合して檢勘の便を計つた。現行會本三十卷は其の輯刻である。

❼(注釋) 文句記箋難四 有厚、法華疏義禮六 智度、文句輔正記一〇 道邃、三大部補注中七 從義、法華疏私記一〇 證眞、法華疏記義決六 道邃、文句隱問記一〇 日遵、文句記講錄二五 靈空、講義一五 梅空 ❽刊本(龍大、研佛)(立大、A一一・七五—七七)

法華文句記會本 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki-e-hon. (支) Fa-hua-wên-chü-hui-pên. 法華經文句記會本、妙法蓮華經文句記會本 ❷三十卷 ❸存、卍三二・一—四 ❹唐湛然(景雲二—建中三A. D. 711—782)述、智圓分會 ❺刊本(京大、一・三三・ホ・四)(京專)(高大、寄・一・一五)(立大、A一一・八〇—八四)

法華文句記講義 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki-kô-gi. ❷十五卷 ❸存、法華經三大部講義之內 ❹慧澄(寶曆—文久二A. D. 1752—1862)述 ❺嘉永五刊 ❻(正大、一一四三・一五、一六一—一六二)(立大、A一一・一二五—一三〇)(高大、寄・一・一五)(叡山、水尾)

法華文句記講錄 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki-kô-roku. 法華經文句記講錄 ❷五十卷 ❸存 ❹靈空光謙(承應元—元文四A. D. 1652—1739)述 ❺享保元刊(立大、A一一・一一二、一一四)享保五刊(高大、寄・一・一五)(谷大、修大・七六六)(龍大、二六五一・五〇、研佛)(立大、A一一・一一三、一一一五—一一六)正大・一一四二・九三—九四)(叡山、華藏)享和元刊(谷大、修大・三六八)正大、一一四二・一六四)寫本(龍大、二六五一・五一)

法華文句記集註 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki-shû-chû. ❷三十卷 ❸存 ❹子義 ❺寫本(谷大、修大・五三〇)

法華文句記述解 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki-jutsu-gai. ❷一卷 ❸存 ❹乾龕日乘述、存道日勇校正 ❺寶曆九刊 ❻(龍大、二六五一・五二)(立大、A一一・一二〇—一二二)

法華文句記箋難 ❶(日)Hoku-ke-mon-gu-ki-sen-nan. (支)Fa-hua-wên-chü-chi-chien-nan. 法華經文句箋難 ❷四卷 ❸存、卍續一・四六・三 ❹宋有鼎(一—建中靖國元A. D. 1101)述 ❻法華經文句箋難の下を見よ。 ❼明曆三刊(京大、藏・七ホ・二一)(立大、A一一・八五—八六)(高大、寄・一・一五)(谷大、修大・七六一)(龍大、二六五一・五三)(正大、一一四二・一七二)(叡山、天海)刊本(京大、一・二三ホ・一七)

法華文句記草々記 ❶(日)Hoku-ke-

-mon-gu-shi-kon-mon. ❷二卷 ❸存 ❹惠海口 ❺古寫本(日光天海藏)

法華文句疏玄叙 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-sho-gen-jo. ❷一卷 ❸存 ❹章疏錄第一、御請來目錄

法華文句私志記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-shi-shi-ki. (支)Fa-hua-wên-chi-sê-chih-chi. 妙經文句私志記 ❷十五卷 ❸存、卍續一・四五・四—四六・二 ❹唐智雲述 ❺妙經文句私志記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一 ❽永應四刊 ❾(谷大、餘大・二四八〈龍大、二六五一・五七〉)

法華文句私志諸品要義 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-shi-shi-sho-hon-yô-gi. (支) Fa-hua-wên-chi-sê-chih-chu-p'in-yao-i. 妙經文句私志諸品要義、石鼓寺隨籤記、法華文句諸品要義、法華諸品要義、法華文句私志諸品要義 ❷二卷或一卷 ❸存 卍續一・四五・四 ❹唐智雲述 ❺妙經文句私志諸品要義の下を見よ。 ❾刊本(谷大、餘大・五四六〈龍大、二六五一・五八〉)

法華文句示童記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-ji-do-ki. ❷九卷 ❸存 ❹日耀述 ❾刊本(龍大、研佛〈立大、A一一・一二二〉)

法華文句疏 ❶(日)Hok-ke-mon-gu-sho. (支)Fa-hua-wên-chu-su. 法華文句記、妙法蓮華經文句記、法華經文句記、文句記 ❷十卷・三十卷或二十卷 ❸存、大正三四・一五一A. D. 1719. 鑑訓二—三、卍三二・一—四 ❹隋智顗(大同四—開皇一七A. D. 538—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)記、湛然(景雲二—建中三A. D. 711—782)述 ❺法華文句記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一、御請來目錄

法華文句疏私記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-sho-shi-ki. 法華疏私記、法華文句疏私記 ❷二卷 ❸存 ❹日蓮、日隆、日諦述 ❾刊本(京大、一・二三ホ・二〇〈立大、A一一・一〇九〈正大、一一四二・二〇七〉〉)

法華文句疏玄叙私記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-sho-gen-jo. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、餘大・三七六一)

法華文句疏私記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-sho-shi-ki. 法華疏私記、法華文句私記 ❷十卷 ❸存、卍續一・四五・四—四六・二 ❹日蓮述 ❺妙經文句私志記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一 ❽永應四刊 ❾(谷大、餘大・二四八〈龍大、二六五一・五七〉)

法華文句私志諸品要義 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-shi-shi-sho-hon-yô-gi. (支) Fa-hua-wên-chi-sê-chih-chu-p'in-yao-i. 妙經文句私志諸品要義、石鼓寺隨籤記、法華文句諸品要義、法華諸品要義、法華文句私志諸品要義 ❷二卷或一卷 ❸存 卍續一・四五・四 ❹唐智雲述 ❺妙經文句私志諸品要義の下を見よ。 ❾刊本(谷大、餘大・五四六〈龍大、二六五一・五八〉)

法華文句見聞 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-kem-mon. ❷二卷 ❸存 ❹善海 ❼〔參考〕天台宗全書刊行豫定書目

法華文句講述 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-ko-jutsu. ❷三卷 ❸存、法華經三大部講述之內 ❹守脫大寶(文化元—明治一七A. D. 1804—1884)述 ❾寫本(立大、A一一・一三三〈叡山、華藏〉)

法華文句講錄 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-ko-roku. 法華經文句講錄 ❷二十五卷 ❸存、法華三大部講錄之內 ❹靈空光謙(永應元—元文四A. D. 1653—1739)

法華文句齊探私決 ❶(日) Hok-ke-mon-sai-tan-shi-ketsu. ❷一卷 ❸存 ❹日榮述 ❺貞享四刊 ❾(龍大〈立大、A一一・一〇七—一〇八〉)

法華文句參解 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-san-ge. ❷四卷 ❸存 ❹栫成述 ❺寶延二刊 ❾(京大、一・二三ホ・一五)(龍大、二六五一・五六〈立大、A一一・一二三〉)

法華文句私記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-shi-ki. 法華疏私記、法華文句疏私記 ❷十卷 ❸存、大日本佛教全書第二一—二二天台三大部私記之內 ❹證眞(—文治頃A. D. 1185—1189)記 ❺法華疏私記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上

法華文句諸品要義 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-sho-hon-yô-gi. (支)Fa-hua-wên-chu-chu-p'in-yao-i. 妙法文句私志諸品要義、石鼓寺隨籤記、法華文句私志諸品要義、法華諸品要義 ❷一卷 ❸存 卍續一・四五・四 ❹唐智雲述 ❺妙經文句私志諸品要義の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上

法華文句諸品要義 ❶(日)Hok-ke-mon-gu-sho-hon-yô-gi. (支) Fa-hua-wên-chu-chu-p'in-yao-i. ❷一卷 ❹龍門 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上

法華文句序勸文 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-i-kan-mon. ❷二卷 ❸存 ❹宋版 ❾刊本(叡山、藤眞)

法華文句隨問記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-zui-mon-ki. ❷十卷 ❸存 ❹日遠(元龜三—寶永一九A. D. 1572—1649)記 ❾明暦二刊(立大、A一一・一〇九〈正大、一一四二・一九八〉)(龍大、二四一三・一三三)

寶文九刊(谷大、餘大・七六三〈正大、一一四二・二三四〈龍大、二四一三・一三四〈立大、A一一・一一〇—一一二〉(高大、寄・一・一五、一七)

法華文句東春 ❶(日)Hok-ke-mon-gu-to-shun. (支) Fa-hua-wên-chu-tung-ch'un. 法華經疏義纘、法華疏義纘、法華經義纘、天台法華疏義纘、法華文句記、法華義纘 ❷六卷 ❸存、卍續一・四五・三 ❹唐智度述 ❺法華經疏義纘の下を見よ。 ❾明暦四刊 ❾(京大、一・二三ホ・一九)

法華文句輔正記 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-fu-shô-ki. (支) Fa-hua-wên-chu-fu-chêng-chi. 法華經文句輔正記 ❷十卷 ❸存、卍續一・四五・一—二 ❹唐道邃述 ❺法華經文句輔正記の下を見よ。 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上 ❾寛永一九刊(龍大、別置)(叡山、慈眼)萬治二刊(谷大、餘大・一〇七〈龍大、二六五一・六一〉〈叡山、慈眼〉)

法華文句復眞鈔 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-fuku-shin-shô. ❷六卷 ❸存、大日本佛教全書第二三 ❹善寂(寶永四—天明元A. D. 1707—1781)述

❻天台智顗の法華文句十卷を善寂禮門が自家華嚴教學の立場から解釋を下したものである。蓋し善寂は則溪や四明の天台學は甚に高祖天台を祖述するものに非ずとし、敢て之れが解釋に手をつけたものであるが、其の態度抱負は法華玄義復眞鈔の劈頭に明示してゐる。今又本書を記するに當つて天台の本旨は凡そ教觀二門の例釋は半滿相ひ成し偏圓相資くるものであり、決して偏へに圓妙を謂ぜんが爲めに權小を撥棄せるものではない。五時八教を施設して如來一代の聖教を例釋するのは、此の舊巧を藉りて大小權實の教乘を融同して、以て混然一大妙法蓮華經たらしめんがためのものである。然るに「惜しいかな中古已來台を傳ふるの家其の過釋する所寔を轉じて串に自宗を夸耀し他家を抗拒するを以つて寔榮と爲し、五時八教の妙例を以て權小を掃蕩し圓實を衒鬻し、以て自らの宗教を諸家に甲らしむるの具と做ひ去る。是に於てか化儀の四教前四時に齊しの謬釋あるに至る云云」と云つてゐる。自ら復眞鈔と名づけた原意もこゝにある。

然して本書叙述の次第は初めに一書の大綱を述べ、次に文段を追ふて解釋を試みてゐる。 (石井亮蓮)

法華文句無師 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-ba-shi. ❷二十五卷 ❸存 ❹日琨、日說、日諦述 ❾刊本(京大、一・二三ホ・二〇〈立大、A一一・一〇五—一〇六〈龍大、二六五一・六二〈谷大、餘大・一八三二〉)

法華文句要義聞書 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-yô-gi-kiki-gaki. ❷四卷現存、大日本佛教全書第一六 ❹忠尋述

❻本書は法華文句中に於ける要義を主題として扱つた口傳書である。東陽房忠尋の作と云はれ天張法華嶮義見聞や法華嶮義聞書等と同じ文選、同じ問答樣を以て義理を表明してゐる。但し文相の取扱ひから鎌倉期已前に溯るとは思へない。且つ文中に「物語に云く、先德の中に忠尋皇慶この行を成就せず、予先年三年叡山の新院にして此の行を修す云云」等と云つて居る處よりすると、既に忠尋は物語中の人物である。玆に云はれる「眼師法師」を忠尋の法資と見、且つ「予」を「眼師法師」の直弟と見做しても既に忠尋より三代降る。恐らくより後代の人によつて完成されたものであらう。

現存第一、第五、第七、第九の四卷で、二、三、四、六、八の五卷を缺いでゐる。第九卷は法華文句要義口傳鈔と題され、信解品を以つて終つてゐるから必ずや此の後に機卷かを有したことであらう。而も所謂文句の要義に入つての解釋は第七卷より初められて居り、其已前には一般天台の教義、及び開結二經の口決が取扱はれてゐる。 (石井亮蓮)

法華文句略頌 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-ryaku-ju. ❷一卷 ❸存 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A. D. 814—891) ❼〔參考〕山家眼德撰述篇目集卷上 ❾寫本(叡山、密嚴)

法華文句略大綱私 ❶(日)Hok-ke-mon-gu-ryaku-tai-kô-shi. ❷三卷 ❸存 ❹賢海 ❼〔參考〕天台宗全書刊行豫定書目

法華文句略大綱私見聞 ❶(日) Hok-ke-mon-gu-ryaku-tai-kô-shi-kem-mon. ❷七卷 ❸存 ❹登舜(—明應頃A. D. 1492—1500)述 ❺萬治二刊(龍大、二六五一・六〇〈谷大、餘大・二六九八〉)

法華文字讀聞書 ❶(日) Hok-ke-mon-ji-doku-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一四二・五)

法華問答 ❶(日) Hok-ke-mon-da. ❷一卷 ❹寂浸(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❼〔參考〕本朝台眼撰述密部書目、山家眼德撰述篇目集卷上

法華問答 ❶(日) Hok-ke-mon-da. (支)Fa-hua-wên-ta. ❷一卷 ❸存、大正八五・一九九No. 2762

❻燉煌出土石室本。スタイン氏の蒐集に係る。首末殘損失題殘卷。前後一百三番の問答(前後の一は殘缺)より成る。法華要問答と鳴沙餘韻は擬題す。最初四十五問答は「法華經」の分品の順序を追ひ、餘の五十八問答は經文の前後に拘らず專ら經文の法數要句を解釋す。內容を觀ずるに本書の引用書目及び人師の說よりすれば、恐らく中唐以後の製作なるべし。詳かには、鳴沙餘韻解說第一部一〇二—一〇五頁參照すべし。

❾燉煌出土古寫本(大英博物館S. 2262) (矢吹慶輝—成田昌信)

法華問答 ❶(日) Hok-ke-mon-da. 淨土眞宗法華問答、法華問答記 ❷二卷或三卷 ❹存、眞宗假名聖教第九、眞宗法要第一七—一八、假名聖教(惠空筆寫)八十八部、眞宗聖典全書和文部、眞宗聖教大全卷上 ❹存覺(正應三—應安六A. D. 1290—1373)述 ❺曆應元(A. D. 1338)

❻鑑古錄によれば、曆應元年存覺四十九歲のとき備後國にあつて日蓮の宗徒と宗論を戰はし、本書其他を撰述したと傳へてゐる。

本書は叙述の形式を問答體にとり、日蓮の徒が淨土宗を批難せるに對し、淨土宗の立場より解答釋明し、宗義を開詮するに努めたものである。眞宗假名聖教幷に眞宗法要所收のものは上下二卷であるが、眞宗正依典籍集には三卷と誌し、關典錄によればその中卷は存疑著の決智鈔と全く同文なりといふことである。二卷本には八箇の問答をかゝげ、日蓮の徒は淨土の經典を獨前方便の教なりといふけれども、法華と觀經とは同時の說法なるが故に淨土教を獨前方便記と云ふは當らない、且つ諸佛の慈悲は重苦の凡夫を救濟せらるゝが本願であるから、凡夫救濟の淨土教こそ實に釋尊出世の根本目的であり、從つて淨土教こそ普汎的救濟の眞實教であると主張してゐる。
❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄、淨土眞宗教典志第一、第二、眞宗假名聖教目錄 ❽元祿四刊(谷大、宗大・三四九五、四〇二一)寫本(谷大、宗大・九七〇)(龍大、別藏)

(柏原祐義)

法華問答記 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-kiki-gaki. ❷二卷 ❸存 ❹石川了因(天保一四—大正一一 A.D.1843—1922)述 ❺明治三九(A.D.1906) ❻寫本(谷大、宗大・二一二四)

法華問答講義 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-kō-gi. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一二四二・一五)

法華問答講錄 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹江村秀山(弘化四—明治三八 A.D.1847—1905)述 ❺明治三四刊 ❻(谷大、宗洋・七〇〇—七〇一)

法華問答正義抄 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-shō-gi-shō. ❸存 ❹日念述 ❺大正一五寫 ❻(立大、D〇・一三四)

法華問答壬辰記 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-jin-shin-ki. ❷三卷 ❸存、眞宗大系第二九 ❹宝成? (—文久元? A.D.1861)述 ❺天保三(A.D.1832)

❻天保三年秋、東本願寺高倉學寮において講述せるものゝ筆聞記である。來意、大意、釋名、入文の四大科に分ち、來意をまた辨諍緣興起、明酬對相承の二小科として親鸞、曇如、存覺時代における日蓮宗徒の念佛諍難とこれに對する眞宗側の應酬とを述べ、次に大意をまた明法華念佛同體義、明念佛出世本懷義の二小科として顯密兩教の方面より詳述し、更に釋名には書題を解釋し、終の入文は諸書を引證すること極めて廣く、後細に一句一文を辿ふて詳解これ努めてゐる。

法華問答柱礎錄 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-chū-so-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・五三三)

法華問答略述 ❶(B)Hok-ke-mon-dō-ryaku-jutsu. ❷一卷 ❸存 ❹吉谷覺壽(天保一三—大正三 A.D.1842—1914)述 ❺明治四二刊 ❻(龍大、一二四二・一六)(谷大、宗小・一八三)

法華譯和集 ❶(B)Hok-ke-yaku-wa-shū. ❷五卷 ❸存 ❹實海撰 ❺永應二刊 ❻(立大、A一八・九)

法華譯和尋造抄 ❶(B)Hok-ke-yaku-wa-jin-shaku-shō. 法華經譯和尋造鈔 ❷三卷 ❸存 ❹日遠(元龜三—寛永一九 A.D.1572—1642)記 ❺寛永一九刊 ❻(立大、A〇三・一九—二一・一一〇)(晋、の・五・有・一九)

法華藥王經 ❶(B)Hok-ke-yaku-ō-kyō. (支)Fa-hua-yao-wang-ching. ❷二卷 ❸疑僞經。 ❼(參考) 法經錄第二、仁壽錄第四

法華幽微錄 ❶(B)Hok-ke-yū-mi-roku. ❷四卷 ❸存 ❹貞享二刊 ❻(谷大、餘大・二八九五)

法華遊意 ❶(B)Hok-ke-yū-i. (支)Fa-hua-yu-i. 法華經遊意 ❷一卷 ❸存、大正三四・六三三No.1722、卍續一・四二・四 ❹隋吉藏(太清三—武德六 A.D.549—623)述 ❺此書の著作年時は不明なるも、法華統略(吉藏著)の自叙によれば著者の法華疏述作は會稽在住時代と長安在住時代との二期あること明かなるが、その中此書は後期に屬する著作なること斯書中第二旨歸門の下に、昔在會稽、撰二釋法華宗旨云々、とあるに依つて知ることを得。而して著者の長安移居は隋開皇末年なれば、それ以後の著作なること明かである。
❻此書は法華經の玄談で十部門に亘つて法華經の概說を試みたるもの。第一大意門。佛のこの經を說ける因緣を叙ぶ。第二旨歸門には一經所說の教義の旨歸が都盧にあるかを論ず。第三釋名題門には法華の經題を詳釋し。第四辨教意門は此經が何を教ふるかを明す一段で、漸頓の教判を論議するを排して、無言の道を顯すを教意とすると、三論家獨特の無所得の見解を明にしてある。第五顯密門には此經の顯密いづれの教なるかを。第六三一義は三乘一乘の論議にて著者の三家の立場を述す。第七功用門。此經を受持流行の功德利益を說き。第八弘經門には末世弘經の方法を明す一段で、法師品の三軌によつて弘經法師の如法修行を勸め、第九部寫門では、此經の寫經のことを叙べ、第十緣起門には、此經講論の沿革を明す。
❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄2104 ❾平安朝時代寫(寶壽院)元祿四刊(高大、寄・一・一五)(京大、藏・七ホ・二二)(正大、一一四二・八)(叡山、天海)

(稻葉圓成)

法華遊意私示 ❶(B)Hok-ke-yū-i-shi-ji. ❷一帖 ❸存 ❹正應六寫 ❺

法華遊意疏 ❶(B)Hok-ke-yū-i-sho. ❷一卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華遊意鈔 ❶(B)Hok-ke-yū-i-shō. ❷四卷 ❸存 ❹中觀眞空述 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法華要解 ❶(B)Hok-ke-yō-ge. (支)Fa-hua-yao-chieh. 法華經要解、妙法蓮華經要解、妙法蓮華經解 ❷二十卷科一卷 ❸存、續圓四、卍續一・四七・三—四 ❹宋戒環述 ❺法華經要解の下を見よ。 ❾刊本(京大、一・二三ホ・二二)(高大、寄・一・二三)

法華要解風調記 ❶(B)Hok-ke-yō-ge-fū-chō-ki. ❸存 ❹天桂傳燈(慶安元—享保二〇 A.D.1648—1735) ❺明治一六刊 ❾(駒大、帝國・一四〇・一一三)

法華要集 ❶(B)Hok-ke-yō-shū. ❷一卷 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—892) ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、本朝古逸撰述密部書目、山家目德撰述篇目集卷上

法華要鈔 ❶(B)Hok-ke-yō-shō. ❹細瓦大慧(寛喜元—正和元 A.D.1229—1312)述 ❼(參考) 日本經林撰述書目、經藏目錄

法華要文集 ❶(B)Hok-ke-yō-mon-shū. ❷十二卷 ❸存 ❾寫本(叡山、天海)

法華要略 ❶(B)Hok-ke-yō-ryaku. (支)Fa-hua-yao-lüeh. ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(眞平王三九 A.D.617—)述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2135, 2136

法華要略 ❶(B)Hok-ke-yō-ryaku. ❷一卷 ❸存 ❹南山無名子述 ❺元祿一七刊 ❾(立大、A一二・四五五)(高大、寄・一・二三)(龍大、二四一三・一五〇)

法華要略 ❶(B)Hok-ke-yō-ryaku. 妙法蓮華經要略 ❷三卷 ❹德一(—天長元 A.D.824—)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法華要略頌 ❶(B)Hok-ke-yō-ryaku-ju. ❷一冊 ❸存 ❹秀倉(寛永三—元祿一二 A.D.1626—1699)述 ❺寛文三刊 ❾(龍大、二四一三・一五一)(高大、寄・一・二四)

法華翼贊 ❶(B)Hok-ke-yō-ka-san. 妙法蓮華經翼贊 ❷十卷 ❹法證述 ❻東域傳燈目錄卷上に云く「法證撰。釋二玄贊?私此行賛作云々法證撰、恐誤歟」云々。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法華禮誦要文集 ❶(B)Hok-ke-rai-ju-yō-mon-shū. ❷一卷 ❸存 ❹昆尼蘭合辰編 ❺明治三一刊 ❾(京大、印哲・〇・二七)

法華禮誦要文集補遺 ❶(B)Hok-ke-rai-ju-yō-mon-shū-fu-i. ❷一卷 ❸存 ❹昆尼蘭合辰編 ❺明治一七刊 ❾(帝國、一八三・二九一)

法華略音訓 ❶(B)Hok-ke-ryaku-on-kun. ❷一卷 ❹玄叡 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華略記 ❶(B)Hok-ke-ryak-ki. 妙法蓮華經略記、法華經略記 ❷一卷或三卷、四卷 ❹明一(神龜五—延曆一七 A.D.728—798)述 ❻法華略抄と題して大正藏經第五十六卷に收められるものは本書の一部か。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、下、諸宗章疏錄第二

法華略義聞書 ❶(B)Hok-ke-ryaku-gi-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一六 ❹忠琢述
❻本書は中古天台教義の口傳書である。法華一部八卷廣博なりと雖も之れを釋するに名體宗用教の五重玄義を以つてして其の大綱を盡してゐる。故に略義と名づける。東陽忠琢の撰と云はれる天台教義を扱つた書は例外なしに南岳慧思より發するものとせられるが本書も亦然りで、其の初めに「抑今の略義天台傳集は源南岳大師の說より出づ、南岳大師妙法蓮華經の五字を兩紙一卷の書に書き載せて天台大師に授け給へり。天台又之れを廣め演說し給ふ。章安尊者又之れを記して妙法蓮華經略義天台傳集と爲す。玄義の血脈相承、法華本迹の十妙、宜しく彼の書に依つて治定すべき者なり、山家大師唐朝より歸來して惠覺大師に授け給へり云云」とあるがその傳相論は元より信憑すべきでない。但し此の觀心的獨創法門が反對に教禪的傳來を喧しく論ずる處に中古天台の妙味が存する。五重玄義並に附法觀並に判蘊妙の血脈、開蘊妙の血脈、各一字を以て口傳す、玄文判開の血脈は只一字に限る等と云ひ、又五重玄の血脈相承に在世滅後の分別、並に三十二種の五重玄あり、或は金口の相承牟尼の傳來、或は今師內證の五重自己の本法等皆こゝに於て口傳すべし等と云つてゐることによつて本書の內容と其の釋義の態度を知ることが出來る。其の奧題の下に「總口決」とあり、旁々中古口傳法門の祕書であつたことを敎へてゐる。

(石井亮雲)

法華略義見聞 ❶(B)Hok-ke-ryaku-ki-ken-mon. ❷三卷 ❸存、大日本佛教全書第一六 ❹忠琢述
❻中古天台に於ける法義名相の解釋を扱つたものであるが、首尾通じて論草態を用ひて義理を闡明してゐる。初めに本書の起る由來を論じてゐる。それによると『法華略義は南岳の所說である。南岳大師が多寶塔中の大牟尼尊から教行證三種の法門を口傳せられた。三種とは略義と略文と心要とであるが、佛法內義之祕記には「三部祕釋各八紙南岳大師所釋、章安大師記」と云つて名が出してない、傳教大師の隨身錄には「略義、略文、心要各一卷、南岳大師說、章安頂師記」と見えてゐる。但し心要は章安が治定したが、略義と略文とは章安の草本を妙樂が再治したものである。而して傳教大師が之れを行滿和尙から相傳せられ、其後橫川の大僧正(良源)が其の心要をば源信に授け、略義を覺運に、略文を覺超に授けられたが、三部共に當流(忠琢=惠心流)の相傳である』等と云つてゐる。但し傳教の將來錄にも其の法華略義の名を見ず、且つ之れが名を連ねると云ふ隨身錄なるものも漸く鎌倉期以後の作にかゝる日朝筆の傳教大師章疏や諸宗章疏錄等に見えるに過ぎない、即ち本書は出典を諸師に假託して其の

義を重くしたものに外ならない。奥題の下に「法光類聚鈔」とありて所謂法光類聚(別名天台傳南岳心要)と同じ態度の名稱の取扱ひをしてゐるから、或は本書に云ふ三部一具の書であり共に法光類聚と名づけたものと思はれる。 (石井亮薫)

法華略儀 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-gi. 講演法華儀、入眞言門住如實見講演法華略儀、入眞言門講演法華儀 ❷二卷 ❸存、大正五六・一八九No.2132、日本大藏經第一二法華部章疏第二・大日本佛教全書第二四、第二七 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891)撰 ❺貞觀九(A.D.867) ❻講演法華儀の下を見よ。

法華略科 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-kwa. ❷一卷 ❸存 ❹鳥地大等(明治八—昭和二 A.D.1875—1927) ❺大正七刊 ❻東京明治書院

法華略科文 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-kwa-mon. ❷一卷 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891) ❼(參考) 本朝台組撰述密部書目

法華略觀 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-kwan. 法華觀法 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋第五、惠心僧都全集第三 ❹源信(天慶五—寛仁元 A.D.942—1017)述 ❺本書は一名法華觀法ともいはれ、法華經讀誦觀や法華神體と共通する思想で、その中此は最も簡略なものである。然し傳教大師撰とある法華經大意(全集五ノ三六二頁)中の文と殆んど同一であるは奇とすべく恐らくは源信時代否それより下つた頃の製作ではないかと思はれる。法華經の觀法を略記したもので、即ち法華の體は一念であり、其れが妙法にて一切法、十方、三世を攝盡す。此解あれば行住座臥常しく日月を貫すも、遂に自然に薩婆若海に入る可しと說く。蓋し本覺思想旺盛時の作と推せられ、此思想の現れを窺知される所である。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、淨土眞宗教典志第一 ❽刊本(京大、藏・二四ヰ・一三) (渡邊最昌)

法華略決 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-ketsu. ❷一卷 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D.767—822) ❼(參考) 本朝台組撰述密部書目、山家祖德撰述爲目集卷上

法華略碎 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-sai. ❷一冊 ❸存 ❹寫本(智、の・六・中・一七)

法華略贊 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-san. 法華疏抄 ❷五卷 ❹行賀(天平元—延暦二二 A.D.729—803)撰 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第二

法華略頌 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-ju. 法華論略頌 ❷一卷 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D.767—822) ❼(參考) 本朝台組撰述密部書目

法華略秀句 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-shu-ku. 法華肝要略秀句集、法華經略秀句 ❷三卷 ❸存、傳教大師全集第三(舊)、第五(新) ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D.767—822)述 ❺法華肝要略秀句集の下を見よ。 ❻寛永二〇刊 ❼(叡山、天海)

法華略集 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-shū. ❷二卷 ❸存 ❹高泉性潡(寛永一〇—元祿八 A.D.1633—1695) ❼(參考) 禪籍目錄

法華略述 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-jutsu. (支)Fa-hua-lüe-shu. ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(貞平王三九 A.D.617—)述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2187、2188

法華略疏 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-sho. (支)Fa-hua-lüe-shu. 法華經疏、法華經略疏、妙法蓮華經略疏 ❷二卷 ❸存、卍續二乙・二二・四 ❹宋慧遠生(一元嘉一一 A.D.424)述 ❺法華經疏の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一

法華略疏 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-sho. ❷四卷 ❸存 ❹日興(寛文三—正慶元 A.D.1124—1332)作 ❺寫本(立大、D〇・九〇)

法華略疏科 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-sho-kwa. ❷一冊 ❸存 ❹(智、の・四・中・二二)

法華略疏筆記 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-sho-hik-ki. ❷十二卷 ❸存 ❹義瑞(寛文七—元文二 A.D.1667—1737)述、慧超錄 ❺寫本(或光院)

法華略抄 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-sho. ❷一卷(三卷或四卷) ❸存、大正五六・一二九No.2135 ❹明一(神龜五—延暦一七 A.D.728—798)述 ❺本書は法相宗東大寺明一が法華二十八品を各品毎に來意、釋品、釋文の三段に分つて解したものであるが法相宗義を明白に記してゐない。恐らく宮中か或は大寺で行れた論議の席で用ひた草案ではなからうか。明一の傳は元亨釋書二、扶桑略記仮名、本朝高僧傳四に出づ。本書は管尾共に缺けてゐるから前後に如何なる記述があつたか未詳。三卷或は四卷と傳へてゐるから相當に自宗の立場から法華の論究を行つたものがあつたと考へられる。 ❼(參考) 注進法相宗章疏 (田島德音)

法華略諏 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-dan. ❷一卷 ❹室生修圓(寶龜二—永和二 A.D.771—825)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

法華略祕釋 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-hi-shaku. ❷一卷 ❸存、大正五六・一八三No.2130異本五 ❹空海?(寶龜五—永和二 A.D.774—825) ❺法華經問題の一種。歸敬頌、菩提、誡罪、薩埵、菩提心の諸眞言頌を述べ、法華經の秘密廻を說いてゐる。その內容は法華經密說に類する所が多い。作者は弘法大師か、或は後人が法華經密說に則つて作つたものか判定し難い。 ❹長寛三寫及平安朝末期寫(高山寺)平安朝末期—鎌倉初期寫(寶御院) (小田應舟)

法華略名目 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-myō-moku. ❷一冊 ❸存 ❹(智、え・三・右・一八)

法華略和鈔 ❶(日)Hoke-ke-ryaku-wa-shō. ❷一冊 ❸存 ❹一雨亮書撰 ❺寶永五刊(叡山、密藏)正德五刊(京大、日大未・四二)

法華龍女成佛權實義 ❶(日)Hoke-ke-ryū-nyo-jō-butsu-gon-jitsu-gi. (支)Fa-hua-lung-nü-ch'eng-fo-ch'üan-shih-i. 龍女成佛義 ❷一卷 ❸存、卍續二・五・五 宋源清(—成平元 A.D.998—)撰 ❹太平興國二(A.D.977)

❺本書は法華經提婆達多品の龍女成佛說に對する疑義を釋解したものである。一部僅に十四紙に過ぎない小册であるが、初に法華文句に於ける之れが救ひを眺め、次に義に約して證文を引きつゝ之れを銷釋し、次に微釋しつゝ從來の疑滯せる處を通じてゐる。蓋し著者源清は慈光賜恩の下に出で、其の下に智圓・慶昭を出して道宋天台山外派の淵源を爲したのであつた。本書の初に「古今の章疏判釋同じからず、或は權爲と判じ、或は實證と判ず」と云ひ又「執ち取て評論するに非ず、蓋し諮稟自るところ有り、特に文義を授けて聊か以て釋通す、庶くば所宗を願はさん、先哲を誤ふるに非ざるなり」等と云つて居る處よりすると、或は同代に於ける四明知禮の日本國源信禪師の問二十七條に答へたるものの中に漏足らぬものがあつたのではないか、さればこそ後が宋至元元年の譯を以つて我國に唐土の岡本七郎を求めた際も、其の代價五部に取て本書を加へたものと思はれる。本朝文粹によると東陽慶爽二十三代座主)が寒先源清に復へた書狀に法華示珠指二卷、龍女成佛義一卷、十六觀經記二卷、佛國莊嚴論一卷、心印銘一卷等を送られたことが見えてゐる。但し妙玄私記第七や元亨釋書第四によると之等の書は文義疎漏であつて北嶺教學からは冷遇された樣である。中にも本書は三井の慶祚阿闍梨の所破となり「法華龍女成佛權實疑難」が長德五年正月に作された。日本天台教學の發展も見られる事乍ら又一面日支天台交涉史の一齣を爲してゐるものでもある。唐土に於ては四明八代の法孫義月によつて又其の破せられる處となつた。即ち「法華龍女成佛權實文旨」がそれである。 ❼(參考) 山家祖餘集、天台霞標初編第四 ❽刊本(京大、藏・七ホ・一)元祿七刊(龍大、研佛)寫本(京大、藏・七ホ・二三)(龍大・二六五二・一八三) (石井亮薫)

法華龍女成佛權實疑難 ❶(日)Hoke-ke-ryū-nyo-jō-butsu-gon-jitsu-gi-nan. ❷一卷 ❸存 ❹慶作述 ❺刊本(叡山、別當)寫本(京大、藏・七ホ・二四)

法華龍女成佛權實文旨 ❶(日)Hoke-ke-ryū-nyo-jō-butsu-gon-jitsu-mon-shi. (支)Fa-hua-lung-nü-ch'eng-fo-ch'üan-shih-wen-chih. ❷一卷 ❸存、卍續二・五・五 ❹宋義月(紹興一九—淳祐元 A.D.1149—1241)

❺本書は法華經提婆達多品の龍女成佛說に於ける權實問題を天台の文句及び荊溪の之れが記に基いて其の文旨を明らめ正したものである。蓋し著者稻延義月は廣智尙賢七代の法孫にして、仁王疏記、梵網通儀、三大部格言、山家祖餘集等の著作と爲して大に四明教學の爲に氣を吐いた人であるが、本書は其の山家祖餘集中に收められてゐるものである。此の一篇は宋末源清の「法華龍女成佛權實義」の誤謬を破斥したものであることは一讀して明らかなる處。云ふ處は龍女成佛說は實に「經の力用を證する所以にして、技に權巧と云ふは又體用の上で論ぜらるべきものである。本迹永定の義は誤りなり」との主張である。 (石井亮薫)

法華綸貫 ❶(日)Hoke-ke-rin-kwan. (支)Fa-hua-lun-kuan. 法華經綸貫、妙法蓮華經綸貫 ❷一卷 ❸存、卍續一・五〇・二 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A.D.1599—1655)述 ❺法華經綸貫の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二 ❽元和元刊(叡山、毘門)刊本(正大、一一四二・二〇二)×立大、A一二・一七三)(晋、の・五・左・七)(京專)(高大、寄・一・一五)

法華綸貫講要 ❶(日)Hoke-ke-rin-kwan-kō-yō. 法華經綸貫講要 ❷一卷 ❸存 ❹壓投編空(安永九—文久二 A.D.1780—1862)述 ❺寫本(正大、一一四二・一一四二・慶應三刊(正大、一一四二・一一二)

法華綸貫筌 ❶(日)Hoke-ke-rin-kwan-sen. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(叡山、壽量)

法華綸貫俗譚 ❶(日)Hoke-ke-rin-kwan-zoku-tan. ❷一卷 ❸存 ❹靈空光謙(永應元—元文四 A.D.1652—1739)述 ❺寫本(叡山、善潤)

法華靈驗傳 ❶(日)Hoke-ke-rei-gen-den. (支)Fa-hua-ling-yen-chuan. 法華經靈驗傳 ❷二卷 ❸存、卍續三乙・七・四 ❹高麗了圓

❻この書は題名の如く法華經傳持に關する多くの靈驗を集めたるものである。唐の慧詳の弘贊法華傳十卷、宋の四明の宗曉の法華經顯應錄四卷、元の眞淨の海東傳弘錄の三本によつて、抄錄したものにして、その三本の中の最も奇特と思はるゝもの、百七例を拔出して、兩卷に編めたるものである。而してこれら百七の靈驗傳は、引用の三傳中、殆んど弘贊傳にして、顯應傳、海東傳弘錄は僅か二十錄りである。その他法苑珠林、大平廣記、謝敏の靈異傳、其他に及んで居る。何著者了圓なるもの、傳記は不明であるが、元の人かと思はれる。 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、日本國承和五年入唐求法目錄、入唐新求聖教目錄 ❽慶安三刊 ❾(叡山、毘門)×龍大、二九六四・五九) (道端良秀)

法華靈場記 ❶(日)Hoke-ke-rei-jō-ki. 山城法華靈場記 ❷六卷 ❸存 ❹豐臣義俊集 ❺大和元—貞享三(A.D.1621—1686) ❻貞享三刊 ❼(谷大、餘大・二九七三×京大、一・二二ホ・一)×龍大×立大、A〇八・一一六)

法華靈場記 ❶(日)Hoke-ke-rei-jō-ki. 新編法華靈場記 ❷五卷 ❸存 ❹刊本(立大、A〇六・一一五)

法華靈瑞集 ❶(日)Hoke-ke-rei-zui-shū. (支)Fa-hua-ling-jui-chi. ❷宋吳興元頌(—政和二 A.D.1112—) ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法華論 ❶(日)Hoke-ron. (支)Fa-hua-lun. 妙法蓮華經憂波提舍、妙法蓮華經

論、法華經論 ❷二卷 ❸存、大正二六・一No.1512。縮往六、卍二二・三、北537堂、南2560堂、元574堂、明北1125鈔、清1125鈔、麗576虛、天572堂、指620虛、法620虛、至1125邑、明南1125離、No.1522 ❹大觀造、書提流支菩林等共譯 ❺妙法蓮華經憂波提會の下を見よ。 ❻寛文九刊 ❾(正大、一一四二・六)(龍大、二三六・九)(叡山、華藏)(谷大、餘大・八七五)

法華論 ❶(日)Hoke-ke-ron. (支)Fa-hua-lun. 妙法蓮華經論優波提舍、妙法蓮華經論、法華經論、法華經論釋 ❷一卷 ❸存、大正二六・一〇 No.1520. 縮往六、卍二二・三、北560虛、南572虛、元576堂、明北1127鈔、清1127鈔、麗576虛、天571虛、指576虛、法576虛、至1126邑、明南1126離、No.1521 ❹天親造、勒那摩提、曇鸞共譯 ❺妙法蓮華經論優波提舍の下を見よ。

法華論 ❶(日)Hoke-ke-ron. (支)Fa-hua-lun. ❷五卷 ❸缺 ❹唐義淨 (貞觀九―先天二A.D.627―713)譯 ❼(參考)開元錄第一四、貞元錄第二四

法華論 ❶(日)Hoke-ke-ron. 科註法華論 ❷六卷 ❸存 ❹慶安五刊(谷大、餘大・五四七)(京大、日大未・一四三)寛文九刊(龍大、二四三六・一二〇・一二五)

法華論 ❶(日)Hoke-ke-ron. 國譯法華論 ❸存、國譯大藏經論部第五 ❹清水畯山譯

法華論優婆提舍記 ❶(日)Hoke-kyō-u-pa-dai-sha-ki. 法華論記、妙法蓮華經優婆提舍記、論記 ❷十卷 ❸存、日本大藏經第二五諸大乘論章疏第一、大日本佛教全書第二五智證大師全集第一 ❹圓珍(弘仁五―寛平三 A.D.814―891) ❼(參考)山家目錄撰述目錄卷上

法華論記 ❶(日)Hoke-ke-ron-ki. 法華論優婆提舍記、妙法蓮華經優婆提舍記、論記 ❷十卷 ❸存、日本大藏經第二五諸大乘論章疏第一、大日本佛教全書第二五智證大師全集第一 ❹圓珍(弘仁五―寛平三 A.D.814―891)述 ❺本書十卷十七册は智證大師圓珍が婆藪槃豆菩薩造、菩提留支と曇林共譯の法華論を註釋せる不朽の名著である。法華論には元魏中勒那摩提と曇鸞の共譯の一卷及び今の二卷本あり、圓珍は前者をも請來せる事は請來目錄に見ゆる所である。本書の製作年代は明らかではないが、今年譜によつて見るに大師が入唐中既にその緒についてゐた事が知られる。即ち大中八年(A.D.854 齊衡元年)七月越州開元寺に至り法華論記を撰へたとあり、これ年次四十一歳の時であり、同十年には國清寺に於て法華論一卷を得、同十二年四十五歳の正月天台にあつて再び法華論記を勘へ修治未了とあり、本書の完成は歸朝後になつたものなるべく、以て多年苦心の製作たる事が推察される。

今論記に現れた圓珍の法華思想を概觀せんとす。法華思想は印度支那共に多岐にわたる系統があり、その前期であり然も源流的二系としては勿論龍樹と世親の兩論師に於いて見られる。天台三論兩家が共に龍樹に源を求めて居り乍ら天台と嘉祥は可成りの隔意を示して居り、更に遡觀して龍樹と世親を經、此の末流に在る教學遵奉者間には必ずや相違を見出す可きであらう。既に三論の嘉祥は法華論の代表的註書の一たる法華論疏(大正四〇)を著作し、各宗論師の今論依用も亦敎學に過なしの狀態である。從つて注目す可き所は天台に棹す智證大師が如何なる態度を以て本書を撰述したかにあらう。嘉祥とも勿論相違ある天台系にあつての筏が今論を如何に見たかは興味ある問題であらねばならない。今其の系流を略見せば實に印度支那の法華の潮流を中心に綜合された立脚地よりなされ、特に天台斟酌の自家教學上にあつて天台法華觀の正意を闡揚せんとした態度たるは明らかである。而して更に注意すべきは前代諸師には見られなかつたと云つてもよい。事圓を强調せる日本天台教學立ちにあるをよく現したる事、別しては圓密同致思想と見られる事であらう。……依正見聖法然本有、故言境妙平等大會、能信能行即心證入、故云妙境究竟顯名。毘盧遮那本迹靈一、殊大日同體、所以佛果萬德莊嚴(佛教全書本、全集一ノ二八六上)圓珍が法華論に對する分科の大綱及び其の略觀を見れば次の如し。

一、正釋經(五章三十二義)――序說分
　(一)七　成(釋序品)
　(二)五　分(釋方便品)
　(三)七　喻
　(四)三平等
　(五)十無上
　――正說分
　――(釋餘品)
　――九無上
　――第十勝妙義通ニ正說及流通ニ

二、科簡總結

今論各章に對する記が註釋を略見せば次の如し。先づ五章中の第一序說分たる七成就は論が序品を七分して註せる所、一序文成就、二衆成就、三欲說法時至成就、四所依說法隨順成儀成就、五依止說成就、六大衆欲聞法現前成就、七文殊師利答成就である。中に就いて論は第三如來說法時至成就に關し法華の異名十七條を擧ぐ、即ち一無量義經、二最勝修多羅、三大方廣、四敎菩薩法、五佛所護念、六一切諸佛祕密法、七一切諸佛經、八一切諸佛祕密藏、九能生一切諸佛經、十一切諸佛道場、十一一切諸佛所轉法輪、十二一切諸佛堅固舍利經、十三一切諸佛大巧方便經、十四說一乘經、十五第一義住、十六妙法蓮華、十七最勝法門にて此の十七名を以て法華の如何なるものかを高調するが、記も亦今說を中心に七成就全般にわたり細科文段を明らかにして、其の精妙を盡して論考し、天台を初め諸家說諸經論に證して分別科簡して今論を明示し、獨妙の境地を同示する所である。

第二章は五示現である。これ方便の一品を釋する所、分つて五となす。一款妙法功德分、二款法師功德分、三大衆定疑分、四定疑分、五斷疑分これにて記は卷四より第六末の上半を費して縱横に明解す。今品は別して自他兩宗舊來の諍ある所なるも圓珍は委しく諸經論を引きて助成し諸師は偏執にて品旨を會せざるものとし、實に以て天台の釋を高調する所、「大師雖宣與佛同源、未學仰信而已」(同上一一七頁)といふ。

第三章は七喻である(卷六末より)。七喻とは一火宅喻(譬喻品)、二窮子喻(信解品)、三雲喻(藥草喻品)、四化城喻(化城品)、五寶珠喻(五百品)、六髻中喻(安樂行品)、七醫師喻(壽量品)をいふ。蓋し七種の煩惱性具足の人(求勢力人、離聞解脫人、大乘人、有定人、無定人、集功德人、不集功德人)のために七喻を說いて對治する所、記は初めに七人を列ね次に七喻を明かして此病を治するを示し、次に其藥を與ふるを明すこと詳細を究めて三平等に移つてゐる。今七喻の總意を述べて曰く、「今按、於迹門中說六種譬、今三根熟、而對本門、並皆未熟故示本地、未熟之者令遠久成之本、應云迹門已熟本門未熟、的實而言、前六方便、後一眞實、迹者不了識、徒攬筌語、罪處誇法、請早改之(七末、同上二一七)。

第四章は三平等である。これ種々乘異、世間涅槃異、彼此身異を信ずる三種涅槃を對治せんため乘平等、世間涅槃平等、法身平等の三を明す所である。記は或は四種離聞或は三因佛性等を論じ諸說を料簡決擇して詳細を究む。今本段論述の略觀を見れば次の如し。「釋ニ此三平等一有二兩番一、一通指二一部一、一部始終無レ非ニ唯一妙法一無レ非ニ平等大慧一、故知、文文句句具ニ三平等一、即一切無レ有ニ防礙一、二別指ニ十品一、謂譬・授・五・學・法・寶・提・持・分・常・或指ニ九品一、不レ入ニ分別一、分爲ニ十品一……未熟令レ熟特指ニ本記一、此則眞實究竟之記、令レ迹歸レ本、最在ニ此章一、不レ違ニ宗旨一、學者莫レ怪(同上二一八)。

第五章は十無上である。卷八本より末尾に及ぶ所で、種子、修行、增長力、令解、淸淨國土、說法、敎化衆生、成道、涅槃の九無上を論じ、是等は正說分中に入れ第十の勝妙力無上を正說と流通に分つてゐる。一種子無上にあつては因能感果、果能生因の喻を種子にかりて、一乘了因智種を指し「於ニ諸世間一爲レ無レ有レ上」より種子無上といはれ譬喻品を指す。二修行無上には大通智勝佛の往事を示し、三增長力無上は化城寶所をあげて圓極を明して遂に大果に達到せしむる增長力の無上を述べてゐる。四領解無上は繫珠の喻を以て昔日所繫の一乘無上の寶珠を領解せしめ、五淸淨國土無上にあつては多寶佛塔を示現して內外國土の淸淨を明し、六說無上には髻中喻を示し、七敎化衆生無上は無量の菩薩涌出して如來往昔の所化は久しく眷屬數多なるを證せる所、即ち所化無上をあげて正しく能化長遠の本を顯はすを論ず。八成大菩提無上は圓珍が最も力說せる所にて即ち論に「八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提」といふを四分して、一法を舉げて數を表はし、二名を列ねて義を釋し、三佛の壽量を釋し、四所依土を明す。就中初めの數を標するに十四門即ち、一名數門、二攝名門、三融通門、四釋妙門、五修性門、六本迹門、七權實門、八壽量門、九常無上門、十感通門、十一隨緣感見門、十二佛迹顯本門、十三勉料簡門、十四異解門の各部門にかけて佛身論を論題に長廣舌を振ふ。此の如く本段は久遠成道を示す。これ壽量品の骨目たると共に法華經全體たらざる可からずとして、「今總案。但說他論明ニ數增減一、非ニ是今經久遠之旨一、皆是迹佛世諦異名。人不レ識レ之、互相是非、却成ニ增減一、去ニ佛彌遠一、須レ依ニ今經一、知ニ趣向處一(同上二六〇)」と。蓋し三種佛菩提即ち應化佛菩提、報佛菩提、法佛菩提の三身成就を說くは正しく法華の肝心であらねばならない。第九涅槃無上は醫師の喻をさすも論文は其義を演述せず。今圓珍は涅槃に就て詳論すると共に醫師を論ずるに明醫、明子、明治と三分して釋述してゐる。第十は勝妙力無上である。論は初めに第五の淸淨國土無上を重ねて廣釋し、論の「多寶如來塔瑞示一切佛土淸淨者、示現諸佛實相境界中種々衆寶莊嚴故示現有ニ八種一(二三五)」といふを明かすに就て別して妙法蓮華經の題號を解しては、譬說大事、因緣寶所、安樂明珠、壽量菩提、本迹二門九世佛寶、皆在ニ一如一、故名爲レ妙、即レ一而多、故名爲レ法、此妙法總在ニ十界衆生心性一、故名爲レ蓮、內外凡聖同修ニ一乘因華萬行一、故名爲レ華、如ニ八相遷レ物、相不レ在レ前、物不レ在レ後、能所一時無レ前無レ後、故言ニ妙法蓮華經一云々と。(九末、同上二八六頁上)。かくて、勝妙力無上を正釋するに法力、修行力の兩門に各品を配す。即ち論は法師、勸持、安樂、分別、隨喜、常精進、神力、囑累の八品を法力に充て、以て證門、信門、供養門、聞法門、讀誦持說門の五門に配釋す。他方菩薩、妙音、觀音、德持、藥王、普賢の六品を修行力に充て、說力、行苦行力、護衆生諸難力、功德勝力、護法力の五門に充釋して詳細なる解釋を以て貫通してゐる。

思ふに法華論は法華研究には缺く可からざる典籍たるは言ふ迄もなく諸師の古來の態度よりしても明らかである。然るに從來今論の註書は比較的少ないうらみがあり、只嘉祥大師の疏と智證大師の記に於いて廣說されたるを第一書とすべきものか。日本天台にあつても圓唱以來此論研究にいそしんだ事が知られ、傳敎大師にも科文があつて現存して居るが、細科詳解に於いては勿論本書に及ばざる所である。智證大師と云へば直に密敎の大家を想定せしめられるが、其は一片を見た大師であり、本書の如き大師あるを古來忘却され易かつたのは遺憾である。洵に大師敎學を知るには缺く可からざる生命を持つが本書であらう。而して眞面目な記述態度に巨細の無理をも見せず會通せしめて居るは大師の性格を知る一端ともなり、嘉僞未知とせらるる大師の名を冠せる他著に比して餘りの懸隔に驚かざるを得ないだらう。

❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二、釋敎諸師製作目錄卷三、諸師製作目錄、山家諸師撰述目錄、智證大師撰述目錄 ❺永應二刊 ❾(谷大、餘大・三三八六)(正大、一一四二・七)(龍大、二四三六・一二一)(智、や・三・右・五)(叡山、華藏)

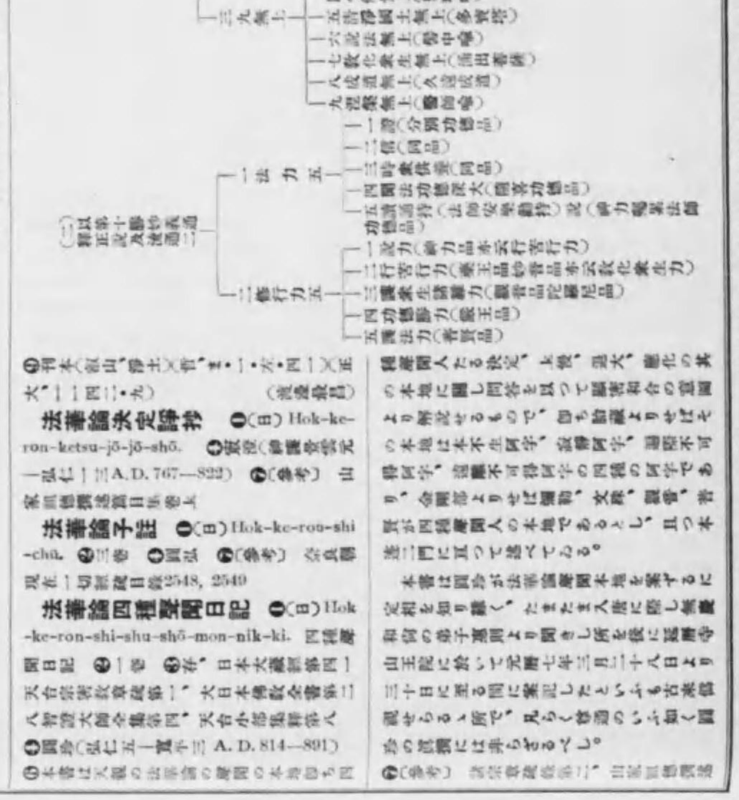
(浅邊最昌)

法華論記管窺拔粹 ❶(日)Hoke-ke-ron-ki-kwan-ki-bas-sui. ❷一卷 ❸存 ❹曼深(一元祿頃? A.D.1688―1703―) ❺元祿一〇寫 ❾(叡山、華藏)

法華論義 ❶(日)Hok-ke-ron-gi. ❷十巻 ❸作 ❹奏正四位 ❺(東寺宝記)

法華論科会 ❶(日)Hok-ke-ron-kwa-shō. 法華論科文、法華論科文、法華論科文、法華論科文、法華論科文 ❷一巻 ❸作、日本天平勝宝年間(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六)の頃、僧侶大安寺の僧侶。❹奏定(聖武天皇)(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六) ❺聖武天皇(聖武天皇)(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六)

法華論科文 ❶(日)Hok-ke-ron-kwa-mon. 法華論科文、法華論科文、法華論科文、法華論科文、法華論科文 ❷一巻 ❸作、日本天平勝宝年間(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六)の頃、僧侶大安寺の僧侶。❹奏定(聖武天皇)(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六) ❺聖武天皇(聖武天皇)(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六)



❺利天(須山(修士)天)・利(ま・1・天・四1)天(法天)11四11・九) (完度東寺)

法華論未受請科 ❶(日) Hok-ke-ron-ketsu-jō-jō-shō. ❷奏定(聖武天皇)(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六) ❸(参考) 山家浄土教思想研究第四章参照

法華論子註 ❶(日)Hok-ke-ron-shi-chū. ❷二巻 ❸写本 ❹(参考) 古典籍索引 巻一 切経索引 巻2548, 2549

法華論四種読誦日記 ❶(日)Hok-ke-ron-shi-shu-shō-mon-nik-ki. 四種読誦日記 ❷一巻 ❸作、日本天平勝宝年間(天平勝宝元年—天平勝宝八年)(七四九—七五六)の頃、天台宗僧侶の四、天台宗僧侶の八、和尚僧侶大師の全僧侶の四、天台宗僧侶の八 ❹写本は天理図書館の法華論の巻頭の天理図書館の法華論の巻頭の天理図書館の法華論の巻頭の

-hsien-chuan. 高僧法顯傳、歷遊天竺記傳、佛國記、法顯法師傳 ❷一卷 ❸存、大正五一・八五七 No.2085、館救六、卍三〇・五、北1075過、南1091過、元1056過、明北1429費、清1462書、麗1080頃、天1074過、指1003廣、法1082内、至1351跋、明南1462共、No.1462 ❹法顯記 ❺東晉弘始二—義熙一四(A. D.399—418) ❻高僧法顯傳の下を見よ。 ❼(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄 27362

法眼帖 ❶(日)Hō-gen-jō. ❷一卷 ❸存 ❹黃檗山歷代の墨跡法帖なり。 ❼〔参考〕 禪籍目錄

法眼禪師語要 ❶(日) Hō-gen-zen-ji-go-yō. (支)Fa-yen-ch'an-shih-yü-yao. ❸存、卍續二・二三・五續古尊宿語要第二 ❹唐法眼文益(光啓元—顯德五 A. D. 885—958) ❻清涼法眼禪師の法語數題を錄したる短篇である。 (後藤大用)

法眼禪師宗門十規論 ❶(日)Hō-gen-zen-ji-shō-mon-jū-ki-ron. (支) Fa-yen-ch'an-shih-tsung-men-shih-kui-lun. 宗門十規論、法眼禪師十規論、淨慧法眼禪師宗門十規論、十規論 ❷一卷 ❸存、卍續二・一五・五、禪學大系眼錄部第一 ❹唐法眼文益(光啓元—顯德五 A. D. 885—958)述 ❻宗門十規論の下を見よ。

法眼禪師十規論 ❶(日) Hō-gen-zen-ji-jū-ki-ron. (支)Fa-yen-ch'an-shih-kui-lun. 宗門十規論、淨慧法眼禪師宗門十規論、法眼禪師宗門十規論、十規論 ❷一卷 ❸存、卍續二・一五・五、禪學大系眼錄部第一 ❹唐法眼文益(光啓元—顯德五 A. D. 885—958)述 ❻宗門十規論の下を見よ。

法眼禪師十規論 ❶(日) Hō-gen-zen-ji-jū-ki-ron. 重刊法眼禪師十規論 ❷一卷 ❸存 ❺明治一二刊 ❹(帝國、一三一・二三七)

法眼禪師十規論 ❶(日) Hō-gen-zen-ji-jū-ki-ron. 標註法眼禪師十規論 ❷一卷 ❸存 ❹古田梵仙編 ❺明治一二刊 ❻東京森江書店

法眼禪師十規論 ❶(日) Hō-gen-zen-ji-jū-ki-ron. 增標傳註法眼禪師十規論 ❷一卷 ❸存 ❹能仁義道註 ❺明治一四刊 ❹(帝國、一四五・六)

法眼文益禪師語錄 ❶(日)Hō-gen-bun-yaku-zen-ji-go-roku. (支)Fa-yen-wen-i-ch'an-shih-yü-lu. 金陵清涼院文益禪師語錄、大法眼文益禪師語錄、大智藏大導師語錄、清涼文益禪師語錄、文益錄、法眼錄 ❸存、大正四七・五八八 No.1991、卍續二・二四・五、禪學大系眼錄部第五 ❹唐法眼文益(光啓元—顯德五 A. D. 885—958)述、明語風圓信、郭凝之共編 ❻金陵清涼院文益禪師語錄の下を見よ。

法眼法印大師號宣下狀 ❶(日) Hō-gen-hō-in-dai-shi go-sen-ge-jō. ❷一卷 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891) ❼(参考) 本朝台眼禪遠密部書目

法眼錄 ❶(日)Hō-gen-roku. (支)Fa-yen-lu. 金陵清涼院文益禪師語錄、大法眼文益禪師語錄、法眼文益禪師語錄、大智藏大導師語錄、文益錄、清涼文益禪師語錄 ❷一卷 ❸存、大正四七・五八八 No.1991、卍續二・二四・五、禪學大系眼錄部第五 ❹唐法眼文益(光啓元—顯德五 A. D. 885—958)述、明代語風圓信、郭凝之共編 ❻金陵清涼院文益禪師語錄の下を見よ。

法源和尚和歌 ❶(日) Hō-gen-wa-shō-wa-ka. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 禪籍目錄

法源禪師陞座語錄 ❶(日)Hō-gen-zen-ji-shō-za-go-roku. ❷一卷 ❸存 ❹元悅等編 ❼(参考) 禪籍目錄

法炬陀羅尼經 ❶(日)Hō-ko da-ra-ni-kyō. (支)Fa-chü-to-lo-ni-ching. 大法炬陀羅尼經 ❷二十卷 ❸存、大正二一・六六一 No.1340、館宙九、卍二一・七—八、北325餘、南401餘、元325餘、明北416使、清416使、麗325餘、天325餘、指325餘、法325餘、至615尺、明南401使、No.422 ❹闍那崛多譯 ❻隋天嘉二—開皇二〇(A. D. 561—600) ❼大法炬陀羅尼經の下を見よ。

法語 ❶(日)Hō-go. 橫川法語、念佛法語 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第三一、眞宗聖教大全附錄、眞宗聖教全集、華岡文庫之内 ❹源信(天慶五—寛仁元 A. D. 942—1017) ❻橫川法語の下を見よ。

法語 ❶(日)Hō-go. ❹善如(正慶二—康應元 A. D. 1332—1389) ❼(参考) 淨土眞宗聖教目錄

法語 ❶(日)Hō-go. ❷一卷 ❸存 ❺大澤和上語 ❹(京學)

法語 ❶(日)Hō-go. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第六二 ❹僧鸞(享保八—天明三 A. D. 1723—1783)述 ❻眞宗本願の學匠、明教院僧鸞の法語である、内容は二十九箇條の問答形式よりなり、眞宗の安心と行儀が精細に述べられてある。 ❹寫本(龍大、一〇五一・三七) (荻生隆三)

法語一條 ❶(日) Hō-go-ichi-jō. ❹(帝國、一四五・六)

法語一條 ❶(日) Hō-go-ichi-jō. ❻淨土眞宗教典志第一に云く「和語燈四出之。標云、念佛大意」云々。 ❹寫本(龍大、一〇五一・三七) (荻生隆三)

法語一條 ❶(日) Hō-go-ichi-jō. ❻淨土眞宗教典志第一に云く「和語燈四出之。標爲ㄅ與ㄅ黑田聖人書」云々。

法語一條 ❶(日) Hō-go-ichi-jō. ❻淨土眞宗教典志第一に云く「和語燈四出之。標云、念佛大意」云々。

法語刊定目錄 ❶(日) Hō-go-kan-jō-mokū-roku. 淨土眞宗正依經論釋偈讃法語刊定目錄 ❷一卷 ❸存 ❹隱慧(—天明二 A. D. 1782) ❼(参考) 眞宗全書刊行豫定書目

法語雜錄 ❶(日)Hō-go-zatsu-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、研眞)、谷大、宗大・一二三九)

法語三人物語 ❶(日) Hō-go-sanin-mono-gatari. ❷二冊 ❸存 ❹三千風 ❹元祿九刊(京大、一・二六ヤ・七)寫本(龍大、研眞)

法語拾塵拔書 ❶(日) Hō-go-shō-jin-nuki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・三二二一)

法語集 ❶(日)Hō-go-shū. 代々先皇法語集 ❷一卷 ❸存、續群書類從第二八 ❻具名を代々先皇法語集と名づく。正親町

院曾儀宣宗、舜南明宗、陽光院百回日法花顯寫供養理趣三昧(導師皇英)、中和門院乘炬(元眞勸之)等先皇に表白せる法語三十有餘を錄せるものである。 (後藤大用)

法語十七條 ❶(日)Hō-go-jū-shichi-jō. ❻淨土眞宗教典志第一に云く「與和語燈二三心義同」云々。

法語心鑑 ❶(日)Hō-go-shin-kan. ❷一卷 ❸存 ❹寂靜記 ❺寛永二〇刊 ❹(立大、A一二・四五八、五〇二)(龍大、研佛、正大・一八四・二五)

法語二種 ❶(日)Hō-go-ni-shu. ❷一卷 ❸存 ❹曾禱(享保四—寶曆一二 A. D. 1719—1762) ❹寫本(龍大、一〇五一・四〇)

法語筆話 ❶(日) Hō-go-hitsu-wa. 圓光大師法語筆話 ❷一卷 ❸存 ❹福田稻誘述 ❺明治二一刊 ❹(龍大)

法語妄考錄 ❶(日) Hō-go-mō-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹松島青讓(文化三—明治一九 A. D. 1806—1886) ❹寫本(龍大、研眞)

法光寺所藏續又續藏經目錄

❶(日) Hō-kō-ji-sho-zō-zoku-zō-zoku-zō-kyō-mokū-roku. ❷一卷 ❸存 ❹藤井宜正(安政六—明治三六 A. D. 1859—1903)編 ❹寫本(龍大、二〇一一・一三)

法光大師御諡號 ❶(日)Hō-kō-dai-shi-go-shi-gō. ❸存、不忍叢書第九 ❹(帝國、一八三・三八四)

法綱儀 ❶(日)Hō-kō-gi. ❷二卷 ❸存、續群書類從第二六

❻本書は法務新任の時擧げらるゝ諸種の儀式作法を明示したものである。即ち新任法務覺吉書次第・綱所初參次第・法務奬次第・綱所朝拜次第等の項目に分けて其の一々の儀式作法を微細に記してある。

法興寺事蹟 ❶(日) Hō-kō-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❼(参考)・朝鮮佛教總書刊行豫定書目

法興寺本末寺法 ❶(日)Hō-kō-ji-hon-matsu-ji-hō. ❷一卷 ❸存 ❹李頤永 ❺大正元刊 ❹(谷大、餘大・三六五三)

法金剛院緣起 ❶(日) Hō-kon-gō-in-en-gi. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 大日本佛教全書綴刊豫定書目

法金剛院御塔供養習禮 ❶(日) Hō-kon-gō-in-on-tō-ku-yō-shū-rai. ❸存 續群書類從第二六

❻山城國花園の法金剛院御塔供養習禮の記錄。年代不明なり。奥に云く「以左大將實定本書字畫」と。

法金剛院由來略記 ❶(日)Hō-kon-gō-in-yu-rai-ryak-ki. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 大日本佛教全書綴刊豫定書目

法嚴經 ❶(日)Hō-gon-kyō. (支)Fa-yen-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、三寶紀第五、内典錄第二、開元錄第二、第一五、貞元錄第三、第二五

法差別 ❶(日)Hō-sha-betsu. ❷一帖 ❸存 ❺見利時代寫 ❹(寶龜院)

法差別二他用短釋 ❶(日)Hō-sha-betsu-ni-ta-yō-tan-shaku. ❷一卷 ❸存 ❹義志 ❹(興福寺)

法差別文集 ❶(日) Hō-sha-betsu-mon-jū. ❷一冊 ❸存 ❹英調 ❹(東大❖圖書館)

法差別文集 ❶(日) Hō-sha-betsu-mon-jū. ❷一卷 ❸存 ❹訓圓記 ❹寫本(谷大、餘T・九)

法山入寺法語 ❶(日) Hō-zan-nyū-ji-hō-go. ❷一冊 ❸存 ❹寫本(京大、印哲・三・Ⅱ三五)

法山壁書分類 ❶(日)Hō-zan-heki-sho-bun-rui. ❷五卷 ❸存 ❼(参考) 大日本佛教全書綴刊豫定書目

法志妻經 ❶(日) Hō-shi-sai-kyō. (支)Fa-chih-ch'i-ching. 長者法志妻經 ❷一卷 ❸存、大正一四・九四四 No.512、館宙七、卍一一・七、北336行、南322行、元312行、明北412信、清412信、麗312景、天317行、指479景、法402景、至450染、明南315貫、No.416 ❹失譯 ❻長者法志妻經の下を見よ。

法志女經 ❶(日) Hō-shi-nyo-kyō. (支)Fa-chih-nü-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第三、法經錄第一、仁壽錄第五、歸泰錄第五、開元錄第四、第一五、貞元錄第八、第二五

法師寶塔提婆略記 ❶(日)Hō-shi-hō-tō-dai-ba-ryak-ki. ❷一卷 ❸存 ❹實冊一三寫 ❹(立大、A一一・一三五)

法自相立敵 ❶(日) Hō-ji-sō-ri-tek. ❷一卷 ❸存 ❹寶來院草 ❹寫本(興福寺)

法事見聞 ❶(日)Hō-ji-ken-mon. ❷一冊 ❸存 ❹刊本(高大、寄・一・一八)

法事讃 ❶(日) Hō-ji-san. (支) Fa-shih-tsan. 淨土法事讃、安樂行道轉經願生淨土法事讃、轉經行道願往生淨土法事讃、安樂行道轉經願生淨土法事讃 ❷二卷 ❸存、大正四七・四二四 No.1979、卍續二乙・一・一、淨土宗全書第二、眞宗聖教大全卷中、眞宗聖典全書第四二、樂邊書第一、七眼聖教卷中 ❹唐善導(大業九—永隆二 A. D. 613—681)說 龍舒二、年六九寂)述

❻本書は觀念法門・往生禮讃・般舟讃等と共に所謂善導の五部九卷の中に入れられ、行儀分に屬するもので、上卷の具名は「轉經行道願往生淨土法事讃」といひ、下卷は「安樂行道轉經願生淨土法事讃」とあつて、上下その書名を異にするが、良忠師は之を解して「上卷明ニ行道ニ是前方便也、故題云ニ轉經行道ニ轉經之行道ニ。是依主釋ニ。下明ニ轉經ニ是其行體也。故云ニ行道轉經ニ行道之轉經亦依主釋也」と云ひ、又下卷に安樂の二字を冠らせることを斟酌して「答轉經爲正ニ故對ニ行因ニ舉ニ所求土ニ」と云つてゐる。又行道を解して「正是旋繞也、兼通ニ修行ニ」と云つてゐる、所謂轉經は四紙の阿彌陀經にして、それを細に分節して讃文を立て、稱ニ讃禮樂依正二報功德ニ、轉ニ經四紙ニ、散華供養而旋繞行道以つて願生淨土の業事を成辦せんとするを本書の趣旨としてゐる。

本書述作の年代に就ては、良忠は先づ觀經疏を製し、後ち行儀分を作られたりとの見解なるも、私見によれば全く之に反す。

行儀分は善導大師が西河の道綽禪師から承けたる念佛彌陀の淨業を、長安都城の内外の士女に欣淨厭穢の旨を弘められたる初期の纂集物にして、或る一つの期節に臨めて作られたるにあらず、隨時隨宜に作られたり、特に法事讃は寫ㇾ阿彌陀經數萬卷ㇾ以施ㇾ士女ㇾ の時に、機に順じ折に觸れて讃文を添へ、それを纂集せられたる者の如し、是れ上卷と下卷との具名が異り、擬心懺悔の云ひ臨はし方が、上卷と下卷と異つてあげられたる所以ならん。要するに本書の著作年代は、導師の壯年期にありて、中年期晩年期に非ずと觀るものである。

❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄、淨土眞宗教典志第一 ❹元祿六刊(京大、龍・一八ゆ・二)元祿七刊(谷大、宗大・八二三)享安朝時代寫(寶壽院)古寫本(龍大、別置)(今岡達雄)

法事讃飲啄 ❶(B) Hō-ji-san-in-taku. ❷二卷 ❸存 ❹眞敬 ❺刊本(龍大、二六八・一・五八)

法事讃芥撰鈔 ❶(B) Hō-ji-san-kai-sen-shō. ❷一帖(後缺) ❸存 ❹鎌倉時代寫 ❺(寶菩提院)

法事讃刊定記 ❶(B) Hō-ji-san-kan-tei-ki. ❷三卷(缺中下卷) ❸存、眞宗全書第一四 ❹慧雲(享保一五—天明二 A. D. 1730—1782) ❺明和九(A. D. 1771) ❻本書は導師の法事讃を解釋せるものにして眞宗本派の學匠慧雲の筆錄である。本來三卷あるうち、中下二卷は散佚して、たゞその初卷を存するのみである。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第二(秋生隆雄)

法事讃記見聞 ❶(B) Hō-ji-san-ki-kem-mon. 法事讃私記見聞、大澤見聞、良榮見聞、榮見聞 ❷四卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹良榮(康永元—應永三〇 A. D. 1342—1423)述 ❺法事讃私記見聞の下を見よ。 ❻刊本(正大、一五三一・一二二二、一五八)寫本(哲、ふ・七・中・二二二)

法事讃記 ❶(B) Hō-ji-san-ki. 法事讃私記 ❷三卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹良忠(正治元—弘安一〇 A. D. 1199—1287)述 ❺法事讃私記の下を見よ。 ❻(參考) 淨土正依經論書籍目錄 ❼刊本(正大、一五三一・三一八)(高大、寄・一・一八)

法事讃記 ❶(B) Hō-ji-san-ki. ❷二卷 ❸存 ❹得住(—明治七 A. D. 1874)述 ❺寫本(谷大、宗大・八五一)

法事讃奚亥記 ❶(B) Hō-ji-san-kigai-ki. ❷四卷或五卷 ❸存、眞宗大系第一二 ❹鳳嶺(寛延三—文化一三 A. D. 1750—1816)述 ❺善導の法事讃に就いて、七門を立て(一)明ㇾ製作來意ㇾ。(二)示ㇾ行法傳來ㇾ。(三)辨ㇾ依經宣趣ㇾ。(四)快ㇾ五種配屬ㇾ。(五)評ㇾ新古註解ㇾ。(六)釋ㇾ題號ㇾ。(七)入ㇾ文解釋の順序によつて講說してゐる。 ❻寫本(谷大、宗大・一二、四四七〇、四四八一)(關哲雄)

法事讃記私鈔 ❶(B) Hō-ji-san-ki-shō. ❷三卷 ❸澄圓述 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二

法事讃義 ❶(B) Hō-ji-san-gi. ❷二卷 ❸存 ❹南叡誠 ❺明治三二刊 ❻(龍大、一二二六・九九)

法事讃科文 ❶(B) Hō-ji-san-kewa-mon. ❷四卷 ❸存、科文集第一 ❹信樓(享保四—寶曆一二 A. D. 1719—1762) ❺寫本(谷大、宗大・一一四一)

法事讃見聞 ❶(B) Hō-ji-san-kem-mon. 法事讃私記見聞、行儀分私記見聞 ❷三卷或一卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹聖聰(貞治五—永享一二 A. D. 1366—1440)述 ❺法事讃私記見聞の下を見よ。 ❻(參考) 淨土正依經論書籍目錄、淨土眞宗教典志第三

法事讃撿要 ❶(B) Hō-ji-san-kenyō. 法事讃私記撿要 ❷七卷 ❸存 ❹了秀述 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第三

法事讃甄解 ❶(B) Hō-ji-san-kenrei. ❷七卷或二卷 ❸存、眞宗叢書第六 ❹信樓(享保四—寶曆一二 A. D. 1719—1762)述 ❺寶曆一二(A. D. 1762) ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二 ❽安永六刊 ❾(龍大、一二二六・一〇一)(谷大、宗大・三四九、四二五三、四六四五)(哲、ふ・七・右・二六)

法事讃甄解聽記 ❶(B) Hō-ji-san-kem-mei-chō-ki. ❷三冊 ❸存 ❹信餘(享保八—天明三 A. D. 1723—1783)述 ❺寫本(龍大、研眞)

法事讃顯宗記 ❶(B) Hō-ji-san-ken-shō-ki. 法事讃顯宗鈔 ❷六卷 ❸月溪親信(—享保元 A. D. 1716—)述 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二

法事讃顯宗鈔 ❶(B) Hō-ji-san-ken-shō-shō. 法事讃顯宗記 ❷六卷 ❸存 ❹信樓(享保四—寶曆一二 A. D. 1719—1762)述 ❺寫本(龍大、一二二六・一〇七)

法事讃私記 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki. 法事讃記 ❷三卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹良忠(正治元—弘安一〇 A. D. 1199—1287)述 ❻本書は又法事讃記とも呼ばれ、觀念法門・往生禮讃・般舟讃の記と合して行儀分記八

卷と云ひ、又に觀經疏例通記と合して五部九卷私記二十三卷と稱稱される。その內容は善導大師の教旨の大宗たる五部九卷(觀經疏四卷、法事讃二卷、般舟讃一卷、往生禮讃一卷、般舟讃一卷)中の行儀分の隨一たる法事讃を彌西淨の見解を以て註釋せるもので、心行具足、稱名正定業、凡夫正機等の要點を問答決擇し、多分に西山流等に對抗して述作されたる事情を推測し得るも而も著者はその說博なる識見を以て、極めて懇切に訓詁的註釋を施してゐるから、宗の內外を問はず法事讃研究の必讀書と云はねばならぬ。

本書は建治二年記主上人上洛以後鎌倉問講中の述作と推測さるゝもので、五部九卷記二十三卷として一具に傳承され、古くから板行された。寶永六年良仰校本、享保十七年增上寺本共の他町版があり遍く世に流布してゐる。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第三 ❺寶永六刊 ❻(正大、一五三一・九〇、九四—九五)(谷大、宗大・七一九、八〇〇)(龍大、二六八一・五九、二〇三・一七)(哲、ふ・六・右・三一)(紀氏隆眞)

法事讃私記冠註 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-kwan-chū. ❷存、淨土宗全書第四 ❸良忠作法事讃私記を寶永六年良仰が校正板行した時、古本を校合匡正し、傍註を欄外頭註として出し、冠註は別に纏めて卷尾に別出したものを淨土宗全書刊行の際別本として刊行されたものである。冠註の原作者は素より不明ではあるが、法事讃私記中の經律論所引の典籍、古本、流說、言義等を明示したもので法事讃私記研究上の好參考書である。(紀氏隆眞)

法事讃私記見聞 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-kem-mon. 良榮見聞、大澤見聞、榮見聞、法事讃記見聞 ❷三卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹良榮(康永元—應永三〇 A. D. 1342—1423)述 ❺本書は、記主良忠門下の一派である名越流の末流に屬する所謂大澤流の祖と稱される下野圓通寺の良榮の作である。內容は他の行儀分と同じく、大體名越を祖述してゐる。書中先師曰くとして擧示せる所を見るに、所謂彌西所流に異解する所が往々ある。聖聰は本書に對抗して私記見聞を述作し以て彌西正義の顯彰に努めしものを彌西見聞と云ふ。本書を講述して作者は吉水相傳の趣意は此に在りとの見解を示せるものである。故に本書は隱文加註の體裁であるが、その中に、念佛行者としての信心增上のために淨土の法事を修する趣を示してゐる。心行の具足せる行法を高調し、更に一宗教旨上に於ける心行、正助、正機、淨土、本願、念佛等の要點を初めとして本典並に私記の調詰的註釋を施して可成詳細を極めてゐる、法事讃並に私記研究の參考として、聖聰見聞と共に重要なる資であると共に名越研究の一文獻である。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第三 ❺享保一七刊 ❻(正大、一五三一・一二二、一二七、一三一)(谷大、宗大・四六四九)(龍大、二〇三・二七) (森本倉順)

法事讃私記見聞 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-kem-mon. 法事讃見聞、行儀分私記見聞 ❷三卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹聖聰(貞治五—永享一二 A. D. 1366—1440)述 ❺法事讃私記の下を見よ。 ❻(參考) 淨土正依經論書籍目錄、淨土眞宗教典志第三

法事讃私記撿要 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-kenyō. 法事讃私記撿要 ❷七卷 ❸存 ❹了秀述 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第三

法事讃私記撿要 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-kenyō-shō. 法事讃撿要 ❷七卷 ❸存 ❹了秀述 ❺寶永四刊(龍大、二六八一・六一)(谷大、宗大・二三〇四)(哲、ふ・六・中・二三)淨厳院藏版(立大、A三〇・一二三)

法事讃私記私鈔 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-shi-shō. ❷二卷 ❸存、淨土宗全書第四 ❹加祐(—宣文元 A. D. 1621—)述 ❺本書は善導の法事讃を然阿良忠の私記三卷を以て註釋せられしが、加祐は私記の意を疏通せんが爲に本書を作る。著者の詳傳は未だ得ず。般舟讃私記鈔の奥に下の如き記述あり。右行儀分私記鈔一部八卷、圓子所見鈔錄之。舉、于時寛文元辰曆臘月初八、南紀藤代山僧加祐、於ㇾ宇膝下、誌ㇾ之」と。又科註三經釋に「明曆四年三月吉日中好小左衛門板行」とあるが故に、著者は明曆寛文の頃、紀州海草郡藤白村專修寺(藤を守る、小庵)に在りしか者の如く、科註三部經十卷、行儀分鈔八卷撰述の事あるが爲めに、中本寺永正寺へ晉董の事ありて、敬定撰の蓮門經藏錄に、往生禮讃拾遺鈔二卷永正寺加祐撰と錄する者の如し。行儀分鈔は多言するを要せざるも、科註三部經十卷は、觀徹撰三部經合讃の參考となり、之れを修正して合讃が成ると觀ぜらる。

❼寛文四刊 ❽(正大、一五三一・一三五、一三九)(谷大、宗大・一〇八六)(哲、ふ・七・中・三) (今岡達雄)

法事讃私記祕鈔 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-hi-shō. 法事讃祕鈔 ❷三卷 ❸存 ❹行觀(愛媛・仁治二—正中二 A. D. 1241—1325) ❺寫本(龍大、二六八一・六四)

法事讃私聚鈔 ❶(B) Hō-ji-san-shi-ki-shū. ❷五卷 ❸存 ❹智圓(—建武曆應頃 A. D. 1334—1341)述 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第三

法事讃積學要義鈔 ❶(B) Hō-ji-san-shaku-gaku-yō-gi-shō. ❷二卷 ❸存、大日本佛教全書第五六、西山全書第四 ❹實信(淨生)(永安二—正元元 A. D. 1172—1332)述 ❻實信は最初法然に後證空に四十餘年師事し、其間善導の五部九卷聞書積學鈔と稱す

るもの數十卷ありと傳ふるも、今は此の二卷を存するのみ。而して內容は善導教旨を發揮したるものにして、例せば本疏の轉經行道法事讚の題號を解して曰く、此文は讚誦正行也讚誦を以て行道すべし、行道とは佛を迹る也佛を愛する也、彼此三業不相捨離と佛に離れざる意を顯はして現度と佛を迹り奉る也、法事とは、世事を捨て佛事に成り證る意也、讚とは經所說の名號を讚歎する也等とよく證空の思想を說述せるのみならず、本山義の論議鈔、希聞鈔等は多く此鈔の精神に依りたるものとす。

❼〔參考〕 淨土眞宗教典志第三 ❺寬文一一刊 ❹〔谷大、宗大・一三四六〕〔正大、一五三一・一五一〕〔立大、A三〇・一三四〕〔哲、ふ・五・左・一四〕 ❽禪林寺 （石黑觀道）

法事讚接讚錄 ❶(B) Hō-ji-zan-setsu-san-roku. ❷三卷 ❸存 ❹大淨撰 ❹寫本〔谷大、宗大・二九八六〕

法事讚鈔 ❶(B) Hō-ji-san-shō. ❷二卷〔卷上缺〕 ❸觀道曇堅述 ❼〔參考〕 淨土眞宗教典志第三

法事讚隨聞記 ❶(B) Hō-ji-san-zui-mon-ki. 法事讚講錄 ❷六卷 ❸存 ❹曾我、享保四—寶曆一二 A. D. 1718—1762) 述 ❺寶曆一二〔A. D. 1762〕 ❼〔參考〕 淨土眞宗教典志第二 ❹寫本〔龍大、一二二六・一〇九、一二〇〕〔谷大、宗大・一六四七〕

法事讚叢林 ❶(B) Hō-ji-san-sō-rin. ❷一卷 ❸存 ❹惠空〔正保元—享保六 A. D. 1644—1721〕述 ❼〔參考〕 淨土眞宗教典志第二

法事讚聽記 ❶(B) Hō-ji-san-chō-ki. ❷三卷 ❸存 ❹慶恩〔天明二—嘉永元 A. D. 1782—1848〕述 ❹寫本〔龍大、一二二六・一一一〕

法事讚祕鈔 ❶(B) Hō-ji-san-hi-shō. 法事讚私記祕鈔 ❷二卷 ❸存 ❹行觀豐穩〔仁治二—正中二 A. D. 1241—1325〕述 ❼〔參考〕 淨土眞宗教典志第三 ❺寶永二寫 ❹〔谷大、宗大・一六四八〕

法事の茶子 ❶(B) Hō-ji-no-cha-shi. ❷一卷 ❸存 ❹風外本高〔安永八—弘化四 A. D. 1779—1847〕 ❹刊本〔駒大〕

法事法則集 ❶(B) Hō-ji-hos-soku-shū. ❷一卷 ❸存 ❺延寶七刊 ❹〔龍大、一〇六・四〇〕

法璽印禪師語錄 ❶(B) Hō-ji-in-zen-ji-gyo-roku. (支)Fa-hsi-yin-ch'an-shih-yü-lu. ❷二卷 ❸存 ❹明法璽印語、性圓等編 ❺康熙二五刊 ❹〔駒大〕

法社經 ❶(B) Hō-sha-kyō. (支)Fa-she-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼〔參考〕 出三藏記第四、開元錄第二、貞元錄第四

法社經 ❶(B) Hō-sha-kyō. (支)Fa-she-ching. 業報輪轉償債引道地獄慈善莊嚴法社經 ❷一卷 ❹疑僞經。 ❼〔參考〕 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八、奈良朝現在一切經疏目錄1772

法守親王曼陀羅供次第 ❶(B) Hō-shu-shinnō-o-man-da-ra-ku-shi-dai. 院御堂供奉儀 ❸存、拔群書類從第二六下 ❹法守〔延慶元—明德二 A. D. 1308—1391〕 ❺本書は仁和寺第十五世法守親王が、北院御室即ち守覺法親王〔久安六—建仁二 A. D. 1150—1202〕の御記を初め、代々の御記御口傳などより、曼荼羅供の次第—道場の莊嚴、入堂の儀式、堂內の作法等—に關して抄記されたものである。奥書に依つて眞治二年八月二十七日の撰であることが知られる。法守僧諦は寧永、禪阿院又は仁和院などと號し、後伏見院の第三皇子として延慶元年九月十四日に生る。元亨元年寬性を戒師として出家し、正中三年禪助より傳法灌頂を受く。嘉曆二年寺務に補し、同十二月二品に直叙す。建武三年法勝寺々務職に任じ、同四年綱所を賜ひ、同日六勝寺檢校に補す。永和五年一品に叙し、明德二年九月十九日壽八十四を以て寂してゐる。 （不破節雄）

法受塵經 ❶(B) Hō-ju-jin-kyō. (支)Fa-shou-chen-ching. ❷一卷 ❸存、大正一七・七三六 No. 792、續宿八、卍一四・一〇、北517無、南251無、元265無、明北265歟、清265歟、麗252甚、天318無、指1565甚、法265甚、至1055卑、明南701歟、Nj. 656 ❹安世高譯 ❺後漢建和二—建寧三〔A. D. 148—170〕 ❻本經は衆生煩惱の爲めに道を失ふを戒めたものである。この種の教說は佛教が始めて支那に傳來せし當時、先づ以て何人に對してもなされたものであつたらしい。譯者も安世高と云へば當時の傳敎者の一人であり、最もよく當時の敎團の精神にして力强き面影を代表する經典の一たるを失はぬ。

❼〔參考〕 出三藏記第二、三寶紀第四、內典錄第一、譯經圖紀第二、開元錄第一、貞元錄第一、第二 （泉芳璟）

法受塵經 ❶(B) Hō-ju-jin-kyō. 國譯法受塵經 ❷一卷 ❸存、國譯一切經經集部第一二 ❹泉芳璟譯

法壽養眞抄 ❶(B) Hō-ju-yō-shin-shō. ❷二冊 ❸存 ❹法操集 ❹刊本〔高大、一・三八〕

法舟濟禪師剩語 ❶(B) Hō-shū-sai-zen-ji-jō-go. (支)Fa-chou-chi-ch'an-shih-sheng-yü. 天寧法舟濟禪師剩語 ❷一卷 ❸存 ❹明法舟道濟語、如潤等編 ❺天啓五刊 ❹〔駒大〕

法宗原 ❶(B) Hō-shū gen. (支)Fa-tsung-yüan. ❷二卷 ❸存、卍續一・八三・四 ❹唐普光〔—麟德元 A. D. 664—〕述 ❻本書には大乘光法師撰とあるから普光ではないといふ說もあるが、先づ普光の著書と認めて差支ないと思はる。一說には神清の撰だといふが、其れも確說がある譯ではない。說一切有部に依るに、諸法の宗原に略して五種ありとして、五位の諸法を連ね、七十五法を記して、以上總じて七十五法あり、諸法の體となすと結んで居る。七十五法といふ名目の起原は多分此書ならんか、俱舍論では七十五法といふ名目はまだ出て居らぬ。

本書は大要二科に分ち、第一は略標釋で、此下では七十五法を簡單に解釋し、第二は諸門分別、之を更に二科に分て、其一は蘊

蘊界の三科を明し、其二は百門を以て七十五法を分別するといふのである。二門分別に十七種、三門分別に二十種、之にて本卷を終り、末卷には四門分別二十二種、五門分別十五種、六門分別五種、七門分別五種、八門分別五種、九門分別五種、十門分別六種を出して居る。三門分別五種の下には三性とか三界とかを出し、四門分別の下には四諦、四食などを出して、之に說明を與へて居るから、丁度有一阿含の樣な體裁であつて、一種の辭典とも見られる誠に便利な書物である。俱舍入門の書として古來よく讀まれて居る。法宗原の原の字を源とするのは誤りである。

❼〔注釋〕 周海の講演三卷、靈明の私記四卷、袋鼎の覆瓿抄三卷、龍謙の私記二卷〔參考〕 諸宗章疏錄第二 ❺延寶六刊 ❹〔谷大、餘大・一四九一〕〔龍大、二六二二・四五、研佛×正大、一一九〇・一二三—一二四、一九〇—一九一〕〔京大、藏・二四ふ・一八〕〔高大、寄・一・二四×哲、む・二・中・一六〕 （舟橋水哉）

法宗原聽書 ❶(B) Hō-shū-gen-kiki-gaki. ❷二卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一三二〕

法宗原觀瀾鈔 ❶(B) Hō-shū-gen-kan-ran-shō. ❷三卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一九五〕

法宗原玄談 ❶(B) Hō-shū-gen-gen-dan. ❷一卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一九三〕

法宗原講演 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-en. ❷三卷 ❸存 ❹周海述

法宗原講義 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹海老原靜親〔—明治三四 A. D. 1901〕述 ❺明治二三〔A. D. 1890〕 ❹寫本〔谷大、餘大・一四九二〕

法宗原講要 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-yō. ❷三卷 ❸存 ❹觀山 ❺明治七寫 ❹〔谷大、餘大・三九一八〕

法宗原講錄 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一三三〕

法宗原講錄 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本〔谷大、餘大・一〕

法宗原講錄 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-roku. ❷五冊 ❸存 ❹寫本〔龍大、二六二二・四六〕

法宗原私記 ❶(B) Hō-shū-gen-shi-ki. ❷四卷 ❸存 ❹靈明述

法宗原私記 ❶(B) Hō-shū-gen-shi-ki. ❷三卷或二卷或一卷 ❸存 ❹龍謙述 ❹寫本〔正大、一一九〇・一二九—一三一〕

法宗原事義 ❶(B) Hō-shū-gen-ji-gi. ❷二卷 ❸存 ❹長空 ❹寫本〔龍大〕

法宗原節解 ❶(B) Hō-shū-gen-setsu-ge. ❷一冊 ❺寶曆一一寫 ❹〔高大、寄・一・二四〕

法宗原無犢記 ❶(B) Hō-shū-gen-mu-mu-chi-ki. ❷二卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一九四〕

法宗原略解 ❶(B) Hō-shū-gen-ryaku-kai. ❷二卷 ❸存 ❹周海述

法宗原略解 ❶(B) Hō-shū-gen-ryaku-kai. ❷一卷 ❸存 ❹周海述

法宗原略解 ❶(B) Hō-shū-gen-ryaku-kai. ❷一卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一三二〕

法宗原講義 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹海老原靜親〔—明治三四 A. D. 1901〕述 ❺明治二三〔A. D. 1890〕 ❹寫本〔谷大、餘大・一四九二〕

法宗原講錄 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-roku. ❷五冊 ❸存 ❹寫本〔龍大、二六二二・四六〕

法宗原私記 ❶(B) Hō-shū-gen-shi-ki. ❷四卷 ❸存 ❹靈明述

法宗原私記 ❶(B) Hō-shū-gen-shi-ki. ❷三卷或二卷或一卷 ❸存 ❹龍謙述 ❹寫本〔正大、一一九〇・一二九—一三一〕

法宗原事義 ❶(B) Hō-shū-gen-ji-gi. ❷二卷 ❸存 ❹長空 ❹寫本〔龍大〕

法宗原節解 ❶(B) Hō-shū-gen-setsu-ge. ❷一冊 ❺寶曆一一寫 ❹〔高大、寄・一・二四〕

法宗原無犢記 ❶(B) Hō-shū-gen-mu-mu-chi-ki. ❷二卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一一九〇・一九四〕

法宗原講演 ❶(B) Hō-shū-gen-kō-en. ❷二卷 ❸存 ❹寫本〔龍大、二六二二・四七—四八〕

法宗法師佛性法師諍 ❶(B) Hō-shū-hō-shi-bus-shō-hō-si-jō. ❷一卷 ❹寂澄〔神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822〕 ❼〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目

法州和尚行業記 ❶(B) Hō-shū-o-shō-gō-gyō-ki. ❷三卷 ❸存、大日比三師傳之內 ❹杜多眞暢編 ❹明治一三刊〔帝國、八・一五六〕明治一四刊〔京大、一・二一ゐ・二二—二三〕〔龍大、研史〕明治四五刊〔龍大、研史〕

法住記 ❶(B) Hō-ju-ki. (支)Fa-chu-chi. 大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記、大阿羅漢說法住記 ❷一卷 ❸存、大正四九・一二No. 2029、續藏八、卍二七・二、北1046畫、南1059畫、元1055畫、明北1463法、清1463法、麗1053畫、天1045畫、法1055畫、至1463相、明南1392甚、Nj. 1466 ❹玄奘〔仁壽二—麟德元 A. D. 602—664〕譯 ❺唐永徽五〔A. D. 654〕 ❻大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記の下を見よ。

法住記及所記阿羅漢考 ❶(B) Hō-jū-ki-narabi-sho-ki-a-ra-kan-kō. (支)Fa-chu-chi ku wei-chi-a-lo-han-k'ao. ❷一卷 ❸存、何志學會叢書 ❹栗栖(Lévi)博問納(Chavannes)著、馬承鈞譯 ❻一、難提蜜多羅所說法住記疏釋。二、十六阿羅漢之起源。三、宗頂虛說嘯悄園故事考證。四、十八阿羅漢之變遷。 ❺民國一九刊 ❹上海商務印書館 （橋部文龍）

法住經 ❶(B) Hō-jū-kyō. (支)Fa-chu-ching. 佛臨涅槃記法住經、記法住經、無量壽供養儀軌 ❷一卷・❸存、大正一二・一一二No. 389、續辰一〇、卍八・一〇、北502歟、南316歟、元510歟、明北119食、清119食、麗450甚、天311歟、指465甚、法472甚、至441無、明南508歟、Nj. 1931 ❹玄奘〔仁壽二—麟德元 A. D. 602—664〕譯 ❺唐永徽三〔A. D. 652〕 ❻佛臨涅槃記法住經の下を見よ。

法住寺事蹟 ❶(B) Hō-jū-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❼〔參考〕 朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

法住寺殿鎭日記 ❶(B) Hō-jū-ji-den-chin-nik-ki. ❺臨濟〔大治五—建久三 A. D. 1130—1192〕 ❼〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目

法住寺本末寺法 ❶(B) Hō-jū-ji-hon-matsu-ji-hō. ❷一卷 ❸存 ❹徐霞河 ❺大正元刊 ❹〔谷大、餘大・三六五〇〕

法住僧正撰諸贊要集 ❶(B) Hō-jū-sō-jō-sen-sho-san-yō-shū. ❷一卷 ❸存 ❹寫本〔正大、一四二・九六〕

法住僧正傳 ❶(B) Hō-jū-sō-jō-den. ❷一卷 ❸存 ❼〔參考〕 大日本佛敎全書續刊豫定書目

法集經 ❶(B) Hō-jū-kyō. (支)Fa-chi-ching. (梵)Dharma-saṅgīti-sūtra (藏傳)(藏) Chos yaṅ-dag-par sdud-pa zhes-bya-ba theg-pa chen-po-hi mdo. ❷六卷 ❸存、大正一七・六〇九No. 761、續字七、卍一一・一〇、北454歟、南

二17欽、元二11欽、明北1232經、清1232經、麗1355藏、天二11欽、指3275藏、法3252梵、至400藏、明南1232經、N. 424　❹菩提流支譯

❺元魏延昌四(A. D. 515)

❻(類本)　梵本未詳。西蔵譯(大谷甘珠爾錄No. 984)は類もよく流支譯と一致し、尾題には聖法集經(十萬偈)中、無所發品第十二と記し、寶積や大集の如き大經としての法集經の一部であつたらしいことを傳へてゐる。

(内容)　(一)佛・虚空界法界差別住處の最勝樓閣妙寶臺上に於て入一切修行永第法門(見賢聖、信心、善法欲心、不顚心、義心、菩提心、十波羅蜜、出家、染衣、乞食、住阿蘭若、處寂坐、聞法受持、念方便、意方便、堅固行、樂說方便、陸界入方便、諦方便、念處方便、舍摩他方便、毘婆舍那方便、如說修行、行内思惟、降伏心、不恃身、恭敬三寶、善巧所作、不毀他智、入證細因緣集智、三寶中教化衆生、一切處不壞威儀誘諸衆生平等說法、禪法中教化、示正道、與正念、與自淨法、多聞教化衆生)を說く、會中に無所發、奮迅慧の二菩薩あり、別の樓閣寶臺上にて、奮迅慧の問により無所發は佛の加被力を承けつゝ、勝妙廣大なる法集法門(云何が菩薩は諸佛如來の生、誕寶身、爲他因緣故成、誕寶常住、大般涅槃、行、譬喩相應、殺雞佛、唯依言辭說法、與義、與所對法、能說與者(以上卷一)法飾義、與法飾相應譬喩、不共住法、應化事、諸善根勝妙果報、無漏善根得勝妙果報を知るべきや、その無漏勝妙果報即ち細分して六通、三明、八解脫、八勝處(以上卷二)十一切入、十自在、十論、九次第定三摩提提、十力、十智とは何ぞといふことの說明)を說く、更に奮迅慧と無所發は問答して諸波羅蜜相應法集、菩提、一切法與、實諦法集(以上卷三)十種心念處智を說き、(二)次いで二大士は佛處に詣り、我等二人說く所のこの法集は佛意に契ふや否やを尋ねる。佛はよく我意に順ぜりと證言したまふ。舍利弗が無所發に無所發と名づくる所以を說き、却つて反問せられ隨喜する。無所發、佛に問ひ奉つて菩薩可取能取の法、如實修行不放逸の義を明かにする。(三)次に舍利佛(以上卷四)目連、富樓那、迦旃延、大迦葉、須菩提、阿那律、羅睺羅、優婆離、阿難の諸聲聞文々起つて各自己獨特の領解に出づる法集を說いて、佛よりそれらの所說が佛意に隨順せるの印可を受ける。(四)又、彌勒、見者愛樂、善日、善生、大導師、光明輪、解脫月(以上卷五)大海慧、觀世音、堅意、善護、虚空、文殊師利の各菩薩が順次に各々勝妙法集を說く。(五)佛、文殊師利に此の法門の餘他の法門に勝れたることを宣べ勸信する。無所發、希有の心を生じて偈讃あり、(六)佛、無所發の未來世十二劫をすぎて正覺を成ずべきことを授記し給ふ。須菩提之を隨喜し、更に數番の問答をなす、時に會中の菩思惟天子、佛に菩提の根本行處を問ひ解する所あり。(七)佛は一切大衆に向つて誰かよく此の法門を未來世に護持するぞと請りたまふや、無所發菩薩は我こそ護持せんと誓ひ、世尊の讃嘆ありて經終る。

❼(參考)　三寶紀第九、内典錄第四、譯經圖紀第四、開元錄第六、貞元錄第九　(根都文修)

法集別行錄節要私記　❶(日)Hō-jū-betsu-gyō-roku-setsu-yō-shi-ki.　❷一卷　❸存　❹朝鮮者照智訥(正隆三―大安二、A. D. 1158―1210)　❺(參考)　譯語目錄

法集名數經　❶(日)Hō-jū-myō-jū-kyō. (支)Fa-chi-ming-shu-ching. (梵)Dharmasaṅgraha (Ed. by K. Kasahara)　❷一卷　❸存、大正一七・六六〇No. 764、縮第五、卍一五・三、北1122鱗、南1147鱗、元1141鱗、明北251則、清251則、麗1131壁、天1122鱗、法1244高、至1301公、明南257忠、N. 242　❹施護譯　❺宋太平興國五以後(A. D. 980―)

❻初めに歸命頂禮の歸敬句があり、次に順に別に定まれる規準もなく、三寶・三乘以下六欲天・色界十七天に至る五十一種(三十七道品を細分すれば五十一種)の法數を列擧せる經で、經といふも、西土の賢聖の手に成つたものなるべく、譯經年代から見て、その成立は餘り古くないであらう。梵本は我が笠原研壽師によつて、西紀一八八五年、英國に於て校訂刊行せられた。(江田俊雄)

法集要頌經　❶(日)Hō-jū-yō-jū-kyō. (支)Fa-chi-yao-sung-ching.　❷四卷　❸存、大正四・七七七No. 213、縮疑六、卍二七・二、北1124槐、南1123槐、元1134槐、明北1122鱗、清1122鱗、麗1195書、天1121槐、法1212高、至1252公、明南1144鱗、N. 1429　❹法救集、天息災(―成平三A. D. 1000)譯　❺宋太平興國五―成平三(A. D. 980―1000)

❻本經は簡結なる偈頌の形に、佛教の要諦を經めたもので、本經の名もこれに基くものである。本經は九分教、十二部經といはれる釋尊一代の說法の形式の分類の中の法句に攝せられるもので、同種のものに、巴利文の法句の外に吳の維祇難譯の法句經二卷、西晉法炬・法立共譯の法句譬喩經四卷、竺佛念譯の出曜經三十卷が存する。

本經は有爲品・愛欲品・食品・放逸品・愛樂品・持戒品・善行品・語言品・業品・正信品・沙門品・正道品・利養品・慈家品・憶念品・淸淨品・水喩品・華喩品・馬喩品・眠志品・如來品・多聞品・己我品・廣演品・善友品・圓寂品・觀務品・離陰品・相應品・護心品・苦劫品・梵志品の三十二品四卷より成り、その各品の内容は品名の示すところの如くである。本經の偈頌は紙れ出曜經中の偈頌を文辭の上に修飾したもので、出曜經は三十四品より成るが、その冒放逸品第四、放逸品第五の二品は、本經の上には放逸品第四の一品に收められ、出曜經の雙要品第三十、樂品第三十一の二品は、本經にあつては、相應品第二十九の一品となつてゐる。又出曜經にあつてはその偈頌は四字一句、五字一句と錯雜してゐるが、本經は五字一句とするところはその異るところである。(林五邦)

法術靈要門經　❶(日)Hō-jutsu-rei-yō-mon-kyō. (支)Fa-shu-ling-yao-men-ching. 陀羅尼雜集第三中阿含經抄　❹鳥鉢瑟摩譯

門、緩跡金剛說法術靈要門、緩跡金剛說神通法術、緩跡金剛靈要門、緩跡金剛說神通法　❷一卷　❸存、大正二一・一五八No. 1182、館問一三、卍一五・九、北1345廻、南1347伊、元1334伊、明北251浩、清251浩、麗1291魂、天1237伊、法1135紳、明南251髮、N. 166　❹唐阿質達嚫(―開元二〇A. D. 732―)譯　❺緩跡金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門の下を見よ。　❻寫本(帝國、八二一・一七一)

法助語　❶(日)Hō-jo-go.　❷二卷　❸覺順作　❻淨土眞宗教典志に云く「就ニ横川師平等院央食業歌ニ設ニ多義ニ評ニ之。明和六年粹」云々。

法性一心圖　❶(日)Hō-shō-ichi-shin-zu. (支)Fa-hsing-i-hsin-tu.　❷一卷　❼(參考)　東域傳燈目錄卷下、入唐新求聖教目錄

法性私記　❶(日)Hō-shō-shi-ki.　❸寧宣(貞觀八―天慶三A. D. 866―940)記　❼(參考)　密乘撰述書目

法性寺戒灌私草案　❶(日)Hō-shō-ji-kai-kwan-shi-sō-an.　❷一卷　❻存　❹廣海集

法性宗體　❶(日)Hō-shō-shū-tai.　❷三卷　❹寂後(神護景雲元―弘仁一三A. D. 767―822)　❼(參考)　本朝台祖撰述害部書目

法性章　❶(日)Hō-shō-shō. (支)Fa-hsing-chang.　❷一卷　❻傳教大師將來越州錄に云く、加吉神景例鑑一卷十紙」云々。

法性大日義　❶(日)Hō-shō-dai-nichi-gi.　❷一冊　❻存　❹妙璃(元祿九―明和元A. D. 1696―1764)集　❺元文六頃

❹京大、日大未・四四六)(官、け・四・右・一七)(音大、餘大・一九一六)(龍大、二六六二・五一)(高大、寄・一・四八)

法性傳　❶(日)Hō-shō-den.　❼(參考)　本朝台祖撰述害部書目

法性塔圖　❶(日)Hō-shō-tō-zu.　❷一紙　❻存　❹德川時代寫　❹寶善提院)

法性別記　❶(日)Hō-shō-bek-ki.　❷二卷或四卷　❼(參考)　本朝台祖撰述害部書目、密乘撰述書目

法性房記　❶(日)Hō-shō-bō-ki.　❷三卷　❼(參考)　本朝台祖撰述害部書目

法性論　❶(日)Hō-shō-ron. (支)Fa-hsing-lun.　❷一卷　❹陰慧遠(普通四―開皇一二A. D. 523―592)述　❼(參考)　東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法昌倚遇禪師語要　❶(日)Hō-shō-ki-gū-zen-ji-go-yō. (支)Fa-ch'ang-i-yü-ch'an-shih-yü-yao.　❻存、卍續二・二三・五續古尊宿要語第二　❹宋法昌倚遇語

❻北禪智賢禪師の法嗣、雲門五世洪州分寧(江西南昌府寧州)法昌禪院倚遇禪師の開堂語要、上堂小參語、勘辯並に偈頌を其の法嗣宗密和尚が編錄したものである。宋崇寧四年正月二十二日(A. D. 1105)南州(四川重慶府南川縣)の徐侍(字師川)居士の序及び聊堂組心禪師の法嗣である靈源惟清禪師の跋を附したもので、偈頌の末尾に師遷化前一日說頌與徐龍圖の一首を收め「今年七十七。出行須擇日。昨夜問龜哥。報道明朝晋。」とあるから法昌住院より以後の晚年の語要を筆錄したものであらう。

黃龍慧南三世の靈源惟清禪師が倚遇禪師を評して「達法性地。寫性修行。而常以法眼視樂者。予見老法昌其人也。」とあるのは、語錄中に收められた黃龍慧南と是の雲門下五世の法昌倚遇との唱和並に黃龍を迎へての上堂語と共に倚遇の提撕の手段と其の家風を知ることが出來る。

小參語に「大凡參學兄弟。道眼未明。心境未安。入一叢林。出一保社。須當親近良朋講究。二六時中。將佛法爲事。直須決擇。命心眼精明。」と云ひ「法昌與座說話。如眼眶肢蹄相似。一期苦口。他時大有得力處。所以古者道。假使百千劫。所作業不忘。因緣會遇時。果報還自受。無人替代個。各自努力。」と云ふ。誠に心親切と謂ふべきである。(大久保堅璃)

法莊嚴經　❶(日)Hō-shō-gon-kyō. (支)Fa-chuang-yen-ching. (巴)M. 20 Dhammacetiya S.　❸存、中阿含第五九(大正一・七九五No. 26)(21)

法莊嚴經　❶(日)Hō-shō-gon-kyō. (支)Fa-chuang-yen-ching.　❷四卷　❸存、現代宣譯根本佛教聖典叢書第三中阿含經抄　❹鳥鉢瑟摩譯

法勝阿毘曇　❶(日)Hō-shō-a-bi-don. (支)Fa-sheng-a-pi-t'an. 阿毘曇心論經、法勝阿毘曇心論經、法勝阿毘曇心論、法勝毘曇　❷六卷　❸存、大正二八・八三三No. 1551、縮冬一一―一二、卍二五・七―八、北923都、南977都、元923都、明北1257納、清1257納、麗955日、天923都、指923自、法950自、至1400侈、明南1415承、N. 1234　❹法勝論、優婆扇多經、都遠提耶舍(天監一六―開皇九A. D. 517―589)譯　❻高齊阿浩三(A. D. 563)　❻阿毘曇心論經の下を見よ。

法勝阿毘曇心論　❶(日)Hō-shō-a-bi-don-shin-ron. (支)Fa-sheng-a-pi-t'an-hsin-lun. 阿毘曇心論、阿毘曇心、法勝毘曇　❷四卷　❸存、大正二八・八〇九No. 1550、縮冬一一、卍二五・五、北923都、南976都、元923都、明北1256鱗、清1256鱗、麗955日、天923都、指923自、法949自、至1402侈、明南1414承、N. 1235　❹法勝論、僧伽提婆、慧遠(成和九―義熙一二A. D. 384―416)共譯　❻東晉太元一六(A. D. 391)或太元元(A. D. 376)　❻阿毘曇心論の下を見よ。

法勝阿毘曇心論　❶(日)Hō-shō-a-bi-don-shin-ron. (支)Fa-sheng-a-pi-t'an-hsin-lun. 阿毘曇心論經、法勝阿毘曇心論經、法勝阿毘曇、法勝毘曇　❷六卷　❸存　大正二八・八三三No. 1551、縮冬一一―一二、卍二五・七―八、北923都、南977都、元923都、明北1257納、清1257納、麗955日、

天955都、指952自、法950自、至1400修、明南1415永、Nj. 1324 ❹法勝論、優婆扇多釋、那連提耶舎（天監一六—開皇九 A. D. 517—589）譯 ❺高齊河清二（A. D. 563）

❻阿毘曇心論經の下を見よ。

法勝阿毘曇心論經 ❶(日) Hos-shō-a-bi-don-shin-ron-kyō.(支)Fa-shêng-p'i-t'an-hsin-lun-ching. 阿毘曇心論經、法勝阿毘曇心論、法勝阿毘曇、法勝毘曇 ❷六卷 ❸存、大正二八・八三三 Nj. 1521、鎌冬一一—一二、卍二五・七—八、北952都、南977都、元973都、明北1237納、清1237納、麗955自、天955都、指952自、法950自、至1400修、明南1415永、Nj. 1324 ❹法勝論、優婆扇多釋、那連提耶舎（天監一六—開皇九 A. D. 517—589）譯 ❺高齊河清二（A. D. 563）

❻阿毘曇心論經の下を見よ。

法勝阿彌陀堂造立日時定記 ❶(日) Hos-shō-a-mi-da-dō-zō-ryū-ni-chi-ji-sadame-no-ki. ❷一卷 ❸存、撿群書類從第二七

❹本記は、承保三年五月、白河天皇の御願にて法勝寺の阿彌陀堂造營に際し、これが建立の雜事（始末作、築壇、居礎、竪柱上梁棟、立柱等）の日時並にその方角等に關して數度陰陽寮より奏聞せし所のもので、陰陽頭過言の記錄にかゝる。（不破幹雄）

法勝寺圓堂檀樣 ❶(日) Hos-shō-ji-en-dō-dan-yō. ❷一紙 ❸存、大正圖像第八 ❹(石山寺)

法勝寺供養記 ❶(日) Hos-shō-ji-kū-yō-ki. 承暦元年法勝寺供養記 ❷一卷 ❸存、撿群書類從第二七

❹承暦元年十二月十八日の法勝寺供養會の記錄である。本書は群書類從所收の『法勝寺供養記』と其の記事大同小異にして前書と併せ見るに便なるものである。（不破幹雄）

法勝寺供養次第 ❶(日)Hos-shō-ji-kū-yō-shi-dai. ❷一卷 ❸存、諸寺供養部類卷下（撿群書類從第二六）

❹承暦元年十二月十八日の法勝寺の供養式次を簡單に記したもの。題下に承保四年十二月十六日とあるは同十八日の誤りなり。

法勝寺供養記 ❶(日) Hos-shō-ji-kū-yō-ki. ❷一卷 ❸存、群書類從第一五、新校群書類從第一八 ❹承暦元（A. D. 1077）十二月

❺承暦元年（A. D. 1077）十二月十八日擧行の法勝寺供養の記錄である。法勝寺は白河天皇の御願寺であるから當法會は宮中の御書會に准ぜしめられ、天皇の行幸を初め陽明門院、中宮、一品内親王等の渡御があり、道師禪僧正覺琳、呪願師大僧正覺圓以下僧衆參仕のもとに行はれ一代の盛儀であつたといふ。それだけに當法會に關する記錄の傳へられるものは二、三に止まらない。云く、法勝寺金堂造營記（撿類從）、法勝寺供養次第（同上）、承暦元年法勝寺供養記（同上）。其他諸寺塔供養記（史籍集覽）所載のものなどであるが、就中本書は最も要を得たものである。尙、水左記、扶桑略記、歷史編年集成などにも當時の盛況が見えてゐる。（不破幹雄）

法勝寺勸進帳 ❶(日) Hos-shō-ji-kan-jin-chō. ❷一卷 ❸存 ❼(參考)

天台宗全書刊行豫定書目

法勝寺血脈 ❶(日) Hos-shō-ji-ketsi-myaku. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

法勝寺金堂造營記 ❶(日) Hos-shō-ji-kon-dō-zō-ei-ki. 通言記 ❷一卷 ❸存、撿群書類從第二七 ❹通言

❺承保二年六月から同四年十二月に至る間の法勝寺金堂造營の次第を極めて簡單に記し、次いで同月十八日の供養會のことに及んでゐる。供養會の記錄は其の前文を缺き、終りの部分を削むるに過ぎないが、同法會に關する他の諸記に見るよりも遙かに詳細に亘り、當日行はれし大敕の讃勅なども收めてある。短文ではあるがこれに依つて當法會が一代の盛儀たりしことを窺ふに十分なるものである。眞書に云く、「右通言記壹冊。元祿癸酉夏佐々宗淳於京師以油小路殿家藏本寫之。今合爲諸寺供養類記」と。（不破幹雄）

法照禪師十乘坊行狀 ❶(日) Hō-shō-zen-ji-jū-jō-bō-gyō-jō. ❷一卷、❸存 續群書類從第九上

❹具名を東福第八世法照禪師十乘坊行狀と云ふ。即ち月船琛海（—延慶元 A. D. 1308）の行狀を記せるものにして、初に其の生誕、俗姓を記し、書寫山に於て密乘を學び禪觀を專修したることを叙し、次に赤城山間の一練行人が師に依つて受戒し、常に師の側に隨侍して神力を現じたるを記し、最後に入滅の樣樣及び塔銘に就て載してある。（後藤大用）

法鐘覺禪師語錄 ❶(日) Hō-shō-kaku-zen-ji-go-roku.(支)Fa-chung-chiao-chan-shih-yü-lu. ❷四卷 ❸存 ❹清明導等編 ❾刊本（京大、藏・一七ネ・二）

法勝毘曇 ❶(日) Hos-shō-bi-don.(支)Fa-shêng-p'i-t'an. 阿毘曇心論、阿毘曇心 ❷四卷 ❸存、大正二八・八〇九 Nj. 1550、鎌冬一一 卍二五・五、北952都、南976都、元973都、明北1237納、清1237納、麗955自、天955都、指952自、法949自、至1400修、明南1414永、Nj. 1324 ❹法勝造、僧伽提婆、慧遠（成和九—義熙一二 A. D. 334—416）共譯 ❺東晉太元一六（A. D. 391）或太元元（A. D. 376）

❻阿毘曇心論の下を見よ。

法勝毘曇 ❶(日) Hos-shō-bi-don.(支)Fa-shêng-p'i-t'an. 阿毘曇心論經、法勝阿毘曇心論、法勝阿毘曇、法勝阿毘曇心論經 ❷六卷 ❸存、大正二八・八三三 Nj. 1521、鎌冬一一—一二、卍二五・七—八、北952都、南977都、元973都、明北1237納、清1237納、麗955自、天955都、指952自、法950自、至1400修、明南1415永、Nj. 1324 ❹法勝論、優婆扇多釋、那連提耶舎（天監一六—開皇九（A. D. 517—589）譯 ❺高齊河清二（A. D. 563）

❻阿毘曇心論經の下を見よ。

法鐘覺禪師語錄附瀉碧編法鐘覺大師語錄 ❶(日) Hō-shō-kaku-zen-ji-go-roku-tankatsi-tam-pki-hen-hō

-shō-kaku-dai-shi-go-roku. (支)Fa-chung-chiao-chan-shih-yü-lu & chan-pi-pien-fa-chung-chiao-ta-shih-yü-lu. ❷一卷 ❸存 ❹清法藏撰詩、明道、淇碧等編 ❾刊本（京大、藏・一七ホ・二）

法鐘要論 ❶(日) Hō-shō-yō-ron. ❷一卷 ❸存 ❹西澤護良著 ❺明治三〇刊 ❾(谷大、餘大・四三五四)

法證錄 ❶(日) Hō-shō-roku. (支)Fa-chêng-lu. ❹清沈璿 ❼(參考) 續藏目錄

法上錄 ❶(日) Hō-jō-roku. (支) Fa-shang-lu. 高齊衆經目錄、齊世衆經目錄、建康僧多經錄 ❷一卷 ❸缺 ❹法上 ❺北齊後主武平年中（A. D. 570—575）

❻本錄は具さには高齊衆經目錄又は齊世衆經目錄と云はれ、別に梵名を用ひて建康僧多經錄とも云はれて居る。即ち、北齊後主武平年中（A. D. 570—575）相州前定國寺沙門釋法上に係る經典目錄である。法上には佛性論二卷、大乘義章六卷等の著があり、衆經目錄の撰述のあつたことも本傳中に明かにされて居る。開元錄卷十に依れば、本錄の內容は第一雜藏錄二百九十一部八百七十四卷、第二修多羅錄一百七十九部三百二十卷、第三毘尼錄一十九部二百五十六卷、第四阿毘曇錄五十部四百二十一卷、第五別錄三十七部七十四卷、第六衆經抄錄一百二十七部一百三十七卷、第七集錄三十三部一百四十七卷、第八人作錄五十一部一百六卷等の八部門に分割されて、凡そ七百八十七部二千三百三十五卷の諸經論示登錄されて居つたもののやうである。

❼(參考) 三寶紀第一五、內典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八（林屋友次郎）

法成寺金堂供養記 ❶(日) Hō-jō-ji-kon-dō-kū-yō-ki. ❷一卷 ❸存、群書類從第一五、新校群書類從第一八

❹本書は治安二年（A. D. 1022）七月十四日に擧行されし法成寺金堂五大堂の新佛開眼供養會記である。法成寺は關白藤原道長の建立にかゝり、此の供養會には御書會に准ずべきの宣旨があつて、天皇の行幸、太皇太后、皇太后、中宮、東宮の行啓があり、關白以下諸公卿參列し、導師延曆寺座主權僧正院源、呪願師興福寺別當大僧都林懷を初め衆僧參仕のもとに執行されたのである。から其の盛儀を極めたことが想像される。此時に當つて天皇詔書を下して大赦を行はせられてゐる。書中にその詔書並に表白文（參讀藤原廣業草文）呪願文（文章博士菅滋篤政草文）等を收めてある。次いで賞賜が廣く行はれてゐるが、其中特に大佛師定朝が法橋上人位に叙せられてゐるのが目立つてゐる。これ大佛師附嗣の初めである。尙、榮花物語、大鏡、日本紀略、扶桑略記等にも當時の盛況が見え、諸寺塔供養記に收められてある法成寺金堂供養の一文もまた參照に便なるものである。（不破幹雄）

法乘義決定經 ❶(日)Hō-jō-gi-ketsu-jō-kyō. (支)Fa-ch'êng-i-chüeh-ting-ching. (梵)Artha-vinicaya-dharma-paryāya (藏傳)(藏) don-rnam-par-ḥes-pa-sher-bya-ba-ḥi chos-kyi-rnam-grans ❷三卷 ❸存、大正一七・六五四 Nj. 762、鎌倉七、卍一六・三一、明北1103之、蒲1101之、至1662修、明南1653宜、Nj. 1615 ❹金總持等譯 ❺宋大觀中（A. D. 1107—1110）

❻(類本) 梵本不傳。法賢譯の決定義經は本經の大凡そ前半の異譯である。西藏本（大谷甘珠爾錄 Nj. 323）は金總持等の譯に合する。

（內容） 佛、祇園精舍に在り、會中の一比丘甚深勇猛なるもの、如來さきに鹿野苑中にて說ける法乘決定の義を敷演分明ならしめ給へと願ふ。佛乃ち、五蘊・五取蘊・十二處・十八界・十二緣生支・四聖諦法・二十二根・五三摩地・四禪天定・四無色定・四無量心・四種苦樂・四三摩地（以上上卷）四念處・四正斷・四神足・五根・五力・七覺支・八聖道・十六心念・離開四果・如來十力・四無所畏・四無礙辯・十八不共法（以上卷中以下卷下）三十二大丈夫相・八十種隨形相好が法乘妙理決定の義なりとして詳說し勇猛甚深比丘に持論を囑したものである。法賢譯決定義經はこの中、五三摩地・四種苦樂・十六心念・離開四果、十八不共法・三十二相・八十種好を說かず、發問の比丘甚深勇猛の名を擧げてゐない。（椎名宏雄）

法常住經 ❶(日)Hō-jō-jū-kyō. (支) Fa-chang-chu-ching. ❷一卷 ❸存、大正一七・八三三 Nj. 819、鎌冬八、卍二二・四、北625行、南546行、元523行、明北450羊、清426羊、麗526覺、天524行、指455覺、法524覺、至477染、明南523賢、Nj. 454

❺西晉代（A. D. 265—316）失譯

❻此の經は佛の祇園に於ける「法の常住」に關する說法を記したもの。法は之を恬る佛の出世すると否とに拘はらず常住に存在するものであるが、如來が出世されることによつて初めて其の深義が明かにされるものである。此の法は小乘の場合は四諦十二因緣として說かれる。人間の苦惱は畢竟陰身（內體）のための故であるから、身口意の三業を守つて陰身の原理なる十二因緣を觀じて三毒を減すれば、羅漢と成る。更に十二因緣の理によつてその根源を語じて緣覺と成り、身の空を解し、六度・四恩・三十七道品を修することによつて菩薩と成り、遂に不退轉の精進によつて無上正眞道を成じて佛と成れば、十方を度脫せしむるに至る。そこに法の存在が現はれ、過現未の佛は常住の法身と合一する。

❼(參考) 出三藏記第三、法經錄第三（江田俊雄）

法心呪經 ❶(日) Hō-shin-jū-kyō. (支)Fa-hsin-chou-ching. ❷一卷 ❻大集經の抄出。 ❼(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

法身義繪板一件 ❶(日)Hō-shin-gi-e-han-ichi-ken. ❷一卷 ❸存 ❾明和六寫 ❿(龍大、別置)

法身敎 ❶(日)Hō-shin-kyō. ❷三卷 ❸存 ❺元祿一五刊 ❿(龍大、二六六八・一九)

法身經 ❶(日)Hō-shin-kyō. (支)Fa-shên-ching. 寶積三昧文殊師利菩薩問法身經、寶積三昧文殊問法身經、遺日寶積三昧文殊師利問法身經、遺日王三昧寶積經、

遺日寶積三昧文殊師利菩薩問法身經、法積三昧法身經 ❷一卷 ❸存、大正一二・二三七 No.335、鎌地一二、卍一〇・六、北2335 傷、南2435 傷、元1535 傷、明北2435 才、清2435 才、麗241 毀、天1535 傷、指1535 毀、法1535 毀、至317 改、明南2435 男、No.321 ❹安世高譯 ❺後漢建和二—建寧三(A.D.148—170) ❻寶積三昧文殊師利菩薩問法身經の下を見よ。

法身經 ❶(日)Hō-shin-kyō.(支)Fa-shen-ching. ❷一卷 ❸存、大正一七・六九九 No.760、鎌宙七、卍一五・五、北1355 編、南1254 編、元1355 編、明北2115 深、麗1355 鎌、天1355 鎌、法1355 鎌、至403 條、明南2411 興、No.321 ❹宋法賢(—成平四A.D.1001)譯 ❺本經は法身と化身との二身の功德に就てその差別を說いてゐる。經題を撰ぶならば法化二身經といふべきである。何故に法身だけを擧げたのであるかは明らかでない。法身を頭號とするものをみるに不空譯に大聖文殊師利菩薩讚法身禮一卷(大正二〇・九三六)と義淨譯の一百五十讚佛頌百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚一卷(大正三二・七五八)とがある。不空譯の法身讚は文殊菩薩が法身を禮讚したもの、義淨譯は尊者摩呾里制吒の造に係るもので本經と直接に何等關係がない。又、本經の譯者たる法賢、又は法天とも譯す)は佛三身讚西土賢聖撰一卷と三身梵讚一卷(大正三二・七五七)とを傳譯してゐる。三身を法身・報身・化身と譯してゐる。法賢は佛身を二身三身とも認めてゐたと思はれる。應身と云はずして化身としてゐる點は二身三身共通してゐる。この譯語例から考へてゐると法賢は新譯家の用例たる變化身とも異り、舊譯の用例たる應化身に近いものであると思ふ。勿論、合部金光明經や最勝王經の法身・應身・化身の用例とは異つてゐる。

不空譯の法身讚は文殊菩薩が如來を稱揚した偈頌であるが、本經は世尊が集會の人々の問ひを待たず、直ちに佛身に二身ありと說き出され、佛の說きたまへるだけで終り、大衆の信受奉行も作禮而去もない。不空譯は禮讚であり、本經は修多羅であるから、內容は全く異つてゐる。同本異譯でないことは明白である。

以下經の內容を略述すれば、「世尊は衆中にあつて、如來は化身と法身との二身を具するものである。化身は父母所生身であつて、この佛身は色蘊の所攝である。又、十力・四無所畏乃至四無量法を具足圓滿してゐる。次に如來が具有する所の法身は不可思議・不可稱量である、二乘の大智でも法身の功德を說くことは出來ない。如來は三界の師となつて衆生を利益し平等に護念して分別しない。法身如來は純一無二であつて無漏であり無爲である。然しながら有爲法は無爲から生じたものであることを修證せねばならぬ。法身如來は方便を離れて衆生のために依止となる。三摩地・三摩鉢底乃至百六十二道等の修地の法によつて諸の煩惱を解脫する。如來は如實にこれを了知する。此くの如き法は正等覺を成ずる法である。これ平等の法である。若し佛智を證らんと欲ふものにして正智を具する者は如實に了知し得る。のみならず衆生のために廣く宣說して、悉く寂靜無畏究竟涅槃を證得せしむることが出來る」といふのである。これに依れば化身佛は明かに應化身の如來である。丈六四八の微妙なる相好具足の如來を指し、決して他の人身でも畜生身でもない。法身佛は報身と法身とを合してゐる。受用身の自他受用身を具した身相である。又化身は衆生化益のために應同示現した佛身ではない。十力・四無所畏等の智力を修證して功德を成就した肉身の如來である。このやうに說かれてゐるから一般の三身說四身說に今の二身をあてはめ難い。所が法賢の譯した三身讚を見ると法身・報身・化身を理身・智身・應現身に分つてゐる。若し本經の二身を大乘佛と小乘佛とに分つて觀察するか、若しくは人間としての如來と大慈悲圓滿智具足の佛陀との功德の差別を述べたものと觀察すれば本經の佛身論は合通し得るであらう。兎に角に本經の佛身論は普通一般の佛身論とは相違してゐるものである。

(田島德音)

法身經 ❶(日)Hō-shin-kyō. 國譯法身經 ❷一卷 ❸存、國譯一切經集部第一五 ❹田島德音譯

法身三密觀圖 ❶(日)Hō-shin-sam-mitsu-kwan-zu. ❷一卷 ❸存、大正圖像第一二、弘法大師全集第一三(眞僞未決部)、弘法大師法藏錄 ❺法身身密觀圖・法身語密觀圖・法身意密觀圖と名づける三の圓形の圖を示し、その前後に說明の文を加へ、次に眞言宗義と標せる一段の文がある。然し眞言宗義の段は三密觀圖に關係なく別行別本である、然るを轉寫の人が誤つて一卷中に收めたものである。圖は三個とも三重の同心圓で、最外の圓を各四十に分ち、而して大聖文殊師利菩薩讚佛法身禮の四十一頌ある中、第一頌の第一句を身密觀に、第二句を語密觀に、第三句を意密觀に書き、第四句は書かず、第二頌もまた第一句を身密、第二句を語密、第三句を意密と、右へ右へ書いてある。本書の冒頭に「有a四十禮a各觀a四句「先安a法身身密句「次置a法身口密句「次安a法身意密句「後一句是總禮密語也」と云ふのは此の意であらう。四十頌終りて第四十一頌の一切平等禮乃至同歸實相體の二十字を各圓の第二重の圓に書き、最內の圓には身語意の順に阿(a)麼(ma)轉(va)の梵字を書いてある。中古の密教徒の中には本書を空海作として信用した者もあるが、智山の運敞は開蒙編神疑附三密觀神疑を著して、本書珠に眞言宗義を僞作として斥けて居る。

超無發揮性靈集第三に載する空海の中壽感興詩の序に「學有a文殊讚佛法身禮四十行頌「文約義周……四十年寔觀a五八頌「豈不快哉、……聊爲a象隙「引而申之、以爲a一百二十禮「彙作a方圓二圖「並撰a義注」とある。本書の圓はその圓圖に當る樣であるが圓後の文は後人の添加と認め可きである。その方圓は如何なるものであるか。明かでない。寶鈴鈔第九、開蒙編神疑附三密觀神

疑參照。

❾天養元寫(石山寺)大永五寫(金剛三昧院寶藏一〇寫(高野山櫻池院)(吉祥寺)

法身十自在光顯抄 ❶(日)Hō-shin-jū-ji-tai-kō-ken-shō. ❷一册 ❸存 ❹寫本(晉、ま・五・中・一)

法身十自在要決 ❶(日)Hō-shin-jū-ji-tai-yō-ketsu. ❷二卷 ❸存 ❹眞緣(延寶五—寶曆六 A.D.1677—1756)述

法身說法 ❶(日)Hō-shin-setsu-pō. 法身說法文 ❷一卷 ❸圓仁(延曆一三—貞觀六 A.D.794—864) ❼(參考) 密乘撰述目錄

法身說法頌 ❶(日)Hō-shin-setsu-pō-ju. ❸存、密嚴諸祕釋第一〇、興教大師全集之內 ❹覺護(寶保二—康治二 A.D.1063—1143)述 ❺通法界身の大日如來は常恒不斷に說法し給ふと雖も、吾々は之を聽くことを能はざる故、之れを聽くべく修行すべきことを說く。五言四十句の頌と終りに七言四句の頌あり、終りの頌は密教に入るものゝ功德を讚す。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 (富田興純)

法身說法文 ❶(日)Hō-shin-setsu-pō-mon. 法身說法 ❷一卷 ❸圓仁(延曆一三—貞觀六 A.D.794—864) ❼(參考) 山家目德撰述富目集卷上、延曆寺密乘略目錄

法身藏 ❶(日)Hō-shin-zō. 聖教訓譯法身藏 ❷四卷 ❸存 ❹速井麗晨著 ❺明治三一刊 ❾帝國、六九・一一三(京專)

法身嫡傳記 ❶(日)Hō-shin-chaku-den-ki. ❸存 ❹寫本(寶龜院)

法身禮隨聞記 ❶(日)Hō-shin-rai-zui-mon-ki. ❷一册 ❸存 ❺文政一一寫 ❹(高大、寄・一・二四)

法進戒壇式 ❶(日)Hō-shin-kai-dan-shiki. 東大寺受戒方軌 ❷一卷 ❸存、大正七四・二一 No.2345、日本大藏經第三五戒律宗疏第二 ❹法進(和銅二—寶龜九 A.D.709—779)述 ❺天平勝寶六(A.D.754) ❻東大寺授戒方軌の下を見よ。

法水分流記 ❶(日)Hō-sui-bun-ru-ki. ❷一卷 ❸存、戊午叢書第一編 ❹靜見編 ❺永和四(A.D.1378) ❾元祿九寫(谷大、宗丙・四二)元祿一五寫(谷大、宗大・三二七九)寫本(龍大、研鑽)

法髓編 ❶(日)Hō-zui-hen. ❷二卷 ❸存 ❹愛澄 ❺享保二一寫 ❾(龍大、二六六二・三九)

法數 ❶(日)Hō-sū. (支)Fa-shu. ❷一卷 ❸存 ❹慶尙道 ❺康熙一二刊 ❾(正大、一〇一・二六)

法施勝經 ❶(日)Hō-se-shō-kyō. (支)Fa-shih-sheng-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻出曜經第十五卷の抄出。 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

法石和尙語要 ❶(日)Hō-seki-o-shō-go-yō. (支)Fa-shih-ho-shang-yeyao. 別來眼珍譯師語要 ❸存、卍故二・二四・一 續宮僧寶語要之內 ❹宋眼珍別來語 ❺別來眼珍譯師語要の下を見よ。

法戰錄 ❶(日)Hō-sen-roku. 信順請求法戰錄 ❷一卷 ❸存 ❹香川是月編 ❺明治三四刊 ❾(谷大、宗洋・九二)

法全和尙記 ❶(日)Hō-zen-kwa-shō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寧朝記 ❺文祿二(A.D.1593)寫 ❾(曼殊院)

法相以呂波目錄 ❶(日)Hō-sō-i-ro-ha-mokuroku. ❷二卷 ❸存 ❹快麟(—文政七 A.D.1824)、黑田貫洞(—大正五 A.D.1916)編 ❺明治一二刊 ❾(京大、一・二〇ゑ・六×哲、さ・四・右・一×正大、一一九二・一一八—一一九、三八五)(龍大、二六二九・二五×谷大、餘大・一五一三)寫本(谷大、餘大・二〇〇〇)

法相義 ❶(日)Hō-sō-gi. 略述法相義 ❷三卷 ❸存、大正七一・二二一 No.2315、日本大藏經第三三、法相宗章疏第二 ❹聞證(寬永一二—元祿元 A.D.1635—1688)述 ❺略述法相義の下を見よ。

法相義 ❶(日)Hō-sō-gi. 傳註法相義 ❷三卷 ❸存 ❹取丘宗興(文化一二—明治一三 A.D.1815—1880)註 ❺明治一〇刊 ❾帝國、一四五・八×京專)

法相義掌故編 ❶(日)Hō-sō-gi-shō-kō-hen. ❷四册 ❸存 ❾寫本(晉、く・七・右・三〇)

法相義圖 ❶(日)Hō-sō-gi-zu. ❷二卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一九二・二二八—二二九×龍大、二六二五・五四、研佛)

法相義圖解 ❶(日)Hō-sō-gi-zu-kai-ge. ❷一卷 ❸存 ❾延享四寫(正大、一一九二・三四一)

法相義鼠聖教 ❶(日)Hō-sō-gi-so-shō-gyō. 法相義圖 ❷三卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二六二五・五二—五三)

法相義辨鈔 ❶(日)Hō-sō-gi-ben-shō. ❷一册 ❸存 ❾寫本(晉、く・七・右・五)

法相科圖 ❶(日)Hō-sō-ka-zu. ❷一卷 ❸存 ❹若沖 ❾寫本(龍大、二六二五・二五)

法相簡要 ❶(日)Hō-sō-kan-yō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二六二五・二)

法相玄論 ❶(日)Hō-sō-gen-ron. 大乘一切法相玄論 ❷二卷 ❸存、大正七一・一五一 No.1916、日本大藏經第三三法相宗章疏第二 ❹基神(享保三—寶歷三 A.D.1718—1791)述 ❺明和二(A.D.1765)

法相原義海 ❶(日)Hō-sō-gen-gi-kai. ❷三册 ❸存 ❾寫本(晉、む・二・左・二二)

法相私記 ❶(日)Hō-sō-gen-shi-ki. ❷二册 ❸存 ❾寫本(晉、む・二・左・二六)

法相五位修行圖 ❶(日)Hō-sō-go-i-shu-mō-zu. ❷一卷 ❹淵藝(仁治元—元亨元 A.D.1240—1321)撰集 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法相三卷名目惣料簡 ❶(日)Hō-sō-san-kan-mō-zō-mi-ku-so-ryō-ken. ❷一册 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶龜院)

法相宗家傳 ❶(B)Hō-sō-shū-ka-den. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(龍大・二九五一・二)

法相宗記 ❶(B)Hō-sō-shū-ki. ❷一巻 ❸存 ❹発菫記 ❹寫本(南溟藏)

法相宗行基菩薩講式 ❶(B)Hō-sō-shū-gyō-ki-bo-sa-tsu-kō-shiki. ❷一軸 ❸存 ❺足利末期寫 ❹(金剛三昧院)

法相宗化城品評 ❶(B)Hō-sō-shū-ke-jō-bon-hyō. ❷寛澄(神護景雲元—弘仁一三/A.D.767—822) ❼(参考) 本朝台組撰述密部書目、山家組德撰述篇目集巻上

法相宗見聞 ❶(B)Hō-sō-shū-ken-mon. ❷一巻 ❸存、日蓮宗々學全書、金綱集坤巻之内 ❹日向(建長五—正和三/A.D.1253—1314)述

❻日蓮の六上足(六老僧)の一人日向が、親しく日蓮より聴聞し又自ら見聞する所に従つて、法華經其他の諸經の要點並に諸宗破立の大綱を記述し、廣く經論疏釋の要文を援引して、諸傳の「見聞」其の他を著はし、これを綜括して「金綱集」と題したので、本書は其の第八巻に收められてゐる。

依經依論 三國相傳組師事 組師事 此宗自上居來之至日本事 此宗立五位明之行人位之次第也 五性各別事 破文 法相宗立義 法相宗組師歸依天台一事等の諸條目を立てゝ法相宗の宗義を立破してある。就中「五性各別事」は宗義上の重點なれば最も多く論じてゐる。

(馬田行啓)

法相宗賢聖義略問答巻第四 ❶(B)Hō-sō-shū-ken-jō-gi-ryaku-mon-dō-kwan-dai-shi. ❸存、大正七一・四一九/N.D.2320、日本大藏經第三二法相宗章疏第一 ❹伸算(承平五—貞元元/A.D.935—976)撰

❻本書は唯識宗の組慈恩大師撰大乘法苑義林章第五巻本第十七章の二十七賢聖章の一章を註釋せるものにして、奈良朝以來法相教學の隆盛に伴ひ、法苑義林章の研究も盛に行はれ多くの註疏を著されたり。内容は二十七賢聖章を十門を以て分別し、第一釋名門、第二出體門、第三彰增減門、第四設立門、第五得文身地門として之を上巻とせるも、今は缺佚して傳らず。第六諸部不同門以下を下巻とし、小乘諸部所立の賢聖義を辯じ、第七顯得相濫門に於て次第性得果超越性得果の種類を說き、第八進退差別門に於て勝劣進退多少進退の差別を明し、第九義門料簡門には七種の義門を以て賢聖義を料簡し、七種義門とは一に假實義門、二に義意無地三性義門、三に遍計所執性依他起性圓成實性等の三性門、四に五法義門、五に四諦義門、六に七眞如門、七に九識知義門にして第十釋諸妨難門に於て、九箇妨難を以て釋し、大小賢聖義を明にせるものである。

❹(原本は國寶/樂師寺文庫) (橋本凝胤)

法相宗々別寺法 ❶(B)Hō-sō-shū-shū-betsu-ji-hō. ❷一巻 ❸存 ❺明治三一刊 ❹(龍大、二〇九四・五九)

法相宗十疑 ❶(B)Hō-sō-shū-jū-gi. ❷一巻 ❸存 ❹具源(延喜一二—寛和元/A.D.912—986)答 ❹寫本(眞如藏)

法相宗初學鈔 ❶(B)Hō-sō-shō-mon-gaku-shō. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(谷大、餘大・二三九九)

法相宗初心略要 ❶(B)Hō-sō-shō-shin-ryaku-yō. 法相略要集 ❷二巻 ❸存、日本大藏經第三二法相宗章疏第一、大日本佛教全書第八〇 ❹貞慶(久壽二—建保元/A.D.1155—1213)

❻本書は、笠置解脫上人が、唯識研究初心者の爲めに必要なる題目を掲げ、之を平易に記述せられしものにして、恐らくは後の良遍僧都(解脫上人の法孫)の觀心覺夢鈔などの先蹤をなせしものかと思はれる。其の上巻には三時教、顯淨二教等の二十五類を敎め、下巻には二十四不相應以下の十題を敎めてある。兎に角古來難解の稱ある斯學研究に對する初學の爲めの一良書である。

著者貞慶の傳記に就ては、佛書研究第四號明本抄の條を參照せられ度い。尙ほ師の兄弟四人僧となり、藤を延曆圓城の兩寺に列せられて居る。貞雅・貞覺・實玄・貞圓である。皆宗學の巳講である。又諸父も皆僧となりて南山北嶺南都に在り。明遍・玄蕊・覺遍等である。何れも皆一世の師表である。又神足數輩あり。所謂覺遍・圓玄・良算・興玄・琦圓等である。皆法相系圓中の人である。而して師の家系は、遠く南家藤氏の末裔にして、それが今此の諸師を最後の俤觀としてヒんだのである。何となく名家子孫の雰囲が籠結して、この莊觀を成さしめたような感がする。

❺應安七寫 ❹(寶藏院) (佐伯良謙)

法相宗初心略要續篇 ❶(B)Hō-sō-shō-shin-ryaku-yō-zoku-hen. 續法相宗初心略要 ❷一巻 ❸存、日本大藏經第三二法相宗章疏第一 ❹貞慶(久壽二—建保元/A.D.1155—1213)

❻本書は、前出の法相宗初心略要の缺を補はんが爲に著されし物にして、四分二篇等の十一題より成つて居る。記述の體は本編たる法相初心略要よりは少し詳密にして、且つ三類境・境唯識・眞理・中道などの、云はゞ關玄なる事などまで編次されて居る。蓋し著者が初學提撕の漸進的工夫の注意を見るべきであらう。特に眞理章・中道章の如きは、初學の爲めと稱すと雖ども、實は久學巳達の者の指針にして、恐らく上人の如き學解示觀解となり信仰となり思想となつて居るものに非ずんば能はぬものがある。學者宜しく反覆丁寧拳々服膺すべきである。

(佐伯良謙)

法相宗章疏 ❶(B)Hō-sō-shō-sho-shō. ❷一巻 ❸存、大正五五・一一三八/N.D.2320、大日本佛教全書第一佛教書籍目錄第一 ❹平祚錄 ❻延喜一四(A.D.914)

❻醍醐帝諸宗の章疏の散佚を憂へられ、六宗の碩學に勅命を下して各宗の章疏を寫写するの計を立て、先づ目錄を獻ぜしめられた。命を奉じて各宗各々章疏目錄を進獻したのであつて、本錄は其の隨一である。大乘圓疏として、慈恩撰述の金剛般若寄釋三

巻以下仁王・理趣・心經の各般若・涅槃・深密・法華・最勝王等の經疏六十一部を揭げ、大乘論疏として、慈恩の瑜伽論鈔十六巻以下百法論、攝大乘論・唯識論・家珍論等の疏六十四部を、大唐組師所造として菩光の俱舍論疏十五巻以下瑜沙論・顯正理論・世親傳・西域記等三十六部を揭げ、最後に日本撰述の護命の研神章五巻以下舊球の分量決一巻等八部を擧げて居る。諸宗章疏錄の項を參照せよ。

❺寛政二年刊 (林信雲)

法相宗章疏目 ❶(B)Hō-sō-shō-sho-shō-mo-ku. 注進法相宗章疏、註進法相錄、法相宗章疏錄、勅撰法相宗章疏目錄 ❷一巻 ❸存、大正五五・一一四〇/N.D.2321、大日本佛教全書第一佛教書籍目錄第一、續群書類從第二八釋家部 ❹藏俊(長治元—治承四/A.D.1104—1180)撰 ❻安元二(A.D.1176)十月 ❻注進法相宗章疏の下を見よ。❼(参考) 本朝台組撰述密部書目

法相宗章疏目錄 ❶(B) Hō-sō-shō-shō-shō-mo-ku-roku. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(龍大、二〇一二・一七/正大、一一九〇・一二〇)

法相宗章疏錄 ❶(B)Hō-sō-shō-shō-shō-shō-roku. 注進法相宗章疏、註進法相錄、法相宗章疏目、勅撰法相宗章疏目錄 ❷一巻 ❸存、大正五五・一一四〇/N.D.2321、大日本佛教全書佛教書籍目錄第一、續群書類從第二八釋家部 ❹藏俊(長治元—治承四/A.D.1104—1180)撰 ❻安元二(A.D.1176)十月 ❻注進法相宗章疏の下を見よ。

法相宗章疏目錄 ❶(B) Hō-sō-shō-shō-shō-mo-ku-roku. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(龍大、二〇一二・一七/正大、一一九〇・一二〇)

法相宗唯識觀要心集 ❶(B)Hō-sō-shō-yui-shiki-kwan-yō-jū-shū. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(正大、一一九二・一六〇)

法相宗要 ❶(B)Hō-sō-shō-yō. ❷一巻 ❸存 ❹清慶等編、佐伯定胤校訂 ❺大正六刊 ❹東京丙午出版社

法相袖珍鈔 ❶(B)Hō-sō-shō-chin-shō. ❷四巻 ❸存 ❹恢遵 ❹寫本(龍大・二六二九・二六)

法相十五論題 ❶(B)Hō-sō-jū-go-ron-dai. ❷一巻 ❸存 ❹毛利興隆著 ❺明治三四刊 ❹(帝國、一八七・二〇五)

法相初心鈔 ❶(B)Hō-sō-sho-shin-shō. ❷一巻 ❸存 ❹文明一三寫(寶龜院)寫本(正大、一一九二・二四三)

法相諸部玄談 ❶(B) Hō-sō-sho-bu-gen-dan. ❷一巻 ❸存

❻因明論大疏懸譚(快麟)、因明論疏四相違略記玄譚(快麟)、唯識三十論述記玄譚(快麟)、略述法相義玄譚(快麟)、識變述編神(快麟)、四明十義書玄譚(輝譚)を料む。

❺天保一四寫 ❹(谷大、餘大・四三二五)

法相諸論敍合刊 ❶(B) Hō-sō-sho-ron-jo-gō-kan. (支) Fa-hsiang-chu-lun-hsu-ho-k'an. ❷一巻 ❸存 ❺民國五刊 ❹(龍大、研佛)

法相心要鈔 ❶(B) Hō-sō-shin-yō-shō. 心要鈔 ❷一巻 ❸存、大正七一・一二一三/N.D.2317、日本大藏經第三二法相宗章疏第一 ❹貞慶(久壽二—建保元/A.D.1155—1213)述 ❻心要鈔の下を見よ。❹文化一二刊(龍大、研佛)(谷大、餘大・六一〇)昭和三(谷大、餘大・四二三六)

法相心要鈔講錄 ❶(B) Hō-sō-shin-yō-shō-kō-roku. ❷一册 ❸存 ❹小島憲見著 ❺昭和三刊 ❹(谷大、餘大・四二三五)

法相髓腦 ❶(B)Hō-sō-zui-nō. ❷一巻 ❸存、日本大藏經第三二法相宗章疏第一、大日本佛教全書第八〇 ❹慈藏抄 ❺延暦年間(奥批に延暦三十二年渡於大唐本(谷大、餘大・二五四二)

❻存、大日本佛教全書第八二 ❹藏俊(長治元—治承四/A.D.1104—1180)撰 ❻大乘法相宗名目の下を見よ。❹寫本(谷大、餘大・一二九三)

法相宗名目 ❶(B)Hō-sō-shō-myō. 法相宗名目隨身鈔、法相名目見聞隨身鈔 ❷三巻或六巻 ❸存 ❹政祝(貞治五—永享一一以後/A.D.1365—1439—) ❹明暦二刊(龍大、二六二五・二六/(京專)萬治二刊(正大、一一九二・三三九)寫本(谷大、餘大・一二九三)足利時代寫(寶龜院)

法相宗名目科 ❶(B) Hō-sō-shō-myō-mokwa-kwa. ❷一巻 ❸存、大乘法相宗名目之内 ❹藏俊(長治元—治承四/A.D.1104—1180) ❹寫本(谷大、餘大・一二九四)

法相宗名目隨身鈔 ❶(B) Hō-sō-shō-myō-mokwa-zui-shin-shō. 法相宗名目、法相名目見聞隨身鈔 ❷三巻或六巻 ❸存 ❹政祝(貞治五—永享一一以後/A.D.1365—1439—)集 ❹萬治二刊 ❹(谷大、餘大・三四九〇)(京大、一・二六・一一〇)(智、く・八・右・二二)

法相宗唯識觀要心集 ❶(B) Hō-sō-shō-yui-shiki-kwan-yō-jū-shū. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(正大、一一九二・一六〇)

法相宗要 ❶(B)Hō-sō-shō-yō. ❷一巻 ❸存 ❹清慶等編、佐伯定胤校訂 ❺大正六刊 ❹東京丙午出版社

法相袖珍鈔 ❶(B)Hō-sō-shō-chin-shō. ❷四巻 ❸存 ❹恢遵 ❹寫本(龍大・二六二九・二六)

とあり）

❻本書は、興福寺慈蘊が、義林章・對法抄・二十唯識疏・中辺論釋・中辺論疏・唯識論疏・樞要・義燈・演祕・義蘊の要文を抜萃し、延暦二十二年に遣唐學生靈船に附して大唐に渡せしものなることは、撰號並に奥批に分明である。そして其意志は、之に對する不審の解決を彼土に求むる爲であつたのか、一向知る由もないが、両し平安朝初期より中期にかけて、各種の唐決なるものがあつて、何れも不審の解決を彼土に求めらるゝに徴するに、本書亦その類であらう。

本書はその奥書に依るに、保元元年善提院藏俊僧正が、法相燈明記及び掌珍量碩なる二部の書と共に、即ち三部を合卷して寫し置かれ、之を壺阪覺憲僧正に相傳せられしより以來、南都古德の間に相傳の祕書とせられたのである。そして其の藏俊自筆本が、天正頃より享保頃にかけて尚ほ存在し居りし旨、興福寺本の英俊並に秀英の奥書に依つて知られる。

本書は、前述の如く、法相燈明記・掌珍量碩と共に三部合卷の隨一にして、燈明記には「弘仁六年十月維摩會時記」と奥批され、又本書には「延暦二十二年附遣唐學生靈船闍梨渡於大唐」とあれば、右二書は明了に其著作年代を知り得べきも、その掌珍量碩は、卷首にたゞ秀法師撰とのみありて、秀法師の何人たるやを明にせざる以上は、その製作年代を知るべくもないが、案ずるに藏俊が三部を合卷し置かれし理由は、三部共に平安朝初期の珍書なる故なるべく思はれるのである。隨つて掌珍量碩の作者秀法師とは、興福寺々主仁秀のことかと思ふのである。寺主仁秀は、興福寺初代別當慈訓の弟子にして、別當次第に依るに、慈訓が別當職停止中の寺務執行者たりし旨見へてある。尚ほ元亨釋書第十六卷、本朝高僧傳第四卷に依るに、大同三年三月寂とある。

本書は三部合卷の隨一なること、前述の如くにして、一に佛教全書に收めたる本の如くである。然るに日本大藏經編入の本は掌珍量碩がなく、又順序も法相體鋼の次に燈明記を編し、そして藏俊覺憲等の奥批は、初めの法相體鋼の方に在りて後の燈明記の方には何にもない。案ずるにこれは編次の尚後三何時の間にか間違つた本なのであらう。非常に轉々寫得の本であつて、最後の寫得の人が正德三年光聰とあるから、光聰ならば當代の明匠であるが、此の前後の諸雜は光聰の時に已に左様になつて居つたのか、それとも其以後にそうなつたのか、日本大藏經の底本を見ぬ限り、今一段分り兼ねる。

本書著者慈蘊は、天台法華宗相承血脈譜に依るに、座主義眞及び興福寺の道證・守章・修圓・慈光等と共に、密灌を傳敎大師に受けられたと云ふ以外に、何等傳記の知るべきなきが、本書奥批の「延暦二十二年付遣唐學生靈船闍梨渡於大唐」この語が、彼の唐の靈宗元和五年七月體泉寺に於て、大乘生心地觀經譯出の時の筆受及び譯語を同りし、日本國唯一の譯譯附囑偈の事なりとして、その靈仙が渡唐の年代に明確なる史實を與へたる記事として有名である。

本書は、六枚半とあるけれども、現存のものは引文が略されて一枚半程しかない。引文を略せられたのは藏俊であらう。そのことは本書末尾に附記してある。

❺享保三寫 ❹(谷大、長保・二五四)（佐伯良謙）

法相双對名目 ❶(日) Hos-sō-tō-tai-hyō-hikari 兩宗雙對名目 ❷一卷 ❸存 ❹教海抄 ❺寫本（根山文庫）

法相大意鈔 ❶(日) Hos-sō-tai-i-shō 二卷鈔、法相二卷鈔、唯識大意、法相大乘大意抄、孝道國字鈔 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第三三法相宗章疏第二、大日本佛敎全書第八〇 ❹良遍（建久五—建長四 A.D. 1194—1252）述 ❺二卷鈔の下を見よ

法相大乘大意抄 ❶(日) Hos-sō-dai-jō-tai-i-shō 二卷鈔、法相二卷鈔、法相大意鈔、唯識大意、孝道國字鈔 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第三三法相宗章疏第二、大日本佛敎全書第八〇 ❹良遍（建久五—建長四 A.D. 1194—1252）述 ❺二卷鈔の下を見よ ❻元祿四寫 ❹(谷大、餘大・二三七一)

法相大乘傳通要錄 ❶(日) Hos-sō-dai-jō-den-tsū-yō-roku. ❷二冊 ❸存 ❹良遍（建久五—建長四 A.D. 1194—1252）

法相天台兩宗戒勝劣事 ❶(日) Hos-sō-ten-dai-ryō-shū-kai-shō-retsu-no-koto. 南都泉山或勝劣事、南都泉山或境勝劣記 ❷一卷 ❸存、日本大藏經第三五戒律宗章疏第二、大日本佛敎全書第一〇五 ❹貞慶（久壽二—建保元 A.D. 1155—1213）述 ❺南都泉山或勝劣事の下を見よ

法相燈明記 ❶(日) Hos-sō-tō-myō-ki. ❷一卷 ❸存、大正七一・四八No. 2310、日本大藏經第三二法相宗章疏第一、大日本佛敎全書第八〇 ❹慈安集 ❺弘仁六（A.D. 815）

❻本書は唯識學の我國に傳來するや、元興寺、興福寺の二學派ありて南北兩寺傳と稱し盛に論諍の行はれたり。此書は慈安大德が欽明天皇十三年壬申歲より弘仁六年に至る二百六十八年間に行はれたる論諍を集錄せるものなることを卷首に記せり。内容は内明十義因明六義合計十六問に關する論諍なり。極めて簡單なるも南北兩寺敎學相違の一般を知る最好資料である。

❹享保三寫（谷大、長保・二五四）文政二寫（谷大、餘大・二三九六）寫本（龍大、二六二五・二七）（橋本凝胤）

法相燈明記 ❶(日) Hos-sō-tō-myō-ki. ❷一卷 ❹修圓述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法相燈明記、掌珍量碩、法相髓鬪合本一帖 ❶(日) Hos-sō-tō-myō-ki, shō-chin-ryō-dō, hos-sō-zui-tō-gap-pon-ichi-jō. ❸存

❻(本書は、諸錄に見へず)。法相燈明記は大正藏七十一卷。掌珍量碩は同六十五卷に收めらる)。

本書は、古來表記三部の書が合本され、

飽り快上には流布せざりし珍本なる故、その傳來に就ては、奥書に依るに、最初保元々年に興福寺藏俊が寫得藏藏せしを、同寺覺憲に傳へ、その本が天正年間頃存在され、光祐得業より英俊僧都に傳へしを、享保六年秀英が之を轉寫し、寛政四年尭慶が又復轉寫せし旨を記してある。そしてその尭慶の奥書には藏寺の祕書なり可崇可祕者也云々と云ふてある。祕書云々の語は、古來、聖教尊重の常套語として、隨處に見る所なるが、今本書に在つては、全く文字通りの祕書にて、その内容が實に貴重緊要なる文字を以て滿たされ居るに拘らず、古來古德が多くの場合に、その片鱗のみを顯はし、未だその全貌を示さゞりしにても知られる。況や後二書の如きは、全くその書名すら見しことがない位である。本書は興福寺傳來の尭慶の寫本が幸に藥師寺に藏せられ、更に興福寺に新本が轉寫せられて居る。而して大正藏の原本は、燈明記は東大寺古寫本、掌珍量碩は藥師寺基神の寫本に依られし旨、欄外の奥書に見へてある。大正藏掌珍量碩の奥書に、保元々年秋九月日屋間得學生令寫了とある聞得の二字は、同法と云ふ字の草書の誤讀かと思はれるから、こゝに之を訂正し置く。

一、法相燈明記。本書は、その本文に明記せる如く、沙門慈安が弘仁六年十月維摩會の時、之を記錄せしものにして、初め題號の下に「沙門慈安集本師義」と云つて、私說には非らず師承あるの旨を明かにし、（大正藏の本には慈の字がない。）而して本文中に極めて簡結に、佛教興起より弘仁六年までの年時を記載し、その間、元興、興福兩寺の先德が、互に法相の義を諍ふて息まず、今二八條（二八十六ケ條）を勃して後生に流行す等と云つて、その作意を叙べてある。

即ち本文内容は、内明十義、因明六義、計十六ケ條に對する、元興、興福兩寺先德の異義、即ち所謂南北兩寺の異義なるものを錄してあるが、案ずるにこれ南北兩寺の異義なるものゝ最高潮時代と思ふのである。それは南北兩寺と云ふ言葉は、我が奈良朝佛教史には是非出る言葉であつて、彼の白鳳末期より奈良朝全盛期にかけての度々の入唐學問僧は、十中の八九は何れも皆この法相の教學を傳へたのであつた。そしてこれが元興、興福と云ふ隣接の二大道場を根據として、對立的に宣傳せられたから、勢ひ南々對峙の學問を成すのが當然の情勢であつた。その上へ、もと〳〵支那よりの傳燈が、玄奘直授の學風と、慈恩、淵洲、栖陽の三師の研磨を經たる學風との相異もあり、旁々以てこの南北兩寺の異義が構成されたのである。両し當時、北寺系教學の最大權威者たる義珠の著書には、餘り學問對峙の口吻なきに拘らず、同時後輩の元興寺系代表の學匠護命の著書には、隨處に學問無視の口吻さへ見へるよりして之を考ふるに、これ一は兩德性格の然らしむる處でもあらうが、又一は義珠當時には左程になかりしものが、護命の頃に至つて、露骨に一の學問として論議せられるやうになつたのではあるまいか。そして本書はこの護命時代に成れる所謂南北兩寺の異義なるものゝ全斑である。但し俱舍論に對する兩寺の異義は、この以外なることを知り置く可きである。

由來かくの如き八宗教南北兩寺の異義なるものが、その一々の題目に就ては、隨處にその言葉を見るのであるが、両し抑も南北兩寺の異義なるものは、總じて機側係あるものなりやと云ふことすら、之を詳かにするを得ざりしに、幸に本書の流傳に依り之れが全貌を知り得ることは、實に本書並に本書流傳者の一大功績なりと思ふのである。

尚ほ本書の作者慈安に就ては、予は曾て佛書研究第五十三號、同五十六號に考證し置きしが、要はこれ當時に於ける興福寺系二明の學匠にして、（唯量抄）東大寺に因明を傳へしを以て、同寺に於ては根本因明師として尊崇せられ、（唯量抄並に大疏抄第十一卷皇球九句義私記）。又東大寺興三論の學匠として知らる。（三論玄師傳集及び東大寺過去帳）。而して本書云ふ所の本師義とは、本師は謹人なるやを詳かにせざるも、或は案ずるに、彼の修圓の著書にも法相燈明記一卷見へたり、されば今慈安の法相燈明記は、彼の修圓の燈明記より來るやも知れず、即ち本師とは修圓を指すにあらずやと想像されるのである。記して後檢を俟つことゝする。

二、掌珍量碩。本書は彼の有名なる法相掌珍論廣頌の、眞性有爲空、無爲空の比量、即ち掌珍論一部の骨子たる大提案。更にして云はゞ法相が護法に呼びかけたる大論爭的立量に對し、今著者は著者の宗説たる護法宗に本據し、掌珍比量を重々に難破せるものにして、僅々十三紙程の書なるが、實に貴重の大文字である。本書の内容に就ては、本辭典第五卷（ル）の部に遠藤二平君の説明があるから之を略する。

本書は題の下に秀法師撰とあり、秀法師は考へ難きも、想像するに、或は寺主仁秀のことかと思はれる。寺主仁秀は、興福寺初代の別當、慈訓僧都の弟子にして、別當次第に依るに、慈訓が別當職停止中の寺務執行者たりし旨見へてある。（脱ほ元亨釋書第十六卷、本朝高僧傳第四卷に依るに、大同三年三月寂とあり。

本書は設令ひ寺主仁秀の作にあらずとするも、平安朝最初期の著書なることは想像に難くない。そは前掲の法相燈明記弘仁六年と。後出の法相體鋼延暦二十二年唐に渡すとの中間に合卷せるにて知られる。

三、法相體鋼。本書は、興福寺沙門慈蘊が、唯識述記、對法抄、二十唯識疏、中邊論疏、樞要、義燈、演祕、義蘊の要文を拔萃し、延暦二十二年に遣唐學生靈船に附して大唐に渡せしものなること、撰號並に奥書が分明である。

本書は六枚半とあるけれども、現存のものは引文が略されて一枚半程しかない。

著者慈蘊は傳記未詳なるも、遣唐學生靈船のことは、日本僧唯一の支那譯場參列者

として、前年松本文三郎博士及び大屋德城君などに依り、考證或傳された事がある。（佐伯良謙）

法相二卷鈔 ❶(B)Hō-sō-ni-kan-shō. 二卷鈔、法相大意鈔、法相大乘大意抄、唯識大意、孝道國字鈔 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第三三法相宗章疏第二、大日本佛教全書第八〇 ❹貞應(建久五—建長四 A.D.1194—1253)述 ❺二卷鈔の下を見よ。 ❻明治一八刊(京大、一・二四ム・一)刊本(貴、く・七・左・二〇)(谷大、餘大・一四九九×龍大・二六二五・六)(正大、一一九二・一八一)寫本(龍大、二六二五・五)

法相祕傳抄 ❶(B)Hō-sō-hi-den-shō. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❻(寶龜院)

法相部筆記 ❶(B)Hō-sō-bu-hik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹高麗香本 ❻寫本(京專)

法相法師佛性法爾諍 ❶(B)Hō-sō-hō-shi-butsu-jō-hō-ni-jō. ❷一卷 ❹寶治(神護景雲元—弘仁一三 A.D.767—818) ❼(參考) 本朝台嶺撰述密部書目、山家嶺述撰述篇目集卷上

法相名目 ❶(B)Hō-sō-myō-mok-u. ❷一册 ❸存 ❺寬永四寫 ❻(高大、寄・一・一三)

法相名目見聞隨身鈔 ❶(B)Hō-sō-myō-mok-u-ken-mon-zui-shin-shō. 法相宗名目、法相宗名目隨身鈔 ❷三卷或六卷 ❸存 ❹政祝(貞治五—永享二以後 A.D.1365—1429—) ❻明暦二刊(龍大、二六二五・二八×谷大、長保・二五〇)萬治二刊(正大、一一九二・一二一、三八六)

法相了義燈 ❶(B)Hō-sō-ryō-gi-tō. ❷十一卷 ❹德二(—天長元 A.D.824—)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、法進法相宗章疏

法相了義燈問答 ❶(B)Hō-sō-ryō-gi-tō-mon-dō. ❷一卷 ❹德二(—天長元 A.D.824—)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

法相論題 ❶(B)Hō-sō-ron-dai. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(龍大、二六二七・一九)

法書至要抄正解 ❶(B)Hō-sō-shi-yō-shō-sō-ki. ❷一册 ❸存 ❹三島敦雄著 ❺明治三四刊 ❻京大、佛教・五四・三一)

法藏和尚傳 ❶(B)Hō-zō-o-shō-den. (支)Fa-tsang-ho-shang-chuan. 唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳 ❷一卷 ❸存、大正五〇・二八〇 No.2054、卍續二乙・七・三 ❹新羅崔致遠(—憲康王一一—孝恭王八以後 A.D.857—904—)撰 ❻唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳の下を見よ。

法藏經 ❶(B)Hō-zō-kyō. (支)Fa-tsang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武則錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八・第二五

法藏碎金錄 ❶(B)Hō-zō-sui-kon-roku. (支)Fa-tsang-sui-chin-lu. ❷十卷 ❸存 ❹宋晁迥撰 ❻明版(內閣)寫本(京大、藏・二四ホ・一六)

法藏心經略疏 ❶(B)Hō-zō-shin-gyō-ryaku-sho. (支)Fa-tsang-hsin-ching-lüeh-su. 般若波羅蜜多心經略疏、般若心經略疏、心經略疏 ❷一卷 ❸存、大正三三・五五二No.1712、館吕八、卍三四・二〇、明北1563百、清1563物、明南1563青、Zj.1369 ❹唐法藏(貞觀一七—先天元 A.D.643—712)述 ❻若波羅蜜多心經略疏の下を見よ。 ❺寬文二一刊 ❻(高大、寄・一・二三)(京專)

法藏論跋 ❶(B)Hō-zō-ron-batsu. ❷一卷 ❸存、東林學道要義等合本 ❻寫本(正大、一〇七・一七一)

法足經 ❶(B)Hō-soku-kyō. (支)Fa-tsu-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武則錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷一帖 ❹寬信(應德元—仁平三 A.D.1084—1153) ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. 法則集 安居院流 ❷二卷 ❸存 ❹信承撰 ❻安居院聖覺等が、法則の次第故實等十四項を擧げたもので、法式の故實を知る唯一の資料である。 ❻寫本(正教藏)

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷一册 ❸存 ❹木食順良 ❺萬治四刊 ❻(高大、一・六三)

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷二卷 ❸存 ❹惠帆撰 ❻明和九(A.D.1772)

❻明和九年に、寂山明德院惠帆が、宮延殿上を始め、山上山下の諸法要の表白を類聚せるもの。

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷一卷 ❸存 ❹應雲秋光(享保三—文化元 A.D.1718—1804) ❻寫本(谷大、餘小・八二)

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷二卷 ❸存 ❹宥晴編 ❻(龍大、二〇七三・七)

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷一册 ❸存 ❹宥仙 ❺弘治三寫 ❻(金剛三昧院)

法則集 ❶(B)Hō-soku-shū. ❷二帖 ❸存 ❹宥賢 ❺應永三五寫 ❻(金剛三昧院)

法則類記 ❶(B)Hō-soku-rui-ki. ❷一卷 ❸存 ❹眞雅記 ❻(明德院)

法隼法 ❶(B)Hō-sam-bō. ❷十二帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶善提院)

法體裝束雜事 ❶(B)Hō-tai-shō-soku-zatsu-ji. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七四服具叢書第二 ❻著者及び著述年代の明了を缺くが、本文中に「文化八年閏二月の頃、正親町入道殿公明卿云々」の記事があるから、恐らく文政年中(A.D.1818—1829)に著述されたものであり、本文は宣旨解記、貫弓記、親長卿記、薩戒記、平戸記、近代裝束抄、雅通卿抄、三光院內府抄を盛に引用し、特に宮中出入時に於ける法體裝束に關し、極めて詳細に叙述してゐるから、有職故實に興味を有してゐた公卿の備忘錄として記して置

いたものと思はれる。（高瀬承厳）

法體裝束抄 ❶(日)Hō-tai-shō-zoku-shō. 法體裝束事附童體裝束事 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七三服具叢書第一、新校群書類從第六、倫林拾葉第一三編、群書類從第八 ❹藤原永行 ❺應永三(A. D. 1396) ❻宣政九寫 ❼(谷大、餘大・二三八〇)

法體裝束事附童體裝束事 ❶(日)Hō-tai-shō-zoku-tai-no-koto-tsuketari-dō-tai-shō-zoku-no-koto. 法體裝束抄 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七三服具叢書第一、群書類從第八、新校群書類從第六、倫林拾葉第一三編 ❹藤原永行 ❺應永三(A. D. 1396) ❻本書は法體裝束と童體裝束との二部から成り、法體裝束は(一)鈍色著樣事、(二)五帖袈裟懸樣事、(三)椎鈍事、(四)袈袋事、(五)指狩事、(六)付衣事、(七)法服事、(八)平袈裟事、(九)納袈裟事、(一〇)甲袈裟事、(一一)入道衣持事の十一項に分ち衣合、寸法、被着方などに關し故實に基きて說明せるもの、主として比叡山、園城寺、奈良諸大寺所傳の說が引かれてゐる。童體裝束は(一)童體直衣、(二)狩衣、(三)狩襖、(四)半袴、(五)水干、(六)巫頭、(七)淨衣、(八)髮結樣などの八項に分ち、寺入せし貴族子弟の剃髮に至るまでの裝束につき、各種衣類の地質、模樣、色合、製法等を說明せるもの。卷末に「公私方に沙汰を經られて淵底をきはむるの間、子孫の蒙昧の不審を散ぜんがために自筆にこれをしるし、裏判を加之者也、短慮之身定有二違失一歟、努々不レ可レ有二外見一云云、可秘可秘、この一流の中にても無二左右一見を許すべからざる者也」とあるから、世に發表せんがため著述したものでなく、有職家として子孫に傳へんとて述作したものである事が知らるる。群書類從裝束部卷第百二十に收むる法體裝束抄は本書と同一内容を有するものである。（高瀬承厳）

法談趣向章 ❶(日)Hō-dan-shu-kō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹惠光 ❼寫本(龍大、一〇五五・一三九)

法智菩光禪師語錄 ❶(日)Hō-chi-bo-kō-zen-ji-go-roku. ❷一卷 ❸存 ❹菩光 ❼(參考) 禪籍目錄

法智遺編觀心二百問 ❶(日)Hō-chi-yui-hen-kwan-jin-ni-hyaku-mon. (支) Fa-chih-i-pien-kuan-hsin-erh-pai-wen. ❷一卷 ❸存、大正四六・八二四No. 1935、館陽一一、卍三三・七、明北1577起、清1577題、明南1584編、N. 1584 ❹知禮(建隆元—天聖六A. D. 960—1028)述、鑑忠集 ❺宋景德四(A. D. 1007) ❻本書は浙陽誘主慶昭の「答十義書」に對し鑑きの「十義書」の十軸に基いて百九十八ケ條の問題を設け、以て應酬せるもの。景德四年五月二十六日慶昭から「十義書」に對する答辯「答十義書」が傳達されたので直ちに筆を呵して撰せるもの。而して卷末に至つて此の義目並に是れ自來廢立觀心の意。もし此問に於て酬答する能はず及び答へ理を盡さずんば則ち寃を顯し、觀心の正文を破するものなればなほ恰と未恰と酬と不酬とを問かに信ずべき旨を書き添えてゐる。蓋し本書は趙宋天台研究上參稽すべき重要なる典籍である。序に法孫鑑忠集とあるから「扶宗集」五十卷中から別行したもので單に「觀心二百問」と云ふ方が妥當であらう。 ❼延寶五刊 ❾(高大、寄・一・二四)×立大、A一二・四三三×谷大、餘大・一一二八)

法智遺編解謗書 ❶(日)Hō-chi-yui-hen-ge-bō-sho. (支) Fa-chih-i-pian-chieh-pang-shu. ❸存、四明仁岳異說叢書(卍續一・九五・四)之內 ❹宋知禮(建隆元—天聖六A. D. 960—1028) ❻四明仁岳異說叢書の下參照。 ❾寫本(龍大、二六五五・六)（伊藤眞徹）

法智遺編別理隨緣十門折難書 ❶(日) Hō-chi-yui-hen-betsu-ri-zui-en-jū-mon-setsu-nan-sho. (支) Fa-chih-i-pien-pie-li-sui-yüan-shih-mên-shê-nan-shu. ❸存、四明仁岳異說叢書(卍續一・九五・四)之內 ❹宋仁岳(淨住三—治平元A. D. 998—1064) ❻四明仁岳異說叢書の下參照。 ❾寫本(龍大、二六五五・六)

法中衣服抄 ❶(日)Hō-chū-e-bukuku-shō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七四服具叢書第二、群書類從第八、我が國における著者及び著述年代不明、僧侶の服制を記し、且つ僧侶の階級を併せ叙したるもの。服制に關しては鈍色、頭立衣、等身衣、襖袴、納袈裟、紺香、平袈裟、五帖袈裟、綾袈裟、七帖九帖袈裟等を擧げてその製法、色合、著用者の階級を述べ、僧侶の階級に就ては三綱、僧綱、凡僧、綱所、僧位、院家、出世、坊官、侍法師、承仕、門主、公名等に關し說明を加へてゐる。 ❾刊本(帝國、か・一二)（高瀬承厳）

法中建白書 ❶(日) Hō-chū-ken-pakku-sho. ❷一卷 ❸存 ❺明治元寫 ❾(龍大、別置)

法中時用裝束集 ❶(日) Hō-chū-ji-yō-shō-zoku-shū. 法中裝束集 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七四服具叢書第二 ❹永屋撰 ❻本書は又單に法中裝束集とも稱し、專ら法親王及び五摂家の子弟の出家したる者の法服を叙し、併せて院家、坊官、寺僧に及んだもので、法親王は年齢によりて區別し、之の叙說は頗る精細を盡してゐる。現存の本書は永屋の著に亮快が享保十七年に加筆したものである。（高瀬承厳）

法中裝束抄 ❶(日) Hō-chū-shō-zoku-shō. 法中裝束事 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七四服具叢書第二、新校群書類從第六 ❹隆源(康永元—應永三三A. D. 1342—1426)

法中裝束事 ❶(日) Hō-chū-shō-zoku-no-koto. 法中裝束抄 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七三服具叢書第一、群書類從第八 ❹隆源(康永元—應永三三A. D. 1342—1426) ❻隆源は水木大僧正と稱し、山城東寺百三十六代の長者で、密教の學匠であるとともに有職に通じてゐた。本書は(一)鈍色白裳

まき絵師 ❶(名)Hi-ma-e-shi. 漆器に蒔絵を描く職人。

まきえ物 ❶(名)Hi-ma-e-mo-no. 蒔絵を施した漆器。

まきがい ❶(名)Hi-ma-gai. 巻貝。

まきがえ ❶(名)Hi-ma-ga-e. 巻き替え。

まきがみ ❶(名)Hi-ma-ga-mi. 巻き紙。

まきぐち ❶(名)Hi-ma-gu-chi. 巻き口。

まきこむ ❶(他五)Hi-ma-ko-mu. 巻き込む。

まきじゃく ❶(名)Hi-ma-ja-ku. 巻き尺。

まきぞえ ❶(名)Hi-ma-zo-e. 巻き添え。

まきたばこ ❶(名)Hi-ma-ta-ba-ko. 巻き煙草。

まきつける ❶(他下一)Hi-ma-tsu-ke-ru. 巻き付ける。

まきつく ❶(他五)Hi-ma-tsu-ku. 巻き付く。

まきとる ❶(他五)Hi-ma-to-ru. 巻き取る。

まきなおす ❶(他五)Hi-ma-na-o-su. 巻き直す。

まきのこす ❶(他五)Hi-ma-no-ko-su. 巻き残す。

まきば ❶(名)Hi-ma-ba. 牧場。

まきびし ❶(名)Hi-ma-bi-shi. 撒き菱。

まきもの ❶(名)Hi-ma-mo-no. 巻き物。

まきゆき ❶(名)Hi-ma-yu-ki. 蒔き雪。

まく ❶(他五)Ma-ku. 巻く。❷(他五)Ma-ku. 撒く。❸(他五)Ma-ku. 蒔く。❹(他五)Ma-ku. 播く。❺(他五)Ma-ku. 捲く。❻(他五)Ma-ku. 枕。❼(他五)Ma-ku. 幕。❽(他五)Ma-ku. 膜。❾(他五)Ma-ku. 巻く。❿(他五)Ma-ku. 蒔く。⓫(他五)Ma-ku. 播く。⓬(他五)Ma-ku. 捲く。⓭(他五)Ma-ku. 枕。⓮(他五)Ma-ku. 幕。⓯(他五)Ma-ku. 膜。

まくあき ❶(名)Ma-ku-a-ki. 幕開き。

まくあく ❶(名)Ma-ku-a-ku. 幕が開く。

まくあけ ❶(名)Ma-ku-a-ke. 幕開け。

まくあけする ❶(他サ)Ma-ku-a-ke-su-ru. 幕を開ける。

まくあけ狂言 ❶(名)Ma-ku-a-ke-kyo-gen. 幕開き狂言。

まくあけ芝居 ❶(名)Ma-ku-a-ke-shi-bai. 幕開き芝居。

まくあけ場 ❶(名)Ma-ku-a-ke-ba. 幕開き場。

まくあけ物 ❶(名)Ma-ku-a-ke-mo-no. 幕開き物。

まくあけ役者 ❶(名)Ma-ku-a-ke-ya-ku-sha. 幕開き役者。

まくあけ狂言 ❶(名)Ma-ku-a-ke-kyo-gen. 幕開き狂言。

まくあけ芝居 ❶(名)Ma-ku-a-ke-shi-bai. 幕開き芝居。

まくあけ場 ❶(名)Ma-ku-a-ke-ba. 幕開き場。

まくあけ物 ❶(名)Ma-ku-a-ke-mo-no. 幕開き物。

まくあけ役者 ❶(名)Ma-ku-a-ke-ya-ku-sha. 幕開き役者。

まくあけする ❶(他サ)Ma-ku-a-ke-su-ru. 幕を開ける

も推考して當麻本は知恩院によつて短期間に仕上げたといふべきである。

詞書の成立に就いて云へば、この傳記の編纂されるまでに、門弟無能によつて幾種も別傳が編纂されてゐた筈であるから、其上に當時の公家や名僧の日記類を參酌して詳細を極め貴品を備へしめたものである。かの本朝祖師傳記繪詞(傳法繪)などは門弟として能ふだけの資料蒐集で編した民間作品なるのと相對するわけである。

尙ほこの四十八卷傳一部を通じて佛西聖光房禪長を正統と立てゐる點は明かに佛西流派の間になつたか、舜昌の撰せるを改作せるものと見るべく、こゝに編者に關する疑問があり、繪畫の製作年代と合せて傳說の如く果して舜昌法印作說そのまゝに信つてよいかどうかといふことが學界に論ぜられる所以である。

終に義山の「圓光大師行狀畫圖翼贊」に編入せられてゐる四十八卷傳は初學のものに讀解し易からしめんがために假名遣ひを正し、語句を修補し、時には今の佛西義に合せしめるやうに修文してゐることを原本對校によつて知り得たことを附記しておく。西して現本は寶庫に秘藏せられてゐるために元祿十六年義山重修翼贊本「圓光大師行狀畫圖」が刊行されてより、世に流布する四十八卷の本文は殆んどこれに關してゐるやうである。されば學究者は原本によるか、大正新校本(中外出版刊)か日本繪卷物集成本(雄山閣刊)によるべきである。

尙ほ圓光大師行狀畫圖翼贊の下參照せらるべし。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第三 ❽元祿一三刊(谷大、宗大・二二九六五・一五五)享保二刊(京大、一・二一ホ・五)寫本(龍大、二九六五、一五六、二〇四二・一一)

(井川定慶)

法然上人行狀畫圖 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-gyō-jō-e-zu. 法然上人行狀繪圖詞書 ❷七科 ❸存、附大正新校法然上人行狀繪詞 ❹藤原祐範、江藤敬英共編 ❺大正一三刊 ❻(知恩院)(奈良往生院)(龍大、研史、別置)(京大、一・二一ホ・一二)(谷大、別・三二六)

法然上人行狀畫圖翼贊 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-gyō-jō-e-zu-yoku-san. 圓光大師行狀畫圖翼贊、翼贊、圓光大師行狀翼贊 ❷六十卷 ❸存、淨土宗全書第一六 ❹圓智(一眞享頃)(P. D. 1674—1731)遠、義山(慶安元—享保二 P. D. 1648—1717)重修 ❺圓光大師行狀畫圖翼贊の下を見よ。

法然上人行狀畫圖翼贊遺事 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-gyō-jō-e-zu-yoku-san-i-ji. 御傳翼贊遺事 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一六 ❹義山(慶安元—享保二 P. D. 1648—1717)大津中河共撰 ❺御傳翼贊遺事の下を見よ。

法然上人行狀繪圖 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-gyō-jō-e-zu. 然文法然上人行狀繪圖 ❷一冊 ❸存 ❹石塚龍學譯 ❺大正一四刊 ❻(京大、佛教・D七・八)

法然上人九卷傳奧書 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-ku-kan-den-ō-ku-gaki. ❷

存 ❸明治四二寫 ❹(谷大、宗大・一二五六)

法然上人言行錄 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-gen-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹本田無外著 ❺明治四一刊 ❻(谷大、宗洋・一七七)

法然上人御畫傳略贊 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-gwa-den-ryaku-san. ❷二冊 ❸存 ❹泰譽 ❺享和二刊 ❻(京大、一・二一ホ・六)

法然上人御事蹟謠曲 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-ji-seki-yō-kyoku. ❷一卷 ❸存 ❹渉間德定 ❺昭和七刊 ❻岡山其善及會

法然上人御說法事 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-setsu-hō-no-koto. ❷存、法然上人全集附錄第二眞僞未詳 ❸觀彌聖人の編錄と稱する西方指南鈔上に法然聖人御說法事。卽ち一、佛身の事、二、三部經の事の本末二卷に揭ぐるものが是れである。本全集編者の言に是の文恐らく眞語登錄に載する逸修說法の假字本なるか云々と。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第一

法然上人御傳繪略讃 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-den-e-ryaku-san. ❷一卷 ❸存 ❹金谷道人 ❺昭和四刊 ❻(龍大)

法然上人御傳抄 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-den-shō. ❷一卷 ❸存 ❹明治四四刊 ❻(正大、一五一六・二八) ❼東京淨土教報社

法然上人御傳翼贊綱領 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-den-yoku-san-kō-ryō. 御傳翼贊綱領 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・二八六一)

法然上人御難記 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-nan-ki. ❷三卷 ❸存 ❹行譽 ❺貞享五刊 ❻(正大、一五一六・八一)

法然上人御法語 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-hō-go. ❷存、法然上人全集附錄第二眞僞未詳 ❸建仁元年源空六十九歲の時の法語と稱し、奧に本云右御法語者以在光明寺御眞影書寫訖と書してゐる。 ❹正德五刊 ❻(龍大、二六八二・一四八)

法然上人語燈錄 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-go-tō-roku. 黑谷上人語燈錄 ❷十五卷 ❸存、大正八三・一〇五 No. 2617、淨土宗全書第九 ❹源空(長承二—建暦二 A. D. 1133—1212)述、了惠道光(寛元二—元德二 A. D. 1244—1250)輯 ❺文永一一(A. D. 1274) ❻漢語登錄十卷と和語登錄五卷とを輯む。各項の下を見よ。

法然上人樣御文 ❶(日)Hō-nen-shō-nin sama-o-fumi. ❷二卷 ❸存 ❹古版本(谷大、宗小・二三六)

法然上人四十八卷傳私見聞鈔 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-shi-jō-hachi-kwan-den-shi-kem-mon-shō. ❷二卷 ❸存 ❹寛文九刊 ❻(龍大、二九六五・一五七)

法然上人七箇條制文 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-shichi-ka-jō-sei-mon. 七箇條規誡文、七箇條敎誡事、七箇條制誡事、

念佛行者誡條 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第九、法然上人全集第五 ❹源空(長承二—建暦二 A. D. 1133—1212) ❺七箇條起請文の下を見よ。 ❻刊本(谷大、宗大・二八五五)

法然上人小傳と其教義 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-shō-den-to-sono-kyō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹坂田良弘著 ❺昭和二刊 ❻東京淨土教報社

法然上人正傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-shō-den. ❷一卷 ❸存 ❹望月信亨著 ❺明治四四刊 ❻東京森江書店

法然上人消息 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-shō-soku. ❷一卷 ❸存、國文東方佛教叢書第二輯第四 ❹寫本(龍大、二六八二・一五〇)

法然上人全集 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-zen-shū. ❷一冊 ❸存 ❹黑田俊雄(一大正五 A. D. 1916)望月信亨共編 ❺明治三九刊 ❻京都宗粹社

法然上人傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den. ❷二卷 ❸存、淨土宗全書第一七 ❹增上寺所藏の國寶にして現缺二卷である。詞書は御二條院宸翰(梶井宮空性法親王書き續ぎあり)。畫圖は土佐吉光の筆と傳ふ。其の當否は別として四十八卷傳や拾遺古德傳と比肩すべく、同じく鎌倉末期の熟達しきつた大和繪で卷數の多い繪卷雄起全盛時代の作品である。山石掛木家屋人物まで減筆式の一種の趣致があり、殊に最初の福圓行列の騎馬の如きは簡身庭騎繪卷を思はせしめる妙筆である。繪も詞も共に首尾を欠いてゐるのは非常に惜まれてゐる。詞書は四十八卷傳の如くに修飾を施さず簡要を提んで居て寧ろ傳法繪に近い感がある。慶長十四年增上寺中興春光觀智國師が後陽成天皇から賜つたものである。「法然上人傳」と云ふは後に附せる外題である。

上人の父の歿後に塔を建て中陰供養するところより初まり、母子訣別、入寺、修學(第一卷)。比叡登山、剃髮出家、青龍出現、法皇殿御談義、義導大師來現、三尊影現、大原談義、上西門院御談義、同說戒と小蛇得益上天(第二卷)にて終つてゐる。

(井川定慶)

法然上人傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den. 黑谷上人傳、黑谷法然上人傳、十卷傳、西山十卷傳 ❷十卷 ❸存、淨土宗全書第一七、眞宗聖教大全附錄 ❹淨土眞宗教典志第三に云く「作者未詳。三河山中法藏寺藏本。世稱a西山十卷傳o典實同。古德傳o怪異類o正源明義鈔o問有r似a舜昌傳o(第六載o吾眞略傳)」云々。黑谷上人傳の下を見よ。 ❺貞文六年刊(龍大、二九六五・一六〇)寫本(谷大、宗大・九四八)(龍大、二九六五・一六一)(正大、一五一六・七五)

法然上人傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den. 法然上人傳記、九卷傳、法然上人繪詞傳 ❷九卷 ❸存、淨土宗全書第一七 ❹法然上人傳記の下を見よ。 ❺享和三寫 ❻(正大、一五一六・七三)

法然上人傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den. ❷一卷 ❸存 ❹鶴田秀助著 ❺(京專)

法然上人傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den. ❷一卷 ❸淨土眞宗教典志第三に云く「栗生野光明寺所傳」云々と。 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二

法然上人傳繪詞 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den-e-kotō. ❷九卷 ❸存、淨土宗全書第一七 ❹東郷芝姉定院所藏九卷の繪詞は德川時代の寫本である。題號の下に「向福寺琳阿彌陀佛」と記されてゐるところから從來琳阿彌陀佛の編纂とされ「琳阿本」と呼びなされてゐるが、琳阿は本繪詞傳の作者ではなく恐らくはこの寫本の底本の所藏者であつたらうと思ふ。京郷西本願寺所藏の親鸞上人傳繪に本文とは別筆でそれも室町時代の書風で向福寺琳阿彌陀佛の署名を見うける。此は明らかに或る期間の傳持者を物語るものである。今の法然上人傳繪詞も亦底本には別筆で琳阿の名を書き記されてゐたのを妙定院本には一筆で寫されたために編者かと誤り推察せられるやうになつたらしい。現今男爵園伊能氏所藏となつてゐる法然上人繪殘缺一卷は鎌倉時代末期の優秀作品と思はれるものであるが、其の內容は本傳第七卷第二段十人の讃岐配所以下、敎兒、勝尾寺にての一切經開顯供養の場面に該當する。而して園家所藏本とても原本でなく異本對校のあとを見うけるから此の原本は風に鎌倉末に出來てゐたらしい。殊に卷一の「當以三世におほく佛出給ひ」云々の序分を始め本文往々「本朝祖師傳記繪詞」(傳法繪)四卷と相違するから、この九卷の上人傳の最初の原本も嘉祐三年源空が作れる「傳法繪」に據つて改作せられたものであらう。その一本が向福寺琳阿の所藏となり、他の古い一本の殘缺が展轉して近年德川家から園男爵家に移り、所藏せられるに至つたらしい。序分、誕生の奇瑞から生立ち、習學、開宗、敎化、法難、歸洛、往生、滅後の追慕、遺誡奉持、茶毘、隱棲夢境に至るまで詞書も繪圖も完備してゐる。

(井川定慶)

法然上人傳記 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den-ki. 九卷傳、法然上人繪詞傳 ❷九卷 ❸存、淨土宗全書第一七 ❹本書は卷數によつて普通には「九卷傳」の名で呼ばれてゐる。四十八卷傳の稿本ではあるまいかと臆說をなす人もあるが首肯し難ねる。卷首に於て非常に錯雜してゐる。卽ち最初に「法然上人繪詞卷第一」と內題して序文本文とも殆んど四十八卷傳に相似の內容にて一、上人誕生事。二、雙竹鳥遊覽事。三、夜討の事。四、臨終の事。五、登善提寺事。六、爲登山母乞暇事。七、參會法性寺殿御出事。八、登西塔北谷持法房事を述べて後は絕ち、それより更に改題して「法然上人傳記卷一上並序」として序。上人誕生事。時國夜討に逢ひ小矢兒敵を射給ふ事。以下順を逐ふて叙述され、敎化、往生、滅後、追善、法難、門弟の事に至り完結してゐる。さて此の九卷傳なるものは初めの「法然上人繪詞卷第一」一卷の殘缺本に「法然上人傳記九卷(十八卷)」を合したものであつて內容よりして考ふるに四十八卷

傳の未定稿といふよりも寧ろ其等の成れる後に西山證空上人の門流の手によつて傳法繪、其他諸傳の說を參酌して作成せられたものかと見るべきであらう。
❹寫本(龍大、二九六五・一六四—一六五)

(井川定慶)

法然上人傳記縮詞 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den-ki-ō-shi. 本朝祖師傳記繪詞 ❷九卷 ❸存、淨土宗全書第一七、國文東方佛教叢書第一輯第五傳記部 ❹杜空(—嘉祿頃、A.D.1235—1237—) ❻本朝祖師傳記繪詞の下を見よ。

法然上人傳記附一期物語 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-den-ki-tsukari-ichi-go-mono-gatari. 醍醐本法然上人傳記 ❸存、佛教古典叢書第三、法然上人全集(增補版) ❹醍醐三寶院に藏するを以て一に醍醐本法然上人傳記と稱す。同院七十九世の座主義演の書寫にかゝる。全文漢語體にして第一篇一期物語。第二篇禪勝房との問答。第三篇三心料簡等。第四篇別傳記。第五篇柳臨終日記。第六篇三昧發得記の六篇を輯む。

最初に「見聞出勢觀房」とあるを以て全篇勢觀房編纂の如く見るも第一篇のみにして他の各篇を互細に檢するに別々にして必ずしも同一人の筆になりしものにあらず、第五篇の終りに「上人入滅以後及ぶ三十年ニ當世奉ゝ値ニ上人ゝ之人其數多ゝ、時代若移者、於ニ在生之有樣ニ定懷ニ曖昧ニ歟。爲ゝ之今期抄。」記見聞事。」とあるを以て最初の原本成立年代略々想定し得るのみにて詳かならず。信瑞の明義進行集と相通ずるところもあり。されば勢觀房の見聞を主として諸弟子の間に傳へられたる說話を纂集せしには あらざるか。

第四篇別傳のうちに上人の父の死を登山以後とせることを傳ふは他傳に見ざる新說である。其の他本傳に輯むる法話に從來知られざる新奇なるを見出しこの一書は內容簡略なる割に珍重すべきもの多し。

(井川定慶)

法然上人と其弟子 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-to-sono-de-shi. ❷一卷 ❸存 ❹勝井辰純著 ❺大正一三刊 ❻大阪眞龍社

法然上人之年譜 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-no-nen-pu. ❸存 ❹空譽 ❺寬文一〇刊 ❻龍大、二六八五・四)

法然上人の一生 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-no-i-sshō. ❷一卷 ❸存 ❹澤田露處著 ❺大正一二刊 ❻京都一雲社

法然上人の教義 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-no-kyō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹江上秀穆著 ❺大正六刊 ❻東京淨土教報社

法然上人の事 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-no-koto. ❸存、佛教古典叢書第三 ❹住信著、江藤澂英解說

法然上人の他力教 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-no-ta-riki-kyō. ❷一卷 ❸存 ❹利井興隆著 ❺明治四四刊 ❻(龍大、一二二八・九〇)×(谷大、宗洋・二七五)

法然上人の念佛義 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-no-nen-butsu-gi. ❷一卷 ❸存 ❹上杉文秀著 ❺大正九刊 ❻京都法藏館

法然上人祕傳 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-hi-den. 圓光大師祕傳 ❷三卷 ❸存、淨土宗全書第一七、佛教古典叢書第三 ❹隆寬(久安三—嘉祿二(A.D.1147—1226)) ❻御谷思說の圓光大師御傳條起に「昔我大師御在世の時、常に左右に親炙せる門弟の中に、聖覺法印、隆寬律師、勢觀上人などをの〳〵師の行業を錄しとゞめられける。傳記數編古より世に行はれて大師の遺跡著るし」云云とある。聖覺の黑谷源空上人傳(十六門記)、隆寬の法然上人祕傳三卷と從來充當して眞撰とせられてゐる。そして勢觀房の分は近年醍醐三寶院に於て見出された「法然上人傳記、附一期物語」とすべきであらう。法然上人傳記、醍醐三寶院に於て見出された「法然上人傳記、附一期物語」とすべきであらう。法然上人傳記、醍醐三寶院に於て見出された「祕傳抄三卷隆寬律師の所編といへり眞偽未詳」と述べてゐる。

和文の體を以て託胎より說き起し次第を逐ふて事跡を記してゐるが配所より入滅に至る間の記事が脫略してゐる。末尾には滅後の法難を擧げ安貞二年に行はれた聚生野の茶毗、貞永二年の蓮嶺二堂院に於ける建塔に關することをも記して最後に

「此ノ祕傳ト云フハ上人御在世ノ時遠々ニシルシ置キ給ヘル御筆ナリ有時上人ヒソカニ取出シテ父母ノ御事ヲ思シ召シ出シテ御涙ヲ流サセ給ヒシヲ隆寬セノコシニ是ヲ拜見シ奉リテ三箇年程訴訟ヲイタヌ上志シノ至リヲ感シ給ヒテ相傳セサセ給ヘリ上人ニ條深キ人ハサヒハヒニ此ノ祕傳ヲ拜見シ奉ルベキナリ。」

と結んでゐるのであるが、この由緣が却て疑惑を招かしむるのみならず、隆寬その人が嘉祿三年七月關東に配流せられ同年十二月(安貞と改元)相模國飯山に於て入寂してゐるから安貞二年次後の事は固より記述せられる筈がないのである。末尾だけを後人が追記したといふよりも最初から全部隆寬の作ではなからうと見ておくのが眞に近いやうである。享保十七年正月の印行にかゝる片假名本が世に行はれてゐる。

尙は別に「法然上人祕傳遺流記」二卷あり。元祿三年一月、沙門行譽敬書と記した片假名本が印行されてゐるところを補遺する意圖でつくられたと思はれる。信憑し難いものであるが、前書とともに、弘願本の法然聖人傳、正源明義抄の一類と往々相通ずるところあるは注意すべきである。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第三、淨土眞宗聖教目錄 ❹享保一七刊(正大、一五一六・六五×龍大、二九六五・一六六×谷大、宗大・一四一八)延寶五寫(谷大、宗大・二五六七)寶永七寫(正大、一五一六・六四)(谷大、宗大・一四一八)享保三寫(谷大、宗大・四〇六六)

(井川定慶)

法然上人祕傳遺流記 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-hi-den-ori-ru-ki. 法然上人遺流記 ❷二卷 ❸存 ❹行譽 ❻淨土眞宗教典志第三に云く「卷尾云ゝ沙門行譽敬書ゝ叙ニ左遷事ゝ與ニ正源明義抄ゝ大同小異」云々。法然上人祕傳の下參照。 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第三 ❹刊本(谷大、宗大・一四七二)

法然上人母儀教導 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-bo-gi-kyō-dō. ❷一卷 ❸存 ❹(龍大、研究)

法然上人母子往來之書 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-bo-shi-ō-rai-no-sho. ❷一卷 ❸存 ❹(帝國、一三九・一三一)

法然上人法語文 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-hō-go-bun. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、研史)

法然上人芳躅集 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-hō-shoku-shū. ❷一冊 ❸存 ❹紀念出版會編 ❺明治四二刊 ❻東京宗教大學分校紀念出版會

法然上人奉讚 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-hō-san. ❹良親作 ❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄

法然上人遺訓旁觀記 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-i-yui-kun-bō-kwan-ki. ❷一卷 ❸存 ❺元祿一一刊 ❻(立大、A三〇・七三)×(正大、一五四・二七五—二七六)

法然上人遺訓旁觀記釋難 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-yui-kun-bō-kwan-ki-shaku-nan. ❷一卷 ❸存 ❹環洞遙 ❺享保四刊 ❻(佛乘院)

法然上人利生記 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-ri-shō-ki. ❷二卷 ❸存 ❺寶永元刊 ❻(龍大、研史)

法然上人臨終圖 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-rin-jū-no-zu. ❷一幅 ❹狩河南

❻建曆二(A.D.1212)二月二日畫

❻淨土眞宗教典志第三に云く「建曆二年壬申二月二日。佛西沙門狩河雲之。現在ニ新黑谷金蔵光明寺」云々。

法然上人和歌集 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-wa-ka-shū. 空花和歌集 ❷一卷 ❸存、國文東方佛教叢書第一輯第八 ❹浪澄(慶安四—正德二(A.D.1651—1712))編 ❻空花和歌集の下を見よ。

法然聖人私日記 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-shi-nik-ki. ❷一卷 ❻淨土眞宗教典志第二に云く「建久九年記。夢想記。臨終行儀。各一卷。並出ニ西方指南鈔中本末拾遺語燈錄上」云々。夢想記、臨終行儀共に西方指南鈔中本、拾遺語燈錄上に收められて現存す。

法然聖人夢想記 ❶(日)Hō-nen-shō-nim-mu-sō-ki. 夢感聖相記 ❸存、拾遺黑谷上人語燈錄卷上(大正八三・二三九No.2912) ❹源空(長承二—建曆二(A.D.1133—1212)) ❻淨土眞宗教典志第一に云く「與ニ拾遺語燈上夢感聖相記ゝ同。夢感ニ義導御證ニ明念佛紀事」云々。

法然聖人臨終行儀 ❶(日)Hō-nen-shō-nin-rin-jū-gyō-gi. 臨終禮讚記 ❸存、拾遺黑谷上人語燈錄卷上(大正八三・二四三No.2912) ❼(參考) 淨土眞宗教典志第一

法然親鸞兩聖人誓世紀念號 ❶(日)Hō-nen-shin-ran-ryō-shō-sei-kinen-kō-gō. ❷一卷 ❸存 ❹誓世社編 ❺明治四四刊 ❻谷大、宗大・三二九八)

法然內裏問答 ❶(日)Hō-nen-dai-ri-mon-dō. ❷一卷 ❸存、假名聖教(惠空筆寫)八十八部

❻本問答は何れの目錄にも其の批判を見ず又何時、何人の作なるやは不明であるが、內容は、建久元年二月、內裏に於て、法皇御不例の事によりて、無動寺の僧正、橫川の僧正、大乘院の覺範上人、仁和寺の淨寶、石山の上人及び法然上人の六大德が參內せられた節、法皇の勸によりて各出離の道を語り、種々論義會通の結果、法然上人の專修念佛の道に信伏せる旨を記するもので、題號もなく、從つて始めに假名聖教一部には惠空師は無題とし、註して法然內裏問答と云ふ。

❻寫本(谷大、宗丙・四八)

(秀譜住)

法然と親鸞 ❶(日)Hō-nen-to-shin-ran. ❷一卷 ❸存 ❹木不尙江著 ❺明治四四刊 ❻(京大、一・二一ゐ・一六)(谷大、宗洋・五三八)×(龍大、二九六五・三〇四)

法服格正 ❶(日)Hō-fuku-kaku-shō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第七四服具叢書第二 ❹默室良要撰、逸乘編 ❻比丘の常に携行すべき三衣の功德並にその製法を袈裟功德分、名義甚深分、應體色量分、割截裁縫分、條葉次第分、虎衣國相分、施設飼組分、頂戴搭肩分、浣徒淸淨分、誡守奉重分の十項に分ち叙せるもので、諸種の經律を引用し、殊に曹洞宗祖道元の說を鼎げて禪宗所傳の袈裟に關する思想、信仰を述べ、附錄として坐具、褊衫、直綴、帶子に就て略說が行はれてある。

❻明治二九刊(帝國、一〇九・一二四)×(駒大)(谷大、餘大・三〇二五)明治一六寫(駒大)

(高瀨承厳)

法服格正事考 ❶(日)Hō-fuku-kaku-shō-jī-kō. ❸存 ❻寫本(駒大)

法服正儀圖會略釋 ❶(日)Hō-fuku-shō-zu-e-ryaku-shaku. ❻刊本(正大、一一八九・三九)

法佛集 ❶(日)Hō-butsu-shū. ❷一卷 ❸存 ❺寬永一六刊 ❻(帝國、一一一・六五)

法寶義論 ❶(日) Hō-bō-gi-ron. (支)Fa-pao-i-lun. ❷一卷 ❹北齊僧釋師 ❼(參考) 入唐新求聖教目錄

法寶聚 ❶(日)Hō-bō-ju. ❸存 ❻寫本(龍大)

法寶藏 ❶(日)Hō-bō-zō. ❷一卷 ❸存 ❻佛教の術語の索引。 ❻寫本(谷大、餘大・一九〇五)

法寶藏陀羅尼經 ❶(日) Hō-bō-zō-da-ra-ni-kyō. (支)Fa-pao-tsang-to-lo-ni-ching. 文殊師利法寶藏陀羅尼經、文殊師利菩薩八字三昧法、文殊法藏經、文殊師利陀羅尼經 ❷一卷 ❸存、大正二〇・七九一No.1185、鎌餘五、卍二二・四、北432舊、南446舊、元440舊、明北444羊、清444羊、麗432讀、天440舊、智404讀、法407讀、至德2資、明南432景No.446 ❹菩提流支(太建四—開元一五A.D.572—727)譯 ❻唐景龍四(A.D.710) ❻文殊師利法寶藏陀羅尼經の下を見よ。

法寶壇經 ❶(日)Hō-bō-dan-gyō. (支)Fa-pao-t'an-ching. 六祖大師法寶壇經、壇經、六祖法寶壇經、六祖壇經 ❷一卷 ❸存、大正四八・三四五No.2008、鎌倉

四、卍三一・一、明応1518版、慶長1547版、明治1517版、Nj. 1525 ⑩法華経玄賛一一一一天一一A. D. 638—713)、法華経疏、法華玄賛 ⑪天慶大法寺法華経疏 ⑫一一刊(弘大、一一・一一五六・七)、元禄三刊(前大)

法華玄賛 ❶(日)Hō-bō-dan-gyō. 国書法華経疏 ❷存、国書法華経疏 ❸一一刊(前大)

法華玄賛 ❶(日)Hō-bō-dan-gyō. 大慈大悲法華経疏 ❷一一巻 ❸存 ❹法華経(貞観一一一一天一一A. D. 638—713)山田大善註 ❺明治一一八刊 ❻(前大)

法華玄賛 ❶(日)Hō-bō-dan-gyō. 来山法華法華経疏 ❷一一巻 ❸存 ❹黄檗一一刊 ❺(前大)

法華玄賛 ❶(日)Hō-bō-dan-gyō. 来山法華法華経疏 ❷一一巻 ❸存 ❹(参考) 仏書解説大辞典

法華玄賛開宗決一一滅 ❶(日)Hō-bō-dan-gyō-kai-sui-it-teki. 大慈法華経疏法華一一滅 ❷五巻 ❸存、慶安大系法華経疏法華一一 ❹天和慶安(慶安元一享保一一)○ A. D. 1648—1735)頃 ❺享保一〇(A. D. 1725)

❻大慈法華経疏の意を述べたる法華経疏に対して、開宗決を説くたるもの。自ら開宗決疏、開宗決疏、及び新宗の疏説を総括して決を述べたるもので、宇内之宗はんよりは寧ろ特殊的に宗決疏のみと云ふことを指摘を示す。故に「宗ずるに天れ疏説は」四人疏等に之を分にし「法華宗のものと云説」し、宗決疏説しても、同説の疏説は分ずず、同説の疏説は分ずず、同説の疏説は分ずず

温(貞政一二—明治一八 A.D. 1820—1885)
⑨寫本(龍大、研佛)

法沒盡經 ❶(B)Hō-motsu-jin-kyō. (支)Fa-mo-chin-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉無法護(—泰始二—建興元 A.D. 266—313—)譯 ❺第二譯。 ❻(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

法沒盡經 ❶(B)Hō-motsu-jin-kyō. (支) Fa-mo-chin-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹東晉祇多蜜譯 ❼(參考) 仁壽錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

法門學則記 ❶(B) Hō-mon-gaku-soku-ki. ❷六卷 ❸存 ❹賢遵 ❺弘化二寫 ❻(谷大、宗大・二九四九)

法門儀 ❶(B)Hō-mon-gi. (支) Fa-men-i. ❷一卷 ❸智顗(大同四—開皇一七 A.D. 626—597) ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

法門禦寇篇 ❶(B)Hō-mon-gyo-kō-hen. ❷一卷 ❸存 ❹聖禮著 ❺德川末期寫 ❻(金剛三昧院)

法門見聞鈔 ❶(B) Hō-mon-ken-mon-shō. 淨土法門見聞鈔 ❷一卷 ❸存、假名聖教(惠空筆寫)八十八部、眞宗假名法典卷中、眞宗帖外聖教第二、眞宗法要拾遺第五、異義集第六(了祥稿本)、同第一(眞宗大系第三六)、高田大師和漢文聖教第七、 ❺淨土法門見聞鈔の下を見よ。 ❼(參考) 眞宗法彙目錄左房、藏外法要寂寥私記、眞宗法要藏外諸書背寫錄 ❻慧空自筆本(谷大、宗丙・四八)

法門雜集錄 ❶(B)Hō-mon-zas-shū-roku. ❷三卷 ❸存 ❹文化四刊 ❻(京大、一・二六六・一五)

法門鋤穴九 ❶(B) Hō-mon-ji-ki. (支)Fa-men-chu-kuei. ❷一卷 ❸存、卍續二乙・二〇・四 ❹清白眼淨符著 ❺本書は壽昌淵下である金陵天界寺覺浪道盛禪師の法嗣、清の白眼淨符和尚が、禪宗史上の問題たる雲門法眼の二宗は馬祖下なりや石頭なりやの分派の論爭に斷案を下した天皇道悟論である。即ち馬祖下に天王道悟あつて引いて雲門法眼の二宗を屬せしめんとする說であるが、淨符は諸書を引證して其の妄を駁し、石頭下に天皇道悟あつて引いて雲門法眼二宗を派出すと論證し、二宗が青原下に屬することの正統なる所以を力說したものである。

清康熙六年九月自序を撰し、同七年秋初、法弟たる天界寺の大來の小論、同八年冬至前三日(A.D. 1669)雲門龜聖禪院自若深和尚の序を得て梓行したもので、我國に於ては元祿三年三月(A.D. 1690)諸岐の龜山愛存禪師に依つて五家禪正を附刻して上梓せられ、指月慧印禪師に依つて註解を加へられ法門鋤穴解(法門鋤穴不能語箋解)として安永四年並に弘化三年に江戸駒込の諏訪山吉祥寺より刊行されて流通したものである。

❼(參考) 禪籍志卷下 (大久保堅瑞)

法門鋤穴九箋解 ❶(B) Hō-mon-ji-ki-sen-kai. ❷一卷 ❸存 ❹慧印指月(元祿二—明和元 A.D. 1689—1764)龜州、陸道本光(—安永二A.D. 1773)校 ❼(參考) 禪籍目錄

法門席次表及建言 ❶(B)Hō-mon-seki-ji-hyō-oyobi-ken-gon. ❷十二紙 ❸存 ❹寫本(正大、一五一四・一八)

法門爭論 ❶(B) Hō-mon-so-ron. ❷一卷 ❸存 ❹西吟(慶長一〇—寶文三 A.D. 1605—1663)、月感(慶長五—寶寶二 A.D. 1600—1674) ❺(龍大、一七三・九)

法門念佛三昧經 ❶(B) Hō-mon-nen-butsu-zan-mai-kyō. (支) Fa-men-nien-fo-san-mei-ching. ❷一卷 ❸失譯 ❼(參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、歸奉錄第三、武周錄第一一

法門筆記 ❶(B) Hō-mon-hik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹定月 ❹寫本(龍大、二六八四・一五四)

法門百首 ❶(B) Hō-mon-hyaku-shu. ❷一卷 ❸存、群書類從第二四釋家部、國文東方佛教叢書第一輯第八 ❹淑然(—崇德帝御代A.D. 1124—1140—) ❺本書は春・夏・秋・冬・祝・別・懇・述懷・無常・雜の十門に分ち、その各々に法華經・涅槃經・摩訶止觀を初め、多くの諸經論釋の文句十餘づゝを揭げて題とし、夫々に就いて一首づゝを詠じ、一々の和歌の後に詳しく其の意を叙したものであつて、百首一連和歌と文章とが相待つて渾然たる一大佛教文藝をなしてゐる。就中その最後の一文は本書の跋とも見らるべく、其に依れば本書の著者は和歌を以て妄想をしづめ、涅槃の岸に至る方便と考へてせしものなるを知る。

因みに、本書の和歌の數首は新古今集、新勅撰集の中に採錄せられて居る。著者淑然は俗名を藤原鎮雲と云ひ、丹波守雅忠の子で、壹岐守に任ぜられたが、後に剃髮して兄寂念、弟淑超と共に大原に隱栖し、世に大原の三寂と呼ばれた中の一人である。崇德天皇の御崩寵を被り、又西行法師等と親交あつた事は、彼の和歌の詞書などに徵して明かであるが、その生沒年時等は今明かでない。 (橋純孝)

法門名義 ❶(B)Hō-mon-myō-gi. (支)Fa-men-ming-i. 法門名義集、法門名相集 ❷一卷 ❸存、大正五四・一九四 No. 2124 ❹唐李師政撰 ❼(參考) 智證大師請來目錄

法門名義集 ❶(B) Hō-mon-myō-gi-shū. (支)Fa-men-ming-i-chi. 法門名相集、法門名義 ❷一卷 ❸存、大正五四・一九四 No. 2124 ❹李師政撰 ❺唐武德元(A.D. 618)

❻本書はその書名がすべてを語れる如く、衆典を探つて標法の名目を類集し、以てその義理を略解せるもの。內容は總じて左の七品に分かれる。(一)身心品、(二)過患品、(三)功德品、(四)理敎品、(五)實聖品、(六)因果品、(七)世界品。姑らく各品の法數を項目的に列次すれば左の如くである。(一)身心品=(1)四大、(2)六大、(3)五陰、(4)六根、(5)九識、(6)十二入、(7)十八界。

(二)過患品=(1)二邊、(2)三毒、(3)五欲、(4)五蓋、(5)八倒、(6)四倒、(7)

五蓋、(8)四瀑、(9)八邪、(10)九惱、(11)三障、(12)四魔、(13)十纏、(14)三漏、(15)六十二見、(16)十使煩惱、(17)五住地煩惱。

(三)功德品=(1)三歸、(2)四依、(3)五戒、(4)八戒、(5)十無盡戒、(6)三聚淨戒、(7)六念、(8)六和敬、(9)六度、(10)十波羅蜜、(11)四攝、(12)四無量心、(13)八大人覺、(14)四親近行、(15)三明、(16)六通、(17)八解脫、(18)三慧、(19)二智、(20)四智、(21)二道、(22)四修、(23)十智、(24)五忍、(25)十想、(26)四禪、(27)十二頭陀、(28)十一切處、(29)八勝處、(30)五分法身、(31)七淨、(32)七財、(33)四相、(34)四心、(35)三十七道品、(36)十力、(37)四無畏、(38)四無礙智、(39)十八不共法、(40)十號、(41)五眼、(42)三十二大人相、(43)八十隨形好。

(四)理敎品=(1)三佛、(2)三寶、(3)三藏、(4)三乘、(5)五乘、(6)二諦、(7)四諦、(8)三法印、(9)六塵、(10)四優壇那、(11)四種悉檀、(12)十二部經、(13)三種般若、(14)二種涅槃、(15)二無我、(16)三無性、(17)三空、(18)三無爲、(19)十八空、(20)三轉、(21)七種善、(22)五明論。

(五)實聖品=(1)七種學人、(2)四沙門果、(3)二種肆支佛、(4)菩薩摩訶薩乘—十信・十回向・十地・等覺地・妙覺地、(5)四十二賢聖、(6)十二住地、(7)大乘四向四果、(8)四位。

(六)因果品=(1)三行、(2)三業、(3)四報、(4)二報、(5)十因、(6)四緣、(7)十二因緣。

(七)世界品=(1)三世、(2)三界、(3)三世間、(4)四天下、(5)二十八天、(6)二十五有、(7)五濁、(8)八難、(9)四趣、(10)六道、(11)三千大千世界。

序に「但し法門無量にして鄙識屈あり、其は猶し管を以て天を窺ひ、蚝を以て海を酌むが如し。淺を得て深を遺る。千に一も知らず。請ふ、蓮者の其の闕を補ふを俟つ焉」とは撰者李師政の自ら記す所。讀來つて撰者の學的態度に精首すべきを覺ゆ。

❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄57.262 (前田慧璃)

法門名相集 ❶(B) Hō-mon-myō-sō-shū. (支)Fa-men-ming-hsiang-chi. 法門名義集、法門名義 ❷一卷 ❸存、大正五四・一九四 No. 2124 ❹唐李師政撰 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

法門可被申樣之事 ❶(B) Hō-mon-mi-sama-kaki-yō-no-koto. ❷存、日蓮聖人御遺文之內 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A.D. 1222—1282) ❺文永六(A.D. 1269)十二月 ❻東京組書刊行普及會

法門論議雜叢 ❶(B) Hō-mon-ron-gi-zas-sō. ❷三百六十七册 ❸存 ❹寫本(正大、一五五九・一五)

法益壞目因緣經 ❶(B) Hō-yaku-e-mokō-in-en-kyō. (支) Fa-i-huai-mu-yin-yuan-ching. 阿育王息壞目因緣經、阿育王子法益壞目因緣經 ❷一卷 ❸存、大正〇・一七二 No. 2045、續藏一〇、卍二六・九、北1029奈、南1037奈、元1029奈、明北1360群、清1362群、龍1024奈、天1025奈、指252奈、法1007奈、至1470執、明南1110所、Nj. 1267 ❹曇摩難提譯 ❺苻秦建初六(A.D. 381) ❻阿育王息壞目因緣經の下を見よ。

法喩經 ❶(B)Hō-yu-kyō. (支) Fa-yu-ching. 法句譬喩經、法句本末經、法句喩經 ❷四卷 ❸存、大正四・五七五 No. 211、續藏六、卍二六・八、北1023鼓、南1032鼓、元1023鼓、明北1146亦、清1346亦、龍1027鼓、天1029鼓、指995鼓、法1010寶、至1473餐、明南1116藏、Nj. 1353 ❹法炬法立共譯 ❺西晉惠帝代(A.D. 290—306) ❻法句譬喩經の下を見よ。

法與大尼之緣事 ❶(B)Hō-yo-dai-ni-no-en-koto. ❷一卷 ❸存、癡雲尊者全集第一四 ❹癡雲尊保三—文化元 A.D. 1716—1804)註釋、皓月尼(寶曆六—天保四 A.D. 1756—1837)譯 ❺寬政一二(A.D. 1800)

❻この譯文は昆奈耶雜事三十二に依りて、法興大尼が象女時代より、次第に三歸五戒十戒を授かり、式叉摩羅となり、六法六隱法を學び遂に阿羅漢果を證し、許婚者昆舍佉と婚儀の際神通を現したる因緣を記してゐる。

❼皓月尼自筆本(京都長福寺) (高見寬應)

法與尼在家得果經 ❶(B)Hō-yo-ni-zai-ke-tok-kwa-kyō. (支) Fa-yu-ni-tsai-chia-te-kuo-ching. ❷一卷 ❸根本說一切有部毘奈耶雜事第三十卷第三十二卷の抄出。 ❼(參考) 開元錄第一六、第一七、貞元錄第二六

法用私記 ❶(B)Hō-yō-shi-ki. ❷一軸 ❸存 ❺寬保元刊 ❹(金剛三昧院)

法要拾遺 ❶(B)Hō-yō-shū-i. 眞宗法要拾遺 ❷五卷 ❸存 ❹慧雲(安政四—昭和五 A.D. 1857—1930)撰 ❼(參考) 眞宗全書刊行豫定書目

法要章 ❶(B) Hō-yō-shō. 眞宗要柔鈔 ❷一卷 ❸存、眞宗大系第三六祕事法門集下篇、信仰叢書之內 ❺寶曆元—明和八(A.D. 1751—1771)

❻この書は一本に『眞宗要柔鈔』と題す、撰號を蓮如とするもの(信仰叢書編入本)あれど、文中に蓮如樣、蓮如上人等と尊に列ねるを見ても決して然らざるを察すべきである。是れ祕事者が他を誘引せんが爲に著はしたものにて、文中に御開山は五百年以前の御出世とあるより推斷せば、寶曆明和の頃に成つたのであらう。

先づ首に請行無常の『偈』と色句散の『歌』を對照し、『御文』一帖目第十一通(前半)と二帖目第十一通とを合樣揭示し、宿善・善知識・光明・名號・信心の五重の義を略說し、斯くて之を更に縱橫に解明しつゝ「何となく後生を願ひに參る人は初心の者なり、是等の人は先づ寺道場へ參りて御法談聽聞せらるべし。御坊寺の創幕の御敎化は表向一通の御法談なり。然るにひしとたのみたる疊えもなく何年何月何日何の刻に御たすけにあづかりたる疊えなくして頼み奉りたの

御助け一定だの我往生は治定だのと云ひ、また眞の善知識に遇はずして斯樣の御ことはりまぎれもなう聽聞申分けたのと口には云ふとも所詮なき悲しきことなり。設令安心決定した御坊方にても内心に深く善へて正眼の本末は卒爾には申さるまじ、若しさはなくして正眼を打ちあけて申さるれば其の人は御開山の御同行にてはなきなり。御開山は五百年以前の御出世なれば善知識に問へとありても御尋ね申すことはならず、代々御門跡には尋ねに行く人もなくたとひ尋ねに行きたりとも容易く御信心の御授けはあらず、然れば一人一人に有緣の善知識に逢はねばならぬなり。上下別なく問ふはよけれども學者や出家に問ふべからず。坊主や學者に御尋ねなされば自除々他になるべし、學者坊主に問はず同行善知識の御勸めを如來の勅使御開山樣の御代官と思ひ謹みて御聞なさるべし」等。眞宗正依の「教行信證の信卷」「和讃」「御傳鈔」「御文」等を巧に惡用しつゝ愚昧の徒を罠に陷れる邊を見るべきである。

御子身中の虫、結核徹髓、肉身に密着して骸骨にまで喝せんとす。古往今來眞宗の聖教を無下に蔑用して自他惡道に墮するものはこの邪義祕事法門である。本書亦た斷じて眞宗の典籍に非ざることを。

（山上正尊）

法要典據弘通之留 ❶(B)Hō-yō-ten-kō-gō-ō-gō-tome. ❷一卷 ❸存 ❹安政三寫 ❺(龍大、別藏)

法要抜出 ❶(B)Hō-yō-nuki-dashi. ❷一卷 ❸存 ❹寛文寫本(龍大、一〇二四・一二)

法要類文 ❶(B)Hō-yō-rui-bun. 假名聖教法要九十題 ❷二卷 ❸存 ❹日下無能 ❺明治一三刊(谷大、宗大・一四三)(帝國、五・一四九)明治一八刊(谷大、宗大・三八)

法螺經 ❶(B)Hō-ra-kyō. (支)Fa-luo-ching. 妙吉祥菩薩所問大乘法螺經、妙吉祥所問法螺經 ❷一卷 ❸存、大正一四・五一六、Nj.422、鎌宮七、卍一六・一、北1212冠、南1152冠、元1222冠、明北1300斯、清1662斯、麗1219千、天1236冠、法1332毅、至1454章、明南1051思、Nj.995 ❹宋法賢(—成平四、A.D.1001)譯 ❺妙吉祥菩薩所問大乘法螺經の下を見よ。

法樂寺過去帳 ❶(B)Hō-raku-ji-kwa-kō-chō. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第一七附錄之內 ❻此の抄本は過去帳原本より慈雲尊者を中心として法緣者四十一名を示寂の日の下に拔出してゐる。 ❼(大阪法樂寺)

法樂比丘尼經 ❶(B)Hō-raku-bi-ku-ni-kyō. (支)Fa-le-pi-chiu-ni-ching. (E)M.44 Ceja-rdalla Sp. ❸存、中阿含第五八(大正一・七八八Nj.9,210)

（高見寛應）

法樂比丘尼經 ❶(B)Hō-raku-bi-ku-ni-kyō. 現代意譯法樂比丘尼經 ❸存、現代意譯根本佛教聖典叢書第一〇論部 ❹馬鳴了諦、甲斐實行共譯

法灌澈禪師語錄 ❶(B)Hō-kan-chō-zen-ji-go-roku. (支)Fa-lan-cheng-ch'an-shih-yu-lu. ❷一卷 ❸存 ❹清法瀾原撰語、清呈編 ❼(參考)禪籍目錄

法理書 ❶(B)Hō-ri-sho. 夏中問答 ❷一卷 ❸存 ❹(立大、A〇四・三四〇—三四一)×正大、一八六・一七)

法律阿梨樹章 ❶(B)Hō-ritsu-a-ri-ju-shō. ❷二卷 ❸存 ❹忍辱鎧日榮 ❺享保一五(A.D.1730) ❻邪惡狂磨鈔を破斥したもの。 ❽寛延二刊 ❾(立大、A〇五・一一一)(哲、え・五・中・一二)(谷大、餘大・三二五八)

法律經 ❶(B)Hō-ritsu-kyō. (支)Fa-lu-ching. 法律三昧經 ❷一卷 ❸存、大正一五・四五八 Nj.621、鎌列二、卍一七・二、北551作、南554作、元552作、明北1094初、麗554念、天557作、指509念、法540念、至1394僞、明南1542從、Nj.1069 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A.D.223—253)

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. (支)Fa-lo-san-mai-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❷(參考) 出三藏記第三、法經錄第五

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. (支)Fa-lo-san-mai-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹後漢安世高(—建和二—建寧三A.D.147—170—)譯 ❺第一譯。 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. (支)Fa-lo-san-mai-ching. 法律經 ❷一卷 ❸存、大正一五・四五八、Nj.621、鎌列二、卍一七・二、北551作、南554作、元552作、明北1094初、麗554念、天557作、指509念、法540念、至1394僞、明南1542從、Nj.1069 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A.D.223—253)

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. 法律三昧經 ❷一卷 ❸存、大正一五・四五八 Nj.621、鎌列二、卍一七・二、北551作、南554作、元552作、明北1094初、麗554念、天557作、指509念、法540念、至1394僞、明南1542從、Nj.1069 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A.D.223—253) ❻本經は佛、阿難、舍利弗等の大衆會に對し、新學の菩薩の輕慢を戒め、摩聞辟支佛の二乘の他に大乘法あることを提示したるものである。法とは大乘の法數、律とはこの實高懈怠の意、三昧とは叢し經の後段に、四禪外學五通の說明あるより名を得たるものか。初に菩薩の放恣を戒めて十二自燒を說き、有道志菩薩の說話により如何に多くのものが墮落せるかを述べ、退墮の因由四事を數へ、阿難に對して反覆智者と愚者の異る所以を敎ふ。次に舍利弗に對して本所入の法を說き、二乘に對する大乘を顯示す。又男摩若羅に禪行を說く。譯語極めて簡古、「各佛」、「無論緒」、「十八不耗法」等奇異にして原始的なるものに接し得るは興味を惹く。 ❼(參考) 三寶紀第五、內典錄第二、譯經圖紀第一、開元錄第二、貞元錄第二

（泉芳璟）

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. 國譯法律三昧經 ❷一卷 ❸存、國譯一切經集部第一五 ❹泉芳璟譯

法律と宗教との關係 ❶(B)Hō-ritsu-to-shū-kyō-to-no-kwan-kei. ❸存 ❹名尾玄乘述 ❺明治三六—三七刊 ❾(帝國、六二・三九〇、三九二)

法流相承兩門訴陳記 ❶(B)Hō-

ryō-kō-ji-gyō-roku. (支) Fa-lan-cheng-ch'an-shih-yu-lu. ❷一卷 ❸存 ❹清法瀾原撰語、清呈編 ❼(參考)禪籍目錄

法理書 ❶(B) Hō-ri-sho. 夏中問答 ❷一卷 ❸存 ❹(立大、A〇四・三四〇—三四一)×正大、一八六・一七)

法律阿梨樹章 ❶(B)Hō-ritsu-a-ri-ju-shō. ❷二卷 ❸存 ❹忍辱鎧日榮 ❺享保一五(A.D.1730) ❻邪惡狂磨鈔を破斥したもの。 ❽寛延二刊 ❾(立大、A〇五・一一一)(哲、え・五・中・一二)(谷大、餘大・三二五八)

法律經 ❶(B)Hō-ritsu-kyō. (支)Fa-lu-ching. 法律三昧經 ❷一卷 ❸存、大正一五・四五八 Nj.621、鎌列二、卍一七・二、北551作、南554作、元552作、明北1094初、麗554念、天557作、指509念、法540念、至1394僞、明南1542從、Nj.1069 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A.D.223—253)

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. (支)Fa-lo-san-mai-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❷(參考) 出三藏記第三、法經錄第五

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. (支)Fa-lo-san-mai-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹後漢安世高(—建和二—建寧三A.D.147—170—)譯 ❺第一譯。 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. (支)Fa-lo-san-mai-ching. 法律經 ❷一卷 ❸存、大正一五・四五八、Nj.621、鎌列二、卍一七・二、北551作、南554作、元552作、明北1094初、麗554念、天557作、指509念、法540念、至1394僞、明南1542從、Nj.1069 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A.D.223—253) ❻本經は佛、阿難、舍利弗等の大衆會に對し、新學の菩薩の輕慢を戒め、摩聞辟支佛の二乘の他に大乘法あることを提示したるものである。法とは大乘の法數、律とはこの實高懈怠の意、三昧とは叢し經の後段に、四禪外學五通の說明あるより名を得たるものか。初に菩薩の放恣を戒めて十二自燒を說き、有道志菩薩の說話により如何に多くのものが墮落せるかを述べ、退墮の因由四事を數へ、阿難に對して反覆智者と愚者の異る所以を敎ふ。次に舍利弗に對して本所入の法を說き、二乘に對する大乘を顯示す。又男摩若羅に禪行を說く。譯語極めて簡古、「各佛」、「無論緒」、「十八不耗法」等奇異にして原始的なるものに接し得るは興味を惹く。 ❼(參考) 三寶紀第五、內典錄第二、譯經圖紀第一、開元錄第二、貞元錄第二

（泉芳璟）

法律三昧經 ❶(B)Hō-ritsu-zam-mai-kyō. 國譯法律三昧經 ❷一卷 ❸存、國譯一切經集部第一五 ❹泉芳璟譯

法律と宗教との關係 ❶(B)Hō-ritsu-to-shū-kyō-to-no-kwan-kei. ❸存 ❹名尾玄乘述 ❺明治三六—三七刊 ❾(帝國、六二・三九〇、三九二)

法流相承兩門訴陳記 ❶(B)Hō-ryū-sō-jō-mon-so-chin-ki. ❷一卷 ❸存 ❹慶證集 ❾寶德二寫、來迎寺藏、寫本(正大、一〇三三・八一)

法流傳授切紙類集 ❶(B)Hō-ryū-den-ju-kiri-rui-shū. ❷四卷 ❸存、修驗聖典第四、深祕修法集之內 ❻當山派修驗相傳の諸大事切紙百六十二通を類聚した書。卷一には、除魔大事・疾病加持作法・祈禱之事・九字大事・摩利支天九字法・兵法十字之大事・火伏之大事・火伏札・金神除法・方違守・金神除所禱祕事・瘟疫元・盜賊除之札・諸病押符・止雨法・月水留守・安產符・難產御符・治癒氣呪・治火傷呪等の五十九通、卷二には、諸社大事・春日拜見・九社拜見・日待作法・三日月拜見法・十七夜待作法・創幕例時次第・除夜心經會作法・觀音經一萬卷大事・仁王經大事・長生法・能延六月法・大師拜見作法・愛宕拜見作法・金峰大事・三寶大荒神祕法等の五十五通、卷三には開眼作法・古佛修覆之時摺證法・理趣經漉頂祕事・引導大事・光言疏地獄曼荼羅・塔婆書樣事・施餓鬼作法・大師御精進供作法等の二十六通、卷四には祝夜念誦之作法・立座大事・臨終大事・易產護符・辨天摩尼祕法・輪鳴爲禍法・愛染明王求子祕口等の二十二通を收めてゐる。

（服部如實）

法隆寺緣起資財帳 ❶(B)Hō-ryū-ji-en-gi-shi-zai-chō. 法隆寺伽藍緣起並流記資財帳、法隆寺資財帳、法隆寺流記資財帳 ❷一卷 ❸存 ❹東京美術學校編 ❺大正二—八刊 ❾(立大、D七一・五×龍大、別藏)

法隆寺嘉元記 ❶(B)Hō-ryū-ji-ka-gen-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、餘大・一六一六)

法隆寺伽藍緣起並流記資財帳 ❶(B)Hō-ryū-ji-gi-ra-en-gi-narabini-ru-ki-shi-zai-chō. 法隆寺緣起資財帳、法隆寺資財帳、法隆寺流記資財帳 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一、續群書類從第二七釋家部、輪池叢書第一五 ❻天平一九(A.D.747) ❻天平十八年十月十四日付を以て、朝廷より帝綱所に命じ、當寺の緣起並に資財等、仔細に勘錄し謄上すべき旨達せられしにより、訓倉の上當寺の都維那僧靈辯、上座僧隣信、寺主僧玄鏡、乘印、賢廣、乘觀等連署して當時創建の緣起より堂塔伽藍の間口間數、寺領、銅封藏內什物並に奴婢の口籍に至るまで、悉く詳密に記せるもので、現在境內の諸建築及び佛像莊嚴等に照合して、千三百餘年來創立當初の規模を髣髴せる我が最古剩の實狀を詳にすべき唯一の根本史料である。 ❹寫本(正大、一〇三三・一一〇)(高瀨承厳)

法隆寺伽藍諸堂巡拜記 ❶(B) Hō-ryū-ji-ga-ran-sho-dō-jun-pai-ki. ❷一卷 ❸存 ❹島居武平 ❺明治二八刊 ❾(京大、一・二二ホ・三)

法隆寺記補忘集 ❶(B)Hō-ryū-ji-ki-ho-bō-shū. 法隆寺良訓補忘集 ❷一卷 ❸存、續々群書類從第二一宗教部 ❹良訓編 ❻元祿、享保の頃、大和法隆寺中院の僧良訓が、本寺傳來に係る佛像、佛具、訓度、經卷、文書、傳記等につき、或は銘文を或は紙背に記された文書を傾忘に備へたため書き拔いたもので、卷頭に平安朝時代に同寺の大修理を行つた願貴寺造營傳を揭げ、以下主として鎌倉以降江戸時代に行はれた各付具の修理に關する史料及び伽藍修覆等の際行はれた法會使用の表白、諷誦、呪願文等が筆錄されてある。

（高瀨承厳）

法隆寺建築說 ❶(B) Hō-ryū-ji-ken-chiku-setsu. ❸存、黑川眞頼全集第三之內

法隆寺獻物帳 ❶(B) Hō-ryū-ji-kem-motsu-chō. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄

法隆寺古今目錄拔萃 ❶(B) Hō-ryū-ji-ko-kim-moku-roku-bas-sui. ❸存、史籍集覽第一二 ❻顯眞得業作古今目錄抄から法隆寺に法隆學問寺、聖國寺、七德寺、來立寺、法龍寺、鳥路寺、往生所寺等の七異稱あること、聖德太子御影及び太子御傳、太子傳目錄、太子と慧慈法師との關係、太子と慧思禪師との關係、及び磯長廟に關する記事を抄錄せるもの、抄錄者及び抄錄年時不明であるが卷末に應永五年六月十日の記事あるを以て室町始めに抄錄されたものであらう。

（高瀨承厳）

法隆寺全堂佛像目錄 ❶(B) Hō-ryū-ji-kon-dō-butsu-zō-moku-roku. ❷一卷 ❸存 ❺大正六刊 ❾(谷大、餘大・三三五)

法隆寺金堂壁畫 ❶(B) Hō-ryū-ji-kon-dō-hek-ga. 法隆寺大鏡別集 ❷四 ❸存 ❹東京美術學校編輯 ❺大正七刊 ❾(立大、D七一・六)

法隆寺資財帳 ❶(B)Hō-ryū-ji-shi-zai-chō. 法隆寺伽藍緣起並流記資財帳、法隆寺緣起資財帳、法隆寺流記資財帳 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一、續群書類從第二七釋家部、輪池叢書第一五 ❻法隆寺伽藍緣起並流記資財帳の下を見よ。 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄

法隆寺出土古瓦の研究 ❶(B) Hō-ryū-ji-shutsu-do-ko-ga-no-ken-kyū. ❷一卷 ❸存 ❹奈良縣編 ❺大正一五刊 ❾奈良縣史蹟名勝天然紀念調査會

法隆寺小誌 ❶(B) Hō-ryū-ji-sho-shi. ❷一卷 ❸存 ❹法隆寺編 ❺大正一〇刊 ❾(龍大、二九七四・四七)

法隆寺白拍子 ❶(B) Hō-ryū-ji-shi-ra-byō-shi. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法隆寺東院緣起 ❶(B) Hō-ryū-ji-tō-in-en-gi. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一 ❻日本書紀によると推古天皇九年二月、聖德太子始めて宮室を斑鳩の地に興し、十三年冬十月太子斑鳩宮に居給ふとあり。然る

に太子薨去の後、皇極天皇即位二年、蘇我氏の上宮王家を滅すや、斑鳩宮も亦焚上したとある。法隆學問寺草創の本願主聖德皇太子の遺跡、かくの如くして廢絶し、荒無に委しありしを天平の比法隆寺に住せし行信、荒墟を見て悲しみ、太子の遺物を貧め、伽藍を建てた、これ世に夢殿又は上宮王院と稱するもので、法隆寺金堂、塔婆等ある一劃を法隆寺西院と云ふに對し法隆寺東院と呼んでゐる。行信再興後、聖跡再び荒廢せるを、直觀年中、福貴寺道詮、公家に奏問し、院家を修造し瓦葺八角圓堂一宇、七間禮堂一宇、步廊一廻、七間二面講堂一宇、七間經藏一宇、僧房四宇等を建立再興せし顯末を記せるものである。（高瀨承厳）

法隆寺壁畫 ❶(日)Hō-ryū-ji-hek-ga. ❷二冊 ❸存 ❹白石村治編 ❺大正九刊 ❻(龍大、別置)

法隆寺壁畫聚 ❶(日) Hō-ryū-ji-hek-ga-shū. ❷十冊 ❸存、附解說 ❹法隆寺編 ❺大正一三刊 ❻(龍大、別置)

法隆寺壁畫の研究 ❶(日)Hō-ryū-ji-hek-ga-no-ken-kyū. ❷一冊 ❸存 ❹內藤藤一郎著 ❺大阪東洋美術研究會大阪支部

法隆寺別當記 ❶(日)Hō-ryū-ji-bet-tō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、餘大・一六一四)

法隆寺別當次第 ❶(日) Hō-ryū-ji-bet-tō-si-dai. ❷一卷 ❸存、續群書類從第四輯補任部 ❹承和年中(A. D. 834—847)道風が別當に補せられてより長賢、德願、頓昇、長延、寬延、觀理、法緣、淑圓、法緣、法運、實算、長隆、忠歡、仁階、長耀、觀峰、瑞幹、永照、仁滿、久圓、觀譽、琳元、長照、彥祚、公範、慶深、能算、永超、延眞、定眞、經琢、覺譽、覺晴、信慶、覺長、賀資、慧範、範玄、覺辨、成賢、覺光、範圓、範信、玄雅、乘範、實慎、印寬、性譽、公壽、宗親、公壽、實聰、隆超、良寬、能寬、顯寬、實聰、意信、能寬、良聰、範守、覺慎、慎乘、顯超、實超、孝憲、圓守、長慎、覺覺、孝俊、仁圓等七十七代を經て永正十五年(A. D. 1518)七月、是圓の下に小別當として慎祐が補せられ、是圓の下に小別當として慎祐が天文元年(A. D. 1532)十二月就任せるまで、具略はあるが、この間法隆寺における堂塔修理、各種行事の狀況等が併記されてあるから、別當傳を知るとともに法隆寺史研究の史料である。原本はもと次節に書き續がれたもので、一人の手に成れるものではなかるべく、天文元年で終つてゐるのはこの時を以て別當の終りと見るべきでなく、記錄が別冊となつたため、たまたま誤らされたものであらう。（高瀨承厳）

法隆寺寶物集 ❶(日)Hō-ryū-ji-hō-motsu-shū. ❷三十五葉 ❸存 ❹奈良帝室博物館編 ❺大正一〇刊 ❻(龍大、別置)

法隆寺寶物圖 ❶(日)Hō-ryū-ji-hō-motsu-zu. ❷三帖 ❸存 ❹寫本(帝國、京ロ・二)

法隆寺寶物目錄 ❶(日)Hō-ryū-ji-hō-motsu-moku-roku. ❸存、温古二十四種之內 ❹寫本(帝國、二三一・六一)

法隆寺寶物和歌 ❶(日)Hō-ryū-ji-hō-motsu-wa-ka. ❷一卷 ❸存、國文學方佛教叢書第八 ❹定圓 ❺弘安元(A. D. 1278)十一月

❻本書は著者靈山法印定圓が、弘安元年閏十月大和の中宮寺に詣で、三十餘日參籠の間に法隆寺の法寶物を拜觀し、そのうちに感激のあまり、夢內御會利から伏藏に至る法寶物の一々を題として三十首を詠じ、淨書して會利殿に納めた物である。

❺享保三刊 ❻(高大、寄・一・五七)(京專)(谷大、餘大・二二一八) (橫純孝)

法隆寺良訓補忘集 ❶(日)Hō-ryū-ji-ryō-kun-fu-mō-shū. 法隆寺記補忘集 ❷一卷 ❸存、續群書類從第一一宗教部 ❹良訓(—元祿享保頃 A. D. 1688—1735—) ❺編 ❻法隆寺記補忘集の下を見よ。 ❼明治四〇刊 ❽(帝國、四一・一一九)

法隆寺流記資財帳 ❶(日)Hō-ryū-ji-ru-ki-shi-zai-chō. 法隆寺伽藍緣起並流記資財帳、法隆寺緣起資財帳、法隆寺資財帳 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一、續群書類從第二七、輪池叢書第一五 ❻法隆寺伽藍緣起並流記資財帳の下を見よ。 ❽(帝國、特別・も・七)

法隆寺靈寶記 ❶(日) Hō-ryū-ji-rei-hō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹(正大、一〇三二・四六)

法隆寺論抄 ❶(日) Hō-ryū-ji-ron-shō. ❷一冊 ❸存 ❹聖德太子撰讃會編 ❺昭和二刊 ❻(谷大、餘洋・八九七)

法林輯要 ❶(日)Hō-rin-shū-yō. ❷四卷 ❸存 ❹懷玉 ❺寶永元刊 ❻(龍大、二〇九九・二四八×貧、あ・六・右・三)

法林章 ❶(日)Hō-rin-shō. ❷二十卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄9259

法林墨萃 ❶(日)Hō-rin-boku-sui. ❷二卷 ❸存 ❹大谷派本願寺編 ❻明治二三刊(谷大、外大・四二四)明治三四刊(谷大、別・六×龍大、一九七二・一一二)

法琳寺別當補任 ❶(日)Hō-rin-ji-bet-tō-ni-n. ❷一卷 ❸存、續群書類從第四輯補任部 ❺貞應三(A. D. 1224)

❻法琳寺は奈良縣生駒郡富郷村大字三井に存し、現今は法輪寺と號し古義眞言宗東寺派に屬す、推古天皇の朝、聖德太子の妃勝三穗姬の本願により、山背大兄王、百濟の開法師及び圓明法師等と協力して開創するところにかかり、その構造は法隆寺に髣髴たりしものありと稱せらる。本書は承和七年(A. D. 840)六月、常曉が第一代の別當に補せられてより、寵壽、元如、命藤、舒隆、元忠、泰舜、泰圓、圓照、登好、妙鑒、賀件、仁業、泉討、法圓、信源、蓮息、尊覺、信算、眞宗、源慶、宣慶、定慶、良雅、定覺、兼尊、寬惠、淋覺、賢覺、眞助、覺曜、賢覺、寬宗、宗範、尭眞、尊實、信遍、實□、覺鎧、宗□、藏有、藏秀、藏有等四十四代を經て承久三年(A. D. 1221)十二月長海が第四十五代の別當に補せられたまでの別當の略傳と、その間に行はれた行事、並に往々伝事をも併記し殊に承久三年

五月、鎌倉源氏滅亡のため、當寺の經濟である大元師法を三七日行へるのなど、承久亂研究資料として見逃し得ざるものあるなど法琳寺史研究資料なるのみならず、我が國史研究の資料も少からず敎められてゐる。卷末に「別當補任自本願常曉至于長海四十五代也、年代自承和七年至于貞應三年甲申三百八十五年」とあるから、本書の成れる時を知らざるが、本書も他の別當次第の如く書き續がれたものであつて、貞應三年を以て筆を捨ててゐるのは、この時當寺に不慮の災禍あつて、別當が廢されたものであらう。（高瀨承厳）

法琳別傳 ❶(日)Hō-rin-betsu-den. (支)Fa-lin-pie-chuan. 唐護法沙門法琳別傳 ❷三卷 ❸存、大正五〇・一九八 No. 2051、續敎八、卍續二・乙・二三・一、麗1429、惠 ❹彥悰撰 ❺康貞觀一四—二三(A. D. 640—649) ❻唐護法沙門法琳別傳の下を見よ。

法輪經 ❶(日)Hō-rin-kyō. (支) Fa-lun-ching. 轉法輪經、法輪轉經、法輪輪轉經 ❷一卷 ❸存、大正二・五〇三 No. 100、續辰六、卍一四・二、北704思、南762思、元766思、明北652慶、清652慶、麗742若、天762思、指712若、法742菩、至650藏、明南656善、N. 657 ❹安世高譯 ❺後漢建和二—建寧三(A. D. 148—170) ❻轉法輪經の下を見よ。

法輪寺緣起 ❶(日)Hō-rin-ji-en-gi. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一七寺誌叢書第一

❻本書は京都嵯峨の群言堂法輪寺の緣起である。法輪寺は其の初め葛井寺と稱し、貞觀十六年(A. D. 874)に道昌僧都の創建にかゝる。道昌僧都の略傳に併せて葛井寺虛空藏菩薩の靈驗のことを述べ、次いで天慶年中に空也上人の常行堂再興のこと、當寺鎭守の由來などを記してある。應永二十一年(A. D. 1414)眞榮書寫の奥書がある。（不破幹雄）

法輪寺修造幹緣疏 ❶(日)Hō-rin-ji-shu-zō-kan-en-sho. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

法輪寺十一面觀世音大像考證 ❶(日)Hō-rin-ji-jū-ichi-men-kwan-ze-on-dai-zō-kō-shō. ❸存、黑川眞頼全集第三

法輪集三編 ❶(日)Hō-rin-shū-san-pen. ❷二卷 ❸存 ❹吉田蕉雨 ❺明治一六刊 ❻(正大、一五五八・七五)

法輪泰和尙語錄 ❶(日) Hō-rin-tai-wa-shō-go-roku. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 經籍目錄

法輪轉經 ❶(日) Hō-rin-ten-gyō. (支)Fa-lun-chuan-ching. 轉法輪經、法輪經、法輪輪轉經 ❷一卷 ❸存、大正二・五〇三 No. 109、續辰六、卍一四・二、北704思、南762思、元766思、明北652慶、清652慶、麗742若、天762思、指712若、法742菩、至650藏、明南656善、N. 657 ❹安世高譯 ❺後漢建和二—建寧三(A. D. 148—170)

❻身延より信者の曾谷入道法蓮に與へた書。法華經を誹謗する者、正法受持の者を誹謗する謗の重きこと、其の反對に、斯かる行者を讃歎し信受する功德の廣大なることを、經文及び和漢天竺の事例を引いて懇篤に說明し、正法の信を勸めてある。中に「信なくして此の經を行ぜんは、手なくして寶山に入り、足なくして千里の道を企つるが如し。」「世尊と申す尊の一字を高と申す、高と申す一字は又孝と訓ずるなり。一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊とは號し奉る。」「孝經と申すに二あり。一には外典の孔子と申せし聖人の書に孝經あり。二には內典、今の法華經是也。」等の名文あり、又烏龍・遺龍の故事を引いて、法華經の功德廣大なることを說いてある。

❼(參考) 錄內啓蒙二六、御書鈔一五、他數種 (馬田行啓)

法蓮贈祖消息 ❶(日)Hō-ren-zō-ri-kusu-i-shō-soku. 白川附大谷消息、白川法蓮附吾祖書、白川附祖文、法蓮附吾祖書 ❷一卷 ❸存、眞宗法要拾遺第三、眞宗遺文纂要 ❻淨土眞宗敎典志第一に云く「眞讃在三州勝鬘寺。與下世日三稱念法語、者上全同」云々。白川附大谷消息の下を見よ。

法蓮贈吾祖書 ❶(日)Hō-ren-wa-ga-so-si-o-kuru-ga-ki-sho. 白川附大谷消息、白川附祖文、白川法蓮附吾祖書、法蓮附祖消息 ❷一卷 ❸存、眞宗法要拾遺第三、眞宗遺文纂要 ❻淨土眞宗敎典志第一に云く「眞讃在三州勝鬘寺。與下世日三稱念法語、者上全同」云々。白川附大谷消息の下を見よ。

放歌集 ❶(日)Hō-ika-shū. (支)Fang-ko-chi. ❷1巻 ❸天禄 ❹川崎清孝四巻の抄出。 ❺〔参考〕 田三蔵記巻四〔法華経巻五〕、仁寿経巻三〕、勝鬘経巻四〕、四天王経巻一〕、仏説観無量寿経巻一〕

放牛経 ❶(日)Hō-go-kyō. (支)Fang-niu-ching. (巴)A. XI. 18 Gopāla 放牛経 ❷1巻 ❸作 大正一〕・大四六 No. 123 始大四、卍一四・一〕、北736号、唐750号、元742号、明北623号、北623号、鳳753号、天735号、宇698号、北725号、南972号、明南619号、Nj. 627 ❹安世高訳 ❺西暦一一世紀(A. D. 402—412)

❻牛を護は放牛人の十一法を具足すること若し人よりて、牛群を駆催し、牛主もて知れば、又これに反すること能はず、此法もて十一無護法を具すること、若し比丘よりて、自性もて十一無護法を具すること、若し比丘よりて、自性もて十一無護法を具すること、三昧座に住すもの、あるいは説いて、あるものである。

本経は西紀前四十九年頃の訳、一巻、及び漢訳前四十七年頃の訳、一巻、及びパリ文本紀元前一世頃の訳、一巻、の三種があるが、これらを対照すると、本経は、本経にのべる程度の二倍程度である。その内容は、比丘が、牛群を、牛主に知られずに、盗み、殺し、食べ、皮を剥ぎ、売る、の五種の罪を犯すことを、牛飼が、牛を、盗まれ、殺され、食べられ、皮を剥がれ、売られる、の五種の苦を、比喩的に説いたものである。

❼〔参考〕 三蔵記巻八、内典録巻三、開元録巻四、貞元録巻六

(林天祐)

放牛経 ❶(日)Hō-go-kyō. 放光般若経巻六、放牛人品第十一、放牛人経、放牛人品経、放牛人経、放牛人品、放牛人、放牛経、放牛人品第十一、放牛人品第十一、放牛人品第十一

ほうがんじょうじょうのしょうぶつ 宝眼浄上仏 ㊀(サ)

ほうがんじょうじょうのしょうぶつ 宝眼浄上仏 ㊀(サ) Hō-gan-jō-jō-no-shō-butsu. ㊁ 宝眼浄上仏の略。㊂ 仏 ㊃ 宝眼浄上仏の略。㊄ 仏 ㊅ 宝眼浄上仏の略。㊆ 仏 ㊇ 宝眼浄上仏の略。㊈ 仏 ㊉ 宝眼浄上仏の略。㊊ 仏 ㊋ 宝眼浄上仏の略。㊌ 仏 ㊍ 宝眼浄上仏の略。㊎ 仏 ㊏ 宝眼浄上仏の略。㊐ 仏 ㊑ 宝眼浄上仏の略。㊒ 仏 ㊓ 宝眼浄上仏の略。㊔ 仏 ㊕ 宝眼浄上仏の略。㊖ 仏 ㊗ 宝眼浄上仏の略。㊘ 仏 ㊙ 宝眼浄上仏の略。㊚ 仏 ㊛ 宝眼浄上仏の略。㊜ 仏 ㊝ 宝眼浄上仏の略。㊞ 仏 ㊟ 宝眼浄上仏の略。㊠ 仏 ㊡ 宝眼浄上仏の略。㊢ 仏 ㊣ 宝眼浄上仏の略。㊤ 仏 ㊥ 宝眼浄上仏の略。㊦ 仏 ㊧ 宝眼浄上仏の略。㊨ 仏 ㊩ 宝眼浄上仏の略。㊪ 仏 ㊫ 宝眼浄上仏の略。㊬ 仏 ㊭ 宝眼浄上仏の略。㊮ 仏 ㊯ 宝眼浄上仏の略。㊰ 仏 ㊱ 宝眼浄上仏の略。㊲ 仏 ㊳ 宝眼浄上仏の略。㊴ 仏 ㊵ 宝眼浄上仏の略。㊶ 仏 ㊷ 宝眼浄上仏の略。㊸ 仏 ㊹ 宝眼浄上仏の略。㊺ 仏 ㊻ 宝眼浄上仏の略。㊼ 仏 ㊽ 宝眼浄上仏の略。㊾ 仏 ㊿ 宝眼浄上仏の略。(1) 仏 (2) 宝眼浄上仏の略。(3) 仏 (4) 宝眼浄上仏の略。(5) 仏 (6) 宝眼浄上仏の略。(7) 仏 (8) 宝眼浄上仏の略。(9) 仏 (10) 宝眼浄上仏の略。(11) 仏 (12) 宝眼浄上仏の略。(13) 仏 (14) 宝眼浄上仏の略。(15) 仏 (16) 宝眼浄上仏の略。(17) 仏 (18) 宝眼浄上仏の略。(19) 仏 (20) 宝眼浄上仏の略。(21) 仏 (22) 宝眼浄上仏の略。(23) 仏 (24) 宝眼浄上仏の略。(25) 仏 (26)

dai. 文書目手引目録書名後 ❹一卷 ❺仮 ❻写本(国文学研究)

華厳講私記 ❶(ロ)Hō-on-kō-shi-ki. 華厳講私記・華厳講私記 ❷一卷 ❸仮・大正八目・七五五No. 2665・続浄全華厳 ❹華厳経探玄記第六之四 ❺東福(文永十一—嘉暦二)A. D. 1270—1351)頃 ❻華厳講私記の下を見よ。 ❼用本(谷大・谷小・四四一四)・写本(谷大・谷小・四)

華厳講私記 ❶(ロ) Hō-on-kō-shi-ki. 華厳日蓮宗学説講私記 ❷一卷 ❸仮 ❹(鎌大・仮)

華厳講私記新撰文法書 ❶(ロ)Hō-on-kō-shi-ki-tsuketari-tan-doku-mon-nobe-gaki. ❷一卷 ❸仮 ❺明治一五刊 ❻(学研・一四五・一六)

華厳講私記提書 ❶(ロ)Hō-on-kō-shi-ki-nobe-gaki. ❷一卷 ❸仮 ❺明治一四刊 ❻(谷大・谷小・一四四)

華厳講私記唐語文 ❶(ロ) Hō-on-kō-shi-ki-tan-doku-mon. 華厳講私記唐語文 ❷一卷 ❸仮・大正八目・七五五No. 2665・続浄全華厳・華厳経探玄記第六之四 ❹華厳経(文永十一—嘉暦二)A. D. 1270—1351)・仏書(宝暦二—嘉永六)A. D. 1290—1373) ❺華厳講私記の下を見よ。 ❻写本(谷大・谷大・四〇四七)

華厳講私記要義 ❶(ロ) Hō-on-kō-shi-ki-yoku-san. ❷一卷 ❸仮 ❹(一天保六)A. D. 1661—1672—)頃 ❺写本 ❻(谷大・一・一六六・一・一四・日研・〇・一六)

華厳講私記略解 ❶(ロ) Hō-on-kō-shi-ki-ryaku-ge. ❷一卷 ❸仮 ❹華厳経(一天保元)A. D. 1917)頃 ❺明治四一刊 ❻(谷大・谷小・一九五)

華厳講式 ❶(ロ)Hō-on-kō-shiki. 華厳講式・華厳講式文三段・華厳講式文 ❷一卷 ❸仮・大正八目・七五五No. 2665・続浄全華厳・華厳経探玄記 ❹華厳経探玄記第六之四(文永十一—嘉暦二)A. D. 1270—1351)頃 ❺本巻上千日回(A. D. 1293—1298)e。

❻法安二年にたれたる作者の浄業日課に本書は日蓮聖人を指して「況彼有一念信心者、之者」、「華厳講式」、「言」、「華厳講式、自宗学出題也」とあり、また日蓮聖人に従(より)「日蓮聖人日課」とは「法華宗学生、諸宗講学生、之」と、「華厳講式」は「法華宗学生、諸宗講学生、之」とあり、また若らく

報恩鈔文段 ❶(日)Hō-on-shō-mon-dan. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書第四日蓮正宗部之内 ❹日寛(寛文五—享保一一A. D. 1665—1729) ❺享保七(A. D. 1722)
❻日蓮聖人の報恩鈔二卷を解釋したるもの、興門派の宗義を宣示せし。全書に載するところは、堀慈琳の講筆せるものに屬す。
❼(註釋) 読一卷。直釋一卷(思孝)。 (江田俊雄)

報恩俗離山事實碑 ❶(日)Hō-on-zoku-ri-san-ji-jitsu-hi. ❸存 ❼(參考)
朝鮮佛教總書刊行豫定書目

報恩の道德と義務の道德
❶(日)Hō-on-no-dō-toku-to gi-mu-no-dō-toku. ❸存、大藏經要義第一 ❹本多日生(—昭和六A. D. 1931)述

報恩奉盆經 ❶(日)Hō-on-bu-bon-kyō. (支)Pao-en-fêng-p'ên-ching. 報像功德經、報恩奉盆經 ❷一卷 ❸存、大正一六・七八〇No. 686、續宗六、卍一〇・七、北涼女、南齊女、元魏女、明北魏知、清涼知、麗曇才、天竺女、法護傳、至元得、明南梁才、N. 394 ❹失譯 ❼(參考) 法經錄第三、開元錄第五

報恩粉碎錄 ❶(日)Hō-on-fun-sai-roku. ❷四卷 ❸存 ❹淑順逸 ❺寶曆九刊 ❻(龍大、一〇五五・一三七)

報恩編 ❶(日)Hō-on-hen. 天桂老人報恩編 ❷三卷 ❸存、大正八二・六一八No. 2600 ❹天桂傳燈(慶安元—享保二〇A. D. 1648—1735)語、侍者記 ❺天桂老人報恩編の下を見よ。

報恩編字跡 ❶(日)Hō-on-hen-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(駒大)

報恩編事考 ❶(日)Hō-on-hen-ji-kō. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(駒大)

報恩法住寺慈淨國章普明塔碑
❶(日)Hō-on-hō-jū-ji-ji-tō-koku-shō-fu-myō-tō-hi. ❸存 ❺高麗忠惠王復位三(A. D. 1342) ❼(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

報恩品講義 ❶(日)Hō-on-hon-kō-gi. 心地觀經報恩品講義 ❷一卷 ❸存 ❹大内青巒(弘化二—大正七A. D. 1845—1918)述 ❺明治三三刊 ❻(帝國、八七・二)

報恩錄 ❶(日)Hō-on-roku. ❷一卷 ❸存 ❹壁山紹理(文永五—正中二A. D. 1268—1325)述、峰山紹頭(建治元—貞治四A. D. 1275—1365)編 ❻寫本(駒大)

報恩論 ❶(日)Hō-on-ron. (支)Pao-en-lun. ❷四卷 ❸存、卍續二・一五・三 ❹沈素登述 ❺清光緒二三(A. D. 1897)
❻本書は清末の學僧沈素登が、光緒四年の春、吳縣聖恩寺に於て同志と共に念佛寫經以て都て凡そ二萬餘言を筆錄編述せるものに、後年更に別編一卷を附して上梓せるもの。卷首には本書の緣由を識した自序がある。
この書は卷首一卷・卷正(上・下)二卷・卷附一卷の四卷より成る。
その内容列次は左の如くである。
(卷首) (1)悲錄 (2)列聖護法綸音 (3)遺經十二則 (4)答問二十五則。
(卷正上) (1)淨土法門綱宗 (2)無獄 (3)往生正因定論 (4)辨正五逆謗法不得往生說 (5)三教通喻 (6)雜說二十五則 (7)代衆回向發願疏 (8)寫經記。
(卷正下) (1)醒迷歌五十章 (2)勸修歌五十章 (3)往生公據 (4)阿彌陀佛贊 (5)想儀 (6)戒殺慈願偈 (7)主懺願文 (8)改定僧玉峯摩崖圓滿白衆偈。
(卷附) (1)上鐘子勸夫人書 (2)其二 (3)其三 (4)數梁補註再書後 (5)致楊仁山書 (6)淨生經序 (7)精藍寺同戒錄序 (8)又序 (9)大台飯讓珍叢林永禁私佔示 (10)墓修揚州高旻寺正殿疏 (11)墓修眞覺寺緣起 (12)補玉峯師念佛同心偈六首 (13)達摩祖師像讚 (14)又指畫像讚 (15)大通智勝佛拈頌 (16)靜坐箴 (17)留仙圓頌。
蓋し、清朝末に於てはこの種の書物に乏しくはない。支那淨土思想史上より考察すれば、本書は別に特筆大書する程のものではないが、淨土教文學としては輕々看過すべきではない。就中、卷正下に收めてゐる「醒迷歌」五十章並に「勸修歌」五十章の如きは淨土教文學としても、將た又教化資料としても洵に上乘なるもの、朗々誦し來り誦し去るとき、正に意外の驚喜を催し來る。
❹刊本(谷大、宗大・二三八一) (前田慧雲)

報國清埃 ❶(日)Hō-koku-sei-ai. ❷一卷 ❸存 ❹語默、古部觀順(文政七—明治四三A. D. 1824—1910) ❺明治四(A. D. 1871)
❻神武天皇祭悉邦祝詞遥拜を仰出されに際し、眞宗の教義上より、之をなせば一向專修の宗義に違ひ、之を護承せざれは王法爲本の宗格に背くやうであるが如何といふ、吏士某の問に對して、一宗鼎立、本地垂迹、王法爲本の三方面より答へたものである。
❼明治四刊 ❽(樣部) ❾三河唯法寺戒藤(樣部文義)

報國御書講義 ❶(日)Hō-koku-go-sho-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹神護逸 ❻寫本(谷大、宗大・二〇六七)

報國小言 ❶(日)Hō-koku-shō-gen.

時局に對する信徒の心得 ❷一卷 ❸存 ❹千河岸貫一逸 ❺明治三七刊 ❻(龍大、一五〇二・一七三)

報慈錄 ❶(日)Hō-ji-roku. (支)Pao-tzu-lu. ❷十冊 ❸存 ❹清弘儲退翁 ❼(參考) 禪籍目錄

報謝の眞義 ❶(日)Hō-sha-no-shin-gi. 他力眞宗報謝の眞義、小川丈平翁ノ報謝說ヲ駁ス ❷一卷 ❸存 ❹西川諦亮述 ❺小川丈平翁の報謝說を駁したもの。 ❻明治三五刊 ❼(龍大、研眞、(谷大、宗洋・二六七)

報生貪感錄 ❶(日)Hō-shō-don-kan-roku. ❷一卷 ❸存 ❹榮藝(文化一一—明治三三A. D. 1814—1900)述、大虛撰
❼(京專)

報身報土 ❶(日)Hō-shin-hō-do. ❷一帖 ❸存 ❹道瑜口 ❺德川時代寫
❼(寶龜院)

報身報土義 ❶(日)Hō-shin-hō-do-gi. ❷一卷 ❸存 ❹明秀述 ❺明治一九刊 ❻(正大、一五三三・一二五)

報像功德經 ❶(日)Hō-zō-kū-doku-kyō. (支)Pao-hsiang-kung-tê-ching. 報恩奉盆經、報恩奉盆經 ❷一卷 ❸存、大正一六・七八〇No. 686、續宗六、卍一〇・七、北涼女、南齊女、元魏女、明北魏知、清涼知、麗曇才、天竺女、法護傳、至元得、明南梁才、N. 394 ❺東晉代(A. D. 317—420)失譯 ❻報恩奉盆經の下を見よ。

報大宋源清和尚書 ❶(日)Hō-dai-sō-gen-sei-o-shō-sho. ❹養慶 ❼(參考) 本朝古版撰述書部書目

報福經 ❶(日)Hō-fuku-kyō. (支)Pao-fu-ching. 福報經 ❷一卷 ❸缺 ❹後漢康孟祥譯 ❼(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

報物集 ❶(日)Hō-motsu-shū. ❷三卷 ❸存 ❹成身院賢覺
❻諸宗章疏錄第三に云く「記・憲深口決・出a狐飾錄」云々。
❼寫本(正大、一四八・七〇)

鳳皇山聖果寺志 ❶(日)Hō-ō-zan-shō-kwa-ji-shi. (支)Fêng-huang-shan-shêng-kuo-sê-chih. ❷一卷 ❸存 ❹清石棠修輯 ❼寫本(京大、藏・二〇ア・二)

鳳凰堂の研究 ❶(日)Hō-ō-dō-no-ken-kyū. ❷一卷 ❸存 ❹津田敬武著
❺昭和五刊 ❻(龍大)

鳳巖集 ❶(日)Hō-gan-shū. (支)Fêng-yên-chi. 谷隱蘊聰禪師語要、石門山慈照禪師鳳巖集 ❷一卷 ❸存、卍續二・二三・二古尊宿語錄第九 ❹宋代蘊聰谷隱語
❻谷隱蘊聰禪師語要の下を見よ。

鳳山禪師語錄 ❶(日)Hō-san-zen-ji-go-roku. 河北開山鳳山禪師語錄 ❷三卷 ❸存 ❹一寶等編 ❼(參考) 禪籍目錄

鳳字四處錄 ❶(日)Hō-ji-shi-sho-roku. ❷一冊 ❸存 ❹源間等編 ❺文化一三刊 ❻(高大、寄・一・二五)

鳳詔類篇 ❶(日)Hō-shō-rui-hen. ❷二卷 ❸存 ❹雲照逸 ❻刊本(京專)
(高大、一・五五×龍大、二九九九・一〇)

鳳城聯句 ❶(日)Hō-jō-ren-ku. ❸存 ❻慶長以後の和漢聯句を集めたもの。
❼(參考) 日本禪林撰述書目、禪籍目錄

鳳栖寺事蹟 ❶(日)Hō-sei-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

鳳鳴尺八記 ❶(日)Hō-mei-shaku-hachi-ki. ❸存、樓正法論之内 ❺永祿七寫 ❻(龍大、別置)

鳳林諸侯小稿 ❶(日)Hō-rin-sho-kō-shō-kō. ❷三卷 ❼(參考) 禪籍目錄

鳳林吒之 ❶(日)Hō-rin-ta-shi. ❸存 ❹不遷法序(—永德元A. D. 1381) ❼(參考) 日本禪林撰述書目、禪籍目錄

蓬戸筆談鈔 ❶(日)Hō-ko-hit-u-dan-shō. 勸化蓬戸筆談鈔、蓬戸筆譚鈔 ❷五卷追加三卷 ❸存 ❹了意(—元祿四A. D. 1691)作
❺淨土眞宗教典志第二に云く「本性寺了意作。示a念死念佛旨。乘v便示a佛身佛土義。拜v卷四條合二十條。追加列a勸化要語。凡一百十九條。正德五年梓」云々。
❻正德五刊 ❼(谷大、宗大・九六三×龍大、一〇五五・一三八)

蓬折直辨 ❶(日)Hō-setsu-jiki-ben. (支)P'êng-shê-chih-pien. ❷一卷 ❸存、卍續二・一〇・五 ❹宋妙蓮(淳照九—景定三A. D. 1182—1262)述 ❺寶祐三(A. D. 1254)
❻守一銀翁が修南家業の中特に教觀撮要に於て、律學の本は理觀なりと主張したるを破斥したるもの。題下に註して「按既曲折、故當a直辨」と言ふに依り、又本書の中に褒度となく守一の來攻を擧げて「折蓬云」と冠するに依れば、本書は守一に向つての第二回の破斥なるを知る。即ち第一回の弗難に對して、守一は教觀蓬折を作つて來攻したから更に本書を作成したと考へらる。内容は守一の所說を擧げて難破するが、彼れに十失ありとし、(一)律學無本、(二)化制不v分、(三)學失v永、(四)後昆越學、(五)棄v機不v盡、(六)不v識a所宗、(七)玷a辱眞師、(八)全迷a戒相、(九)晴託a觀門、(十)矯異常途といふ。撰號なし。東書に作成の由來と作時を擧ぐ。
❼寫眞版(京大、藏・二四ホ・一九) (大野法道)

蓬折嚴 ❶(日)Hō-setsu-shin. (支)P'êng-shê-chên. ❷一卷 ❸存、卍續二・一〇・五 ❹宋妙蓮(淳照九—景定三A. D. 1182—1262)述 ❺寶祐三(A. D. 1255)
❻自著の蓬折直辨を修正增補したるもの。東書には直辨のそれに更に日本の俊芿等が來訪聞法したること、及び本書作成の由來と年時を擧ぐ。
❼寫眞版(京大、藏・二四ホ・一九) (大野法道)

蓬萊山清澄寺記 ❶(日)Hō-rai-san-sei-chō-ji-ki. ❷一冊 ❸存、扶桑殘葉集第一二 ❹清澄寺編 ❺明治四四刊 ❻(谷大×帝國、よ・二)

蓬窓閑話 ❶(日)Hō-sō-kan-wa. ❷一卷 ❸存 ❹道振(安永二—文政七A. D.

1772—1826) ❹寫本(龍大)

豊繪詩史 ❶(日)Hō-e-shi-shi. ❷三卷 ❸存 ❹小栗憲一 ❺明治一七刊 ❻(龍大、二〇五二・四〇)

豊基毘盧庵眞空普法塔碑 ❶(日)Hō-ki-bi-ru-an-shin-kū-fu-hō-tō-hi. ❸存 ❺高麗太祖二二(A.D. 939) ❼〔參考〕朝鮮佛教總書刊行豫定書目

豊德興敎寺事蹟碑 ❶(日)Hō-tu-ku-kō-kyō-ji-ji-seki-hi. ❸存 ❼(參考)朝鮮佛教總書刊行豫定書目

豊南論決集 ❶(日)Hō-nan-ron-ke-tsu-jū. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一五〇二・二一〇)

豊浦文集 ❶(日)Hō-ho-mon-jū. ❷一卷 ❸存 ❹通玄 ❹寫本(龍大、二〇五二・四一)

豊擧大僧正聖書示書稿 ❶(日)Hō-yo-dai-ō-jō-shō-ji-sho-kō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一五五二・三〇九)

鵬冥文集 ❶(日)Hō-mei-mon-jū. ❷十卷 ❸存 ❹展美(寶曆四—文政二A.D. 1754—1819) ❼(參考) 眞宗全書刊行豫定書目

寶意猫兒經 ❶(日)Hō-i-byō-ji-kyō. (支)Pao-i-mao-tu-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹元魏般若流支譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶印經 ❶(日)Hō-in-kyō. (支) Pao-yin-ching. ❷一卷 ❸疑僞經。❼(參考)法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八、奈良朝現在一切經疏目錄1500

寶印集 ❶(日)Hō-in-shū. ❷三卷 ❸存 ❹宗潤集 ❹諸國の著名なる寺院が用ひた印章を集めたもの。 ❺天保一二刊 ❹(龍大、二〇九九・二三九)(京大、一・二二ゑ・二)(帝國、一九九・二三四)(叡山、華嚴)

寶院灌頂童口決 ❶(日)Hō-in-kwan-jō-jō-ku-ketsu. ❷一軸 ❸存 ❹勝賢、保延四—建久七A.D. 1138—1196) ❺德川時代寫 ❹(寶菩提院)

寶院灌頂道具圖 ❶(日)Hō-in-kwan-jō-dō-gu-zu. ❷一軸 ❸存 ❺文明一九寫 ❹(寶菩提院)

寶雨經 ❶(日)Hō-u-kyō. (支)Pao-yu-ching. (梵) Ratna-megha-sutra (引用)(藏)寶雲經金剛。顯授不退轉菩薩記 ❷十卷 ❸存、大正一六・二八三 No. 660、縮字六、卍九・六、北1335草、南1335草、元1331草、明北147此、清147此、麗1342帙、天1335草、指134帙、法1335帙、至1312五、明南1335身、Nj. 151 ❹達摩流支譯 ❺唐長壽二(A.D. 693)

❻此經の類本及び內容に關しては次項の寶雲經の解說をみよ。たゞ東方蓮花世界蓮花眼如來の許なる止一切蓋菩薩といふ樣に譯語の相違は勿論、少々の出沒あり、ことに序文の終に東方月光天子に對して滅後第四の五百年に鞞都洲東北方摩訶支那國に於て女身を現じ王となつて正法治化する云云の記別を說くは他の諸譯本に全くなき附加があることは注意せらるべきであらう。 ❼(參考) 開元錄第九、貞元錄第一四(樞部文館)

寶雲經 ❶(日)Hō-un-kyō. (支)Pao-yun-ching. (梵)Ratna-megha-sūtra (藏傳)(藏)Dpahgs-pa dkon-mcog sprin rgya-ba theg-pa chen-poi mdo ❷七卷 ❸存、大正一六・二〇九 No. 659、縮字六、卍九・六、北1335木、南1335木、元1332木、明北145身、清145身、麗1335草、天1335木、指1335草、法1332草、至1312常、明南134此、Nj. 128 ❹曼陀羅仙譯 ❺梁天監二(A.D. 503) ❻(類本) 梵本不傳、但し梵本集菩薩學論中に一部分引用されてゐる。漢譯は此經及びこれと同じく曼陀羅仙等の譯と傳ふる大乘寶雲經七卷、達摩流支譯の寶雨經十卷、宋の法護等の譯除蓋障菩薩所問經二十卷の四本現存し、陳の須菩提譯の大乘寶雲經八卷が闕本となつてゐる。寶雲經七卷は魏・元・明三藏の所敎、大乘寶雲經は宋藏のみの所敎で一部七卷八帖である。そして共に曼陀羅仙の主譯と傳へられてゐるが譯語不同、內容出沒、分品有無等の方面よりして原本も同一でなく、且つ同一譯者の手になつたものとも認めがたいものである。又經錄僧傳何れも彼に再度の譯出ありしことを傳へてゐない。更に考證を要することではあるが、宋藏所傳の大乘寶雲經七卷八帖は陳須菩提譯闕本の大乘寶雲經八卷ではあるまいか。梁陳兩代は隔りなく、曼陀羅仙も須菩提も扶南の三藏である。除蓋障菩薩所問經は二十卷あり、七品に分つ至元錄には寶雲・寶雨の兩經に比して此廣後略といつてをるが、實は各卷の內容が短いので卷數こそ二倍以上であるが容量は略々等しい。西藏譯は大谷甘珠爾錄 No. 257 にあり、寶雲經と名づく、最も法護譯に一致し、ついで寶雨・寶雲の兩經に近い、大乘寶雲經には最も遠い。殊に大乘寶雲經の最後寶積品は他の藏漢諸譯何れにも闕くものである。又寶雨經の初め(大正藏十六卷二八四頁中下段)に出づる月光天子、支那國に於て女主となりて正法治化するの授記はこれ又全く他の諸本に見ざる增節である。藏漢譯四本の相互出沒については除蓋障菩薩所問經の項をみよ。

〔內容〕 佛、伽耶山頂に於て放光す。東方蓮華自在世界、蓮華眼如來の許に除蓋障菩薩あり、娑婆世界に來り、世尊に百〇二條の質問をなす。佛各條に圓し十法を以て答へたまふ。本皆菩薩の正法は如何なるものかの具體的敎示に係る。佛の答寬りて世界六種に震動し、大衆の供養あり十方諸佛放光して如來の項に入る。無死天女授記を得ることあり流通分に入る。

❼(參考) 三寶紀第一一、內典錄第四、譯經圖紀第四、開元錄第六、貞元錄第九 ❺寬文一三刊 ❹(龍大、二七一・一六)(樞部文館)

寶雲經 ❶(日)Hō-un-kyō. (支)Pao-yun-ching. ❷一卷 ❼(參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、彥琮錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

寶雲經 ❶(日)Hō-un-kyō. (支)Pao-yun-ching. ❷七卷 ❹失譯 ❼(參考)法經錄第一

寶雲振祖集 ❶(日)Hō-un-shin-so-shū. (支)Pao-yun-chen-tsu-chi. ❷一卷 ❸存、卍續二・五・五 ❹宗曉編 ❺宋嘉泰三(A.D. 1203)仲春

❻此の書は、著者宗曉が報恩振祖の精神より、寶雲義通(A.D. 927—988)の德業を後世に傳へんが爲に、其の彰德文二十餘篇を集錄せしものにて、之被が四明敎行錄を編輯せし翌年なり。さて義通は唐末五代の世、支那天台衰微不振の際、高麗より支那に渡り、義寂の後を繼いで台宗の復興に盡瘁し、其門下より四明遵式の双璧を出して、復古隆盛の基を啓きし人なり。此の書の序に曰く、「寶雲鼻祖與吾四明、爲賢父子、表裏像運、中興一家、若其德業不傳於世、則敎失宗元、後昆奚究因考塔碑實泊諸簡編、得師事跡與厥後繼之者、凡二十篇別爲一帙」と以て此書編輯の趣意知るべし。今其の內容の題目を列擧せば「請勸贊奏文、省請、勸薦、徒帖、四明圓經紀造院事跡、台州媒溪定慧院淨光師傳附行、銘宋明州寶雲通公法師石塔記、寶雲通法師移塔記、草菴紀通法師令利事、紀通法師溪遠遺跡、寶雲通法師贊、詩寄贈寶雲通公法師、明洲寶雲四祖師贊、寶雲通公敎主贊、寶雲始祖通公法師贊、寶雲開山通法師忌疏、南湖師祖寶雲尊者齋忌疏、四明法師慕學寶雲尊者、慕雲儀主慕學寶雲住持、明智法師寶雲住持、史太師請塋誘師住寶雲疏、寶雲院利益長生庫記、建法堂慶鑑敎誡、法雨堂題名」以上寶雲義通の著述遺業、及び其の關係者並に後代に及せる感化の狀態を知り得る好材料たり。 ❹刊本(京大、藏・二四シ・一二)(千葉良瑞)

寶雲說集 ❶(日)Hō-un-setsu-shū. ❷一卷 ❸存 ❹寶雲(寬政三—弘化四A.D. 1791—1847) ❹寫本(龍大、一五〇一・九八)

寶永記 ❶(日)Hō-ei-ki. ❷一冊 ❸存 ❹相翁宗益 ❹寫本(京大、日大來・五二四)

寶永元年九月十四日東寺菩提院傳法灌頂日記西院流 ❶(日)Hō-ei-gwan-nen-ku-gwatsu-jū-yo-ka-tō-ji-bo-dai-in-den-hō-kwan-jō-nik-ki-nishi-no-in-ryū. ❷一軸 ❸存 ❺寶永元寫 ❹(寶菩提院)

寶王三昧念佛直指 ❶(日) Hō-ō-zam-mai-nen-butsu-jik-shi. (支) Pao-wang-san-mei-nien-fo-chih-chih. 念佛直指 ❷二卷 ❸存、大正四七・三五四 No. 1974、卍續二・一三・四、淨土十要第三 ❹蚊叶集 ❺明洪武二八(A.D. 1395)

❻此書は念佛三昧が諸三昧の王であり、至圓至頓の法門、節く凡聖一切を攝し、得道悟入の最勝手段たることを明徵にし、其の理論と實踐の筋道を詳述せしもの、殊に著者は其の當時、觀念論的唯心思想に泥みて、寂然たる淨土の依正を否定して往生願はず念佛法門を輕視せる者多きを痛嘆し、此の書を著はして、大に序妄顯眞に勞められたのである。卷頭の自序に曰く、「末代の淺根、藥に因て病—偏理の中毒—を致し、極樂淨土を西方に求めずして之れを分別緣影—個在的唯心—に求め多く此の見に流れ、內に痛御—憤疑の惱み—を慎く、嗟、彼其の功を唐喪し修すと雖も惑なし、乃て淨土諸經及び各宗疏鈔を以て其の奧旨を採り、遂べ以て編を成し、寶王三昧念佛直指を以て其の名と定む焉」著述の趣意知るべきなり。

全篇二卷、二十二項目、附說二項、上卷九項目は理論的方面、下卷十三項目は實踐的方面を述べて、念佛三昧を勸進す。智旭の序に曰く「境觀芳彰、纖疑悉破、闡二惟心之旨、依正寂然、示自性之源」又曰く「除惑之前茅、生西之左券」と讚す、以て其の內容價値知るべきなり。今智旭の重刻の序によれば、此の書飛錫の寶王論と共に二百餘歲廢典となりて流布せず、雲棲袾宏之れを求めて終に得ず、其の後神廟年間萬曆老宿之れを篤楮の中に發見し、韓朝集居士の手に歸せり、智旭之れを讀みて永曆五年十月上梓し、更に重刻して淨土十要第七卷に編入す。

極樂依正第一—淨土依正二報の成立と果成の德相とを述ぶ。

序妄顯眞第二—極樂は單に主觀(在心)或は單に客觀(在境)として、處々皆西方、或は心淨則是、或は不離這個、或は在心(緣影心)住。我身中と云ふは妄說邪見なりと破斥し、今西方極樂世界阿彌陀佛現在說法、實境宛然正しく卽ち是れ我が眞心、眞心大海の如くにして不增不減なり、極樂は西方に在りと雖も卽我が眞心、眞心無性にして彼名體に卽し以て我心を顯す、名體本空亦た我心に卽して其相を示す、心境一體生佛源を同すと、又曰く妙覺妙心十方界に個くして、如來十方國土淸淨寶殿妙覺王刹を含育す、十方空刹依正色心是れ我が本有、我今本有の土に生し本有の佛を見ん事を求む、正しく是れ無始の無明を鄣破し顚倒に隨はず、彼の佛顯現する時、我本有の心佛顯現す、我心顯現する時彼の佛顯はる、我が心彼佛の心、彼佛は我心の佛、一體無二にして性本と圓融す、何んぞ西方極樂內心の佛を捨て妄りに別に憧心の佛ありと計すべけんやと台宗の奧義圓具不二の思想を以つて之を摑けり。更眞妄心觀圖說及破妄念佛說を附錄して、憧心の淨土本性の彌陀は、正しく十方を含裹する大覺心中に在る事を詳述し、「諸法は心にありと錯解し、胸中六塵の緣影を認め樂土は內に在りと謂ひて彼に生ずることを求めざる妄見を破せり。

呵責解第三—淨土否定の謬解を呵斥す。

正明心佛觀慧第四—念佛三昧の本質を詳論す。實に淨土の根本法輪たり。

道場禮像念佛正觀第五—道場の聖像莊嚴供具と極樂の依正と一體不二、一香一華に至るまで三諦の理に卽せざる者なし、禮像を來じ、恭敬供養し心を盡す志を竭すべき事を論じて、扣けば卽ち響、求めば則ち應ある所以を明かにす。

闡二斷空邪說—第六—心を除いては佛も無く法も無し因果を撥無し罪福を排斥して諸佛菩薩の形像は是れ土塊木頭、一大藏教は

是れ不淨の故紙なりと謂へる者を懸論して其の謬見を是正す。

禪佛不二法門第七—念佛法門群機を統し、文殊普賢の所證大人の境界、華嚴法華と部を同すと述べ、參禪即念佛、念佛即參禪の所以を詳述す。

諸佛折攝法門第八—觀慧の法門圓融微妙なりと雖も直に二土無礙皆即ち實境たり、此に於いてか二土の苦樂淨穢を觀じ、其の對境の上に厭欣二種の心を生ず、一は娑婆を厭離し彌陀所說の折門に順じ、二は極樂を欣樂し彌陀所示の攝門に順ず。此の二門精進修行せば念佛三昧必定して成就すと云ふ。

勸修第九—釋迦已に滅し、彌勒未だ生ぜず、賢聖隱伏し、衆生苦海に奔波す駒ほし父を失へる兒の如し、若し極樂の願王を以て歸と爲さゞれば誰にか救護を求らんと勸誡す。

勸戒殺第十—勸持衆戒第十一—他起精進力第十二—正行第十三—容忍所修三昧第十四—三昧儀式第十五—揭佛下化之力第十六—十大願行第十七—願願衆義第十八—一願四義之門第十九—示念佛滅罪義門第二十—略示列祖行門第二十一—劍向善勸第二十二

以上第十より第二十までは實踐的方面の說述、第二十一は時代を追ふて廣く念佛三昧の體驗者の範例を示し、第二十二は弘く一般に念佛三昧を勸進せり。卷末に群妄心境圓說及び破妄念佛說一名直指心要を附錄す。

❹(寶八刊)(谷大、宗大・八一〇)龍大・二六八一・一三一〇(京大、融・一二ホ・一)安永三刊(谷大、餘大・四五三〇)龍大・二〇三・二九)

(千葉良尊)

寶王論語鈔 ❶(日)Hō-ō-ron-gyo-sen. ❷三冊 ❸存 ❹(智)・十・五・左・二〇)

寶翁規矜口訣 ❶(日)Hō-ō-ki-shō-ka-kotsu. ❷二冊 ❸存 ❹雲章一慶、至德三—寛正三(A. D. 1386—1462) ❼(參考) 禪籍目錄

寶翁老和尚佛事法語 ❶(日)Hō-ō-rō-o-shō-butsu-ji-hō-go. 全稱寶翁老和尚佛事法語 ❸存、訓溪和尚末後事實附錄 ❼(參考) 禪籍目錄

寶戒寺文書 ❶(日)Hō-kai-ji-mon-jo. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一〇三二・五三)

寶海如來等十方百七十佛名經 ❶(日)Hō-kai-nyo-rai-tō-jip-pō-hyaku-shichi-ju-butsu-myō-kyō. (支)Pao-hai-ju-lai-teng-shih-fang-pai-chi-shih-fo-ming-ching. ❷一卷 ❼(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

寶海梵志請如來經 ❶(日)Hō-kai-bon-ji-shō-nyo-rai-kyō. (支)Pao-hai-fan-chih-ch'ing-ju-lai-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻悲華經第二卷の抄出。❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

寶海梵志成就大悲經 ❶(日)Hō-kai-bon-ji-jō-ju-dai-hi-kyō. (支)Pao-hai-fan-chih-ch'eng-chiu-ta-pei-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻悲華經第七卷の抄出。❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

寶覺眞室禪師語錄 ❶(日)Hō-kaku-shin-shitsu-zen-ji-go-roku. ❷四卷 ❸存 ❹雪村友梅(正應三—貞和二A. D. 1290—1346) ❼(參考) 大日本佛教全書續刊操定書目

寶覺禪師語錄 ❶(日)Hō-kaku-zen-ji-go-roku. (支)Pao-chüe-ch'an-shih-yü-lu. 三世開山慧日第二世寶覺禪師語錄、東山湛照禪師語錄 ❷一卷 ❸存、大正八〇・二三 No. 2548 ❹東山湛照(寛喜三—正應四A. D. 1231—1291)語

❺東福寺開山聖一國師圓爾辨圓禪師の法嗣として東福寺二世を繼し三聖寺を開創して宗風を擧揚した寶覺禪師東山湛照和尚提唱の語要を採めたもので、延寶二年八月八日西堂光鶴和尚の誌すところに依れば這篇の少分であると云ふのである、即ち弘安四年二月二十七日三聖寺遷山の法語、上堂語、小參、偈頌、祭文、自贊等を收めたもので五十一歲以後の作である。其の小參語に云ふ「佛說一切法。爲度一切心。我無一切心。何用一切法。既無心又無法。乾坤大地。甚處得來。見聞覺知。復是何物。(卓拄杖一下云)劍去久矣方刃到舟。」と其の活作略を窺ふことが出來る。

湛照、宇東山、號十地、謚號して寶覺禪師と云ふ。備中一萬郷(吉備郡二萬村説)の人、初め淨業を修め、後聖一國師に參じ、萬壽寺東福寺に歷住し正應四年八月八日(A. D. 1291)壽六十一、臘四十一を以て三聖寺に示寂した。門下に虎關師錬禪師を打出した宗匠である。

(大久保堅瑞)

寶覺祖心禪師語錄 ❶(日)Hō-kaku-so-shin-zen-ji-go-roku. (支)Pao-chüe-tsu-hsin-ch'an-shih-yü-lu. 晦堂和尚語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二五・二 ❹晦堂祖心(天聖三—元符三A. D. 1025—1100)語、子和錄、仲介重編

❺洪州隆興府(江西南昌府)黃龍山慧南禪師の法嗣として黃龍門派第二世の法燈を揚げた寶覺禪師晦堂祖心和尚の語錄を侍者子和編錄し、門人仲介の重編したものであつて、參學の居士で王安石等と交友のあつた西安(南昌府)の徐禧(字德占)本書刊行の緣由を序し、元豐元年六月二十五日(A. D. 1078)湖北德安府の進士、王智(字子純)の跋文を附して梓行したもので、晦堂祖心和尚五十四歲の時である。

即ち卷首に徐禧の序を收め、祖心の上堂語要室中垂問代答、室中舉古、偈頌等に王智の跋文を收めたものである。祖心は黃東南華府始興縣の郎氏、晦堂と號し寶覺禪師と賜號せられた。龍山等慧全に蘊髮し黃龍山に宣法し、宋元符三年十一月十六日(A. D. 1100)壽七十六、臘五十五にして示寂された。其の上堂語に云ふ「不用受聖。聖是空名。不用獃凡。凡是妄立。但得聖凡情盡。自然體露眞常。還信得及麼。若信得及去。不妨向參學之中。有少分相應。若信不及。也許獃是獃丈夫漢。」と其の用意を知るべき

である。

寶鑑圓明禪師語錄 ❶(日)Hō-kan-en-myō-zen-ji-go-roku. 天境和尚語錄、天境靈致和尚語錄、無規矩集 ❷四卷 ❸存 ❹天境靈致(正應四—康曆三A. D. 1291—1381) ❼(參考) 禪籍目錄

寶鑑國師語錄 ❶(日)Hō-kan-koku-shi-go-roku. ❷二卷 ❸存 ❹朝鮮混丘(無衲) ❼(參考) 禪籍目錄

寶鑑國師語錄 ❶(日)Hō-kan-koku-shi-go-roku. 大圓寶鑑國師語錄、寶鑑錄 ❷三卷 ❸存 ❹東定慶堂(天正七—寛文元A. D. 1579—1661)、豐玉等編 ❺寛政九刊 ❾(朋大)

寶鑑國師語錄 ❶(日)Hō-kan-koku-shi-ro-roku. 大圓寶鑑國師語錄 ❷三卷 ❸存 ❹東定慶堂(天正七—寛文元A. D. 1579—1661)、豐玉等編

寶鑑胎照 ❶(日)Hō-kan-tai-shō. ❷一卷 ❸存 ❹白隱慧鶴(貞享二—明和五A. D. 1685—1768) ❼(參考) 禪籍目錄

寶鑑錄 ❶(日)Hō-kan-roku. 大圓寶鑑國師語錄、寶鑑國師語錄 ❷三卷 ❸存 ❹東定慶堂(天正七—寛文元A. D. 1579—1661)、豐玉等編 ❺寛政九刊 ❾(朋大)

寶鑑錄考 ❶(日) Hō-kam-roku-kō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(朋大)

寶龜院代主 ❶(日) Hō-ki-in-dai-shu. ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

寶篋 ❶(日)Hō-kyō. ❷一帖 ❸存 ❺南北朝時代寫 ❾(寶善提院)

寶篋印經 ❶(日)Hō-kyō-in-gyō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第三七阿彌陀抄第三 ❹承澄(元久二—弘安五A. D. 1205—1282)

寶篋印經 ❶(日)Hō-kyō-in-gyō. (支) Pao-chieh-yin-ching. 一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼經、寶篋印陀羅尼經、寶篋經 ❷一卷 ❸存、大正一九・七一〇 No. 1022、縮開八、縮餘三、卍一五・八、北1362惠、南1365佐、元1324佐、明北352與、清352與、麗1313佐、天1345佐、法1131鄕、至650事、明南558淺、三十帖策子第一八、N. 957 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺康天寶五—大曆九(A. D. 746—774)譯 ❻一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼經の下を見よ。

❾文永八寫(寶壽院)德川時代寫(寶善提院)

寶篋印經記 ❶(日)Hō-kyō-in-gyō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹道喜記 ❺康保二(A. D. 965) ❾寫本(曼殊院)

寶篋印經記 ❶(日)Hō-kyō-in-gyō-ki. ❷一帖 ❸存 ❺寛延三寫 ❾(高大、寄・一・六四)

寶篋印經、出生無邊門、無垢淨光 ❶(日) Hō-kyō-in-gyō, shuna-shō-ma-hem-mon, mu-ku-jō-kō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第四六曼禪鈔第二 ❹曼禪(康治二—建暦二以後A. D. 1142—1212—)

寶篋印經鈔 ❶(日) Hō-kyō-in-gyō-shō. 寶篋印陀羅尼經鈔 ❷三卷 ❸存 ❹俊彥亮法(元和八—延寶八A. D. 1622—1680)述 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

寶篋印經法 ❶(日) Hō-kyō-in-gyō-hō. 寶篋印經鈔、科本法寶印陀羅尼經鈔 ❷三卷 ❸存 ❹俊彥亮法(元和八—延寶八A. D. 1622—1680)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❺寛文一三刊 ❾(京大、日大未・八四)(高大、一・三二)(正大、一一六二・二四六)(京專×谷大、餘大・五六九)

寶篋印陀羅尼經宣揚記 ❶(日) Hō-kyō-in-da-ra-ni-kyō-sen-yō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹素範 ❺享保一二刊 ❾(龍大、二四一八・一〇四×京大、日大未・八三)

寶篋印陀羅尼經和解祕略釋 ❶(日) Hō-kyō-in-da-ra-ni-kyō-wa-gai-hi-ryaku-shaku. 寶篋印經和解祕略釋 ❷三卷 ❸存、近世佛教集說第一 ❹運傳(寛文三—享保一一A. D. 1663—1726)述 ❾正德二刊(高大、一・三二)(正大、一一六二・一五六)享保七刊(谷大、長保・二〇八)(龍大、研佛×正大、一一六二・二四)(京大、日大未・八三)

寶篋印陀羅尼傳來記 ❶(日) Hō-kyō-in-da-ra-ni-den-rai-ki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一六靈方傳叢書第四 ❹道喜述 ❺康保二(A. D. 965)

❻本書は吳越國王錢弘俶の發願に基く八萬四千寶塔の中に收められた寶篋印陀羅尼經の我が國傳來の緣由を誌したもので、康保二年七月廿六日道喜の記錄したものである。天慶九年入唐せる日延が彼地に寶篋印塔を寫して、天曆十年我が國に持ち歸り、この測塔を肥前國司に付屬したのを、應和元年道喜に示したことより、世にも貴き寶篋

寶慶記 ❶(日) Hō-kyō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹東本願寺寶庫 ❺明治一〇刊 ❻(文久)〈A五〇・一〇七—一〇八〉(富大)

寶慶記 ❶(日) Hō-kyō-ki. 安居修行記 ❷一卷 ❸存 ❹若狭國安國寺 ❺明治二四(A. D. 1891)頃 ❻明治一一刊(文久)〈一・一五五・五〉(富大)〈帝國〈六・一九五五〉〉明治一三刊(帝國)〈一四一・一八〇〉明治一八刊(富大)〈一一六七・一一・六五〉(文久)〈一・一一五六・五〉

寶慶記 ❶(日)Hō-kyō-ki. 安居修行記 ❷一卷 ❸存 ❹古田家所藏 ❺明治一八刊 ❻(帝國)〈一〇九・一四二一〉〈一三八・八八〉(富大)

寶慶記講義 ❶(日) Hō-kyō-ki-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹西山宗石家 ❺(參考) 藤澤日發

寶慶記手考 ❶(日) Hō-kyō-ki-ji-kō. ❷一卷 ❸存 ❹(參考) 藤澤日發

寶慶記導其 ❶(日) Hō-kyō-ki-ji-rin. ❷一卷 ❸存 ❹新井孔賢 ❺(富大)

寶慶記抄 ❶(日)Hō-kyō-ki-shō. ❷一卷 ❸存 ❹宮城(富大)

寶慶記隨聞記 ❶(日) Hō-kyō-ki-zui-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹宮城(岩大)〈岩大〉〈三一二六〉

寶慶記撰要 ❶(日) Hō-kyō-ki-teki-yō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹西山學方(天保三—明治六A. D. 1683—1769)頃〈「寶慶記撰要」〉

❺明治四年八月 ❻(富大) (大久保道舟)

寶慶記聞 ❶(日) Hō-kyō-ki. 寶慶寺寶慶記

有語無語に墮せず一切諸法畢竟解脫にして盡く不能語なりと云ふにある。試に本書は寶鏡三昧註釋書中の白眉といふべきものである。（大久保堅璃）

寶鏡三昧本義 ❶(日) Hō-kyō-sam-mai-hon-gi. (支)Pao-ching-san-mei-pen-i. ❷一卷 ❸存、卍續二・一六・二 ❹清行策述

❺本書は天台沙門の到溪(江蘇省宜興縣)の行策が洞山良价禪師の寶鏡三昧歌の本義が從上の宗師家によつて謬說されて居るのを慨し、友人旅亭居士の遣囑にも答ふる爲に其の淺智を顧さんとしたものである。

即ち行策は寶鏡三昧歌一篇の偈註を爲すものは重難六爻一正回互にありとし、(一)寶鏡三昧圓說。(二)正偏回互圓說。(三)三墓分卦圓說。(四)五變成位圓說。(五)三驗顯法圓說。(六)六爻橫義圓說の六種の圓說を作り、初一に於て總說し、後五に於て其の圓旨を開發し、寶鏡三昧の本義を闡さんとしたものである。 （大久保堅璃）

寶鏡三昧聖耳 ❶(日) Hō-kyō-sam-mai-yō-ni. ❷一卷 ❸存 ❹如宗了諷

❼(參考) 禪籍目錄

寶鏡寺事蹟 ❶(日) Hō-kyō-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

寶鏡鈔 ❶(日) Hō-kyō-shō. ❷一卷 ❸存、大正七七・八四七 No. 2426 ❹宥快（貞和元—康永二三A. D. 1345—1416）記

❺初に眞言宗野澤諸流の相承を說き、次に立川流物興の由來と傳授の狀態を示し、立川流の邪義たることを明す。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❽明曆二刊（谷大、餘大・一八六九×龍大、研佛）（京專）（京大、一・二六ゆ・二四）文安六寫（高大、寄・一・四八）安永七寫（谷大、餘大・三〇一二）寫本（京專）（寶龜院）

寶行王正論 ❶(日) Hō-gyō-ō-shō-ron. (支)Pao-hsing-wang-cheng-lun. (梵) Ārya-ratnāvalī (引用) (藏) rgyal-po la gtam-bya-ba rin-po-che'i phreṅ-ba ❷一卷 ❸存、大正三二・四九三 No. 1656、續藏五、卍二二・五、北6254盡、南6282盡、元6231盡、明北1946盡、清1946盡、麗624則、天6295盡、指567則、法612則、至1347偈、明南1372偈、Nj. 1954 ❹眞諦(永元元—太建元 A. D. 499—569)譯 ❺陳永定二—太建元(A. D. 558—569)

❻本論は一卷五品より成り一佛教思想家が一王(寶行王？)に佛教の要諦を說いて之を教化し、修道を勸め、正しき政治を王者として行ふ可きを教へる體裁になつてゐる。その立場は明かに大乘思想である。

〔安樂解脫品第一〕には歸敬文を印度普通の著作に慣つて出し、十善十惡等を記述して修道の大要を示し、進んで大乘佛教の世界觀を出し、有無の二邊、我有我所の二邪見を破し、三世の實在問題を拔つて、逆步的思想を取り、或ひは三世實有・法體恒有を排し、過未無體論を豫想するかの如くにも思はれる。少くとも僧佉(Sāṃkhya)・毘世師(Vaiśeṣika)・尼建子(Nirgranthaputra)・有我論・自性論・句義論等の世界觀を非難してゐる。然して佛教の業論・因緣論を宣揚し、佛教的解脫を高揚してゐる。

〔雜品第二〕に於ては各種の善行を列記して、その功德の深大なるを說き、諸惡事を破し、十戒を守るべきを勸め、殊に邪婬戒を警め、女性の醜狀にして餓鬼す可きを女性の醜狀を一々列擧して記述してゐる。更に第二品の後半より(菩提資糧品第三)の前半にかけて轉輪聖王 Cakrapravartinrajan 轉法輪王 Dharmacakrapravartinrajan (卽ち佛) 大人相好三十二相 (Lakṣaṇa) の各々と八十隨好の殆んど全部を列擧し、その一々が如何なる功德善根によつて成就されたかを懇命に說明してゐる。第三品の後半には貪瞋癡其他の惡德を止め、個人的の諸善業を積むことを勸むる外に、王者として佛像・支提・寺廟等を建立莊嚴し、經をなし、道路・旅舍を增修し、藥品・衣食を豐かに具ふ可く、之等が皆上天・成佛の因緣となるべきを說いてゐる。(正教王品第四) では論師は親しく王に呼び掛けて教へ、善惡と惡業とを細かに分つて詳々として人として亦王者としての踏む可き道を懇ろに教へてゐる。この內に佛教徒の菩薩として一般に修惜すべきものを含んでゐる。(出家正行品第五) は魚類の惡五十七を一々擧げて說明し、更に菩薩の十地 (daśabhūmi) の思想を述べてゐる。この菩薩十地思想は明かに大乘の共であつて、仁王經・華嚴經に記述される十地と全く一致するものである。論師はこの內に各地とその地で修すべき各波羅蜜、居住の天を記してゐる。論師は最後に自ら成佛すべき希願文を出して、この論を終つてゐる。

これらの內には大乘的術語・法數が多く出で、三十二相・菩薩十地の外、六波羅蜜・五十七魚類惡・三乘・四無量・十力・六通四辯・四答其他列擧の暇なき程である。思ふに本論の大乘思想は四、五世紀のものであつて、本書も亦その頃の成立と考へられる。

❼(參考) 三寶紀第九、內典錄第五、譯經圖紀第四、開元錄第七、貞元錄第一〇 （平等通昭）

寶行王正論 ❶(日) Hō-gyō-ō-shō-ron. 國譯寶行王正論 ❷一卷 ❸存、國譯一切經論集部第六 ❹平等通昭譯

寶行王正論 ❶(日) Hō-gyō-ō-shō-ron. (支)Pao-hsing-wang-cheng-lun. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五

寶篋字口訣 ❶(日) Hō-kyō-ji-kū-ketsu. ❷一帖 ❸存 ❹眞源集 ❺寬延四寫 ❽(高大、寄・一・六四)

寶口鈔 ❶(日) Hō-kū-shō. ❷一卷 ❸存 ❹文海口、祐盛記

❺灌頂の種類、諸大事口訣等を記す。

寶華山志 ❶(日) Hō-ke-san-shi. (支)Pao-hua-san-chih. ❷十五卷 ❸存 ❹清劉名芳 ❺乾隆年中刊 ❽(谷大、餘大・三七九六)

寶華寺志 ❶(日) Hō-ke-ji-shi. (支) Pao-hua-sse-chih. ❷四卷 ❸存 ❹清行

策撰 ❽寫本(京大、藏・二〇・ゆ・二)

寶髻經四法憂波提舍 ❶(日) Hō-kei-kyō-shi-hō-u-pa-dai-sha. (支) Pao-chi-ching-ssu-fa-yu-po-ti-she. 寶髻菩薩四法經論、寶髻經論 ❷一卷 ❸存、大正二六・二七三 No. 1529、續藏一一、卍二二・四、北5527傳、南5570傳、元5454傳、明北1335靜、清1335靜、麗5602谷、天5623傳、指521谷、法546谷、至1320自、明南1339弗、Nj. 1941 ❹天親菩薩造、昆目智仙譯 ❺元魏興和三(A. D. 541)

❻本論は佛の寶髻菩薩に語れりと云ふ四種精進、卽ち滿足一切衆生、滿足一切佛法、究竟相好、淨佛國土の四項に就て詳釋を加へたるものである。寶髻經とは大寶積經の卷第百十七寶髻菩薩會、若くは大方等大集經卷第二十五の寶髻菩薩品を指すもので此の菩薩の梵名は寶積經に羅陀隣那朱とあるより ratna-ḍaḍa なるべしと推知される。

本論中の引用經典は善方便經、菩提心憂波提舍各二回、阿彌陀莊嚴經、三善具足憂波提舍、文殊師利の偈、都伽羅問經、轉女身經、無垢稱經各一回である。

❼(參考) 開元錄第六、貞元錄第九、淨土眞宗教典志第一 （泉芳璟）

寶髻經四法憂波提舍 ❶(日) Hō-kei-kyō-shi-hō-u-pa-dai-sha. 國譯寶髻經四法憂波提舍 ❷一卷 ❸存、國譯一切經釋經論部第八 ❹泉芳璟譯

寶髻經討要 ❶(日) Hō-kei-kyō-tō-yō. (支) Pao-chi-ching-t'ao-yao. ❷一卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄 ❽寫本(京大、藏・二〇・ゆ・二)

寶髻經翻譯記 ❶(日) Hō-kei-kyō-hon-yaku-ki. (支) Pao-chi-ching-fan-i-chi. ❷一卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄

寶髻陀羅尼經 ❶(日) Hō-kei-dara-ni-kyō. (支)Pao-chi-t'o-lo-ni-ching. 淸除一切災障寶髻陀羅尼經 ❷一卷 ❸存、大正二一・九一六 No. 1400、續藏一二、卍二五・五、北1241盡、南1345盡、元1239盡、明北2680盡、清2620盡、麗1323高、天1235盡、法1347盡、至740傳、明南900夙、Nj. 265 ❹宋法賢(—成平四A. D. 1001)譯

❻淸除一切災障寶髻陀羅尼經の下を見よ。

寶髻菩薩會 ❶(日) Hō-kei-bo-satsu-e. (支) Pao-chi-p'u-sa-hui. (梵) Pattra-ḍaḍa-paripṛcchā (引用) (藏) bphags-pa gtsug-na-rin-po-ches shus-pa shes bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo. 寶髻菩薩所問經、菩薩淨行經、寶髻經 ❷二卷 ❸存、大寶積經第一一七—一一八(大正一一・六五七 No. 310, 47) ❹竺法護譯 ❺西晉泰始二—建興元(A. D. 265—313)

❻寶髻菩薩品(大方等大集經卷二五・二六)と同本、大集經本の譯文整へると以て解說は其下に合說したり。因みに西藏譯は Dharmaśīla の譯、又は Kamalaśīla との共譯とせらる。 （美濃晃順）

寶髻菩薩四法經論 ❶(日) Hō-kei-bo-satsu-shi-hō-kyō-ron. (支) Pao-chi-p'u-sa-sse-fa-ching-lun. 寶髻經四法憂波提舍、寶髻經論 ❷一卷 ❸存、大正三六・二七三 No. 1529、續藏一一、卍二二・四、北5527傳、南5570傳、元5454傳、明北1335靜、清1335靜、麗5602谷、天5623傳、指521谷、法546谷、至1320自、明南1339弗、Nj. 1941 ❹昆目智仙譯 ❺元魏興和三(A. D. 541)

❻寶髻經四法憂波提舍の下を見よ。

寶髻菩薩所問經 ❶(日) Hō-ke-bo-satsu-sho-mon-kyō. (支)Pao-chi-p'u-sa-su-wen-ching. 寶髻菩薩會、寶髻經、菩薩淨行經 ❷二卷 ❸大寶積經第一一七—一一八(大正一一・六五七 No. 310, 47)

寶髻菩薩品 ❶(日) Hō-kei-bo-satsu-hon. (支)Pao-chi-p'u-sa-p'in. 梵藏題號並に經異名は寶髻菩薩會の下を見よ。❸存、大方等大集經第二五—二六(大正一三・一七三 No. 397, 11) ❹曇無讖譯 ❺北涼太元一〇—元嘉一〇(A. D. 385—433)

❻寶髻菩薩會(大寶積經卷一一七・一一八)と同本。玆に合說する。○序分(一)通序。今經は欲色二界の中間なる大寶坊中の說法として列衆を缺き頗る簡。これ今經の一部として今品を編入する際に修訂したるものである。寶積經本は靈鷲山の說法として菩薩列衆の擧德擧名完備するは本來單獨に成立せる原始體を止むるものとす。(二)別序。東方等華世界(寶積本善變)淨住如來の菩薩寶髻(羅陀鄰那朱)が菩薩淨行法印を聽かんが爲に釋迦牟尼佛の下に來至す。○正宗分。(一)總說。菩薩淨行四法を揭ぐ。(二)別說。(1)淨波羅蜜行。六度の行修と功德を說く。(a)淨菩提行(離守諸佛敎品)。七科三十七道品を說く。(3)淨神通行。五通を擧ぐ。又寶髻の問により「生死中に在りて惱を生ぜざる」二十一法(二十法)及び菩薩の莊嚴の法を說き、寂樂劫(欣豫)天觀世界(同)の一切衆生樂念如來(菩薩世)及び其菩薩寶藏(珍寶)の故事を擧げて莊嚴の意を明す。(4)調衆生行(開化衆生)。種々の調伏法を說き、又、愛劫(愛敬)寂靜世界(寂然)の廣光明如來(離垢光)の菩薩淨精進(極妙精進)が財功德王(業首)を調伏せる故事を擧ぐ。○流通分。寶髻菩薩への授記と阿難への付囑。

❼(注釋) 寶髻經四法優波提舍一卷(世親造・東魏昆目智仙譯) （美濃晃順）

寶月光和尚語錄 ❶(日) Hō-gwatsu-kō-o-shō-go-roku. ❷七卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

寶月童子問法經 ❶(日) Hō-gwatsu-dō-ji-mon-hō-kyō. (支)Pao-yueh-tung-tzu-wen-fa-ching. 大乘寶月童子問法經、月童子問法經 ❷一卷 ❸存、大正一四・一〇八 No. 437、續藏四、卍一五・三、北1146八、南1262八、元1154八、明北821則、清821則、麗1132將、天1142八、法1354冠、至765傳、明南2422盡、Nj. 825 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A. D. 980—)

❻大乘寶月童子問法經の下を見よ。

寶見經 ❶(日) Hō-ken-kyō. (支)Pao-chien-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

寶賢陀羅尼經 ❶(日) Hō-gen-dara-ni-kyō. (支)Pao-hsien-t'o-lo-ni-ching. (梵) Maṇi-bhadra-dhāraṇī (藏傳) (藏)

hphaga-pa ner-ba-hash-poji gnas shes-bya-ba. ❷一巻 ❸存、大正二一・三五三No. 1295、館成一二、卍一五・五、北1294、南1276鋼、元1270鋼、明北1303深、清1303深、麗1254陪、天1255鋼、法1380虚、至1770凡、明南534興、N. 908 ❹宋法賢(一咸平四A. D. 1001)譯

❺雜部密經の一にして除害法の部に入るもの。(類本)、漢譯に異本なし、西藏に二本あり、大谷甘珠爾錄No. 433に用だすもの、即ち上記の表題にして、よく法賢譯に合する。同じくNo. 532に錄せられたるものは題名を殊にし、經の說處も相違するが內容は殆ど全く同一である。

〔內容〕 佛、祇園精舍に在り、時に大夜叉主寶賢なるもの佛所に詣り、佛の聽許加護をうけて、一の陀羅尼を宣べ、一日三時、至心に之を誦念せば、たゞ蛭蚤蝨等の不善法を除いて餘他の金銀財穀等一切の志願を滿たし、貧苦惱を安樂ならしむと說いてある。 (穗部文鏡)

寶劍事 ❶(日)Hō-ken-no-koto. 寶劍銘. ❸存、密敎諸經釋第七、興敎大師全集之內

❺一名は寶劍頌と云ふ、七言七十二句の頌、虛空藏菩薩所持の寶劍を題として求聞持法の觀想を說きたるもの。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 (富田敎純)

寶瓶圖 ❶(日)Hō-ken-zu. ❷一軸 ❸存 ❹足利末期或德川初期寫 ❺(資善提院)

寶類集 ❶(日)Hō-ri-n-sho. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

寶光寺緣起 ❶(日)Hō-kō-ji-en-gi. (參考) 三寶紀第六、內典錄第二、武周錄第一一、開元錄第二、第一四、貞元錄第四、第二四

寶嚴經 ❶(日)Hō-gon-kyō. (支)Pao-yen-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 三寶紀第六、內典錄第二、武周錄第一一、開元錄第二、第一四、貞元錄第四、第二四

寶嚴經 ❶(日)Hō-gon-kyō. (支)Pao-yen-ching. 摩訶衍寶嚴經、大珠莊品 ❷一卷 ❸存、大正一二・一九四No. 351、鳩摩羅什譯、卍六・五、北32推、南32推、元32推、明北32推、清32推、麗32震、天32推、法32震、至1121有、明南31推、N. 32 ❺晉代(A. D. 265—420)失譯 ❻摩訶衍寶嚴經の下を見よ。

寶嚴寺誌 ❶(日)Hō-gon-ji-shi. (支)Pao-yen-sze-chih. ❷二卷 ❸存 ❹淸曾魯撰 ❺寫本(京大、藏・二〇ホ・三)

寶册 ❶(日)Hō-saku. ❷一卷 ❸存 ❹智傳日志 ❺明治八(A. D. 1875) ❻富士大石寺史料なり。 ❼寫本(立大、D〇・二八四)

寶册鈔 ❶(日)Hō-saku-shō. ❷十卷 ❸存、大正七・七八六No. 2423 ❹某寶(他治元—貞治元A. D. 1306—1362)ロ・賢寶(正慶二—應永五A. D. 1333—1398)補 ❺貞和六(A. D. 1350)

❻眞言宗所依の主要經論について、翻譯、相承次第、請來、說相等の梗概につき、主題五十八、付題十二項を選んで問難答釋をした書。本書は某寶ロ說觀寶記の**刃奇鈔**第二及び同第十一—二〇に相當し、彼れを改訂增補したものである。

內容目次は金剛頂經翻譯・略出經翻譯・平記・同經略出十八會中何會・耶・同經具譯四千頌梵本否・同經四卷六卷兩本中以何爲治定・耶・義決擇六卷略出經・敎王經翻譯年記・敎王經譯出初會品第一曼荼羅・略出敎王兩經梵本不同・兩經說相不同・兩經所說會會次第不同・塔內無量頌本爲法關本・梵・兩經本朝請來・金剛界大儀軌攝者・同儀軌譯出金剛界大曼荼羅行法・同儀軌異本(以上卷第一)、大日經翻譯・大日經以無行請來梵本・譯之際・同經梵本不同・同經本朝請來・根本波唎本(以上卷第二)、蘇悉地經・兩部三部大法由來・東寺本傳爲兩部大法・蘇悉地經軌列置相承次第・蘇悉地經爲胎藏部攝・同經爲大日經十萬頌別出・否・十八道爲蘇悉地略行・梵・將爲金剛界略行・梵・蘇悉地經大事依當經・否・蘇悉地經軌本朝請來・慈覺大師奏金剛頂蘇悉地兩業度者・(以上卷第三)、大日經供養法說者・要略念誦經第七卷同本異譯梵・胎藏界略行經軌部類不同・胎藏部略行儀軌本朝請來(以上卷第四)、般若理趣經・當經與眞實相經理趣分・爲同本異譯・梵・宋朝新翻經・理趣會經軌本朝請來・理趣釋經・同釋・梵・同釋本朝請來(以上卷第五)、般若心經・羅什玄奘二師譯分別・異譯心經請本校勘・略出大般若心要・梵・菩提心論爲別會說・梵・三國釋家(以上卷第六)、菩提心論造者・當論兩部通局・三種菩提心本說・同名異論・菩提心義造者(以上卷第七)、釋摩訶衍論眞僞・起信論眞僞(以上卷第八)、大日經疏義釋諸家請來異本・諸家本同異校勘・疏義釋勝劣對辯・義釋再治・疏義釋與不・當・經東旨・否・科

會眞歸內例(以上卷第九)、兩部大經結集者・疏藏記五藏結集文科簡・第五陀羅尼藏兩部大經攝不・疏藏記釋守護國界經指二六度經・悉一未決の六十六條である。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❹貞和六寫本(觀智院)、永應三刊(高大、一・四八)(正大、一四二・四六)、萬治元刊(各大、餘大・七一五)(龍大、研佛)(高大、寄・一・四八)(小田慈舟)

寶山家訓 ❶(日)Hō-zan-ka-kun. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

寶山開祖行業記 ❶(日) Hō-zan-kai-so-gyō-gō-ki. ❷一册 ❸存 ❹道恕述 ❺刊本(高大、寄・一・二一)

寶山開祖大和上百回忌曼荼羅供私記 ❶(日)Hō-zan-kai-so-daiwa-jō-hyak-kwai-ki-man-da-ra-ku-shi-ki. ❷一册 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六三)

寶山外誌 ❶(日) Hō-zan-gwai-shi. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

寶山志 ❶(日)Hō-zan-shi. ❷二卷 ❸存 ❹義琳 ❺寫本(龍大、二九七四・四六)

寶山落海律師行狀記 ❶(日)Hō-zan-ten-kai-ris-shi-gyō-gō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹道恕編 ❺享保年間刊 ❻(帝國・二三七・二三二)

寶山內誌 ❶(日)Hō-zan-nai-shi. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

寶山編年略記 ❶(日)Hō-zan-hen-nen-ryak-ki. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

寶持院傳授聞書 ❶(日)Hō-ji-in-den-ju-kiki-gaki. ❷一軸 ❸存 ❺鎌倉—足利初期寫 ❻(金剛三昧院)

寶持總禪師語錄 ❶(日) Hō-ji-sō-zen-ji-go-roku. (支)Pao-chih-tsung-ch'an-shih-yü-lu. ❷一卷 ❸存 ❹明寶持玄虛語、明英・文祿共編 ❺康熙一六刊 ❻(駒大)

寶悉地成佛陀羅尼經 ❶(日)Hō-shic-chi-jō-butsu-da-ra-ni-kyō. (支)Pao-hsi-ti-ch'eng-fo-to-lo-ni-ching. ❷一卷 ❸存、大正一九・三三五No. 962、菩餘二、卍續一・三・二 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯

❺この經は釋尊が摩伽陀國の淸淨園白蓮池の側に於て、金剛平等の諸大菩薩の爲に說き玉ふたもので、主として佛舍利の功德を說いたものである。末法の世に於て、佛舍利を得て、五輪塔・多寶塔・三股塔・五股塔・獨股塔などの一々を安置し、耽都根本陀羅尼・如意寶珠滿願心陀羅尼等を誦じて、法供養を行ずる時は、四重五逆謗法等の一切の重罪を消滅し、無量の福智は求めざるに自ら得、魔怨を降伏し、生死を脫却して、而も壽命を延長し、命終の後は悉願に應じて十方淨土中、何れにても受生することを得と說かれてある。

❻寫本(正大、一一六〇・五三) 文化四寫(正大、一一六〇・一一) (神林隆淨)

寶車經 ❶(日)Hō-sha-kyō. (支)Pao-ch'e-ching. 妙好寶車經、妙好寶車菩薩經、寶車菩薩經 ❷一卷 ❸存、大正八・五・一三三三No. 1629 ❹妙好寶車經の下を見よ。 ❼(參考) 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

寶車菩薩經 ❶(日)Hō-sha-bo-satsu-kyō. (支)Pao-ch'e-p'u-sa-ching. 妙好寶車經、妙好寶車菩薩經、寶車經 ❷一卷 ❸存、大正八・五・一三三三No. 1629 ❹妙好寶車經の下を見よ。 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄1729

寶積經 ❶(日)Hō-shak-kyō. (支)Pao-chi-ching. ❷三卷 ❸缺 ❹周闍那耶舍譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶積經 ❶(日)Hō-shak-kyō. (支)Pao-hi-ching. 大寶積經 ❷百二十卷 ❸存、大正一一・一No. 310、館地一—六、卍五・七—六・二、北32龍至宇、南32龍至宇、元32龍至宇、明北32龍至宇、清32龍至宇、麗32翔至文、天32龍至宇、指16翔至文、法124翔至宇、至41鳥至霧、明南32龍至宇、N. 32 ❹唐菩提流志(太建四—開元一五A. D. 572—724)譯 ❺大寶積經の下を見よ。

寶積經音義 ❶(日) Hō-shak-kyō-on-gi. (支)Pao-chi-ching-yin-i. ❷三卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

寶積經三律儀會疏 ❶(日) Hō-shak-kyō-san-ritsu-gi-e-sho. (支) Pao-chi-ching-san-lü-i-hui-su. ❷三卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

寶積經要品 ❶(日)Hō-shak-kyō-yō-hon. ❷二册 ❸存 ❹有德財團編 ❺昭和四刊 ❻(京大、一・二三・大別)

寶持院傳授聞書 ❶(日)Hō-ji-in-den-ju-kiki-gaki. ❷一軸 ❸存 ❺鎌倉—足利初期寫 ❻(金剛三昧院)

寶持總禪師語錄 ❶(日) Hō-ji-sō-zen-ji-go-roku. (支)Pao-chih-tsung-ch'an-shih-yü-lu. ❷一卷 ❸存 ❹明寶持玄虛語、明英・文祿共編 ❺康熙一六刊 ❻(駒大)

寶悉地成佛陀羅尼經 ❶(日)Hō-shic-chi-jō-butsu-da-ra-ni-kyō. (支)Pao-hsi-ti-ch'eng-fo-to-lo-ni-ching. ❷一卷 ❸存、大正一九・三三五No. 962、菩餘二、卍續一・三・二 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯

❺この經は釋尊が摩伽陀國の淸淨園白蓮池の側に於て、金剛平等の諸大菩薩の爲に說き玉ふたもので、主として佛舍利の功德を說いたものである。末法の世に於て、佛舍利を得て、五輪塔・多寶塔・三股塔・五股塔・獨股塔などの一々を安置し、耽都根本陀羅尼・如意寶珠滿願心陀羅尼等を誦じて、法供養を行ずる時は、四重五逆謗法等の一切の重罪を消滅し、無量の福智は求めざるに自ら得、魔怨を降伏し、生死を脫却して、而も壽命を延長し、命終の後は悉願に應じて十方淨土中、何れにても受生することを得と說かれてある。

❻寫本(正大、一一六〇・五三) 文化四寫(正大、一一六〇・一一) (神林隆淨)

寶車經 ❶(日)Hō-sha-kyō. (支)Pao-ch'e-ching. 妙好寶車經、妙好寶車菩薩經、寶車菩薩經 ❷一卷 ❸存、大正八・五・一三三三No. 1629 ❹妙好寶車經の下を見よ。 ❼(參考) 出三藏記第五、內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

寶車菩薩經 ❶(日)Hō-sha-bo-satsu-kyō. (支)Pao-ch'e-p'u-sa-ching. 妙好寶車經、妙好寶車菩薩經、寶車經 ❷一卷 ❸存、大正八・五・一三三三No. 1629 ❹妙好寶車經の下を見よ。 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄1729

寶積經 ❶(日)Hō-shak-kyō. (支)Pao-chi-ching. ❷三卷 ❸缺 ❹周闍那耶舍譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶積經 ❶(日)Hō-shak-kyō. (支)Pao-hi-ching. 大寶積經 ❷百二十卷 ❸存、大正一一・一No. 310、館地一—六、卍五・七—六・二、北32龍至宇、南32龍至宇、元32龍至宇、明北32龍至宇、清32龍至宇、麗32翔至文、天32龍至宇、指16翔至文、法124翔至宇、至41鳥至霧、明南32龍至宇、N. 32 ❹唐菩提流志(太建四—開元一五A. D. 572—724)譯 ❺大寶積經の下を見よ。

寶積經音義 ❶(日) Hō-shak-kyō-on-gi. (支)Pao-chi-ching-yin-i. ❷三卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

寶積經三律儀會疏 ❶(日) Hō-shak-kyō-san-ritsu-gi-e-sho. (支) Pao-chi-ching-san-lü-i-hui-su. ❷三卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

寶積經要品 ❶(日)Hō-shak-kyō-yō-hon. ❷二册 ❸存 ❹有德財團編 ❺昭和四刊 ❻(京大、一・二三・大別)

寶積經論 ❶(日) Hō-shak-kyō-ron. (支)Pao-chi-ching-lun. 大寶積經論、大乘寶積經論 ❷四卷 ❸存、大正二六・二〇四No. 1521、館著一〇、卍二二・三、北1256傳、南1256傳、元1256傳、明北1256鋼、清1256鋼、麗1256谷、天1256傳、指1256谷、法144谷、至1379自、明南1319佛、N. 1214 ❹菩提流支譯 ❺後魏永平元—天平二(A. D. 508—535) ❻大寶積經論の下を見よ。

寶積經論 ❶(日) Hō-shak-kyō-ron. (支)Pao-chi-ching-lun. ❷四卷 ❸缺 ❹元魏勒那摩提譯 ❼第二譯。 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶積三昧文殊師利菩薩問法身經 ❶(日)Hō-shaku-sam-mai-mon-ju-shi-ri-bo-satsu-mon-hos-shin-gyō. (支)Pao-chi-san-mei-wen-shu-shih-li-p'u-sa-wen-fa-shen-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第一

寶積三昧文殊師利菩薩問法身經 ❶(日)Hō-shaku-sam-mai-mon-ju-shi-ri-bo-satsu-mon-hos-shin-gyō. (支)Pao-chi-san-mei-wen-shu-shih-li-p'u-sa-wen-fa-shen-ching. (梵)Ratna-kūṭi-nāma-mahāyāna-sūtra (藏傳)(藏)Dphags-pa rin-po-che-bi mdo. 法身經、寶積三昧文殊問法身經、遺日寶積三昧文殊師利問法身經、遺日玉三昧寶積經、遺日寶積三昧文殊師利菩薩問法身經、文殊師利問法身經、寶積三昧法身經 ❷一卷 ❸存、大正一二・二三七No. 336、館地一二、卍一〇・六、北240

傷、南2326傷、元2322傷、明北247才、清247才、麗241登、天2322傷、指1322登、法1329登、至317改、明南2328男、Zj.251 ❹安世高譯 ❺後漢建和二—建寧三(A.D.148—170)

❻(異本) 此の經の異本として國都毗多譯の入法界體性經あり、略ど同内容であるが、西藏本はどちらかといへば毗多譯の方に近い。

(題號に就て) 寶積三昧は兩譯ともに、からなつてゐるが、西藏傳に從へば原語は Ratnakūta でなく Ratnakoṭi(至元錄には阿囉忒孥孤特哩と寫す)であるから(南條目錄補正索引に藏傳としつゝ Ratnakūta とせるは錯誤である) 寶頂又は實際と譯さるべきであるが、支那兩譯の原本に Ratnakūta とあつたのであらうか、併し般若經中所出の三昧の名としての Ratnakoṭi も、摩訶般若には寶頂と譯するが大般若には寶積と譯してをるし、經譯名義大集(續Zg.544)にも寶積と寶際の兩譯を併出してをる。

(大旨) (一)佛、耆闍崛山に在りて寶積三昧に入れる時、文殊來證し、(二)佛との間に諸法の本際、法身に關し無生滅、不可得、金剛なることを問答(三)佛文殊に、阿難を招んで之を受法せんといふ、文殊、いま所說の法、無所見無所得なるに阿難來りて何法を受けんとするやと反問し、佛之を嘉しとしたまふ。(四)時に舍利弗が文殊の後を追ひて此處に來る、佛彼を呼び入れんとしたまふについて、文殊の問により本際法身に內外出入なきことを宣べ、(五)佛の命により舍利弗前進し、文殊と舍利弗と問答して、此法は羅漢の知る能はざる其深の法なることを明し、舍利弗所信を宣ぶ。(六)佛、この法の持誦解說を舍利弗に囑し、(七)經法の名を何といふべきかに對し佛の答あり、(八)舍利弗文殊等の歡喜作禮を以て終る。

❼(參考) 三寶紀第四、內典錄第一、譯經圖紀第一、開元錄第一、貞元錄第一、第二

(櫻部文鏡)

寶積三昧文殊問法身經 ❶(B)Hō-shaku-zan-mai-n on-ju-mon-hō-shin-gyō. (支)Pao-chi-san-mei-wen-shu-wen-fa-shen-ching. 寶積三昧文殊師利菩薩問法身經、這日寶積三昧文殊師利問法身經、法身經、這日玉三昧寶積經、這日寶積三昧文殊師利菩薩問法身經、文殊師利問法身經、寶積三昧法身經 ❷一卷 ❸存、大正一二、二三七 No.356縮地一二、卍一〇・六、北2326傷、南2326傷、元2322傷、明北247才、清247才、麗241登、天2322傷、指1322登、法1329登、至317改、明南2328男、Zj.251 ❹安世高譯 ❺後漢建和二—建寧三(A.D.148—170)

寶積寺日誌 ❶(B)Hō-shaku-ji-nis-shi. ❷一卷 ❸存 ❹萬保道坦(元祿一一—安永元以後A.D.1692—1772—) ❺大正一二寫 ❾(駒大)

寶積重譯經の對照 ❶(B)Hō-shaku-jū-yaku-kyō-no-tai-shō. ❸存、大藏經要義第一〇 ❹本多日生(—昭和六A.D.1931)

寶積錄 ❶(B)Hō-shaku-roku. (支)Pao-chi-lu. 宗門寶積錄 ❷九十三卷 ❸存、卍續二・三二・五 ❹清代本哲編 ❺宗門寶積錄の下を見よ。

寶朱法 ❶(B)Hō-shu-hō. 寶朱法勸修寺 ❷一軸 ❸存 ❺正嘉三寫 ❾(高大、寄・一・六六)

寶珠又說 ❶(B)Hō-shu-u-setsu. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第五一卷譯鈔第七 ❹覺禪(康治二—建曆二以後A.D.1143—1212—)

寶珠祈念作法 ❶(B)Hō-shu ki-nen-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

寶珠口訣抄 ❶(B)Hō-shu-ku-ketsu-shō. ❷一帖 ❸存 ❹眞海 ❺鎌倉時代寫 ❾(寶龜院)

寶珠德寶珠種類附舍利 ❶(B)Hō-shu-toku-hō-shu-shu-rui-tsuketari-shari. ❷一卷 ❸存 ❺明治九寫 ❾(京大、印哲・ロ・四六)

寶授菩薩菩提行經 ❶(B)Hō-ju-bo-sa-ri-bo-dai-gyō-gyō. (支)Pao-shou-p'u-t'i-hsing-ching. (梵)Bodhisattva-caryā-nirdeśa (藏傳) byaṅ-ḥpḥags-pa byaṅ-chub-sems-dpaḥi spyod-pa bstan-pa shes-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo. 寶授菩提行經 ❷一卷 ❸存、大正一四・七〇〇 No.456、續宙七、卍一五・五、北1325傷、南1326傷、元1324傷、明北1323傷、清1323傷、麗1145冠、天1246傷、法1325傷、至751薄、明南2327命、Zj.256 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A.D.980—)

❻本經は先づ陀羅尼を出し、次に其の功德を明してある。若し人此の陀羅尼を通じて一七日を滿すれば、天眼淸淨を得、又人ありて此の陀羅尼を耳に聞き、常に憶念すれば決定して菩提を得、若し又之を一人に傳ふれば所有の無間の罪障を悉く除滅し得と說いてある。

(神林隆淨)

寶生如來次第 ❶(B)Hō-shō-nyo-rai-shi-dai. ❷一帖 ❸存—❾寫本(寶龜院)

寶生法 ❶(B)Hō-shō-hō. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶善提院)

寶生論 ❶(B)Hō-shō-ron. (支)Pao-sheng-lun. 成唯識寶生論、二十唯識順釋論、二十唯識論順釋論

❹(類本) 梵本不傳、漢文異譯はないが、西藏譯一本あり(大谷甘珠爾錄 No.263)。南條目錄にはこの藏傳の梵語題名をその No.1093菩薩善戒經の下に擧げたのは誤であつた。

(內容) 佛、廣嚴城大林樓閣中に比丘千二百五十、菩薩一千と俱に在り。城中を乞食したまふ。光明一切を照して下阿鼻獄に至る。城主尼賢尊師尼王の子寶授(三歲)之を見て乳母の腕より下りてこの甚希有の相は何人の威德力かを問ふ。乳母そは佛世尊なることを答へ、具さにその相好德力を述ぶ。佛、宮中に現じたまひ、寶授童子乃ち難遭希有の想をなし殿上より投身供養す。佛力の故に空中に住まり、向佛合掌して偈を以て菩提不生、諸法離相の旨を宣し、この獻花を以て二乘の證を願はず云云といふ。大日乾達と童子との間に諸法本不生、一切無相について問答あり、遂に目連も默するに至り、童子年少なれど智慧海の如し、幾何の時をへて無生法を學べるやと問ふ。童子更に一切學無性を說き目連の所說を著相となす。舍利弗の問に對して佛はこの寶授童子の修行已に久しきことを說く、更に又この寶授菩薩が今なほ成佛せざるは菩提不可得の故なり、成佛無相、取相は妄想なりと寶授の答を得、又出家といふことも著相有所得であつてはならぬと說破せもる。次に妙吉祥菩薩の問に對して寶授は菩提とは離諸語言なる旨を說く。時に會中の八比丘この無相正法を聞いて快からず吐血命終して阿鼻獄に墮ちる。妙吉祥、佛にその

の說を問ふ、佛は長等は未だ曾て正法を聞かず善友なかりし故、今日忽ち正法を聞いて愛樂せざりしなれど、やがて獄中に於て正法を思ひ、後人間に生れ遂には無垢光佛出世の時に、わが今日の會座の如く正法を隨喜し不退轉を得べしと授記し、正法を聞くことは百千劫の修行にも勝るゝことを述ぶ。時に寶授は乳母に命じて佛及び比丘達に供養施食する。世尊は寶授に行施淸淨の法五種を說き、妙吉祥にこの寶授は當來三十劫菩提を成じ不空力如來となるべしと授記し、世尊及び比丘はかの食を受けて本處に還りたまふ。經名受持、大衆歡喜のことありて經終る。

(櫻部文鏡)

寶授菩提行經 ❶(B)Hō-ju-bo-sa-dai-gyō-gyō. (支)Pao-shou-p'u-t'i-hsing-ching. 寶授菩薩菩提行經 ❷一卷 ❸存、大正一四・七〇〇 No.456、續宙七、卍一五・五、北1325傷、南1326傷、元1324傷、明北1323傷、清1323傷、麗1145冠、天1246傷、法1325傷、至751薄、明南2327命、Zj.256 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A.D.980—)

寶壽大梅和尚語錄 ❶(B)Hō-ju-dai-bai-o-shō-go-roku. 大梅禪師語錄 ❷二卷 ❸存 ❹法璝主立語、太雲等編 ❼(參考) 禪籍目錄

寶壽大梅老和尚年譜 ❶(B)Hō-ju-dai-bai-rō-o-shō-nen-pu. ❷一卷 ❸存 ❹玄芳編 ❺天和二刊 ❾(駒大)

寶聚抄 ❶(B)Hō-ju-shō. ❷一帖 ❸存 ❹成賢(應保二—寶喜三A.D.1162—1231) ❺南北朝時代寫 ❾(寶龜院)

寶樹欵德 ❶(B)Hō-ju-ko-toku. ❷一卷 ❸存 ❹眞迦 ❾寫本(龍大、三〇七九・一三)

寶樹山銀山寺興隆緣起 ❶(B)Hō-ju-san-gin-san-ji-kō-ryū-en-gi. ❸存、扶桑略集第一二之內 ❹岡西惟中著 ❾刊本(帝國、よ・二)

寶樹坊宗要集 ❶(B)Hō-ju-bō-shū-yō-shū. ❷十六卷 ❸存 ❼(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

寶樹坊宗要集論題 ❶(B)Hō-ju-bō-shū-yō-shū-ron-dai. ❸存 ❾(京專)

寶州禪師語錄 ❶(B)Hō-shū-zen-ji-go-roku. 寶州語錄 ❷六卷 ❸存 ❹寶州道聽語、最頂等編 ❺寶永五刊 ❾(谷大、餘大・六六九)(駒大)(哲、け・七・右・二二)

寶生 ❶(B)Hō-shō. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶龜院)

寶生院經藏圖書目錄 ❶(B)Hō-shō-in-kyō-zō-to-sho-moku-roku. ❷二十三卷 ❸存 ❹寺社奉行所編 ❾寫本(帝國、一九七・二七六)

寶生經 ❶(B)Hō-shō-kyō. (支)Pao-sheng-ching. 寶生陀羅尼經 ❷一卷 ❸存、大正二五・九二六 No.1412、續成八、卍一五・四、北1122八、南1162八、明北2323盡、清2323盡、麗1145將、天1146八、法1122冠、至751薄、明南2327命、Zj.256 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A.D.980—) ❻寶生陀羅尼經の下を見よ。

寶生禪師傳 ❶(B)Hō-zen-ji-den. 宗覺圓光禪師傳、宗覺圓光自從寶生禪師傳、萬松山泉能禪師宗覺圓光禪師傳 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九 ❹宗覺圓光禪師傳の下を見よ。

寶生章 ❶(B)Hō-shō-gen. ❷一卷 ❹榮海(弘安元—貞和三A.D.1278—1347)撰

寶生章 ❶(B)Hō-shō-gen. ❷一軸 ❸存 ❺鎌倉初期寫 ❾(寶善提院)

寶生章法 ❶(B)Hō-shō-gen-hō ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶善提院)

寶生陀羅尼經 ❶(B)Hō-shō-dara-ni-kyō. (支)Pao-sheng-to-lo-ni-ching. 寶生經 ❷一卷 ❸存、大正二一・九二六 No.1412、續成八、卍一五・四、北1122八、南1162八、元1122八、明北2323盡、清2323盡、麗1145將、天1146八、法1122冠、至751薄、明南2327命、Zj.256 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A.D.980—)

❻本經は先づ陀羅尼を出し、次に其の功德を明してある。若し人此の陀羅尼を通じて一七日を滿すれば、天眼淸淨を得、又人ありて此の陀羅尼を耳に聞き、常に憶念すれば決定して菩提を得、若し又之を一人に傳ふれば所有の無間の罪障を悉く除滅し得と說いてある。

(神林隆淨)

寶生如來次第 ❶(B)Hō-shō-nyo-rai-shi-dai. ❷一帖 ❸存—❾寫本(寶龜院)

寶生法 ❶(B)Hō-shō-hō. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶善提院)

寶生論 ❶(B)Hō-shō-ron. (支)Pao-sheng-lun. 成唯識寶生論、二十唯識順釋論、二十唯識論順釋論 ❷五卷 ❸存、大正三一・七七 No.1621、續往一〇、卍二二・二、北1617忠、南631忠、元622忠、明北1303沛、清1303沛、麗512力、天613忠、指562力、法606鍋、至1345丙、明南1360日、Zj.1416 ❹義淨(貞觀九—先天二A.D.635—713)譯 ❺唐景龍四(A.D.710) ❻成唯識寶生論の下を見よ。

寶性院結緣灌頂圖等 ❶(B)Hō-shō-in-ketsu-en-kwan-jō-zu-to. ❷一包 ❸存 ❹弘範 ❺寶曆五(A.D.1755) ❾德川末期寫 ❾(金剛三昧院)

寶性院藏別尊雜記目錄 ❶(B)Hō-shō-in-zō-bes-son-zak-ki-moku-roku. ❷三十二卷 ❸存 ❺德川中期寫 ❾(金剛三昧院)

寶性分別七乘增上論 ❶(B)Hō-shō-fun-betsu-shichi-jō-zō-jō-ron. (支)Pao-hsing-fen-pie-ch'i-ch'eng-tseng-shang-lun. 究竟一乘寶性論、一乘寶性論、寶性論 ❷四卷 ❸存、大正三一・八一三 No.1611、續秦二、卍二二・四、北605力、南639力、元612力、明北1320性、清1320性、麗505鍋、天610力、指562鍋、法524鍋、至1325靈、明南1330日、Zj.1325 ❹後魏勒那摩提(—正始五A.D.508—)譯 ❺究竟一乘寶性論の下を見よ。

寶性論 ❶(B)Hō-shō-ron. (支)Pao-hsing-lun. 究竟一乘寶性論、一乘寶性論、寶性分別七乘增上論 ❷四卷 ❸存、大正三一・八一三 No.1611、續秦二、卍二二・四、北605力、南639力、元612力、明北1320性、清1320性、麗505鍋、天610力、指562鍋、法

504錦、至1325靈、明南17股、Nj. 1236)
❹後魏勒那摩提(一正始五A. D. 505—)譯
❺究竟一乘寶性論の下を見よ。❻(參考)
諸宗章疏錄第一、淨土依憑經論章疏目錄

寶性論 ❶(日)Hō-shō-ron. (支)Pao-hsing-lun. ❷四卷 ❸缺 ❹菩提流支譯
❺元魏永平元—天平三(A. D. 508—535)
❻第一譯。❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶性論科文 ❶(日)Hō-shō-ron-kwa-mon. (支)Pao-hsing-lun-ko-wen. 寶性論科文 ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(眞平王三九A. D. 617—) ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2497

寶性論宗要 ❶(日)Hō-shō-ron-shū-yō. (支)Pao-hsing-lun-tsung-yao. ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(眞平王三九A. D. 617—)
❺元曉永平元—天平三(A. D. 508—535)
❻第一譯。❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶性論科文 ❶(日)Hō-shō-ron-kwa-mon. (支)Pao-hsing-lun-ko-wen. 寶性論科文 ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(眞平王三九A. D. 617—) ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2497

寶性論宗要 ❶(日)Hō-shō-ron-shū-yō. (支)Pao-hsing-lun-tsung-yao. ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(眞平王三九A. D. 617—)
❺元曉永平元—天平三(A. D. 508—535)
❻第一譯。❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

寶性論疏 ❶(日)Hō-shō-ron-sho. (支)Pao-hsing-lun-su. ❷一卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2499

寶性論科簡 ❶(日)Hō-shō-ron-kyō-kan. (支)Pao-hsing-lun-lun-chien. 寶性論科文 ❷一卷 ❸缺 ❹新羅元曉(眞平王三九A. D. 617—) ❼(參考) 東城傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二、華嚴宗經論章疏目錄、奈良朝現在一切經疏目錄2494, 2495

寶星經 ❶(日)Hō-shō-kyō. (支)Pao-hsing-ching. 寶星陀羅尼經、大集寶星經 ❷十卷 ❸存、大正一三・五三六No. 402、縮玄六、卍七・二、北26海、南25海、元77海、指69股、魔79股、天72海、法77股、至146道、明南17股、Nj. 24 ❹後秦鳩摩羅什譯 ❺唐貞觀三—四(A. D. 629—634)
❻(梵本)(類本) 本經は大集經の第九寶幢分の異譯別行本で容量は約二倍あり、從つて多少の增廣を認めるが品數は共に十三品に分つてゐる。梵本は法琳の序によれば三千餘偈あつたといふが、今僅少なる斷片が中亞より發見せられ、Hoernle MS. の No. 143, cf. A. 7. に Ratnadhvaja-sūtra と題して公表されてゐる。又西藏本あり、題名は上記の如くで、聖大集寶頂陀羅尼大乘經の意、內容は漢譯兩本と同じく十三品に分ち、最もよくこの波羅頞蜜多羅譯に一致する。

〔內容〕 (一)降魔品、佛、王舍城竹林迦蘭陀池邊に在り、時に優波底沙、倶利多といふ二人の外道あり共に甘露を得んことを契る。優波底沙、途上に比丘馬勝(阿說示)に遇ひ、その師佛陀を知り所說の法を聞く。寫宗歸り來つて倶利多を呼び竹林に佛陀を訪はんと決心する。惡魔これを知つて馬勝の姿になつて二人の前に現れ、出家の心を翻へさせようとするが、之に打ちかつて五百の弟子と共に佛所に行くことになる。魔なほ妨げるが、遂に比丘達に迎へられて佛前に到る。佛に名字を問はれて優波底沙は舍利弗、倶利多は目御羅なりといふ。二人具足戒を成ずる。魔王佛前にあらはれて種々妨害せんとして成らず却つて眷屬男女被々歸佛するので憂惱する。(2)本事品、佛、魔妓女諸子眷屬の爲に惡友に遠かるべき四法を說く。無生滅不可得の法をとき會中の諸菩薩の同讚あり、次で佛は月光明香勝如來の許に於ける過去世の因緣譚を說く。(その中に寶星陀羅尼出づ)(3)魔王歸伏品。釋迦如來この寶星陀羅尼經を說きたまふ時、大光明ありて姿婆を照らす。諸魔集りて種々の法を以て佛を害せんとするが、皆四大弟子(舍利弗、目連、富樓那、須菩提)の爲に調伏せられ、却つて魔王を諫める。魔王懺悔する。(4)大集品。佛王舍城に入りて魔軍を破せんとしたまふに一切大衆、毀害を案じて坐を起たざれと止めるが、佛は如何なる魔力も我を害し得ざる旨を宣し、入城せらる。諸天迎へて頂禮供養する。雪山の光眼仙人、魔に遣されて王舍城に來り、佛と問答し、二十八星宿の事を述べるが、佛は之を愚癡凡夫の熱病の所見なりと破し、仙人は歸佛して受記せらるゝ。(5)相品。世尊神通力を以て王舍城十二門の一一に如來大衆を現じて、魔王の莊嚴に打ち驚ち給ふ。十方佛刹の大衆、竹林諸菩薩皆王舍城に世尊を拜し、魔王に問ふものなきを見て彼も歸佛の色あり。光眼菩薩が神力化作せる寶階に昇りて佛は魔王に說法せらる。魔王却て鄙恨を懺せど、佛は魔王の熱毒氣を變じて摩那斯華蓋となし十方佛刹に普遍せしむ、十方諸佛は各々その菩薩達に釋尊に隨喜すべき所以を說き、共に娑婆世界釋迦如來の所に集り來曾聞の金剛摧碎心高廣法等句陀羅尼印入差別記を聽かんとする。(6)陀羅尼品、東方阿閦佛等六方六如來が無量の菩薩と共に各々釋尊の所に來り、大衆、說法を請ひ、釋尊は諸佛の前に立つて往昔の本願を宣べ、諸佛同聲に金剛法等因緣法心建立摧碎陀羅尼印句入差別記法門を說く。一切大衆は南無一切諸佛を三稱し其大希有の息をなす。寶積菩薩、諸佛世尊等皆稱讚する。梵天等進りに此法の護持を述べる。女人も亦この咒を受持すれば諸願滿足すべき旨あり。(7)囑受妙法品、時に妙慧童達菩薩種々身を現ずる力あり、富樓那彌多羅尼子は世尊にその因緣を問ふ。そは衆生調伏の爲にして、當來に五逆不善の衆生をも救護調伏すべき大願者なることを敎へ、十方諸佛國より來集の菩薩らはかゝる大師を見、かゝる大集會を見、未曾聞の陀羅尼を聞ける旨を宣す。(8)授記品、息華といふ魔が女形を以て歸佛護法を述べ諸佛に聽許せられ、世尊この魔の爲に偈を說く。女形を以て衆生を成熟せしめること緣說あり。(9)慈愍品、世尊、息華の爲に咒を說き、諸佛同讚す。世尊、魔王に向つて、佛說の信ずべきこと、魔

の作倒骨諸佛して次の魔王失望することを指摘し給へども、魔王は者提を信ぜず、佛に從はずといふ。(10)施護品、會中の曼陀羅香佛曰く、我等この法門を擁護せん、されど釋迦佛滅後、この法を誰に付囑すべきかを問ふ、佛は之を此佛刹に住の菩薩釋梵護世天龍等乃至淨信の者に付囑し、諸天大衆鋼勒菩薩等皆護法を誓ふ。(11)護正法品、四天王梵天夜叉等も護法を誓ふ。その時、不去といふ魔あり、此法を受持するもの說く者聽く者を護り魔をして伺求せざらしめんと誓ひ諸佛の稱讚を得る。魔王は堅固慧菩薩に不去の勝力によりて我等の部黨が散滅退墜したが、これ何故ぞ、誰の加被力によるかと問ふ、堅固慧そは一切諸佛の神力加護による、汝今清信心菩提心を起して苦惱を脫せよと勸めるが、魔王は肯じない。(12)阿吒薄俱品、時に阿吒薄俱夜叉が種々の身形を現して、毘婆尸佛の時以來菩提心を發して惡鬼を調伏したることを語り、咒を說き、一切天龍夜叉も戰怖し歸佛する。(13)諸佛證國品、十方來の諸佛本國に還らんとす。梵王、大雨栴檀香如來より此經受持の法十種を承り、世尊の稱揚あつて經を終る。
❼(參考) 內典錄第五、譯經圖紀第四、開元錄第八、貞元錄第一一、Hoernle: MS. remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan. (樣部文彥)

寶章關節 ❶(日)Hō-shō-kwan-setsu. 眞宗安心寶章關節 ❷一卷 ❸存 ❹鷲谷寂澤述 ❺明治一四刊 ❻(谷大、宗大・三〇九四)

寶章訓函 ❶(日)Hō-shō-kun-kan. ❷一卷 ❸存 ❹柔遠(寶保二—寶政一〇A. D. 1742—1798)述 ❺明治一六刊 ❻(立大、A四〇・六五×龍大、一二四三・五〇)(谷大、宗大・三一五二)(帝國、一四一・二〇〇)

寶章五十題 ❶(日)Hō-shō-go-jū-dai. ❷二卷 ❸存 ❹東陽圓月(文政元—明治三五A. D. 1818—1902)述 ❻明治二二刊(龍大、一五〇・一・九九)明治二六刊(谷大、宗小・四〇×立大、A四〇・四七)。

寶章綱要 ❶(日)Hō-shō-kō-yō. ❷二卷 ❸存 ❹鬼木沃州(—明治一七A. D. 1884)述 ❺明治一九刊 ❻(龍大、一二四三・五一)(谷大、宗大・二三五五)

寶章稿錄 ❶(日)Hō-shō-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹藤鯉(—明治二A. D. 1869)述 ❻寫本(龍大、一二四三・五二)

寶章三十二論講說 ❶(日)Hō-shō-san-jū-ni-ron-kō-setsu. ❷二卷 ❸存 ❹原口針水(文化五—明治二六A. D. 1808—1893)述 ❺明治三六刊 ❻(龍大、一五〇・一・一〇〇)

寶章選意 ❶(日)Hō-shō-sen-i. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(龍大、一二四三・五三)

寶章聽記 ❶(日)Hō-shō-chō-ki. ❸存、雜記之內 ❹勇哲 ❻寫本(龍大、一五〇・一・一九三)

寶章類文 ❶(日)Hō-shō-rui-mon. ❷一卷 ❸存 ❹宗松肯堂(文政一〇—明治二九A. D. 1827—1896) ❻明治一四刊(龍大、研究)、谷大、宗大・二三五六) 明治一五刊(龍大、一〇二四・一一)

寶章論題 ❶(日)Hō-shō-ron-dai. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(龍大、一五〇・一・一〇一)

寶章論題後編 ❶(日)Hō-shō-ron-dai-ko-hen. ❷三卷 ❸存 ❹東陽圓月(文政元—明治三五A. D. 1818—1902)述 ❺明治二六刊 ❻(帝國、六五・一七〇)

寶章論題前編 ❶(日)Hō-shō-ron-dai-zen-hen. ❷三卷 ❸存 ❹東陽圓月(文政元—明治三五A. D. 1818—1902)述 ❺明治二七刊 ❻(正大、一六五・四—五)(龍大、研究)(谷大、宗小・四一)(立大、A四〇・四六)

寶唱錄 ❶(日)Hō-shō-roku. (支)Pao-chang-lu. 梁世衆經目錄、寶唱衆經目錄 ❷四卷 ❸缺 ❹寶唱撰 ❺梁天監一七(A. D. 518)
❻本錄は具さに梁世衆經目錄、又は寶唱衆經目錄とも云はれて居るものであつて、梁武帝が天監十七年(A. D. 518)に正觀寺沙門釋寶唱等に勅命を降して撰集せしめた經典目錄である。蓋し、梁武帝は國土安穩萬民多幸のために上は三寶に資し、中は四天に賴り、下は龍王衆神の祐助を藉り、或は各地に散在せる諸經論を集めてその名目を錄するやうに頻りに天監中勅命を降して、遂に經律異相、名僧傳並序錄、衆經飯供齋僧法、衆經護國鬼神名錄等凡そ八部一百七卷のものが撰集されるに至つたのであるが、今の本錄も亦其等の一部としてこの時に撰集されたものに他ならないのである。

經律異相の序文中に、武帝は天監七年、釋僧旻に勅して備さに衆典を鈔せしめ、更に十五年には寶唱をして經律の要事を鈔せしめて、これを舉ぶ者をして理解し易からしめ、時に新安寺僧釋僧豪・興皇寺釋寶生等をして相助けしめたといふ記事が見えて居るから、今天監十七年、寶唱勅命を奉じて衆經目錄を撰集した際も、恐らくは僧旻、僧豪、寶生等が參加して居たものであらうと想ふ。

本錄撰集の年月は、實は天監十四年とも云はれ、或は十五年、更に十七年とも云はれて居つて、その何れが最も正確であるかを直に規定することは出來ないけれども、安樂寺僧紹が華林佛殿衆經目錄を奉勅撰集した後に、更に寶唱が勅命をうけて重撰したものであることだけは疑ひない。今、開元錄卷十所載の記事に依て、本錄の內容を左に表示して見よう。

第一卷　大乘　六七四卷

二六二部
無譯人多卷二
有譯人一卷三
無譯人一卷四

有譯人多卷一
四六六部
九五七卷
九九一部
八〇〇卷
九九九部
八八〇卷

第二巻　小乗　二八五部　四〇〇巻
- 有譯人多巻一　一二〇巻　一七部
- 無譯人多巻二　一七五巻　一五部
- 有譯人一巻三　五〇〇巻　一〇部
- 無譯人一巻四　二一三巻　二部

第三巻　三六二部　一、六八二巻
- 先異譯經一　四五部　三八巻
  - 華經二　三八部　九巻
  - 戒律三　六三部　一巻
  - 疑經四　二七部　三一巻
- 注經五　四六部　六巻
- 數論六　二四六部　七巻
- （義記七　三六三部　三四一巻）

第四巻　二二九部　九八五巻
- 陀羅尼別名一　一一三部　四三五巻
- 陀羅尼共名二　一七五部　四一六巻
- 讚　三　二四部　二九巻
- 佛名　四　四七部　四七巻
- 神呪　五

蓋し、本錄は、僧紹の華林佛殿衆經目錄が未だ僧祐錄の模倣の域を脱せず、加ふるに武帝の意にも添はなかつた所から、寶唱は特にこの點に注意をして作製したものであつて、衆經の註解等に就ては僧祐錄を繼承したけれども、その組織は主として索引の便を計つて宋代衆經目錄に範をとり、これに寶唱自身の工夫を加味したものである。不幸にも本錄は既に散佚して今日傳つては居らないけれども、後の法經錄等の組織には重大な影響を及して居るのであつて、非常に重要な經錄の一つである。

寶象林語錄 ❶(B)Hō-zō-rin-go-roku. ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

寶圖經 ❶(B)Hō-zu-kyō. (支)Pao-ta-ching. ❷巻下一巻 ❺疑僞經。❼(參考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

寶施女經 ❶(B) Hō-se-nyo-kyō. (支)Pao-t'i-shih-nü-ching. ❷一巻 ❹失譯 ❺大集經寶女品の抄出。❼(參考) 出三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六 ❼(參考) 三寶紀第一五、内典錄第一〇、開元錄第一〇、貞元錄第一八(林屋友次郎)

寶施女經 ❶(B)Hō-se-nyo-kyō. (支)Pao-shih-nü-ching. 須摩提菩薩三昧經 ❷一巻 ❸缺 ❹西晉竺法護(一泰始二—建興元A.D.265—313—)譯 ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一四、貞元錄第二四

寶石寺事蹟 ❶(B)Hō-seki-ji-ji-seki. ❷一巻 ❸存 ❼(參考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

寶草篇 ❶(B)Hō-sō-hen. ❷一巻 ❸存 ❺碎燕石を破斥せるものにして、佛性に關する論議である。❾寫本(谷大、長保・六五)

寶藏開山鐵舟道英和尚行業記 ❶(B)Hō-zō-kai-san-tō-e-shō-dō-ei-o-shō-gyō-gō-ki. ❷一巻 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

寶藏經 ❶(B)Hō-zō-kyō. (支) Pao-tsang-ching. 文殊師利現寶藏經、文殊師利寶藏經、文殊現寶藏經 ❷二巻 ❸存、大正一四・四五二No.461、館宇一〇、卍九・九、北151蓋、南151蓋、元147蓋、明北164恭、清164恭、麗150方、天152蓋、指141方、法149方、至152涼、明南171歌、Nj.162 ❹竺法護譯 ❺西晉太始六(A.D.270) ❻文殊師利現寶藏經の下を見よ。

寶藏鈔 ❶(B)Hō-zō-shō. 根來寺名目抄 ❷一巻 ❸存 ❺寶永四寫 ❾(正大、一四九・三四)

寶藏神大明曼拏羅儀軌經 ❶(B)Hō-zō-shin-dai-myō-man-da-ra-ki-kyō. (支)Pao-tsang-shen-ta-ming-man-na-lo-i-kuei-ching. 寶藏神大明曼拏羅儀軌經 ❷二巻 ❸存、大正一八・三四三No.1252、館成一二、卍一六・八、北1160家、南1176家、元1170家、明北1041止、清1041止、麗1160相、天1156家、法1176冠、至255涼、明南255命、Nj.1046 ❹法天譯 ❺宋開寶六以後(A.D.973—)

-na-lo-i-kuei-ching.(梵)Jambhalajālandharayaksa-labdha-kalpa (藏傳)(藏)gnod-gnas dbang-po ci-ltar phyug-pahi rtog-pa shes bya-ba. 寶藏神曼拏羅儀軌經 ❷二巻 ❸存、大正二一・三四三No.1252、館成一二、卍一六・八、北1160家、南1176家、元1170家、明北1041止、清1041止、麗1160相、天1156家、法1176冠、至255涼、明南255命、Nj.1046 ❹法天譯 ❺宋開寶六以後(A.D.973—) ❾(類本) 梵本不傳、漢譯異本なし。西藏本は上記の題號にて大谷甘珠爾錄No.438に出だす。但し法天譯は西藏本の約半までで二巻を終つてゐる。西藏本後半が或は法天譯聖寶藏神儀軌經に當ることなきか、筆者なほ精究を遂げてゐない。西藏本題號のyarbhabdha(今並に存する限りに於ての)は此經軌の梵本未盡なることを意味する。

(內容) 雜密經の一にして、財寶を與ふる夜叉王なる寶藏神の眞言、曼拏羅、及び修法を說く。佛、摩伽國に在り、寶藏神、世尊にこの祕密曼拏羅儀軌心眞言を說かん事を請ふ。佛、夜叉眷屬眞言を說き、寶藏神は佛の許を受けて己が眞言、結印を說示し、世尊はこれ過去一切如來の宣說する所なりとして、本生譚因緣を述ぶ、(專心讀誦務伽經のことあり) 次に曼拏羅の作法を說く、又修法の印法、眞言句を說く。(櫻部文鏡)

寶藏神曼拏羅儀軌經 ❶(B)Hō-zō-shin-man-da-ra-gi-kyō. (支) Pao-tsang-shen-man-na-lo-i-kuei-ching. 寶藏神大明曼拏羅儀軌經 ❷二巻 ❸存、大正二一・三四三No.1252、館成一二、卍一六・八、北1160家、南1176家、元1170家、明北1041止、清1041止、麗1160相、天1156家、法1176冠、至255涼、明南255命、Nj.1046 ❹法天譯 ❺宋開寶六以後(A.D.973—) ❾(類本) 同じ施護譯の佛說聖莊嚴陀羅尼經はこの經の異譯である。後は二巻に分つてゐるが、殆ど之と同樣で、別に加へる處はないのである。西藏譯あり(大谷甘珠爾錄No.437)、如來大藏經總目錄(昭和法寶總錄第一巻一〇四五頁中段二行目)に聖者娑婆口陀羅尼とせるもの是であるが、娑婆口と譯せるは梵語音寫のMehala を西藏語の Me-khala と見ての苦しい誤譯に過ぎない誤譯である。

(內容) 佛、迦毘羅城尼拘律陀樹園に在り、時に羅睺羅童子が夜分、羅刹の怖畏に かゝりて佛前に涕泣せしを緣として、阿難に對し、一切衆生の擁護となる寶帶といふ大明呪を說きたまうた。この明呪を受持すれば惡鬼・刀杖・惡毒・惡友・疾病より遠離・救出・擁護せられて大安樂を得るといふ。ついで、慈氏菩薩・梵天王・夜摩天子・帝釋天・四天王其の他の諸天・龍・夜叉衆等も各々隨喜して寶帶大明の眷屬明句を宣說し、佛は重ねてこの大明の最勝なることを說く。かくて羅睺羅童子は怖畏を離るゝことを得、阿難らは佛の所說を信受した。(櫻部文鏡)

寶譯十八 ❶(B)Hō-yaku-jū-hachi. ❼(參考) 本朝台密撰述書部書目

寶池院前大僧正入壇資記 ❶(B) Hō-chi-in-zen-dai-sō-jō-nyū-dan-shi-ki. ❸存、續群書類從第二六 ❾本書は寶池院前大僧正につき入壇師資した者の記錄である。即ち文永元年六月十八日前左大臣洞院實雄の子定勝法眼の入壇より弘安五年閏三月二十四日宣寛阿闍梨の入壇迄二十一人の入壇記錄である。寶池院前大僧正は定濟と稱し土御門內大臣定通の子である。寶禪に師事し建長八年六月第三十七世醍醐寺座主となり文永四年二月十四日權僧正に任じ、弘安四年五月十六日大僧正

に轉じ、同年十月十三日壽六十二を以て入寂してゐる。（高倉永輝）

寶池方萬供大阿所作法 ❶(B) Hō-chi-gata-man-ku-dai-a-sho-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❺(寶龜院)

寶地私記 ❶(B) Hō-ji-shi-ki. ❹役割 ❼(參考) 本朝台眼撰述密部書目

寶地體玄記纂要 ❶(B) Hō-ji-tai-gen-ki-san-yō. ❷一卷 ❸存 ❹雅龍撰 ❺寛政二刊

寶頂經 ❶(B) Hō-chō-kyō. (支) Pao-ding-ching. ❷一卷 ❹長慶經。❼(參考) 出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

寶頂經 ❶(B) Hō-chō-kyō. (支) Pao-ting-ching. ❷五卷 ❸缺 ❹宋 竺法眷譯 ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

寶田慧印三昧經 ❶(B) Hō-den-e-in-zam-mai-kyō. (支) Pao-t'ien-hui-yin-san-mei-ching. 慧印三昧經、慧印經、十方現在佛悉在前立定經 ❷一卷 ❸存、大正一五・四六〇 No. 632、給宿一、卍一〇・七、北174常、南175常、元170常、明北252才、清252才、麗172五、天174常、指164五、法170五、至252諦、明南182傷、Nj. 256 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A. D. 223—253) ❻慧印三昧經の下を見よ。

寶傳對受記 ❶(B) Hō-den-tai-ju-ki. ❹宥智

寶登王太子經 ❶(B) Hō-to-ō-tai-shi-kyō. (支) Pao-teng-wang-t'ai-tzu-ching. ❷一卷 ❹長慶經。❼(參考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

寶塔一件御裁許之寫 ❶(B) Hō-tō-ik-ken-no-sai-kyo-no-utsushi. ❹一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❼(寶龜院)

寶塔圖 ❶(B) Hō-tō-zu. ❹一紙 ❸存 ❺南北朝時代寫 ❼(寶善提院)

寶道齊啓 ❶(B) Hō-dō-sai-kei. (支) Pao-tao-chi-ching. ❷一卷 ❼(參考) 書寫請來法門等目錄

寶幢院記 ❶(B) Hō-dō-in-ki. ❷一卷 ❸存 ❹光顯記

寶幢開山智覺普明國師行業實錄 ❶(B) Hō-dō-kai-san-chi-kaku-fu-myō-koku-shi-gyō-ge-jitsu-roku. 智覺普明國師行業實錄、普明國師行業實錄 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九 ❻智覺普明國師行業實錄の下を見よ。

寶幢齊文 ❶(B) Hō-dō-sai-mon. ❷一卷 ❹宸慶(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❼(參考) 本朝台眼撰述密部書目、山家眼德撰述篇目集卷上

寶幢寺鹿王院記 ❶(B) Hō-dō-ji-roku-ō-in-ki. 覺王山大福田寶幢寺鹿王院記、鹿王院記 ❷一卷 ❸存、群書類從第二四 ❹春屋妙葩(應長元—嘉慶二A. D. 1311—1388) ❻覺王山大福田寶幢寺鹿王院記の下を見よ。

寶幢呪經 ❶(B) Hō-dō-ju-kyō. (支) Pao-chuang-chu-ching. ❷一卷 ❻大集經寶幢分の抄出。❼(參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

寶幢分 ❶(B) Hō-dō-bun. (支) Pao-chuang-fen. (梵) Ratna-dhvaja (梵本)、藏、寶星陀羅尼經參照 ❸存、大方等大集經第一九—二一(大正一三・一二九 No. 397, 9) ❶北凉曇無讖(太元一〇—元嘉一〇 A. D. 385—433)譯

❻異譯に寶星陀羅尼經(其下參)十卷あり量に於て倍加の增句を見るも分品施設一致す。西藏は寶星經に一致し Sthandrabodhi と Ye-śes sde の共譯、十三品より成る。別に梵本斷簡あり、Ratnadhvajasūtra (Hoernle, MT. No. 143, SA. 7)と稱し、題號は本經に一致す。(魔苦(唐譯降魔)品第一) 優波提舍・拘律陀(舍利弗と目連のこと)二人の歸佛の事蹟を叙し、この間に魔王が屢々二人を誘惑して歸を妨げようとしたことを記す。(往古(本事)品第二(梵本斷簡)) (1)佛、魔衆の爲に四法を得ば菩提心を成就するを得と說き、又七種の二法を離るべしと說き給ふ。(2)地意・電意・菩見・無盡意・金剛意・堅意・寶手・美覺意・分別慧・親・蓮華子・月光童子・無盡意童子・獅勒・無盡意(再出)・文殊師利童子・樂欲(階譯、持智)・電慧・毘盧遮那・地慧・金剛慧・堅慧・寶手・不思議慧・退慧・蓮華藏・月光・虛空慧・無盡慧・獅勒・文殊師利・壞愛樂の諸菩薩、佛智の領解を述べ、佛之を印許したまふ。(3)佛、過去業を說き給ふ。云く、過去世電持(具足大勢)劫の時、妙香光明世界(階譯缺)に帝目(優鉢羅華)轉輪王あり、香功德(月光明香勝)如來に歸依す。王夫人菩見(天孫陀利)、佛より寶幢(寶星)陀羅尼を聞きて女身を轉じて男身を成ぜるを以て、王以下一同出家して佛弟子と作る。菩行(馬摩羅)大臣之を聞きて憤慨し、山に入りて婆羅門法を修行し佛法を毀呰す。此の時の帝目王は今の釋迦佛にして惡大臣は今の電王なりと。(電調伏(電王歸伏)品第三) (1)波旬、諸電王を語ひ、又雪山の光味仙を語ひて摩伽陀國に入りて佛を觸惱せんとす。(2)佛、之を知りて一切民衆をして電を見せしめず、又舍利弗・目連・富樓那・須菩提の四大弟子、城の四門より入りて魔軍を迎へて各陀羅尼を說くに皆信心を起し、かくて城の內外悉く佛の聲名を讚ふ。(3)かくて波旬は魔子聚道(智聚)の勸告によりて歸佛す。(三昧神足(大集)品第四) (1)佛、諸天が惡電光塞の故に入城し給はざらんことを勸告せるを却けて王舍城に入り給ふ。(2)光味仙、佛の偈に侍從し二十八宿の人性を詳述す。(3)佛その所以なきことを明し佛の本身を示し給ふに光味仙等寶幢三昧を得て歸佛し、佛爲に將來世光功德(無垢香光聲)佛たるべしと授記し給ふ。(相品第五(同)) 佛に魔を苦しむる意志なく、電も遂に成佛することを明し、佛電一紙の理を明す。(陀羅尼品第六(同)) (1)諸方より佛來集し、須菩提童子(同)の請問に依り諸佛同聲にして大集金剛法心因緣自在陀羅尼(金剛法等因緣法心建立摧碎陀羅尼)を說き給ふ。(2)月光童子(同)この陀羅尼を讚歎し更に自らも陀羅尼を說く。(3)菩提自在菩薩(世自在王大梵天王)、無量壽佛に請ひ

て釋迦佛滅後に正法久住の爲にせんとて陀羅尼を說く。(4)正語(妙音)梵天また護法のためとて陀羅尼を說き、釋迦佛その願を許して護法の爲の陀羅尼を授け給ひ、諸天等護法を誓ふ。(護品(擁受妙法品)第七) 美聲意(妙聲通達)菩薩、佛前に在りて八萬四千種の和聲を現じ、富樓那その所以を佛に問ひ奉る。佛、これ衆生の機に應じて攝化するもの、無相の證に應ずとて、その將來世資發(開敷無邊光)佛となるべきを說き給ふ。(授記品(同)第八) (1)寶王莊嚴華(息軍)阿閦佛の意を承けて誓願を立てて陀羅尼を說き、釋迦佛より將來世に功德意(勝慧)佛たるべしと授記せらる。(2)吉意(成就智)菩薩、莊嚴華の本事を說き、彼と共に佛法を護らんと誓ひ、釋迦佛より將來世に美見(毘盧遮那)佛と成るべしと授記せらる。その他諸天等に授記のことあり、隋譯增句して諸菩薩授記の名を擧ぐ。(悲品(慈愍品)第九) (1)十方佛、莊嚴華・吉意二菩薩の爲に陀羅尼を授け、二菩薩これが受持を誓ふ。(2)釋迦佛、波旬に對し、無量衆の解脫を得ることは正しく汝の因緣によるを以て、汝亦菩提心を發すべしと勸告したまひ、波旬遂に菩提心を發すべきを誓ふ。この魔衆を解脫因とすることは、本經の特に力說せんとする思想の一であり、密教思想の萌芽を見るべきである。(護法(擁護)品第十) 曼陀羅華微妙香佛(曼陀羅香佛)の問に依り、釋迦佛、本經を頗婆娑羅王等の大王並に諸天等に付屬すべしと宣ふや、皆これを護持せんことを誓ひ、彌勒等の諸菩薩も本受持を誓ふ。このうち、息災延命星宿吉日等の思想あること注意すべし。(四天王護法(護正法)品第十一) 梵・釋・四天王・魔天太白(不去)が何れも陀羅尼を唱へて本經を護持せんことを誓ふ。(魔野鬼(阿吒薄俱)品第十二) 魔野鬼、その前生の本事を說き、法數を受けず惡心を起さゞる諸鬼を降伏せんとて、金剛摩呪(金剛佉婆娑羅)諸鬼心大惡惡陀羅尼)といへる二種の陀羅尼を說く。(證本(諸佛證國)品第十三) 諸佛各其の本國に歸り給ひ、佛梵天に本經の流布を護持すべきを命じ給ふ。(美濃晃順)

寶德藏經 ❶(B) Hō-toku-zō-kyō. (支) Pao-te-t'sang-ching. 佛母寶德藏般若波羅蜜經 ❷三卷 ❸存、大正八・六七六 No. 232、給月八、卍一五・五、北1957高、南1933兵、元1917高、明北259臨、清259臨、麗1957臨、天1294高、法1283虛、至519火、明南323風、Nj. 364 ❹宋法賢(—成平四A. D. 1001)譯 ❻佛母寶德藏般若波羅蜜經の下を見よ。

寶日光明菩薩問蓮華國相貌經 ❶(B) Hō-nichi-kō-myō-bo-satsu-mon-ren-ge-koku-sō-bō-kyō. (支) Pao-jih-kuang-ming-p'u-sa-wen-lien-hua-kuo-hsiang-mao-ching. 寶日光明菩薩經 ❷一卷 ❹失譯 ❻悲華經の抄出。❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

寶女經 ❶(B) Hō-nyo-kyō. (支) Pao-nü-ching. 寶女所問經、寶女三昧經、寶女問慧經 ❷二卷 ❸存、大正一三・四五二 No. 397, 給玄五、卍七・二、北76殷、南76殷、元72殷、明北76發、清76發、麗76發、天76殷、指65發、法73發、至145問、明南73發、Nj. 36 ❹竺法護譯 ❻西晉太康八(A. D. 287)

寶女所問經 ❶(B) Hō-nyo-sho-mon-kyō. (支) Pao-nü-so-wen-ching. (梵) Mahāyāna-pada'a (藏傳)(藏) Theg-pa-pa-theg-pa chen-poji mdo-dag ces-bya-ba-theg-pa chen-poji mdo 寶女經、寶女三昧經、寶女問慧經 ❷四卷或三卷 ❸存、大正一三・四五二 No. 397, 給玄五、卍七・二八、北76殷、南76殷、元72殷、明北76發、清76發、麗76發、天76殷、指65發、法73發、至145問、明南73發、Nj. 36 ❹竺法護譯 ❻本經十三品より成る。寶女品(大集經第三會)及び西藏譯の二異本あり、後者は本經に近きも分品せず、前者は本經に比し百五十年前後の後出なるも却て簡潔にして平實に過ぎない。恐らく取意譯による爲と思はる。彼此對照して各品に就き略解しよう。第一段。(問慧品第一) (1)序分列衆(大集本缺)。(2)寶女散環歎佛して佛に請問す。以下佛答。(3)菩薩至誠(實語)、三誠・三十二事口耐清淨。(4)至誠求願具足(口意相稱)、六度・三十七道品・四諦等。(5)順法(法語)。(6)離威儀(菩薩義)。(7)順律に就て明す。(發意三十二寶品第二) (1)舍利弗、女身にして上の佛說を修するを得るやと問ひ、寶女、至誠に言辭あるなし、法に欲なし、猶べからず說くべからずと答ふ(大集本內容整備)。(2)舍利弗、何の實執じてか寶女と名づくると問ひ、寶女、三十二事ありて寶心を發す、これを無垢妙珍寶一切菩薩寶心と名づくと答ふ。(聽明品第三) 舍利弗、寶女の聰明を歎ずるや、寶女、聰明の義を明す(大集本、四無碍を歎ずとし內容整へり)。(問寶女品第四) (1)佛、舍利弗の問により清淨佛土(大淨)の維摩佛(分別見)世に於ける福報清淨(淨德報)なる轉輪聖王の本緣を說きて寶女の前身とす。(2)舍利弗、何の罪ありて女身を受けしやを問ひ、佛、方便の故に受くとす。(3)寶女、汝女身を以て法を說くやと問ひ、舍利弗、我人身を厭ふと答ふるや、寶女、菩薩は受陰を患とせずと說いて煩惱即菩提義を明かにす。第二段。(八力品第五) 寶女、舍利弗の問によりて菩薩の八力並に無力有力を說く(大集本第五卷終)。(十種力品第六) 寶女の問により(下同)佛、如來の十力を得る道を說く(大集本には如來と十力の非一非等の形而上學的發展あり)。(四無所畏品第七) 四無畏を得る道を說く。(十八不共法品第八) 十八不共法を得る道を說く。(十八不共法品第八) 十八

名所行登●(名)(名書)(名庫)(名庫書)●所藏●月年の刊寫●(參考參書解說)●本書●說解者內●代年作著●書●著●秋存●數巻●(名)名●題●數字號

し。〔三十二相を時々に說くこと〕三十二相を時々に說くこと。〔行住坐臥〕行住坐臥を說き、坐は四威儀を說く。〔坐行臥坐〕坐行臥坐を說く。〔不共〕〔不共〕〔不共〕

に古きを知るのであるが、同じく藤原時代作の「法華経」は今見る巻は古い方、現存部分中最も古い写経である。

寶物集 ❶(日)Hō-motsu-jū-motsu-narabini-shoseki-tori-shirabe-moku-roku. ❷1巻 ❸存 ❹清水(慶大)1・九七・三〇)

寶門記 ❶(日)Hō-mon-ki. ❷1巻 ❸存 ❺貴族四書 ❻(寶華経記)

寶積 ❶(日)Hō-yaku. 唐譯寶積 ❷1帖(三巻) ❸存、天正十七・三六三 No. 2426、以法大師全集第三 一巻写1A. D. 774—835)題 ❹密教(寶積五部の下と見る。 ❺徳川時代刊 ❻(寶華経記)

寶積開宗記 ❶(日) Hō-yaku-kaishū-ki. 唐譯寶積開宗記 ❷十巻 ❸存 ❹寶華(寶積十一—寶華四A. D. 1679—1747)題 ❺貞享1(A. D. 1742)刊 ❻唐譯寶積開宗記の下と見る。 ❼(寶華)

寶積勧註 ❶(日)Hō-yaku-kan-chū. 唐譯寶積勧註 ❷八巻 ❸存 ❹宗鏡(寶積十一—寶定1(A. D. 1226—1304)題 ❺唐譯寶積勧註の下と見る。 ❻(寶華) 龍宗鏡定撰 ❼慶安四年刊 ❽(寶華経記)

寶積記事聞書 ❶(日) Hō-yaku-kiji-kiki-gaki. ❷1帖 ❸存 ❹貞治記? ❺慶安1刊 ❻(寶華経記)

寶積聞書 ❶(日) Hō-yaku-kiki-gaki. ❷三帖 ❸存 ❺貞治記? ❻(寶華経記)

寶積略賛 ❶(日)Hō-yaku-gu-sō. 唐譯寶積略賛 ❷五巻 ❸存 ❹宗鏡(寶積十一—寶定1(A. D. 1226—1304)題 ❺唐譯寶積略賛の下と見る。 ❻(寶華) 龍宗鏡定撰 ❼元和中刊 ❽(寶華経記) 文明年間写 ❾(寶華経記)

寶積第四十六日七日入寺井打事 ❶(日)Hō-yaku-kwan-chū-roku-nichi-shichi-nichi-no-sō-rin-ta-shitsu. ❷1帖 ❸存 ❺徳川時代写 ❻(寶華経記)

寶積下手分 ❶(日)Hō-yaku-ge-han-shō. ❷1帖 ❸存 ❺元和時代写 ❻(寶華経記)

寶積見光秘 ❶(日) Hō-yaku-ken-kō-shō. 唐譯寶積見光秘 ❷三巻 ❸存 ❹宗鏡(元禄九—明和元A. D. 1696—1764)題 ❺唐譯寶積見光秘の下と見る。 ❻(寶華)

寶積聞書分 ❶(日) Hō-yaku-kenjitsu-shō. 唐譯寶積聞書分 ❷四巻 ❸存 ❹光遠(寶積1—一巻久1A. D. 1025—11[5])題 ❺(寶華) 慈雲尊者著 刊行慶安年間

寶積略賛記 ❶(日)Hō-yaku-kō-gi-hik-ki. ❷1巻 ❸存 ❺徳川時代写 ❻(寶華経記)

寶積説義抄 ❶(日) Hō-yaku-satsu-gi-shō. 唐譯寶積説義抄 ❷十1巻 ❸存 ❹幸賀(寶永1[〇—一巻保1〔〇A. D. 1643—1725)題 ❺唐譯寶積説義抄の下と見る。

寶積事業 ❶(日) Hō-yaku-san-ge. 唐譯寶積事業 ❷七巻(内寶聞1巻) ❸存 ❹慶長(寶応1—元一—元和元A. D. 1614—1693)題 ❺唐譯寶積事業の下と見る。 ❻〔寶華〕 龍宗鏡定撰 ❼元禄三刊 ❽(寶華、寶・1・四五)

寶積事業十四聞答問集 ❶(日) Hō-yaku-san-ge-jū-shi-mon-dō-kwa-hen. ❷存 ❺浜崎富人写 ❻(寶華)

寶積事業仏註 ❶(日) Hō-yaku-san-ge-jo-chū. 唐譯寶積事業仏註 ❷11巻(1巻 ❸存 ❹善幸(一巻保五A. D. 1720)題 ❺刊本(寶華)

寶積事業抄 ❶(日)Hō-yaku-san-ge-shō. 唐譯寶積事業抄 ❷八巻(内寶聞1巻) ❸存 ❹善幸(一巻保五A. D. 1720)題 ❺刊本(寶華)(新・廿・1・元・八)(寶大、寶・1・四五)

寶積事業聞書 ❶(日) Hō-yaku-san-ge-waku-mon. 唐譯寶積事業聞書 ❷1巻 ❸存 ❹慶安(寶応1—元一—元和元A. D. 1614—1693)題 ❺刊本(寶大、寶・1・四五)(寶華)

寶積私記 ❶(日)Hō-yaku-shi-ki. 唐譯寶積私記 ❷四巻 ❸存 ❹宗鏡(文和五—永享1〔以後A. D. 1366—1439—) ❺〔寶華〕 慈雲尊者著 刊行慶安年間

寶積私記 ❶(日)Hō-yaku-shi-ki. 唐譯寶積私記 ❷三巻 ❸存 ❹幸賀(寶永1[一—寶保1]A. D. 1674—1742)題 ❺〔寶華〕 慈雲尊者著 刊行慶安年間

寶積住心品 ❶(日)Hō-yaku-jū-shim-bon. 唐譯寶積住心品 ❷1巻 ❸存 ❹貞家(正慶1[一—寶永五A. D. 1333—1398)題 ❺〔寶華〕 慈雲尊者著 刊行慶安年間

寶積抄 ❶(日)Hō-yaku-shō. 唐譯寶積抄 ❷四十巻 ❸存 ❹幸賀(文和元—寶永1[三A. D. 1345—1416)題 ❺唐譯寶積抄の下と見る。 ❻〔寶華〕 龍宗鏡定撰 ❼三巻

寶積聞書 ❶(日)Hō-yaku-chi-hitsu. 唐譯寶積聞書 ❷1巻 ❸存 ❹貞家(正慶1[一—寶永五A. D. 1333—1398)題 ❺〔寶華〕 慈雲尊者著 刊行慶安年間

寶積中宗論 ❶(日)Hō-yaku-chū-kwan-ron-gi. ❷1帖 ❸存 ❺永正1天文 ❻(寶華経記)

寶積聞題 ❶(日)Hō-yaku-mon-dai. 唐譯寶積聞題 ❷四巻 ❸存 ❹慶安口々筆(一—永享五A. D. 1433)記 ❺唐譯寶積聞題の下と見る。 ❻元和時代写 ❼(寶華経記)

寶積聞題 ❶(日)Hō-yaku-mon-dai. 唐譯寶積聞題 ❷四巻 ❸存 ❹清水(慶大、寶・1・四五)(寶華)

寶積聞題説分 ❶(日) Hō-yaku-mon-dan-shō. 唐譯寶積聞題説分 ❷四巻 ❸存 ❹道慶(天喜元—建保四A. D. 1184—1252)題 ❺唐譯寶積聞題説分の下と見る。 ❻(寶華) 龍宗鏡定撰 ❼(寶華)

寶積略註 ❶(日)Hō-yaku-ryaku-ge. 唐譯寶積略註 ❷三巻 ❸存 ❹行杖(建長—寶応1[一—寶永1[〇A. D. 1249—1304)題 ❺唐譯寶積略註の下と見る。 ❻元禄四刊 ❼(寶大、寶・1・四五)

寶積論説 ❶(日)Hō-yaku-ron-gi. 寶積論説之巻 ❷1巻 ❸存 ❺文明六写 ❻(寶華経記)

寶積論説 ❶(日)Hō-yaku-ron-gi. 寶積論説四巻 ❷1帖 ❸存 ❺文安1[写 ❻(寶華経記)

寶積論説 ❶(日) Hō-yaku-ron-gi. 寶積論説巻第七 ❷1巻 ❸存 ❺嘉永八写 ❻(寶華経記)

寶積論 ❶(日)Hō-yō-gi-ron. (支)Pao-yao-i-lun. 大寶積經論 ❷十巻 ❸存、大正三十・四九 No. 1635、經巻三[卍三・1・〇、寺1333炎、寺1338炎、元1328炎、明寺1304炎、法1304炎、龍1501書、天1318炎、南1387炎、明南1444書、Nj. 1311 ❹法護等譯 ❺元魏宣武一—孝靖帝[(A. D. 1004—1058) ❻大寶積經論の下と見る。

寶樂經 ❶(日)Hō-ryō-kyō. (支)Pao-liang-ching. 寶樂經、寶樂[切法寶藏安住陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、大寶積經 ❷11巻 ❸存、大寶積經 ❹法天(宋太平興国中—淳化中(A. D. 401—413)

寶樂經會 ❶(日)Hō-ryō-ju-e. (支)Pao-liang-chū-hui. (梵)Ratna-rāśi-sūtra (羅)bhagas-pa rin-po-cheḥi phuṅ-po shes-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo 寶樂經、寶樂[切法寶藏、安住陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經、寶藏陀羅尼經 ❷11巻 ❸存、大寶積經 ❹法天(宋太平興国中—淳化中(A. D. 401—413)

❺大寶積經第四十四会にして11巻十七品あるが、大寶積經の四に番してその本品の出生を記けた部。而してその本品の梵語題は Surendrabodhi と ye-ces-sde の共同にして、同じく十品あるが、品名も多少本品に1致せず。更に本品には梵本の蔵国あり、仏印品の1部に相当す。MS. remains of Buddhist literature in E. Turkestan. pp. 116—121. (ed. by F. N. Thomas) と見る。○本品構成 巻1—11[○(一)仏印品第一 (二)仏印品第二十11巻 (三)仏印品第三十11品 (四)仏印行人品(五)菩人品第十11巻(菩薩菩提品)○(六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(五十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(六十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(七十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(八十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(九十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百二十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百三十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百四十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百五十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百六十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百七十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百八十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(百九十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百二十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百三十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百四十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百五十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百六十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百七十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百八十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(二百九十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百二十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百三十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百四十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百五十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百六十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百七十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百八十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(三百九十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百二十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百三十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十五)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十六)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十七)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十八)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百四十九)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百五十)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百五十一)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百五十二)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百五十三)菩薩菩提人品(菩提菩提人品)○(四百五十四)菩薩菩提人品(菩提菩提人

は、大に「寶林傳」を支持して神論これ力め、天台宗の學者子昉との間に論難を交へたり。佛教史上より大觀する時は、破者の論難に於て、大に見るべきものありと雖も、兎も角世に行はるる二十八祖說を定めしめたるは、此の「寶林傳」に基づくを以て、禪宗史上に於ける此書の位置、甚だ大なりといふべし。師子尊者と菩提達磨との間を連絡せしむる祖師に、二系あり。一は舍那婆斯・優波崛・婆須密・伽倻羅又とするものにして、古「增經」、「歷代法寶記」、「圓覺大疏鈔」等之を取り、他は婆舍斯多・不如密多・般若多羅とするものにして、「寶林傳」によりて立てられ、「祖堂集」、「宗鏡錄」、「景德錄」以下、皆之を取れり。最後に撰者を以て、「大藏綱目指要錄」に金陵沙門とせるより以後、或は建康沙門とせられ來れりと雖も、現存卷六に、明白に朱陵沙門とあり。朱陵とは南嶽の事なり。南嶽般舟道場の惟勝頭陀が「鈔寶林傳」を成せるより見るも、撰者智炬が朱陵即ち南嶽の沙門たりしを推想し得べし。

最後に金藏中の殘存「寶林傳」は、日下北京に於て影印刊行せらるゝ計畫あり。東方文化學院昭和九年發刊常盤大定著「寶林傳の研究」參照。

❷〔參考〕入唐新求聖教目錄、日本國承和五年入唐求法目錄、禪籍志卷上 ❹〔青蓮院〕

寶林套稿 ❶(日)Hō-rin-tō-kō. ❷一冊 ❸存 ❹〔智・ふ・三・中・二〇〕 (常盤大定)

寶曆二年三月廿四日勅法務宮御灌頂請經表白並嘆德御返答 ❶(日)Hō-reki-ni-nen-san-gwatsu-ni-jū-yo-ka-no-hō-mu-no-miya-no-kwan-jō-jō-kyō-hyō-byaku-narabini-tan-dokn-no-hen-tō. ❷一冊 ❸存 ❹德川末期寫 ❹(寶善提院)

寶曆八年經朱日記等 ❶(日)Hō-reki-hachi-nen-kyō-shu-nik-ki-tō. ❷一括 ❸存 ❹德川時代寫 ❹(寶善提院)

寶樓閣 ❶(日) Hō-rō-kaku. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第四六覺禪鈔第二 ❹覺禪(康治二—建曆二以後A. D. 1143—1212—)

寶樓閣 ❶(日) Hō-rō-kaku. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第三七阿娑縛抄第三 ❹永證(元久二—弘安五A. D. 1205—1282)

寶樓閣經 ❶(日)Hō-rō-kaku-kyō. (支)Pao-lou-ko-ching. 大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經、大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經、大寶廣博樓經、善住祕密陀羅尼經 ❷三卷 ❸存、大正一九・六一九No. 1000A、續開七、卍一六・五、北1336投、南1370時、元1336時、明北1023息、清1023息、麗1284時、天1336時、法1056府、至1653事、明南1005不、N. 1028 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經の下を見よ。

❺足利時代寫及享保一九寫 ❹(寶善提院)

寶樓閣經法念誦次第 ❶(日)Hō-rō-kaku-kyō-hō-nen-ju-shi-dai. ❸存 ❹寫本(寶龜院)

寶樓閣經梵字眞言 ❶(日)Hō-rō-kaku-kyō-bon-ji-shin-gon. (支) Pao-lou-ko-ching-fan-tzu-chen-yen. 梵大寶樓閣經眞言、寶樓閣梵字眞言 ❷一卷 ❸存、大正一九・六三四No. 1005B ❹唐代(—永貞元A. D. 805)失譯

❺大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經(大正一九、六一九—)並に廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經(大正一九、六三六—)中の漢字音の眞言を梵字にて書したものが即ち此の梵字眞言である。この二經の中で前者は不空三藏譯にして、後者は唐の菩提流志譯で、二經俱に三卷から成る。今不空三藏譯經に就て、今頁を指示すれば、左の通りである。但し品中頁の擧げてない所は、今の梵字眞言と關係なきものであることを察知せられたい。

〔卷上〕 序品第一、覺覺陀羅尼(六二三、b)、根本陀羅尼品第二、根本陀羅尼(六二四、a)、心及隨心陀羅尼品第三、心陀羅尼(六二四、b)、隨心陀羅尼(六二四、b)

〔卷中〕 成就心陀羅尼法品第四、成就隨心陀羅尼法品第五、請儀軌陀羅尼品第六

この第六品に於て坐眞言(六二六、a)、結壇界眞言から請聖衆眞言迄に護身眞言(六二七、b)に至る三十首の眞言が明されてある。建立曼荼羅品第七、灌頂眞言(六二八、a)、畫像品第八、護摩品第九、護摩眞言(六二九、a)

〔卷下〕 護摩品第九之餘、我今悉皆禮(六三〇、c)、菩提光明如來心(六三一、a)、一切如來心(六三一、a)、一切如來菩提大寶(六三一、b)、一切如來莊嚴大寶光(六三二、a)、金剛師子座(六三二、b)、大寶出生灌頂(六三二、b)、摧魔熾然法輪神通加持(六三二、c)、無能勝(六三三、a)、一切如來轉法輪(六三三、a)、金剛手(六三三、b)、四大天王(六三三、b)、吉祥天女(六三三、b)、餘業尼天女(六三三、b)、使者天女(六三三、c)、曼荼羅中一切聚衆(六三三、c)、花貴天女(六三三、c)。

❺永安元寫 ❹(寶善提院) (神林隆淨)

寶樓閣曼荼羅 ❶(日)Hō-rō-kaku-man-da-ra. ❷一卷 ❸存、大正圖像第五 ❺大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經を持誦する本尊の一幅に畫いた曼荼羅を寶樓閣曼荼羅又は寶樓閣經曼荼羅と名け、本書はその中の諸尊の尊容を說明せんために畫いたものである。同經には畫像法と曼荼羅法との兩者が說かれてあり、尊容抄・別尊雜記には曼荼羅と稱して畫像法による畫を揭げ、覺禪鈔・曼荼羅集(興然)には畫像と曼荼羅との兩者を揭げてある。然し曼荼羅中には經說に合はず畫像法の說を混入したる點がある。今此の本書には如來相を略してその印相のみに止め、檀陀・寶輪等も省いて、その他の尊像を畫いてある。大正藏圖像の番號により一から九までは畫像法による四天女・四天王及び持誦者、一三は寶金剛菩薩、一六は執金剛菩薩、此の二尊を除いて一〇から二五までは曼荼羅法に畫かれる諸尊等である。即ち一〇金剛手菩薩、一一未詳(私案金剛使者天)、一二未詳(私、花貴羅刹女、一四未詳(無量尼?花貴羅刹?)(私、無量尼)、一五中尊釋迦佛手印、一七大自在天、一八摩尼金剛菩薩、一九未詳(私、大吉祥天女)、二〇毗摩天、二一訶利帝母、二二持國天、二三多聞天、二四廣目天、二五增長天である。此の曼荼羅の尊像の配置及び尊容は覺禪鈔などと異なり經說に近いものである。覺禪鈔、尊重抄、別尊雜記、曼荼羅集參照せよ。

❹(東寺觀智院) (吉祥眞雄)

寶樓閣無雄清淨壽命經等 ❶(日)Hō-rō-kaku-mu-o-shō-jō-ju-myō-kyō-tō. ❷一軸 ❸存 ❺元亨元寫 ❹(寶善提院)

亡名子寐語 ❶(日) Mō-mei-shi-bi-mō. ❷一卷 ❸存 ❹白華 ❹〔參考〕禪籍目錄

卯方抄 ❶(日) Mō-hō-shō. ❺本朝台密撰述害部書目に云く「御藏坊座主抄。出羽藥師アサハ抄?藥師ノ記故ニ、ノート名ク〔御口決ニモ出タリ。山門遁川ノ書ト〕」云々。

防非鈔 ❶(日)Bō-hi-shō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第六八 ❹舟阿述 ❺曆應四(A. D. 1341)

❺本書は時衆の僧尼が非法の犯行を防制すべきこと、並びに犯行に對する制裁の方法を記したるものである。總じて四十八條、又追加二條あり、各條多く經論を引用して說明して居る。時衆教團成立初期の事情一班を知るにも貴重なる文獻である。卷頭に安永四年洞天の序、並びに梵網經虛遮那佛說菩薩心地法門品第十の偈訣がある。

❺安永四刊 ❹〔谷大・宗大・七七一〕 (寺沼琢明)

忘我法數 ❶(日)Bō-ga-hō-sū. 冠註忘我法數 ❷二卷 ❸存 ❹古鏡 ❺元祿三刊 ❹〔龍大・二〇二二・三六〕

忘己錄 ❶(日)Bō-ki-roku. ❷一卷 ❸存 ❹南條文雄(嘉永二—昭和二A. D. 1849—1925)著 ❺明治四〇刊 ❹〔谷大、餘津・二〇七〕〔京大、一・二九ゆ・一〕〔帝國、七四・三八八〕

忘路集 ❶(日) Bō-ro-shū. ❷一卷 ❸存 ❹誠拙周穆(寬享三—文政三A. D. 1746—1820) ❺天保九刊 ❹〔谷大、餘大・二六六八〕〔哲、乙・二・中・三〕〔駒大〕

坊間舊記 ❶(日)Bō-kan-ku-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

坊主教誡 ❶(日) Bō-zu-kyō-kai. ❷一卷 ❸存、眞宗緇人聖典之內 ❹僧樓(享保四—寶曆一二A. D. 1719—1762)述

坊主教誡 ❶(日) Bō-zu-kyō-kai. ❷一卷 ❸存 ❹大谷(安永二—嘉永三A. D. 1773—1850)述 ❹寫本(龍大)

坊主衆代々 ❶(日) Bō-zu-shu-dai-dai. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

坊主衆之聞書 ❶(日) Bō-zu-shū-no-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

坊守教誡 ❶(日)Bō-mori-kyō-kai. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

坊守教誡聞書 ❶(日)Bō-mori-kyō-kai-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹德龍(—安永元—安政五A. D. 1772—1858)述 ❺明治三一刊 ❹〔谷大、宗小・一五八〕

坊守訓 ❶(日)Bō-mori-kun. ❷一卷 ❸存 ❹龍温(寬政一二—明治一八A. D. 1800—1885)述、大須賀秀道編 ❺明治四四刊 ❹〔谷大、宗津・二八〇〕

坊守のきしへ ❶(日) Bō-mori-no-o-shi-e. 御垂示複演集 ❷一卷 ❸存 ❹猪飼法量編 ❺大正元刊 ❹〔谷大、宗津・二九二〕

房玄方七重印信口決私記 ❶(日) Bō-gen-gata-shi-bi-jū-in-jin-kaketsu-shi-ki. 房玄方七重印信口決地藏院道教鎮流 ❷一冊 ❸存 ❺天保一三寫 ❹〔金剛三昧院〕

房玄方傳授次第 ❶(日) Bō-gen-gata-den-ju-shi-dai. ❷一軸 ❸存 ❺德川時代寫 ❹〔寶龜院〕

房玄方傳授目錄 ❶(日) Bō-gen-gata-den-ju-moku-roku. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹〔寶龜院〕

房中清規 ❶(日)Bō-chū-shin-ki. ❷一卷 ❸存 ❹如實 ❹寫本(龍大、研眞)

冐地悉多鈔 ❶(日) Bō-ji-shi-tō-shō. ❷二卷 ❹道禪(元曆元—建長四A. D. 1132—1252)述 ❷〔參考〕諸宗章疏錄第三

茆漢森禪師語錄 ❶(日)Bō-kei-rin-sen-ji-go-roku (支) Mao-chi-sen-ch'an-shih-yü-lu. ❷三卷 ❸存、御選語錄第一一之內 ❹清超德等編 ❺光緒四刊 ❹〔駒大〕〔京大、祿・一七ゅ・一四〕

蚌蛤禪 ❶(日) Bō-kō-zen. 橫州温藏峰龍水和尚假名法語 ❷二卷 ❸存 ❹龍水述 ❺安永八刊 ❹〔駒大〕

旁觀記 ❶(日)Bō-kan-ki. ❷一冊 ❸存 ❹〔哲、こ・三・左・一八〕

旁觀記釋難 ❶(日)Bō-kwan-ki-shaku-nan. ❷一冊 ❸存 ❹〔哲、こ・二・中・二九〕

望月寺事蹟 ❶(日)Bō-gwatsu-ji-ji-seki. ❷一卷 ❸存 ❹〔參考〕朝鮮佛教叢書刊行豫定書目

望富齊記聞 ❶(日) Bō-fu-sai-kiki-mon. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

傍詠本願和讚 ❶(日) Bō-ei-hon-gwan-wa-san. ❷一卷 ❸存 ❹法忍 ❺寶曆四刊 ❹〔谷大、宗大・二九六三〕

傍觀鷸蚌蕉辨惑 ❶(日) Bō-kwan-itsu-bō-gi-hen-waku. ❸存 ❹晃鼎 ❹寫本(龍大、二七三・四)

傍觀藝洛 ❶(日)Bō-kwan-gei-raku. 藝洛傍觀 ❷一卷 ❸存、說林坤冊之內 ❹道隱(寶保元—文化一〇A. D. 1741—1813)述

❺三業惑風の初頭に際し、本山の命に依り藝・洛兩派を評し、各々に二失を出す。

❹刊本(谷大、宗大・二六二〇)寫本(谷大、宗大・一二五二)〔龍大、一七五・八一〕

傍觀正僞編 ❶(日) Bō-kwan-shō-gi-hen. ❷一卷 ❸存、諸師義林之內 ❹崇嚴(—天明六A. D. 1786)

❺淨土眞宗教典志第二に云く「天明六年六月。豐前教覺寺崇鄂作。會正僞編之難」云

す。

❹ 字典名。（字天・字典・一三一三）字本（字天・一七五・八二）字書。

倍蘭塔 ❶（日）Bō-kwan-roku. ❷ 一巻 ❸ 仏 ❹ 説話集（字天・字・一・二四）

倍尼法士教理論集 ❶（日）Bō-se-tsu-jō-do-kyō-kyō-ron-shū. ❷ 仏 倍尼法士教理論集

❹ 仏名。倍尼法士教理論集の略称。三巻。一説の外に、倍尼法士教理論集を引用したもの。倍尼法士教理論集は、倍尼法士教理論集の略称。倍尼法士教理論集は、倍尼法士教理論集の略称。倍尼法士教理論集は、倍尼法士教理論集の略称

北礪、**北礪**、**礪** ❶(日) Hoku-tsu-ni-tsukawasu-sho. ❷名 〔医名大人百科書名〕(医宗)〔大正三二・一・一〕大正No. 2611)後一〇之四 ❸唐代(宋末)|一般書|A. D. 1133—1212) ❹北宋に発行された一般書に対する呼称 しばしば。

❺〔参考〕 陸士龍宗教書名 |

北奏医教記事 ❶(日)Hok-kai-kai-kyō-ki-yō. ❷|参 ❸名 ❹書目書名 ❺天正四刊 ❻〔参考〕〔参考・三九六〕

北奏紀行 ❶(日)Hok-kai-ki-kō. ❷|参 ❸名 ❹旅行(記)(記文)|一名|A. D. 1634—1718) ❺清末(〔参考〕)|〔〇三|・四四)

北奏輿地図説考略 ❶(日) Hok-kai-dō-ji-in-en-kaku-shi. ❷|参 ❸名 ❹地誌書目名 ❺明治|年刊 ❻〔参考〕|九七四・四八一四九)(参考・参考・四六九)|〔四三・|||六|)

北奏誌 ❶(日) Hok-kan-shi. ❷|参 ❸名 ❹地誌書目名 ❺〔参考〕 明治参謀本部刊行便覧書目

北関呂向語録 ❶(日) Hok-kan-o-shō-go-roku. (宋) Pei-chien-lo-shang-yü-lu. 北関呂向語録 ❷|参 ❸名 卍続|・|||六・| ❹宋 北関呂向(産業)|一禅僧|A. D. 1164—1246)頃 禅宗大慧派

❺清末(〔参考〕)|〔〇|・七七・|〕

北関外集拙集録 ❶(日)Hok-kan-ge-shū-fu-zoku-shū. (宋) Pei-chien-wai-chi-fu-lu-chi. ❷|参 ❸名 ❹宋 北関外集拙集録 ❺〔参考〕 禅宗大慧派

北関居士語録 ❶(日)Hok-kan-go-kan-zen-ji-go-roku. (宋) Pei-chien-chū-chien-ch'an-shih-yü-lu 北関居士語録 ❷|参 ❸名 卍続|・|||六・| ❹宋 北関居士(産業)|一禅僧|A. D. 1164—1246)頃 禅宗大慧派

❺清末(〔参考〕)|〔〇|・七七・|〕

北関居士禅師語録 ❶(日) Hok-kan-zen-ji-shi-shū. (宋) Pei-chien-ch'an-shih-shih-chi. 北関居士禅師語録 ❷|参 ❸名 ❹宋 北関居士(産業)|一禅僧|A. D. 1164—1246) ❺北関居士禅師語録の下巻部 ❻〔参考〕 禅宗大慧派

北関居士禅師文集 ❶(日)Hok-kan-zen-ji-mon-jū. (宋) Pei-chien-ch'an-shih-wen-chi. 北関居士禅師文集 ❷|参 ❸名 ❹宋 北関居士(産業)|一禅僧|A. D. 1164—1246) ❺北関居士禅師語録の下巻部 ❻〔参考〕 禅宗大慧派

北関居士禅師語録 ❶(日)Hok-kan-zen-ji-go-roku. (宋) Pei-chien-ch'an-shih-yü-lu 北関居士禅師語録 ❷|参 ❸名 卍続|・|||六・| ❹宋 北関居士(産業)|一禅僧|A. D. 1164—1246)頃 禅宗大慧派

❺清末(〔参考〕)|〔〇|・七七・|〕

参考 (1)宋代(第十|)|||||||

西行千三百七十五里、末城（末ノ詳ナラザル所在ニ）に至る。（6）又西行二十二里摩娑城—西域記に所謂爍摩城（Bhāmā）か—に至る。（6）又西行八百七十八里、干闐国に至る。（7）神龕二年七月朱駒波国—西域記に所謂斯句迦（Chakaka）—に入る。（8）同八月捐槃陀（Garband）に入る。（9）西行六百里葱嶺に登る。（10）鉢盂城に至る。（11）龍龍池を過ぎ、山頂の都城に着す。（12）九月中旬鉢和国—西域記に所謂鉢利曷（Parika; Pri-ha）—に入る。（13）十月初旬那駄国—西域記に所謂烏鎶漢荼城（Udaka-khaṇḍa）に入る。（14）十一月波斯国境に入り同月中旬鉢頭国に入る。（15）同十二月初旬鳥場国に入る。（16）正光元年四月中旬乾陀羅国（Gandhāra）に入る。（17）新頭河（Sindhu）を渡りて弗沙伏城—西域記に所謂布色羅漢伐底城（Puṣkaravatī）に至る。（18）更に船に乗り一深水を渡りて乾陀羅城に至る。（19）又一大水を渡りて耶迦羅国—西域記に所謂那揭羅曷国（Nagarahara）—に至る。（20）正光二年歸還。序に園田宗惠氏がその著『佛教と歴史』に於て述べてゐるやうに、支那から印度への交通路は（一）南海航路。（二）雲南道。（三）吐蕃道。（四）于闐・罽賓道。（五）湯盤陀道。（六）那貨羅道があつたやうである。今惠生・宋雲が通つた路はその湯盤陀道であつた。その遠征求法の地図、その殉教的行動に對しては、何の言辭を以て之に當るべきかを知らない。乃ち彼等が殉教的行動は端なくもわが佛教徒の殉教的心事を覺醒し法となつたことを思ふ時、吾人は惠生・宋雲の功勳を大書特筆すべきを痛感する。

（前田慧雲）

北京護法論 ❶(B)Hok-kyō-go-ron. ❷一巻 ❸存 ❹小栗栖香頂（天保元—明治三八A.D. 1830—1905）述 ❺明治三六刊（龍大、二五四・五五）（帝室、一一九・一六）（帝国、一八七・二四五）明治三八刊（谷大、餘大・一六九九）

北戸集 ❶(B) Hok-ko-shū. ❷一巻 ❸存 ❹春東作 ❺浄土眞宗教典志第二に云く「若狭昌明谷法重寺春東作。但如ニ巻尾所ニ附雑行雑修説ニ則非ニ今所ニ論」云々。 ❻寫本（龍大、一七九九・九）

北固山志 ❶(B)Hok-ko-zan-shi.(支)Pei-ku-shan-chih. ❷十四巻 ❸存 ❹周伯義 ❺光緒三〇刊 ❻谷大、餘大・三七九三）

北高禪師 ❶(B)Hok-kō-zen-ji. ❷一巻 ❸存 ❺昭和七刊 ❻長野機山雲光會

北山御糺 ❶(B)Hoku-zan-go-tada-shi. ❷一巻 ❸存 ❹法海（明和五—天保五A.D. 1768—1834） ❻寫本（谷大、宗大・一一四〇）

北山詩集 ❶(B)Hoku-zan-shi-shū. ❷四巻 ❸存、眞宗全書第七三（安永元—安政五A.D. 1772—1858） ❹慧龍 ❻本集は大谷派本願寺の慧龍師が、九歳より十二歳までにものしたる詩を纏めたるものである。師の詩才は實に驚くべきものにして、兒童としてよくし能はざる所、或は人の詠ぜしものなるかと皆疑ふ程であつた。然るにこれに詩を命じ即席にして成るを見て、師の他日に大に期する所ありしと云ふ。弘化四年講師となる。 （内藤康道）

北山錄 ❶(B)Hoku-zan-roku. (支)Pei-shan-lu ❷十巻 ❸存、大正五二・五七三No. 2113 ❹唐神清（—元和元A.D. 806—）述、唐慧寶註 ❻宋高僧傳巻六に見ゆる傳に依れば著者神清は唐憲宗の元和年中（A.D. 806—820）に寂したとあるから、本書は此時以前に出来たものであつて、北山錄と云ひしは彼が都城の北長平山陰に居住せしを以てゝあり、なほ同傳に北山惹玄語錄十巻と見ゆるものであらう。内容は左の十六項目より成る。天地始第一、聖人生第二（巻一）、法藩異第三、眞俗符第四（巻二）、合覲王第五、至化第六（巻三）、宗師議第七（巻四）、釋賓問第八（巻五）、喪服問第九、讃異說第十（巻六）、綜名理第十一、報應驗第十二（巻七……巻首缺）、論業理第十三、住持行第十四（巻八）、異學第十五（巻九）、外信第十六（巻十）

支那在來の思想たる儒教乃至易に說く世界觀と佛教の世界觀即ち須彌山說とを併說して天地開闢物衆始興の大略を巧みに述べ、次に釋尊出世の事實を佛教側の記錄と儒道二教側のそれとを以て合說し、更に釋尊の自内證より出たる教が或は經典編纂となり、或は部派佛教の發展となつて、支那に傳來せし次第を記してゐる。「眞俗符」に於ては宗教的なるもの即ち眞と道德的なるもの即ち俗とは不二にして互に依用すべきもの即ち眞俗一諦を主張してゐる。次で西域支那に於ける隋代までの覇者たる諸帝王と佛教との關係を時代的に說明して佛教史の一面を雲き、「至化」に於ては過去に於ける佛教の盛衰と智慧とを以つてせし教化の偉大なりしことを述べ、更に宗派思想發達の過程を記して思想史の一端を示してゐる。「釋賓問」は主として儒道二教より佛教に對する疑惑を問答體に依つて辯明したもの、次に喪服、三教に關する諸異名理に對する三教の考へ等を明し、更に佛教の因果說及び業感論を述べて教旨を闡明にして、佛法僧の三寶住持の道に論を進めてゐる。而して最後に異學外信に就て論じて間接的に佛教の旨歸を表明せんとしてゐるものである。

神清の主張は空の思想を以て一貫して居り、且孔、老、莊、列、孟、管、班、馬等の說を巧みに採取して會通してゐることが特徴にして、割和論と云ふべきものである。此頃有名なる宗密、白居易等の儒佛同類說の出づるを見れば此等その軌を一にするものであらう。とにかく唐中期に於ける三教關係に關する考へを見るべき一史料である。

（野上俊靜）

❼(参考) 新編諸宗教藏總錄第三

北宗論 ❶(B)Hoku-shū-ron. (支)Pei-tsung-lun. 大乘北宗論 ❷一巻 ❸存、大正八五・一二八一No. 2838 ❹唐慧光釋 ❻大乘北宗論の下を見よ。

北辰講式 ❶(B) Hokushin-kō-shiki. ❷一軸 ❸存 ❺足利中期寫 ❻(高大、寄・一・四九)

北辰菩薩所說陀羅尼經三教鈔 ❶(B)Hokushin-bosatsu-sho-setsu-dara-ni-kyō-san-kyō-shō. 北辰菩薩所說經三教鈔 ❷一巻 ❸存 ❹盛光隆山（—享和元A.D. 1801）述 ❺寛政八刊 ❻(谷大、餘大・一九二五)(京大、日大未・九九)

北辰菩薩陀羅尼經 ❶(B) Hokushin-bosatsu-da-ra-ni-kyō. ❷一巻 ❸存、修驗聖典第一編諸經要集之内 ❻七佛八菩薩所說大陀羅尼神呪經巻二の中「我北辰菩薩名日妙見」の一段を別出したるもの。北辰菩薩所說の神呪を唱げ、その功德を述ぶ。 （服部如實）

北辰菩薩陀羅尼經直解 ❶(B) Hokushin-bosatsu-da-ra-ni-kyō-jikkai. ❷一巻 ❸存 ❹信智述 ❺延寶年間刊 ❻(帝國・二二八・二)

北辰妙見尊星王菩薩所說陀羅尼經 ❶(B)Hokushin-myō-ken-sonjō-ō-bo-satsu-sho-setsu-da-ra-ni-kyō. ❷一軸 ❸存 ❺仁平四寫 ❻(寶菩提院)

北辰妙見菩薩靈應編 ❶(B)Hokushin-myō-ken-bo-satsu-rei-ō-hen. ❷一冊 ❸存、信仰叢書之内

北禪遺草 ❶(B)Hoku-zen-i-sō. ❷八巻 ❸存 ❹大典顯常（寛永一一—享保元A.D. 1634—1716） ❻文化三刊（京大、日大未・五〇三）文化四刊（駒大）（龍大、二〇五二・四二）

北禪雜錄 ❶(B) Hoku-zen-zai-roku. ❷一巻 ❸存 ❹大典顯常（寛永一一—享保元A.D. 1634—1716） ❼(参考) 禪籍目錄

北禪詩草 ❶(B)Hoku-zen-shi-sō. ❷六巻 ❸存 ❹大典顯常（寛永一一—享保元A.D. 1634—1716）撰 ❺寛正五刊 ❻(龍大、研史)

北禪禪語 ❶(B) Hoku-zen-zen-go. ❷一巻 ❸存 ❹大典顯常（寛永一一—享保元A.D. 1634—1716） ❼(参考) 禪籍目錄

北禪文草 ❶(B)Hoku-zen-bun-sō. ❷四巻 ❸存 ❹大典顯常（寛永一一—享保元A.D. 1634—1716） ❺寛政四刊 ❻(龍大、二〇五二・四三)（帝國、八二一・二三一）

北宋版大藏經 ❶(B)Hoku-sō-ban-dai-zō-kyō. (支)Pei-sung-pan-ta-tsang-ching. ❸存 ❻岡本一郎分南宋版を以つて補ふ。 ❻刊本（谷大、宋藏）

北愚偶談 ❶(B)Hoku-gū-gū-dan. 安心機法分別 ❷一巻 ❸存 ❹峻諦（寛文四—享保六A.D. 1664—1721） ❻浄土眞宗教典志第二に云く「或名ニ安心機法分別ニ元祿五年七月。膽授寺峻諦作。斥ニ別安心計ニ凡五條」云々。 ❻正德三刊（正大、一〇九・一五、九七）（龍大、一七五・八五）寛政五刊（龍大、一七五・八六）（谷大、宗大・一二三二）

北藏闕本目錄 ❶(B)Hoku-zō-ketsu-moku-roku. (支)Pei-tsang-chüeh-pen-mu-lu. ❷一巻 ❸存 ❻寫本（谷大、餘大・九三六）

北藏目錄 ❶(B)Hoku-zō-mokuroku. (支)Pei-tsang-mu-lu. 大明三藏聖教目錄 ❷四巻 ❸存、昭和法寶目錄第二 ❹道光編 ❻寫本（龍大、二〇一一・二九）

北藏目錄冠字索引 ❶(B) Hoku-zō-kan-roku-kwan-ji-saku-in. ❷一巻 ❸存 ❻寫本（京大、蔵・二一ホ・一）

北天目道人山居百八偈 ❶(B) Hoku-ten-moku-dō-nin-san-gyo-yaku-hachi-ge. ❷一巻 ❸存 ❼(参考) 禪籍目錄

北斗 ❶(B) Hoku-to. ❷一軸 ❸存 ❺康永四寫 ❻(寶菩提院)

北斗 ❶(B)Hoku-to. 北斗私祕 ❷一帖 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❻(寶菩提院)

北斗圓護國三十九箇法 ❶(B) Hoku-to-en-go-kok-san-jū-ku-ka-hō. ❷一軸 ❸存 ❺鎌倉末期寫 ❻(寶菩提院)

北斗儀軌 ❶(B)Hoku-to-gi-ki. (支)Pei-tou-i-kuei. 北斗七星念誦儀軌 ❷一巻 ❸存、大正二一・四二No. 1305、餘餘一、卍續一・三・一 ❹唐金剛智、成享二—開元二九A.D. 671—741、譯 ❻北斗七星念誦儀軌の下を見よ。 ❺久安五寫 ❻(寶菩提院)

北斗口決 ❶(B) Hoku-to-ku-ketsu. ❷一冊 ❸存 ❺足利時代寫 ❻(寶菩提院)

北斗供 ❶(B)Hoku-to-ku. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❻(寶菩提院)

北斗供 ❶(B)Hoku-to-kū. ❷一巻 ❸存 ❹敎覺記 ❻正本（妙法院）

北斗供作法 ❶(B)Hoku-to-kū-sa-hō. ❸存 ❻寫本（寶龜院）

北斗供次第 ❶(B) Hoku-to-kū-shi-dai. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❻(寶菩提院)

北斗供略次第 ❶(B)Hoku-to-kū-ryaku-shi-dai. ❷一巻 ❹榮海（弘安元—貞和三A.D. 1278—1347）撰

北斗驗記 ❶(B) Hoku-to-ken-ki. ❷一帖 ❸存 ❺平安朝末期寫 ❻(寶菩院)

北斗護摩 ❶(B) Hoku-to-go-ma. ❹覚瑜（嘉祿二—嘉元二A.D. 1226—1304） ❼(参考) 諸宗章疏錄第三

北斗護摩儀軌 ❶(B)Hoku-to-go-ma-gi-ki. (支)Pei-tou-hu-mo-i-kuei. 北斗七星護摩秘要儀軌 ❷一巻 ❸存、大正二一・四二四No. 1325、餘餘一、卍續二・九・三 ❻北斗七星護摩秘要儀軌の下を見よ。

北斗護摩次第 ❶(B)Hoku-to-go-ma-shi-dai. ❷一軸 ❸存 ❻鎌倉時代寫（高大、寄・一・六六）足利時代寫（寶菩提院）

北斗護摩私次第 ❶(B) Hoku-to-go-ma-shi-shi-dai. 北斗護摩私次第勘法 ❷一軸 ❸存 ❻寫本（寶菩提院）

北斗護摩鈔 ❶(B) Hoku-to-go-ma-shō. ❷二十巻 ❹潤庭隆士・ ❻諸宗章疏錄第二に云く「按、廣澤記云、潤庭者叡山學匠也、以ニ此書ニ號ニ谷皇慶撰ニ者誤也、潤谷教ニ鳳雨巳、又古錄潤作ニ洞本誤也」云云。

北斗次第 ❶(B) Hoku-to-shi-dai. ❷一軸 ❸存 ❺延寶三寫 ❻(寶龜院)

北斗指尾法 ❶(B)Hokuto-shi-bi-hō. ❷一卷 ❸寫空(元慶八—天祿三A. D. 884—972) ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

北斗七星印信 ❶(B)Hokuto-shichi-shō-in-jin ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

北斗七星延命經 ❶(B) Hokuto-shichi-shō-enmei-kyō. (支)Pei-tou-chi-hsing-yen-ming-ching. ❷一卷 ❸存、大正二一・四二五No. 1307、宿餘四、卍續一・三・三 ❺唐代失譯

❻初めに子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二支と貪狼、巨門、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍の北斗七星を配して人の吉凶を記し、次に貪狼星は東方最勝世界逝宣遍證如來佛、巨門星は東方妙寶世界光音自在如來佛、祿存星は東方圓滿世界金色成就如來佛、文曲星は東方無憂世界最勝吉祥如來佛、廉貞星は東方淨住世界法海蓮鏡如來佛、武曲星は東方琉璃世界藥師琉璃光如來佛なることを說き、次に此の經を受持し供養する者は、惡く祟謫の災禍疾病を免るべきを叙してある。

(神林隆淨)

北斗七星護摩祕要儀軌 ❶(B) Hokuto-shichi-shō-go-ma-hi-yō-gi-ki. (支) Pei-tou-chi-hsing-hu-mo-pi-yao-i-kuei. ❷一卷 ❸存、大正二一・四二四No. 1306、宿餘一、卍續二・九・三 ❺唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❻唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774)

❻末世薄福の衆生の爲に北極の貪狼、巨門、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍の七星に壽命增長、祿位豐饒を祈る供養護摩の次第儀則を說いたもので、即ち初めに造壇(但し水壇)並に壇上莊嚴の儀則を說き、次に施主某甲の爲に此の壇を設け、奠雅所駄、壽命延長を祈るべきことを說いた啓請の文を出し、次に北斗七星召請の印、一字頂輪王眞言、召北斗七星眞言並に護摩法の軌則を述べ、次に此の法を說ける本由を叙して卷を竟ってゐる。蓋し本書中に「祿命書に云はく、世に司命神あり、庚申の日に至りて上天帝に向ひ衆人の罪惡を陳說し、重罪者は則ち算を減し、輕罪者は則ち紀を拾つ。算盡き、紀失すれば、即ち命亡するに至る」とあるは、全く道教の司命奪算の迷信を取れるは明である。夙に四天王經、三品弟子經、藥師琉璃光經等にも出てゐる所である。又これは後世の唐世特の思想を思ひ起さすものである。祕密儀軌問聞記(性寂)第六參照。

❾寫本(京大、藏・一六ホ・一)寛治元及永安元寫(寶壽提院)文和二寫(寶壽院)

(神林隆淨)

北斗七星護摩法 ❶(B) Hokuto-shichi-shō-go-ma-hō. (支) Pei-tou-chi-hsing-hu-mo-fa. 複橋盛光法 ❷一卷 ❸存、大正二一・四五七No. 1310、宿餘四、卍續二・九・三 ❺一行(弘道元—開元一五A. D. 683—727)撰

❻北斗七星を祈つて、延命增算を求むる護摩を行ずる所の儀則を說いたもので、即ち能吉祥眞言、北斗七星印言、日天、月天、火星、水天、木星、金星、土星、羅睺星、計都の九曜の印契、並に九執曜天の總印言、二十八宿の總印言、諸神祇の印言、燈香、奉華、燒香、奉食、燈明、菩供養の印言、讚歎、啓白文、招北斗の印言、授華發遣の印言、補闕眞言など、次第に其の法軌を說き、次に北斗法(又は橋盛光要法)と稱して、別種の供養法を說いてある。但し北斗は仁和寺にて用ふる稱にして、東寺にては妙見と云ひ、山門にては橋盛光と云ひ、三井にては尊星王と云ふ。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 (神林隆淨)

北斗七星最極祕要息災護摩次第 ❶(B)Hokuto-shichi-shō-sai-go-ma-hi-yō-gohō-nai-go-ma-shi-dai. ❷一帖 ❸存 ❹撰者未詳、一說寬空(元慶八—天祿三A. D. 884—973)撰

北斗七星念誦儀軌 ❶(B) Hokuto-shichi-shō-nen-jo-gi-ki. (支)Pei-tou-chi-hsing-nien-sung-i-kuei. ❷一卷 ❸存、大正二一・四二三No. 1305、宿餘一、卍續一・三・一 ❹金剛智(咸亨二—開元二九A. D. 671—741)譯 ❺唐開元一一—二四(A. D. 723—736)

❻世尊、日月星宿の爲に八星呪を說き、導いて其の呪の功德及び北斗八女の供養法を說いたものである。又此の八星呪の印は、金剛頂經七星品に出づ」とある。此の儀軌中に八星とあり、金剛頂經七星品とあるに關し、性寂の祕密儀聞記第六に「八星とは日藏經にも八曜と曰ふ、彼に同なるか、其の名體を知らず。九曜の中、羅睺と計都とは元と一體なりとの說あり、猶らば彼の經もこの二星を合して八曜と云ふか。今の眞言の初の諷誦(Sapta)は七の梵語なり。猶らば如何、若し妙見を加へたるか。次の軌に七曜尊星と云ふが故に、減る減に云はく、七星と輔生とを八星と云ふと。金剛頂とは廣本を指せるか」とあるも、此の儀軌は貞元錄第十四、金剛智譯經及び同錄第二十九の入藏錄にも載せざるもので、後世の僞作なるは明かである。祕密儀軌傳授口決(眞常)第三參照。

❾寫本(京大、藏・一六ホ・一)天永四及久安五寫(寶壽院)平安朝時代寫(寶壽提院)

(神林隆淨)

北斗七曜九曜十二宮二十八宿印信等 ❶(B)Hokuto-shichi-yō-kuyō-jū-ni-gō-ni-jū-hasshuku-in-jin-tō. 北斗七曜九曜十二宮廿八宿印信等小野 ❷一帖 ❸存 ❹鎌倉時代寫 ❾(寶壽提院)

北斗修法次第 ❶(B) Hokuto-shu-hō-shi-dai. ❸存 ❾寫本(寶龜院)

北斗集 ❶(B) Hokuto-shū. ❸存 ❻陳城以下六人の詩集なり。❼(參考) 禪籍目錄

北斗十二帖口決 ❶(B) Hokuto-jū-ni-jō-ku-ketsu. ❼(參考) 本朝古逸撰述密部書目

北斗所作々法 ❶(B) Hokuto-shosa-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❹鎌倉時代寫 ❾(寶壽提院)

北斗抄 ❶(B) Hokuto-shō. ❷一帖 ❸存 ❹鎌倉時代寫 ❾(寶壽提院)

北斗深義 ❶(B)Hokuto-jin-gi. ❷一帖 ❸存 ❹南北朝時代寫 ❾(寶壽提院)

北斗法 ❶(B)Hokuto-hō. ❷一軸 ❸存、大日本佛教全書第五〇曼荼羅鈔第六 ❹曼荼羅(康治二—建暦二以後A. D. 1142—1212—) ❺寶治元寫 ❾(高大、寄・一・六六)

北斗法 ❶(B)Hokuto-hō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第四〇阿娑縛抄第六 ❶承徳(元久二—弘安五A. D. 1205—1282)

北斗法 ❶(B)Hokuto-hō. 北斗法小野 ❷一帖 ❸存 ❹建治三寫 ❾(寶壽提院)

北斗法記 ❶(B)Hokuto-hō-ki. ❼(參考) 續群書類從目錄

北斗法記 ❶(B)Hokuto-hō-ki. ❼(參考) 續群書類從目錄

北斗法、星宿法 ❶(B) Hokuto-hō, shō-shuku-hō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第五〇曼荼羅鈔第六 ❹曼荼羅(康治二—建暦二以後A. D. 1142—1212—)

北斗法等諸次第 ❶(B) Hokuto-hō-tō-sho-shi-dai. ❷七帖 ❸存 ❹鎌倉時代寫 ❾(寶壽提院)

北斗曼荼羅 ❶(B) Hokuto-mandara. ❷一紙 ❸存、大正圖像第七 ❹寫本(仁和寺×東京美術學校)

北斗御修法 ❶(B) Hokuto-go-mi-shō. ❷一卷 ❹榮海(弘安元—貞和三A. D. 1278—1347)撰

北斗略次第 ❶(B)Hokuto-ryaku-shi-dai. ❷一帖 ❸存 ❹南北朝時代寫 ❾(寶壽提院)

北方世利經 ❶(B) Hop-pō-se-ri-kyō. (支)Pei-fang-shih-li-ching. ❷一卷 ❻出曜經第八卷の抄出。❼(參考) 開元錄第一六

北方毘沙門多聞寶藏天王神妙陀羅尼別行儀軌 ❶(B) Hop-pō-bi-sha-mon-ta-mon-hō-zō-tenno-dō-shinmyō-da-ra-ni-betsu-gyō-gi-ki. (支)Pei-fang-p'i-sha-mên-to-wên-pao-tsang-t'ien-wang-shên-miao-t'o-lo-ni-pieh-hsing-i-kuei. 毘沙門別行儀軌 ❷一卷 ❸存、大正二一・二三〇No. 1252、卍續一・三・五 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774)

❻吠沙門天王の念誦儀則を說けるもので、初に毘沙門天王は南閻浮提の五濁惡世中に於て、若し人あつて吠沙門天の陀羅尼及び結印法を能く受持せば、所求の願皆悉く滿足せしむべきを說き、次に其の受持眞言法を述べ、即ち作壇法、地界、四方界、虛空界、香華、飲食、燈明、四天王結界、召請の印言を說き、次に毘沙門天王、大身陀羅尼及び北方天王心眞言を唱げ、各其の誦持の功德を述べてゐる。祕密儀軌傳授口決(眞常)第三參照。

❾寫本(京大、藏・一六ホ・二) (神林隆淨)

北方毘沙門天王隨軍護法儀軌 ❶(B) Hop-pō-bi-sha-mon-ten-nō-zui-gun-go-hō-gi-ki. (支) Pei-fang-p'i-sha-mên-t'ien-wang-sui-chün-hu-fa-i-kuei. 毘沙門天王隨軍護法儀軌、毘沙門隨軍法 ❷一卷 ❸存、大正二一・二二四No. 1247、宿餘二、卍續一・三・二、祕密儀軌集第二 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺唐天寶五—天曆九(A. D. 746—774)

❻吠室羅摩那羅闍 Vaiśramanarāja (毘沙門天王)は、其の第三王の第二の孫なる那吒(Nata)と共に、佛法を護持し、惡人或は不善心を起す者を擒縛することを說き、次に不善の衆生を降伏擒縛し、國界を護持すべき自心惡眞言を唱げ、又行者にして此の呪を受持し、不善惡の衆生を降伏せんと欲する者の爲に、其の受持の儀則が述べられてある。祕密儀軌傳授口決(眞常)第三參照。

❾長承三寫(寶壽院)寶暦五刊(谷大、餘大・三七六九) (神林隆淨)

北方毘沙門天王隨軍護法眞言 ❶(B) Hop-pō-bi-sha-mon-ten-nō-zui-gun-go-hō-shin-gon. (支) Pei-fang-p'i-sha-mên-t'ien-wang-sui-chün-hu-fa-chên-yen. 毘沙門天王隨軍護法眞言 ❷一卷 ❸存、大正二一・二二五No. 1248、宿餘四、卍續一・三・三 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774)

❻毘沙門天の諸種の成就法を述べたもので、初めに毘沙門天王の根本呪を出し、次に此の呪を受持せんとする行者の爲に、此の天王の畫像法を說き、導いて其の成就法を修する爲の造壇の儀則、次に多種の成就法を列叙し、終りに根本印及び吉祥天女印を說き、又四天王經を引いて、其の念誦法と及び解縛陀羅尼とを唱げてある。

(神林隆淨)

北方毘沙門天王念要經 ❶(B) Hop-pō-bi-sha-mon-ten-nō-yō-kyō. (支)Pei-fang-p'i-sha-mên-t'ien-wang-nien-yao-ching. 北方毘沙門天王念誦要經 ❷二卷 ❼(參考) 常曉和尙請來目錄

北方禮佛呪經 ❶(B) Hop-pō-raibutsu-ju-kyō. (支)P'i-fang-li-fo-chou-ching. 北方禮佛呪願經 ❷一卷 ❻長阿含經。❼(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

北峰教義 ❶(B) Hop-pō-kyō-gi. (支)Pei-fang-chiao-i. ❷卷一 ❸存、卍續二・六・三 ❹宋宗印(—嘉定六A. D. 1213)述

❻本書は趙宋天台山家山外の論爭によつて生れた山家正統派の一書である。著者宗印は字は元實、北平と號し四明三家の一南屏梵泰の六世に出で、其の門下に慶運、懷坦、法照、元粹、俊苞等を出し、能く山家正統の學說を傳へた。蓋し南屏の學風たる綿密周到にして、眞文に忠なること四明三家中特に此の一家に見る美風にして、本書亦其の趣を傳へてゐる。本書は淨覺(もと四明の門下、後山外知圓に走りたる人)の十不二門文心解及び義學雜編の說を破折し、荆溪及び四明の說を示して能く山家の正統說を顯揚してゐる。題して北峯教義第一と云ひ內に三千章十科を唱げてゐるが、統記に

ようとて以前は、新撰を進ぜらるゝ百座ありしかども、大師の書の筆一字残りたるものなるべし。此書は弘法の書の筆はらはらと今日世間に多くの中に此の筆を選ぶことを好るのみ。

三千字十体

一、川字文　二、趙三書　三、明孝用　四、面壁賞　五、屋書　六、澄清真　七、青　雲　空　八、宇宙　日　月　九、新四天王　十、鬼　天　地

❹用字（分大〔唐大〕・三三八九）（宝大〔一〕三六・七四）（分大〔唐〕・二四五・二六）（宝大〔唐〕・一・二五）（分大〔唐〕・一・二九五）（唐山天寺）　（石井栄寛）

北堂書鈔 ❶(日)Hop-pō-kyō-gi-kō. ❷一巻 ❸仏 ❹貴族一一皆 ❺(唐大〔一〕三六五・一七九)

北堂書鈔集王 ❶(日)Hop-pō-kyō-gi-dai-go. ❷一集 ❸仏 ❹北堂書鈔代皆？ ❺(東寺宝蔵記)

北堂三千題法 ❶(日)Hop-pō-san-zem-bi-ken. ❷二巻(一巻か) ❸仏 ❹度師(仁安元—安貞元A. D. 1166—1227)撰 ❺天皇一二皆(分大〔唐大〕・一四七〇)皆本(分大〔日大〕・二四五)

北堂書鈔目録 ❶(日) Hop-pō-zō-sho-moku-roku. ❸仏 ❹宝本(慶長勅刊本)皆本(唐大〔日大〕)

北堂問難集 ❶(日) Hop-pō-mon-nan-shō. ❷一巻 ❸仏 ❹(寛政(安永—寛政元A. D. 1771—1822)) ❺皆本(唐大〔日大〕)

北本涅槃経 ❶(日) Hoku-hon-ne-han-gyō. (支)Pei-pēn-nieh-p'an-ching. 大般涅槃経 ❷四十巻 ❸仏 ❹大正一二・三六五 No. 374 ❺編集五一大〔卍〕八・五一大〔北107鳳翔号〕 〔南107鳳翔号〕 〔宋104鳳翔号〕 〔明北109鳳翔号〕 〔北109鳳翔号〕 〔麗106鳳翔号〕 〔元106鳳翔号〕 〔明96鳳翔号〕 〔法104鳳翔号〕 〔宋184鳳翔号〕 〔明105鳳翔号〕 Nj. 113 ❻(唐)(唐大)(唐大)(唐大

法華経 ❶(日)Hotsu-e-shō. 法華経疏、法華玄義疏、法華文句疏、法華論疏、法華経義疏、法華経義疏、法華経義

四尋因緣）を說く。(7)四尋が佛菩薩に通ずるを明す。(8)彌勒領解を述べ佛慧行菩薩の智慧方便の了知し難きを明す（以上今經上卷終）。(9)初業（初行）菩薩の慧力增長の法を明す。(10)利益の過を經ずる二十二法（十六法）。(11)憶圓（世間言說）の過二十種（以下重頌あり）。（以上、階課上卷終）。(12)世語（多言）の過二十種。(13)睡眠（同）の過二十種。(14)業務（作業）の過二十種。(15)戲論（同）の過二十種。(16)阿彌陀佛の極樂世界に往生すべき十種心（十種發心）を明す。こゝに「若有衆生、發十種心、願一一心、專念向阿彌陀佛者、是人命終、當得往生彼佛世界」といへるは、正しく無量壽經の第十八願に相當し、その十念を梵本にdaśabhiś-citta（十種心）とあるに合せて注意すべきものとす。(17)阿難附屬。經名として彌勒所問の別名を擧ぐ（陪無）。

（美濃晃順）

發心 ❶(B)Hoa-shin. (支)Fa-hsin. 發心修行章 ❷一卷 ❸存 ❹新羅元曉（貞平王三九A. D. 617—）❺（參考）朝鮮佛教史書刊行豫定書目

發心新請啓白 ❶(B)Hoa-shin-ki-sho-hei-byaku. ❷一册 ❸存 ❹貞慶（久壽二—建保元A. D. 1155—1213）❺文明六寫 ❻（金剛三昧院）

發心共轍 ❶(B)Hoa-shin-gu-tetsu. ❷九卷 ❸存 ❹日覺 ❺寫本（立大、D. O. 三三五）

發心講式 ❶(B) Hoa-shin-kō-shiki. ❷一軸 ❸存 ❹貞慶（久壽二—建保元A. D. 1155—1213）抄 ❺足利中期寫 ❻（高大、寄・一・四九）

發心直入路 ❶(B) Hoa-shin-jiki-nyu-ro. ❷一册 ❸存 ❹刊本（京大、一・二五ホ・二）

發心修行章 ❶(B)Hoa-shin-shu-gyō-shō. (支)Fa-hsin-hsiu-hsing-chang. 發心修行章 ❷一卷 ❸存 ❹新羅元曉（貞平王三九A. D. 617—）撰 ❺寫本（京大、藏・二四カ・四）

發心集 ❶(B)Hoa-shin-shū. 鴨長明發心集 ❷三卷（本朝書籍目錄）五卷（古寫本）八卷（流布本） ❸存、大日本佛教全書第一四七、改訂史籍集覽第二三 ❹鴨長明（久壽元—建保四A. D. 1154—1216）述

❺著者に就ては「本朝書籍目錄」には鴨長明と記してあり、又長明と略ゝ同時代の癌飢和尙の著と言はれてゐる「閑居友」に「長明は人の耳をもよろこばしめ云々」と述べて本書を指示してゐるらしい文句があつてその著書を長明と認めてゐるやうであるが、現行八卷本を長明作とすることに就ては今尙檢討の餘地がある。故藤岡博士、野村八良氏、長尾素枝氏等もこれに疑をはさみ、岡田希雄氏は「鴨長明發心集に就て」（藝文）の中に於て「長明の作らしい所もあれば、二三作らしくない部分もあるので現行流布本を長明作と斷言する事は遠慮すべきものである」（取意）と言はれてゐる。併し最近永積安明氏は「長明發心集考」（國語と國文學）に於て綿密な考證を試み本書の著者を長明と認められてゐる。著作年代は未詳ではあるが、野村八良氏は、「鎌倉時代文學新論」に於て、「正嘉元年以前（勿論弘安六年以前）發心集の存在を認むべし」と述べてゐられるし、永積安明氏は「建曆二年（方丈記成立）以後長明沒の前年なる建保三年二月までの三年間に成りしものなり」（取意）と論定されるに至つた。

その內容は、著者發心後の見聞隨筆であつて、發心したる人の因緣物語、遁世者往生人の事蹟を述べて著者の感想を附記したるもの、或は世捨人の修行易行樣々の行狀を述ねたもの等であり、僅かではあるが神明のことなどもあり且又序文に「天竺震旦の傳聞は遠ければ書かず」とあるが一二それらの話も混つてゐる。而して本書を貫く中心思想は無常觀であり、厭離穢土欣求淨土の思想である。

卷數に就て、前記三卷とあるは「本朝書籍目錄」に所載されてゐるもので現在見ることは出來ない。五卷とあるは神宮文庫所藏の寫本で室町時代のものらしく、永積安明氏が「文學」に「異本長明發心集」として紹介されたもので異本として注意すべき本である。又從來あまり知られてゐない靜嘉堂文庫所藏の寫本は神宮文庫所藏の寫本と異る所謂流布本に屬する寫本であつて流布本の詞章的誤脫を訂正するに價あるものである。

「大日本佛教全書」に收めてあるのは慶安四年刊行の片假名本をとり、「史籍集覽」に收めてあるのは寛文十年刊行（繪入）の平假名本をとる。前者は字體などに古本の俤を傳へ、後者は前者と內容文章は同一であるが編次を少し異にしてゐる。研究書錄倉時代文學新論（野村八良氏）。長明發心集—長尾素枝氏（國學院雜誌—大正十五年十二月）。鴨長明發心集に就て—岡田希雄氏（藝文昭和五年自七月至十二月）。異本長明發心集—永積安明氏（文學昭和八年四月）。長明發心集考—永積安明氏（國語と國文學昭和八年六月、八月）。長明發心集刊本小考—小川壽一氏（鴨長明研究—昭和九年十月號）等參照せよ。目次左の如し。

（慶安四刊片假名本に依る）

△發心集第一目錄

一、玄敏僧都遁世籠居事
一、同人伊勢國郡司被ㇾ仕給事
一、平等供奉離ㇾ山趣ニ異州ニ事
一、千觀內供遁世籠居事
一、多武峯增賀上人遁世往生事
一、高野南氣榮上人遁世往生事
一、小田原敎懐上人打ニ破水瓶ニ事　附陽範阿闍梨切ニ梅木ニ事
一、佐國愛ㇾ花成ㇾ蝶事　付六波羅寺幸仙愛ニ橘木ニ事
一、神樂岡清水谷佛種房事
一、天王寺聖隱憶事　付乞食聖事
一、高野邊上人傳儲ニ妻女ニ事
一、美作守顯能家入來僧事

△發心集第二目錄

一、安居院聖行ニ京中ニ時隱居僧傳事
一、禪林寺永觀律師事
一、內記入道寂心事
一、三河聖人寂照入唐往生事
一、仙命上人事並覺尊上人事

一、詣ニ日吉社ニ僧取ニ奇死人ニ事
△發心集第五目錄
一、唐房法橋發心事
一、伊家兼委願死往生事
一、母新ㇾ女手指成ㇾ蟲事
一、亡妻現身歸ニ來夫家ニ事
一、不動持者生ㇾ牛事
一、少納言公經依ニ先世願ニ作ニ河內寺ニ事
一、少納言統理遁世事
一、中納言顯基出家籠居事
一、成信重家同時出家事
一、花園左府詣ニ八幡ニ祈ニ往生ニ事
一、目上人參ニ法成寺供養ニ察因道心事
一、乞兒物語事
一、貧男好ニ美國ニ事
一、勤操僧正榮好ニ事
一、正算僧都母恐ㇾ子志深事
△發心集第六目錄
一、證空著ニ御命ニ事
一、后宮半者悲ニ一乘寺僧正入滅ニ事
一、堀河院藏人所衆奉ㇾ慕ニ主人ニ入海事
一、母子三人賢者遁ニ衆難ニ事
一、西行女子出家事
一、侍從大納言幼少時止ニ論者改講ニ事
一、永秀法師數奇事
一、時光茂光數奇及ニ天聽ニ事
一、寶日上人詠ニ和歌ニ爲ニ行事　並蓮如參ニ讚州崇德院御所ニ事
一、室泊遊女君吟ニ鄙曲ニ結ニ緣上人ニ事
一、乞者尼得ニ單衣ニ奉ニ加寺ニ事
一、布芳門院侍良住ニ武藏野ニ事
一、或人放ニ生神供經ニ夢中被ㇾ惱事
一、下山僧於ニ川合社前ニ絕入事
一、武州入間河沈水事
一、法眼神法寺樂西聖人事
一、相眞夜叉逼ニ袈裟ニ事
一、眞淨房暫作ニ天狗ニ事
一、助重位ニ一聲念佛ニ往生事
一、橘大夫貧願往生事
一、或上人不ㇾ依ニ客人ニ事
一、分祐國老翁不ㇾ願ニ宿善ニ事
一、善導和尙見ㇾ佛事
△發心集第三目錄
一、江州聖愛事
一、伊豫僧都大童子頭光理事
一、伊豫入道往生事
一、讚州源太夫儀發心往生事
一、或禪師詣ニ補陀落山ニ事
一、或女房參ニ天王寺ニ入ㇾ海事
一、書寫山客僧師食往生事　不ㇾ可ㇾ謗ニ如ㇾ此行ニ事
一、蓮花城入水事
一、樵夫鶴覺事
一、證空律師希望深事
一、觀禪委見往生事
一、松室童子成佛事
△發心集第四目錄
一、三昧座主弟子得法華經驗事
一、淨藏貴所飛ㇾ鉢事
一、永心法橋憐ニ乞兒ニ事
一、藝賀僧ニ路頭病者ニ事
一、肥州僧妻爲ㇾ蠶事　可ニ恐ニ惡緣ニ事
一、玄賓僧正念觀相室ニ事　不淨觀事
一、或女房臨終見ニ蠶變ニ事
一、或人臨終不ㇾ言遺恨事　臨終陰事
一、或人放ニ生神供經ニ夢中被ㇾ惱事
一、下山僧於ニ川合社前ニ絕入事
一、上東門院女房住ニ深山ニ事　原ニ緣主ニ
△發心集第七目錄
一、惠心僧都謂ニ空也上人ニ事
一、同上人脫ㇾ衣奉ニ松尾大明神ニ事
一、中將遍昭持ニ法華經ニ往生事
一、賀茂女持ニ常住佛性四字ニ往生事
一、太子御墓覺能上人好ニ管絃ニ事　付賢博士事吉田齋宮事
一、賢人右府見ニ白髮ニ事
一、三井寺僧夢見ニ貧報ニ事
一、道寂上人詣ニ長谷ニ祈ニ道心ニ事
一、惠心僧都臨ニ母心ニ遁世事
一、阿闍梨實印大佛供養時滅ㇾ罪事
一、源親光善勸ニ念佛ニ往生事
一、心戒上人不ㇾ留ㇾ跡事
一、齊所禮介成清子住ニ高野ニ事
△發心集第八目錄
一、時科上人隱德事
一、有上人爲ニ名聞ニ建ㇾ堂作ニ天狗ニ事
一、仁和寺西尼上人依ニ我執ニ燒ㇾ身事
一、橘逸勢之女子至ニ配所ニ事
一、盲者關東下向事
一、長樂寺尼願ニ不動驗ニ事
一、或武士母想ㇾ子願死事　法勝寺執行願死事　慈ニ末代ニ不ㇾ可ニ卑下ニ事
一、老尼死後爲ニ橋虫ニ事
一、四條宮半者呪ニ咀人ニ爲ニ乞食ニ事
一、於ニ金峯山ニ犯ㇾ妻者經ニ年爲ㇾ盲事
一、聖梵永朝離ㇾ山住ニ南都ニ事
一、前長臨尉遁世往生事
一、或上人放ニ生神供經ニ夢中被ㇾ惱事
一、下山僧於ニ川合社前ニ絕入事

❼（注解）發心集抄一卷、同本保孝（記書叢書） ❽慶安四刊（正大、一〇九・一八二）（谷大、宗大・八五三）（龍大、研史）寛文一〇刊（京大、一・二一ホ・一）（神宮文庫、一六七〇）慶應四刊（神宮文庫、一六七二）寫本（靜嘉堂文庫、二、八七、四七）寫本五卷本（神宮文庫）影寫本（神宮文庫）（谷大、餘大・四四六〇）

（近藤祐眞）

發心即到記 ❶(B) Hoa-shin-soku-tō-ki. 萬代龜鏡記 ❷一卷 ❸存、近世佛教集說之內 ❹日誘（寛永四—元祿一一A. D. 1627—1698）

❺宗祖日蓮の御書を抄錄し、就て宗義安心の要旨を說述したるものである。信心唱題の成佛を說けば發心即到記といひ、又、萬代の龜鏡とすべしとの意よりこの異名がある。

❻寫本（立大、一八四・六九） （望月歡厚）

發心傳 ❶(B)Hoa-shin-den. ❷二卷 ❸存 ❹性均（延寶七—寶曆七A. D. 1679—1757）❺元文二刊 ❻（正大）

發心傳 ❶(B) Hoa-shin-den. 新撰發心傳 ❷二卷 ❸存 ❹刊本（智、て・七・左・三八）

發心不退章 ❶(B) Hoa-shin-fu-tai-shō. ❷二卷 ❸存、眞言宗安心全書第三 ❹等空（延享二—文化一三A. D. 1745—1816）❺享和三（A. D. 1803）

❻この書は若州若門山中淨善提心庵にて密說、覺道、乘如等の懇請により初心道俗の安心の爲に撰述す。初め善提心を發してより永く退轉せずして終に佛果に至るまでの

指南を述べてゐる。其の綱要は先づ上卷にて發心の緣たる六道輪廻の苦相を顯密各別に解說して、菩提心を發したる功德を旁證詳述し、次に下卷にて修行の方規として三學を列叙し、安養淨土の莊嚴と往生の正因とを說き、日課の勤行則を示し、光明眞言の功德を擧げ、後に更率往生をも說いてゐる。特に一切智々、體和用三大等の義門は勤導には高遠なる感なきにしもあらざれども、是は萬善の根本であり、密宗の淵源であるを以て、初心者にも之れを知らしむる要ありとして了寒乘示せられたのであらう。

❺享和三刊 ❹(高大、寄・一・五七)(京專)(谷大、餘大・二二一八) (高見寬應)

發心和歌集 ❶(日)Hos-shin-wa-ka-shū. ❷一卷 ❸存、群書類從第一五釋家部、國文東方佛教叢書第一輯第八 ❹還子內親王(康保元—長元八 A. D. 964—1035)

❺寛弘九(A. D. 1012)八月

❻初めに御自讚の漢文序があり、其に依れば和歌を以て自ら佛道に結緣し、且つ他をも化せんとせられた物なる事明かである。

內容。先づ菩薩の四弘誓願より初まり、次いで般若心經・彌陀經・大般若經(理趣分)・仁王經(上下)・本願藥師經・壽命經・無量義經・法華經(二十八品)・菩賢經・涅槃經の十三經五十餘の要文に述べ、最後に廻向の一偈を揭げて、其等を題とし夫々其深義を讚詠したるもの、總じて五十五首を數へる。而して其等の和歌は就中法華經二十八品を中心、否寧ろ基調として詠ぜられて居り、其事は亦既に序文に於て、釋尊說a法華一乘(歌a詠諸如來之善こ)と見ゆる句にも窺はるゝ處である。

因みに、其等の御歌の數首は後の新古今集・新勅撰集・續後撰集・續拾遺集・續後拾遺集等の勅撰集に採錄せられて居る。又、宮內省の圖書寮には今一つ內容の異り乍ら同名の發心和歌集一卷なる物が存する。併し其は若過二條太皇大貳集と題して、群書類從にも收められてゐる物なのである。

(橫超孝)

發軫鈔 ❶(日)Hos-shin-shō. (支)Fa-chen-ch'ao. 金剛般若經發軫鈔 ❷三卷 ❸缺 ❹宋仁岳(淳化三—治平元 A. D. 992—1064) ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

發端立敵 ❶(日) Hot-tan-ryō-teki. ❷一卷 ❸存 ❺天保七寫 ❹(立大、A〇五・一四九)

發智集 ❶(日) Hos-chi-shū. ❷三册 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・五七)

發智論 ❶(日)Hos-chi-ron. (支)Fa-chih-lun. 阿毘達磨發智論 ❷二十卷 ❸存、大正二六・九一八 No. 1544、館秋五・卍二四・一〇、北0425懷兄、南0522懷兄、元0255孔懷、明北1252傳啓、清1252傳啓、麗0560孔懷、天0552懷兄、指0957孔懷、法0264孔懷、至1254轉轉、明南1289二京、N. 1275 ❹迦多衍尼子造、玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—664)譯 ❺庶關慶二—五(A. D. 657—660) ❻阿毘達磨發智論の下を見よ。

發菩提心戒 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-kai. (支)Fa-p'u-ti-hsin-chieh. ❷一卷 ❶唐潛觀(開元六—貞元四 A. D. 718—788) ❼(參考) 續開元錄卷中、諸宗章疏錄第三

發菩提心戒懺悔文 ❶(日)Hotsu-bo-dai-shin-kai-san-ge-mon. (支)Fa-p'u-ti-hsin-chieh-ch'an-hui-wen. 最上乘教受發菩提心戒懺悔文 ❷一卷 ❸存 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ❺受菩提心戒儀(大正一八・九四 No. 915)の卷末に附されたるものにして、淨嚴等校訂加筆本には頭註して「已下仁運二師請來本」といふ。

發菩提心戒本 ❶(日)Hotsu-bo-dai-shin-kai-hon. (支)Fa-p'u-ti-hsin-chieh-pen. ❷一卷 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—836)述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第二

發菩提心戒本 ❶(日)Hotsu-bo-dai-shin-kai-hon. (支)Fa-p'u-ti-hsin-chieh-pen. ❷三卷 ❹思孝述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第二

發菩提心義 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-gi. (支)Fa-p'u-ti-hsin-i. 華嚴發菩提心章、華嚴發菩提心義、華嚴三昧章 ❷一卷 ❸存、大正四五・六五〇 No. 1876、卍續二・八・一 ❹唐法藏(貞觀一七—先天元 A. D. 643—712)述 ❺華嚴發菩提心章の下を見よ。 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄 1854、1856

發菩提心義 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-gi. (支) Fa-p'u-ti-hsin-i. 菩提心義 ❷一卷 ❸存、大正四六・九八七 No. 1925、續開一、卍續二、九・四、三十帖策子第二〇 ❹唐潛觀(開元六—貞元四 A. D. 718—788) ❺菩提心義の下を見よ。 ❼(參考) 續開元錄卷中

發菩提心經 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-kyō. (支)Fa-p'u-ti-hsin-ching. ❷一卷 ❸延壽經。 ❼(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

發菩提心經 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-kyō. (支)Fa-p'u-ti-hsin-ching. 發菩提心經論、發菩提心論 ❷二卷 ❸存、大正三二・五〇八 No. 1659、館來一〇、卍二二・二、北6236命、南642命、元634命、明北1211沛、清1211沛、麗631盡、天632命、指931盡、法615盡、至1352啓、明南1375啓、N. 1218 ❹天親菩薩造、鳩摩羅什譯 ❺後秦弘始四—一四(A. D. 402—415) ❻本論は二卷十二品より成り大乘思想に立脚して菩薩の發菩提心を中心として修道思想を記述してゐる。元來菩薩思想、從つて發菩提心思想を高潮するのは大乘の特色の一をなすものである。その思想の概要を示せば、〔勸發品第一〕には歸敬文の後に佛法の偉大を說いて之を讚嘆する者の功德を述べ、菩薩の菩提心を發して、諸惡業を捨離し、諸の善事を勵み諸波羅蜜等に精進し、百萬億恒河沙の阿僧祇の三千大千世界の衆道者凡てが阿耨多羅三藐三菩提に到達することを願つてゐる。〔發心品第二〕に於ては先づ菩薩が菩提心を修集する因緣十法を擧げ、菩提心を起す四緣・諸佛を思惟する五事、身淫の過惡を觀じて菩提心を發する五事、最勝果を求めて菩提心を發する五事、衆生を慈愍して菩提心を發する五事を列擧し、更に衆生を慈愍して菩提心を發する五事の內の個々の無明の縛する所の四事、衆苦經文所の四事、不善業を集むる四事、極重惡を造る四事、正法を修せざる四事を列記し、諸惡業を持し、諸善行に勵み、菩薩は是等の爲に大慈悲を發し、阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の苦惱を救濟すべきを述べてゐる。〔願誓品第三〕には乾慧地に住する發心の菩薩が菩提を發趣し、成就する次第を述べ、勝十大正願を記し、菩提の因としての六波羅蜜を擧げ、四無量心三十七品諸善萬行之を助すると記し、決定の誓を立てる五事を擧げ、誓願を建て阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを願つてゐる。第四品以下は各波羅蜜を中心にして菩薩の修する德目を說明してゐる。波羅蜜(Pāramitā)とは到彼岸の意で、彼岸卽ち正覺、涅槃に達する修道德目であつて、六又は十種に分つてゐる。先づ〔禮波羅蜜品第四〕は布施波羅蜜を說つてゐる。禮波羅蜜とは禮那波羅蜜(Dānapāramitā)卽ち布施波羅蜜であつて、求むる者に心身物資を惜みなく施すことである。先づ自利・利他・二俱利の爲の布施波羅蜜に就き、施の三種—法施・無畏施・財物施を說明し、更に財施の五種—至心施・信心施・隨時施・自手施・如法施を擧げ、施を樂む人の五種の名利義利を擧げ、更に一切施を詳說し、布施者の受くる甚大なる功德を列ねてゐる。〔尸羅波羅蜜品第五〕は、持戒波羅蜜を說ふ。尸羅・波羅蜜(Śīla-pāramitā)とは在家出家の一切の戒行の波羅蜜であつて、先づ自利・利他、二俱利の爲の利益を說く、次に戒を三種—身戒・口戒・心戒に分ち、諸惡業より離れるを述べ、十善業戒を擧げて五種の利益を述べ、戒を波羅提木叉戒・定共戒・無漏戒・攝根戒・無作戒に分類して解說し、菩薩の各種の戒の名として善持戒・慈心戒・悲心戒・喜心戒・捨心戒・惠施戒・忍辱戒・精進戒・禪定戒・智慧戒・親近戒・善知識戒・遠離惡知識戒・淸淨戒を擧げ、一々說明して、殊に淸淨戒を詳說してゐる。〔羼提波羅蜜品第六〕には羼提波羅蜜(Kṣānti-pāramitā)を中心にして說いてゐる。羼提(Kṣānti)とは忍辱のことで、一切衆生の罵辱打擲及び非情の寒熱飢渴等を忍受する大行である。先づ自利・利他二俱利の爲め忍辱を述べ、忍辱を三種に分ち、身口意辱としてゐる。更に世間の打者を實と橫、罵者を實と虛と、意に介すべきでないものとに分つてゐる。忍を生ずる因緣十事を擧げ、淸淨畢竟忍を說明してゐる(以上上卷)。

下卷の〔毘梨耶波羅蜜品第七〕には毘梨耶波羅蜜(Vīrya-pāramitā)を說つてゐる。毘梨耶(Vīrya)とは精進の謂で、身心を精勵して前後の五波羅蜜を進修することあつて、先づ自利・利他・二俱利の爲の波羅蜜を述べ、精進を二種に分ち、菩薩に十念を擧げ、六波羅蜜に精進するを言ひ、菩薩が大莊嚴を發し、精進を起す四事を擧げ、不懈莊嚴精進・勇健精進・修習善根精進・敎化精進を擧げて說明してゐる。〔禪那波羅蜜品第八〕は禪那波羅蜜(dhyāna-pāramitā)を說つてゐる。禪那とは惟修と譯し、新に靜慮又は三昧と名け、定を譯してゐる。眞理を思惟して散亂の心を定止する要法であつて、四禪八定乃至百八三昧等の別がある。先づ自利・利他・二俱利の爲の禪那波羅蜜を救ひ、禪定の由つて生ずる三法—聞慧・思慧・修慧を說明し、四禪を修する經過とその內容を記してゐる。更に定を修するの十法行を說き、最後に禪定・智慧の解釋をなしてゐる。〔般若波羅蜜品第九〕は般若波羅蜜を中心にしてゐる。般若は智慧と譯し、諸法に通達する智及び斷惑證理する慧である。先づ自利・利他・二俱利の爲の智慧を說明し、菩薩の智慧を修行する二十心を說き、十法差思惟心を擧げ、十二差入法門を解釋し、差觀三慧方便を說明してゐる。(如實法門品第十)は六波羅蜜を修習し、阿耨多羅三藐三菩提を求むる者の離るべき七法を述べ、無上菩提を運かに得んと欲する者の修すべき七法を擧げ、次に菩提を求めんとする者の修すべき諸德目を列記してゐる。以上にて六波羅蜜を終り、〔空無相品第十一〕は空無相を說き、空・信及び菩薩の修する諸惡卽ち無生法忍・信忍・順忍等を說明してゐる。〔功德持品第十二〕にては菩薩が無上菩提を退失しない十法を擧げ、最後に大乘經典の例に倣つて、此の發菩提心經論を護持宣流する者の功德を擧げ、佛種を紹ぎ、阿耨多羅三藐三菩提を成ずべしと述べてゐる。

本論の思想の特徵とする所は、この內容によつても易く知られるやうに、大乘經論にも拘らず、佛敎の繁煩哲學と言はれる小乘阿毘達磨論的傾向が多分にあることである。卽ち大乘的思想・術語を小乘阿毘達磨論書の如く細かく註釋し、分類し、法數を並べ、全篇の大半が殆んどこの法數の說明を以て占められてゐることである。而して之は世親が既に小乘阿毘達磨論師であつたことから原因してゐるのであらう。

❼(注釋) 疏三卷惠沼。 (參考) 三寶紀第八、內典錄第三、譯經圖紀第三、開元錄第四、貞元錄第六

發菩提心經論 ❶(日)Hotsu-bo-dai-shin-kyō-ron. 國譯發菩提心經論 ❷二卷 ❸存、國譯一切經論集部第六 ❹平等通昭譯

發菩提心口決 ❶(日)Hotsu-bo-dai-shin-ku-ketsu. ❷一軸 ❸存 ❺延慶二寫 ❹(高大、寄・一・六四)

發菩提心說並雜々問答辨書 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-setsu-narabini-

ng-go-mon-dō-ben-shō. ❷一卷 ❸存 ❺安政三寫 ❼(叡山、密厳)

發菩提心破諸魔經 ❶(日) Hatsu-bo-dai-shin-ha-sho-ma-kyō. (支) Fa-p'u-ti-hsin-p'o-chu-mo-ching. 菩提心破魔經 ❷二卷 ❸存、大正一七・八九六 No.1339、縮宙二、卍一五・七、北1304鐵、南1304鐵、元1124鐵、明北952薄、清952薄、麗1452刷、天1152鐵、至2028力、明南654清、Nj.1334 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A.D.980—)

❻經題の意は發(阿耨多羅三藐三)菩提心を說いた一大乘經典—之は雜・長・中・增一の四阿含から所有毘奈耶藏・阿毘達磨藏を總攝し、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜の三法印を始め、八萬四千の法門の祖源母胎となつてゐるといふ—之を加持する魔と名くる祕密總持の法門とが合せ說かれた經典といふのであらう。

結構は王舍城迦蘭陀竹林精舍に於て、多くの苾芻と諸菩薩とを從へた佛と迦葉婆羅門との問答になつてゐる。

先づ夢に閻浮提世界の廣大なる千葉蓮華の華中に潔白圓滿光明照耀なる大月輪を夢みた迦葉婆羅門が智慧廣大なる佛にその譯を訊ねると、佛は白蓮華・白傘蓋・月輪・佛像の四相を夢みるは吉夢で、最上大利があると答へ、偈を以て最上大利とは菩提心を發することによつて轉輪聖王・帝釋天・大醫王より醍醐惱得涅槃等一切の欣厭に於て成就せざるはないことを述べ、更に次々の婆羅門の質問に應じて、菩提心の福德を述べ、菩提心を稱讚し、菩提に自利を專らとする聲聞菩提と未だ大乘法を修せず、平等智に達せざる緣覺菩提と己が善利を他に及ぼさんとする無上菩提の三種あること、菩提心によつて三乘の證する無餘涅槃には差違がないが、聲聞は寶の山に入るに鐵に乘るが如く、緣覺は馬に乘るが如く、共に得る寶を他に施すまでには至らぬが、菩薩は象に乘るが如く、行步平正勇健にして得る寶を一切衆生に施す點に於て異るとし、更に三乘の相違は大海を渡るに小葉と板木と大船とを以てするが如くであるとも譬へられる。

次に下卷に於ては、婆羅門が大乘法を修する方法を問へるに對し、佛は自ら菩提心を發し、人にも發せしむる如き人に親近すべく、斯かる人は四攝法を以て人を攝するであらうと答へ、更に佛と成るためには三業に慈を行ずる天住、四無量行を行ずる梵住、三解脫門を修する聖住に住すべきことを述べられ、菩提の法門の六度であることを偈を以て述べられる。又佛は自ら前生に於て佛と作つて正法を發揚せんことを誓つたことを述懷される。斯くて婆羅門は希有なるかな、佛所說の法は最上甚深なりと歎じ、觀つて此の最上の法にもかゝはらず何故に衆生は迷ひ、諸魔は跳梁するかと疑ふ。乃で佛は一切の魔を調伏破壞すべき破魔と名くる祕密總持の法門を說かれる。婆羅門は此の祕密總持の章句を以て此の發菩提心大乘經典を加持せんことを請ひ、佛は此の正法を書寫讀誦する者は王難・賊難、一切の魔を摧ひ、罪を滅し、苦惱を遠離するであらうと讚される。之を聞いて迦葉婆羅門及び諸菩薩等一切の大衆は歡喜奉行する。

(江田俊雄)

發菩提心論 ❶(日) Hatsu-bo-dai-shin-ron. (支) Fa-p'u-ti-hsin-lun. 金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論、金剛頂發菩提心、瑜伽總持釋門說菩提心觀行修行義、菩提心論 ❷一卷 ❸存、大正三二・五七二 No.1665、縮同一、卍二六・一、明北1312通、清1312通、麗1295鼎、法1157戶、至1375帳、明南1451陵、三十帖策子第一九、十卷章、Nj.1319 ❹龍猛造、不空(神龍元—大曆九 A.D.705—774)譯 ❺唐天寶五—大曆九(A.D.746—774)

❻金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論の下を見よ。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三、淨土眞宗教典志第一 ❽刊本(正大、一一九六・九一—九二)

發菩提心論 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron. (支) Fa-p'u-ti-hsin-lun. ❷二卷 ❸失譯 ❼(參考) 法經錄第五

發菩提心論 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron. (支) Fa-p'u-ti-hsin-lun. 發菩提心經論、發菩提心經 ❷二卷 ❸存、大正三二・五〇八 No.1659、縮來一〇、卍二二・二、北692命、南642命、元634命、明北1211海、清1211海、麗631畫、天692命、指591畫、法615畫、至1350路、明南1376邑、N.1216 ❹天親造、鳩摩羅什譯 ❺後秦弘始四—一四(A.D.402—412) ❻發菩提心經論の下を見よ。❼(參考) 淨土眞宗教典志第一 ❽寶政二刊 ❾(正大、一一九六・四三、一一五)(高大、寄・一・二四)

發菩提心論引書 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-in-sho. ❷一冊 ❸存 ❹宥快(貞和元—應永二三 A.D. 1345—1416)口 ❺嘉永元寫 ❼(高大、寄・一・四七)

發菩提心論愚草 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-gu-so. 菩提心論愚草 ❷四卷 ❸存 ❹祖瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1229—1304)述 ❺文明七寫 ❼(資壽院)

發菩提心論初心鈔 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho-shō. 菩提心論初心鈔 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第二四眞言密教論章疏下 ❹祖瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1229—1304)述 ❺菩提心論初心鈔の下を見よ。❼刊本(正大、一一九六・九六)

發菩提心論疏 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho. (支) Fa-p'u-ti-hsin-lun-su. ❷三卷 ❹唐惠沼(—開元二 A.D. 714)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二、注進法相宗章疏

發菩提心論抄 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho. ❷一冊 ❸存 ❹壺坂產覺作 ❺嘉禎四寫 ❼(資壽院)

發菩提心論抄出 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho-shutsu. ❷三帖 ❸存 ❼錄倉時代寫(資龜院)足利初期寫(資壽院)

發菩提心論鈔 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho. 菩提心論鈔 ❷十卷 ❸存、日本大藏經第二四眞言密教論章疏下、眞言十卷章鈔之內 ❹宥快(貞和元—應永二三 A.D. 1345—1416)述 ❺寶政二刊 ❾(正大、一一九六・四三、一一五)(高大、寄・一・二四)

發菩提心論引書 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-in-sho. ❷一冊 ❸存 ❹宥快(貞和元—應永二三 A.D. 1345—1416)口 ❺嘉永元寫 ❼(高大、寄・一・四七)

發菩提心論愚草 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-gu-so. 菩提心論愚草 ❷四卷 ❸存 ❹祖瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1229—1304)述 ❺文明七寫 ❼(資壽院)

發菩提心論初心鈔 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho-shō. 菩提心論初心鈔 ❷二卷 ❸存、日本大藏經第二四眞言密教論章疏下 ❹祖瑜(嘉祿二—嘉元二 A.D. 1229—1304)述 ❺菩提心論初心鈔の下を見よ。❼刊本(正大、一一九六・九六)

發菩提心論疏 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho. (支) Fa-p'u-ti-hsin-lun-su. ❷三卷 ❹唐惠沼(—開元二 A.D. 714)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二、注進法相宗章疏

發菩提心論抄 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho. ❷一冊 ❸存 ❹壺坂產覺作 ❺嘉禎四寫 ❼(資壽院)

發菩提心論抄出 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho-shutsu. ❷三帖 ❸存 ❼錄倉時代寫(資龜院)足利初期寫(資壽院)

發菩提心論鈔 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-sho. 菩提心論鈔 ❷十卷 ❸存、日本大藏經第二四眞言密教論章疏下、眞言十卷章鈔之內 ❹宥快(貞和元—應永二三 A.D. 1345—1416)述

❺本書は南山教學の大成者たる宥快法印の撰述にして、菩提心論の註釋書として最も精微を極めた良書である、菩提心論の文義を註釋せる以外に種々の問題を提唱し、これに關する從來の說を集大成して論斷快擲して居る。たとへば東寺眞言宗人依學此論事、以當論爲密藏肝心事、當論製作時代並傳來事、當論兩部分別事等四十六ケ條を舉げて祕密なる研究を集めた良書である。この發菩提心論鈔第三卷の始めに至德四閏五月十日於實性院讀之と云ひ、更に第九卷の始めに、於實性院宥快法印談義、至德四五月十四始之の識語あり、これに依りて觀れば此の發菩提心論鈔十卷は至德四年宥快法印四十三歲の時、實性院に於て講述せるものを集大成したものと思はれる。宥快法印は事數二相に亘りて百數十卷の撰述あり、菩提心論に於て尙此の外に菩提心論引音一卷、菩提心論古草三帖、菩提心論聞書三卷ありと傳ぶ。

(高井觀海)

發菩提心論聽記 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-chō-ki. 菩提心論聽記 ❷二卷 ❸存 ❹寛然 ❼寫本(龍大、研佛)

發菩提心論祕釋 ❶(日) Hotsu-bo-dai-shin-ron-hi-shaku. 金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論祕釋、菩提心論祕釋、菩提心論祕釋 ❷一卷 ❸存、大正七〇・一 No.1321、日本大藏經第二四眞言密教論章疏下、興教大師全集、密嚴諸祕釋第八 ❹覺鑁(嘉保二—康治二 A.D. 1095—1143)述

❻金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論紀釋の下を見よ。

發微錄抄 ❶(日) Hotsu-mi-roku-shō. ❷一冊 ❸存 ❼寫本(高大、寄・一・一六)

發明鈔 ❶(日) Hotsu-myō-shō. ❷二卷或一卷 ❸存 ❼政海記 ❼寫本(正教藏)

發問罪福應報經 ❶(日) Hotsu-mon-zai-fukku-ō-hō-kyō. (支) Fa-wen-tsui-fu-ying-pao-ching. ❷一卷 ❻延爲經。❼(參考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

發露懺悔文 ❶(日) Hotsu-ro-san-ge-mon. 密嚴院發露懺悔文 ❷一卷 ❸存、興教大師全集、密嚴諸祕釋第八、眞言諸經要集、眞言宗聖典 ❹覺鑁(嘉保二—康治二 A.D. 1095—1143) ❺密嚴院發露懺悔文の下を見よ。❼(參考) 諸宗章疏錄第三

發露懺悔文誌註 ❶(日) Hotsu-ro-san-ge-mon-gyō-cha. 密嚴院發露懺悔文誌註 ❷一卷 ❸存 ❹慈恭 ❺明治一九刊 ❼(正大、一四三二・一八、二三三×京專)

佛樣の生ひ立ち物語 ❶(日) Hotoke-sama-no-i-tachi-mono-gatari. 正系の佛樣と贋造の佛樣 ❷一卷 ❸存 ❹小野清秀著 ❺昭和七刊 ❼東京中央出版社

佛樣の戶籍調べ ❶(日) Hotoke-sama-no-ko-seki-shira-be. ❷一卷 ❸存 ❹醍醐惠瑞著 ❺大正七刊 ❼(龍大、二〇九九・一七)

佛と印度佛跡 ❶(日) Hotoke-to-in-do-butsu-seki. ❷一冊 ❸存 ❹重田彌重郎著 ❺大正一五刊 ❼香川縣琴陽社

佛と人 ❶(日) Hotoke-to-hito. ❷一卷 ❸存 ❹小瀧淳著 ❺昭和七刊 ❼カオリ社

佛とは何ぞや ❶(日) Hotoke-to-wa-nan-zo-ya. ❷一卷 ❸存 ❹間宮英宗著 ❺大正一〇刊 ❼京都法藏館

佛に親しむ思想 ❶(日) Hotoke-ni-shita-shi-bu-shi-sō. ❷一卷 ❸存 ❹稻垣眞我著 ❺大正一〇刊 ❼(龍大、二〇九九・二三二)

佛の心と親心 ❶(日) Hotoke-no-kokoro-to-oya-gokoro. ❷一卷 ❸存 ❹黑瀨知圓著 ❺大正四刊 ❼(龍大、一〇五五・一四一)

反質論 ❶(日) Hon-jitsu-ron. (支) Fan-chih-lun. ❷一卷 ❸缺 ❹陳眞諦(永元元—太建元 A.D. 499—569)譯

❺開元錄第十五(大正五五・六三七)に本書の下に細註して云く「今辰御藏中如實論、是故彼題之如實論反質難品」云云。

❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

本因元始錄 ❶(日) Hon-in-gen-shi-roku. 日蓮大士御正體本因元始錄 ❷一卷 ❸存 ❹松平頼該述 ❼寫本(立大、D O・一二五)

與本因房狀 ❶(日) Hon-in-bō-nō-atsura-jō. ❷一卷 ❸存 ❹日辰 ❼寫本(立大、D O・二七二)

本因妙抄對見記 ❶(日) Hon-in-myō-shō-tai-ken-ki. ❷三卷 ❸存 ❹日舒 ❼寫本(立大、D O・二七四)

本因妙鈔 ❶(日) Hon-in-myō-shō. ❷一卷 ❸存 ❼寫本(立大、D O・二七四)

❺僞作なるも興門派にては日蓮聖人眞作と見做す。

❼明治三六寫(立大、D O・一二八)

本院留守歷代記 ❶(日) Hon-in-ru-su-reki-dai-ki. ❷(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

本有今無偈論 ❶(日) Hon-u-kon-mu-ge-ron. (支) Pen-yu-chin-wu-chieh-lun. 涅槃經本有今無偈論 ❷一卷 ❸存、大正二六・二八一 No.1628、縮往六、卍二二・一、北2429空、南2524空、元2578空、明北1200願、清1200願、麗5723虛、天5725空、指527虛、法561虛、至1195乏、明南1232弗、Nj.1207 ❹眞諦(永元元—太建元 A.D. 569)譯 ❺梁太清四(A.D. 550)

❻涅槃經本有今無偈論の下を見よ。

本云文集 ❶(日) Hon-un-mon-jū. 本文集 ❹了譽聖冏(曆應四—應永二七 A.D. 1341—1420) ❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄

本云文集見聞 ❶(日) Hon-un-mon-jū-ken-mon. ❷一卷 ❹了譽聖冏(曆應四—應永二七 A.D. 1341—1420) ❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄

本會十講領解草稿 ❶(日) Hon-e

ji-ri-ko-ryō-ze-ō-ki. ❷一冊 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・四八)

本覺讚 ❶(日)Hon-gaku-san. 本覺讚注 ❷一卷 ❸良源(延喜一二—寛和元A.D. 912—985)撰 ❼(參考) 本朝台祖撰述害部書目、山家祖德撰述篇目集卷下

本覺讚 ❶(日) Hon-gaku-san. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、惠心僧都全集第五、天台小部集釋第一六 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D. 942—1017)撰 ❺本書は初めに七字一句八行の蓮華三昧經の偈を出す。即ち本覺讚といはれるもので、次に和讚體の假名文六十二句を以て前の讚を說明して居り、註本覺讚といはれる。蓋し本覺とは始覺に對し、起信論所說たるは勿論、宇宙の本體たる眞如の理體即ち阿梨耶識である。本書は此の本覺を註するに當り、眞如觀に見られる如く天台、密教等の全教學を統一した融然たる思想を以て打建てられた觀察を下して居り、天台教學の本覺思想史上に重要な地位を占めて居る。然し源信が眞撰書なりと見るには尙思想史上窮明の要ありと考へられ、從來眞僞未決のものとされて居る。 ❼(參考) 諸師製作目錄 ❾延寶八刊(京大、藏・二四ホ・七)(叡山、幕藏)刊本(谷大、餘大・四八〇)(渡邊寂昌)

本覺讚私 ❶(日)Hon-gaku-san-shi. ❷一卷 ❸存 ❹惠意 ❼(參考) 天台宗全書刊行豫定書目

本覺讚釋 ❶(日)Hon-gaku-san-shaku. 本覺讚註、本覺注讚、本覺讚注釋、本覺讚草案 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、惠心僧都全集第五、天台小部集釋第一六 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D. 942—1017)述 ❺本覺讚釋の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄、淨土眞宗教典志第一、日本國天台宗章疏錄、諸師製作目錄 ❾延寶八刊(正大、一三六・八)(京大、藏・二四ホ・七)(叡山、華藏)刊本(谷大、餘大・四八〇)(渡邊寂昌)

本覺讚注 ❶(日)Hon-gaku-san-chū. 本覺讚 ❷一卷 ❹良源(延喜一二—寛和元A.D. 912—985) ❼(參考) 本朝台祖撰述害部書目

本覺讚注釋 ❶(日) Hon-gaku-san-chū-shaku. 本覺讚釋、本覺讚注、本覺注讚、本覺讚註、本覺讚草案 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、惠心僧都全集第五、天台小部集釋第一六 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D. 942—1017)撰 ❺本覺讚釋の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷上

本覺心地祭文 ❶(日) Hon-gaku-shin-ji-sai-mon. ❷一卷 ❹空海(弘法大師、七七四—八三五)

本覺大師諡號事書 ❶(日) Hon-gaku-dai-shi-shi-gō-ji-sho. ❷一冊 ❸存 ❾德川時代寫 ❾(寶菩提院)

本覺大師傳 ❶(日) Hon-gaku-dai-shi-den. ❷一卷 ❸存 ❹齊藤陡現著 ❾明治三八刊 ❾(谷大、餘大・三八二六)(帝國、三一九・一四一)

本覺法師日大 ❶(日) Hon-gaku-hō-shi-nichi-dai. ❷一卷 ❸存 ❹富谷宜識著 ❾大正七刊 ❾(立大、B〇六・六)

本覺讚注釋 ❶(日) Hon-gaku-san-chū-shaku. 本覺讚註、本覺讚草案 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、惠心僧都全集第五、天台小部集釋第一六 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D. 942—1017)撰 ❺本覺讚釋の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三に大黑講式並讚一卷と本書を並記し傍註して云く「按。已上二部。有錄爲大師撰。然諸錄不見。故且除之。此中本覺心地祭文。悲長具辨爲僞書。邪正錄亦爲僞書。顯證云一說爲北院作。亦非也。證僧正云。此書爲大師撰。自古疑之」云々。

本覺心要和讚 ❶(日) Hon-gaku-shin-yō-wa-san. ❷一卷 ❸存 ❹良源(延喜一二—寛和元A.D. 912—985)作 ❾寫本(正教藏)

本覺讚 ❶(日) Hon-gaku-san. 本覺讚註、本覺注讚、本覺讚註釋、本覺讚草案 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、惠心僧都全集第五、天台小部集釋第一六 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D. 942—1017)述 ❺本書は本覺讚註、本覺讚註釋、本覺讚草案などとも題號を付せられて居り、本覺讚に對して天台・密教等の融然たる思想を以て、研究的態度にて問答を設け精密なる論述を下して居る。本書若し眞撰とせば源信が本覺に對する思想は本門久成の理に存し、本門無作三身を本覺の實義となす主張である。本書も亦本覺讚同樣に本覺思想研究上重要部門を示すが本覺讚同樣に眞なりとするに尙一抹の疑雲の存するものと見られよう。 ❼(參考) 諸宗章疏錄、淨土眞宗教典志第一、日本國天台宗章疏錄、諸師製作目錄 ❾延寶八刊(正大、一三六・八)(京大、藏・二四ホ・七)(叡山、華藏)刊本(谷大、餘大・四八〇)(渡邊寂昌)

本覺讚注 ❶(日)Hon-gaku-san-chū. 本覺讚 ❷一卷 ❹良源(延喜一二—寛和元A.D. 912—985) ❼(參考) 本朝台祖撰述害部書目 ❾寛文元寫 ❾(叡山、密藏)

本覺讚注釋 ❶(日) Hon-gaku-san-chū-shaku. 本覺讚釋、本覺讚註、本覺注讚、本覺讚註釋、本覺讚草案 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、惠心僧都全集第五、天台小部集釋第一六 ❹源信(天慶五—寛仁元A.D. 942—1017)撰 ❺本覺讚釋の下を見よ。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷上

本覺心地祭文 ❶(日) Hon-gaku-shin-ji-sai-mon. ❷一卷 ❹空海(弘法大師、七七四—八三五)

本覺和讚 ❶(日) Hon-gaku-wa-san. ❷一卷 ❸存 ❹良源(延喜一二—寛和元A.D. 912—985)作 ❾寫本(正教藏)

本覺大師諡號事書 ❶(日) Hon-gaku-dai-shi-shi-gō-ji-sho. ❷一冊 ❸存 ❾德川時代寫 ❾(寶菩提院)

本覺大師傳 ❶(日) Hon-gaku-dai-shi-den. ❷一卷 ❸存 ❹齊藤陡現著 ❾明治三八刊 ❾(谷大、餘大・三八二六)(帝國、三一九・一四一)

本覺法師日大 ❶(日) Hon-gaku-hō-shi-nichi-dai. ❷一卷 ❸存 ❹富谷宜識著 ❾大正七刊 ❾(立大、B〇六・六)

本起經 ❶(日)Hon-gi-kyō. (支)Pen-chi-ching. 五百弟子自說本起經、五百弟子說本末經、五百弟子自說本末經、五百弟子起經、佛五百弟子自說本起經 ❷一卷 ❸存、大正四・一九〇No. 199、續宿六、卍一五・一、北253竟、南246竟、元240竟、明北735孝、清735孝、聚586無、天253竟、指200無、法92孝、至1067上、明南716孝、Nj. 739 ❹竺法護譯 ❺西晉太安二(A.D. 303) ❻五百弟子自說本起經の下を見よ。

本起抄經 ❶(日) Hon-gi-shō-kyō. (支)Pen-chi-chao-ching. 本起鈔 ❷一卷 ❹延僧經。 ❼(參考) 出三藏記第五、法經錄第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一一、開元錄第一八、貞元錄第二八

本義鈔 ❶(日)Hon-gi-shō. 阿毘達磨俱舍論本義鈔、俱舍論本義鈔、俱舍論明思鈔、明思鈔 ❷四十八卷 ❸存、大正六三・一No. 1822、大日本佛教全書第八六—八八 ❹宗性等撰 ❺建久三—嘉應二(A.D. 1192—1251) ❻阿毘達磨俱舍論本義鈔の下を見よ。

本行經 ❶(日) Hon-gyō-kyō. (支)Pen-hsing-ching. 佛本行經、佛本行讚經傳、佛本行讚傳、佛本經讚經 ❷七卷 ❸存、大正四・五四、No. 196・續藏七、卍二六・四、北983據、南997據、元934據、明北1316連、清1316連、聚936據、天986據、指944據、法971據、至1432伊、明南1076初、Nj. 1192 ❹寶雲譯 ❺劉宋元嘉中(A.D. 424—453) ❻佛本行經の下を見よ。

本行集經 ❶(日)Hon-gyō-jū-kyō. (支)Pen-hsing-chi-ching. 佛本行集經 ❷六十卷 ❸存、大正三・六五五Nj. 190、續辰七—九、卍一四・八—九、北265令至藏、南319令至藏、元313令至藏、明北676女至興、清676女至興、聚265宜至基、天265令至藏、指767宜至基、法734宜至基、至1041樂至別、明南693女至興、Nj. 680 ❹闍那崛多(普通四—開皇二〇A. D. 523—600)譯 ❺隋開皇七—一一或一二(A. D. 587—591or592) ❻佛本行集經の下を見よ。

本行六波羅蜜經 ❶(日)Hon-gyō-roku-pa-ra-mitsu-kyō. (支)Pen-hsing-liu-po-lo-mi-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第一、三寶紀第七、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第三

本行六波羅蜜經 ❶(日)Hon-gyō-roku-pa-ra-mitsu-kyō. (支)Pen-hsing-liu-po-lo-mi-ching. ❷一卷 ❸缺 ❺宋求那跋陀羅(太元一九—泰始四A. D. 394—468)譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

本空觀 ❶(日) Hon-kū-kwan. ❻淨土眞宗聖教目錄に本書と共に十一部の書名を列記して云く「已上十一部十三卷、決非古師所作。後人妄爲之。使後學致疑惑。悉信書則不知無書。是此謂乎」云云。

本懷抄 ❶(日) Hon-kwai-shō. ❹皇覺撰 ❼(參考) 本朝台祖撰述害部書目、山家祖德撰述篇目集卷下

本元興寺緣起 ❶(日) Hon-gwan-ji-en-gi. ❸存、大日本佛教全書第一一八寺誌叢書第二 ❻大和國高市郡飛鳥村の本元興寺安居院の由來を記せる短篇。

本願安心抄 ❶(日) Hon-gwan-an-jin-shō. ❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄

本願引釋聽記 ❶(日)Hon-gwan-in-shaku-chō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹行慈(一文久二A. D. 1862) ❾寫本(龍大、一二三一・一二六)

本願緣起 ❶(日) Hon-gwan-en-gi. 御手印緣起 ❷一卷 ❸存、論林拾葉第二〇 ❹太宮太子(敏達帝二—推古帝二九A. D. 573—621) ❻淨土眞宗教典志第一に云く「又云御手印緣起」云々。

本願覺知鈔 ❶(日)Hon-gwan-kaku-chi-shō. ❷一卷 ❸存 ❹傳、空海(寶龜五—承和二A. D. 774—835) ❾寫本(龍大、研眞)

本願方印信血脈 ❶(日)Hon-gwan-gata-in-jin-kechi-myaku. ❷一義 ❸存 ❾德川時代寫 ❾(寶龜院)

本願歸命十箇條 ❶(日)Hon-gwan-kei-mei-jū-kei-jō. ❷一卷 ❸存、眞宗帖外聖教第二、祕事法門集下篇 ❹傳、源空(長承二—建暦二A. D. 1133—1212) ❻題下に「黑谷源空」と撰號を冠げ、奥に「建長二年九月十日、於東山黑谷源空書之」とあり、帖外聖教は之に就て、「私に云建長二年は源空聖人遷化より三十九年後の年號なり觀覺聖人七十六歳の時なり、是は定て空上人滅後に御師聖人東山にて拜見なさるゝ節年號月日を書載せたまふ歟云云」とあれど何等の根據なく、菱蓼私記の評により、「邪」とし「奥に云建長二年九月十日於東山、黑谷源空書之、私謂これ黑谷滅後三十八年後なり。その妄作なること知りぬべし、況や始終の文義、淨土一家の宗義に大に乖角せるをや、邪義の書といひつべし」となし、管窺錄、又「大邪義の書也、歸命はわれらが智慧、すなはち一心、すなはち無量壽、すなはち出入息等と說せるは、まさしく密教などの法門をきゝはつりて淨土の法門にとり入れたると見えたり」と其の內容を批判し、「近年西國邊に西方趣字風大出入息無覺毒觀經の當起自心は卽息字などゝ說せる邪義(この邪義のことは月渡僚者、選擇講の次に御物語あらるゝを今に耳の底にとゞめて記するなり)と同一類にて、まことにおそろしき邪法なり、はやく此書をやきすてたきもの」等と云つてゐる。又祕事法門集の下に教める所では、源空の撰號なく奥に「大町邑、專修寺開山如道印」とあり、或は大町如道系のものかとも見られるが、斯くてともかくも元祖のものにはあらず、亦その著作時代も不明なる邪義の雜書である。

然り而して本書の內容は、題の如く本願歸命について「南無歸命といふは今の我等が命の體なり」等と云ふ十ケ條を掲げ、旣ね管窺の評の如く、是等は行者の守り護むべき肝要の義と骨張らしてゐる。

本願顯宗記 ❶(日)Hon-gwan-ken-shū-ki. ❷一卷 ❸存、四休庵眞祐全集卷中 ❹眞祐(延寶五—寛曆六A. D. 1677—1736)述 ❾寫本(正大、一五五四・一六二—一六三)

本願興起抄 ❶(日) Hon-gwan-kō-ki-shō. ❷二卷 ❸存 ❹泰雲 ❺安永五刊 ❾(京大、一・二六ホ・一六)(智、こ・七・右・八)(谷大、宗大・一五一七)

本願歸命抄言釋 ❶(日)Hon-gwan-kei-mei-shō-gen-shaku. ❷三卷 ❸存、三部假名抄言釋之內 ❹加茂眞淳(元祿一〇—明和六A. D. 1697—1769) ❺安永四刊 ❾(龍大、二六八四・三七)

本願義疏 ❶(日)Hon-gwan-gi-sho. ❷一卷 ❸存 ❹源空(長承二—建暦二A. D. 1133—1212) ❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄 ❾刊本(正大、一五四・三二二)

本願行信旋火輪 ❶(日)Hon-gwan-gyō-shin-sen-kwa-rin. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第五一 ❹遠藤玄雄(文化元—明治一四A. D. 1804—1881)述 ❻眞宗々學の中心問題とも稱せらるゝ行信の交際について、全信成行、全行成信、機法互奪、本末相攝、光號信識、兩重鈎鎖、取願廢略、立法開合、信心正因、稱名報恩の十門に分別して詳細に論述してある。(藤枝昌道)

本願歸命抄言釋 ❶(日)Hon-gwan-kei-mei-shō-gen-shaku. 淨土眞宗聖教目錄、藏外法要叢書私記、眞宗法要藏外諸書管窺錄 ❾正德五刊(龍大、一七八・二・研眞)資曆四刊(谷大、宗大・四七二九)(堯誠住)

本願歸命抄言釋 ❶(日)Hon-gwan-kei-mei-shō-gen-shaku. ❷三卷 ❸存、三部假名抄言釋之內 ❹加茂眞淳(元祿一〇—明和六A. D. 1697—1769) ❺安永四刊 ❾(龍大、二六八四・三七)

本願義疏 ❶(日)Hon-gwan-gi-sho. ❷一卷 ❸存 ❹源空(長承二—建暦二A. D. 1133—1212) ❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄 ❾刊本(正大、一五四・三二二)

本願行信旋火輪 ❶(日)Hon-gwan-gyō-shin-sen-kwa-rin. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第五一 ❹遠藤玄雄(文化元—明治一四A. D. 1804—1881)述 ❻眞宗々學の中心問題とも稱せらるゝ行信の交際について、全信成行、全行成信、機法互奪、本末相攝、光號信識、兩重鈎鎖、取願廢略、立法開合、信心正因、稱名報恩の十門に分別して詳細に論述してある。(藤枝昌道)

本願興起抄 ❶(日) Hon-gwan-kō-ki-shō. ❷二卷 ❸存 ❹泰雲 ❺安永五刊 ❾(京大、一・二六ホ・一六)(智、こ・七・右・八)(谷大、宗大・一五一七)

五五・一四三)

本願講要 ❶(日)Hon-gwan-kō-yō. ❷十卷 ❸存 ❹刊本(龍大、二四一五・四七)×谷大、宗大・九九七)

本願三信圖說 ❶(日)Hon-gwan-san-shin-zu-setsu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・三一六五)

本願三信要略辨 ❶(日)Hon-gwan-san-shin-yō-ryaku-ben. ❷一卷 ❸存 ❹道振(安永二—文政七 A. D. 1773—1824)述 ❺寫本(谷大、長保・八八)

本願四度宗論記 ❶(日)Hon-gwan-shi-do-shū-ron-ki. ❷一卷 ❸存 ❹觀阿 ❺元祿七刊 ❻(龍大、二九九九・一一)

本願私見 ❶(日)Hon-gwan-shi-ken ❷一卷 ❸存 ❹佐々木慈潤著 ❺昭和七刊 ❻大阪眞宗實話教會

本願寺 ❶(日)Hon-gwan-ji ❷一卷 ❸存 ❹北島玄瀛編 ❺大正八刊 ❻京都本派本願寺教務所

本願寺維新史料宿老談話筆記 ❶(日)Hon-gwan-ji-i-shin-shi-ryō-shukurō-dan-wa-hik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九七一・五八)

本願寺開敎五十年史 ❶(日)Hon-gwan-ji-kai-kyō-go-jū-nen-shi. 鹿兒島本願寺開敎五十年史 ❷一卷 ❸存 ❹本願寺鹿兒島別院編 ❺大正一四刊 ❻鹿兒島別院

本願寺開祖親鸞聖人歷代系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kai-so-shin-ran-shō-reki-dai-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九三・二一) ❺寫本(龍大、一九七一・五八)

本願寺開敎五十年史 ❶(日)Hon-gwan-ji-kai-kyō-go-jū-nen-shi. 鹿兒島本願寺開敎五十年史 ❷一卷 ❸存 ❹本願寺鹿兒島別院編 ❺大正一四刊 ❻鹿兒島別院

本願寺開祖親鸞聖人歷代系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kai-so-shin-ran-shō-reki-dai-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九三・二一) ❺寫本(龍大、一九七一・五八)

本願寺御代之事 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-no-koto. ❷一卷 ❸存 ❹宗誓(正保五—享保一二 A. D. 1648—1727)編 ❺本書の原本は越前永臨寺に藏する所にして前項「本願寺御代事」本とこれの異本と思はるゝものとの合本である。この兩本の間に「右之一本少異アルカ故ニ重テ書寫シ兼テ所持ノ本ノ初ニ加ヘ置者也」と記されてゐるが、兩本に於ける少異とは前項本中の「東山常樂寺御代之事」のかわりに「大願願人寺代之事」が入つてゐる事である。而してこの差異は本書の成立並に流傳史を考ふる上に看過し得ざる問題を提供する。尙本書の奥に依て編者は越中國下新川郡生地の願樂寺宗誓なる事が判るが、宗誓は正保五年に生れ願樂寺の七世を董し、道徳法輪集、親鸞聖人御直弟散在記、二十四輩散在記等の著述を以て宗祖並に其直弟の遺跡顯彰に努めた大谷派の學匠で、本書の編纂又、二つの意に出づるものに外ならぬものと思はるゝのである。 (藤島達朗)

本願寺御門跡由緒略記 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-mon-seki-yui-sho-ryaku-ki. ❷一卷 ❸存 ❹高村小一郎 ❺寫本(龍大、一九四・四六)

本願寺御由緒略記 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-yui-sho-ryaku-ki. 本願寺由緒略記 ❷一卷 ❸存 ❹德川幕府との關係を記す。明和七年書上。 ❺文化一〇寫 ❻(谷大、宗大・三九五四)

本願寺御由緒略記 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-yui-sho-ryaku-ki. ❷一卷 ❸存 ❹德川幕府との關係を記す。文政二一書上。 ❺天保二寫 ❻(谷大、宗大・一五〇)

本願寺御由緒略記 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-yui-sho-ryaku-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗天・一五)

本願寺御歷代由緒 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-rek-dai-yui-sho. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗寒・二二)

本願寺支配諸國舊蹟之書付 ❶(日)Hon-gwan-ji-shi-hai-sho-koku-kyū-seki-no-kaki-tsuke. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

本願寺史談 ❶(日)Hon-gwan-ji-shi-dan. ❷一卷 ❸存 ❹和田古水著 ❺分派の事情を記したもの。 ❻明治三四刊 ❼(龍大、一九四・四七×谷大、宗洋・一七三)

本願寺史要 ❶(日)Hon-gwan-ji-shi-yō. ❷一卷 ❸存 ❹安藤宜成編 ❺明治四四刊 ❻(龍大、一九四・四八)

本願寺誌要 ❶(日)Hon-gwan-ji-shi-yō. ❷一卷 ❸存 ❹大谷派本願寺誌要編纂局編 ❺明治四四刊 ❻(京大、印哲・R・二二、一・三二ホ・六)(谷大、宗洋・一二一)(正大、一六二・一八)×帝室、七三〇・三) ❼(京都大谷派本願寺誌要編纂局)

本願寺七條鏡 ❶(日)Hon-gwan-ji-shi-hi-gō-kyō. 本願寺由緒略記 ❷一卷 ❸存 ❹眞行寺法藏坊 ❺寫本(谷大、宗大・四一五)

本願寺宗旨之事 ❶(日)Hon-gwan-ji-shū-shi-no-koto. ❷一卷 ❸存 ❹所藏守札に關する書上。 ❺寫本(谷大、宗大・九六二)

本願寺宗主及傍付傳 ❶(日)Hon-gwan-ji-shū-shu-oyobi-bō-fu-den. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

本願寺宗主年譜 ❶(日)Hon-gwan-ji-shu-shu-nen-pu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九六二・二一)

本願寺宗政論 ❶(日)Hon-gwan-ji-shū-sei-ron. ❷一卷 ❸存 ❹石川舜台(天保一二—昭和六 A. D. 1841—1931)著 ❺大正一四刊 ❻(谷大、宗大・四〇四三)

本願寺集覽會總目錄 ❶(日)Hon-gwan-ji-shū-ran-kai-sō-moku-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

本願寺聖人親鸞傳繪 ❶(日)Hon-gwan-ji-shō-nin-shin-ran-den-e. 御傳鈔、舊信聖人繪、善信聖人親鸞傳繪、親鸞傳繪 ❷二卷或四卷 ❸存、大正八三・七五〇 No. 1664、撰群書類從第九、眞宗聖敎大全卷下、國文東方佛敎叢書第一輯第五傳記部上 ❹覺如宗昭(文永七—觀應二 A. D. 1270—1351)撰 ❺御傳鈔の下を見よ。 ❻(京大、印哲・R・二二、一・三二ホ・六)(谷大、宗洋・一二一)(正大、一六二・一八)×帝室、七三〇・三) ❼(京大、印哲・R・二二、一・三二ホ・六)(谷大、宗洋・一二一)(正大、一六二・一八)×帝室、七三〇・三) ❽(京大、印哲・R・二二、一・三二ホ・六)(谷大、宗洋・一二一)(正大、一六二・一八)×帝室、七三〇・三) ❾(京大、印哲・R・二二、一・三二ホ・六)(谷大、宗洋・一二一)(正大、一六二・一八)×帝室、七三〇・三)

本願寺聖人親鸞傳繪私記 ❶(日)Hon-gwan-ji-shō-nin-shin-ran-den-e-shi-ki. ❷二卷 ❸存 ❹慶安三刊 ❺(龍大、一九六一・九二)

本願寺聖人傳繪探證記 ❶(日)Hon-gwan-ji-shō-nin-den-e-tan-shō-ki. ❷十卷 ❸存 ❹空雲(慶長八—元祿五 A. D. 1603—1624) ❺寬文五刊 ❻(龍大、一九六一・九三)

本願寺眞論 ❶(日)Hon-gwan-ji-shin-ron. ❷一卷 ❸存 ❹圓火郎編 ❺明治三〇刊 ❻(龍大、一九四・四九)

本願寺親鸞上人歷代系譜 ❶(日)Hon-gwan-ji-shin-ran-shō-nin-reki-dai-kei-fu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(帝國、二三七・一〇一)

本願寺親鸞大師御已證並遺物所御消息等類聚鈔 ❶(日)Hon-gwan-ji-shin-ran-dai-shi-go-i-shō-narabini-hen-sho-sho-no-shō-soku-tō-rui-jū-shō. ❷二卷 ❸存 ❹刊本(正大、一六四・六)

本願寺親鸞傳繪 ❶(日)Hon-gwan-ji-shin-ran-den-e. 御傳鈔、舊信聖人繪、舊信聖人親鸞傳繪、親鸞傳繪、本願寺聖人親鸞傳繪、本山四輔壁繪 ❷二卷或四卷 ❸存、大正八三・七五〇 No. 1664、撰群書類從第九、眞宗聖敎大全卷下、國文東方佛敎叢書第一輯第五傳記部上 ❹覺如宗昭(文永七—觀應二 A. D. 1270—1351)撰 ❺御傳鈔の下を見よ。 ❻明治一七刊 ❼(帝國、一三三・一〇四)

本願寺全史 ❶(日)Hon-gwan-ji-zen-shi. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九三・二〇)

本願寺御故實東林更鳴集 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-kō-jitsu-tō-rin-kō-mei-shū. 東林更鳴集 ❷三卷或五卷 ❸存 ❹東林更鳴集の下を見よ。 ❺享保二刊 ❻(谷大、宗大・二三六)

本願寺御相承次第 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-sō-jō-shi-dai. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・三〇二七)

本願寺御代系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗天・一七)

本願寺御代々印鑑集 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-dai-in-kan-shū. ❷一冊 ❸存 ❹淑如、住如、法如、文如、良如、准如、本如の捺印なり。 ❺(龍大、別置)

本願寺御代々相承之次第 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-dai-sō-jō-no-sui-dai. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

本願寺御代々之書附 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-dai-no-kaki-tsuke. 本願寺代々之書付 ❷一卷 ❸存 ❺元文三寫 ❻(龍大、別置)

本願寺御代々略記 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-dai-ryak-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

本願寺御代事 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-no-koto. 大谷本願寺御代事 ❷一卷 ❸存 ❹空雲(寬文元—延享三 A. D. 1661—1746) ❺寫本(龍大、一九三・二一)

本願寺近代系譜 ❶(日)Hon-gwan-ji-kin-dai-kei-fu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗寒・一〇)

本願寺近代庶流 ❶(日)Hon-gwan-ji-kin-dai-sho-ryū. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗寒・九)

本願寺系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹續類從所收本に類似のものなり。 ❺寫本(谷大、宗大・三一六〇)

本願寺系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・三〇二七)

本願寺系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kei-zu. ❷一卷 ❸存、續群書類從第六系圖部、親鸞傳叢書之內 ❹本書收むるもの二本あり。一は、中臣の祖天兒屋根尊に起系して、第十三代光圓(良如)迄の直系支系を畧ぐるもので、親鸞傳叢書中に收められるものに同じ。本願寺派所傳のものなる事明かである。次に別本とある今一つのものは、本願寺開祖親鸞より第十七代性海(眞如)に至る簡單な世代記で、卷尾に「元祿己巳之夏寺井玄東得之東本願寺栗津夫邊所今寫此云」とある。 ❺寫本(龍大、別置)×谷大、宗大・三一六〇) (不破幹雄)

本願寺系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kei-zu. 親鸞聖人本系圖 ❷一卷 ❸存 ❹親鸞聖人本系圖と題し、天御中主尊に起系して第十三代良如(光圓)の支系に至る迄の本願寺の正統庶流を委しく記したるものなり。明暦元年の奥書あり、卷末に大系圖之次第と題して日野氏の系圖を揭ぐ。

文政七年刊行の本願寺御系圖一卷は本系圖と全く同一のもので彼此に聊か具略の差があるに過ぎない。續群書類從所收のもの(二本中の前本)は更にこれを一層簡略したものゝ如し。兩して右の二本共に大系圖之次第を缺く。 ❺明暦元刊 ❻(谷大、宗大・一四四四、栗寒・一—二)×(龍大、一九三・一六×哲、ら・四・左・五) (不破幹雄)

本願寺系譜 ❶(日)Hon-gwan-ji-kei-fu. 本願寺派本願寺系譜 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・二七二五)

本願寺境內圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-kei-dai-no-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九四・四五、別置)

本願寺兼帶所並末寺高札寫 ❶(日)Hon-gwan-ji-ken-tai-jo-matsu-ji-kō-satsu-utsushi. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

本願寺御系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-kei-zu. ❷一冊 ❸存 ❹淨土眞宗教典志第二に云く「不ト詳ニ撰號」疑是實悟系圖略抄ニ云々。 ❺文政七刊 ❻(龍大、一九三・一八×谷大、宗大・五八七)

本願寺御系圖拔書 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-kei-zu-nuki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗寒・六)

本願寺御系譜 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-kei-fu. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(龍大、一九三・二〇)

本願寺御代系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、栗天・一七)

本願寺御相承次第 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-sō-jō-shi-dai. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・三〇二七)

本願寺御代系圖 ❶(日)Hon-gwan-ji-dai-kei-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

本願寺御代々之書附 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-dai-no-kaki-tsuke. 本願寺代々之書付 ❷一卷 ❸存 ❺元文三寫 ❻(龍大、別置)

本願寺御代々略記 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-dai-ryak-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

本願寺御代事 ❶(日)Hon-gwan-ji-go-dai-no-koto. 大谷本願寺御代事 ❷

mo-shi. 熱と力と涙とに輝く本願寺全史 ❷一巻 ❸存 ❹中村學圓、松岡良友共著 ❺大正九刊 ⑩(谷大、宗洋・四五七)

本願寺藏經敎奥書並本願裏書 ❶(B) Hon-gwan-ji-zō-kyō-kyō-oku-gaki-narabini-hon-ren-ura-gaki. ❷一巻 ❸存 ⑩寫本(龍大)

本願寺大繪圖 ❶(B)Hon-gwan-ji-dai-e-zu. 京西六條本願寺大繪圖 ❷一巻 ❸存 ❺宣勝一〇刊 ⑩(谷大)

本願寺代々之書付 ❶(B) Hon-gwan-ji-dai-dai-no-fumi-tsuke. 本願寺御代々之書附 ❷一巻 ❸存 ⑩寫本(龍大、別置)

本願寺代々略譜 ❶(B)Hon-gwan-ji-dai-dai-ryaku-fu. ❷一巻 ❸存 ⑩寫本(龍大、別置)

本願寺譚 ❶(B)Hon-gwan-ji-dan. ❸存 ⑩寫本(龍大、一七四・四)

本願寺通紀 ❶(B)Hon-gwan-ji-tsū-ki. 大谷本願寺通紀 ❷十卷或十五卷 ❸存、大日本佛敎全書第一三二、眞宗全書第六八 ❹玄智(享保一九—寛政六A. D. 1734—1794)述 ⑥大谷本願寺通紀の下を見よ。 ⑩寫本(龍大、一九四・五一—五五、研史、別置)

本願寺東西記 ❶(B) Hō-gwan-ji-tō-zai-ki. 東本願寺系圖、東西記 ❷一巻 ❸存、眞宗全書第五六 ⑥東本願寺系圖の下を見よ。 ⑩寫本(谷大、宗大・一一九一)

本願寺内範 ❶(B) Hon-gwan-ji-nai-han. ❷一巻 ❸存 ❹大谷光瑩 ❺明治四一刊 ⑩(龍大、二〇九四・七、一〇五五・一四四)

本願寺普物語 ❶(B)Hon-gwan-ji-mōbu-mono-gatari. ❷二巻 ❸存 ❹實悟(明應元—天正一一A. D. 1492—1583) ⑩(谷大)

本願寺物語 ❶(B) Hon-gwan-ji-mono-gatari. ❷一巻 ❸存 ❹高島米峰著 ❺昭和六刊 ⑩東京實業之日本社

本願寺文書 ❶(B) Hon-gwan-ji-mon-jo. ❷十三冊 ❸存 ⑩原本(本願本願寺)影寫本(龍大、別置×谷大)寫本(龍大、研史)

本願寺由來 ❶(B)Hon-gwan-ji-yu-rai. ❷一巻 ❸存、國文東方佛敎叢書第二輯第六寺誌部 ⑥本書は東西本願寺分派の由來を記すものである。本願寺第十一代顯如の沒後、長子教如を斥けて末子准如を法主となせし事情の顚末を詳述し、專ら如春公の謀略と秀吉の權勢の然らしめし所であるとしてゐる。作者並にその年代は詳かでないが東本願寺側の人の手に成れることは明かである。別に本願寺東西記一卷なる書があるが、本書と併せ見る時一層此間の事情を明かにすることが出來る。 ⑩原本(東本願寺)寫本(龍大、研史)

(不破幹雄)

本願寺由緒書 ❶(B) Hon-gwan-ji-yui-sho-gaki. ❷一巻 ❸存 ⑥德川幕府との關係を記す。本書に就て髮御影書付、上二條寒行所書付、就宮盤御影書付を附す。 ⑩寫本(谷大、宗大・一八七三)

本願寺由緒記 ❶(B)Hon-gwan-ji-yui-sho-ki. 大谷本願寺由緒通鑑、本願寺由緒略記 ❷五卷 ❸存、大日本佛敎全書第一三二 ❹溫科子編 ⑥大谷本願寺由緒通鑑の下を見よ。 ⑩正德五刊(龍大、一九四・五八)(谷大、宗大・六一五、四七八六、四八七一×哲、ら・四・中・一×帝國、一一七・七五)寫本(谷大、宗大・七五〇)

本願寺由緒通鑑 ❶(B)Hon-gwan-ji-yui-sho-tsū-kan. 大谷本願寺由緒通鑑、本願寺由緒記、本願寺由緒略記 ❷五卷 ❸存、大日本佛敎全書第一三二 ❹溫科子編 ⑥淨土眞宗敎典志第二に七條鑑、鑽遠集及本書を列記し本書の下に細註して云く「或言ふ由緒紀。正德四年甲午臨軒溫科子作。更鳴驚下(十一)云價一錢細逢集七條鑑等、者也云々。何は大谷本願寺由緒通鑑の下を見よ。 ⑩寫本(哲、ら・四・右・八)

本願寺由緒略記 ❶(B)Hon-gwan-ji-yui-sho-ryak-ki. 大谷本願寺由緒通鑑、本願寺由緒略記 ❷五卷 ❸存、大日本佛敎全書第一三二 ❹溫科子編 ⑥大谷本願寺由緒通鑑の下を見よ。 ⑩寫本(龍大、別置)

本願寺由緒略記 ❶(B)Hon-gwan-ji-yui-sho-ryak-ki. 本願寺御由緒略記 ❷一巻 ❸存 ⑥德川幕府との關係を記す。明和七年書上。 ❺文政七寫 ⑩(谷大、宗大・二六〇四)

本願寺由緒略記 ❶(B)Hon-gwan-ji-yui-sho-ryak-ki. ❷二巻 ❸存 ⑥德川幕府との關係を記す。寛政六年捷草輪番書上。 ⑩寫本(谷大、宗大・一四三八)

本願寺讓渡狀綴 ❶(B)Hon-gwan-ji-yuzuri-watashi-jō-tsuzuri. ❷一巻 ❸存 ⑩(龍大、別置)

本願寺來由 ❶(B) Hon-gwan-ji-rai-yu. ❷四卷 ❸存 ⑥東西分派の事情を明せるもの。 ⑩寫本(谷大、栗栖・五、栗塊・七)

本願寺歷世諸主略傳 ❶(B)Hon-gwan-ji-rek-sei-sho-shu-ryaku-den. ❷一巻或二巻 ❸存 ⑥淨土眞宗敎典志第二に云く「和漢三才圖會七十二末載之」云々。 ❼(參考) 眞宗全書刊行豫定書目

本願寺歷代宗主傳 ❶(B) Hon-gwan-ji-reki-dai-shu-den. ❷一巻 ❸存 ❹是山惠覺述 ❺明治三三刊 ⑩(龍大、一九六二・一七)(谷大、宗洋・八四)(帝國、八一・四〇四)

本願寺蓮如上人略傳 ❶(B)Hon-gwan-ji-ren-nyo-shō-nin-ryaku-den. ❷一巻 ❸存 ❹實順(一實胖一一A. D. 1761—) ⑩寫本(龍大、研史)

本願寺論 ❶(B) Hon-gwan-ji-ron. ❷一巻 ❸存 ❹篠原英寛(白濤生) ⑩明治二五刊(正大・七六七・一九)(帝國、一九・三三八)(谷大、宗洋・一一)明治三五刊(龍大、研眞)

本願寺論 ❶(B) Hon-gwan-ji-ron. ❷一巻 ❸存 ❹辻善之助著 ❺昭和五刊 ⑩東京丙午出版社

本願寺字訓釋 ❶(B) Hon-gwan-ji-ku-shaku. ❷一巻 ❸存 ⑩寫本(龍大、一二一二・一〇四)

本願直談鈔 ❶(B)Hon-gwan-jiki-dan-shō. ❷八卷 ❸存 ❹源譽 ❺正保四刊 ⑩(龍大、二四一五・四八)

本願取滴直談 ❶(B)Hon-gwan-shu-teki-jiki-dan. 四十八願取滴直談 ❷十二卷 ❸存 ❹空雲(慶長八—元祿五A. D. 1603—1692)述 ❺寛文三刊 ⑩(龍大、一〇五五・一四五×正大、一一五二・一一三)

本願招喚義 ❶(B) Hon-gwan-shō-kwan-gi. 淨土眞宗本願招喚義 ❷二巻 ❸存 ❹慶住(—天明頃 A. D. 1726—1786—) ❺寛政元刊 ⑩(龍大、一七五・八八)(谷大、宗大・二三七)

本願章隨聞錄 ❶(B) Hon-gwan-shō-zui-mon-roku. ❷一巻 ❸存 ❹性海(明和二—天保九A. D. 1765—1838) ⑩寫本(龍大)

本願鈔 ❶(B)Hon-gwan-shō. 本願信心鈔 ❷一巻 ❸存、眞宗法要第六、眞宗聖敎大全卷上、假名聖敎(惠空筆寫)八十八部、眞宗聖典全書和文之部、眞宗假名聖敎第一 ❹覺如(文永七—觀應二A. D. 1270—1351)作 ⑥建武四(A. D. 1337) ⑩存覺の「淨典目錄」に先師御作として報恩講私記、執持鈔等と共に「是等有る所望之輩等、之時、楚忽一言被ら記與、御和宗法語也」とあり、「高宮聖敎目錄」には、「惠歸編同にのせり、世流布の本には本願信心鈔と云ふ是なり、奥書に存覺八十二歲、應安四年辛亥後三月晦日書寫とあり、(圓流庵日)或本には信州善敎房書與也先考御作也、存覺云云と、先考とは覺如上人也、願主善敎も、惠歸編同の門人の列に出でたり」となし、文化八年刊行の眞宗假名聖敎の奥に合し、(但し同奥には「建武四歲丁丑八月一日鈔之」となつてゐる)長秦左衛等之に同じく、從つて建武年間覺如の眞撰たることは疑を容れられぬやうである。

さて本鈔の內容を見るに、初めに「大無量壽經言」として、「本願成就文」及び「其佛本願力聞名欲往生」並びに「彌勒付屬文」、「設滿世界火必過要聞法」の文を擧げ、次に「光明寺和尙曰」として「設滿大千火直過聞佛」並に「彌陀智願海深廣無涯底」の文を擧げ、此れに對する私釋を述べ、相承の本義を述ひつゝ、次に「黑谷聖人のたまはく」として、「當知生死之家以疑爲所止」の文、宗願の「惣念彌陀佛本願乃至無報大悲弘誓恩」の偈文を擧げて私釋を語り、次に敎行信證信卷の「眞實信心必具名號名號必不具願力信心也」の文を釋し、所くて本願の傳統に於ける正義を簡單に指示してゐる。

❼(注釋) 本願鈔戊申記(靈班)等約二十種(參考) 淨土眞宗聖敎目錄、淨土眞宗敎典志第一、淨典目錄、眞宗正依典籍集、眞宗假名聖敎目錄、高宮聖敎目錄、月筌聖敎目錄、眞宗法要左券目錄、鐵外法要叢書私記等 ⑩貞享四刊(龍大、一一三・五)明和二刊(龍大、一〇三・三八)文化八刊(谷大、宗小・八二、宗大・八三六)明治一六刊(帝國、一八三・二一一)

(美濃住)

本願鈔記 ❶(B)Hon-gwan-shō-ki. ❷一巻 ❸法寛(享和三—慶應三A. D. 1803—1867) ❼(參考) 眞宗大系刊行豫定書目

本願鈔記 ❶(B)Hon-gwan-shō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹法英(—文政頃 A. D. 1818—1829—) ⑩寫本(谷大、宗大・一九九九)

本願鈔聞書 ❶(B)Hon-gwan-shō-kiki-gaki. ❷二巻 ❸存 ❹寫本(龍大)

本願鈔聞書 ❶(B)Hon-gwan-shō-kiki-gaki. 本願鈔聞記 ❷一巻 ❸存 ❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)述 ⑩寫本(龍大、研眞)

本願鈔聞書 ❶(B)Hon-gwan-shō-kiki-gaki. ❷二巻 ❸存 ❹稻葉道貫(文化一四—明治二一A. D. 1817—1888)述 ❺明治一六(A. D. 1883) ⑩寫本(谷大、宗大・八四二)

本願鈔決擇記 ❶(B) Hon-gwan-shō-ketsu-chaku-ki. ❷一巻 ❸存 ❹竹越微道述 ❺大正七刊 ⑩(龍大、研眞)

本願鈔講記 ❶(B)Hon-gwan-shō-kō-ki. ❷二巻 ❸存 ❹具雄(安永七—天保一〇A. D. 1778—1839) ❼(參考) 眞宗大系刊行豫定書目

本願鈔講義 ❶(B)Hon-gwan-shō-kō-gi. ❷四巻 ❸存 ❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)述 ❺嘉永元(A. D. 1848) ⑩寫本(谷大、宗大・三五)

本願鈔講義 ❶(B)Hon-gwan-shō-

ko-gi. ❹一巻 ❺存 ❻小笠原着山(—明治三A. D. 1870—) ❼寫本(谷大、宗大・三八五五)

本願鈔講義 ❶(B)Hon-gwan-shō-ko-gi. ❷二巻 ❸存 ❹福田義本述 ❼寫本(谷大、宗大・一七六五)

本願鈔講義 ❶(B)Hon-gwan-shō-ko-gi. ❷一巻 ❸存 ❹赤松圓耀(天保一三—大正九A. D. 1842—1920)述 ❺大正三刊 ❼(谷大、宗洋・三八五)

本願鈔講義 ❶(B)Hon-gwan-shō-ko-gi. ❷一巻 ❸存 ❼寫本(谷大、宗大・三〇五二)

本願鈔講義 ❶(B)Hon-gwan-shō-ko-gi. ❷三巻 ❸存 ❹稻葉道敬(文化一四—明治二七A. D. 1817—1894)述 ❺明治一六(A. D. 1883) ❼寫本(谷大、宗大・四三六七—四三六八)

本願鈔隨聞記 ❶(B) Hon-gwan-shō-zui-mon-ki. ❷一巻 ❸存、❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851) ❺弘化四(A. D. 1847) ❼寫本(谷大、宗大・三七三)

本願鈔聽記 ❶(B)Hon-gwan-shō-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹智現(—天保六A. D. 1835) ❼寫本(龍大)

本願鈔戊申記 ❶(B) Hon-gwan-shō-bo-shin-ki. ❷二巻 ❸存、眞宗大系第二五 ❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)述 ❺嘉永元(A. D. 1848) ❻愛知上人の著「本願鈔」に就て、靈班師が嘉永元年戊申歳、捜草御坊に於て二十七回に渉り講述せるもので、先づ始めに本願鈔の來意、大意、題號を論じ、以て玄談とし、次に文に入りて、經釋、私釋、及び相承釋並に結釋の陪文講義に分ちて詳論してゐる。 (秀諦住)

本願鈔聞記 ❶(B)Hon-gwan-shō-mon-ki. ❷一巻 ❸存 ❹宜明(寛延二—文政四A. D. 1749—1821)述 ❼寫本(谷大、宗大・一二二二)

本願鈔略述 ❶(B)Hon-gwan-shō-ryaku-jutsu. ❷一巻 ❸存 ❹吉谷覺壽(天保一三—大正三A. D. 1842—1914)述 ❼明治三八刊(谷大、宗小・一六七)(龍大、一二四一・一六)明治四三刊(立大、A四〇・七九)

本願鈔聆箋 ❶(B)Hon-gwan-shō-ryō-sen. ❷一巻 ❸存 ❹得住(—明治七A. D. 1874) ❺文久二(A. D. 1862) ❼寫本(谷大、宗大・一六七)

本願成就聞書 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-kiki-gaki. ❷二巻 ❸存、異義集第四、第五(了祥本)、眞宗法要拾遺第三、眞宗假名法典卷中 ❻「眞宗假名法典」「眞宗法要拾遺」等の刊本に「親鸞」と云ふ奥書あり、されど、慧空の「假名聖教目錄」には「義正而未知作者」と云ひ、左券目錄には「刊本眼號を掲するは妄なり、案ずるにこの鈔當家の所出にあらず、西山者流の記述と見ゆ」と述べ、管窺錄に「佛西家の人などのわか忽忘の備へにして、語燈錄等の中よりぬきかきしをけるものとみへたり」、亦題號は後人が妄にこれをつけたるならん、題のをもむき書中には一向みへざるが故にもとより今家の書にあらず、そのうへぬきかきものゆへ語燈錄等すでに世にあまねく行るゝことなれば、此書はなんの益もなきもの」等と記してゐる。

然して其の内容は、別に秩序もなく、初めに「念佛はわが所作なり、往生は佛の所作なり」等とあげてゐるが此等より見ても眞宗のものとは見がたく、之を序として「平生臨終之事」「一心不亂之事」「無智を本とする事」「造惡の機の念佛すること」等をあげ、又以下九品の差別、往生の得否等の問答を掲げてゐる。

❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄、眞宗錄外聖教目錄、眞宗假名聖教目錄、月笠聖教目錄、眞宗法彙左券、眞宗法要藏外晉寛錄等

❽眞享四刊(龍大、二三・七四)上宮寺本撰寫(谷大、宗小・一五三) 了祥筆(谷大、宗甲・一七) (秀諦住)

本願成就の信心 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-shin-jin. ❷一册 ❸存 ❹曉鳥敏著 ❺昭和五刊 ❼石川香草舍

本願成就文 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon. ❷一巻 ❸存 ❹遠藤玄雄(文化元—明治一四A. D. 1804—1881) ❼寫本(龍大、研眞)

本願成就文一滴錄 ❶(B) Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ichi-teki-roku. ❷一巻 ❸存 ❹淀龜玉聲 ❺大正三刊 ❼(龍大、一二二二・一一五—一二一六)

本願成就文一滴錄 ❶(B) Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ichi-teki-roku. ❷一巻 ❸存、眞宗叢書第四 ❹堀河觀阿(—明治元A. D. 1868—)述 ❺明治一二刊 ❼(龍大、一二二二・一一三)(帝國、七・八八)

本願成就文記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ki. ❷一巻 ❸存 ❹探嶽述 ❼寫本(龍大、一二二二・一一七)

本願成就文聞書 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-kiki-gaki. ❷一巻 ❸存 ❹義導(文化二—明治一四A. D. 1805—1881) ❼寫本(谷大、宗大・一九七四)

本願成就文聞書 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-kiki-gaki. ❷一巻 ❸存 ❹玄明述 ❼寫本(龍大)

本願成就文科 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-kwa. ❷一巻 ❸存 ❹疊了(—安政三A. D. 1856) ❼寫本(龍大、一二一二・一二七)

本願成就文解 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ge. ❷一巻 ❸存 ❼寫本(龍大、一二二二・一一八)

本願成就文御前講聽記 ❶(B) Hon-gwan-jō-ju-no-mon-go-zen-kō-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹行照(—文久二A. D. 1862)述 ❺明治二二刊 ❼(龍大、研眞)

本願成就文講義 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ko-gi. ❷一巻 ❸存 ❹宜明(寛延二—文政四A. D. 1749—1821)述 ❼寫本(谷大、宗大・一八四八)

本願成就文講義 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ko-gi. ❷一巻 ❸存 ❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)述 ❼寫本(谷大、宗洋・二九)

本願成就文梵漢對辨 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-bon-kan-tai-ben. 願成就文梵漢對辨 ❷一巻 ❸存、眞宗全書第六 ❹加藤正順(嘉永五—明治三六A. D. 1852—1903)述、南條文雄(嘉永二—昭和二A. D. 1849—1943)閲 ❺明治一九(A. D. 1886) ❻願成就文梵漢對辨の下を見よ。 ❺明治二〇刊 ❼(龍大、一二二二・一〇八)

本願成就文聞記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-ki. ❷一巻 ❸存 ❹月珠(—安政三A. D. 1856) ❺明治二六刊 ❼(龍大、一二二二・一二六)(谷大、宗大・二三一四)

本願成就論要四十題 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-ron-yō-shi-ju-dai. ❷二巻 ❸存 ❹東陽圓月(文政元—明治三五A. D. 1818—1902)述 ❺明治三三刊 ❼(龍大、一五〇一・一〇二二)(谷大、宗大・五八五)(京大、日大未・六九七)

本願信心鈔 ❶(B)Hon-gwan-shin-jin-shō. ❷一巻 ❸存、異義集第一三(了祥稿本)、眞宗法要十種聖教卷下、七部聖教第六 ❹聲如(文永七—觀應二A. D. 1270—1351)撰 ❺建武四(A. D. 1337)八月 ❻眞宗法要第六卷並に眞宗假名聖教第三卷に編入せる聲如上人眞撰「本願鈔」一卷の異稱にて、寧ろ具題と云つてよい。從聲上人の慈歸繪詞一〇、乘專法師の最須敬重繪詞七等には、著者自ら「本願鈔」と題されたやうに云ふてあるが、「本願信心鈔」と題する由來明かならず、元祿三年正月の坊間刊本

本願成就文講說 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-kō-setsu. ❷一巻 ❸存 ❹堅惠述 ❺文化一一(A. D. 1814) ❺文化一一寫 ❼(谷大、宗大・三七〇八)

本願成就文講草 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-kō-sō. ❷一巻 ❸存 ❹朝日保寧著 ❺大正五刊 ❼(龍大、一二二二・一二二)

本願成就文擬要 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-gisō-yō. ❷一巻 ❸存 ❹道振(安永二—文政七A. D. 1773—1824)述 ❼寫本(龍大、一二二二・一二三)

本願成就文十五題決擇記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-jū-go-dai-ketsu-chaku-ki. ❷一巻 ❸存 ❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)述 ❺明治三〇刊 ❼(谷大、宗洋・一〇四)(立大、B一三・一二五)

本願成就文十二門分別 ❶(B) Hon-gwan-jō-ju-no-mon-jū-ni-mon-fun-betsu. ❷一巻 ❸存 ❹靈班(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)述 ❼寫本(谷大、宗大・一一五八)

本願成就文述意 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-jutsu-i. ❷一巻 ❸存 ❹月珠(—安政三A. D. 1856)述 ❼嘉永四寫(谷大、宗大・三九七〇)寫本(龍大)

本願成就文承命錄 ❶(B) Hon-gwan-jō-ju-no-mon-shō-mei-roku. ❷一巻 ❸存、眞宗全書第六 ❹巧便(天明二—嘉永四 A. D. 1782—1851)述 ❼弘化二(A. D. 1845)九月 ❻題下に「弘化二年乙巳八月三日黑書院に於て之を開演す」とあり、卷尾に九月二日講了、同二十日之を書す巧便頓首、日數三十日席數二十席也」とあり、彼の屬する西派本願寺翼如宗主の命によりて本山黑書院にて講義したる所のもの、第十八の本願成就文に就て、先づ一宗の宗要を述べ、其れに就て相承の教相、安心を概說し、次に入文解釋を施して、微に入り細に渉りて、よく一宗の眞奥を極めてゐる。 (秀諦住)

本願成就文聽記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-chō-ki. ❷一巻、南窓小部集第一之内 ❹道隆(宜保元—文化一〇A. D. 1741—1813) ❼寫本(龍大、一〇四・二七)

本願成就文聽記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹義諦(明和八—文政五A. D. 1771—1822) ❼寫本(龍大、一二二二・一二四)

本願成就文聽記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹行照(—文久二A. D. 1862) ❼寫本(龍大)

本願成就文聽記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹謙忍 ❼寫本(龍大、一二二二・一二五)

本願成就文聽記 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹住賢 ❼寫本(龍大)

本願成就文法話 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-no-mon-hō-wa. ❷一巻 ❸存 ❹朝倉了昌(—明治四三A. D. 1916)述 ❼明治三一刊(谷大、宗小・一六〇) 明治三九刊(谷大、宗洋・二九)

本願成就論要四十題 ❶(B)Hon-gwan-jō-ju-ron-yō-shi-ju-dai. ❷二巻 ❸存 ❹東陽圓月(文政元—明治三五A. D. 1818—1902)述 ❺明治三三刊 ❼(龍大、一五〇一・一〇二二)(谷大、宗大・五八五)(京大、日大未・六九七)

本願信心鈔 ❶(B)Hon-gwan-shin-jin-shō. ❷一巻 ❸存、異義集第一三(了祥稿本)、眞宗法要十種聖教卷下、七部聖教第六 ❹聲如(文永七—觀應二A. D. 1270—1351)撰 ❺建武四(A. D. 1337)八月 ❻眞宗法要第六卷並に眞宗假名聖教第三卷に編入せる聲如上人眞撰「本願鈔」一卷の異稱にて、寧ろ具題と云つてよい。從聲上人の慈歸繪詞一〇、乘專法師の最須敬重繪詞七等には、著者自ら「本願鈔」と題されたやうに云ふてあるが、「本願信心鈔」と題する由來明かならず、元祿三年正月の坊間刊本

(七)聖教の隠一)以来、異題同本として別行することを知るのみである。されど「本願鈔」はその劈頭に第十八願成就文を挙げ、更に多くの經釋を引いて、黒谷、大谷兩聖人の化導たる聞其名號の願力信心を謳はすにあれば、亦た本願信心鈔と具さに懇徹し得る謂れあることにて、而も著者が「吾大師聖人は十八の願にとりてはまた願成就をもて至極とす、信心歓喜乃至一念をもて他力の安心とおぼしめさるゝゆへなり」と、この「本願鈔」製作の翌月著作された「改邪鈔」本に決擇せることから案ずれば、いまこの「本願鈔」を認める意志は、暴寛「本願信心鈔」を著はす意向であつたものとも察し得るのである。

この書の製作年時考並に内容の解説は「本願鈔」の解題に譲る。

❹元祿三刊(谷大、宗大・五四二)(龍大、一一三・七〇) 寫本(谷大、宗大・三一九三) 刊本(谷大、宗甲・一七) (山上正尊)

本願相應集 ❶(日)Hon-gwan-sō-ō-shū. ❷存、異義集第二(了鮮稿本)、眞宗帖外聖教第二、假名聖教八十八部、法然上人全集眞偽未詳部 ❹傳、淨空(長永二—建暦二A. D. 1133—1212)

❺浄土宗の大事として、煩惱具足の身が彌陀如來の本願に相應冝順すること、即ち他力に乗ずべき理を集め著はしたもので、和文體にて前後九條の問答より成る。(一)他力に乗じて往生をねがふべきこと、(二)妄念起るとも怠よ願力をたのむべきこと、(三)自力の迷心を遮すこと、(四)惡道を顧みざること、(五)願力に乗ずる因緣のこと、(六)念佛一門のみ出離生死のみちなること、(七)剋惡慣悪の法を用ひざること、(八)願力を誡罪の體とすること、(九)稱名念佛を懺悔の謂れとすること等である。

昔て了惠は『和語燈錄』の跋文に「本願相應抄」の名を掲げ「餘の和語の書に文章も似ず、義勢もたかへり、おほきにうたがひあるゝへに、古人僞書と申つたへたり、しかればこれをいれず」と錄の際に省除せる理由を記してゐる。依つて『法然上人全集』にも附錄第二、眞僞未詳の部に編してある。眞宗の學匠の間に於ても惠空(假名聖教並にその目錄)は法然上人御作としたのは、撰號のある僞で敢て評を加へなかつたのであらう。月筌(聖教目錄)泰嵐(叢書私記)信寶(法彙左券)僧樸(管寛錄の晨僞部)等何れも了惠の説に同じで、黒谷に名をかりた後人の僞撰とする。就中、僧鶴は『眞宗法彙』の旁通部卷五十九に列し、その『左券』に「案ずるに、これも西山流の遠故に、今、本願成就聞書と合卷にす」と云ひ、僧樸は「西山末流の愚僧のかきたるものたるべし、親鸞三昧念佛三昧の分別等、まさしく彼家の義を用ひたり、且文言つたなくして、よむにたへず、和語燈録に本願相應抄と云へる僞造とさせるは、この書なるべし、もとより今家の書に非ること可知」と云ふ。兎も角、寶暦十一年には元興源空聖人五百五十回忌紀念として、西山派の實堂なる者『探註』三卷を著し印行喧傳したのを思ひ合すれば、眞宗の評家の説を裏書するものと云はねばなるまいか。蓋し、抄」と「集」とは同一内容書の異題なるべく、現行の宮刊兩本は何れも集であり、亦た源空聖人作と撰號を置く。

然るに坊間より刊出するものゝうち、元祿五年の『廣益書籍目錄』には親鸞の撰號ある旨を示してゐる。されどこの撰號は忽に信用すべきではないから、知空は顯師聖人御作歟(錄外聖教目錄)と疑ひ、月筌(聖教目錄)承けて否定したのである。凡そ斯かる説をなすに至つたのは、先啓が黒谷聖人御撰述、建長七年六月三日大谷寫本在=三州願瑞寺寶庫=(浄土眞宗聖教目錄)と云ひ、僧錦が一本奥書に云、建長七歳乙卯六月、以=九條忠阿彌陀佛之本=愚禿親鸞八十三歳書=寫之=(法彙左券)と云ふなどのことに由るものであらう。願瑞寺とは愛知縣碧海郡旭村鷲塚眞宗本願寺派願瑞寺のことか、然し親鸞聖人書寫云々の傳説は眞僞判じ難く當否定め難い。かの『本願成就聞書』も同樣に黒谷の御撰述にて寶治第二戊申二月二日大谷集記(浄土眞宗聖教目錄)と傳へて、先啓も僧錦もこれと一連一列に見做し一具合卷にし、且つその内容を檢討せる學者の意向を案察せば、恐らく源空聖人の著名を借り親鸞聖人の勞筆に擬した西山亞流者の僞撰とすべきであらう。

❼(參考) 浄土眞宗聖教目錄 ❹寫本(龍大、二六八二・一三七、研眞)(谷大、宗甲・一七、宗大・一八八) (山上正尊)

本願相應集採註 ❶(日)Hon-gwan-shū-ō-sai-chū. ❷三卷 ❸存 ❹寶堂(一寶暦頃A. D. 1751—1763)述 ❺明和六刊(谷大、宗大・二四三五)(龍大、二六八二・一三九)(正大、一五四・三三三)明治一九刊(帝國、一一・二七)

本願相應抄 ❶(日)Hon-gwan-sō-ō-shō. ❺慈浄十依悪章疏目錄に快定往生行雲抄と本書等とを併記し、前者に細註して「世云=上人作=眞僞未決」とて、法然上人作の傳説ありとするをうけて本書の下には「同斷」と細註す。法然上人全集眞僞未決部等所載の本願相應集と同本の如し、同項の下を見よ。

❼(參考) 慈浄土依悪章疏目錄

本願醍醐篇 ❶(日)Hon-gwan-daigo-hen. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第五〇 ❹曇龍(明和六—天保一二A. D. 1769—1841) ❺述者曇龍は龍華學派の祖と呼ばるゝ程、氣慨にあふれ、登擇説多し。本書は其の龍華教隻たる博多の萬行寺に於ける講述を、門下稲溪蘭秀の筆記せるものである。初に信後の造詣に就て三門を挙ぐ。

(一)就=信之言=—信行を區別し信の一念の往生の得否を決することを論ず。(二)就=後造=—信後造詣なきに非ず、唯懺悔精進佛恩を寓ぶべきを述ぶ。(三)就=制否=—二惑あらんと示し、一に三業(邪、不定、正)の義を知らず、二に置制の義に惑ふことを示す。更に攝取は已造、未造に通ずることを論じ、二經暫抑の義、二經唯攝の義、宗意在攝の義をあげ、後いて信後の行ひに就て論じ、左の十條の失を挙げて批評してゐる。

日く一、不知=願力所感有無=失。二、不知=聖浄二門分域=失。三、不知=要門弘願交際=失。四、不知=願力不捨=惡業=失。五、不知=願力齊入滋味=失。六、不知=攝取不捨況例=失。七、不知=一生造惡爲=機失。八、不知=自身機實分齊=失。九、不知=信心爲=先宗骨=失。十、不知=自然柔輭妙旨=失。 (内藤康道)

本願念稱義 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-gi. ❷一卷 ❸存 ❹藤宗曉明述 ❺昭和四刊 ❻(龍大)

本願念佛一致 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-ichi-chi. ❷一卷 ❸存 ❹都根三郎著 ❺昭和二刊 ❻(龍大)

本願念佛感光章 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-kan-kō-shō. ❷二卷 ❸存、四休慶眞神全集卷中 ❹眞神(延寶五—寶暦六A. D. 1677—1756)述 ❺安永七刊 ❻(谷大、宗大・二七九三)(京大、一・二六ホ・一七)(正大、一五五四・一六四—一六五)(立大、A三〇・一二七)

本願念佛勸化本義 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-kwan-ka-hon-gi. ❷二卷 ❸存 ❹圓通(元祿九—明和七A. D. 1696—1770)述 ❻寶暦三刊(谷大、宗大・四七二)(正大、一五五四・一七二—一七三)(京大、一・二六ホ・一八)

本願念佛天台一宗略圖 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-ten-dai-is-shū-ryakuzu. ❷二卷 ❸存 ❹大榑 ❺寶永六刊 ❻(龍大、二六八一・一六六) (山上正尊)

本願念佛燈籠 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-tō-dai-is-shō-ryaku-zu. ❹圓通(元祿九—明和七A. D. 1696—1770)述 ❺寶暦六刊 ❻(龍大、研眞)

本願念佛利益章 ❶(日)Hon-gwan-nen-butsu-ri-yaku-shō. 女人往生章 ❷一卷 ❸存 ❹洞空 ❺延享元刊 ❻(谷大、宗大・一四〇四)

本願別鈔 ❶(日)Hon-gwan-betsu-shō. ❷七卷 ❸存 ❹空漢(一寶政頃A. D. 1750—1800—)述 ❺享和二寫 ❻(谷大、宗大・三五七三)

本願文聞書 ❶(日)Hon-gwan-monon-kiki-gaki. ❷二卷 ❸存、異義集第一四、眞宗三部聖教之内 ❹傳、蓮如(應永二二—明應八A. D. 1415—1499)

❺阿彌陀如來の本願即ち別中の別願たる第十八因願並に成就文を解釋したものにて、これを聞書と題するは敢て聽講記錄の謂では無くて、知聞の義を認めたと云ふ程の意であらう。一卷始終を本末に分ち、本卷に無量壽經康僧鎧譯と標し、『無量壽經』の出世本懷文、第十八因願文、同成就文を、末卷に大寶積經卷第十七大唐三藏菩提流支譯と標し、『無量壽如來會』の出世本懷文、第十八因願文、同成就文、更に『教行信證の信卷』の三一問答文を、何れも延書し、各々其下に於て一々文解を施したものである。

就中、無量壽經の因願文の下にて、本願の語を解し第十八願に限定するにつき『安心決定鈔』を引くこと、三信を釋するに三一問答を挙ぐる等は、その憑據する所を尋ぬる由緣とも見るべきであらう。尤も正依異譯の兩經を並べて所説の彌陀本願の影略互顯を寫ぶに撰し、出世本懷の文を掲げて能説の釋尊の意を討ねるに擬し、以て二尊一致の救濟を明示せんとするが如き形式は整つてゐるかのやうではあるが、寧ろこの書の特徴とすべき文解に至つては、全く取るに足らざるを曝露する。即ち泰嵐(叢書私記)は「光闡道教の註に、道教はこの念佛の一行なり、光闡とはひろくのべたまふと云ふなり云云、これ顯師の御釋をうかがひ來らざる註なり。又本覺の智體はもとより正覺果上の法性法身の佛なれども、衆生化土の始覺の體に法藏比丘のかたちをあらはして云云、これ始覺本覺の名義をしらざる釋なり」と評し。僧樸は「文詞煩猥、義理淺近、謬妄にしてよむにたへず、或は大經十二代異譯のことを十四代と云ひ、曹鎧のことを齊王と云ひ、或は如々を解してはじめの如は眞如、後の如はごとしと云ひ、或は諸師は乃至十念を作業となづけ、至心信樂を安心となづけ、欲生我國を起行とすと云ひ、或は高顯聖人とはわが一宗開山親鸞聖人のことなり等云云、これによりておもふに愚僧のかきたるものと見へたりし」と簡んでゐる。されば卷末に蓮如書之とあれども、到底これを信用することは出來ない。

❼(參考) 浄土眞宗聖教目錄 ❽元祿五刊弘化三補刻 ❾(龍大、一一三・七二)(谷大、宗大・二三〇七、宗甲・一七) (山上正尊)

本願藥師經 ❶(日)Hon-gwan-yakushi-kyō. (支)Pen-yuan-yao-shih-ching. 藥師琉璃光如來本願功德經、藥師本願功德經、藥師如來本願功德經 ❷一卷 ❸存、大正一四・四〇四No. 450、諸問五、卍九・九、北176帙、南189帙、元185帙、明北157帙、清157帙、麗179巻、天14119章、指1165巻、法174巻、至256勉、明南158帙、N. 171 ❹唐玄奘(七藝二—麟德元A. D. 602—664)譯 ❺藥師琉璃光如來本願功德經の下を見よ。 ❻刊本(京大、一・二三ホ・三三)

本願藥師經古迹 ❶(日)Hon-gwan-yaku-shi-kyō-ko-shaku. (支)Pen-yuan-yao-shih-ching-ku-chi. 藥師經古迹、藥師古迹、藥師經古迹記 ❷二卷 ❸存、大正三八・二五七No. 1770、卍續一・三五・二 ❹新羅太賢(一聖德王一二A. D. 723—)述

❺本書は「海東の瑜伽祖」と仰がれた新羅の學匠太賢(自ら青丘沙門と號する、南山の芳長寺の學僧)が藥師瑠璃光如來本願功德經を述文注解せるもの。その注解に當つて姑らく(一)題名、(二)敎攝、(三)本文の三門を分別してゐる。

初めに(一)題名の條下に於いては、本經の三名(1)藥師瑠璃光如來本願功德經(sa)十二神將誓願有情結願神呪(3)救除一切藥障を挙げ、今は姑らくその初名藥師瑠璃光如來本願功德經(唐代・玄奘譯)を採るべき理趣を語りてゐる。所謂藥師瑠璃光如來とは所歸の人、本願功德とは所感の德で、その能く衆苦を拔くが故に喩へて藥師と名づけ、後として徴せざるはなきが故に瑠璃光と稱し、そして所修の妙行は名づけて本願となし、所證の勝果は名づけて功德と稱